
ネギま！ 転生しまし……え？！

ケフィア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギま！ 転生しまし……え？！

【Nコード】

N6818U

【作者名】

ケフィア

【あらすじ】

作者が妄想爆発し書かれた物語。

まさかの転生してしまった主人公こと両希 夷、まさかの輪廻からの外れた存在になり1000年は生きなければいけなくなり、転生先は……近衛木乃香の義兄?!!

神からもらったチートを使いながら薬味を矯正していきます(ちなみに最初はアンチですが後々友情を深めていく予定です……)という感じになったらいいな)と思ったか?! それは嘘だ、魔改造の

最強のネギを作ってやんよ!!

ヒロインは木乃香&刹那……もしかしたら増えていく可能性が。まあテンプレになった転生ものですがよろしく願います。

ヒロインは木乃香&刹那と言いましたがエヴァがメインヒロインに

……どうしてこうなった？

ただ今大戦終了!! さあ……ナギとアリカを存分にイチヤイチヤさせるか。

それとこれは作者の自己満足の小説です、そこら辺をあしからず。

転生、そして義息子に（前書き）

なぜか終わってないのに二作目と言う暴挙。

俺のゴーストが書けって、言っただもん！（きもいwwwwww）

とりあえずお願いします。

転生、そして義息子に

? 「……知らない天井だ」

テンプレと言う言葉が思い浮かんだが無視する。

って、待てや、ここどこおおおおおおおおおお……!

? 「心の中で騒ぐな!」

? 「誰ですか、あなた?」

俺の目の前にいるのは高齢のおじいさん。

すげえや、ひげが足まで伸びてる、仙人っぽいよこのじい。

? 「神じゃ、ゴツトじゃ、崇める!」

? 「はいはい電波、電波」

神? 「話聞け、あー少年、残念なことにな」

? 「あんたの頭が?」

神? 「髪の毛は残念じゃが、頭は大丈夫だからの?!」

? 「はいはい、でなんだ?」

神? 「ああ、お主は死んでしまったのだよ」

……ああ、そうゆうこと。

？ 「でなんだ、それくらい？」

神？ 「お主、もう少し驚けよ、死んじやったのじゃぞ？ もうちつとリアクションを」

？ 「はあ、死んだからいいよ。やっぱあれか？ ここは天国と地獄の境目か？」

神？ 「……すまんの、お主は輪廻の輪から抜け落ちてしまったじや」

？ 「は？！ いやいや、輪廻の輪って！ 俺って転生できないの？！」

神？ 「ああ、ワシのアホの部下が事故で死んだお主の体を実験に……人間が輪廻の輪を抜け落ちたらどうなるかというな。すまん、ワシの落ち度じゃ」

？ 「で、俺の体はどうなったの？」

神 「ああ、なんとか魂だけでも補完出来たんじゃが……体は崩壊してもうてな、ついでに輪廻転生のシステムに不具合が……」

？ 「訳が分からんから、結果を言ってくれ！」

神 「……最低でも1000年は転生は不可能じゃ」

……1000年って、長すぎるだろ？

神 「だから1000年間の間、ワシの罪滅ぼしのために……転生してくれ」

？ 「……今の説明だと俺は転生できないはずなんだが？」

神 「だから、お主は憑依してもらっぞ？ ……ああ心配するな、肉体はこっちで再構成するのでな、まあつまりお主は新しい肉体に憑依してもらってから、転生させてもらっ」

？ 「……1000年も生きられんが？」

神 「心配するな、肉体は不老、魂も不死じゃ。最低でも1000年は生きてもらうからの。……心配するな、20歳までは成長する肉体じゃ」

？ 「……まあいいや、そっちに任せるよ」

神 「そっじゃな、お主にちーとを与えよう」

チート?! マジでテンプレだなあ、おい！
まさか、俺UUUUUUUUUUUUUUUUUUUU! とかで
きるかも……いや待てよ。

？ 「何個ももらえるんだ？ そのチートは」

神 「最高で5つにしよう、それ以上は無理じゃ」

なににしようか？ 5つなあ、なんか参考になるものを……ああそ
うだ、どうせだったら。

？ 「仮面ライダーカブトとアクセルに変身できるようにしてくれ、ちなみにカブトはハイパー、アクセルはトリアルになれるようにしてくれ」

神 「その程度なら一個分じゃな、この頃はもっとちーとくれとか言われるし」

？ 「後は成長限界突破の才能をくれ」

神 「ほいほい、それから？」

？ 「刀語の見稽古の能力を」

神 「まあいいじやろう、後は？」

一気に行くか？

？ 「どんな道具でも創造できる力をくれ、武器でも医療品でもなんでも」

神 「それは少しチートすぎるからのそれは二個分じゃな」

？ 「構わないよ、仮面ライダーになれるだけでも感無量だよ」

神 「……身体能力強化とかはいいのか？」

？ 「最初から与えられた筋力じゃなくて、自分で鍛えたいんだよ！」

神 「……あい、わかった……それからすまん」

そういつて歩き出す神、……ちくしょう嬉しいけど、悔しい。
俺が実験台になってたんだ。そう思うと勝手に目から涙が流れた。

数時間なのか、ほんの一瞬なのかわからないが神が戻ってきた。

神 「準備ができたぞ」

? 「そういえば、俺を実験した奴は？」

神 「能力をすべて奪い、地獄の最下層で永久凍土と封印で二度と出てこないだろう」

? 「はっ！ ざまあないな」

神 「それと肉体に少し手を加えた、魔眼じゃ」

? 「いいのか？」

神 「もともと、ワシらの責任で人間を人外にしてしまったのじゃ、もっと能力をつけさせて、ロンギヌスで殺されてもおかしくないのじゃ」

? 「ちなみに魔眼はなんなの？」

今までの奴らには落とすと『ふざけんなああああ』とか言われ、暴言ばかりでありがとうとは言われたことはなかった。

さあ、あやつの世界はネギまと呼ばれる魔法の世界、一応は魔力は平均以上にしていたが……大丈夫かのう、転生とは言ったが再構成したから赤ん坊からなんじゃが。

神 「いつてらっしやい、両希 夷君」

ちなみに仮面ライダーW 赤き閃光と太陽の神の夷とは別次元の同位体じゃ……なんじゃい、この電波

神 「しかし、あやつあの才能は……」

|| || || || || || || || || || 夷の視点

夷 「あぶうううう」

おいおい、確かに転生してるが……なんで赤ん坊おおおおおおお！
おー！

つつか捨てられてるし、タオルケットに包まれてるだけだし！
ま
あここは少し落ち着こうか。

夷 「ばぶぶぶあぶ（誰か拾ってくれ）」

? 「なん なつ、赤ん坊?!」

? 「あなた、どないしたの?」

うん？ イケメンな大人の男ときれいな着物着てる女の人？
しめた！ この人たちに拾ってもらおう……呼びかけてみるか。

夷 「あぶううう、あぶううう（拾って、マジ拾ってええええええ
！）」

？ 「あらあら元気な子やな、捨てられてもうたのかな？」

？ 「……そうだな、この子の名前は……夷か」

あ、名前は前世と同じだったのか、サンキュー神様

？ 「なあなあどうするの？ 詠春さん？」

詠春さんか、いい名前だな。結構若そうだけど……夫婦か、この人
たち。

詠春 「そうだな、養子……いや息子にしよう」

いやいや、まだ知り合って一分もたってませんよ！

そんな不審人物を息子にしているのか！

詠春 「目がきちんとしてる、この子は将来いい剣士になるだろう
な」

？ 「駄目やで！ 剣士になったら詠春さんみたくいなくなっ
てまうやろ？ そんなん、ウチは嫌や」

詠春 「桜……すまん、苦勞をかけて」

おーい、その二人 いちやいちやするなー、俺を忘れないでー。

詠春 「おおう、夷を忘れてた！ そうだな今日からお前は近衛夷だ！」

桜 「いい名前やな、男の子……ええ子に育てるで」

……ちくしょうすこしうれしくなっちゃった！
まあいいや、よろしく父さん、母さん。

詠春 「さあ木乃香も待ってるし、帰ろう」

桜 「そつやな、木乃香にお兄ちゃんができてもつたなー」

夷 「ばぶう（妹か）」

そして俺ごと、両希……いや、近衛夷は転生した。
将来まさかの薬味に手を掛けせられるとは思わずに……。

まあいいや、これから頑張ろう。

そして俺は両親に抱きかかえられて家に行き、とてつもなく大きな
家に思わず絶叫した。

……あれ？ 俺ってラッキー？

転生、そして義息子に（後書き）

こんな感じで基本はほのぼので行きます。

シリアスもありますが、次は一気に時間が三年ほど飛びます。
ではキングダムソーン！ これ言ってみたかった。

出会い？ いいえ萌えキャラです（前書き）

今回は刹那と出会いシーン、あれ？ 京都弁ってこれでいいのか？
激しく心配になってきたなあ。

それとラブひなからあのひとが……俺って原作読んでないや。

キャラ崩壊注意。

感想は常時お待ちしております。

出会い？ いいえ萌えキャラです

||||| 夷視点

よお、久しぶりの方もはじめましての方も。

両希改め近衛夷です……誰に言ってるんだ俺は？

まあいい、あれから三年と少したち、正式に近衛の長男となった俺だったが……神様あ、あんたの普通の人間の定義を聞きたい。

身体能力は普通の三歳児なんだが……魔力がとてつもなく大きい、どのくらいかわからないがなんでも、大戦の英雄……ナギ・スプリングフィールドの魔力を二乗くらいらしい（詠春談）……何その規格外？ 魔眼で見てみたら……とてつもないことになってたよ、これでも普通らしい。

ああ、間違えるなよ、今の状態でも最高だが実は霊脈と呼ばれる神力と契約してた……どうしてだ？ おかげで全力の魔力が無限に等しい 試したことないが……たぶん魔力切れは起こさないだろう、地球そのものと繋がってるんだ。

……やっぱあれか？ 神様に体を作られたから偶然繋がっちゃまったってことも考えられるしなあ。

まあいいが、現在俺は神鳴流の修業を見稽古で見ている。

……たぶんだが今やったらすべての技とはいかないが秘剣クラスの技ならできるだろう、まあ奥義クラスだと気が足りない。

ああ、ちなみに気は並だ。たぶん霊脈を使えば強化は可能だろうけど、今の俺はそこまで制御する力がない。

？ 「いくで！ 斬岩剣！」

今のは青山素子っていう、俺の親戚にあたる人らしい……マジパねえ、気だけで岩切り裂けるとか……早くやりたいなあ。

ちなみに俺はまだ駄目らしい、まずは体作りからだ。さすがに三歳

兄が奥義とも全てできたら鬼才ではなく、異端だ。

まあ父さん曰く『昔の俺の師匠は六歳で修めたらしい』化け物か？
名前は両義式……微妙に違うが空の境界のあいつか？！ さらに魔
眼持ちだったらしい。

詠春 「今日はここまでだ！ 明日も厳しくしていくぞ！」

修練者達 「……………はい！！」「……………」

父さんは今は関西呪術協会の長らしいが今は育児休暇らしい……長
がそんなんで大丈夫かよ？！ まあ親父が俺とこの 「にー
ー……………さまあああああああああああああ
！」

夷 「へぶらりいいいい？！！」

ガハ！ は、腹に衝撃が！！ これは木乃香アタック、全体重を頭
にこめ突撃する俺に対しては最終兵器だ、つうか！

夷 「木乃香！ 突っ込んでくるなって言っただろう？！」

木乃香 「いやや！ にいさまのにおいだいすきなんや！」

ぐは！ 俺の精神にダイレクトアタック！ 昔からというか、昔は
ここまでブラコンじゃなかったんだが最近からこうなった、昔はお
となしかったのに。

ちなみに木乃香とは表では兄、裏では義兄として知られている。

普通の二人ならよかったんだが……木乃香も俺も魔力がバカにでか
い、でかすぎて笑っちゃうくらいだ。なので今から嫁やらお見合い
やらが多い。

俺は三歳児だぞ?! え、まだ赤ん坊のころ? すまん、これは封印してるんだ黒歴史として。

夷 「父さんも素子さんも笑ってないで助けてくれよ!」

素子 「嫌や、だっておもしろしゅうて、それにこのちゃんも嫌やがるやろ?」

詠春 「いいじゃないか夷、そんなに抱きついてくるのは今のうちだけだぞ?」

夷 「ぶるーだす、お前たちもか?!」

木乃香 「にいさま、にいさま! あそぼつ!」

夷 「えー、もう少し修業見てたいんだが?」

木乃香 「ひぐ、うちとあそぶのやあの?」

夷 「……わかった、わかった遊ぶから捨てられたような子犬みたいな目をするな!」

ちなみに素子さんは俺の未来のお嫁さん候補らしいが……あんなきれいな人を嫁なんかでもらってみる、俺にはもつたいない。

ていうか、なぜだ?! 俺との歳の差考えろや! 俺三歳だし、あつちは十歳だぞ?!
まあきれいだけど……。

木乃香 「いこう、にいさま!」

夷 「ちょっと、引っ張るな。悪い父さん、素子さん、行ってきます！」

詠春 「気を付けるんだよ」

素子 「行つてらっしゃーい、暗くなる前には帰ってくるんやでー！」

夷 「はーい」

そうして俺と木乃香は道場を飛び出し、家の裏の山に遊びに行った。この家バカにでかいからなあ

||||| 詠春視点

行つたか……夷は私の本当の息子じゃないが将来は神鳴流を習わせようと思う。

しかしあいつの目は……

詠春 「まるで全部吸収してやる、と言わんばかりの目だったな」

素子 「そうですね、あの子うちの動きを目で追っていましたよ」

詠春 「そうだな、錆び付いているが私の動きが見えていたようだしな」

私も刀を置いて久しいがまだまだ現役のつもりだし、たまにこつやつて訓練もしている。

彼女……素子だってまだ若いが必要な実力を持っているし、私と手加減はしてるが斬り合える、それも気で強化したスピードでだ。だがあいつは見ていた、全てをだ……これは鬼才を拾ってしまったのかな？

素子 「えらい子ですわ、三年前のことはびっくりしましたよ？」

詠春 「はは、すまん」

しかし、夷と木乃香は悲しいが魔力がすさまじいほどの量だ、あのバカよりも……これを利用しない奴はいないしな。
あの子たちには平穩に生きてほしいのだがなあ。

詠春 「せめてどちらか片方でも……」

この思いが数年後に崩れ去ることは私すら予想できなかった。

||||| 夷視点

夷 「つかーれーた」

マジで疲れたが今日は気の強化を試しにやってみた。

木乃香との鬼ごっここのときに使ったがうまくできたようだ、秘密裏にやっておいてよかった。

そうそう、ちなみに仮面ライダーになるためのベルトは俺の影にしまっている。

偶然だが俺の影に物を投げ込んだら収納できた、もちろん持ってこれる。俺はこれを倉庫と呼んでいる、まあ入ってるのはベルトだけだ。けどまだ装着したことがない、まだ三歳だし焦る必要がないだろう。

それに神鳴流も習わなきゃなあ。

夷 「やること多すぎだろ？」

とてもじゃないが三歳児が考えることじゃないなあ。
もうちつと子供らしくしないとな。

ちなみに俺の今の容姿は髪は腰まで伸びていて、顔は……女顔だが、男だからな！！
つつか男の娘です、本当にありがとうございます。

母さんに強制的に伸ばされたが……最近は素子さんまで悪ふざけしだしたし、姉の鶴子さんまで……俺は男だ、何度も言うが。
二次創作で男の娘っていいかな？ って思った俺を殴りたい、地獄だ！

木乃香 「うゝ、にいちゃまあゝ」

木乃香は寝ています、さすがに三歳児だし舌足らずだし、子供らしくてめっちゃかわいい。

将来は母さん似は決定しています。

夷 「俺も寝るかな」

そう思い、目を閉じると一気に意識が飛んで眠りの世界に飛び立った。

＝＝＝＝＝＝数日後

夷 「父さん、その子は？」

詠春 「いやな、木乃香と夷の友達になっってくれる子だ」

父さんの後ろに隠れている、黒髪の女の子、髪を左に一纏めにしていて……まあサイドテールって奴だろう、後おでこが出るね。

結構な美少女になるであろう女の子だが……めっちゃ怯えていますっごな、父さん父さんおびえてますって。

？ 「うううう」

詠春 「あいさつなさい、刹那」

刹那ね……魔眼を一瞬だけ使った……あれー？ この子混血？ それだとビクビクするのも当たり前かぁ、だが体中に打撲痕と内出血はいただけない。なんでこんなに？

刹那 「さ、さくりゃ……ふぐう」

がはー！ 萌えたあああああ！ そこで嘔みますか？！ 父

さんこの子面白いです、いろんな意味で!!

刹那 「さく、さくりゃ……さくりゃざぎ、せつなです」

結局、噛んだままいったあああああああああああ?!!
なにこのかわいい生物うううううううううううう?!!

木乃香 「さくりゃざぎせつな?」

詠春 「ちがうんだよ木乃香、彼女は桜咲刹那、わけあって私が保護した少女だよ」

木乃香は意味が分からなくて首をコテンと横に倒す。

やべえ、なにこのかわいい(r y
じゃなくて……あいさつしようか

夷 「じゃあ俺からだな、俺は近衛夷、隣の木乃香の兄だ」

木乃香 「うん、いまにいさまにいつてもろうた、このえこのかで
す、よろしくせつちゃん」

刹那 「せつちゃん?」

木乃香 「せつなやから、せつちゃん! よろしくせつちゃん!」

刹那 「せつちゃん、木乃香さんありがとう!」

夷 「こら! 刹那!」

ビクと過剰に反応する刹那は反射的に体をかばおうとする……そう

いうことが、体中の痣や怪我は!!
俺はすぐに謝る。

夷 「わ、悪い刹那、そうじゃなくて……木乃香がお前のことをせ
つちゃんってよんでるんだから、お前もあだ名で呼ばないと」

俺はできるだけやさしく言う、すると刹那が顔を向けてこっちを見
る。

その姿はまだ震えていた……なんでだ？ 誰がこの子を追い詰めた
?!!!

怒りを表情に出さないようにしながら刹那の返事を待つ。

刹那 「……このちゃん」

木乃香 「え？」

刹那 「このちゃん！ 木乃香だから わきゅー！」

木乃香がタツクルよろしく刹那に突っ込む、それをほほえましく見
る俺と父さん。

まあ木乃香の照れ隠しだが……俺の場合だと骨が砕けるほどの衝撃
がくる。

木乃香 「せつちゃん！ せつちゃん！」

刹那 「この……ちゃん、このちゃん！」

一気に笑顔になった二人、だが……

夷 「お〜ま〜え〜ら」

木乃香 「まずう、にいさまがおこった！ にげるでえせつちゃん！」

刹那 「え？ えええ？！」

夷 「無視するなああああああああああ！！！」

木乃香 & 刹那 「きゃあああああああああああああああああああああ！！！」

そのまま力果てるまで鬼ごっこをした俺ら三人は疲れて終わった後に眠ってしまった。

まあ俺は起きて二人を寄り添うように寝かせるが……。

この数日後、俺は本格的に神鳴流の見習いになり修業を始めた……刹那は来年からだそうだ、仲間外れの木乃香には素子さんが見てくれた。

そしてそのまま数年がたち、俺が仮面ライダーとしてのビギンズナイトを迎えることになるが……一言言っておこう、きつかった、いんな意味でも！

出会い？ いいえ萌えキャラです（後書き）

作 「さあ今回から始まったネギラジオ！ ゲストは…！」

夷 「どうも主人公の夷です」

作 「はいはい、今回から次回予告もかねてラジオ形式でやっていきます」

夷 「つていうか、俺と素子さんって許嫁なの?!」

作 「そうだよー、ヒロイン候補の一人だよー」

夷 「ラブひなの原作は?!」

作 「H A H A H A ねえよ、つうか俺は原作知らんし」

夷 「おいいいいいいいいいいい！ 問題だろ…！」

作 「まあ冗談はさておき」

夷 「本気だっただろ？」

作 「まあまあ、次は一気に五歳まで育ってもらおうぞ？」

夷 「またキングダムゾンかよ?!」

作 「まあ、そこで変身してもらおうが…」

夷 「ようやくかよ」

作 「ちなみに素子さんに見られます」

夷 「ネタバレ?!」

作 「まあねえ、画像見て一目ぼれしたわ」

夷 「確かにかわいいが……」

作 「最初はねえ、お前と木乃香以外はくっつけないつもりだったんだよ」

夷 「で? それでなんでこうなった？」

作 「画像見たら全員めちゃくちゃかわいかったから! ぶっちゃけ木乃香と素子、刹那はマジで一目ぼれですよ」

夷 「本当に欲望だな、とあるメダル怪人になっちまえ」

作 「じゃあこころ辺で終わりにしよう、タイトルコール」

夷 「次回、振り切れ総てを!」

作 「……ネーミングセンスなしだあああああ?!」

夷 「次回も見てくれ……ってこれ別の小説の次回予告じゃないか
あああああああああ!」

作 「バラバラだなあおい!」

振り切れ総てを（前書き）

はい今回はタイトルと内容が一致しません。

キャラ崩壊注意、嫌な方は戻ってください。

それでもかまわないのでしたら、あとがきで会いましょうそれでは、
どうぞ！

振り切れ総てを

はいな、こんにちは夷です……うえ、やっぱキャラ変えるのはやめよう、よお夷だ。

誰に言ってるんだらうか？

まあいい、俺は五歳になりました。木乃香と刹那もだけどな。

なんとか神鳴流の免許皆伝まであと少しだよ……どうしてこうなった？

あまりに修行が楽すぎた、木乃香との鬼ごっこがここまで鍛えられるとは……だつてこの頃『エクスカリハンマーや！』とか言いながら追ってくるんだもん、いやあトンハンマーなんか追われる日が来るなんて。

ちなみに気の修業にもなったので気の扱いもうまくなった、父さんや素子さん、ほかの修業仲間の動きを見稽古で見ればうまくなるよ……見稽古ってこんなにチートだったんだなあ。

ああ、そうそう魔眼がパワーアップしまった。……解析、理解のほかに複写、直死が追加されました。……たぶん俺の成長限界突破の才能が魔眼を進化させてるんだと思う、直死なんて空の境界か！
つて思つたもの、俺って人外に入ってるようだ、複写は見稽古の能力が魔眼に影響したんだらう、直死は……たぶん特訓だな、父さんとの。

あの野郎、四歳児に木刀で心臓狙いやがった、そのあと四六時中狙われたから死線が見えてきた……つまり死を見すぎたから死線が見えちゃったんだ

……鬱になってきた、修業もろもろそうだが、俺の容姿がさらに男の娘になってきた、もう完璧に初対面なら女って思われる。外見は両儀式だよ。

夷 「斬岩けーん」

ズガーーーーー！

夷 「竜破斬！」

スパン！

夷 「魔人剣！」

ザーーーーー……ドーーーーー！

夷 「雷鳴剣」

バリバリ、チュドーーーーー！

夷 「百烈桜華斬！」

ザクザクザク！！

夷 「行くぜ、とっておきの技！ 鳳凰天翔駆！！」

ゴワーーーーーー、チュドーーーーー！

夷 「さてはて、ここからが本」

素子 「やめんか！」

ほぶ！ なんだよー、連続奥義にしようと思ったのにー。

素子 「あんたは道場を壊す気なのか?! ウチでもあんな威力は
でえへんで!」

夷 「あれでも抑えてるんだけどな」

素子 「よーわかった、ウチの未来の旦那さんが規格外か」

夷 「だーからー、俺は結婚する気はないぞ?!」

素子 「アクセル(ぼそ)」

夷 「うぐ!!」

実は……うん、素子さんにアクセルになるところ見られて襲われた。
調子に乗って『変……身!』って言いながら変身したらばっちり見
られました。

正確には俺がどれほど強いのか確かめる気だったみたいだけど……
結果言つと勝ちました。

いやー、人体にマキシマムドライブ放つてもいいみたい。

そのあとまさか、求婚されるとは……あのー俺五歳児ですけど。

夷 「うー、でも素子さん」

素子 「素子でいいと言うとるやろっ? 旦那様」

夷 「……俺は五歳児だが?!」

もういやだ、ちなみに魔人剣や鳳凰天翔駆は……はいネタ技です、
T.Oシリーズのパクリ技です。いやあ神鳴流に気を電気に変える技
があったから火とかできるかなあって試したらできた。

秘奥義は今のところ鳳凰天翔駆しかできてない、それでも気は十分なんだが……修業してたら総量が増えた。

今は俺の創造する力で気を抑えつつ自身に重りをつける、道具を作った。

最初はめっちゃくちや重かった、最初は十キロから……さらに一週間で一キロずつ増えていくようにしたら……今は百キロほどに。

夷 「(だけど多少、邪魔な程度なんだよな)」

素子 「まあいいや、とりあえず……風呂行こうか」

夷 「あんた一人でな！」

この間なんか『背中洗うたる！』って言いながら突っ込んできましたよ。

俺吹き出しましたよ、どこのエロゲだ？ まあ弟と入るっていう感じなんだろう……たぶん、姉の鶴子さんが温かい目で見てるけど……そういえば素子さんってシスコンだったような？

木乃香 「駄目やーーーーー！！ えびにいとほウチが一緒に入るやーーーーー！！！」

素子 「バカ言わんとして！ ウチと入るんや！」

夷 「そろーり、そろーり」

刹那 「私と入ってくだひゃい……えーちゃん！」

夷 「お前もか刹那！！ っていうかなんで囓む?!」

萌えるからいいが！　ちなみに刹那は腕がいらしく父さんに直々に教えられている。

メキメキと力を伸ばしてるらしい。

木乃香は合気道を……うん力の受け流しじゃなくて、木乃香アタツクの威力が倍増された。

たぶん木乃香と刹那さえいればそこら辺の大人は太刀打ちできないだろう。

ああ、刹那が「えーちゃん」って呼ぶ理由？　それは最初俺が女だと思ったかららしい、それからなんでも、えーちゃん、と呼ばれるようになった。

夷 「お前ら、勝手にやってる！」

木乃香 「えー、遊ぼうや、えびにい」

刹那 「遊びましょうよ、えーちゃん」

素子 「ウチとあそ　「素子！！」「姉さん？！」

鶴子 「あんだ、勉強終わってないでしょう！！」

素子 「か、かんにんや~~~~~！！」

鶴子 「素子！！　まったくあの子は姉離れできたと思ったら、次はこれや」

夷 「……なんかすいません」

鶴子 「ええよ、まったくあの子は……まさか姉離れで来たらこないな子に恋するなんて、やっぱり男に免疫をつければよかったわ」

……最後ら辺は聞こえなかったが鶴子さんはやっぱり妹思いだなあ。
彼女が青山鶴子、素子さんの姉で今度結婚するらしい。
ちなみに神鳴流最強の剣士だった……ごくたまに修業をつけてもら
えるがきつい。

鶴子 「けど夷君みたくええ子なら、素子も嫁に出すのもええかも」

夷 「……冗談を、俺には不釣り合いですよ」

彼女だって好きな人の一人や二人は……いるよね、いてよ！
現実逃避はここまでにして、鶴子さんにあいさつしながらシャワー
を浴びに行く。

木乃香と刹那には適当に言いくるめて外に出しておく、前に突入さ
れてえらいことになった。
……俺は少し嫌な予感がしていたのでシャワーを最小限にして外に
出る。

||||| 木乃香視点

木乃香 「なんでウチのこと見てくれないんだろ？」

ウチの名は近衛木乃香、大好きなのはえびにいや！

この頃のえびにいは少し冷たい……というか、女の子に優しすぎる
んや。

無自覚なのか、はたまたねらってるのかやら……狙ってたらこのエクスカリハンマーで頭かち割ったる。

刹那 「このちゃん、このちゃん今日は何して遊ぶの？」

木乃香 「そうやなうーん、えびにいがおれば簡単に出てくるんやけど」

刹那 「はあ、一緒にお風呂入ってくれないよ」

この子、ナチュラルにえびにいの裸見ると宣言したよ、今?!
ぐぬぬぬ、せつちゃん恐ろしい子や! えびにいの裸はウチのもんや。

木乃香 「鬼ごっこでもやるうか?」

刹那 「うん! じゃあ、じゃん、けん」

木乃香 & 刹那 「チヨキ」「パー」

……ニヤリ、計画通りや。

刹那 「このちゃん!!」

木乃香 「くやしかったら捕まえてみーや!!」

刹那 「そこになおれや! このちゃん!!」

木乃香 「ここまでおーいで!!」

うふふふ、せつちゃんが京都弁なっただってことは……ふふふ、イジリタイムや。

せつちゃん、日頃のえびにいへのスキンシップの恨みや、この頃兄様成分が少なくなってもうたのに……!!

刹那 「待ちなさい、このちゃん!」

さあどうやってあそ。

ウチは失念してた、昨日ぎょうさん雨が降って川が増水してるのを、いつの間にか川に飛び出していた……一瞬だけ飛んでるような感じがして、水に落ちてもうた。

刹那 「こ、このちゃん………ん!!!!」

苦しい、助けてえびにい、兄様!!

? 「たく! 嫌な予感しかあたらん! 変身!」

? 「HENSHIN」

なんか兄様の声かした瞬間、変な声まで聞こえてもうた。そしてウチは意識を失ってもうた。

「！！！！！！夷視点

？」「DANGER！ DANGER！」

俺はゼクターからの木乃香の危機が迫った時に流れるように設定していた音楽が流れた瞬間、気を強化した足で森の中に走っていた。万が一木乃香に何かがあった時にゼクターには木乃香を守るようにしているが、それでもダメなときには電子音で知らせるように設定した。

夷 「くそ！」

限界まで気を使って足を動かす。

幸い、木乃香の大きな魔力を辿っていけば簡単にわかるが……場所が川なのだ。

確か、昨日の大雨で増水していたような。

刹那 「こ、このちゃー……………ん……………」

ついた矢先に刹那の悲鳴が聞こえた。

木乃香は……まずい！！ 川に落ちた！！

夷 「たく！ 嫌な予感しかあたらん！ 変身！」

ゼクター 「HENSHIN」

カブトのベルトにゼクターを装着させると俺の体に変化が起こる。

腰のベルトから装甲が展開される、武骨な格好をし、左肩に『ZECT』と書かれた文字が現れる。

仮面ライダーカブト・マスクドフォーム、俺が一番好きな仮面ライ

ダーだ。

しかし、そんなことを言ってる場合じゃない。

すぐにゼクターのホーンを右に少し倒す、するとゼクターから電流が流れ、まず腕、肩、胸、顔の順で装甲が浮かび上がる。

まあ知ってる人は知ってると思うがカブトのもう一つの姿になるための準備だ。

そして足以外のすべての装甲が浮かび上がった瞬間、ゼクターのホーンを完全に右に倒す。

夷 「キャストオフ!!」

ゼクター 「CAST OFF」

そして三百六十度すべてにカブトの装甲が飛び散る。

あ、刹那の方には飛ばしてないよ。そして飛び散った装甲の下からさつきよりもスマートな装甲が現れる。

そしてカブトの顔のカブトホーンが立ち上がり、角のように立つ。

そして複眼が青く光り、ゼクターから電子音が鳴り響く

ゼクター 「CHANGE BEETLE」

仮面ライダーカブト・ライダーフォーム、元々カブトは二段階変身と呼ばれる、特殊な変身方法で戦う。

防御と攻撃が高いマクドフォームで戦い、機動力と攻撃力が高いライダーフォームでとどめを刺す、とても戦略的なライダーだと思う。しかし今は……木乃香を助ける!! 初めてだが行くぜ!!

夷 「クロックアップ!!」

ゼクター 「CLOCK UP」

ベルトの右側のスイッチを押すと電子音が鳴り響き俺はクロックアップ状態に入る。

クロックアップっていうのは、まあ一種の加速装置みたいなもんだ。速度がバカに早いから水の流れが止まって見えるし、落ちる葉っぱの動きすら止まって見える、まあ実際は少しだけ動いているんだが……。

原理はよくわかんないが『タキオン粒子』っていう、粒子の力で加速してるらしいんだが……まあいい。

夷 「木乃香あああああああああああああああ！」

俺はクロックアップ中から川の中に入り、溺れかけている木乃香の体を持つとすぐに川から出る。

水にぬれているが命に別状はないだろう。

ゼクター 「CLOCK OVER」

ゼクターからの電子音が鳴り響き、クロックアップから抜け出す。ああ、そうそうもしもクロックアップ中にゼクターを外したら、超負荷で俺の体がサンドウィッチになっちまう。

夷 「木乃香！ 木乃香！」

刹那 「え?! こ、のちゃん？」

まあいきなり出てきて変身して、いつの間にか救出してたら誰だつて驚くだろうな。

まあ変身はもう解いたのだが、誰が妹をパンチ力何々もあるライダーの腕に置いておくか！ つぶれちまうよ！

夷 「とりあえず、無事だったことを喜ぼうか」

刹那 「……さっきのはなんなんや？ えーちゃん？」

夷 「……時が来たら教えるけど、今はダメ。……まあこれだけ
言っておくか、俺は仮面ライダーだからな」

刹那 「カメンライダー？」

夷 「ああ、お前や木乃香がピンチの時に現れる、正義の味方さ」

刹那 「……でもウチ、このちゃんを、お嬢様を危険な」

夷 「ちょいな!!!」

ズガンと刹那の頭にチョップをくらわせる。

全くこいつはネガティブに考えすぎるんだよ。

痛そうに頭を押さえる刹那、まあ痛くしたんだがな。

夷 「いいか？ お前は五歳だ、できることだって限られてるし、
例え護衛役だったとしてもそれは父さんがお前を信頼してるから、
お前を木乃香の護衛に選んだ」

ちなみに俺の護衛は素子さん、なんかいつの間にか両親公認の許嫁
になっちまいましたよ、どうしてこうなった？

そして素子さんはまんざらでもない様で、姉の鶴子さんは土下座ま
でしてお願いします、って言ってきました、アレエーこれってどう
したらいい？

夷 「それに俺はお前を信頼してるし、お前なら木乃香を守れると信じてるからな」

刹那 「でもウチ、裏、切って、もうた」

あーあ、泣いちゃったよ。

もう仕方ない、今回だけだぞ？

俺は刹那の体を抱きしめてやる、少しびくつとしたけどまあいいや。

夷 「さっきも言ったがお前は五歳だ、なんでもかんでもできるわけがない。周りを頼れ、俺はお前の友達だし、それに……修業仲間だからな」

なんか腕の中の刹那がすげえ沈んだような感じがする。
気のせい……だよな？

刹那 「これからもウチ、お嬢様……このちゃんの傍に居てもええの？」

夷 「ああ、これからも妹を頼むぞ？」

さて、とりあえず帰りましょうか。

木乃香の服も着替えさせなきゃいけないしな。

……やっぱり木乃香専用のゼクター作るか、コンセプトはファンクメモリみたく純粋な防衛本能による護衛、刹那の刀改造して、サイドみたくするか？ 刹那のメモリだし。

ああ、そうそうメモリやゼクターを解析しようとしたらできたよ、この魔眼まじチート、ハイパーゼクターすら解析できたぞ、やっぱり作るか木乃香の護衛兼刹那専用メモリを。
忙しくなりそうだ。

||||| 木乃香視点

木乃香 「う、ううん」

あれ？ ウチなんで布団に寝てるんや？

ああ、そうや、ウチ、せつちゃんと遊んでて川に誤って落ちてもうたんや。

刹那 「このちゃん！ 大丈夫?!」

木乃香 「うーん、ちょっと頭がぼやけてるけど大丈夫や」

うん、なんとか無事やけど……誰が助けてくれたんや？

夷 「やっと起きたか」

木乃香 「えびにい……」

わかったんや、えびにいが怒ってる。怒ると怖いんや兄様は……ア
カンアカン、昔の呼び方に戻ってもうた。

夷 「お前、俺は言ったよな！ 川は増水してるから近づくなと！」

木乃香 「ご、ごめんなさい」

夷 「みんなに心配かけて！ 父さん、母さん、素子さんに鶴子さん、刹那だつて心配したんだぞ！！」

う、ウチはそんなつもりなかったのやけどなあ。

夷 「それに……」

あれ？ えびにい、なにしてはるの？ なんで抱きつくの？！
なんとえびにいがウチに抱きついたのや、けど泣いておつた。

夷 「もしも、俺が間に合わなかったら！ ほんによかつた、無事で！」

木乃香 「……えびにい」

夷 「ちゃんと刹那やみんなに謝るんだぞ？」

そう言つて離れるえびにい、まずう、顔が赤くなつてる。
うー、えびにいの鈍感！

木乃香 「ごめんなあ、せつちゃん、心配かけて」

刹那 「いいよこのちゃん、ウチが言わなかったのが悪いかつたんや」

……ウチってほんま幸せもんや、こんないい兄がいて、友達が居て

ほんま。

木乃香 「幸せや」

|| || || || || || || || 夷視点

夷 「はあ、やっぱり妹の危機になると落ち着かん」

あのおときもそうだが……木乃香がピンチなときにはまったくもって
あたふたしちまう。

俺も妹離れしないと。

真剣にさっきのメモリの件を考える、形は……人型じゃなくて鳥型
のメモリにしよう、エクストリームみたく自立行動して、AIはゼク
ターを参考にすればいいや。

じゃあ刹那に合わせて、変身機能はつけなくていいからなあ。ああ、
マキシマムドライブ機能はつけとこ。

詠春 「夷!」

夷 「どうしたの? 父さん」

詠春 「ああ、少し話がある、ちょっと来なさい」

なんだろ? ああ、学校かな?

でもなー、俺は大学まで一応だが行ったんだが?
とりあえず父さんの部屋まで行く。

振り切れ総てを（後書き）

作 「今日の！ ネギリジョー！ ゲストはこの方！」

木乃香 「近衛木乃香や！」

作 「……あれー？ 今日は刹那さんのはずなんです？」

木乃香 「ああ、そうや、せつちゃんはOHANASHIをしたら
快く譲ってもらえたんや」

作 「ガクガクガク、この子こえー、幼女こえー」

ガゴンー！

木乃香 「ちよつと黙ったとき」

作 「ずびばせん」

木乃香 「この小説のメインヒロインはウチやろ？」

作 「まあーそうですが……なんか俺の気まぐれで増えそつな」

木乃香 「えびにいの初めては、ウチのもんや！」

作 「ちなみにその知識は誰から？」

木乃香 「ウチの母さんからー！」

作 「夷逃げてー、超逃げてー！ この幼女ヤバイ」

チユドーーーーー！！

木乃香 「少し頭冷やそうか？」

作 「撃つた後に言わないで、つつかキャラが変わってますよ」

木乃香 「最近、はまっとるアニメのキャラの真似しただけなんやが？」

作 「やめてください、あれ二期から空気キャラが目立ってえらいことになってるんですから」

木乃香 「スターライトぶ」

夷 「言わせねえよ！」

木乃香 「あ、えびにい」

夷 「なんか刹那が、部屋の隅でガクガク震えてたから木乃香のせいだと思ったらこのざまだよ！」

木乃香 「まーええやんか」

夷 「よくねえよ！ つつかその知識捨てなさい、母さんも何教えてんだよ」

作 「お前ら……つつか後何話かしたら、夷、逝って来い」

夷 「字が違う?!」

作 「ああ、まあ意味的にはあってるがな」

夷 「俺死ぬの?!」

作 「それは神のみぞ知る」

夷 「カミイイイイイイ!! (作者)」

作 「はいはい、カオスになってるから木乃香さんしめて!」

木乃香 「ええよー、次回、別れのSノ兄は妹思い」

夷 「タイトルでだいたい内容理解できるけどな!!」

作 「次回も」

木乃香 「見いへんとハンマーでかち割るで!」

夷 「……妹を暴走させた結果がこれだよ!」

作 「こんな妹で大丈夫か?」

夷 「チエンジで」

木乃香 「兄様?」

作&夷 「待て待て、ハンマーを置け! 死ぬって100tはさ
す アツーーーーー!!!!」

別れのSノ兄は妹思い（前書き）

今回は木乃香の麻帆良に行く話を書きましたが……予想以上に長くなってしまいました。

キャラ崩壊、原作ブレイクが目立ちますが……どうかご容赦を。されでも嫌な人は戻ってください。

準備はOK？ それではどうぞ！

別れのS / 兄は妹思い

ヒーハー！！ 夷だぜ！！

……すまん、寝不足でハイな気分になってる。

はいはい、六歳になりましたー、神鳴流の免許皆伝したおー。

……やばい、深刻な寝不足だ。早く寝よう。

それから今日、木乃香と刹那が麻帆良に行きます。どうしてこうなつた？

どうやら東と西の対立が問題らしい、あつちには祖父もいるから大丈夫だろうけどな。

ああ、東つてのは関東魔法教会の連中で西は関西呪術協会つてことだ。一言でいうと融和を図りたいらしい。

東と西は昔から血なまぐさいことが多かったらしい、俺の父さんと祖父になってようやくそういうことがなくなってきたようだがゼロにはならなかった。

一回だけが俺に刺客が送られてきた、東の魔法使い、というよりもあつちは正義の魔法使いだそうだが……正義の魔法使いが誘拐つてどうよ。

そのとき魔力の制御といくつかの魔法を魔眼で複写、理解しました。魔法の射手だっけ？ 使い勝手がいいし、魔法と気を合わせてその反作用で身体強化できるようになりました。たしか昔、家に来たタカミチつて人が使った……ナントカ法つて奴だと思うがそれができた、あと全力だしてみようかとリミッターを外したらえらいことになった。

死線は見えるは、相手の行動パターンは理解できるは、技使えば複写と見稽古で覚えられるは、と俺が悪役みたいになつた気分です。倒しましたよ。

ええ、あのぐらい師匠……鶴子姉さまの修業に比べたら、ガクガクすみません、奥義連続で使用しないでそれ広範囲残滅技っあああ

あああああああ！！！！

ハッ！ すまない混乱したようだ。ああ姉さま？　なんか素子さんの許嫁だからこう呼べって言われました。

何故？　それはな『ぶっちゃけ、あんた女にしか見えへんで』だそうです、死にたくなってきた。母さんがフリルやらが大量の服やゴスロリだっけ？　そんな服装してきたからなあ、刹那と木乃香、素子さんや鶴子さん、鼻から血だしながら見てたし、なんか鼻息が怪しかったです、はい。

そんなこんなで剣術したり、いろんな技を見稽古したり、父さんに殺されかけたり、鶴子さんの修業で死にかけたり、素子さんが夜寝るときに布団に入ってきたり、刹那の噛み癖を直したり、木乃香のブラコンがひどくなったり、ハイパークロックアップで過去に行つてメモリ作ったり、……ぶっちゃけ六歳児がすることじゃねえ！

ああ、魔眼がさらに強化されました。吸収に分解、霊体が見えるようになってしまいました。吸収は魔法を吸収し力にしたり体の傷を治したり、ぶっちゃけ伝勇伝の残滅眼です、分解は魔法だけなら構造を理解しその場で解除する、まあ中級魔法ぐらいだったら、上級は無理、まだ追いつかない。霊体は死線見えるのに霊体見えないのかよwwww、とか思ったやつ手上げる、今すぐ燃える天空をぶちこんでやるよ。……ゴホン、あれだなんかぼやけてるの見えるなー、つて思ってたたら悪霊でしたwwww、死線切つて殺しましたよ。

なんか霊感があったらしく、見る修業をしてたから才能が成長したようです。

……あれだ、俺は思った、成長限界突破つてチートじゃなくてバグじゃね？　と。

だって鍛えれば鍛えるほど強くなるんだよ？　身体能力じゃなくって体の機能や魔力総量、気だつて無限に成長する、だつて限界がないんだもの。

まあ魔眼はここまでにしよう、つうか俺の魔眼最近バグになってきたよ、もうやだこの目、いや俺の才能か。現在俺は魔力と気の大半

を封印してる、魔力は馬鹿でかいが気は同年代の子供と同じくらいと錯覚させていて神鳴流の師範代くらいしかない、まあくらいって言ってもかなりの量だが……、それを全部首飾りの俺専用のリミッターにしてある、元々は木乃香からのプレゼントだったがこれ幸いに改造してみた、魔法も使ってないからばれることもないし、防御力もとある管理局の魔王様の最強の技を十発撃って壊れる強度の境界を三層に分けてつけてるつまり壊れないwww。

木乃香 「嫌やー、えびにいと離れるなんて!!」

詠春 「すまん木乃香、おじいちゃんだって向こうで一人で頑張ってるんだ、それに向こうで友達を作ってたきなさい」

木乃香 「嫌! 兄様とせつちゃん、素子姉さん達がいればええの!」

すまん、今家族で喧嘩してる、今まで長く話してたのは現実逃避するためだ。

いやー、かわいい妹にそう言ってもらえるのは嬉しいが向こうに行かないと東と西の融和も図れなくてえらいことになる。あーもう言うしかないか。

夷 「行って来い木乃香、そっちには刹那だつて一緒に行くし、素子さんも行く」

俺がOHANASHIをして素子さんには刹那と共に木乃香の護衛になつてもらった。

まあファーストキスが奪われた程度でよかった、正直刹那だけでなく素子さんも護衛だと盤石だし、向こうで男友達「ボーイフレンド」でも作ってもらい、俺への興味を失ってもらつ……最近マジで貞操

の危機を感じる、前世から童貞なんだよ、俺。

木乃香 「兄様はウチがあっち行ってもいいの？」

夷 「はあー、いや、そうじゃなくてな。あっちには俺たちの祖父……妖怪じじいもいるし、向こうで友達を作ってもらいたいんだよ」

妖怪じじい、俺の実際の祖父ではないが木乃香の祖父で後頭部が以上にでかい、ぬらりひょんですよあれは、最初あったときはミルクを吹き出したねあれは。

まあいいじじいだよ、麻帆良の学園長であってさらに魔法使いであり俺と木乃香を溺愛してくれる人だ、腹黒じじいなんて言われるが組織のトップが黒いことをやってないわけないだろうし、良心がありすぎてそれに悩んでいたみたいだしな。

木乃香 「絶対、嫌や！ いきとうない！」

夷 「……いい加減にしろよ？」

いい加減切れてきた、子供であっても、妹であっても決定したことだし、一度家族で話し合って決めたことだ。

木乃香だって了承したし、俺だってしぶしぶだが了承した。

夷 「俺だってお前と離れたくないし、刹那やお前を知らない土地に送るのは父さん、母さんも嫌だ、けどな」

桜 「そのへんにしとき、夷」

夷 「母さん！ー！」

桜 「少しお話ししましょうか、木乃香」

木乃香 「……うん」

そう言つて母さんが木乃香を連れて行く。

俺だつて木乃香を麻帆良なんざに行かせたくない、けどじいさんの件もあるし、東西の関係を少し修正したい。木乃香のほどの魔力保持者が行くということはつまり、西が自分の秘蔵を出したと融和の証にもなる。まああれだ結局は大人の汚い事情だ、俺が行つてぶっ潰してもいい、あそこには大戦の英雄であるガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグ、高畑・T・タカミチが居るが今の俺なら瞬殺できる。それほど力を持っている、ぶつちやけるとハイパーカブトのハイパークロックアップで視認できないほどのスピードであいつらの頭と胴体を別れさせればいいだけだ。

……それをしないのは一重に、俺の祖父である、じいさん、近衛近右衛門が居るからだ、あの人には実の孫ではなかったがかなり優しくしてくれた。あの人が居るから俺は麻帆良を破壊しない。

まあ、俺は壊れてるんだろう。別に俺の家族と友達、大切な人以外の命なんざ知つたことじゃない。

詠春 「……夷、すまん」

夷 「謝るのはこつちだよ、すまないな……父さん。俺のワガママを聞いてくれて」

そう父さんが麻帆良までなら、俺が木乃香と刹那、素子さんを送つていい、だそうだ。

正直、俺の実力を知っているから行かせてくれたんだろう、剣士としての実力でも俺は並の魔法使いが10人いても太刀打ちできない力を手に入れていた。本気を出せば、まあ英雄と言われる者たちと

でも渡り合えるはずだ、そのぐらいの修業してきた。

詠春 「いいんだ、私のささやかな償いだよ」

夷 「……父さん」

そういえば木乃香と母さんは遅いな、どうしたんだろ？

||||| 木乃香視点

ウチは嫌やった、なんでウチだけ……いや、せつちゃんや素子さんもついて来てくれるそうやけど、嫌や、えびにいても反対せえへんの？

桜 「木乃香、前にも家族で相談したやろ？」

木乃香 「そうやけど……嫌や」

桜 「はあ、まったくあんたは……ま、大方夷が反対しなかったのが気に入らへんのやろ？」

木乃香 「そうや！ なんでえびには反対せえへんのや！」

桜 「あの子は賢いのや、賢すぎて自分の思いを伝えきれんのや」

訳が分からない、兄様の思い？

桜 「最初はあの子もあんたを向こうに送るのは反対してたんや」

木乃香 「じゃあなんでや!?!」

桜 「あんたの為や、夷はな、あんたにもっと広い視野を持ってもらいたいんやろ」

……このときのウチはよくわからへんかった、わかったのは後、数年後やった。

桜 「あんたの友達は、刹那に素子に鶴子、まあ夷もか、まともな友達はこれしかないやろ？」

木乃香 「……そうやけど」

桜 「ウチも悪かったやけど、あの子はあるあんたを近衛として見ない人たちに会わせたかったや」

……そうや、いつもウチに近づいてくるのは近衛と言つ名に集まる人しかおらへん。

まともに、木乃香として見られたことはあらへんのや。

桜 「あつちに行けば、あんたは近衛ではなく、木乃香として見られる。そう思つてあの子はウチらの提案に賛成したんや」

木乃香 「……そうやとしても、嫌や、嫌やなんや、兄様と別れるなんて嫌や」

ウチは好きなんや、兄様が……えびにいが好きな人に離されていいと思つけないやろ!

桜 「……薄々気づいておったけど、まあええ」

木乃香 「お母様？」

桜 「夷が言ってたで」

夷 『俺は木乃香が……妹が大好きだよ、けどな、あいつにはもつと友達が必要なんだよ。俺が甘やかしすぎたのも原因かもしれないけど……けど、あいつにはもつと人と触れ合ってほしいんだよ、俺がどうなってもいいから、木乃香には普通の女の子として育ててほしいんだよ。近衛じゃなくて近衛木乃香としてな』

……アカン、反則や。兄様、ウチがなんで好きになつたか知ってる？
そんな優しい言葉に惚れたんやで？

ウチは気付いていないやけど、頬に大粒の涙が流れておった。

桜 「それに夷も中学になったらソツチに行くと言つたのや」

木乃香 「そ、それ、ヒグツ、ほんま？」

桜 「そつやで、どうする？」

……ここまでお膳立てしてもらおて行かないわけがないやろう。
馬鹿にい、来たら甘えたる。

|| || || || || || || || 刹那視点

刹那 「このちゃん」

素子 「心配しない、それに木乃香だってわかってもらえるやろ…
…ゴホン、わかるだろう」

素子さんは無理して標準語で話しているが、ウチ…私は丁寧語でしか話せないがこれで大丈夫なのでひょうか…うー、噛み癖が治りません。

素子 「私だって夷と離れるのは嫌だ、それに…うーうー！」

刹那 「素子さん?! 真っ赤ですよ?!」

なんか素子さんは標準語になると硬いイメージがする言葉しか言わない、本人曰く『なぜか、こんなしゃべり方になってしまっただけです。』

刹那 「素子さんはいいんですか? 私は今年から学校に入学ですが…」

素子 「大丈夫だろう、友達だっているけど、別に親しいのはいなかったしな」

刹那 「…夷さんと別れていいんですか?」

素子 「ウグ！ し、しかたないだろう！ 夷からキスしてまでお願いしても しまった？！！」

へえー、キスですか？ いいですねえ、年上という有利なものを持っていて、ウチは修業仲間や！！ ……ゴホン、うらやましいファーストキスなんでしょうねえ、さぞかし嬉しかったんでしょう、今もなんか思い出しながら顔が笑っていますし……夕風の錆にしてあげましょうか？

ああ、この夕風は詠春おじ 長に譲ってもらいました。

なんでも素子さんは妖刀ひなを渡されたらしい、妖刀としては最高クラスだそうだが……とても危険だとえーちゃんが言っていました、大丈夫なのでしょうか？

素子 「駄目やでー夷、もつとつよ ハッ！！」

刹那 「涎たれてます、素子さん」

素子 「す、すまない、私もまだまだだな」

刹那 「大丈夫です、そこに首を固定してください、斬りますから」

素子 「い、嫌だぞ？！ 夷から褒められたこの髪を切られたくない！！」

ポニーテール好きなんですよね、私もしようとしたんですか……邪魔だったんで横に纏めているんですがえーちゃん褒めてくれた、ウフフ、ハッ！！

刹那 「ま、まあ落ち着きましょう」

素子 「そ、そうだな！ とりあえず当面の護衛は私に任せておけ、夷からもらった……メモリだったか？ そんな物をもらったしな」

……そうです、えーちゃんがどこから持ってきたメモリと呼ばれる兵器、魔法でもなければ気でもない、異質な力でできているものをもらいました。

素子さんには『ウルフメモリ』と言う、二メートルぐらいの狼の形をしたなにかをもらい、私には『ソードメモリ』鳥形の何かです、モードチェンジ？ で素子さんは鎧に、私のは刀に付いて切れ味、その他を強化してくれるそうです。

えーちゃんが言うにはどこかの祠の封印を解いたらこれが出てきたと……まあ理由がほかにあるのでしょうけど、何れ聞きます。

素子さんの普段はなにか棒状のなにかに変形して持ち運べるそうです、私のはすてるす？ と呼ばれる認識障害の結界とはちがう力で見えないそうです。

刹那 「えーちゃん、いつか聞き出しましょう」

素子 「当たり前だ、待っている夷」

そういえば、このちゃんと桜さんはまだでしょうか？ 今私たちは車の前で待っているのですが？

素子 「来たか……」

素子さんの目が鋭くなりさっきまでの呆けていた人とは別人に見えます。

私も顔を前に向けると……このちゃんがえーちゃんに抱き着いて歩いてきました。

このちゃん？

||||| 夷視点

夷 「木乃香、離れなさい、離れてください」

木乃香 「そう恥ずかしがらんといて、ウチとえびには相思相愛
つてことがわかったから、な」

夷 「やめてくれ、俺は妹と禁断の関係になることだけは勘弁だ」

木乃香 「ええやんか」

刹那 「……えーちゃん？」

素子 「夷？」

……あのーなんか、刹那と素子さんが怖いんですけど待て、夕風と
ひなを向けるな、死ぬ刺さってる！！

夷 「素子さんに刹那、やめ」

素子 「素子と呼べ！」

夷 「いや、素子さ」

素子 「素子と呼べ！」

夷 「……素子、っていうかキャラ変わりすぎだろう?!?!」

仕方ない、俺がキャラ把握したのが今これ書いてるときなんだ（作者より）

作者あああああああああああああああ！！

刹那 「……いいですね、えーちゃんはこんな美少女に囲まれて！」

夷 「俺の周りの女は話を聞かない」

詠春 「どうでもいいがそろそろ行きますよ」

……父さん、あんたもキャラ変わってるよ。これも全部ケフィア（作者）って奴のせいなんだ！
これ言つとかないとダメだろ、555も好きなんだよな！。

そうして車に乗り込む、俺、父さんに母さん、刹那に素子に木乃香は駅へと出発した。

まあその中で木乃香が過激なスキンシップをして、火に油を注いだように刹那と素子が怒ったのは俺のせいじゃない。

夷 「じゃあ、少し行ってくる」

詠春 「ああ、お義父さんにもよろしく頼む、木乃香、夏休みとかはこっちに帰ってきなさい。刹那に素子、よろしく頼む」

桜 「夷、頼んだで？ 木乃香も体に気いつけてな。刹那も素子もな？」

刹那 「はい、長、桜さん。このちゃんは任せてください」

素子 「はい長、桜さん。木乃香と夷は任せてください」

木乃香 「うん、お父様もお母様も元気だよ」

そして別れの言葉を言いながら俺と木乃香、刹那に素子は電車に乗る。

途中、なんか魔法使いの気配も感じたがすぐに消えた、つうか俺が消した。まあ魔法の射手の改良版で相手の後ろに転移させて……まあ言わんでもわかるだろ？ 殺してない、殺傷性能ゼロで雷で捕縛しただけだ。

夷 「……寝てやがる」

木乃香 「うーん、兄様」

刹那 「うへへへ、えーちゃん、この服着てや」

素子 「駄目やでー、まだ早いで？ ああ、でも……」

……助けてください、この子たちえらいこと想像してます。

つつか素子、なに見てる？ 涎でて手をワキワキしてんだ？！ 主に俺の貞操が危なそうなんですが？

刹那、お前はもうやめとけ、最初の生真面目なキャラはどうした？ つつか撮影会ならこの前やっただろ？ 猫耳＋メイド服で『にああ』って言ったらみんなが鼻血出して倒れたんだが？ 俺男だし、男の娘だとしても気持ち悪いだけだが？

実は俺が知らないことだが俺の写真が実家の神鳴流に出回っていることを……知った後、撲滅したが母さんが一番多かつたよ。

夷 「うーん、関東は久しぶりだな？」

三歳の頃にじいさんに会いに行つたきりだからなあ、麻帆良は前世の埼玉県だから……故郷に帰るのかな？ 俺って前世だと埼玉生まれなんだよな。

夷 「（……まあ、いいや……俺も長く生きるんだ、例えば木乃香や刹那、素子が死んだとしても）」

そう考えると俺は一人ぼっちになるんだよなあ、1000年かあ。俺が生き続けて、素子や刹那が、木乃香が死ぬところを見るんなら……死んだ方が

アナウンス 「次、大宮、大宮」

夷 「おつ、いつの間にか？ つつか、起きろお前ら」

木乃香&素子&刹那 「『バルス！！』」

夷 「目があああああああ！！」

なんか起こしたら三人に目を刺されたんですが?! リアル大佐
状態だよ、目が、目があああああ!!

そんなこんなで麻帆良に着きました。

世界樹つてどのくらいでかいが、気になってたが……マジででかい、
魔眼で解析してみたら内包魔力がえらいことになってたよ。

……で神力まであつたよ、あつやべえ解析と理解併用してるからあ
!!

「夷は神力の扱いが分かった、身体能力が片手で龍を倒せるように
なった。最大魔力量、気が上がった。神殺しの武器が作れるように
なった」

あばばばばば、こんなところに強化フラグがあああああああ
あああああああああ!! 人外街道まっしぐら!!

俺は内心は嬉しかった、もしも神レベルの奴らが来たら決定打に欠
けていた。

これで俺のカプトとアクセルが強化できる、ああ現在、対魔力装甲
と魔力変換機能、気の強化機構のおかげか、魔力、気でできたシー
ルドが常時展開、さらにカプトの装甲であるヒイロノカネがパワ
ーアップしてヒイロオオガネになりました。

木乃香 「ここが麻帆良やな」

刹那 「ここが……大きなところです」

素子 「うーん、特訓のし甲斐があるところだな」

夷 「……とりあえず、お前らじいさんのところ行くぞ?」

確かタカミチだっけ? そんな人とガトウさんが来るらしいけど?
父さん、さすがに英雄はやりすぎだよ?

? 「うん? 君たちが詠春さんの子供たちかな?」

夷 「ええ、あなたは?」

? 「ああ、僕は高畑 し、式?!」

? 「どうしたタカミチ、そんなあわて 式いい?!」

夷 「は? は?」

タカミチ 「し、式、いったいどこに行ってたんだよ!」

ガトウ 「たつく、お前は! 姫と真名を預けてフラツといなくな
りやがって!!」

なんかガトウさんとタカミチさんが喜んでいるんですが?
ていうか式って俺?!

夷 「あ、あの」

ガトウ 「なんだ? 式?」

夷 「俺は近衛夷です、式なんかじゃないです」

タカミチ 「え？ あれ？ そういえば顔は似てるけど……背が小さい？」

夷 「そりゃあ六歳ですから」

ガトウ 「たしかに式だと俺たちにそんな丁寧に言わないし……すまん人違いなようだった」

刹那 「なんなのですか？ あなたたちは？」

あ、やばい、刹那と素子が戦闘態勢に入ってる。

つうかここで戦うつもりか？！ ここ大宮駅、俺がお世話になってるところだし、駅抜けた先にアニメイトがあるよ！！

夷 「落ち着け刹那、人違いだったんだろう（待て待て、この人たちは父さんの戦友だ！）」

素子 「（戦友？ まさか……赤き翼？）」

そのまさかだ、つうか式って誰だ？

父さんの師匠とも言ってたしなあ、まさか赤き翼のメンバー？

ああ、心配するな、木乃香には聞こえないように念話でしゃべってます。ああ、どうして覚えたのか？ なんか通りすがりの魔法使いが教えてくれたよ……名前は確か、ゼクトだっけ？

夷 「（その通り、だから礼儀正しくしろよ？ 刹那？）」

刹那 「(なんででふか?! ……う、うー)」

……お前はなんで嘔むんだよ? たしか式神のちびせつなも嘔み癖だったような……どうしてこうなった? やっぱもう少しKYOU IKUすべきだったか?

夷 「はぁー、誰かが言ってた……」

俺は右手を天に上げて、あの人のマネをする。当時、あれを見て『おばあちゃんが言ってた』と言ったのはいい思い出だ。

夷 「本物を知る者は偽物にはだまされない、つまりあんたら両儀式と言う本物を知ってるから、俺と言う偽物にはだまされない筈だ」

……あれー? 二人が固まった? なぜ

ガトウ 「本当に式じゃないのか?」

タカミチ 「言い方までそっくり、あつちは『おばあちゃんが言ってた』だけだ」

……そいつ、転生者だろう?! ちなみに確認したがこの世界に仮面ライダーはいない……まあTVでやってないってことだが。

残念だ、またそのときにクウガやアギトを見れるかと思ったのに……クウガは最高だし、アギトはシャイニングがかっこよかったしなあ。

いや、ここは響鬼もよかったというべきか? あれもあれで味があって面白いしなあ、一番面白いのは……決められないなあ、あえて言うならカブトとWだなあ、ディケイドもあれはあれでよかったしなあ。よく言うなら歴代の主人公たちをまた出してもらいたかった。

夷 「まあじいさ……学園長のところに行きましようか？」

そういつて、全員が同意したので歩き出す、ガトウさんたちが変な声を出してたけど……俺は両儀ではなく近衛だ！

||||| 近右衛門視点

ワシの名は近衛近右衛門、ここ麻帆良の学園長をしておる……しかし今日ぐらいは忘れようかの。今日は孫たちが麻帆良に来てくれたそうじゃ。

まあ、木乃香と夷なんじゃがな？ ……最初は夷の事を知った時は婿殿に反対しようとか京都にまで出向いたのじゃが……ええ目をしておった、例えるなら宝石のようじゃった。

ワシはこの子を孫として見守っていこうと思つたわい、なぜならあの子から可能性を感じた……まるで英雄にでもなるかのようなの。

買い被りすぎじゃか？ まああの子の報告をしてもらつたのじゃが……チートじゃ、バクじゃ。

六歳にして神鳴流免許皆伝、単独での魔法使い（この者は魔法を奪つた後、ワシ直々に殴つたわい）を撃退……本当に六歳児かの？

まあいい、それでも可愛い孫の一人じゃ、木乃香も順調みたいじゃな。義兄とはいえ、夷に触発されたのか合気道を始めたらしいの、もう大人顔負けの実力者らしいの。

うれしい限りじゃ……じゃがのう、婿殿に木乃香には悪いことをしたの。いくら東西の対立を失くそうとしたのだとしても、ワシがし

たのは大戦中と同じ、同胞を異郷の地に送ったと同じ事じゃ……まあ「超越者」^{オーバースキル}の両儀式がゲートを破壊してくれなかったら……もつと死者が出たじやろう。

話を戻そうかの……木乃香にはあの「黄昏の姫御子」と「ガンスリオンガー」に仲良くしてもらうかの、オーバースキルの弟子であるあの二人ならなんとかなるじやろう、二人とも頭もいいし、実力もガトウを越えておるしの。

ああ、後「闇の福音」にも協力要請はしておこうかの？ まああやつなら無下には扱わんじやろう……彼女も根はやさしい子じゃ。

コンコン

おっと、来たようじやの。

ガトウ 「学園長、連れてきました」

||||| 夷視点

夷 「相変わらずの頭だな」

近右衛門 「ひどいのー、相変わらずの女顔じゃな夷」

夷 「黙れじいさん、その頭切り取って茶碗作るぞ？」

近右衛門 「お主は昔から毒舌じゃな」

夷 「どういいでもいいが……木乃香と刹那、素子をよろしく頼むぞ？」

そういつて頭を下げる俺、正直この人との会話はこんな感じだ、本気で言っていないよ？ だってこの人が反対したら俺は捨て子に戻ってたもん。

木乃香 「おじいちゃんも久しぶりや！」

近右衛門 「久しぶりじゃ木乃香……いつみても可愛いのに」

刹那 「お久しぶりです、おじい……ゴホン、近右衛門さん」

素子 「久方ぶりです、近右衛門さん」

近右衛門 「うゝむ、刹那は昔見たくおじいちゃんでもいいのじゃが……素子も昔見たく近右衛門おじいちゃんでもいいのじゃぞ？」

刹那 「そんなこと言えませんよ、私もこの学園に通うんでしゅ……う、うう」

……刹那、なんつうところで噛んでるんですか？
真っ赤だよ、仕方ないから頭をなでてやる。さらに真っ赤に?!
つつか両脇をつねられて、イタ、イタイ。

素子 「私はいいい年ですし昔見たくは無理ですが……近右衛門さんでどついでしょうか？」

近右衛門 「むう、仕方ないの公の場では学園長で、私生活では近右衛門でいいぞ？」

刹那 「うう、ひゃい」

素子 「わかりました」

夷 「おい、いつまで真っ赤になってるんだ？ そんなに真っ赤になるとタコになるぞ？」

刹那 「ならないですよ！ えーちゃん！！」

素子 「駄目だ、やっぱり夷は鈍感のようだ」

……好き勝手言うが、俺は鈍感じゃねえし。
お前らの気持ちは気付いてんだよ……けどお前らに恋したら死んだあと耐え切れないんだよ。

夷 「まあいいや、じゃあ俺は帰るぜ？ じいさん」

近右衛門 「もう帰るのか？」

夷 「元々は京都で送るつもりだったんだ、それにもう会えないこともないだろう」

ガトウ 「そうか……じゃあタカミチ送っていけ」

タカミチ 「はい師匠、さあ行こうか、し 夷君」

夷 「必要ないし、俺一人で帰れますよ」

木乃香 「行つてまうの？」

刹那 「えーちゃん」

素子 「夷」

……みんながすごい目で見るんですが無理だ、もう切符は買つてあるしなあ。

俺が居ること麻帆良に迷惑がかかるしなあ。あ、木乃香もか。

夷 「まあいいさ、言つただろう？ 夏休みとかはそこにいるじいさんや素子や刹那と帰つてこい」

木乃香 「……うん」

夷 「あつー！」

やべえ、木乃香にあれを渡してなかった！！

あれが一番重要なんだよ。俺はポケットから腕輪を取り出し、木乃香の腕に付けてやる。

木乃香 「これは？ えびにい」

夷 「俺からの小学生祝いだ、あ、素子とか刹那にはもうあげてるからな？」

木乃香 「ありがとう！！ えびにい！！」

まあそれは護身用の簡易結界を張れる腕輪なんだよなあ、まあ強度

はこの結界の二倍くらいだ、刹那のメモリに危険信号を送るようになつてるからな、アフターケアもばっちり。

夷 「じゃあな」

そういつて学園長室から出る俺……さあ転移で大宮駅にでも行くか。久々にビツク メラにも行きたいしな。さあ故郷の空気を謳歌するか。

そして俺は誰にも気取られずに転移し、大宮駅で遊び、無事に京都に帰りました。まあ途中に魔法使いが襲ってきたが魔法の矢で撃退しました。

||||| 三人称視点

夷が出てつた後、木乃香はルームメイトに会うためにタカミチに連れられて自分の部屋に向かった。
残ったのは魔法関係者だけである。

近右衛門 「さてここからは大事な話じゃ、素子に刹那」

刹那 「……はい」

素子 「……」

近右衛門のひょうひょうとした雰囲気が消え、真剣な目で刹那と素子を見る。

その姿は戦士のように鋭く魔法関係者の長の威厳があった。

近右衛門 「君ら二人には木乃香の護衛と夜の警備もしてもらおうかの」

ガトウ 「すまん、正直俺も出てるんだが……それでも侵入するアホ共が多くてな。それに足手まといが多いんだ」

ガトウの表情が曇る、それは疲労の顔であり落胆でもあった。

実際ガトウと言う英雄のネームバリエームもあり麻帆良に侵入するアホも少なくなつたが……いなくなつたわけではない、逆に質より量なのか以前よりも侵入するときの人数が多くなつた。

そして魔法先生の練度の低さもあり、ガトウとタカミチがカバーしようとしてもきれない点がある。その点では将来有望の刹那と神鳴流の秘蔵っ子である素子が居ることは学園にとっても喜ばしいことだ。

素子 「そこまでひどいのか？」

刹那 「うう、私は六歳なんです」

近右衛門 「なんというか……すまん」

その雰囲気を消し飛ばすように扉がノックされる。

学園長に一声かけてから入室したのは褐色の肌を持つ刹那と同じくらしい少女だった。

？ 「来たよ？ 学園長」

近右衛門 「おお来たか、この子は麻帆良の切り札であり、卓越者と呼ばれた両儀式の弟子である……」

真名 「両義真名だ、よろしく」

近右衛門 「真名にはの、刹那と同室になってもらおうかの、色々教えてやってくれんか真名」

真名 「いいよ、刹那だっけ？」

刹那 「ああ、桜咲刹那だ」

真名 「よろしく……ちなみに魔法関係者からこう言われているよ」「銃使い（ガンスリンガー）」とね、はっきりした声で誇らしそうに言った。

||||| 木乃香視点

うー、今ウチはタカミチ先生に連れられて部屋に送ってもらった。大丈夫やるか？ ウチ、同年代の子と話すのせっちゃんに任せ…えびにい以外初めてや。

タカミチ 「緊張してるね」

タカミチ先生がそう言ってもろうたけどガチガチに緊張して声がでえへん。
もうどないしようか。

木乃香 「同室の子ってどないな子なんですか？」

タカミチ 「うん？ 優しい子で木乃香ちゃんみたくきれいな子だよ？」

そんなお世辞みたいなこと言われても喜ばへんで。
えびにいに褒められた方がうれしいんや。

タカミチ 「さっ、ここだよ。アスナー入るよ」

アスナ？ 「はいはい、入っていいわよ」

扉を開けるとオレンジの髪をした女の子が椅子に座っておった。
確かに可愛い子やな。

タカミチ 「今日からアスナの同室になった近衛木乃香ちゃんだよ」

木乃香 「今、紹介してもらおうた、近衛木乃香や、よろしゅうなアスナちゃん」

アスナ 「アスナでいいよ。私は両義アスナ、よろしくね、木乃香」

別れのS／兄は妹思い（後書き）

作 「今日のネギラジオ！！ ゲストはこの小説のマスコットこと
桜咲刹那さん！！」

刹那 「マスコット？！！ なんでしゅか！！」

……チーン

作 「それやるからですよ」

刹那 「噛み癖が直したいです、作者さん直してください」

作 「だが断る（キラ）」

刹那 「斬岩剣！！」

作 「や、やめ」

放送事故により少しお待ちを

作 「ひどい目にあった」

刹那 「真つ二つにして斬ったはずなんですが？」

作 「それはな、二次創作クオリティ、つまり気にしたら負けだ」

木乃香 「だまらっしやい」

夷 「は、はい」

素子 「今回は特別に姉さんを読んできた」

作&夷 「「待つて死にたくない――――！！」」

刹那 「逝ってらっしやい」

作&夷 「「嫌ダアアアアアアアアアアアアアアアああ！！」」

アッ――――！！

京都の町はフラグでいっぱい（前書き）

今回は少しシリアスです。

月詠、千草の初登場、京都弁はこれでいいのーかー?!?!?!
激しく心配です。

キャラ崩壊、原作ブレイクが嫌なお方はお戻りください。

そして今回はアンケートを取りたいと思います。

それではどつぞー!!

京都の町はフラグでいっぱい

ぐーてんもるげん、夷だ……もう何言っただら？

すまんな最初から愚痴みたくしてしまっ……まああれから、木乃香の入学から二年たち俺も八歳になりました。木乃香たちもな……向こうではアスナと真名っていう子に優しくしてもらってるらしい、ありがたいことだ。一回あいさつに言ったら、確かに礼儀もよかつたが……俺の顔みたら固まって、抱き着いてきた。

そのあと、木乃香に『ごるでいおんはんまー』と言われながらハンマーで頭をかち割られた、あいつ合気道だよな、やってんの、そうだよな？！腕力が跳ね上がってるんですけど……！

まあ抱き着いてきた二人に事情を聴くと俺が両義式にとても似てた、だそう。どこまで迷惑かけるんだ？！なんと二人とも式に拾われて麻帆良に送ってもらったそう……で両義は行方をくらませてるそう……アホか？

でだ、麻帆良に行くと言っ……いいほど魔法関係者に間違われる、もう嫌だ一番やばかったのは……葛葉刀子とシスターシャーケティっていう人だ。なんでも大戦中にあつちに居たらしく……両親が死んで自分たちも殺されそうなきに颯爽と現れたのが両義らしい、当時ゲートが破損してたらしく、魔法世界から出れなかった彼女らは両義の魔法で旧世界に戻っ……たらしい。

ああ、旧世界ってのはこの麻帆良がある世界で魔法世界ってのは火星にある世界だ……火星人なのか？まああつちはオスティア・ウエスペリタィア王国という麻帆良のバックにいる連合の本拠地があるが……王女であるアリカ・アナルキア・エンテオフュシアが絶賛失踪中らしい、王女が失踪ってどうなんだよ？まあ原因はすべての責任を王女に押し付けようとした当時のメガロメセンブリア元老院のせいなのだがな。

話がそれたな、で刀子さんもシスターも俺に両義の影を見たらしい、

つつかそつくりすぎたと二人とも落ち着いたときに謝罪してたけど、なんでも学園長、まあじいさんが受け入れ二人とも生徒として麻帆良に入り、そのまま魔法先生になつたらしい。

もう嫌だ、両義さんよ、早く失踪から出てこい。そして俺に謝れこのくそ野郎。

ゴホン、まあこの二年間は俺は学校には行かず、修業してましたよ。まあ近衛を継ぐのが俺だしな、木乃香を麻帆良に行かせるためにそれ相応の条件は出されたしな。この程度ならいい、木乃香の為だ。まあ刹那も木乃香も素子も向こうでうまくやってるらしい、クラスの連中がうるさいとき、素子の方はなぜか女に人気らしい……なんてこつたい頼むからボーイフレンドを作って俺を安心させてくれ、鶴子姉さまの修業がきつい、あの人六歳に上級の霊体でもぶつた切る奥義放つてくるからなあ、あれ物理攻撃も少しあるんだ、よく生きてこれたな……。

ああ、それと毎度恒例、魔眼が強化されました。つつか魔眼じゃなくて神眼になりつつあるんだが？ 悪霊なんか解放しただけで消え去りましたよ？ ああ、強化というか追加ね、幻術と未来線見えるようになりました……因果律にすら手を出し始めたみたいだよ。

現在の魔眼は解析、理解、複写、直死、吸収、分解、霊体感知、幻術、未来線が見える、なんだコレ？ 魔眼？ ちがうよね、つつか今魔眼の能力を封印してる、まあ能力制限だな未来線が強力すぎて頭が死にかけた、情報量が半端ないんだよね、俺じゃ使いこなないし意味なんだよなあ、感覚がクウガのペガサス並に超直感になってるから大体の攻撃なら放たれても避けれる。クロツクアップにすら反応できた超直感だ、人間の攻撃なんて遅すぎるぞ？ まあ発動してるのが5分が限界なんだよな。

分解も上級魔法もできるようになった、自分の魔法で試してよかつた。ゼクトありがとう！！

うん、ぶつちゃけいとうと八歳にして身体能力が人間を越えた……ま

あとおくの昔に越えていたような気がしなくもないがな。

夷 「行くぜ父さん、散沙雨！」

詠春 「まだだ、私も現役ですよ。斬岩剣！」

俺の数発に及ぶ突きをたった一振りの木刀の太刀筋で切り払われる。さすがに気で強化しているが筋力には負荷をかけてリミッターもつけてるから、全力が出せない、つうか全力でしたら京都吹き飛ばよ？
「冗談じゃなくて本当に。」

詠春 「なかなか……だが！ 雷鳴剣！！」

夷 「ちい！！ 雷破斬！！」

俺と父さんの木刀に同時に電気エネルギーが纏われ、甲高い音が辺りに響き、ぶつかり合う。

電流の放流が俺と父さんを襲うが結界を張って受け流す、自分の技で倒れるかアホ。

夷 「黒刀斬岩剣！」

詠春 「なんの！ 斬魔剣！」

ああ、この黒刀？ 神鳴流に背くが魔の力、妖力を使って技を放つと白じゃなくて黒になるから黒刀……下手をすれば妖力に飲み込まれるが……そんなへまはしないし、適量だ、つうか魔法と気も合わせてるからな、料理という隠し味だ。

斬魔剣なんざ、魔を斬る技だからすこぶる相性が悪いが……。

夷 「振り切るぜ!!」

詠春 「くっ?! 歳のせいですかね……だが!!」

俺が力を込めると父さんも負けじと力を込める、黒と白の軌跡がぶつかり合い対消滅していく、互角、まったくの互角……だが。

夷 「行くぜ? 秘奥義……」

詠春 「なっ?!!!」

俺は右手を離し、そのまま腰にある短い方の木刀を出す。
これで終わらせる!!

夷 「魔人千裂衝!!」

まず、右手の短い木刀で父さんの木刀を吹き飛ばし、そのまま左手の木刀で後ろに下がりながら切り上げ、足を前にだし前進し右手で切り上げてから左手で切り下げる、そのまま切り上げと切り下げをもう一度父さんの体に叩き込みながら、気を右手に集中させ最後の切り上げを決める!!

詠春 「ガハッ!?!」

これがやりたいがために太刀と小太刀の二刀流にした、実際に使ってみると太刀だから若干ナイフよりも振りが遅かったが許容範囲内だ、二刀流は案外一刀流よりも強いと思われがちだが実際はキツイ、二刀流の方々には頭が下がるものだ。

一刀流は両手の力を一気に込めることができ一撃一撃が強く、二刀流はどっちかっていうと力よりも技の剣技だ、片方しか使えないか

ら力も半分だしな、それに攻勢に出れば強いが防戦一方だときつくなる……調子にのって鶴子姉さまに戦いを申し込んだらばこぼこにされた……手加減一切の容赦なくな、気付いたらベットのようだ。二刀流の人は少ないから見稽古が使えないので純粹に俺の剣技として使えることが一番よかった、やっぱり自分の剣技は持つておかないと。

詠春 「イタタタ、私も歳ですかねえ」

夷 「何言つてんだよ、何度も俺の隙を狙つてやがっただろうが」

そう、父さんは的確に俺の死角に攻撃を叩き込んでいた。

さすがにヒヤヒヤしたぜ？ サムライマスターは伊達じゃないか……というよりも父さんの戦闘経験がすごいからな、俺なんて戦闘力はっかだ。

あ？ 戦闘力〃強い？ バカ言うな、本当に怖いのは基本に忠実な玄人だよ、戦闘経験っていうのは貴重な、命のやり取りだから下手をすれば二、三段階強くなる時もあるし、あれだ危機管理能力もレベルアップだよ。勘つていうのか？ まあそんな自分しかわからないものを手に入れることができる。

……俺は強すぎる力のせいかな、戦闘じゃなくて圧倒しちまうんだよ、経験もあったもんじゃない。まあ鶴子姉さまと父さんの訓練が一番いいがな。

詠春 「ずいぶん強くなったな、これならあの子も……」

夷 「つつか今日はもうやめるぞ？ 久々に京都の町を歩きたいんだ、これが」

最近、とあるキャラクターのしゃべり方が気に入ってるんだよな、

これが。

……うんやめよう、俺はアクセルでも仮面ライダーだもんな。
そうそう仮面ライダーで思い出したがアクセルメモリを参考にとあるメモリを製作中だ、できれば使わなければいいんだが……。

詠春 「ああ、いいですよ？ 暗くなる前には帰ってきなさい」

夷 「俺はもう……そんな子供じゃない」

詠春 「何を言ってるんですか？ まだ八歳でしょうに」

夷 「うるせえ、行ってくる！」

そう言っつて、俺は道場から出て、シャワーを浴びようとする。

今日は仮面の部品を買いに行こう！ 楽しみだなあ。

けど俺は今日ほど外に出て後悔したことはない……まあ理由は後でな。

||||| 詠春視点

詠春 「ふう、本当に強くなった」

私は胴着を脱ぎ、傷だらけの体を見る。

長い間戦ったせいかな、深い傷が多い、一番多いのは……師匠の修業か？

詠春 「まったく勝手にどっかに行っちゃってしまっ」

そう私以上の剣技、ナギ以上の魔力、ラカン以上の気、そして魔眼と言っていたが……あれは魔眼ではなく神眼のような気がする。とにかく強かった、そして厳しかった。正直あの人が居なかつたら私は桜の元に戻らず、魔法世界でのたれ死んでしただろう、まったくもってあの時の自分は不甲斐無さすぎる。まああの人の一言は強烈だったよ。

式 『おばあちゃんが言ってた、男がやっていけないことが二つある。女を泣かせることと食べ物で粗末にすることだ、ってな』

詠春 「……私は』

式 『考えるんだな、バカ弟子が。自分を待つてくれる女を泣かせるなんて男の風上にもおけねえぞ？』

この一言は効いた、私は京都にナギたちと共に戻り即座に妻に対して土下座をしたよ。

その後は女の涙と言うもの強さを知ったよ、私では到底たどり着けないものだった。

今も迷惑をかけているが……本当に妻には苦労をかけている。

師匠………そういえばあなたの顔が思い出せないんですけど？

式 『あ、そうそう、俺の顔の記憶を消させてもらっぜ？』

し、ししよおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！

||||| 夷視点

夷 「ぶれすと、ふぁいやー!!」

うう、なんか鼻がムズムズするからくしゃみしちゃまったよ、誰か噂してんのか？

まあいいや、今日は筆と墨を手に入れたよ!! やつとふふ、仮面が完成する! ああ、仮面はDARKER THAN BLACKの黒の仮面だ。あれはかつこよくて作りたかつたんだ! どうせなら本格的に作ろうと思つて材料まですべて自分でそろえた……中々あの形した仮面がないからなあ。

夷 「さあ作るぞ!!」

周りの人に温かい目で見られながら歩く俺、意外に俺は外に出ることが多かったのでこの商店街の人たちとは仲良しだ、多少の変な事なんてなんのそのだ、店がヤクザの抗争に巻き込まれようが魔法戦に巻き込まれようが、手に持つ家具や調理道具で戦う、コンバットじいさん、ばあさんたちである。あ、言っておくけど本気でやつたら下手な軍隊よりも強いよ? 結束力もあるしなおかつここにいる人たちは大戦を生き残った人ばかりだ。刀や魔法を使わなくても麻帆良の三分の二くらいは占拠できるだろう。

夷 「さあて、今日は」

? 「きゃあああああああああ?!!!!」

夷 「なんだ?!」

ただならぬ悲鳴で一気に平和ボケしてた頭が活性化する。
ちくしょう、間に合えよ!! そう思いながら悲鳴のした方に走って行く。ああ、荷物なら影のゲートに入れたよ。

||||||||||?視点

ウチの名前は天ヶ崎 千草。

まあわけあつて親がいないんやが……それについては触れたくあらへんのや。

ただウチはなんで父様や母様が死ななきやあらへんのや? 卓越者…… オーバースキルが憎い、憎くてたまらへん、あいつがウチの両親を殺したんや!! あいつは突然ウチの前に現れてこう言い放ちおつた。

式 『お前の両親を殺したのは俺だ』

ウチは激昂して飛びかかったんや、式神と一緒に。父様の形見の猿鬼、母様の形見の熊鬼で襲い掛かったんや、けどあいつはただ指を鳴らしただけでウチの動きを止めたんや、悔しゅうて悔しゅうて、今でも思い出せる、あの顔を。

式 『この程度か? なら話にもならねえよ』

千草 『殺したる、あんただけは殺したる!!』

式 『いい目だ、もつと憎め、そしていつか俺を殺して見せる!!』

そう言つてあいつは姿を消した、ウチは泣いた一晩中泣いて誓つたんや。

あいつだけやない、西洋魔法使いを殺してやる、とな。

父様や母様が許してくれるはずない……けどやらなきゃあかんのや、そつしなきゃウチは自殺しとる、もう嫌なんや父様や母様が居ない生活なんて……

千草 「父様……母様あ、ウチ、ウチはあ」

? 「おやおや、まったくいい感じで実験材料が居ますね」

千草 「誰や!!」

? 「おつと、私の名はルシフェル……聞いたことありませんか?
地獄に落ちた天使ですよ」

千草 「なんや? 冷やかしならさつさとどっかいきいや!」

ルシフェル 「おやおや、なにをそんな怒っているのですか? ……

…まあいいでしょう、あなたはここで死ぬのですから」

ガイアメモリ 「WEATHER」

なんやあれは? 四角い何かが男の体に刺さると男の体が光って、姿が変わつたんや……なんや嫌な予感がする?

千草 「ハッ！ どうせコケだましや！ 行や猿鬼、熊鬼！」

ウチと今のこいつらなら……勝てる！

……ウチはそう思ったんや、けどウチにはまだ相手の力量なんてわからなかったんや。

ルシフェル 「邪魔だ、カス共」

千草 「う、嘘やろ？」

一瞬にして猿鬼と熊鬼が消された、なんか雨雲みたいなものから放たれた赤い電流で猿鬼と熊鬼がやられたことがわかったのやが……ウチに放たれた電流はくらってもうた。

千草 「きゃあああああああああ？！……！」

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い、初めてやった攻撃を……ウチを殺そうとするような攻撃を受けるのは、惨めに悲鳴を出して倒れて動けへん……！

ルシフェル 「さすがは地球の記憶と言うべきですかね？ 私が使えばこんなに力をさせるなんてね」

男は白くなったその手を握ったり開いたりしてなんか確かめてるよ
うやった。

ウチは口すら動けないように口を魚のように開くことしかできなかった。悔しいんや、どこの奴かわからん馬の骨に負けるなんて、これじゃウチは復讐なんてできないんや。

悔しい悔しい、悔しいんや……！ そう思うと涙が両目から溢れてき

た。

ルシフェル 「命乞いですか？ 無駄ですよ？ 今ここには結界が張っております。下等な人間ごときに見破れませんか？」

違う、命乞いやないんや！ ウチは！ ウチはあああああああ！！

ルシフェル 「気にしなくても今から死にますから……ご安心を」

そうして男は腰の剣を抜く。鋭く、ウチの首なんて一瞬で切り裂いてしまうやろうな……悔しいなあ、復讐もできずに惨めに死んで、ウチの人生はなんやったんや！ ウチが何したっていうんや！ ウチはただ……父様と母様と笑って暮らしたかったんや。

ルシフェル 「それでは……さようなら」

ブンと言う音と共に振り下ろされた剣はウチの首を正確に狙っておつた。

死んだなあ、ウチ、本当になんやったんや、ウチの人生は？ まあここで死ぬのも……父様、母様今行きますよ。

？ 「くそがあああああああああああああああああああああ
！！」

そのとき何かを壊す音と共に何者かが結界の中に入ったんや。一体誰だや？

ルシフェル 「あなたはいつたい？」

見てみると女のようやった、腰まで届く長い髪、そして手に持つ大

きな赤色の剣、いつたい誰や？

？ 「通りすがりの仮面ライダーだ！ 覚えておけ！！」

そうしてウチは限界がきたようで意識が消えてもった。

……神様あ、あんたが居るやんやったら今だけは感謝したる、ウチは……まだ生きる。

||||| 夷視点

誰かの声が聞こえた方に行くとそこには何もなかった。

夷 「……解放」

俺はキーワードを言って解析だけ魔眼を発動する。
すると結界が張られていた、中には……女の子と

夷 「ウエザードーパント?!」

そこにいたのは仮面ライダーアクセルと激闘の末に負けたウエザードーパントが居た。

ありえない……まさか転生者か？ そう思った瞬間、ウエザーは腰の剣を女の子の首に向けて振り下ろした。

俺は影からエンジンプレードを取り出す、結界破壊効果はもうついている。

夷 「くそがぁああああああああああああああああああああ
！！！」

そして結界を破壊して女の子の首に向かって振り下ろされた剣を弾く、このとき俺は身体能力だけは完全開放していた。男は少しだけ感心したように声を出す。

ルシフェル 「あなたはいつたい？」

……それならこう言って答えてやる。

自分の世界を追い求めて最後は自分を犠牲にして世界を救った破壊者であり救世主であるライダーの名言。

夷 「通りすがりの仮面ライダーだ！ 覚えておけ！！！」

ウエザー 「カメンライダー？ 面白いことを言うが……死ね」

ウエザーは手から電流を出す。結界を張り、女の子と俺を守る。強度は上級魔法を十発撃ったって太刀打ちできないほどだ。

ウエザー 「……人間風情がぁああああああああああ！！！」

怒って連続で撃つが……無駄だ。

それにこいつは妙に俺のカンに触る。いや……俺はこいつが気に食わない、初めてだな人間にそんな感情を抱くなんてな。

俺は天に右手を刺しながらウエザーに向かって言い放つ。

夷 「誰かが言った。子供は宝物……この世でもっとも罪深いのは、その宝物を傷つけるものだ！！！」

ルシフェル 「ガイアメモリ?! 貴様はいつたい?!」

夷 「通りすがりの仮面ライダーって言うてんだろぅが!!」

ガイアメモリ 「CYCLONE」

俺はエンジンブレードにサイクロンメモリを挿入する。まあ何でかって言うとな……アクセルドライバーにデータだけがあった、まあ解析してたら偶然見つかったんだがな、他にもジョーカー、メタル、ルナと……あのガイアメモリとベルトのデータがあった。まあいい、サイクロンメモリを挿入したのでエンジンブレードから風が舞いおこる。

ウエザー 「こけおどしがあああああああああああああああ!!」

夷 「はあああああ!!」

ウエザーが俺の周りにメモリの力による雲を発生させるが、俺がエンジンブレードを一振りすると風が雲を消し飛ばす。

……Wでも思ったがアクセルにサイクロンメモリを渡せば序盤あんなに苦戦しなかったろぅにウエザーに、まあ大人の事情と言うやつだなあ、きつと。

案外、エンジンブレードってガイアメモリの力を引き出せるから効力は絶大だ。

ウエザーは雲を出すことをあきらめ、手から赤い電流をだし攻撃してくる。俺は走りながら軌道をよんで避けながら近づく。

夷 「斬岩剣!!」

ウエザー 「うおおおおお?!?!」

とっさに剣で受け止めるみたいだがボディーがから空きだぜ？
俺は右足を相手の腹に向けて繰り出す。うまくいったのかウエザー
の腹に決まる、痛そうに吹き飛ばはうとするが逃がさん!!
そのまま俺は右足のタイヤを起動させて、ウエザーの体で回転させ
る。

ガリガリ、と体が削れる音とウエザーの絶叫が聞こえるがどうでも
いい。さあ本格的に振り切るぜ！俺は手のエンジンブレードを捨て、
左手をドライバーのクラッチレバーに伸ばす。

夷 「……メモリブレイクだ!!」

ウエザー 「うあがあああああああああ?!?!」

そのまま右足をウエザーに当て続けながら左のクラッチレバーを引
き、パワースロットルを捻る、するとエンジンの排気音が流れる。

アクセラレーター（これからは長いのでADと略します） 「A
CCEL MAXIMUM DRIVE」

夷 「せいやあああああああああああああ!!」

俺の全身に高熱を纏せながら、右足を軸に左足で回し蹴りを放つ。
アクセラのマキシマムドライブ、アクセラグランツァー、本来は後
ろ跳び回し蹴りを叩き込む技だが今回は零距离でうてるから回し蹴
りにアレンジしてみた。

ウエザーは転がりながらメモリを体内から排出し、元の人間に戻る。

ルシフェル 「ぐあああああああああああ」

夷 「絶望がお前のゴールだ」

しかしここで予想外の展開が起きる。
なぜか……メモリーブレイクされずにメモリが地面に転がる。

夷 「なんでメモリーブレイクできない?!」

ちなみにT2メモリすらメモリーブレイクできるのは実証済みだ、そうなるはこのメモリはT2よりも新型か？ つうかなんでこの世界にドーパントが居るんだ?!

……一応、裏の世界の事情とかも調べたが、いやぁガジェットって使えるね。怖いよねえ、虫が飛んでると思ったらその会話が丸ごと録音してるんだから(ニヤニヤ)

ルシフェル 「貴様、貴様、貴様あああああああああ!!」

夷 「何者だ？ この世界にメモリなんて持ち込みやがって」

ルシフェル 「……その顔、そうか、そうか」

なんだ？ 変身解いて、素顔を見たらニヤニヤしだしたぞ？
こいつ変態か?!

ルシフェル 「ああ、お前の魂見たことあるぞ？ この俺を地獄に落とした人間のだ！」

夷 「お前を地獄に……まさか!!」

ルシフェル 「そうさ、俺が実験したんだよ……名前は確か両希夷」

詠春 「ああ、紹介しておきます、この子は私の息子の近衛夷です」

夷 「どうもー、夷です」

へ？ 息子？ そういえば詠春様が言っていたような……もしかして、もしかしてや。

千草 「人違い？」

夷 「まあそうなるよな」

あ、ああああああああああああああああああああああああああああ。

千草 「嘘やろおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！」

||||| 夷視点

その後、千草さんに土下座して謝れた。正直マジで床に頭こすり付けてたし、父さんの目の前で札で自爆しようとしたしな（父さんと俺でぶつた切って中断した）

理由を聞いてみると自分の親を殺した、両義式と俺がそっくりだったからあんなことを言ったらしい、まあ来るものがあつたね。美人さんに初対面で人殺し発言されるなんてなあ、あはははははははは、鬱だ、死のう。あ、俺死ねないじゃん。

千草 「ほんま、すんません。ウチ、ウチいいいいいい!!」

夷 「落ち着いて! はいはい札はしまう(返さなきやよかった!)。っていうかもいい歳なんですから、まだ十歳にもいってない俺にそんな謝らないで!!」

千草 「……ウチ、死のう。まだ子供になんちゅうことを」

ああ、父さんは『その子のこと頼んだよ?』って言って退出していききました。

もう嫌だ、あの野郎、修業の時割と本気な気をぶちこんでやる(後日、詠春が風邪ということの数日間公務ができませんでした、その前の日に道場からすごい気が……)

夷 「落ち着いて?」

千草 「でも、でもウチなんちゅうことをぬかしてもうたんや」

もうしょうがない、語録でなんかいい言葉あつたかな?

駄目だ……なんも思いつかない。あ、すいませんね、巫女さんが食事持ってきてくれたよ。

うん? 食事? そうだ!!

千草 「……食事かあ、ここ最近ハマったくっておらんかったなあ」

これだ!!

夷 「誰かが言った」

千草 「なんや？ 突然？」

夷 「食事は一期一会、毎回毎回を大事にしろ……つまり、一期一会とは出会いは一生に一度。その機会を大切にしろってことだ。よ
うするに食事は大切にしろってことだ」

千草 「おもしろいこといいますな……誰の言葉や？」

夷 「天の道を行き総てを司る男が言った言葉だ」

嘘は言っていない、いつかあの人の語録じゃなくて自分の語録を作り
たい。

それが俺の目標の一つだ。

千草 「ふうーん、おもしろい人なんやな、そうやな食事は大切に
とらんと」

そのまま勢いよく、和食を食べる千草さん。
そういえば……この人メガネかけてるけど、外したらどうなる？
ちよつと気になるなあ。

千草 「グツ！！ ゴホ！ ゴホ！」

夷 「ああ、まったくゆつくり噛んで食べなさい！」

千草 「え?!」

あれ？ なんか、千草さんがすごく驚いたような顔したんだが？
つつか泣きかけてる?! なんてえ?!

夷 「あうあう、ち、千草さんどうかしました？」

千草 「い、いいんや、少し昔を思い出してな。ごめんな」

泣きながら笑顔をしてるけど……。

俺は千草さんの頭に手を置き、撫でる。まったくもってこんなことしかできない俺が嫌になる……神様に人を元気にする才能が欲しかった。

けど木乃香は『兄様の笑顔を見てるのがうれしいんや！』って言うてくれたから、あの日から笑顔を人に向けるようになったんだよなあ、俺の妹には頭が下がる。

千草 「どうしたんや？ ウチは撫でられるのは好きやけど……」

夷 「なんか千草さんの顔が苦しそうだったから……」

|||||千草視点

おもしろい子やった、どこぞの人殺し（英雄）とは大違いや。顔は似とるけど、心はまったくもって別人やな。

食事するときだって、誰かの言葉を借りてウチにご飯を食べさせようとするんや、まったくなんかあの言葉を聞くと食べえへんといけないような気がしてくるんや。

それに懐かしい言葉を聞いたんや。よく小さい頃、父様に言われたセリフや、懐かしいなあ、昔は本当に、ほん、とくに……アカン泣きそうや、なんでやこの子の顔見ると落ち着くんや、敵と同じ顔なのになあ。

そしたらいきなり夷はんが頭を撫でてくれたんや。理由を聞くと……。

夷 「なんか千草さんの顔が苦しそうだったから……」

そのときウチの記憶に不思議なものが飛び込んできたんや。

? 『なあ千草は将来何になりたい?』

千草 『もちろん はんの嫁さんや』

? 『ははは、嬉しいねえ、まあ何年かしたら考えてやるよ?』

なんや? この記憶は?

千草 『嘘や、嘘やああああ!』

? 『すまない、俺にはこのくらいの償いしか考えられない』

千草 『何するんや?!』

? 『すべて忘れろ、そして……』

千草 「おにい、ちゃん?」

夷 「え？」

アカン、わからんけど、わからんけど!! ……目から涙が。

千草 「う、うあああああああああああああああああああ
あん!!」

||||| 夷視点

数十分間は千草さんが俺の胸の中で泣いていたよ。え？ うらやましい？ ふざけたことぬかしてんじゃねえぞ？ 人が泣いてるのにそんな不謹慎なこと考えるな!!

……まあ年上のお姉さんが抱き着いてくるのは男として……まあ、あれなこともあるのですよ。

千草 「ヒグ、ヒグ、す、すまんなあ、服汚してもうた」

夷 「別にそのくらいは……」

千草 「あの、な、夷はん」

夷 「夷でいいよ？ 千草さん」

千草 「また、ここに来てもええか？ 夷」

夷 「当たり前ですよ、いつでもここに来てください」

につこりと笑うと彼女も笑ってくれた……やっぱり美人は笑顔が一番。

|| || || || || 数日後

俺は父さんに言われて、今少し本家ではなく分家の神鳴流の家に来ていた。名目は俺の実力を測りに来たらしいが……なんか嫌な予感が、こう、木乃香がハンマーを出して追ってきたり、刹那が式神と一緒に刀振り回して追ってきたり、素子に寝込みに襲われたから逃げたら追ってきたり、姉さまの修業逃げたら奥義放ちながら追ってきたりする感じ。って全部追われているのか?! 俺の周りにはアクティブな女しかいないのかあああああああああ!!!

詠春 「どうした? 夷」

夷 「い、いや、なんか嫌な記憶を思い出したから……」

詠春 「……なんだ、あれだ、すまん」

父さん、あんたも苦労してたんだね、巫女さんの姿見ながら鼻息荒くしてたら、母さんにシバキ倒されていた人とは思わないよ。ああ、そうだ母さんは実はかなりの実力者で素子と刹那が二人がかりでも

引き分けるくらい強い。

夷 「そういえば今日の相手は？ この前見たく弱かったら承知しないぞ？」

そう、この前と言うか一か月前の試合では相手が弱すぎてまとめて五人と戦ったんだが……正直それだったら、気を強化した母さんの張り手の方が怖い。あれって岩も砕く威力なんだよなあ。

夷 「頼むから……俺ぐらいとは言わなくても、刹那くらいの実力がなきゃ」

詠春 「お前は本当にバグだな、私の息子とは思えない」

ぶつちやけると義息子だしな、まあいいや。

あれ？ 相手がきたか？ なんて剣道の面をかぶってるんだよ？

夷 「おいおい、あのバカはなんだ？」

詠春 「……あれがお前の対戦相手だ」

夷 「えー、だるい帰って仮面作りたいたいんだけど？」

ようやく黒の仮面が出来上がったんだよ、強度もチタン合金並に変化したんだよ！ 結界を張って壊れないようにしてんだよ、後は色塗るだけなんだよ！ ヒビイロノカネサイコー！！

すまん、調子に乗りすぎた……まあいいや、おいおい、相手は……。

夷 「二刀流？」

俺と一緒に左右の長さが違う、左手に短い木刀を、右手に普通より大きい木刀を持っている。

二刀流の神鳴流かあ、俺以外にはごく少ないがいるにはいるが俺の相手にすらならない……が。

夷 「あっはははは、おもしろえ」

詠春 「やる気になったか？」

夷 「ああ」

俺は道場の中央に向かう、相手もこっちにくる。

一礼し、それぞれの得物を相手に向ける、やべえ、俺って結構バトルマニア？

審判 「では……東！ 近衛夷！」

夷 「よろしく頼むぜ？」

審判 「西！ 月詠！」

月詠 「よろしゅうな、夷はん」

審判 「双方とも用意は……」

夷&月詠 「とつとと始めろ、斬り殺すぞ？」

審判 「なっ?! ……ゴホン！ では始め!!」

夷 「さあ始まったが終わった瞬間、あんたは八つ裂きになってる

だろうか」

月詠 「うふふふ、ええお方や、惚れてしまいそうやで」

夷 「俺に惚れるなんて……物好きだな」

なんか後ろの父さんが『あいつは……ナギ並の鈍感だなあ、どこで教育を誤った?』とか言ってるが何のことだ? 俺は鈍感じゃないんだが? まあいい目の前の……女だな、声的に。月詠には普通の神鳴流とは違う感じがする、どっちかつていうと刹那のような人外の気配が……一瞬だけ魔眼で視ると、おうジーザスこの魔族だし。まあ、真名みたくハーフか? 人間の気と魔族の気が半分だしなあ。

夷 「行くぜ? 黒刀斬岩剣!」

月詠 「ウチと同じ技や?!」

黒い斬撃が月詠を襲うが体を捻って攻撃を避ける。
まだまだだぞ?!

夷 「黒刀斬鉄閃、避けて見せろ」

月詠 「きゃははっは、いいですねえ。ウチも……ざんがんけーん!」

ふざけた物言いだが……威力がハンパない、刹那より強い。
俺は身内の実力を優先させるようなバカじゃない、こいつは本当に強い。

やべえ、黒刀の影響か? 妖刀使わずに俺が黒刀を使えるのは刀身に妖力を流してるからだ。

月詠 「あつはははは、ここまでの死合いは初めてですえー、ウチもテンションが上がってもうたえー」

あ、やばいスイッチ入った。まあ神鳴流にはふざけた特性がある、どこの戦闘民族かと問いたくなる戦闘衝動とでも言うのか？ そんなものがある、これが発動すると強さが三割くらい強くなる、ちなみに俺は自由にON/OFFができる、今はONにしてるが……相手もかよ。

月詠 「簡単に死なないで下さいよ？ 夷はん？ ざんがんけーん」

次の瞬間、面を捨てた月詠が俺に急接近する。早い、小柄な体格からのスピード、そして繰り出される攻撃の重さ、残念ながら刹那じや勝てるかどうかわからん。

それに今の俺の実力と拮抗している、大したもんだ、少しリミッター外すか？

夷 「正直お前をなめてたよ、だが……俺はもう手加減はしないぞ？」

月詠 「ええわー、あんたと殺り合つと興奮するえー、最高や」

夷 「お褒めいただき、ありがとうございますか？ まあいい、黒式・一解除」

そして俺の目が黒から漆黒に変わり、木刀の刀身が黒く染まる。

魔法の文献を読んでいたら……「闇の福音」とか言う魔法使いの「闇の魔法」と呼ばれる魔法をまねた、俺の術式解放の一種だ。

もう一つは「咸卦法」……いや「神卦法」か？ まあ、違う点は神

力も取り込んだというべきか？ そのときだと体から虹色のオーラが出て魔眼が常時発動になる、めったに使わないが。

黒式はまありミッターを解放した状態だ、一は身体性能と気と魔力を少し、闇の属性の適合率が高いのか、それとも闇の魔法を使ったからか、どうかわからないが、目から光が消える、イメージ的にはS EEDの種割りか？

まあ一だからな、軽くだ、ほんの少しだけリミッターを外しただけだ。周りの奴らがなんか騒いでいるが……木刀に黒いのは全部闇の属性を持つ魔法と妖力で染まる。

月詠がうっとりとしてるが大丈夫か？

月詠 「あんた最高やえー、本当に惚れてまった」

夷 「まあいい、終わらせるぞ？」

月詠 「えー、もう少し斬り合いたいやけど？」

夷 「お前は気に入ったから家に来てから斬り合おう、二人っきりで」

間違いない、前のセリフさえなければ口説き文句だろう。

実際は「殺し合いをしましょう」と言ってるのだから

月詠 「ええよー、ウチもあんたは気に入ったえー。行くえー？
らいめいけーん」

夷 「黒式奥義、一の技」

俺は黒式に一つ一つに技と奥義を持っているが威力が自重できないので技、まあ秘剣なんだがそれを放つ。

月詠の電気を纏った木刀が俺を襲うが……静かに木刀を振る。

夷 「月下斬」

俺は黒い軌跡を描いた右手の木刀で切り上げながら月詠の木刀を両方とも破壊する。

そして左の木刀で月詠の体をとらえ、そのまま切り下げながら月を描くように木刀を振るう。

月詠 「があ?!?!」

吹き飛んでいく月詠……ぶっちゃけ、あいつはもう戦えない、完全に決まったしな。

にしてもだ、父さん怒るだろうな……俺の技って神鳴流としては異端なんだよ、だって魔を討つ剣技が魔を纏う剣技にしちまったんだから。

審判 「……ハッ!! 勝者、近衛夷」

夷 「黒式解除」

その言葉と共に全身の力を抜きながらいつもの自分に戻る、俺。

微妙な目で見る周りの神鳴流の方々、そして気絶してる月詠。

詠春 「まあいいでしょう、まったくでは約束通り彼女はこちらで預かります」

師範代 「あ、ああけれども、その女は……」

詠春 「……聞こえなかったのですか？」

あ、父さんキレてる、多少だが目が細くなってる。

師範代は父さんの雰囲気にも呑まれたのか、謝っていた。だせえ、まあいいや、俺も帰る「待ってくれ!!」なんだよ?

修行者 「なんだあの技は?! 神鳴流の技なのですか?!」

夷 「ぶっちゃけると現存する神鳴流を少しいじってみただけ」

修行者 「まるであれは! 妖怪の類の力ですよ?!」

夷 「ああ、だって妖力使っているしな」

その言葉で場が騒然となる、まあ当たり前か、サムライマスターの息子である俺が妖怪の力を使ってるのが面白くないんだろうな。

修行者 「それでも……それでもあなたは神鳴流なのですか?」

師範代 「所詮は捨て子か……」

詠春 「!!!?!?!?!」

あ、やばい、俺が抑えられない。

俺は木刀を持ったまま、その師範代の首筋に木刀を当てる、気ですでに殺傷能力抜群の性能になってるよ。

師範代 「なんの真似だ!!」

修行者たち 「『師範代!!』」

夷 「俺が捨て子？ どういうことだ?!?!」

なるべく混乱してるような声を出す。

まあ知ってるんだがばれてると父さんに悪いしな。

詠春 「ち、ちがう！ お前は私と桜の子供だ!?!」

師範代 「なんだ知らなかったのか？ そうだよお前は捨て子なんだよ！ 八年前に拾われた！ 近衛という神聖な名前を」

夷 「黙れよ？」

腕の骨を肘を入れて粉碎する。絶叫が師範代から放たれるが……俺の頭は冷水をぶっかけられたように冷たかった。今の一言が俺の怒りを爆発させた。

夷 「俺が捨て子？ それがどうした？ 俺は父さんと母さんの血を受け継いでいないのかもしれない。だからどうした？ この人は！ 俺の父さんだ！」

詠春 「夷……貴様名は？」

師範代 「はっ！ 私の名は長屋 鉄也です」

詠春 「破門だ、出ていけ」

鉄也 「はっ?! 今なんと?」

詠春 「破門だと言ったんだ、何度も言わせるな」

鉄也 「し、しかしその小童は神鳴流を、近衛を」

詠春 「薄汚い口で私の息子を侮辱するな！ それに八年前にも言っただろうが！！ 夷が成人するまでこの事は他言無用だと！」

あれ？ そんなのあったの？

鉄也 「し、しかし！！！」

詠春 「くどい、それに今の私は貴様を殴りかねないんだ、とつとと視界から消える」

うわー、本格的にキレちゃってるよ。なんか師範代の人なんか真白くなってるし、まあいいか。

俺はざわめく道場を後にして父さんの隣に立つ。

夷 「父さん……いや近衛詠春、話してくれるよね」

詠春 「ああ、この日が来るのがこんなにも早いなんて」

夷 「そういえば……一つ聞きたいんだが」

詠春 「なんだ？」

夷 「なんで俺が月詠をお姫様抱っこで運ばなきゃいけないんだ？」

詠春 「ああ、今日からこの子は家に住むからだ」

夷 「えっ？！！」

詠春 「あのアホ……まああそこの元師範代に言われてな、少し危険な子らしいが夷が使う黒刀によく似た技を使っらしいから、どうせなら勝ったら夷に見させよう」と

夷 「おい、ちょっと待てやこの野郎」

詠春 「すまない、こんなときにこんなことを頼んで」

拝啓木乃香、兄さんはまた厄介者を拾ってしまったよ、それも超がつくほどの厄介がな。

どうしよう、つうかこの流れだと……俺、近衛から両希に戻るのか？結構気に入ってたんだが……そうなると木乃香まで襲ってくるような気がする、なんか嬉々として俺に飛びかかる光景が目に見えかぶよ。ああ、やっぱり俺ってフラグ体質らしい。

京都の町はフラグでいっぱい（後書き）

作 「今回のネギラジオ！！ ゲストはこの方！！」

素子 「青山素子だ、よろしく頼む」

作 「さあ今回の話は……」

素子 「あの師範代切ってもいいか？」

作 「つつか、夷が好きな人たちが知ったら八つ裂きにされてもおかしくないこと言いやがりましたよ？」

素子 「その場にいたら、夷じゃなくて私がキレて殺したかもしれない」

作 「ええ、まったく」

素子 「それでだケフィア（作者）」

作 「なんででしょうか？」

素子 「なんでヒロインがふえてるんだ?!」

作 「い、イタ痛い痛い、アイアンクローしないで中身が出る!!」

素子 「私が夷の嫁ダアアアアアアアアアアアアアアアアああ!!」

作 「ちょ、これはしゃねに」

夷 「えー、今回を入れて後二話で年少編は終了させてもらいますが……その間に閑話を入れたいと思います」

夷 「えー、その閑話なのですが……皆様に内容をアンケートして書くものを決めたいと思います」

? 木乃香との出会いのときの話（赤ん坊時代）

? 素子と出会い話（同じく赤ん坊時代）

? 魔法使いとの戦闘（五歳）

? ゼクトとの修業編（五歳）

夷 「以上です、えー締め切りは後二話を更新するまでです」

作 「ありがとう、実は全部書こうかと思ったんだが……ぶっちゃけ無理」

夷 「あきらめやがった」

素子 「そろそろしめないか？」

作 「そうだな、それでは頼んだ!!」

素子 「次回、親の思いと新しい仲間たち」

作 「次回も」

親の思いと新しい仲間たち（前書き）

はい、今回も全然タイトルと内容がかみ合っていないません、俗に言うタイトル詐欺です。

感想はいつでもお待ちしております、制限は外してあるので誰でも気軽に誤字脱字、批判、ハーレムメンバーに入れてほしいキャラ、質問は常時受け付けております。

アンケートは継続中です、書き込んで下さい。

親の思いと新しい仲間たち

はろー、夷だ。

あのとんでもない捨て子カミングアウトから数か月がたった。変わったことと言えば、あの師範代は鶴子さんにボコボコにされ、偶然帰省していた素子の耳に入り二度と剣を握れない体になったそうだが、素子に何故と聞いたら、すごい黒い笑みで答えてくれました、昔の可愛かった素子はどこに行った？ 鶴子さんも本気で怒っていた、もう背後に鬼神が見えたよ、最強の神鳴流は伊達じゃないらしい。

まあ、その後俺は近衛の後継者から外された、実際に20歳になったら後継者候補から落ちる予定だったが予定が狂ったらしい、その後緊急会議でなんとか俺が捨て子だとだということと言う輩は排除……いや、粛清かな？ そんな感じで処分された、俺としてはそいつらの面に黒式・一の奥義「黒百合」でもぶち込んでやりたいが……すると手加減できないんだよな。

まあ後は月詠が家に来た事か？ ああ、前に魔族と言ったが間違いでどうやら鬼と人の子らしい、神鳴流の戦闘衝動と鬼の破壊衝動のせいで自分自身が制御できてなかったらしい、親は……神鳴流に殺されたらしい、幼いころにそんなことすれば壊れるに決まってるだろう？ まあ俺が力の制御を教えるが……小さい頃から無意識に使ってた妖力のせいで体が人間より妖怪のそれになってる。

だから考えた、どうしたらいいと。まあ考えた結果、あいつの力を封じること……なりませんでした。それだったら、もうあいつの戦闘衝動を抑え込むために黒式を教えた、まあ黒式であって黒式ではないから……妖式か？ 妖力の大半を封印し、三段階にリミッターをつけたら、結構あいつも落ち着いてきた……まあ母さんが実の娘みたいに接してるからかもしれないが年頃の女の子みたくなくなってきた、が！ 頼むから俺の風呂の時に入ってこないでくれ、布団に入ってくるな、拳句の果てにトイレを斬って入ってくるな。

まあそんなこんなで仲良くやってますよ、千草さんもたまに来て家で遊んでいきますよ、なんか月詠と仲が悪いらしいが……なんでだ？まあ恒例となってきた魔眼の強化状況　！！　まあこの頃は封印してるから変わってないはず……なんだがまあ死線が見えすぎて困る、魔眼を封印しても見えてきやがった。本格的に直死になってきた、幻術は使ったら、どこぞの写輪眼みたく相手の精神を破壊できたよ。まあこのぐらいか？　木乃香に事実を知らせるのは中学卒業だよ……家出ようかな？

月詠 「いくでー？　ざんがいけーん！」

夷 「まだ甘すぎるし、脇をしめるアホ」

月詠の斬岩剣を一本の木刀で受け止める、相手は太刀なんだがな。そのまま斬撃を受け流して、月詠の腹を蹴り飛ばす、結構厳しくやるがこいつの為だ、俺が見たってこいつらまだ原石、つまり磨けば光るし、埋もれれば輝きを失い、裏の道に行くだろう、一度面倒を見たんだ最後までやり抜く。

月詠 「うう、行けると思ってたんやけどなー」

夷 「俺の隙をバカ正直に当てにくるアホはいねえよ、これで三十回目の死だ」

月詠 「むう、夷はん少しは手加減してくださってもー」

夷 「二刀流じゃないことが手加減だ、それに実戦だったらお前は今頃八つ裂きにしてるは！！」

月詠 「はう、夷はんに八つ裂き、それはそれで……」

……うん、やっぱこいつ戦闘狂で変態だな、どうしよぶどうしやって
矯正しよう。

助けてつるえもーん！

鶴子 「……呼んだか？」

夷 「ね、姉さま?!?! どうしてここに?!?!」

鶴子 「ウチの弟子が心の中でつるえもんなんて、ふざけたことを
ほざきよるから来てしまったんや」

夷 「アハハハハハ、ナンノコトヤラーオレハソンナコトイッテマ
センヨー、アハハハハッハハ」

鶴子 「今日の修業は『鬼』で逝こうか？」

夷 「嫌ああああああああああああああああああああああああ
あああああ!!!」

月詠 「夷はんどないしたの?! って体がすごい勢いで震えとる
!!!」

ガクガクガクガクガク、一日中の鶴子姉さまとのリアル鬼ごっこ+
防御不能、武器使用不能のガチの鬼ごっこ、捕まれば強制的に女の
服を着せられ撮影会……今日は木乃香も素子も刹那も千草さんもい
るのに!!! ああ、そうそう千草さんも俺が女だと思っただらしい、
写真見せたら鼻血でてましたよ……月詠もだがな。

逃げる逃げる逃げる逃げる。なんか俺の生存本能が逃げ出そうとし
てるんだが……後ろに向きたくない、なんかとんでもないものを見

夷 「なぜ俺を？」

詠春 「最年少で神鳴流を修め、自己流の奥義すらあるお前を高く評価してるんだ」

夷 「つてあれは奥義じゃなくて種類のには秘剣なんだが？」

詠春 「……本当か?!」

夷 「一の技って言っただろう？」

詠春 「わかった、お前は本当にバグだなあ」

夷 「それはいいから任務を言えや」

詠春 「ああ、私の古い友人であるクルト・ゲイデルを護衛してもらいたい」

夷 「……クルト・ゲイデルってあの？」

詠春 「そうだ、私たち赤き翼の政治担当のメガロメセンブリアの元老院議員の一人で、オステイア総督だ」

夷 「確か一人で政界に入ったんだっけ？」

詠春 「ああ、戦いしかできない私たちのために蛇の巣に入ってた友達」

クルト・ゲイデル、確か大戦中は父さんたちと戦った一人で現在はメガロメセンブリアで……いや、もう一人の英雄であるゼク

トと呼ばれる人と一緒に頑張ってるらしい、あれ？　ゼクトってどこかで？

まあ一時は暴走して一人ですべてやろうとしたが……両義式が止めたらしい、まあそうだろう、ひ弱な少年がどうしようも何もならな
いだろう。

夷 「いつだ？」

詠春 「あと一か月後、それまでに刀の整備、魔法の訓練をしてお
け」

夷 「知ってたのか？」

詠春 「これでも見分けることぐらいはできるさ」

夷 「わかった、近衛……いや別の名で言った方がいいか？」

詠春 「お前は今も昔も私の息子だ」

夷 「……近衛夷、その任務しかと了解しました」

……初任務だ、武器は……あれを使おうかな？

対魔法使い用の銃器、魔法銃『ジエフティ』と『アヌビス』を使う
か、黒と白のハンドガンだ、口径は十三ミリだが魔力弾で威力は自由
に変えられることができる。まあ名前でわかる人もいるだろう
が……いやーあれは十週くらいはプレイした。

装備としては銃に、ヒヒイロノカネで鍛えた刀と同じくヒヒイロノ
カネで鍛えた小太刀でいいか？　一応、黒の仮面と黒のコート（魔
力障壁あり）も持っていくか？

詠春 「一つ言っておく、死ぬな……絶対だ」

夷 「ふん、俺を誰だと思ってるんだ？」

俺は天に右手を指しながら言い放つ。

夷 「俺はサムライマスター、近衛詠春の息子だぞ？」

|||||一か月後

展開はええと思う人、感想に書いておいてください。

何言ってるんだ俺は？ まあいい今は東京の羽田に来ているんだが…

…まったくくる気配がない、今の俺の恰好は黒のコートに黒のズボン、そして念のためのコートの下には魔法で縫ったシャツを着て、腰には見えないように銃をホルスターに入れている。

夷 「……遅いな？」

にしても遅い、一時と言われたが二時になっても来ないなんて……なんでもイギリスのゲートから来てるらしいが……そろそろ周りの撮影会もなんとかしてほしい、俺は男だ、女じゃない。

レポーター 「えー、速報です！！」

なんか焦ってるがどうしたんだ？

レポーター 「現在！ イギリス、ロンドン発羽田行のジャンボジエットがハイジャックされました！！」

夷 「は？」

それは俺の護衛対象が乗っている飛行機がハイジャックされたニュースでした。
護衛されてる前に襲われちゃ無理でしょ。

夷 「仕方ないなあ」

俺は転移してある場所に向かった、場所はもしもの時に作っておい
た俺の秘密基地がな。
行くか？

||||| クルト視点

油断しました、まさか魔法関係者に裏切り者がいるなんて。
最近公務しかやってないですし……勘が鈍りましたか？

男1 「手を上げる、絶対変なことをするなよ？」

こいつが仕掛けてきたのは今から一時間前、すでにパイロットは拘

束されてそこにも二人ほどの魔法使い……いえ、傭兵でしょう、こちらは非戦闘員である秘書が一人、そして今杖を構えてるのは二人組の魔法教会から送られた護衛だった奴ら……こちらの不利が明白ですね。

まったく師匠に油断はするなとあれほど言われたのですが。

クルト 「なぜこんなことをするのですか？」

男1 「ふん、我らの恨みは深いのだよ。赤き翼」

クルト 「そうですね、あなたたちは……大戦中に」

男1 「そうだ、俺たちは静かに暮らしていた。そこに赤き翼が魔法で破壊の限りを尽くしたんだ！」

クルト 「……私たちは虐殺などしていませんよ？」

男2 「嘘をつくな……、貴様らが我らの村を破壊し尽くしたんだ……！」

クルト 「いったい誰が?!?!」

男1 「両義式と言う男だ」

それこそありません、だって師匠は大戦中には一度も死者を出してませんしね。

あの人の顔写真はないんですよね、ピエロのような仮面をかぶっていたのですから、まったく終戦後の式典にすら黒のコートすら脱がない人でしたから。

クルト 「どんな容姿だったのですか？」

男1 「中年の男だった、奴が、奴が!!」

……えー、それ師匠じゃないですよ？ 師匠は最初はわたしでも女
と見たほどの女顔でしたから…… 中年ではないですし、二十代後
半ですよ？

男2 「貴様に直接の罪はないが……ここにいる乗客と共に死んで
もらうぞ？」

クルト 「なっ?!?! 彼らに罪はないでしょう!! 即刻私だけ
殺しなさい!!」

男1 「貴様にも味わってもらうぞ？ 大切なものが奪われる瞬間を
!!」

まずいですね、このままでは交渉すらできない。すみませんアリカ
様、ナギさん、あなた達の汚名だけは拭いたかった、しかし師匠の
『闇の福音の賞金を解除しておけ』と言う伝言は守れましたし、も
しもの時の人材もいますし……まさか赤き翼での最初に死ぬのが私
なんてね、すいません師匠。

男1 「しかし、お前はここで殺す!! くらえ!! 魔法の矢
!!」

次の瞬間、私の体に魔法の矢が突き刺さりました、全身にです。

これは……致命傷だ。助からないでしょう、タカ……ミチ、師匠、
ナギさん、アリカ様……すみません、これが私の限、界のようです。
魔法世界を、みんなを、救いた

？ 「なら伸ばしてやるよ、ハイパークロックアップ！」

Hゼクター（ハイパーゼクターの略） 「HYPER CLOCK
UP」

なぜかその時、師匠の声が聞こえた様な気がしましたが私は意識を闇に覆われ、最後まで確かめられませんでした。

クルト・ゲードル死亡。

||||| 夷視点

現在俺は秘密基地……ぶっちゃけると麻帆良に作った俺専用の部屋だ。

まあ誰にもばれてないだろう、いつも危険な作業はここでしてる、今何をしてるのか？ 決まってるんだろ、転送装置でジャンボに直接転送するんだよ。

夷 「スーハースーハー、転送！！」

少しでもミスったら体がジャンボの外壁にぶつかってスプラッタなことになるだろうなあ、と考えながら転送する。

ちなみに転送機械はロックマンゼロのを参考にさせてもらってる、あれはよかったよ。

そんなことを考えてるうちに景色ががらりと変わり……なんとか飛行機の中に転送できたようだ……今のうちに。

夷 「変身」

ゼクター 「HENSHIN」

ベルトを着けて、ゼクターを装着させる。

カブトになっておけば不測の事態はクロックアップできるしな、さてゼクターホーンを左手で右に少し倒して……電流が上半身の装甲を巡り、装甲が浮き上がる。そして完全にゼクターホーンを右に倒す。

夷 「キャストオフ」

ゼクター 「CAST OFF」

上半身の装甲が飛び散り、顔のカブトホーンが立ち上がり複眼が青く光る。

ゼクター 「CHANGE BEETLE」

夷 「さあ、まずはパイロットたちを解放するか？」

ゼクター 「CLOCK UP」

クロックアップですぐに飛行機の操縦席を目指す俺、どうやら乗客

には危害を加えないようだ、だって見張りがいないが……念のため
結界で出たらわかるようになってるのか？

そして人間が反応できないスピードで操縦席まで行く俺、まあクロ
ックアップは最強だったなあ、速度的には全ライダーで一番だと思
うしな。

そう考えてると操縦席につく、見張りの傭兵らしき男二人が銃を構
えて操縦者を脅している。俺はクナイガンでクナイモードにする
と、イオンビームで構成されているクナイカッターで銃を輪切りにカッ
トしてやる。

銃はゆつくりとだがズレおちていく、すかさず両方の腹にストレー
トを打ち込み内臓の一つか二つくらいを破裂させる、大丈夫だ、き
ちんと処置すれば助かる、そして魔法で作った縄で捕縛する。

ゼクター 「CLOCK OVER」

夷 「操縦者の方々」

操縦者 「君は?!」

一瞬で変身を解いて、操縦者に話しかける俺、まあ後ろ向いててく
れて副長が気絶してくれたのが助かった。
まああげがはなさそうでした。

夷 「えーと、この乗客のある人物の護衛をしてたんですが……」

操縦者 「あのクルトとか言う奴か？」

夷 「そ、そうです!」

嘘は言ってない、が護衛はしてなかったがな。

まあいいやクルトの場所を聞かないとなあ。

夷 「クルト様はどこに？」

操縦者 「奴らの話じゃ、貨物室に閉じ込められたらしい。でどうする？」

夷 「助けに行きますよ」

操縦者 「バカ言つな、子供を一人で」

夷 「それより操縦桿！ 操縦桿！ 落ちてる落ちてる！」

操縦者 「……やつちやたZE」

夷 「とつとと操縦しろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！」

まあ途中でいろいろあったがなんとか貨物室まで来ましたよ、乗客の皆さんには事情を説明してなんとか落ち着いてもらったよ。まあ幻術をかけて軽く俺を二十歳に見せて信じてもらった（なんか女性も男性も興奮してたんだが？）

まあ貨物室に行く前にもう一度変身しておいた。

夷 「……さあ、クルトは？」

男1「しかし、お前はここで殺す！！ くらえ！！ 魔法の矢！」

まずい！！ 魔法の矢だと？！ つつかクロックアップでも間に合
わねえ！！

……使うか、あれを

夷 「ハイパーゼクター」

Hゼクター 「HYPER CAST OFF」

俺はHゼクターをベルトの左側につけ、ゼクターホーンを倒す。
するとHゼクターからの電子音が鳴り響き、カブトの装甲が変化し
ていく。全身の装甲がヒビロノオオガネからネオヒビロノオオ
ガネに変わっていく、装甲に銀が混ざり装甲が一段階厚くなる。全
身のアーマーが内部にタキオンプレートを収納した、以前の6倍以
上の強度を持つカブテクターに再構成される。

Hゼクター 「CHANGE HYPER BEETLE」

夷 「……あんまり使いたくはないが」

誰かが言ってたな、伸ばして届く手を伸ばさなかったら一生後悔す
るって、たしかそう言ってたような気がする。……誰だったかな？
確かメダルを使うライダーの言葉だったような。

夷 「なら伸ばしてやるよ、ハイパークロックアップ！」

俺はHゼクターのスラップスイッチを押し、ハイパークロックアッ
プに入る。

Hゼクター 「HYPER CLOCK UP」

まず胸のカブテクターが開き金色の装甲が露わになり、次に肩のカブテクターが開き、腕のカブテクター、足のカブテクターが開く。最後に背中のカブテクターが開き背中からタキオン粒子が一気に放出される。カブテクターを展開し、大気中や真空中を自由に飛行でき、従来のクロックアップ以上のスピードでの移動や過去や未来・異空間を自由に行き来できる「ハイパークロックアップ」を使用可能なハイパークロックアップ形態になるハイパーカブト。

そして俺はいったんその場から消失し過去に行く、あまりのスピードのせいで過去にすら行けるハイパークロックアップ、反則級である意味これは時間移動であり、さらに悪く言えば俺は歴史すら操作できる力を持っている。

夷 「(だから使いたくはないんだ)」

過去に戻った俺はクルトに向かってる攻撃をすべて弾き……歴史を変えた。

クルトからすれば、何もない空間から誰かが出てきたように見えるだろう。

夷 「無事かい？ クルトさん？」

クルト 「君は……？」

夷 「俺か？ 俺は……」

本名使うのはまずいよなあ、どうしようか……うーん。

適当に言うかな。

夷 「俺は……黒^{クイ}とでも呼んでくれ」

クルト 「ヘイ？」

夷改め黒 「ああ、さてと……」

俺は驚いている魔法使い二人組を見据えて俺は右手を天に指しながら、語録を言い放つ。

黒 「おばあちゃんが言ってた。まずい飯屋と悪が栄えた試しはない。とな……」

クルト 「なっ?!?! し、師匠?!?!」

なんか後ろのクルトがうるさいだが……まあいいや。

魔法使いもなんか再起動してきたしな、さあ始めようか。

男1 「我らが悪だと?! ふざけるなあ!! 我らの恨みは、正当な復讐だ!!」

夷 「復讐に正当も糞もあるか!!」

男2 「我らにはこれしか……これしか残ってないのだああああああああああああああああああああ!!」

男1 「行くぞ! ライ・ラ アヴェン・スキル フール! 魔法の射手! 火の三矢!!」

男2 「……リラ・リ アヴェン・スキル フール、魔法の射手
光の三矢!!!!」

魔法の射手が向かってくるが俺はこぶしを振るううだけでその攻撃
を消す。

男たちは絶望を顔に浮かべながら、次の魔法を放とうとするが……
させない、確かに俺も復讐者だ、この八年間俺を実験した天使を殺
すだけの力と木乃香たちを守る力が欲しかった。それは俺の本心だ
し、人は復讐するものだ俺は思っている……だが!!

夷 「関係ない人まで巻き込むな!!」

Hゼクター 「HYPER CLOCK UP」

俺はもう一度ハイパークロックアップをして、男たちに近づき杖を
手でへし折る!

そしてHゼクターのゼクターホーンを倒しチャージアップをする

Hゼクター 「MAXIMUM RIDER POWER」

Hゼクターからタキオン粒子が上半身に巡り、金色の装甲……タキ
オンフラッシュが発光する。そして俺はゼクターのフルスロットル
を押していく。

ゼクター 「OWN , TWO , THREE」

そして俺は右手でゼクターホーンを持ち、左手でゼクターの本体を
持ち一度マスクドフォーム状態に戻す、そしてタキオン粒子をチャ
ージしながらつぶやく。

黒 「ハイパーキック!!」

ゼクター 「RIDER KICK」

再度右手でライダーフォームの位置にゼクターホーンを戻すとチャージアップしたHゼクターのタキオン粒子とゼクターの粒子がカプトホーンに集まる、青い複眼が一度光り、チャージアップした粒子はカプトホーンから右足に集まる。

Hゼクター 「HYPER CLOCK OVER」

男1&2 「「な?!?!」」

黒 「恨むなら恨め、でも俺は……」

飛び上がりながら俺は右足を男たちに向けて振る。
恨まれたっていい、けど……

黒 「仮面ライダーだあああああああああああああ!!」

男1&2 「「うあああああああああああああ?!?!」」

二人の顔にまあ……蹴りをいれたんだが、まあ普通にやったら二人とも原子崩壊して消滅しまうからな、リミッターはつけておいたからしにはしないだろうが……死なないはずだ、試したことないけどなあ。

クルト 「……彼ら生きてます?」

黒 「……多分な」

詠春 「ああ、なんかクルトがな、今回の件で調査に乗り出したらしい」

夷 「……つまり結果だけ言ってくれないか？」

詠春 「任務失敗だ」

ポクポクポク、チーン。

夷 「絶望が俺のゴールだ」

どうしよう、どうしよう！！ 初任務だから……任務のついでに木乃香に会うって約束しちまつたし、なんかアスナと真名が会いあたってると言われたからお菓子とか（影の倉庫）持ってきたのに！
！ や、やばい。

詠春 「正直すまない、気を付けて帰ってこい」

夷 「アハハハハ、トウサン、ムスコハキツトブジニカエツテクルヨ」

多分な……とりあえず木乃香の携帯に連絡をしないとなあ。
コールして一秒もたたずに出てきました。

夷 「あ、ああ木乃香か？」

木乃香 「あ、えびにい？ どうしたんや？」

夷 「じ、実はですね」

木乃香 「もしかして来れなくなった、とか言わへんよな？」

メキリと何かが砕ける音が……、お兄ちゃんはお前の将来が本当に心配です。

握力がハンパねえ、威圧感がやばい、背中から冷や汗が止まらないのだが？

夷 「……そうなんだ」

木乃香 「そうなん」

あれ？ 結構冷静だ！！ これなら押し切れる！！
そう思っていた時期が俺にもありました。

木乃香 「今、えびにいのところに行つとるから」

夷 「ナンダツター？ アハハハハ、コノカサンザツオンガヒドク
テキコエナイヨー」

なんか後ろから威圧感が……逃げなきゃやばい、なんか肉食動物に取り囲まれてる小動物の気分だ。向きたくねえ、なんか周りの客が逃げ出してんだが……。

木乃香 「ほらすぐ後ろに……」

夷 「アハハハジョウダンキツイゾー？」

そして肩に置かれる手、振り向くと後ろに魔力で具現化した鬼神が……嘘だろう、オイ。

怒りが魔力を制御したとでもいうのか？！

それは俺にとって、最高の依頼だった。

親の思いと新しい仲間たち（後書き）

作 「今日の！！ ネギラジオゲストは！！！」

千草 「ウチこと、天ヶ崎 千草や！！」

作 「今回カオスがひどかったですねえ」

千草 「あんたやる？ やったの？」

作 「……勢いでやった、けど後悔していない（キラ）」

千草 「まあナイスや、ウチはお代官様ごっこができただけでも…

…」

作 「うちのヒロインにまともな奴はいない」

千草 「というか今回のハイパークロックアップはチートやなあ」

作 「まあ、そうですねえ。劇中でも本来は爆散するはずだったガ
タックを助けたしなあ」

千草 「ウチの父様と母様も助けられんじゃ……」

作 「……本当にそれでいいのかと」

千草 「なんでや?!?!」

作 「気に入らないから過去に戻ってやり直して……それでいいの

かと
「

千草 「作者はん？」

作 「誰だつてやり直したいことはある……俺だつてあるぞ」

千草 「すみません、無理なことを言ってしまうつて」

作 「まあ次回で一度区切る」

千草 「うちの出番は？」

作 「当分なんじゃないかなあ？」

千草 「猿鬼、熊鬼、頼んだでー」

作 「さっきまでのシリアスは」

クマーー！！！！

お前つてそんな鳴き声するの?!！ それにお前はさ ウアアア
アアアアアアアアアアアアアアアア!!！！

作者復活中

作 「そろそろしめてくれ」

千草 「はいな、じゃあ次回、迷いのEノまたいつか……」

作 「次回も!!！！」

千草 「見へんと式神でぶっ飛ばしたる！」

夷 「あー、つかれたー」

作 「おお、いいところにこの前のアンケートを再度呼んでくれ」

夷 「えー、まあいいか。えー、ではこの四つの中から選んでください」

? 木乃香との出会いのときの話（赤ん坊時代）

? 素子と出会い話（同じく赤ん坊時代）

? 魔法使いとの戦闘（五歳）

? ゼクトとの修業編（五歳）

夷 「締め切りは次の更新までです、今回は5日くらい期間を開けるので皆さんどうかこのダメ作者に感想をあげてください」

作 「それではみなさん次回まで」

作&夷 「「サラダバー」」

依頼と過去と吸血鬼（前書き）

すみません遅くなったのにこんな低クオリティ&タイトル変更……
まことに申し訳ない。

キャラ崩壊、原作ブレイクどんとこいやー！！ が大丈夫な方はそ
のままお進みください、嫌な人は戻ってください。

それでは年少期最後の話の始まり始まり〜。

依頼と過去と吸血鬼

に「はあ、夷だ……ああ、駄目だなんか気分が乗らない。

前回から数週間がたった、あの任務の失敗を笑う奴もいたが……護衛する前に襲われたんじゃ俺のせいではなく魔法教会に文句を言うべきだろ？ まあ俺は怒らないが……姉さまが怒るから嫌なんだがな。

正直有象無象の奴らなど眼中にない、俺の剣技……まあ黒刀だな、あれは危険だと言って独断で神鳴流の師範代クラスが十人がかりで挑んでこられたときはびっくりした。まあその時月詠の修業中だったので一緒に倒したが……、結構危なかったと言っておこう。

まさか恥をかいてまで俺を殺しに来るなんてな、その時傭兵の魔法使いを雇ってきたんだが……魔眼使ってしまったな、まあ結果だけ言うと父さんたちにはばれた。師範代たち？ 殺さなかったよ、月詠に相手した一人は死にかけてけどな、普段の狂気をふんだんに出してたよ、この頃は母さんに怒られないために出してないからなあ。月詠も強くなつたし、多分今なら俺に一太刀くらいは入るんじゃないか？ そのくらいには強くなつた。鬼だから力も強いしな。

……問題はあの任務が終わって木乃香たちに逃げていた時のことだ。あれはびっくりした……。

「……数週間の大坂駅」

夷 「ハアハア、何とか逃げ切った」

いやー、まさかアスナと真名が追ってくるとは……つうか二人とも

今の俺じゃ倒せないくらい強いんだが?! あの歳であればすごいなあ、って俺も同年代か。

まあアホな事考えないで家に帰ろう、うー任務失敗とか、アホな奴らに陰口叩かれるぜ? まあいいが。

? 「すまんの、その若者」

夷 「あ、俺?」

? 「そうじゃ、少し荷物を持ってくれんかの?」

夷 「あ、はいはいこれでいいかな?」

? 「ああそうじゃ、この荷物じゃ」

俺が持つのはハンドサイズのバック、まあ老人をいたわるのは当たり前だよな。そういや二次創作だと老人をいたわって……いやいたわっていた、はず。

? 「ふう、久しぶりに来たから疲れたわい」

夷 「大阪にですか?」

? 「いいや? 違うよこの世界に、だ」

な、なんだと? 俺は影の倉庫から妖刀・怪を取り出さそうとする、認識障害の結界はもう張ってある、しかし老人はなんの反応も起こさない。

それどころか影からの武器転送ができない。

？ 「落ち着け、ワシじゃワシ」

夷 「誰だ……ワシと言われてもわからん」

？ 「そうか、この体を借りておるからな、どこか座れる場所は……
…おおあつた」

老人は背中に手を当てながら優雅に歩いていく。

俺は魔眼を発動させると……啞然とした。その体には世界樹よりも濃密な神力、そして純粋な神力が巡っていた、化けもんか?!
勝てる気がしない。

？ 「そう気張るな、夷君」

夷 「夷君？ ……まさかあんたは?!」

神 「久しぶりじゃな、夷君、神じゃ」

俺をこの世界に送ってくれた神様だった。なぜ地上に降りてきたんだ?!

夷 「お、お久しぶりです！」

神 「もうちょいフレンドリーで行こう、まあ今日はそんな雰囲気じゃないんだがの」

夷 「……そう言えばあんたに聞きたいことがあつた」

神 「ルシフェル奴のことか？」

夷 「なら話は早い、どうしたんだよ?! あいつは封印したんじゃない!」

神 「……奴はな、ひとつだけ力を残していたんじゃないよ」

夷 「な?! 確かあんたはすべて奪ったと」

神 「そのつもりだった、しかしあいつはお主の能力をコピーしてたんじゃ」

夷 「俺の……能力?」

神 「……外す能力」

夷 「外す能力?」

神 「そうじゃ、なんでも外す能力……まあ攻撃などは無理なようじゃがな、鍵やロック、電子ロックすらなんでも外す能力」

夷 「実用性のなんもねえよ」

神 「いや、今回はその能力がキモじゃ……奴はお主の外す能力で封印を外したのじゃ」

夷 「神がやった封印だろ? 俺でも外せるか……」

神 「今のお主なら力技でも外せるわい」

俺って、トコトン人外だろ?! 神だぞ、神の封印を力技ってどうなんだよ。

俺が頭を抱えながら悩んでいると神様はため息をつきながら俺を見る。

神 「まあいいが……お主に頼みたいことがある」

夷 「なんだ？ あんたの頼みならなんでも聞くぞ？」

神 「そうか、なら頼みたい」

真剣な表情で神様が見据える……いったいどうしたんだ？

神 「墮天使ルシフェルの殺害を依頼したい」

夷 「……俺が殺害するのか？ あんたがやれば簡単じゃないか」

神 「これでも神でな、奴のせいで天界に魔獣が現れてな」

夷 「で……この世界のイレギュラーである俺に頼むと」

神 「ああ、お主にかかっておる制限はすべてとる」

夷 「リミッターを？ やめてくれ爆散したくない」

そう昔だが本気だすとどうなるのか試してみたら……体が爆散した、いやあ俺って本当に不死だったんだね、体が細胞レベルで再生してたよ。

気持ち悪かったがなあ、内臓がくつつくところとか。

神 「ああ、神力の制限解放、リミッター外した時の自爆、妖力の解放などじゃな」

夷 「……ちよつと待て、自爆つてなんだ？ 自爆つて！！」

神 「……さすがにワシら神以上の力をつけるとは思わなかったんじゃない」

夷 「……神力の解放つて、俺は神力は使えるぞ？」

神 「……人間じゃないじゃろ、お主」

夷 「褒めてるのか？ 俺は昔から人外だぜ？」

さらに現在進行形で神の神力を見稽古で見てるからどんどん扱い方がわかってくる。

……正直コレの本来の持ち主が健康でどんな力にも耐えられたらと思うと……ゾツとするな。

神 「本来神力とはな、肉体の能力を最強まで上げるものなんじゃ……じゃがお主は身体能力は人間より上じゃが……妖怪などには力負けするじゃろ？」

確かに昔、鬼と戦ったときも力負けしてボコボコにされたがな。

神 「ワシが制限をとればお主の魂は上位になるじゃろ」

夷 「上位？」

神 「ああ、ワシら神がいる領域までな」

夷 「……であれだ頼みつて殺害だが、どこにいる奴は？」

神 「この世界の約十数年前じゃな」

夷 「……おいおい、ふざけんなその時期って戦争おっばじめてるぞ？」

神 「そうなんじゃ、この世界の正史が塗り替えられると……下手をすれば消滅する可能性もあるのじゃ、この世界が」

夷 「……どうすればいい？」

神 「ハイパークロックアップで過去に行き、奴を殺してくれないか？」

神は頭を下げながら俺に懇願する……けれど。

夷 「俺が過去に行つて、木乃香たちは？」

神 「ハイパークロックアップの能力を過去に行つたら封じさせてもらつ」

夷 「なぜだ?!」

神 「その時代にはワシの力を介入させていない、つまりお主が気に入らないからハイパークロックアップで変えると過去の改ざん……つまりお主たちの言葉を使うとタイムパドックスの可能性があるのじゃ」

……たしかにな、それは一理ある。

俺は封印を決意し、神に連れられて天界に上つて封印解除をした。

神 「行くぞ？」

夷 「どんとこいやあああああああ！！！」

神 「エロイムエスサ……」

夷 「それやばい、いくらなんでも！！！」

神 「封印解除！！！」

次の瞬間、俺の体に神力が通り何か破壊される音と共に全身から神力が噴き出す。

あまりの量に俺も神もびっくりする。

神 「お主……ばぐと言う奴か？」

夷 「まさかここまでとは……六歳から訓練してたしなあ」

神 「まあいい、これでお主の黒式の妖力総量も上がり、最後のアしもできるようになった、ぶっちゃけると今のお主はさっきまでの三十倍以上の力を持っておる」

夷 「俺はどここのネイキッドなブラボーな目標になっちまったんだよ」

ちなみにブラボーな目標は……まあアヌビスをやった人ならわかるだろう？ ジェフティのことだ、あれ後半が化け物過ぎて笑った、まさかゲイザーで落とせるなんて……バイオラなんてシールド破壊できて数発で終わるとか……。

も吸収できるようになったよ……うわー、タカミチとかの天敵じゃね？ 分解はついに古代魔法もできるようになったよ、きつかった。霊体感知なんて……まあクリアになった分、呪術の使う悪霊も見えてるから事実上呪術すら俺に効かない。最後に幻術だが……質感出せるようになった、微妙とか思う奴手を上げる、魔法の射手をぶち込んでやるよ。質感出せるってことは……全くの本物みたくできるわけで変装がしやすくなった。

まあ身体能力もさらにリミッターかけたよ、だって手を振るだけで岩を砕き、蹴りだけで地面が削れるなんて……なに？ 俺Z戦士になったの？ 今なら地球われる自信がある、アラレちゃんみたく。まあそんなこんなで最初に戻るんだが……どうしよう、過去に行ったら父さんにあう可能性が……！！

まあ俺はその時、まだ気づいていなかった。俺が過去に行くことが正史なんてことは……。

||||| 数か月後

夷 「麻帆良よ……私は帰ってきたあああああああああ
！」

木乃香 「えびにい、うつさい」

夷 「な、んだと？ これが妹の反抗期か？！」

木乃香 「ちゃうわー!!」

イテええええええええ!! どっかからハンマーだした?!
暗器使いもびっくりな武器収納テクだよ!! ああ、ちなみに今日
は木乃香がちゃんと学校生活を送っているか、わざわざ授業参観に
来てみた。

夷 「せっかく兄が関西からお前と刹那の成長を見に来たのに!!」

木乃香 「……むう、ほんまえびには心配性や。ウチは平気やつ
て、真名ちゃんやアスナもおるし、せっちゃんだって居る、素子姉
さんもや」

夷 「……それならいいが、まあ今日は泊まるしな」

ちなみにじいさんの家にだが……あっちもデカかった、アニメでよ
く見る豪邸ってやつだったよ。家政婦さんとか居たし……本当にじ
いさんが学園長だと思うよ。
さて今日は……麻帆良の観察にも来ている、どこまでの警備がで
きているのか。出来ていないのか、それを見切る。

木乃香 「じゃあえびにい、今日は頼んだで?」

夷 「ああ、お前も刹那に秘密にしたんだろうな?」

木乃香 「大丈夫や、今日来るのはお父様のはずやからな」

クククク、素子や刹那がテンパるのが楽しみだ。

……しかし俺はまだ気づいていない、木乃香のクラスがどれほどカ

オスかということをし！

||||| 授業参観の時間（五時間目）

大人にまぎれて移動する俺……場違いだなあ、服装は黒の服装なんだが……ちなみに黒コートはいつも俺が任務の時に着てるやつだ。

タカミチ 「じゃあ、みんな今日は授業参観だから頑張ろうね」

わーわー、きゃーきゃー、めっちゃ元気や。アカン、なんか言語が崩れてきてる。

つつか元気すぎるだろ？ よくタカミチは面倒見きれいな。

タカミチ 「元気がいいね、じゃあ入ってきてください」

俺は一番最後に入るつもりだ……ふふふ、待ってるよ？

そして俺の前の……あれー？ この人確か明石教授？！ なにしてるの？！

刹那 「え、え？！」

アスナ 「式い？！」

真名 「（ガタガタガタ）嫌だ、私はまだ死にたくない」

？ 「あ？！！ 式アル！ 戦うアル！！」

？ 「くっ、なんで貴様はこういう予想外な展開で出てくる！！」

？ 「あれ？ 式兄さん？」

タカミチ 「夷君……」

夷 「なんかわからんがすまん、授業を続けてくれ」

なんか四方八方から視線を感じるんだが……なぜ？ ここにいる奴らに知り合いは刹那、木乃香、アスナ、真名、タカミチ以外だと明石教授くらいしか……。

？ 「式さん?!?!」

って明石教授の隣にいる方ですか……そうですか。つうかなんか今日は……嫌な予感が。

夷 「と、とりあえず始めてくれタカミチ先生」

タカミチ 「あ、ああわかってる」

騒然とするクラスの中授業は始まる、なんかドッキリが成功しすぎて刹那いじる時間がなかったよ……それとその女性、幽霊視るよ。うな目で見えるな、あんたも魔法関係者か？！

そして授業が終わる……なかなか良かったが、一つ言わせる。

夷 「……明石教授、その方は？」

明石 「ああ、私の……」

？ 「式さん？ しゃべり方違くないですか？」

明石 「この子は式さんではなく、近衛夷くんだ、夕子。すまない私の家内だ」

夕子 「え?! 嘘」

夷 「初めまして、近衛夷です、妹がお世話になっております」

夕子 「ご、ごめんなさい、知り合いに似てたもんで」

……またか、あのくそ野郎!! こりゃあ、過去行ったら腕の一本や二本はもらうぜ?

つつかいつの間にか周りに人が!!

? 「式、式アルね、戦うアル!!」

夷 「誰だ?! つつか女の子がそんなこと言うな!!」

木乃香 「えびにい落ち着いて、くーふえもそんなこと言ったらアカン、えびにいの剣術でぶった切られてまっよ?」

夷 「兄さんは悲しいです」

古 「兄さん? え、じゃあ木乃香が前から言ってた……」

? 「おい、お前は式じゃないのか?!」

アスナ 「そ、そうだった」

真名 「ふう、本当に死ぬかと思った」

？ 「え？ 兄さんじゃないの？」

夷 「一度にしゃべるな、それに俺は木乃香の兄だし、君の兄ではない。それに俺の名は近衛夷だ」

木乃香 「そうやで、エヴァちゃんにくーふえ、裕奈、それにこれはウチの兄様や!!」

エヴァ 「え、夷？ じゃあ式じゃないのか？」

夷 「何度も言うが違うからな?! 俺は夷だ」

裕奈 「うっ、けど兄さんにすごく似てる、顔とか服装とか」

夷 「ああ、そうかそいつとはいいお茶が飲めそうだ（いつか殺す）」

エヴァ 「というかお前は男なのか？」

ピシリとクラスの空気が固まる、つつか全員（クラス全員＋保護者）が固まる。

こ、コイツラコロシテイイカナ、カナ？ 自分でもわかるほど殺気があふれ出ている。

一部の方々がガタガタと震えているが……少し頭冷やせ。

夷 「ああ、男だよ？ こんな顔しても男ダヨ？ ダカラダマロウカ？」

エヴァ 「（ガタガタ）こ、こいつ式だ、式だ」

エヴァ 「ハアハア、あ、あいつに着せるようだったがここまでとは……」

夷 「み、見るなああああああああああ！！」

夕子 「ハアハア……はっ！！」

木乃香 「兄様ファイルに収納決定や」

刹那 「え、えーちゃん（鼻血が溢れている）」

？ 「（ご先祖様がこんなとは……なんていうことネ）ぼそ」

裕奈 「兄さんが……これはいける！！」

夷 「なにが?!！」

古 「……かわいいアル」

アスナ 「し、式じゃない、式じゃないから食べちゃダメ、食べちゃダメ」

真名 「……（大量出血により気絶している）」

タカミチ 「……なんだこのカオス」

クラスの大半が鼻血を出してぶっ倒れてるんだが？ つつかそんな目で俺を見るなああああああああ、ちなみに俺の恰好はメイド服（黒）スカートが短いぞ！！……そうじゃなくてええええええええ

ああ、そういえば刹那は俺たちの前なら完全に京都弁になってきたよ。
噛み癖はあるが……、素子はなんかこっちのしゃべり方が気に入ったそうだ。

夷 「まあ他人のそら似がこんなに続くとは……」

素子 「しかし両義式か……一度斬り合ってみたいこともない」

刹那 「ウチもや、えーちゃんとどつちが強いんやろ？」

木乃香 「今はいいやろ？ みんなでご飯食べに来てるんやからな」

夷 「まあそうだな、じいさんの好意を無駄にはできない」

木乃香 「せやな、おじい様の好意は無駄にしたらアカンし、えびにいはおじい様大好きやもんな」

夷 「……あの人には感謝してるしな」

木乃香 「兄様？」

夷 「さあ食べようかー！」

そうやって夕食を食べる、木乃香が怪訝な顔に、刹那はキョトンとし、素子は微妙に顔を歪める。……俺は

夷 「さあて、木乃香の部屋に来てみたんだが……すまんなアスナ」

アスナ 「いいよ別に見られて困る物はないもの」

夷 「……あつたら困るんだがな」

木乃香 「えびにい、今日は泊まっていくんやろ!」

夷 「ああ、それがどうかしたのか?」

木乃香 「うちの部屋で泊まらんか?」

アスナ 「ブーーーーー!!!!」

アスナが飲んでたお茶、噴射したぞ? つつか俺は男だぞ?
泊まるなんて無理だ!!

夷 「悪いが……俺は泊まる場所はあるんでな」

木乃香 「えー、アスナもええやろ?」

アスナ 「え?! い、いやでも……」

夷 「……俺は行くぜ?」

そのまま部屋を出ると後ろから呼び止められるが無視する。
早く寝たいんだ。

それに……お客さんのご到着らしい。

夷 「……まあ、妹の居場所を守るのも兄の仕事だな」

||||| 三人称視点

魔法使い 「ようやくだ、ようやく麻帆良に着く」

男はボロボロの服を着ながらそうつぶやく。体は傷だらけで歴戦の戦士だとわかるが……気配が全くない、まったくだ。

魔法使い 「近衛近右衛門……今すぐに殺してやる」

超隠密用の魔法を使っているらしく、気配が全くないが……一部の強者にはバレバレであった、今泳がしているのもそれほど強くないからである。

しかし男はそんなことも知らずに進んでいく、まだ外に出ている生徒がいるが……男には関係なかった。ただその目は狂気が宿っているだけで血走っていた。

魔法使い 「ク、クカカカカ、あと少しだ、あと少しで……」

? 「なにが終わりだった?」

魔法使い 「なっ?!」

男が振り向くと電柱の上に座っている、仮面をつけ全身の服が黒い男がいた。

男は驚くが……即座に無詠唱で魔法の射手を放つ。

しかし男の服に触れた途端に消える。

魔法使い 「何者だ？」

？ 「……おばあちゃんが言っていた」

仮面をつけた男が天に右手を上げながら指を指す。

魔法使いの男は詠唱に入る、彼が出せる最強の一撃を繰り出すためだ。

？ 「男はクールであるべき……沸騰したお湯は蒸発するだけだ。つまりもつと落ち着け、今なら見逃すから……とつとと失せる」

魔法使い 「いまさら……いまさら止まれるか！！ 止まらないんだ！！」

？ 「……なら止めてやるよ。まあその頃にはあんたは八つ裂きになつてるだろうけどな」

魔法使い 「だ、黙れええええええええええ！！ 契約に従い 我に従え 炎の霸王（ト・シユンポライオン デイアーコネート・モイ ホ・テユラネ・フロゴス） 来れ（エピゲネーテート） 浄フロクス・カタルセオースロンファイア・フロキネー化の炎 燃え盛る大剣 ほとばしれよ ソドムを焼きし（レウサン トーン ピュール・カイ・テイオン） 火と硫黄 罪ありし者を 死の塵に（ハ・エペフレゴン・ソドマ ハマルトートウス エイス・クーン・タナトウ）！！」

？ 「長い詠唱だなあ」

魔法使い 「燃える天空……！！」
ウーラニア・フロゴシース

？ 「術式吸収、燃える天空」

仮面の男がつぶやくと、魔法使いの男の頭上に燃える天空が吸い込まれるように仮面の男に吸収される。
驚く男をしり目に仮面の男……夷は仕上げに入る。

夷 「固定、掌握、魔力充填、術式兵装……煉獄ノ衣」

ゴウと言う音と共に燃える天空が夷に纏わりつき夷の髪の毛が赤く染まる。

背中から炎の翼が出ていて……その姿は炎の化身と呼べる姿だった。夷が黒式を開発する前に試作的に作った術式兵装、撰氏数千度と言うとてつもない高温を纏っているが……夷には何の効果もない。

夷 「闇の魔法ってやつだが……これでもやるか？」

魔法使い 「……うあああああああああああああ！！！」

魔法の射手を連続で発射するが炎の翼がそれを許さない、当たる前に自動的に撃ち落とす。

夷は右腕を振り上げ、炎を収束させる。

夷 「術式解放……煉獄ノ槍」

それは炎の槍を模した炎の塊であった。

とてつもない魔力の密集に魔法使いの男はパニックを起こす、目の前の術式を防ぐ手段がないからだ……誰だっけと触れただけで人間が炭になる威力の攻撃なんて受け止めたくないはずだ。

夷 「すまんが消し飛べ」

それを振りかぶりながら男に向かって投げる！

男は目を見開きながら絶叫しながら……一瞬で燃え尽きた。

夷 「……やりすぎたか？ おっと、なんか色々来てるから逃げるか」

そのまま術式兵装を解きながら（余った魔力は吸収しました。デリシヤス、だそうです）転移する……もちろん秘密基地にだ。

次の日の朝一で帰った夷だが……次は生徒として来ようと思いがら関西に帰った。

||||| 夷視点

こんちわー、夷だ……あれから一か月。展開速い？ 作者が赤点とって補習だから早めに書きたいんだそうだ、まあ裏事情は後回しにして……今日は家でダラダラしてみたい。この頃は修業、修業、発明、改造してたからなあ、たまにはゆっく

月詠 「夷はーん！ 斬り合いますえー」

夷 「少しは自重しろ！！ この戦闘狂が！！」
バトルジャンキー

月詠 「いくでー？ ざんがんけーん」

夷 「……斬閃拳」

手刀で気で強化した木刀を両断する、この頃は真剣もこれでぶった切れるようになってきた、神力強化は伊達じゃないらしい。

月詠がキラキラした目でこちらを見ているが無視する。この頃は平気で風呂にまで侵入してきた……女の子だからもう少し恥ずかしさを持つとよ。

ちなみにさっきの技は神鳴流にある拳の技を参考にして、虚刀流の技をパクらせてもらった、あれって結構きつかった、再現するのが……わざわざ自分の記憶から映像持つてきて、魔眼と見稽古で覚えましたよ、見稽古チートすぎる。

月詠 「もう一本ありますえー？」

夷 「だから……その突っ込む癖をどうにかしてこい、虚刀流……
『鏡花水月』」

体重を適度に乘せながら掌底を打ち込む、この技を本気でやると岩すら砕きかねないので手加減に手加減を加えて、忍法『足軽』を使った手加減の極みの技、ああ足軽？ 記憶から昔見たアニメを再度見たら……できた、虚空移動と合わせるると凶悪すぎる蝶々が学んだ技はすごいなあと再度認識したが……。

月詠 「きゃふ？！ なんやその技は？ 受けてるのに痛みがこないえー」

夷 「手加減の極みだからなあ」

月詠 「うー！！ ちゃんと戦うー！！ そっじゃなきゃ夜まで斬り合

夷 「寝てる!!」

魔法の射手（雷付属の少し強いスタンガン程度の威力）を打ち込み気絶させるが……気絶する瞬間恍惚な表情をしたのは気のせいか？
気のせいだよなあ？！

まあ布団しいて寝かせるんだが……細い体してやがる、鬼の血も入っているから力が相当強い、まあ俺よりかは弱いが……。

夷 「願わくはこいつがまともな幸せを持てますように」

髪の毛を撫でながらそう思う、誰だって幸せになる権利はあるはずだ……俺の周りにいる奴だけでもいい、それだけの人たちでも幸せになってくれれば……。

神 「なんちゆうこと考えてるんじゃ」

夷 「……もうそんな時間か？」

神 「ああ、行ってもらおうか夷君」

俺の後ろに神様が立っていたが特に気にせず会話を続ける。
神様がきたってことは……もう過去に行くのか。

神 「そうじゃ、今回はワシの力とお主のハイパーゼクターの力を合わせる」

夷 「なんであんたの力を？」

神 「ルシフェルの奴がその時空を不安定にさせているからの、普通に行くと虚数空間に永遠にさまようことになる」

夷 「……マジかよ、まあいいや変身」

俺はベルトをつけながらゼクターをベルトに装着させ、キャストオフまで終わらせる。

そしてハイパーゼクターを呼び出し、ハイパーキャストオフをする。

Hゼクター 「HYPER CAST OFF CHANGE
HYPER BEETLE」

夷 「よし、なったぞ？」

神 「重ねて言うがいつもすまん」

夷 「……あなたは俺に第二の人生をくれたんだ、頼みを聞くのは当たり前だ」

神 「……すまんの、では行くぞい!!」

神様が体から神力があふれ出し、俺の目の前に俺の身長くらいの空間の切れ目ができる。

俺はスラップスイッチを押してハイパークロックアップを発動させる。

Hゼクター 「HYPER CLOCK UP」

体からタキオン粒子が溢れだし、ハイパークロックアップが完了する。

すでにカプテクターは展開済みだ。

「……………その頃の夷
? 「お……………の、おい……………者
」

夷 「あ、うううううう?」

なんか頭がぼけっとする、うーなんだっけ重要なことを忘れてるよ
うな?

まあいいや、ここはどこだ?

? 「おい、聞いてるのか?! 馬鹿者!」

夷 「……………お嬢ちゃん、どうした?」

俺の目の前には西洋人形を人間風にしたらこんなふうであろうと思
つてしまうほどの可愛い少女が居た、つうか黒いゴシッククロリータ
なんざ着て……………似合うからいいんだが。

? 「へへへ、御主人コイツキツテモイイカ?」

なんか女の子の様な小さな人形が物騒なこと言っているんだが?
なんだ? 魔法人形か? 珍しいな。

? 「待てチャチャゼロ、少し話を聞こうじゃないか」

夷 「あーすまん、君は?」

? 「まずは自分からだろう? レディに先に言わせるつもりか?」

レディって……まだチンチクリンな癖して、まあいいか？ しかし近衛も両希も俺の本名乗るのはまずいよなあ。
両希……あいつの名前にしよう嫌がらせには十分だ。

夷 「俺は式、両義式だ」

？ 「ふん、まあいい、私はエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル」

……アレエー？ ナンカキイタコトノアル、ナマエダケドチガウハズ。

エヴァ 「そしてこいつは私の従者の……」

？ 「ケケケ、チャチャゼロダ、ヨロシクナ嬢ちゃん」

夷改め式 「嬢ちゃん？ 俺は男だが？」

エヴァ 「は？ なに言っているその髪に顔……どう見ても女にか見えないぞ？」

チャチャゼロ 「ソウダゼ？ 女ニシカ見エナイゾ？」

式 「てめえら、ぶちのめしてやるつか？」

エヴァ 「ふん、貴様風情にできるか？ このエヴァンジェリンを……『闇の福音』と呼ばれたこの私をぶちのめせるのか？」

……おいおい、マジかよ、マジモンの闇の福音かよ？
ひとこと言わせる、これは言っておかないと俺の精神が持たない。

依頼と過去と吸血鬼（後書き）

作 「今日のネギラジオ!!! こいや、夷!!!」

夷 「えー今回で年少期終了です、次は前にアンケートをとった話です」

作 「おiiiiiiii!!! 俺のセリフをとるな!!!」

夷 「いいだろうが!!! つうかなんで四十年前?! 誤差ってレベルじゃねえぞ?」

作 「俺のゴーストがささやいたんだ」

エヴァを早く出せと……

夷 「このロリコンが!!!」

作 「否定はしないし肯定もしない!!! YESロリータ、NOタツチ!!!」

「

夷 「駄目だ腐ってやがる……」

作 「ぶっちやけ言つとな、補習がリアルにあつてな?」

夷 「赤点だったと」

作 「……英語だけ苦手なんだ」

夷 「他は？」

作 「すべて平均点以上、しかし英語は十点くらい」

夷 「勉強しろやあああああああああああああー!!」

作 「ぶっちゃけ面倒、それに学校の用事も終わらせなきゃなんないしな」

夷 「で次はどうするんだ」

作 「ああ、アンケートの結果だけ言っぞ？」

夷 「ああ、それでは……」

ばらばらばらばらばら、ドーン!!

作 「一と二の夷の赤ん坊時代に決定」

夷 「え?!?!」

作 「なんかな、皆さんから一と二を一緒って意見が多くてな」

夷 「い、嫌だあああああああー!!」

作 「えらい人はこういいました」

夷 「なんだ？」

作 「AKIRAMERO」

夷 「神は死んだあああああああああ！！」

作 「そろそろしめるか……夷！！」

夷 「はあ、まあいいや。次回、吸血鬼と従者」

作 「次回も……」

木乃香 「見てくれへんとハンマーをプレゼントや」

作 「あ、あのー？ 木乃香さん？ その馬鹿でかいハンマーは？」

木乃香 「ウチが作った『木乃香EX』や」

夷 「ガクガクガクガク」

作 「ち、ちなみになぜ？」

木乃香 「別にー、作者さんがウチをあんまり出さなかつたり、えびにいがウチの扱いが雑だからこんなことしてるわけないやないか
(にっこり笑顔)」

素子 「そして私もだなあ、あれだけしか出ないとは……」

刹那 「ウチもや、えーちゃん、作者さん？」

千草 「ウチなんてセリフすらないのになあ？」

吸血鬼と従者（前書き）

今回はバトルメイン、ほのぼの二割で構成されています。

夷（式）のキャラ崩壊危機、原作ブレイク、俺の好きなキャラがこんな筈ないなどをスルーできる方はお進みください。

いいですか？ それでは〇崎を始めよう。

吸血鬼と従者

なますてー夷だ。もうなんかこれが恒例になってきてるような……
まあいいいや、前回過去に来たんだが……闇の福音(?)の従者と
会ったんだが。なんだあれ？ 金髪幼女に人形とかなめてんのか？
まあ色々ありましたよ……再現VTRどうぞ。

|||||夷(式)視点

式 「お前みたいなチンチクリンが闇の福音？ 冗談きついぞ？」

エヴァ 「ほう？ 死にたいらしいな！！」

なんか目の前の少女から強大な魔力感じるんですが？ え、まさか
本当に闇の福音なのか？！！ それに従者もなんかナイフ取り出し
てるし！！

チャチャゼロ 「ケケケ、残念ダツタナア御主人ノ怒リカツチマツ
テ、マアオレハ殺シ合イガデキルカライイガナ」

式 「ちっ！！」

急いで倉庫から武器を射出させる。俺の影から二対の大きさの違う
太刀が出てくる。

俺はバックステップで下がりながら構える。

エヴァとチャチャゼロも戦闘状態に入る。

エヴァ 「チャチャゼロ！」

チャチャゼロ 「ハイハイワカッテルヨ、御主人、斬り合おうぜ！
シキイイイイイイイイイイ！」

式 「軽くホラーだな、行くぜ？ 剛・魔神剣！！」

エヴァ 「ふふふ久しぶりに強そうじゃないか！ リク・ラク・ラ・
ラック・ライラック、闇の精霊29柱……魔法の射手・連弾・闇の
29矢」

俺に向かってくる人形と高密度の魔法の射手を衝撃波で相殺するが
……チャチャゼロは空中で回転しながら再度俺に向かって来る。
それを右手で受け止めながら、撃ち漏らした魔法の射手を左手の太
刀で破壊していく。

一応、魔法耐性もつけといてよかった、ズバズバ斬れるぜ。

エヴァ 「まだまだ追加だ！ リク・ラク・ラ・ラック・ライラッ
ク、闇の精霊100柱……」

式 「いくらなんでもやりすぎだろ?! チャチャゼロに当たる
ぞ？」

チャチャゼロ 「ソレガドウシタ？ オマエヲ切り裂ケバイイダケ
ノハナシダ」

……人形だから恐怖心はないからか？ いや信頼してるからか？
エヴァの目には躊躇ってもんがないやる気かよ？

エヴァ 「魔法の射手……闇の100矢!!」

俺は左手の小太刀を影に戻し、ジエフテイ（魔法銃）を取り出しながら魔法の射手に向かって乱射する。まずい癖になりそうぐらいにおもしろい!!

白い銃から白色の魔力弾が放たれ黒い弾丸（魔法の射手）を撃ち落としていく、左手でチャチャゼロの猛攻を弾きながらだから何発か撃ち漏らしが俺の足元に突き刺さるが気にしない。

チャチャゼロ 「ケケケ、殺リガイガルナ!!」

式もくれん 「お褒めの言葉ありがとうございます……ぶっ飛べ、虚刀流」
木蓮もくれん 「」

左手の太刀でチャチャゼロを吹っ飛ばした後に飛び蹴りの追撃をかける、しかしチャチャゼロの被弾面積が小さいのが幸いしたのかまともに決まらずに取り逃がす。

右手の銃を乱射しつつエヴァへの牽制も忘れない、さっきまで100あった矢がもう数発程度になっているがな。

チャチャゼロ 「危ナカツタ、今ノクラツテタラ壊レテタゾ？」

エヴァ 「それに魔法銃にチャチャゼロを圧倒する剣術の腕、そして拳法か……」

正確には虚刀流は拳法ではなく剣法だがな……敵に情報を教えるほど俺はやさしくはない、にしてもさすがは闇の福音とその従者、なかなかヒヤヒヤする攻撃を放ってくるなあ。

そんなことを思っているとエヴァに魔力が集中する。魔力量からす

ると大技、上級魔法か？

エヴァ 「チャチャゼロ時間を稼げ」

チャチャゼロ 「ワカッテルヨ御主人、別ニ斬ッテモイイヨナ？」

式 「御託はいいから早く来い」

チャチャゼロ 「ワカッテンジャネエカ！」

式 「来いよ、キリングドール殺人形だけど そのころにはお前は八つ裂きになってるだろうけどな」

チャチャゼロ 「シテミヤガレ、殺り合オウゼ！！」

チャチャゼロが飛び上がりながらナイフを俺に向けて振り下ろす。それを太刀で防御しながら銃を構えるが……的が小さすぎて照準を合わせられない、銃じゃこいつには無理だな。そう思いながら銃を足元に落とし、影に収納する。太刀一本でチャチャゼロをいなしていくが小さい体のどこにそんな力があるかってぐらい力がでかい、へたしたら今の気の強化状態の俺並だ。

式 「くっ?!」

チャチャゼロ 「久々ニイイ獲物ジャネエカ！！」

エヴァ 「私もそろそろいくか……」

鏢迫り合いをしながらエヴァからそんな声が聞こえる、なんかやばそうだなあ。

高密度な魔力がエヴァの体を包んでいる。魔眼開放してますよ、そうじゃなきゃやられる、油断はしないさ。

エヴァ 「リック・ラク・ラ・ラック・ライラック、来たれ氷精、闇の精。闇を従え吹けよ常夜の氷雪。『闇の吹雪』」

その瞬間、チャチャゼロが離脱し俺は前のめりに倒れそうになる。畜生、罅迫り合いじゃなかったら『術式分解』が使えたのに!!
そう思っていると闇闇が発生する、嫌な予感がしてきた。

エヴァ 「凍れ」

その一言を言われた瞬間、強力な吹雪が俺にふぶく……さむ!!
そう思いながら結界を張り全身を包む、おいおいマジで闇の福音だなあ実力もあるし、魔力もある……久々に本気ですか?
そんなことを思っていると吹雪が止む、どうやら終わったようだ
……そう思っていた時期が俺にもありました。

エヴァ 「まだまだこれもくらつとけ」

するとエヴァの右腕から巨大な剣が現れる。

……マジか、魔眼で解析したところあの剣の効果は触れたものを強制的に物質を固体・液体から強制的に気体へと相転移させることで攻撃するというものだった。
なんつう剣を出しやがってんだよ!!

エヴァ 「エクスキューションソード……消える」

式 「や、やばいなあ」

次の瞬間エヴァが剣を振るい、俺に向かって振り下ろしたそれを避けずに太刀で受け止める。

地面にでも当たったらやばいことになるしな。そのままエヴァは振り下ろした剣を引き寄せ、俺に向かって突きの構えをとる。

……あれやるか。

エヴァ 「ハッ！！」

式 「虚刀流……『きく菊』」

俺の全身を魔力で包み込み、エクスキューショナーソードの効果を受けられないようにする……そのまま「剣」に二の腕と肘と背骨を利用してつつ梃子の原理で剣をへし折った、まあ簡単に言くと剣に関節技をかけて体（刀身）をへし折ったという感じだ。

エヴァ 「な?! エクスキューショナーソードを……」

式 「続いて繰り出すのは最終奥義……」

と言っても奥義を順番に出すだけだがな……。

チャチャゼロ 「御主人!!」

俺はすでに虚刀流一の奥義、一の構え「鈴蘭」から繰り出される奥義である「鏡花水月」の構えをとっている。

主人公の鑢七花が思いつきで作った技だが……まあいい。

式 「『しちかはちれつ七花八裂』!!」

体に七つの奥義を足軽を使いながら叩き込む。

そうすれば痛みはないだろうな、重さを消してるからなあ。

エヴァ 「な、なんだ?!」

チャチャゼロ 「ア、アレ? 御主人ナンモナイノカ?」

エヴァ 「あ、あれだけの打撃技をされたのに痛みがまったくない。何をしたんだ!」

式 「いや? ただ打撃の重さを消しただけだ」

エヴァ 「……闇の福音である私に手加減したのか?」

式 「さあな、俺は女子供は殺さない主義なんだ……つまり子供は^{ガキ}布団被って寝てる」

エヴァ 「ふ、ふざけるああああああああああああああああああああ!!」

あ、やつべ口が滑りすぎた……めっちゃ怒ってはるがな。
顔紅いし、なんか子供が怒っているようにしか見えないんだが?

エヴァ 「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック、契約に従い我に従え 氷の女王 来れ永久の闇 永遠の氷河 全ての 命ある者に等しき死を・其は安らぎ也」

……大量の、さっきよりも殺意がある高密度の魔力がエヴァの周りに集まる。

こいつは……やばい、俺は魔眼で分解しようとするが……やめる。
ここで分解するよりも吸収した方が奴らも少しは黙るか?

エヴァ 「おわるせかい」

魔眼で解析、理解つと。絶対零度（摂氏-273、15度の冷氣）による攻撃。まあ知つての通りに絶対零度は（ほぼ）全ての原子の運動を停止させあらゆる物質を粉々にする特性がある、寒いと動きが鈍くなるだろ？それが原子レベルで止まるって考えればヤバさがわかるだろ？。

しかもこの呪文は150フィート四方という広範囲にわたり完全凍結する……1フィートはセンチにすると30・48センチ……つまりだ、約76メートル四方は効果範囲内。範囲広すぎて笑えるなあ。

式 「術式吸収……『終わる世界』」

その術式を吸収すると俺の頭の周りに渦巻きながら冷氣が飛び込んでくる。

エヴァとチャチャゼロが啞然としながらこちらを見てるが気にしない。

式 「固定、掌握、魔力充填、術式兵装……凍土ノ衣」

冷氣が俺を包み込み、背中に氷でできた翼が生える。

全身が氷で包まれ、俺の周りの空気があまりの冷たさによって、軽く空気中の水蒸気などが凍っていてキラキラと輝く。俗に言うダイヤモンドダスト……つまり大気中の水蒸気が昇華して出来た、ごく小さな氷晶が降る現象ができていた。

ちなみに今は夜なので月明かりだけが反射している。

エヴァ 「術式兵装だと？まさか闇の魔法？！！ そんなバカな

！！」

式 「知るか……術式解放、凍土ノ太刀」

ちなみに今は髪の毛が青くなっていて、俺の手には巨大な一本の太刀が握られてる。

チャチャゼロ 「マズイゾ、御主人!!」

エヴァ 「……ここまでか」

式 「はああああああああああああああああ!!」

そのままエヴァに斬りかかりその体を……斬らなかつた。

エヴァ 「なんだ？ 命乞いでもさせようというのか？」

式 「いや？ これで戦いを終わりにしようと思ってな」

エヴァ 「な、何を言っている!! 貴様あ!!」

式 「それに外見が美少女を男の俺が一方的に戦っても……なあ」

啞然としてる二人をしり目に俺は術式を吸収し、消費した魔力などを回復させる。

まったくこの術式吸収はやりやすい。

エヴァ 「……なぜだ、なぜ『悪』の魔法使いの私を生かす？」

式 「アホか？ 悪？ 正義？ そんなもん自分で決める」

エヴァ 「なっ?!」

式 「俺は……ただ信じる者、つまり仲間だな。そいつらのために戦ってきた」

そうだ、いつだって強くなりたかったのは仲間の……みんなのためだ。

俺は英雄にはならない、なりたくない。十を助けるなら救える一を救う、俺にとっては他人とは「危なくなったら助けよう」その程度しかない。薄情な奴と言う奴はいるだろうな、だけど俺は家族を助けるためなら万の他人を犠牲にしても助ける」

式 「俺は悩まない……目の前に俺の大切なものを奪おうとする奴が現れたなら」

エヴァ 「あ……」

式 「叩き斬るまでだ!」

エヴァ 「ふ、ふふふ、フハハハハハハ」

式 「なんか可笑しいこと言ったか?」

エヴァ 「そうじゃない、いままで私にそんなことを言ってきた奴はいなかった」

……たしか闇の福音、いやエヴァは600年以上生きてるんだよな。さらに吸血鬼、人間の汚い部分をたくさん……いやそれしか見えないかもしれない。

エヴァ 「『正義のため』『化け物を退治するため』『悪だから』
そんな理由で私に戦う奴らばかりだった……そして私はそんな奴ら
を殺していった『悪』だ」

式 「……」

エヴァ 「ハハハ、私はなぜそんなことを言ってるんだろう……
散々殺してきた癖に 『悪』の癖に」

式 「お前は……自分から殺そうとしたのか？」

エヴァ 「……いや、私は吸血鬼だからな。血を分けてもらうた
めに襲ったこともあるが……自分から殺しに行ったことはない」

式 「ならなぜ自分を『悪』なんて言うんだ？」

エヴァ 「わからないのか?! 私は吸血鬼で! ばけ フグ!
」!

式 「ふざけたことをぬかすな、俺の目の前に居るのは……少しだ
けアクティブな女の子だ」

俺が頭を叩き、なんか口が滑って言ってしまったが……自分で言っ
てめっちゃ恥ずかしいです、はい!

式 「……ともかくだ、俺は自分が敵だと思った奴しか戦わない」

エヴァ 「……ク、クハハハッハハなんて奴だ。狂ってる」

式 「ああ狂ってるさ、刀が刀を使ってる時点だな」

ふざけんな！　ここは日本だったよ、確かに日本でしたよ！！　四十年前のな！！

ふざけんなああああああああああああああああ！　俺が行くのは二十年前だろうがああああああああああ！！　ハアハア、すまん取り乱したな、それで一番の問題は……

エヴァ　「何をしてる式、早く来い」

どっかで手加減した吸血鬼ロリババアのせいでこっちはストレスでマツハだ！　誰だ女の子とか言った奴！！　って俺だ？！！

そんな漫才をしないで早く進めろ？　俺の服装もどっにかしてくれ……。

エヴァ　「フッフ、今日はメイド服だ」

式　「またかあああああああ？！！」

なぜかこいつは俺に女装させようとする、そういえばこいつ……木乃香のクラスに居たなあ、ロリババアのくせ　（ザシュ）

エヴァ　「ナンカイッタカ？」

式　「何も言ってますん、サー！！」

チャチャゼロ　「マタカヨ、旦那モ大変ダナア、クククク」

酒飲みながら言うな、つつか俺の頭の上に乗るな。

確かにてめえは外見が可愛いから乗せるのに拒否感はない、頼むから頭の上でナイフ研いだりしないでくれ……お前のせいで髪切るこ
とになつたからなあ。

もう髪の毛が肩にそろえる、ショートヘアになっちまったよ。外見は小さい両儀式ですよ……自分でも時々間違える、髪の毛伸ばしたのもこれを避けるためだったんだがなあ。

エヴァ 「さあ早く行こう！ 思い立つ日が吉日だ！！」

式 「テンション高め、たかが京都行くだけだろ？」

エヴァ 「馬鹿者おおおお！！」

式 「ぐほお?!?!」

エヴァ 「京都の素晴らしい仏閣を見ずにいられるかあ！！」

式 「（な、なあチャチャゼロ？ あいつっていつもああなのか？）
」

チャチャゼロ 「（アア、京都ニコウトスルトアレダ、十年前ニ
イッタラ、毎年イリビタツテル）」

……ウチの故郷でなにしてる、つうか最高位の魔をなに仏閣とかに
通してんだよ神鳴流！！ 大丈夫か?! まあ関係ないがなあ。

エヴァ 「まずは金閣寺で、次にクフフフ、アツハハハハ……ゲ
ホゲホ」

式 「落ち着け、ハイテンションガール……京都くらいなら俺が案
内してやるから」

エヴァ 「ほんとか?!」

……こうして見ると本当に年頃の女の子にしか見えなないぜ？ つうか人形みたいだから抱きしめたくなる……うん、自重しよう。

エヴァ 「なら今回は少し長くいようか」

式 「まあそんな期待するなよ？」

仮面被つとくか……これで未来で狂ったりしたらヤバいな。そんなこんなでゆっくりと歩いていく俺たちの後ろに……大量の討伐隊がいるに気づき、俺は内心で舌打ちをする。

式 「（数は二百以上か……本格的だなあ）なあエヴァ、少し獲物狩ってくる」

エヴァ 「獲物？ なんでだ？」

式 「この頃は肉を食ってなかったからな、今日は肉としよう」

エヴァ 「そうだよな、この頃はお前が食品管理してるからな！！
魚ばっかであきてきたわ！！」

チャチャゼロ 「ウマイツマミモツクツテクレルンダロ？」

式 「ああ、最大級のな」

そう言ってその場にはれないように結界と不可視の札も貼り付けておく。

その場を離れながら、俺は黒い服いつもの仮面をかぶる。

式 「んじゃ……」

とある殺人鬼の殺人開始の合図である、あの言葉を言う。

これからするのは戦闘ではなく……戦いですらない、ただの殺人だ。

虚識(式) 「零崎を始めますか」

虚刀流にして零崎……一回だけが記憶から読み取ったらできちまった。

今じゃ人殺すのにも拒否感がない、獲物はすべて……何でもであるである。こうなったのは三年前、俺の目の前の魔法使いを『殺されかけたとき』覚醒した。なんかわからんが目の前の敵を殺さないと済まないほどの……殺人欲に身をゆだねかけた。定期的に発散しないとまずいんだよなあ。

さあ零崎を開始しようか……。

始まるのはただの虐殺 取るに足らない物語でございましょうか、別世界で一人目覚めた零崎の殺人劇の始まり始まり。

|||||正義の魔法使い視点

私はメセンブリーナ連合から派遣された……俗に言う正義の魔法使

いと呼ばれるものだ。

今日の任務は悪の魔法使いであり、忌むべき吸血鬼である「闇の福音」の殺害とその従者である「黒の死神」も退治しようと言う任務だった。

素晴らしい、まさに正義の魔法使いの仕事だ。悪を倒し、正義こそがこの世界の本質だとあの愚か者どもに知らせてやらなければ！！今回の任務にはほとんどが真祖とはいかなくても並の吸血鬼には戦闘経験ある者ばかり……不死殺しの武器も持ってきている。

いくら強かろうとも、我らの正義の一撃をもってすれば……おぞましい化け物共も駆逐できるであろう。

モブ1 「なあなあ、今回の仕事は成功しそうだな」

モブ2 「ああ600万の報酬を二百人で分担するのは結構きついな」

モブ1 「そういえば『闇の福音』は聞くところ美少女なんだろう？」

モブ2 「なんだあ？ まさか？」

モブ1 「泣きついて来たら全員で……クハハツハ」

まああんな奴もいるが我らは正義、正義とは常に正しいのだ。

我らの加護があるから一般人たちは平和に暮らせるのだ、なぜわからないのだ？ それにこの世界の関西呪術協会というのもさっさと日本から出ていけばいい物を……俗物どもめ。

モブ1 「なんだ？ あいつ」

全軍が一斉に止まる、なんだ？

そう思つて見てみると黒い服に仮面をかぶつた男が道をふさいでいた。

モブ2 「なんだあ？ 貴様は、我らを正義の魔法使いと知つていてこんなことをしてるのか？」

？ 「はあ、こんなにたくさん居るのかあ。面倒だ」

モブ1&2 「貴様はいつたいな」「」

次の瞬間、二人の魔法使いの首が何かにはねられ胴体と完全に別れる。

啞然とする なんなのだ？ 目の前の男は？！！

？ 「虚刀流で終わらせようと思つたが気が変わった……」

男がまるでピアノでも弾くかのように手を上げて、そのまま下に振り下ろすと……次々と仲間たちの首落ち、何も言わない屍となる。

？ 「やっぱ鋼糸は作つといて正解だった、殺しやすいしな」

男 「き、貴様いつたい何者だ！！」

私の喉から出たのはそんなおびえたような声だった、当たり前だ………たった一振りの動きで三十人規模の人間を殺すことなどできるはずがない！！

？ 「ただの殺人鬼さ、名前は言っておこうか」

その仮面の者は死刑宣告のように言い放つ。

そういえばさっきの鋼糸は零崎限定だ、両義だと魔力や剣と虚刀流を……零崎だと全武装と黒式、近衛だと仮面ライダーに……両希はすべてを使う。

思えば偽名がこの頃真名として定着してきたような……魔眼にもつけるか？ やめとこれ以上チートになられたら困る。

その後イノシシを狩って、骨付きで焼くとどこからか「上手に焼きましたー!!」と言う音声が流れたが無視した。

「……………」さらに数週間後

つ、疲れたぁ、まさかあれから三回も襲撃されるとは……おかげで最初の襲撃合わせて千人くらいは殺したぞ？ 零崎で……

俺は悪いよなぁ、謝らないと……まあ戯言だが。

殺人欲があるんだからなぁ、これで10年くらいは抑えられる気がするけど……また使いそうだよ、いやぁ真名って怖いねえ。

まあまあ戯言まがいの事はやめて本題に入ろう。

エヴァ 「京都よ！ 我が悲願の為！ 全寺コンプリートの為！

京都よ……私は帰って来たぁあああああああああああああああああああ
あああ！！ アハハハハハハハハハハ、ゲホゲホ」

この通り幼女がなんか核でも撃ちそうなセリフを言い放つ。
さてチャチャゼロに言うか。

式 「こんな御主人で大丈夫か？」

チャチャゼロ 「大丈夫ダ、元々アキラメテル」

おーいエヴァ、従者にあきられて 聞いてるわけないよねえ。
めっちゃ咳き込んでるし、うわぁ。

式 「まあ行くか」

エヴァ 「まてここは和服で行くべきだろう?」

……めっちゃ嫌な予感がしてきた。こう木乃香に着せ替え人形にされる前の感覚。

やべえあいつ元気にしてるかなあ、時空超えた会話できる機械とか創造すべきだった。

そういえば昨日、枕元に神が現れて一本のナイフを置いていったよ。『七つ夜』をな、俺に完全な殺人鬼にさせる気か? なってるけど

!!!

エヴァ 「さあさあこっちに來い、着替えさせてやろう(ハアハア)

」

式 「拒否す「答えは聞いてない!!!」お前は某紫の負けフラグ要員か?!!」

あいつ出て勝った場面あったっけ? あまりに無さ過ぎて覚えて……
……ちや、チャチャゼロ裏切ったのか?!

チャチャゼロ 「オトナシクシロ、オレノタメダ。犠牲ニナレ」

式 「は〜な〜せ〜、おいバカやめ」

アツ――――

――――!!!

式 「なんだガキ？」

詠春 「あんたら妖怪じゃないのか？」

式 「俺は……まあ人間だが、このロリババアは吸血鬼だ」

まあカミングアウト、つうか俺って人類だよな？ まだ人類のはず、人外ちゃうわああああああああああああああああ！！

詠春 「え？ あんた妖怪……じゃないのか？」

式 「俺は！！ 人間だ！！」

詠春（ガキに父さんと呼べるか！！）にアイアンクローを頭にかける痛そうにしている詠春、痛いかな？ 痛くしてんだよお！！

詠春 「いたたたたたただだ、や、やめてくれ！！」

式 「お前が！ 謝るまで！ 俺は！ アイアンクローを！ やめない！！」

詠春 「イタタタツタ、わかった、わかったからああああああああああああああああああああああああああああ（グキ）」

あ、やりすぎた。

京都来てからの成果、ロリババア抹茶好き、過去の父さんと会う。

表せてない」

エヴァ 「つまりは？」

作 「三大欲求に殺人欲をぶち込んだ奴ら？」

エヴァ 「なんだその危険な集団は?!」

作 「大丈夫大丈夫、えb……式は敵以外には零崎を始めないから」

エヴァ 「……その敵はどうなる？」

作 「皆殺し、まあそのぐらいはするでしょうなあ」

エヴァ 「……私は」

作 「辛気臭いのでここまでしめよう」

エヴァ 「くっ、まあいい次回、そつだ強化しよう」

作 「次回も」

エヴァ 「見ないと吸血するぞ？」

作 「それは俺にとってはごく褒美だな(キリ)」

エヴァ 「なら吸ってやろう」

作 「え、マジで って」

うああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああああああ
!!

エヴァ 「ゲフ、次回も楽しみにな」

作 「吸われたぜ……真っ白だ」

宿がねえよ（前書き）

次回予告と違ってごめんなさい！！
次回に持ち越しです。

誤字脱字、ここが嫌だ、ストーリーに絡ませたいキャラなどありま
したら感想まで、いつでも待っています！！

原作崩壊などが嫌な人はバックで戻ってください。

いいですか？ それではどうぞ！！

自分で言っただけなんだが……偽名が多いな!! 両義式に零崎虚識に近衛夷……それぞれ使う力違うがな。

あれから少したって……詠春と別れて京都の町を見回っていた。エヴァはホクホクしながら京都を見ている、チャチャゼロは俺の頭の上に乗っている。つうか周りに居る人たちの目が痛いです、そりや仮面付けて、西洋人形を頭に載せて着物着てればこうなるよなあ。ちなみに今つけてる仮面は狐のお面のような仮面である。ほかにも狸、犬、猫、鬼のお面がある（黒の仮面は零崎専用になりました）つうかほんと仮面外すと両儀式になってる……忍法で顔変えるか？ まあそんなことを考えながら今金閣寺に居る。まだ火災になる前だから本物だ……来てよかったかも。

エヴァ 「フハハハハハ、さすがだ!!」

式 「八つ橋うめえ」

パクパク、ああやっぱあんこうめえ。

チャチャゼロ 「……ゲンジツトウヒスルナ、旦那」

聞こえない聞こえない、人形がしゃべっていたり幼女が高笑いしていたりしてるが俺には関係ないんだ!! 周りの人たちも温かい目で見ないであげてえ!!

エヴァ 「……あのつつくしさは一級品だな、別荘にいれるか？」

式 「アホか!! このエターナルペチャパイババア!!」

エヴァ 「誰がペチャパイだあああああああああああ！！」

式 「お前しかいねえだろうが！」

エヴァ 「うるさい仮面マニア！！」

式 「仮面をなめるなああああああ！」

エヴァ 「くくく、お前とは決着をつけないといけないなあ」

式 「いいぜ？ いいのか？」

エヴァ 「決まっているだろう？」

チャチャゼロ 「マタカ、イイカゲンニシロヨ」

式 「いくぜ！！」

俺とエヴァは同時に拳を握り、腕を上げる。
そして振りおろし……

式&エヴァ 「「じゃーんけん、ぽん！！」」

じゃんけんをした、え？ レベル低い？ いいんだよ！！

式 「俺の勝ちだ」

エヴァ 「くそおおおおお！！」

俺がチヨキ、エヴァがパーである。ふははははは、あいつの叫び声

は蜜の味だ！！

そんなこんなで京都巡りしながらエヴァを弄ったり、チャチャゼロのナイフを取り上げながら、八つ橋を食いながらも夜になりここで問題発生。

式 「どこに泊まろうか……」

エヴァ 「なんだ？ 野宿でいいじゃないか」

式 「お前はアホなのか？ ここには陰陽師もいるし、神鳴流もいるし死にたいのか？」

エヴァ 「ククク、私を心配してるのか？」

式 「当たり前だ、お前は俺にとってはもう守る対象で大切な人だからな」

エヴァ 「え？ い、いや待ては、早いぞ？！ 私たちは」

式 「いやいや、勘違いするなよ？ もう俺とお前は仲間だつてことだ」

するとすごい嬉しそうな顔から一転して、ものすごい怒った様な顔をしたエヴァに蹴られた、地味に痛い。俺、化け物だけど今は基本スペックが人間より少し丈夫な程度なんだよ！！

エヴァ 「……そうだと思っただわ！ この馬鹿者が！！」

チャチャゼロ 「ケケケ、御主人モヤツカイナコイヲシタモンダゼ」

チャチャゼロがなにか言っていたが聞こえなかった、なんかすごい笑っているんだが？ さて今日の宿をどうしようか？

||||| エヴァ視点

私の名はエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル、世間一般的には「闇の福音」と呼ばれる「悪の魔法使い」であり吸血鬼だ。

私には従者が一人だけいる、チャチャゼロと言う人形だ。元は私の親が私のために作ってくれた操り人形から作りだした「私の唯一の家族だ」……恥ずかしくて奴には言えんが、600年という長い時を過ごし、共に戦ってくれた仲間だ。

私は普通の吸血鬼とは違い、真祖と呼ばれる吸血鬼の中でも高位な吸血鬼だそうだ。昔、そのせいで大勢の人間に襲われ、何度も死にかけた。

私はそのたびに人間を殺していった、最初の頃は罪悪感から自殺しかけたこともある。何日も口に食べ物をつけられずに餓死しかけたこともな……今となってはあの頃が私にとってまだ引き返せる時期だったと思う。しかしだ、生きてく為には目の前の障害を取り払わなくてはいけなかった、身に降りかかる火の粉を振り払い、時には無残に逃げて、それでも生きて、生きて、生き続けた。

ちなみに私は不老不死だ、つまり吸血鬼になった時から成長していない。永遠に若い体、まあ言い方を変えれば幼女のまま、女性としていつまでも若い体と言うのはイイものだが……せめて十五歳くらいなら胸もそこ……ゲフン。

さて、私はある男と出会った、あれはそうよく晴れた日だった。

エヴァ 「……暑い」

チャチャゼロ 「ソナナニ暑いナラ、着物ヲ脱ゲヨ」

嫌に決まってるだろう？ 私がこの日本とかいう国に来ておよそ六十年たった。

最初は合気道を使う変なジジイの元で修業をし、全国をフラフラと放浪していたら……なんと素晴らしい町を見つけた。京都というらしいが……そこには素晴らしい仏閣がたくさんあり、世界中を巡っていた私の目にも素晴らしい物に思えた、約十年前の話だがな。それから毎年行っている。

チャチャゼロ 「マツタク何回行ケバ気が済ムンダ？」

エヴァ 「フン、何回でもだ」

にしても暑い夜だ、寝苦しそうだ。

まあ私は吸血鬼だからな、夜に行動するのが一番いいのだがな。まあいい、今日は満月だ……いい夜だ うん？

エヴァ 「なんだ？」

何か黒い物がこちらに落下してるような……人の様な、人お?! そのまま地面と激突してすさまじい音が聞こえる。……い、生きるか？

? 「う、ううん」

どうやら生きていたようだ、どうするかこのまま放置でもいいが……仕方ない起こしてやるう。足蹴りしながらな。

チャチャゼロ 「ケケケ、美少女ツテヤツダナ」

確かに腰まで届いている髪で頭で一纏めしている、そして顔も一級品だ、まさしく美少女だな。

エヴァ 「おいその女、おい起きろ馬鹿者」

罵倒しながら言うと少しだけ意識が覚醒したようだな、目が開いてきている。

もう少しか？ 今度はもう少し大きく。

エヴァ 「おい、聞いてるのか?! 馬鹿者!」

? 「……お嬢ちゃん、どうした?」

お、お嬢ちゃんだと? 貴様だつて対して私と変わらない身長だろ?! さらに着ている着物が似合っているのにも気に入らん!!

チャチャゼロ 「へへへ、御主人コイツキツテモイイカ?」

チャチャゼロの意見を採用したいが……まずは話を聞こうじゃないか、私は「悪の魔法使い」だからな

エヴァ 「待てチャチャゼロ、少し話を聞こうじゃないか」

? 「あーすまん、君は?」

エヴァ 「まずは自分からだろう? レディに先に言わせるつもりか?」

六百年以上生きていたが女はレディと思えばいつまでもレディなんだ！！！

式 「俺は式、両義式だ」

エヴァ 「ふん、まあいい、私はエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル」

どうやら私の名前は知っているようだな体がかたまっているが……まあいいさ。

エヴァ 「そしてこいつは私の従者の……」

チャチャゼロ 「ケケケ、チャチャゼロダ、ヨロシクナ嬢ちゃん」

式 「嬢ちゃん？ 俺は男だが？」

エヴァ 「は？ なに言っているその髪に顔……どう見ても女にか見えないぞ？」

チャチャゼロ 「ソウダゼ？ 女ニシカ見エナイゾ？」

今回ばかりはチャチャゼロに賛成しかねない、女じゃない？ 確かに少し凛々しいが髪の艶や顔の形や体型が女のそれだ。間違いなく女と言われれば通じるくらいいな。

すると式は顔を歪めながら少し低い声で言う。

式 「てめえら、ぶちのめしてやるつか？」

私はチャチャゼロに呼びかけて囿になるように指示した、まあこのくらいはしてくれるさ。次に私は詠唱破棄をしながら魔法を使う。

チャチャゼロ 「ハイハイワカッテルヨ、御主人、斬り合オウゼ！
シキイイイイイイイイイイ！」

式 「軽くホラーだな、行くぜ？ 剛・魔神剣！」

エヴァ 「ふふふ久しぶりに強そうじゃないか！ リク・ラク・ラ・ラック・ライラック、闇の精霊29柱……魔法の射手・連弾・闇の29矢」

式の二本の太刀から出た衝撃波がチャチャゼロの攻撃と私の魔法の射手を迎撃しているが正直ありえない、チャチャゼロは小柄ながらとんでもないナイフさばきと戦闘経験がある。接近戦に関しては勝てる気がしない。それを私の魔法を迎撃しながらさばくなど……並の使い手ではないな、私たちと同じ領域の手練れだ、油断したら負ける。

私はさらに魔法の射手を撃つために詠唱破棄をする、すると奴の目が黒から様々な色が混ざったわけのわからない目になっていることに気付いた。

あれは……魔眼の類か?! ならば!!

エヴァ 「まだまだ追加だ！ リク・ラク・ラ・ラック・ライラック、闇の精霊100柱……」

式 「いくらなんでもやりすぎだろ?! ！ チャチャゼロに当たるぞ?」

チャチャゼロ 「ソレガドウシタ? オマエヲ切り裂ケバイイダケ

ノハナシダ」

……さすがは私の従者だ、ならお望みどおりにぶち込んでやるつ。
あわよくば破壊してくれる。

エヴァ 「魔法の射手……闇の100矢!!」

100本もの黒い弾丸が奴に向かうが……式の手にあつたのは銃。
そしてその手の中に納まっている白い銃で私の弾丸を撃ち抜き、相
殺する。

なんて奴だ、左手でチャチャゼロを抑えながら撃ち抜いている。な
んなんだ?!

チャチャゼロ 「ケケケ、殺りガイガアルナ!!」

式 「お褒めの言葉ありがとうございます……ぶっ飛べ、虚刀流」

木蓮

もくれん

「」

式が左手の太刀でチャチャゼロを吹き飛ばしなら、膝蹴りをくらわ
せる。幸いチャチャゼロは小さいのでなんとか身を捻りながら避け
た。

チャチャゼロ 「危ナカッタ、今ノクラツテタラ壊レテタゾ?」

エヴァ 「それに魔法銃にチャチャゼロを圧倒する剣術の腕、そし
て拳法か……」

仕方ない、不本意だが……上級魔法を使おう。

そう思った私はチャチャゼロに指示をだす。

エヴァ 「チャチャゼロ時間を稼げ」

チャチャゼロ 「ワカッテルヨ御主人、別ニ斬ッテモイイヨナ？」

式 「御託はいいから早く来い」

チャチャゼロ 「ワカッテンジャネエカ！」

式 「来いよ、キリングドール殺人形だけど そのころにはお前は八つ裂きになってるだろうけどな」

チャチャゼロ 「シテミヤガレ、殺り合オウゼー！」

チャチャゼロに秘密裏に戦いの歌をかけておき、強化しておく、このぐらいなら言わなくても術式を展開できる。
さて私もそろそろやるか！！

式 「くっ?!」

チャチャゼロ 「久々ニイイ獲物ジャネエカ！！」

エヴァ 「私もそろそろいくか……リク・ラク・ラ・ラック・ライラック、来たれ氷精、闇の精。闇を従え吹けよ常夜の氷雪。『闇の吹雪』凍れ」

次の瞬間奴の周りに暗闇と吹雪が発生する。

式は結界を全身に張っているようだ……まあいい。私は右腕に魔力を集め、その魔力で一本の、私よりも大きな剣を作る。エクスキ

ユーシヨナーソード、私が持つ物理術式では最高クラスにはいる術式である。

エヴァ 「まだまだこれもくらつとけ、エクスキューシヨナーソード……消えろ」

式 「や、やばいなあ」

予想外だったのか、振り下ろされされる剣を一瞬遅れて太刀で受け止める。

普通に打ち合えば、強制的に物質を固体・液体から強制的に気体へと相転移させることができる筈だが……どんな金属を使ってるんだ？！

私は打ち合うのは得策ではないと思い、剣を引き寄せ、突きの構えをとる。

しかし奴は武器をすべて影にしまい、何かの構えをとる。足を大きく開いて腰を深く落とし、敵に対して壁を作るような構え。左足は前に出して爪先を正面に向け、右足は後ろに引いて爪先は右に開き、右手を上左手を下に、それぞれ平手で構える。

後に知ったことなんだが虚刀流一の構え 『鈴蘭』^{すずらん}の構えなどこのときの私が知っているはずがなかった。

そのまま私は突きをした。

エヴァ 「ハッ！！」

式 「虚刀流……『菊』^{きく}」

そのまま二の腕と肘と背骨で剣を受け止められ……甲高い音と共にエクスキューシヨナーソードが破壊された。見事に華麗にスッパリと二つにへし折られた。私の頭が真っ白になる、そこに式が腰を捻

りながら私を狙っていた。

エヴァ 「な?! エクスキューションソードを……」

式 「続いて繰り出すのは最終奥義……」

チャチャゼロ 「御主人!!」

チャチャゼロの声で頭が戦闘に戻るがもう遅い。

目の前に……式の掌底が

式 「『七花八裂』!!」

そのまま私は激しい打撃をすべて体にくらったが……衝撃が全く来ない。

体が吹っ飛んだが……肝心の痛みがない、あれだけの打撃だ……一回ぐらい死んでいなければおかしい。

エヴァ 「な、なんだ?!」

チャチャゼロ 「ア、アレ? 御主人ナンモナイノカ?」

エヴァ 「あ、あれだけの打撃技をされたのに痛みがまったくなく、何をしたんだ!」

式 「いや? ただ打撃の重さを消しただけだ」

エヴァ 「……闇の福音である私に手加減したのか?」

式 「さあな、俺は女子供は殺さない主義なんだ……つまり子供は

布団被って寝てる」

エヴァ 「ふ、ふざけるぁああああああああああああああああああああ！！！！」

私は感情のまま術式を展開する！！

エヴァ 「リック・ラク・ラ・ラック・ライラック、契約に従い我に従え 氷の女王 来れ永久の闇 永遠の氷河 全ての 命ある者に等しき死を・其は安らぎ也”おわるせかい”」

周囲150フィート四方に絶対零度に近い極低温空間を発生させる魔法……高度な術なように聞こえるがぶっちゃけると「氷結・武装解除」のレベルを最高ランクまで上げた後に殺傷能力を追加したよ
うな呪文だ、まあ強力な術式に変わりはないがな。

しかし、奴は私のこの術式を避けずに……吸収した。

式 「術式吸収……『終わる世界』」

突然、術式のコントロールがきかずに……逆に制御されてしまった。
奴の頭上に制御された術式が渦巻き、そして……

式 「固定、掌握、魔力充填、術式兵装……凍土ノ衣」

奴は私が開発したはずの闇の魔法を使用した。

何故だ？！ あれの技法は一度も世には出していないはずだ！！
しかし目の前の男はそれをやっている、完全に制御している。

エヴァ 「術式兵装だと？ まさか闇の魔法？！！ そんなバカな！！！！」

式 「知るか……術式解放、凍土ノ太刀」

全身に冷気を纏った式は背中に氷の翼を生やししながら、手に太刀を出す。

まるで芸術品のような薄さ、そして華麗さ、とてもじゃないが戦闘用に思えないがとつもない魔力を感じる。

その太刀を持ちながら私がまばたきした瞬間に消えたように私の目の前に現れた。

チャチャゼロ 「マズイゾ、御主人!!」

エヴァ 「……ここまでか」

式 「はあああああああああああああ!!」

私はあきらめ、その太刀が私を切り裂くことを想像した。とてもじゃないが真つ二つにされたら復活に時間がかかる。

しかし太刀は私の眉間直前に止まり、私は理解できなかった。なぜだ？

エヴァ 「なんだ？ 命乞いでもさせようというのか？」

式 「いや？ これで戦いを終わりにしようと思ってな」

エヴァ 「な、何を言っている!! 貴様あ!!」

式 「それに外見が美少女を男の俺が一方的に戦っても……なあ」

わけがわからない、美少女？ 私は自分の容姿に自信があるが……

面と向かって言われたことはない。な、なんとというか、恥ずかしいか？ そんな感情が思つかべるが……今はそんなことは別にいい！！

エヴァ 「……なぜだ、なぜ『悪』の魔法使いの私を生かす？」

式 「アホか？ 悪？ 正義？ そんなもん自分で決める」

エヴァ 「なっ?!」

式 「俺は……ただ信じる者、つまり仲間だな。そいつらのために戦ってきた」

初めてだ、私と戦い、そんなことを言ってきた奴は……興味が湧いてくる。

なんなんだ？ この男は？

式 「俺は悩まない……目の前に俺の大切なものを奪おうとする奴が現れたなら」

エヴァ 「あ……」

式 「叩き斬るまでだ！」

エヴァ 「ふ、ふふふ、フハハハハハハ」

式 「なんか可笑しいこと言っただか？」

エヴァ 「そうじゃない、いままで私にそんなことを言ってきた奴はいなかった」

思わず笑い声が口から漏れ出す。

ククク、大切な物か……私にもあったな、しかし600年前にすべて奪われたよ。守るところか私は奪っていった、そうしなければ生きられなかった。しかし目の前の男は……いや、式は守るためと言った。

エヴァ 「『正義のため』『化け物を退治するため』『悪だから』そんな理由で私に戦う奴らばかりだった……そして私はそんな奴らを殺していった『悪』だ」

式 「……」

エヴァ 「ハハハ、私はなぜそんなことを言ってるんだろう……散々殺してきた癖に 『悪』の癖に」

式 「お前は……自分から殺そうとしたのか？」

エヴァ 「……いや、私は吸血鬼だからな。血を分けてもらうために襲ったこともあるが……自分から殺しに行ったことはない」

式 「ならなぜ自分を『悪』なんて言うんだ？」

エヴァ 「わからないのか?! 私は吸血鬼で! ばけ フグ!」

式 「ふざけたことをぬかすな、俺の目の前に居るのは……少しだけアクティブな女の子だ」

自嘲気味に言葉を言っていると叩かれてしまった、不思議と不快感がない。そ、それにお、女の子?! た、確かに私は身体年齢な

ら十歳だが……自分で顔が赤いのがわかる。

式 「……ともかくだ、俺は自分が敵だと思った奴しか戦わない」

エヴァ 「……ク、クハハハッハハなんて奴だ。狂ってる」

式 「ああ狂ってるさ、刀が刀を使ってる時点だな」

最後の言葉は聞き取れなかったがまあいい、しかし面白い奴だ……
けどこいつも何十年もすれば死ぬんだろうな、そうだなあ、それだ
つたら。

エヴァ 「面白い奴だ……そうだなあ」

チャチャゼロ 「ナンダ御主人……オモシロイコトか？」

エヴァ 「ああ最高級に面白い話だ」

式 「お前ら何言っ」

私は笑いながら提案する。

エヴァ 「お前、私たちと一緒に来ないか？」

式 「えっ？」

その時の式の顔は忘れられない、ククク今でも笑いが！！
それからすぐに決めなかったが、落ち着いたら承諾した。それから
私やチャチャゼロと共に歩き出し一緒に旅をした。
数週間がたち、式に私の作った服を着せながら旅をしていた。……

女の私が言ったらお終いだろつがすごく似合っていた、鼻から体液が出てきたが仕方ないだろう。そんなこんなで式と共に生活していたが……なんだ奴は？ 私の別荘を一目見ただけでその後、一日で作り上げ、すぐに壊したそうだ。外から見ていたが魔法球が爆発して虹色のオーラを纏った式が出てきた……かつこよかったと言っておこう。

その後にも影の倉庫と言う物の中から魚を取り出し、しばらくは肉が食えなかった、式の作る料理は絶品だった、料理がうまくて戦闘だって強いどんなチートキャラだ？

その間も何回か襲撃がきて撃退したりしていた、そして式にも賞金と称号がついた。「黒の死神」100万……それはナイフで大型魔法をぶった切ればこうなる、黒い着物と狐のお面をかぶっているから、怖いと思う。式が言うには自分の魔眼の能力である「直死」を使って死線と呼ばれるものが見れるそうだ、線をなぞって斬るとそれを切断でき、点と呼ばれる死線が集まっているところを突けば死ぬらしい。

とんでもない能力であり人の身で扱える力を越えている、そう言うのと式もうなづきながら肯定してくれた。

式 「俺は全力を出しても少ししか出せないから」

どうやら大きな力なそうなのでリミッターをかけているそうだ、最大で十分、できれば五分未満が一番いいらしい、魔眼もとんでもない情報量なのでこちらと同じくらいの使用時間しか使えないらしい。私は式から話を聞いた、何故空から降って来たのか？ いったいどういう生活をしていたのか、とかを。

式は口を開き、言ってくれた。

式 「あー、久々に全力を出そうとしたら失敗して空中に投げ出された」

どういう失敗をしたらそうなるのだろうか？　と思っただが言わない
でおいた。

式　「結構いいとこのぼつちゃんだったよ、まあ裕福と言えば裕福
だけだな」

エヴァ　「なら帰ればいいじゃないか」

私はむつとしながら式に言うとなんか悲しそうに顔を歪める。

式　「帰ればの……話だな」

瞬間私は式に謝っていた、やきもちみたいな気持ちで人の心に土足
で踏み入ってしまった。こいつのあの反応からすると家族は……私
の中でこいつを昔の私に重ねてみる、このときの私は何をしていた
だろうか、確か……親に甘えていたと思う、しかし式はまだ八歳だ
そうだ。

私は愕然とした、その後つらくはないのかと聞いてみたら笑いなが
ら言った。

式　「はははは、つらい？　むしろ楽しいさ、なんにも縛られずに旅
をするっていうのも面白いしな、それにエヴァもチャチャゼロもい
るんだぜ？　退屈じゃないさ」

……とてもじゃないが八歳の思考ではないと思う、私ではそんな楽
観視できない。十歳の頃は復讐だけを考えながら過ごしていた。

もうこいつは……私の予想の斜め上に行く、チャチャゼロを頭に乗
せていたら、試し切りされ髪を切られ、魔法球の中で七年もいたり、
ふざけて作った魔法で山を吹き飛ばしたり……私の方が退屈ではな

いよ。

だから私は……やめておこう、あいつも人間だ。あと何十年すれば死ぬ、人間とはそういう生き物だ。あまり依存したくない、死んだら悲しい。けどあいつを噛んで眷属にすれば一生生きれるという、そんな考えまで思い浮かぶようになった。
どうしたらいい？ 私は……

|||||式視点

へろー、宿が見つからないんだなあ、これが！

どうしようこのままだと野宿だよ、マジでどうしよう、俺は別にいいんだが……エヴァぐらいは止めてやりたいんだが……。

宿主 「へ？ 無理無理、成人の大人一人いないと」

宿主2 「ガキは帰ってろ」

宿主3 「いいだろう、しかし君……やらん」「ごつとぶいんがあああああああああああああああああああ！！」「ぶつああああああああああ！！」

こんな感じである、もう最後なんか右手を火の属性の魔法でコーティングした後、殴り飛ばした。このター Xすごいよお、さすがター！ のお兄さん！！ とか聞こえたが無視する、それはシャイニングなガンダムの方だと思ったがな。

さて本格的にまずい、今は七時近くになっている、そろそろ太陽の

光がなくなってきたらぼつぼつと街灯が付き始めている。

式 「どうするかなあ」

エヴァ 「ふん、魔法球の時間を外と一緒にしてそこに寝ればいいんじゃないのか？」

それもいいがせっかく京都に来たんだ、宿に泊まって風呂にでも入ってもらいたいんだがなあ、そう思っていると突然後ろから肩を掴まれた。

式 「なんだ?!」

詠春 「おい、あんたらどうしたんだよ？」

まさかの父さんとの再会……会うつもりはなかったんだがなあ。着物着て、袋を持っている詠春は俺たちを見ながら疑問を浮かべた様な顔をする。

詠春 「本当にどうしたんだ？」

式 「いや、宿がとれなくなって……探してたらこんなことに」

エヴァ 「別にいいだろ？ 野宿でも」

詠春 「うちに来るか？」

式 「は？」

こいつわかって言ってるのか？ 高位の魔であるエヴァと正体不明

な俺を招待するだと？

式 「お前はわかっているのか？ お前がしてい

詠春 「わかってるよ、けど困っている人に手を伸ばすのは当たり前だろ？」

……ここで訂正する、父さんは父さんだったよ。
今も昔も他人のためなら自分が不利なカードすらきれる、ふふふ、
やはり三つ子の魂、百までと言うのが本当だな。

式 「……本当にいいのか？」

エヴァ 「おい、私を無視して」

詠春 「いいよ、さあ行こうか」

チャチャゼロ 「ケケケ、マア頼ムゼ、ガキ」

詠春 「うわ、人形がしゃべった?!?!」

エヴァ 「私を無視するなああああああああ!!」

「……………でさえ」
「……………そんなこんなで青山家」

詠春 「まあ、な」

エヴァ 「素晴らしい、やはり日本の建築は良いものだ」

なんかエヴァが感銘を受けているが……チャチャゼロは寝てる、寝てると言うよりも力をためているような感じだ、つまり魔力を補給しているそうなんだが……時々「ブツタギリタイ」「殺シ合イダ」とか物騒な事ぬかしているんですが?!!

詠春 「さあ行こうか」

そんなこんなで例のごとく、とてつもなく長い階段を……上るかあああああああああああああ!! 飛ぶよ! ぜってい飛ぶ! さあ行くぜ!! I c a n f i

エヴァ 「上らんか! 馬鹿者!!」

ロリハバア
金髪幼女に首根っこ掴まれて引きずられたよ、い、痛い段差、段差あああああああ!!!

式 「らめえええ、仮面が壊れるううううう!!」

エヴァ 「やめろ!! 変な声を出すな!!」

バキ!! パリーーーーン!!

あ、仮面が……狐があああああああああああああ!!!!

式 「この幼年増があああああ!! なにしてくれるんじゃないあああああああ!!」

エヴァ 「うるさいわー!! この変態仮面信者め! 仮面の幻想に抱かれて溺死しろ!!」

式 「いい度胸だなあ、このファンシー趣味が!! 六百歳が聞いてあきれぬぜ? お前の別荘の部屋には部屋中にぬいぐるみがあるだろうが!! 歳考えろ!!」

エヴァ 「なっ?!!! 貴様だって別荘の部屋には武器やわけのわからない物があるだろうが!!」

式 「ああん?! 六百歳になっても人形集めてる方がドン引きだよ!!」

エヴァ 「貴様だって何が楽しくて仮面を作ったり、収集してるんだ!! 薄気味悪いわ!!」

詠春 「あ、あのさ」

式&エヴァ 「なんだガキいいいいいい!!」

詠春 「式さんって女だったのか?」

式 「は?!」

エヴァ 「ククク、クハハハツハハ」

詠春 「え? だってその顔は完全に」

式 「詠春、俺はなあ……」

俺は右手に魔力を集中させて力を込める。

詠春は気付いたのか謝ろうとするが……少し頭をHIYASOUK

A

式 「男だあああああああ……！ ていーりんくなっこお
おおおおおおおおお……！」

詠春 「イエアアアアアアアアアア……！」

見事なアッパーカットが顎に決まり、詠春の体が浮き上がり叫び声
を上げながら吹っ飛んでいき途中の階段に当たる。

……自業自得だ。

作 「へ？」

刹那&素子 「作者」

ガイアメモリ 「WOLF(SWORD)MAXIMUM
D R
I V E」

作 「え、あ」

ティウンティウンティウン

作 「ミンチよりもひでえや」

刹那 「作者さん？ 出してくれますよね？」

素子 「というか出せ」

作 「ハハハハハ、ダササシテイタダキマス」

木乃香 「閑話やね、ほんとにやるんやろか？」

作 「ハイ、アトニワグライヤッタラヤラセテモライマス」

刹那 「いったい何の閑話する気ですか？」

作 「とりあえず夷が消えた後の話」

素子 「私たちの活躍にも書いてくれるよな？」

作 「……………」(ぶっちゃけ、夷のせいで原作よりも強くなってるんだよなあ)「」

夷 「では次回予告、そうだ強化しよう」

木乃香&素子&刹那 「……しめが!!」「」

作 「それではじ」

木乃香&刹那&素子 「……作者のせいだ!!」「」

作 「なんでだああああああああああああああああ!!」

うわああああああああああああ!!

刹那 「では次回もよろしくお願いします」

木乃香 「で、その作者はどうしたらいいんや？」

素子 「つぶせばいいんじゃないのか？」

作 「……………」ひでえ」

そっだ強化しよう(前書き)

すみません、タイトルと内容があっていません。

本当にすみません、何回タイトル詐欺してんだ俺?! と自己嫌悪に陥っております。

ここ最近は何語を見たり……戯言シリーズを借りて読んだり、モンハンしたり、ニコニコする動画を見たり、仮面ライダーで「ラトラーターが!」と、本当にすみません。

今回は盛大な原作ブレイクがあります、こんなのは認めない!! とか展開が嫌だという人はバツクで戻ってください。

しかしこんなの全然OKと言う人はそのまま進んで読んで行ってください。

いいですか? では!!!!

そつだ強化しよう

よお夷だ、俺が何をしてるって？

詠春 「う、うおおおおおおお！！」

式 「甘いんだよ、バカ正直に突っ込んでくるな」

はい、なぜか自分の未来の父親を鍛えています。

なぜか？ ああそれは三日前なんだが……俺が青山の本家に行ったら斬りかかれた。なんでもエヴァの魔の気を感じ取ったらしく、神鳴流総出でこられたよ。さすがに奥義十連続とか死ねる、適当に「菊」で刀折つて、神鳴流の技使ったりして殲滅したよ。

そしたら俺の祖父である……まあ関西呪術協会の陰陽師やら呪術師やら鬼やらが来て……誤ってリミッター一つ外しちゃった。その結果関西呪術協会壊滅です、はい完膚なきまでに叩き潰した。

そりゃあ両義だけだぞ？ 使ったのは！ 零崎なんざ使えるか！！ばっさばさと敵を倒し続け、気付いたら壊滅させてた……なにしてんの、俺。まあなんとか誤解をとりて青山の家に行きましたよ、まあすごい微妙な目で見られたけど。詠春なんかこんなことになるなんて思わなかっただろうな。

そんなこんなで修業することになったんだが……周りの神鳴流の方々も教えてますよ、そりゃ俺は一人で壊滅させちゃったしなあ。ちなみに今日は犬の仮面をつけている。

詠春 「斬岩剣！」

式 「斬岩剣（弱）」

詠春の最大の斬岩剣を俺の最少の威力で放った斬岩剣で打ち消す、
すげえ残念な顔してんだが詠春がな。そりゃあ、自分の全力を最弱
の威力で消されたこうなるか。

そのまま木刀で打ち合いながら秘剣を出していく詠春、俺はそれ
をすべて木刀で受け流しなら、隙があれば頭を叩くということを持
ける。

詠春 「いた！」

式 「踏み込みが甘いし、なにより気の操作が雑だ」

詠春 「少しは褒めてくれよ……」

式 「褒めるほど何かしてねえだろう？」

そんな軽口を叩きながら進めていく。

ちなみにエヴァは俺の分身体と一緒に京都に繰り出している、俺も
行きたいが……まああれだ、壊滅させてしまったという負い目もあ
るしなあ。

修業に付き合うのっていうのが俺の罪滅ぼしなんだしなあ。

? 「先生！ 式先生」

式 「なんだよ、明人^{あきと}」

明人 「いや、長が呼んでるから呼びに来たんですが」

ああ、こいつ？ ^{あおやまあきと} 青山明人、未来で素子と鶴子姉さまの父親になる
はずの男で、現在12歳である。

あの壊滅事件で大人の中に混ざって俺に挑んできて、ボコボコにし

たら「先生」と呼ばれた。なんだ？ マゾ？ マゾなのか？！ まあすじもいいし、強くなるだろうなあ。

式 「了解」

詠春 「ま、待ってくれ師匠！ 俺のしゅぎよ」

木刀 「EXCCD CHARGE」

ああ、この木刀？ 神木だけだと面白くないから、ファイズみたく拘束できるようにしてみた、そのとき衝撃波で拘束するんだが……音声も入れたら面白くな？ と思って入れてみた。

詠春 「ちよつとお！ 動けないんだが？！」

式 「ちえりお！！」

ズドンと腹に鈍い音と共にパンチする。明人の顔が引きつっているが気にしない。

崩れ落ちる詠春をしり目に歩き出す、俺。

明人 「容赦ないですね」

式 「え？ あれでも手加減の二乗ぐらいしてるんだが……本気だしたら、地球の裏側の人間すら打ち抜けるぞ？」

明人 「……冗談に聞こえないんですが？」

式 「マジマジ、大マジのマジ」

柳緑花紅を使えばできるしな、なんだ？ 明人がすごく落ち込んでいてため息ついてるんだが？ どうした？

明人 「……あなたは本当に規格外だ」

式 「一応まだ人間なん……だ……が？」

なーんか自信失くしてきた、この頃腕が消滅しても三秒程度で回復してるしなあ。どうしようか……今度魔眼で解析してみるか？ やめとこ、なんか驚きそうだし。

明人 「三日前に関西呪術協会を壊滅させておいて、よく言いませぬ」

式 「いきなり襲ってくる方が悪いが……すまん、あれは仕方ない、リミッターが一つ外れたせいだ」

明人 「あ、あれよりさらに上があるんですか？」

式 「その通りだ…… H A H A H A」

まあ現在進行形でさらに実力が上がっているんだがな。

そんな談笑をしていると、長の部屋につく、ちなみに長は俺のせいで全治一週間のけがを負いました、腰が砕けたらしいが大丈夫か？

明人 「では僕はこれで」

式 「ああ、サンキュー」

明人 「ああ、そうそうそういえば」

式 「なんだ？」

明人 「なんで気合入れるときに『ちえりおー』って言うんですか？」

式 「それはな……」

明人 「それは？」

式 「ぶつちやけるとチェストとちえりおを聞き間違えただけ」

盛大にすつころんだ明人……大丈夫か？

そんなことを思いながら長の部屋に入る、いたって普通の和室だが防犯対策やら盗聴対策、呪術対策に魔法障壁やら……とにかく防犯体制がえらいことになっている。そして机と部屋の中心に布団が敷いており、そこに寝ている少し頭の髪の毛が白くなりかけているのは……俺の母さんの母親である近衛栄子である、このえいじ本当にあの時はすいませんでした。

栄子 「あら、来てくれたのね」

式 「ああ、で要件は？」

栄子 「やはり仮面はとつてくれないのね」

実はこの人には俺は会ったことがない。実はこの人は俺が拾われる十年ほど前に病死している。じいさんや母さんに聞いたが……雲のように掴みどころがわからん人だったらしい。

式 「だから言っただろ？ 顔の傷を見せたくなんだよ」

詠春には口止めしといたよ……いつか記憶消さなきゃなあ。つうかここに居ること自体、俺ヤバくね？
まあ世界の修正力がどれほどかわからんが……クククク、抗ってやるよ。

栄子 「いいわ、けれどいつか見せてね」

式 「死ぬ時くらいに見せてやるよ」

栄子 「私は死なないわよ？ けどあなたに蹴り碎かれたときは死を覚悟したけどね」

式 「すまん、本当に。つうかあの状態は手加減が効かないんだよ」

栄子 「ええ、あそこでやめておいた方がよかつたわ……」
「ちえりおー！」で神を倒したなんて……」

……なにも聞かないでくれ、ただ暴走した呪術師が……なんだっけ？
りょう……リョウメンスクナノカミだ！ その封印解いて、俺もろとも京都がえらいことになるどころだった。まあ、その時のダイジェストをどうぞ。

「……………ダイジェスト」

式 「こ、こんくらいでいいだろうっ？」

神力を乗せた声で術式を破碎させる……これはマジで自分でも驚いているよ、いやあなんかどっかの零崎がやってたような気がする。……今は両義だし、人死には出してはいないはず……。そつえば……エヴァなら別荘に押しこんでいる、まあ無理やりだが……。

栄子 「なんてむちゃくちゃな……」

式 「（自分でもそう思うよ！！）」

呪術師 「くそお！！このままでは！！」

そのときとある湖から光があふれ出した。

それと同時に俺並の神力があふれ出す、その光が天に届き何かの姿を現す。それは伝説とされたはずの……鬼神、1600年前に討ち倒された飛驒の大鬼神である……

栄子 「リヨウメンスクナノカミ？！なぜですか？封印されていたはず」

式 「ち！！なんかやべえな！」

まだ目覚めていないみたいだが……本格的に暴れだしたらここら一帯は消し飛ぶだろうなあ。どうするか？神を殺すか？

栄子 「無理です、今の私たちでは……」

式 「なあ、栄子とか言っただけ？」

栄子 「なんですか？無駄な会話をしてる暇はないんですが？」

式 「あれを『殺してもいいか?』」

まあ耳を疑うよな……俺には降りちまった神を再び天に戻せないし、そんな技術は知らんし興味がない。ここで封印するよりも殺した方がいいだろう。

栄子は俺の顔を見て、信じられないような物を見るように見る。

栄子 「無理です……人間が神に勝てる筈がない」

ふうん、人間で勝てないのか……なら

虚識 「殺人鬼なら大丈夫だろ?」

栄子 「いった なんですか?! この妖気は?!?!」

さあさあ盛り上がってきましたよ、ああ早く、早く、殺し合いたい
!!!!

虚識 「黒式・二解除」

そして俺の体から真っ黒な妖気があふれ出し、目が黒くなる。

そして心の中が真っ黒な何かに侵食される感覚がする。

栄子 「その……力は?」

虚識 「さあな、だが俺は生きていれば神だつて殺し切る男だぜ
?」

そんなことを言っているとリョウメンスクナノカミから膨大な神力

があふれ出し、空気が振動する。次の瞬間耳をつんざくような声が響き渡る。
完全にはないが復活したようだ……まあ関係ないか殺すんだからな。

栄子 「……信じましょう、あなたの力を」

虚識 「至極承知、ではその信頼に答えようか……」

俺はゲートから妖刀と小太刀を出す。触れた瞬間に黒く染まる二刀の刀……まあ神殺しの刀として申し分ないだろうな。

虚識 「まあ行ってくるぜ」

そのまま妖力で空を飛びリヨウメンスクナノカミの目の前まで行く。するとリヨウメンスクナノカミの体が動きだし、戦闘態勢に入ったようだ……やる気か？ まあ神って言っても人工的な神なんだからあの神様より神力の密度がそんなにあるわけではないな、まあ明らかに自我がないしな。

ちなみに今の黒式は純粋な神力と妖力で構成しているので、一種の墮神となっている。

俺は黒の仮面と魔装束（いつもの黒いコート一式）に着替える。

虚識 「まあ無駄だと思うが……一応名乗っておこう」

目の前の鬼神は沈黙している。

虚識 「俺の名は零崎虚識……普通の殺人鬼だ」

リヨウメンスクナノカミ 「GYAAAAAAAAAAAAAAAAA

AAAAAAAAAAAA!!!!!!」

名乗りの代わりか、めっちゃ大きな声を出しやがって!!!!
うるさいなあ、まあいいや、それでは……

虚識 「では神を殺すために……零崎を始めますか」

リヨウメンスクナノカミ 「GAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA
AAAA!!」

鬼神VS殺人鬼の戦いの始まりだ!!

まずはリヨウメンスクナノカ 長い!! スクナでいいだろ!
スクナの拳が飛んでくるが片手で受け止める! すさまじい力に少
し後ろに下がる。

虚識 「ぎゃは……」

笑い声が口から漏れ出す、久しぶりどころか初めてだ……こんなに
俺に衝撃を加えたのは!! ちなみに言っておくが簡単に止めたけ
どあれでも山ひとつくらいは決り取れるよ?

虚識 「最高だ! さあ殺し合いを始めようかあ!!」

俺はスクナの拳を蹴り飛ばし、そのままバランスを崩したスクナの
体に怪で斬りつける、バターの^{あやし}ように切り裂ける。

こんなもんか? 絶叫するスクナは右手を振りかぶりながらその巨
大な拳を俺に向けて振り下ろした。

しかしそれを刀で受け止めながら、俺は秘剣を出す。

虚識 「黒式奥義、二の技……幻魔斬」

スクナ 「ナメ……ルナ」

虚識 「覚醒しだしたか……だがなあ、俺が居たことが運のつきなんだよ！……！」

まったくだ、これで普通の術者だったら封印してくれるんだがなあ。俺は殺すさ、神だろうと聖人君子だろうが俺の敵は……殺す！！

虚識 「小便は済ませたか？ 神様にお祈りは？ 部屋の隅でガタガタ震えて命乞いする心の準備はOK？ っってお前が神だったな……自身に祈れ、虚刀流最終奥義」

今度こそ四の奥義『柳緑花紅』から放たれる、虚刀流の奥義を強制的に接続する鑪七花が作り出した奥義。ためが必要だが……あいつにとっては走馬灯でもできるだろう、あ、そうだあいつ今まで寝てたから走馬灯できるのか？ まあいいや。

虚識 「七花八裂（改）」

『鏡花水月』 『飛花落葉』 『落花狼藉』 『百花繚乱』

錦上添花』 『花鳥風月』と『柳緑花紅』から強制接続する奥義だ。これが一番強い組み合わせらしいが……それをスクナの体に叩き込む。

もはや残像を残しながら叩き込むが最後の『花鳥風月』を叩き込む前にスクナを一瞬見る、全身に奥義を受けてめっちゃ痛々しいが……まあいいだろう、天に還りやがれ。

虚識 「最後だ！ これが殺人鬼からの手向けだ！ ちえりおー！……！……！……！」

そしてスクナの顔面にぶち当たった『花鳥風月』がスクナの頭を粉砕する、そして崩壊していくスクナ、最後にあいつは何かを言ったなあ。

スクナ 『殺シテクレテアリガトウ』

殺人鬼なのにそんなこと言うな、悲しくなるだろうが……。まあそんなの……

式 「戯言だけどな」

「……………戻るよー！」

式 「軽く思い出して鬱になってきた」

その後、スクナは消滅したんだが……あの野郎、俺に神力を渡しやがった。最大値が増えたよ！ もう人間か、俺は？！ もういやだ……

栄子 「いいじゃない、まあ神に勝てる人間（化け物）がいるなんて世の中広いわ」

式 「おい、てめえ今なんか入れたよな？ 入れたよな！！」

栄子 「ゴホン、では呼んだ理由を言いましょうか」

式 「ちっ！ まあいいでなんだ？」

栄子 「これから来る、関東魔法協会の軍勢を撃退してもらいたいです。これは現関西呪術協会長、近衛栄子の……零崎虚識への依頼です」

式 「……いいのか？ 零崎と言うことは」

栄子 「いいのです、夫である近右衛門が流してきた情報なんです……どうやら私たちが壊滅状態をいいことに一部の強硬派が暴走したらしいのです」

式 「数は？」

栄子 「魔法世界からの援軍も入れると五百以上でしょう」

式 「待てこれはあんだだけの依頼じゃないだろう？」

栄子 「ええ、麻帆良の穏健派……いえ連合の中立派からの依頼なのです」

式 「……そいつらの事を消したいと？」

栄子 「ええ、しかし女はいません」

式 「……闇に葬れと？」

栄子 「はい、それにあなたに対してもメリットがあります」

式 「メリット？ デメリットの間違いだろ？」

栄子 「連合は一時的にならあなたの賞金と『闇の福音』の賞金を期限付きで凍結すると……」

式 「信用ならねえ、連合が約束を守ると？」

栄子 「今は！！ 関西と関東の関係が悪化すれば、本国である連合も少なからず影響を受けます……」

式 「……今は勢力図を塗り替えるときではないと？」

栄子 「そうです！ ですか 「だがなあ！！」

俺は栄子の首に鋼糸を巻きつけて殺さないように力加減をする。
ふぎけんな、結局尻拭いじゃねえか…… 本当に滅ぼせばよかったかもな。

式 「お前は『零崎』をただの殺人鬼か何かと勘違いしてないか？」

栄子 「カ、ハア……で、ではなんなの、です、か？」

式 「ただの自分の欲求を満たしてる……普通の人間だ」

栄子 「カッハッ、ハアハア、そうですか……では依頼は」

式 「いや？ 受けるよ？」

栄子 「そうですか、受けて……ええ？！……」

何を言ってるんだ？ こいつ、あんたから言ってきたのにねえ。

栄子 「しかし、今までの会話からすると拒否するのかと」

式 「まあな、気が変わった……まあエヴァの賞金がなくなればいいいな」

栄子 「……扱いづらいですねえ」

式 「俺でもそう思う……でいつなんだ？」

栄子 「すでに麻帆良を出ているそうです、今は岐阜に居るそうですが……」

式 「そいつらを消せばいいのか？」

栄子 「……はい」

式 「至極承知……準備万端、では行くか」

栄子 「は?!」

式 「え？ だって岐阜だぜ？ そこでやればいいんだろ？」

式 「すごく驚いてる顔してるけど……いや準備は終わってるしな。」

栄子 「……本当にあなたは規格外ですね」

式 「当たり前、まあいいや」

パチンと指を弾いていつもの恰好と仮面を被る。

まあ、あれだこれが仕事着になってきてる。……完璧に暗殺者だよ、俺。

栄子 「すみません……元々が私たちの責任なのですが」

式 「まあ、ぶっちゃけ俺も途中からフルノリしまくって奥義使いすぎたのが悪い」

確か百人くらいの神鳴流の師範代が病院送りとか聞いたんだが……やりすぎた？ やっぱり。

栄子 「では依頼の達成をすれば、あなたとエヴァンジェリンはこちらで身元は預かるということで」

……全く食えねえババアだ、俺たちを匿うってことはそれ相應のリスクがあるが、「闇の福音」を手元のカードにできるってのはでかい、まあ政治的に利用されたら殺すが……。
つてこいつは死ぬんだっとな、まあいいさ。

式 「んじゃ行ってくる」

そんなこんなで転移術式を発動させながら栄子に言うと、あちらは笑顔で言ってきた。

栄子 「では行ってらっしゃい」

……訂正、ばあさん、あんたは死なせたくねえな、一応俺の祖母だしな。

エヴァ 「うるさいわー!!」

まったくオリジナルと全く一緒にイライラする、チャチャゼロはいつ通りあいつの頭に居るんだがな。

寝そべっている、うらや……ゲフン！ まあこいつも仮面を被っているから周りから変人扱いされるしな、この頃は服も着せてないし……イライラしてくる。

式 「おい、なんか不機嫌だぞ？」

エヴァ 「……なんでもない」

式 「だが……」

エヴァ 「なんでもないと言ったらなんでもないんだ！」

式 「……そろそろ飯でも食べるか」

エヴァ 「……ここを出たところに確か飯屋があつたな」

そういえばこいつ、三日前にここにある組織を潰しているんだが……大丈夫なのか？ 人死は出してはいないはずだが……。

そんなこんなで飯屋に来たんだがさあどの料理にしようか……。

式 「ふー、ふー、ふー」

チャチャゼロ 「マツタク組織潰シタ男ガ、猫舌ナンテ信ジラレナイヨナ」

式 「うっさい、昔からこうなんだ!!」

こいつは熱い物が駄目らしいのでお茶とかも、実は冷気を出す術式で冷ましている……才能の無駄遣いだな。
私はそば定食を頼み、式は普通に鮭定食にした。

エヴァ 「まったく……その猫舌は治せないのか？」

式 「神（作者）にダメって言われて無理」

……仕方ないな、にしても料理が出てくるのが遅いな。

エヴァ 「まったく店の料理は出るのが遅い」

式 「……おばあちゃんが言っていた」

たまにだがこんな感じで天に右手を上げて、ふざけたことを抜かす……微妙にあってるから困る、その「おばあちゃん」とは一体誰なんだ？

式 「美味しい物を食べるのは楽しいが、一番楽しいのはそれを待ってる間だ」

エヴァ 「いつも思うがお前のその言い方はどうにかならないのか？」

式 「仕方ないだろ？ まあいいさ飯もきたし食おうか」

……こいつ、そういえば影分身なんだから多少変なことを言っても大丈夫だろう。
消える存在だしな。

エヴァ 「なあ式」

式 「ぶぐうあがう（なんだエヴァ）」

エヴァ 「私はお前のことが好きだ」

|||||式視点（本物）

へくしょん！ ああ、なんか無茶苦茶ヤバいことカミングアウトされた気もしくないが……ああ、俺？ 今は

魔法使い 「いったい貴様は誰なんだ？！！」

ああはい、魔法使いの大軍と接触しました。

座標ミスって前に出ちゃってなあ、ヤバイヤバイ。

式 「えー、まああれだ、通りすがりのか 「魔法の射手、火の30矢」 「聞く耳ないか」

俺に向かってくる、魔法の矢総勢で五百以上、まあ普通にやったら串刺しな愉快的な死体が出来上がるな。しかしまあ一人の人間にこれはやりすぎじゃないだろうか？

魔眼を解放して、吸収する。

式 「術式吸収……『魔法の射手』」

五百分の魔力を吸収するが……そんななかったなあ、実力が無い奴らばっかなのか？ 五百人分にしては少ないような気がするが……。

魔法使い2 「おい、待てよ。あの黒い服に仮面……黒の死神じゃないのか？」

魔法使い3 「け、けどよ、あの黒の死神だってこの数なら……！」

おめでたい奴らだ、まあ一応警告しておいてやろう。

まだ零崎を始めていないからな。

式 「あー、まああれだ、ここでしつぽを巻いて逃げるなら逃げる。別に俺は追わないし、殺さそうとしない」

魔法使い 「バカを言うな！！ 我らは正義の魔法使いだ！ それに今が関西にいる、邪魔者を排除するチャンスなんだ！！」

……OK、俺は警告したぞ？ ちゃんとしたからな？
では……

式 「依頼だから……恨んでくれたって構わない、まあ最後通告だ。後三十秒で逃げなかった奴は全員殺す」

さあ三十秒間で何人逃げるかな？

まああれだ、ガチガチの正義信者たちは必死に俺を殺そうと俺に魔法を打ち込んでくるがな、俺はそれを結界で防ぐ、上位魔法を放ってくるけど……これ、古代魔法三十発撃って壊れる程度の強度だからなあ、三秒くらいで編んだ術式だから。そこまで強度ないんだよ。

まあ後十秒なんだが、全員で頑張って俺の結界を破壊しようとして躍りになってるが……悪いが時間だ。

虚識 「んじゃ、殺して解して並べて揃えて晒してやるっ……さあ零崎を始めますか」

まあ、ここでのことを話すと味気なさすぎるからカット。

まあ簡単に言くと古代魔法で消し去ったよ。ただそれだけ……残った人間『だった』物を処分して、転移で帰ったんだが……問題はここからだ。

京都に転移してたら、処理に戸惑って意外と時間がたち夜に帰って栄子に報告して連合の使者と会話して「最高で三十年、最低で十年間は賞金を停止」させるとOHANASHIして決めさせました。

大丈夫大丈夫、約束やぶつたら古代魔法を撃ち込むとか、鋼糸でバラバラにすんぞ？ とか言っていないよ？ ほんとだよ？

ゴホン、まああれだ、俺は青山の家に泊まっているんだが……金は払ってるよ？！ まあ能力で作ればいいことだ。クハハハハハ！！
！ ……自重しよう、今度から神鳴流の依頼とかもらって仕事行こう。

まあまあここまでは概ね順調に進んだよ、部屋に帰って俺の分身体であるフェイクと会ったんだが……ああこいつは、俺の十分の一の実力しかないが神鳴流の師範が10人で戦ってやっと勝てる程度の実力はある。一応は俺の記憶もあるから、ほんとの俺みたいだ、まあ耐久値もそこそこ……そいつに今日一日の報告をされたときに……。

式 「で、報告は？」

式^{フェイク} 「ああ、あれだエヴァが清水寺の舞台から飛び降りよう……

式 「どうしてそうなった？」

フェイク 「ああ、なんか。詠春と一緒に修業をせがまれてな、で修業場所に行ったら生き残った師範代と鉢合わせてしまったな」

なんでもそこから口論となり、師範代たちが木刀で殴りかかって来たらしい。

そしてエヴァに勝てるわけもなく（結構若い奴らだったらしい）合気道でバツバツサと投げてまくったらしい。

式 「いいじゃないか？ 別に悪い事やってないだろ？」

フェイク 「いや、それが……なんかあっちの火をつけちまって式オリジナルが決闘することになった」

はい？ なんか俺の耳が悪くなったか？

式 「なぜ？」

フェイク 「あれだ……どうもあの五人はあの壊滅事件に関わっていないらしくて」

式 「ああ、そういうこと。で日時は？」

フェイク 「一か月後の正午に」

め、めんどくさいなあ、けどまあいいや。

式 「良い方は？」

フェイク 「エヴァから告白されました、多分お前にだと思っ」

式 「は？」

え？ なに？ は？ ちよ。

式 「冗談だろ？」

フェイク 「ほんとだ、色男。どうやら……本気らしい」

……マジかよ。

フェイク 「エヴァならいつもの部屋に居るから行って来い」

式 「お、おい！！ 俺は！！！」

フェイク 「おばあちゃんが言っていた。男と女は時として化学反応を起こす。何があってもおかしくない、まあそういうことだ、役目は果たしたぞ？」

煙が出て消える式……冗談だろ？ エヴァが俺を？

まあ気の迷いだろ？ ……まあ行ってみるか。

俺は寝巻の着物に着替えながら猫の仮面をかぶって廊下に出ながらエヴァの部屋にノックをする……ふすまなんだがな、ちなみに部屋は隣だ。

式 「おーい、エヴァ入るぞ？」

ふすまを開けるとこれまた着物を着たエヴァが酒を飲んでいた。

俺に気付くとほんのり赤い頬をしながらこちらを見る、その顔には少し驚きと羞恥が入っていた。

エヴァ 「な、なんだ珍しいな」

式 「あ、あのさ、今日フェイクと一緒に居たよな？」

エヴァ 「あ、ああそれがどうした？」

式 「……間違っていたらすまんが今日、あいつに告白しただろ？」

そう言うとエヴァの顔が赤く染まっていく、反応からビンゴだな。マジかよ、冗談で欲しかった。

エヴァ 「な、なぜ……それを?!」

式 「い、いや今日あいつからの報告を聞いてだな」

やべえ、なんか緊張する!! ……落ち着け、落ち着け。

心臓がバクバクしてる、俺が告白されたわけじゃないだろうが!!

落ち着け! 前世と数えたら三十路いつてんだぞ!!

式 「まあなんかの間違いだ「その通りだ」

エヴァ 「その通りだよ、式い」

次の瞬間、俺はエヴァに押し倒された。

いやちよつと待てえええええええ!! なに? 幼女に押し倒される男ってどうよ!! さらに真祖の筋力でまったく動けない!!

くそー!! あんまり力入れたらエヴァを傷つけてしまう。

エヴァ 「最初から躊躇せずに不老不死にしてしまえばよかったんだ」

式 「え、エヴァ落ち着け!!! 喝!!!」

エヴァに向けて気を込めた声で吹き飛ばす。一応部屋に防音の結界も張ったし、外に漏れることはないだろうな、エヴァが俺の体から離れて部屋の壁に当たる。

すかさず、俺はこの前魔法使いから見取った術を使う。

式 「戒めの光矢!!!」

一回しか見てないから結構ヤバいが重ねて十個くらいやっておけばいいよな。

エヴァ 「くっくっ!!! 離せ!!! 式い!!!」

式 「エヴァ、今解いてや」

エヴァ 「違う! 最初は薬の力だけど途中からは本心からなんだ!!!」

式 「エヴァ?!!!」

どういうことかい、え? ということは途中から? いつから?!!!

エヴァ 「……仕方ないだろ? お前だけだったんだ、六百年以上生きて私を完全に受け入れてくれたのは……」

式 「エヴァ……」

エヴァ 「最初は京都から出たらお前と別れるつもりだった、お前は寿命がある人間だ。早めに別れた方がいいと思っただ」

式 「で、フェイクに告白したのはなぜだ？」

エヴァ 「……影分身と言っただろ？ そんなことを報告するとは思っていなかったんだ」

式 「……マジかよ」

エヴァ 「ああ、それから薬を渡されてな、飲んだら自分が抑えきれなくなっただ。結果は……ごらんの通りだよ。欲望に負けてお前を襲ってしまった」

エヴァの体から力が抜ける、目からは涙があふれていた。

……おいおい、頼むよ、泣くなよ。

式 「エヴァ……」

エヴァ 「すまん、迷惑だよ……私の欲望を満たすためにお前を眷属にしようとしたんだ。最低だ……お前を不死の化け物にするところだったんだ」

式 「あ、あのさ」

やっべー、言うの忘れてた……まさかエヴァ、俺を普通の人間だと思っていたのか？ いやーうれしいね、なんかここだけ普通の人間

エヴァ 「……私はどんな答えでもいい、しかしちゃんと答えてくれ」

式 「(まったくあの偽物は……面倒なことをしてくれた)俺は……」

……ほんと面倒だ。

式 「エヴァ……」

エヴァ 「なんだ?」

式 「俺は……まだわからないんだよ」

エヴァ 「は?」

式 「い、いや、あれだまだお前のことが嫌いか好きかどっちかわからないんだ」

エヴァ 「なんだ? 優柔不断か? 生殺しを私にさせるのか?」

式 「素直な気持ちを言うとエヴァの気持ちは嬉しいし、こんな美少女に告白されたなんて……男冥利に尽きる」

これは素直な気持ちだ……まあ外見はまだ十歳程度の子供の姿だけど、美少女だと言うことはほんとだと思う。

エヴァ 「ま、待て! うれしいが……受け入れてくれないのか?」

式 「そうじゃない、まだ判断しきれないところがあるんだよ」

エヴァ 「つまり……まだ私への気持ちが変わらんと?」

式 「まあそうなるな」

優柔不断、ヘタレと言われても仕方ないと思う。
つつか言われなきゃおかしい、ヘタレだろ、俺。

エヴァ 「……一か月だ!!」

式 「何がだ?」

エヴァ 「一か月の間にお前は判断しろ!!」

……え、マジでか? 一か月で決めると?!

エヴァ 「一か月後、この部屋で私はお前の判断を待つ!!」

……どうやら一か月後、別の意味で俺は決闘しなければならないよ
うだ。

こっちの方が厄介だよ……頼むぜえ、フェイクは後でお置きしよ
う!! 絶対だ!!

そつだ強化しよう(後書き)

作 「今日のーネギラジオ、ゲストはこいつ」

フェイク 「よお、夷^{フェイク}だ。つうかテンション低いな!!」

作 「今週のオーズ(仮面ライダー)で……ラトラーターコンボの扱いが酷くて、さらにやっと出たグリードの完全体の扱いだよ、あれはひでえと思ったよ」

フェイク 「ライダー好きだよな」

作 「クウガから見てるんだよ、最近昭和も見直してる。仮面ライダーBLACKのキレがやばい、あれを最近の仮面ライダーに見習ってほしい」

フェイク 「ここににして、今回は色々とチャレンジしたな」

作 「批判も覚悟してる、盛大に原作ブレイクと強引な展開だったしな」

フェイク 「まあ俺のせいなんだがな」

作 「……最初はお前はこの話以外は出さないつもりだったんだが」

フェイク 「え? どうしたの?」

作 「準レギュラー入り」

フェイク 「マジでか?!?!」

作 「ああ、お前には重要な役割をしてもらおう」

フェイク 「いいのかそんなこと言って?」

作 「結構後だから気にすんな」

フェイク 「で、エヴァの扱いは?」

作 「……正直今回でちゃんとしないといけないなあ、って思った
らこうなった」

フェイク 「つつか、今回は原作崩壊がひどかったなあ」

作 「ふつうに夷の実力ならあのくらいの事起きるだろうしな」

フェイク 「……さいで」

作 「まああれだ、今の夷は零崎になりたてなんだよ」

フェイク 「どういうこと? 覚醒したのは五歳の頃なんだろう?」

作 「まあな、けどエヴァとの出会いまで全然殺していなかったんだ」

フェイク 「え? それだと結構やばくね?」

作 「まあ今は大量に殺してるから安定してきてる」

フェイク 「俺には大丈夫だろうな」

作 「大丈夫だ、お前は『両義式』の部分で作られた奴だから……」

フェイク 「一安心だよ、俺も零崎になるんなんて嫌だからな」

作 「まあそんなだが……ここ最近、オーズが面白くなってきているから文章が書ける、書ける」

フェイク 「で、全部消えたと……」

作 「ああ、今度の閑話で使おうとした奴もな」

フェイク 「どんまい、では次回予告、決闘のSノ選んだ答え」

作 「では次回も」

フェイク 「見ないと魔法の射手をぶち込む」

作 「……さあて、これからファイズとアギトを見よう」

フェイク 「お前ほんと好きだなあ、ライダー」

作 「今再放送してるからな!!」

フェイク 「はあ、こんな作者だが……見捨てずに見てやってほしい、それでは次回まで!!」

作 「さようならー」

決闘のS / 選んだ答え（前書き）

すみません、今回は夷の選択と色々詰め込みすぎて過去最長となっております。

それに慣れないことをしたので……うーん、微妙かもしれませんが楽しんでいってください。

原作ブレイク、ライダー登場どんとこいやー！！　な人はお進みください。

嫌な方は戻ってください。

いいですか？　では始めましょうか。

決闘のS / 選んだ答え

ぐつともーにんぐ、夷改め式だ。ああ、すまんすごいテンション低いのは……スルーしてくれ、ああはい、もうこの頃は別荘に入って一人授業してますよ。

主に零崎の殺人衝動を抑えるために色々頑張った、フェイク……俺の分身体に手伝ってもらったよ……クククカカアハハツハハツハハ！……あ、やっべ、ゴホン。
ではダイジエストでどうぞ

|||||ダイジエスト

虚識 「フェエエエエエエエエエエイククウウウウウウウウウウウウウウウん……！」

フェイク 「悪かったから…… 落ち着け式……！」
オリジナル

虚識 「テメエエエエエエエエエエ、何してくれてんだよおおおおお
おおおおお……！」

フェイク 「しゃべり方……！ それとキャラ崩壊が……！」

虚識 「お前はマジで殺して解して並べて揃えて晒してやる……
零崎を始めますか」

フェイク 「ま、待て、何のムリゲーだ。周囲いっぱい鋼系の網
！ そしてどこぞの慢心王みたく空間から剣が飛んでくるし……！
避けられ」

だあああ！」

フェイク 「ちょ、待ってそれはキャラが」

熱い熱いいいいいいいいい！！！！！！

虚識 「ラストおおおお！！ 黒式・三解除！！」

フェイク 「くそう！ アイテムを」

虚識 「アイテムなぞ使ってんじゃねえ！ 破滅の完全破壊」
ジェノサイドプレイヤー

ぎゃああああああああああああああああああああ

||||||| 回想終わり

と、あんな感じで何百回以上、戦い続けたら制御に成功……ノリにノリすぎて別荘ver2も破壊してしまった。いやあ久々に頑張った、なんか途中から記憶がなくなってるんだが……まあ結果だけ言うとなフェイクが「ごめんなさい、ごめんなさい」とこんな感じで謝り続けているが何したんだ、俺は……。
なんかあいつも作って、三年たつが……個性出来てきたよな、あいつの仮面は俺が作った仮面を勝手にかぶるし、エヴァには薬渡すし、もうあいつ嫌だ。

詠春 「うおおー！！」

式 「……だから、突っ込むなと」

明人 「もらいました！ 斬が」

式 「はいはい、甘い甘い」

突っ込んでくる詠春に避けながら足をかけて転ばせて、明人には斬岩剣を放つ前に気弾を放ち、吹っ飛ばす。もちろん手加減してるぜ？ 今日猿の仮面だ。

明人 「うわ！」

詠春 「げふ！！」

式 「二人ともその年じゃ強いかもしれないけど……全然甘いぜ？」

詠春 「一太刀くらいは入れさせてくれよ」

明人 「いてて、その気弾どうにかしてくれませんか？」

式 「まったく神鳴流なんだから飛び道具くらいは避けてくれ、詠春は猪突猛進、つまり何も考えずに突っ込む癖をどうにかしろ」

詠春 「けどよお、俺はまだ六歳だぞ？」

式 「俺はその頃には父親に四六時中、命狙われたよ」

まあ、あれのおかげで魔眼に直死がついたんだが……少々そのせいで少し、少しだけだぞ！ 厳しくしてるが……才能がヤバい、なんだこいつ、教えたことをスポンジのごとく覚えていつてる、後数年後くらいには奥義は出せるだろうな。

式 「んじゃ、お前ら今日も重りを持って山十周な」

詠春 「またかよ……つうか何キロ？」

明人 「あきらめろ、詠春……どうせ二十キロだ」

式 「いや三十キロ」

明人&詠春 「無理無理無理!!」

修業開始から二週間、こいつらにはこんな感じで修業させている。
手合せ 走り込み 気の制御 休憩(飯) 手合せ 鬼ごっこ、と
まあこんな感じ……鬼ではないだろ？ これで俺の昔の修業を見て
みるか？

走り込み(重しありで三十周) 手合せ(師範代三人程度) 休憩
(だがたまに父さんの襲撃が) 木乃香や刹那、素子と遊ぶ(と言
う名のリアル鬼ごっこ) 鶴子姉様との武器使用禁止鬼ごっこ 母
さんに服を着せられる 風呂(ときどきどころか、必ず素子が居る、
たまに木乃香と刹那)……あれ？ 目から水滴が……これに比べた
らこいつらの修業がどれだけ楽か、手合せなんか俺に気強化無しで
戦えとかないわあ、勝ったけど……。

式 「行って来い、六歳の頃の俺の修業より楽だから……」

詠春 「し、師匠?! 震えてますよ?」

明人 「式先生を震えさせる修業を……いったい誰が?」

式 「(お前の娘と目の前のガキにだよ)」

仮面をつけてるっていいよね、表情見せないんだもの、楽で楽で見せたらヤバいんだがなあ。

式 「行けや、さつさと……行かないと鬼ごっここのときにアレより恐怖音出すぞ？」

詠春 「ハハハハ、イッテキマース」

明人 「デスヨネー、ジョウダンデスヨ、ハハハハイヤデスネー」

背中に重しを背負いながら走っていく詠春と明人、そうそううちの山は結構距離がある。さらにコンクリートで舗装されてないから足を鍛えるのもってこいだ。ちなみに4キロくらいはあるだろう、俺は一時程度で終わらせるよ？ 数百キロの重し持ってな。

……まああいつらなら四時間あれば終わるだろ？ そういえば後一週間で決闘と……あーうー。

思い出したら顔が熱くなったぜ……どうしようか、これから京都に一緒に行く約束してるんだが……どうしよう……！！

|| || || || || 詠春視点

はあああ、あ、青山え、詠春だ。息絶え絶えですまない。

つつかあの鬼、外道悪趣味かめ

詠春 「ぶべら?!?!」

いたー！ー！ー！！ なんか顔面にぶつかったんだが?!?! なん
だ?!!

と、思っで足元に落ちていいる何かを拾うと……扇子だった、で書か

れてる言葉が「お前、今日の鬼ごっこは修羅の仮面でやってやるよ」……終わった、アハハハ朝まで気絶コースだ。

明人 「詠春……どんまいだ、というか俺もとばっちりだよな?!」

すまん、明人……やばいよお、前に「この女顔鬼畜野郎!!」と言ったらすごく黒いオーラで「お前に相生拳法の神髄を見せてやるよ」と言われて……夜の鬼ごっこ言う名の拷問だよ!! 森の中だから暗いし!! 変な声、それに化け物!! (魔眼の幻術を使っています)そして常に後ろに気配を感じているのに誰もいないし、気を抜くと後ろに衝撃をくらうし!! でそれを朝までされたよ……そのせいで二日間くらいは後ろに気配を感じたら振り向いて攻撃するし!! もう最悪だった。精神的には強くなったよ、実力的にも……あの人は手加減がうまい、まああれだ。本人談なんだが「俺が本気でしたらこの世界滅ぶよ?」とか言ったから、笑えなかった。なまじ、手加減に手加減をかけて、手心までいれて、その上にリミッターまで入れて本来の得物使っていないし、魔力で刀の刃を包んで切れないようにした……らしい。

いやいや待ってくれ、あの人、めちゃくちゃ赤みがかかった太刀二本で、ばっさばっさと薙ぎ払っていたよな? 式神? 出された瞬間に衝撃破で戻されて、術を使おうとすれば魔法が飛んできて、数人がかりで結界に閉じ込めようとしたら掌底で打ち抜かれて……みんな絶望しきったよ。

あそこまでボロボロにされたのは初めてだったんじゃないか? さらに独断で復活させたりヨウメンスクナノカミをあっさり天に還さ……いや、殺したんだっけ? まあいいや、とにかく規格外な人だと思う。つうか俺のせいなんだけどさ、まあばあさんが許してくれだし大丈夫なんだけど、みんな敵意むき出しだし肝心の師匠は無視してるしなあ。

つつか俺的には俺たちが悪いと思うんだ、というかたった一人の人間に関西最大の組織が潰されたなんて思わないだろうな。

まあそんな人に教えを受けさせてもらえるなんて……剣士としては最高だと思うんだ！ 絶対強くなって、あの人の隣に立ってやる！！
まあその前に……

詠春 「なあこんなの十周できるのか？」

明人 「……自信なくなってきた」

俺だって六歳なんだ、もう少し軽い訓練にしてくれ！！
師匠おおおおおおおおおおおお！！！！

詠春 「そういえば桜は元気にやってるかなあ」

俺と同じ年の近衛の長女であり幼馴染なんだけど……たしか、そいつも師匠の訓練を受けているはず……大丈夫かなあ。

〓〓〓〓〓〓式視点

式 「ほいほい、式神の制御いつてみようか」

桜 「は、はい！ 先生」

……ああ、なぜ？ 思うだろ？ 俺が一番聞きたいよおおおおお
おおお！！ なぜ両親の修業の面倒を見なきゃいけないんだああ
ああああああああああ！！

桜 「斬鬼頼んだで！」

札から鬼である斬鬼を出すんだが……見た目はあれだ、なんで仮面ライダー斬鬼なんだよ！！ 最初出てきたときは響鬼もいるのかと思っただけじゃなかったよ！！ 母さんが使役している変わった鬼とか言われてるけど違うよね、ギター持っているよ？

斬鬼 「なんだ？ 呼んだか？」

式 「（うん、しゃべり方が違うけど、斬鬼だ）」

桜 「うん、先生との修業やから頼んだで」

斬鬼 「まあいいか、そこのお前、本当に人間か？ いつも思うが……」

式 「（鬼に言われちゃおしまいだなあ）多分人間？」

斬鬼 「なんつう言い方だよ……まあいいか、俺はただ術者に力を貸すだけだからな」

……これはこの時代に来て知ったことだ、つうかやっぱこの世界は色々なものが混ざってるよな、まさかだと思っけど……ガチの死徒二十七祖とかいないよなあ。頼むから来ないでくれよ？ 俺だってそんなヤバい奴らと戦いたくない。

斬鬼 「まあいいさ、さあどうするんだ？」

式 「今日はあれだ、近距離に持ち込まれた時の対応をしようか。」

桜、一応お前は確かに陰陽師としての素質はかなりある。しかしだなあ、陰陽師っていうのは接近されたとき、例えば斬鬼が倒されたり、不意をつかれて接近戦をされたらやばいだろ？」

桜 「う、うう、そう言われると……」

斬鬼 「俺が負けて術者を傷つけると？」

式 「……あめーよ」

仮面 「CLOCK UP」

俺は加速して斬鬼の背後をとる。ああ、この仮面？ ふざけてクロックアップモードをつけた猿仮面。こわいよねえ、魔眼で解析したら作れたよ、いやあ自分のチート加減にあきらめがついてきたよ。俺は斬鬼の首筋の線に七つ夜を当てる、斬鬼は気付いたようで驚きの声を上げる。

斬鬼 「……何をしたんだ？」

仮面 「CLOCK OVER」

式 「別に？ 超高速で動いて、首にナイフ当てただけ」

桜 「ぜ、全然見えへんかった」

斬鬼 「くそ、俺も焼きが回ったか？」

そりゃ仕方ないだろ？ つつか反応されたら困るよ。七つ夜を首から離しながら、少し苦笑する。

式 「今見たく気抜いたら、消されてたとかあるからな」

斬鬼 「……音撃さえできれば、お前なんぞに負けはないさ」

桜 「さすが先生や！　ウチ、尊敬してるで！！」

式 「一応、俺、お前の母親の腰を蹴り碎いた男なんだが……」

桜 「いいんや！　将来の旦那さんやから」

……はい？

式 「……アハハハハ、ナンカゲンチヨウガキコエルヨ」

桜 「何言いてはるんや？　組織ひとつ潰した方が婿になるなんて

……ウチもそうやけど、組織にとっても良い事や」

斬鬼 「ほう、まだ小さいのに頭がいいな」

式 「……」

あれ？　なに？　婿？　はい？　いやいやいやいや、俺って奴は…

…なんかやばいフラグを立てたか？　つうか婿？！！

式 「なんかの間違いだろ?!?!」

桜 「いいやないか……そ、それにウチじゃだめ？」

ガフー！！　な、なまじ小さな頃の木乃香と似てる顔だから破壊力が

やばい。上目使いはまずい……シスコンって言うな。

だが……どないしようか、ここでフラグ折っておかないと、木乃香生まれなくて歴史も変わって、あれ？ けっこうやばくね？

式 「ま、待て詠春とかいるだろ？ それに今決めるな！！」

桜 「じゃあ、式先生は好きな人が居るの？」

……そういえばそんなこと考えたこともなかったな。
俺が好きな人？ たくさんいるが……？

式 「え？ いるぞ？ 妹とか修業仲間とか……あ、後は家族とか」

桜 「そういうのじゃなくて！！ 女と男の関係で好きって意味や
！！」

式 「……さあな、まあいい修業に戻るか」

斬鬼 「おいおい、逃げるなよ」

式 「あのな？ 俺は……」

俺は無詠唱で魔法の射手を桜と斬鬼に向ける、その数百以上。
さすがに桜も顔が真っ青になっている、大丈夫大丈夫、非殺傷にし
てるから……SYUGYOUしようか。

桜 「すみません！！ 先生怒らんといて！！」

斬鬼 「俺も悪かった！ だから」

栄子 「違う、私らはな、手加減されたんや。その気になれば式はんは私たちを皆殺しにしてもおかしくなかったんや」

その言葉には恐怖と後悔が入り混じってたんや、あの母様が「関西の猛虎」と呼ばれたお方がこんな不安げに言うなんて、式先生の恐ろしさが垣間見えたんや。

栄子 「最初は強大な魔の気配を感じたから……青山が対応したんやけど、ものの三十分で制圧されたんや」

そうなんや、最初は仮面付けた変人と「闇の福音」が来たってことで最初はそんなに真面目に対応しなかったんや。そしてまず、青山家の若い方々から飛びかかって行ったら、ただの手刀で制圧されて、次に師範代、そして当主まででていったんやけど、その人たち曰く「手刀で刀をぶった切る奴」「結界を張っても拳の衝撃が飛んでくる」「最強の神鳴流の使い手」などと、聞いたら嘘や！ と思うことばかりやった。実際、まだ戦っていない若い修行僧たちにはただのデマだという噂まで流れているけど本人はまったく気にしていない。エヴァさんと一緒に京都に出かけたり詠春と明人さんと一緒に修業をしたりしてる。たまに青山の当主さんと話をして酒を飲んだりしてる。

一週間前にウチの先生として紹介されたんやけど、初対面の感想は「変な人」だつてそうやる？ 誰だつてなんか変な仮面……先生は確か「マスク・ザ・斉藤のマスクだ！」つて言ってたけど……なんか南米の方にありそうな仮面やった、それに黒色の着物、正直仮面のせいで似合っていなかったんや。

式 「えーと、お前が近衛桜か？」

桜 「そうやけど……あんたが式？」

式 「ああ、俺が両義式だ、かあ　ゴホン桜、今日からお前の戦闘面での講師をやることになった」

桜 「戦闘面？」

式 「ああ、お前の母親から言われてな……正直気乗りしないが依頼なんぞな」

桜 「ふーん、じゃあこれから式のごときは式先生って呼ぶ！」

式 「せ、先生ってお前……まあいいや」

そんなこんなで始まったんやけど……めっちゃきつい。

基本的に先生はウチに走り込みや、回避の仕方などを教えて……まあなんか神鳴流の方々がやってることをしているんやけど、最初は走り込みで息がきれてしまったんやけど、その状態から回避訓練、先生がランダムに飛ばしてくる魔法の射手（非殺傷）を避け続けるんや、一回当たったらどこが悪かったのか、どうすれば良かったのかとかを言ってくれるんやけど、おかげで回避だけは一級品になったんや。周りの攻撃が遅く感じるしな！！　あ、あれ？　なんか目に涙が……泣かないんや！！　ウチは近衛や！　グスン。

あの人、ほんと鬼畜なんや、魔眼を使って偽物を作り出したり、この頃は三百六十度すべてから来るんや、一番びっくりしたのは地中から出てきたとき……あれはびっくりしたんや。

それに詠春もやって言う「鬼ごっこ」あれは地獄や、先生は幻術も使うから死んだはずの人の声が聞こえたり、く、蜘蛛……ああ口にするのも恐ろしい生物を巨大化させた生物なんて見させて……あんときは泣き叫んだなあ。

さらにあの人、忍法とか言ってウチに化けたり、母様や父様に化け

たりするんや。前にどうやってやるのか見てたら……言えへん、んな方法なんて言えへんって。

しかしあの人はウチに逃げることにしか教えへんのや、うー、ウチだって詠春をま　ゴホンゴホン、今日は色々聞いてみたんや、まずは嘘ついて告白して……詠春にしたかったなあ、あいつほんま、鈍いしな！！　なんかイライラしてきた。

すごく師匠がテンパってる、クフフフなぜか嗜虐心が……。

式　「あのな？　俺は……」

あ、あれ？　先生？　その空中に浮いているとんでもない数の魔法の射手は？　まさか打ち込みませんよね？

桜　「すんません！！　先生怒らんといて！！」

斬鬼　「俺も悪かった！　だから　」

式　「許さん、さあさあ蠅のように舞い、花びらのごとく散ってくれ」

ウチはその一時間、いかに先生が手加減したかわかったんや。いつもの三倍のスピードくらい矢が何本も何本も……ウチは決めた先生を怒らせないようにしようと……。。

＝＝＝＝＝式視点

式 「やっぱり弟子はいじ　「ごほん」

あやゆく本音が出るところだった、いやだつてあそこまで叫んでくれるとなあ。斬鬼も斬鬼で面白かったし、俺つてSなのか？ まあいいさ、今は詠春達と軽く打ち合つて風呂に入つて汗を流してきた。飯も食べて、幸せいっぱいだ、ここの飯代は出してるし一応客人だが、当主の奴とも結構仲良くなつてるし、まあまあだ。まあまだ目の敵にするアホもいるだろうが、あれだけの実力差を見せつけても向かつてくるアホはいるもんだな。修行僧ごときが勝てると思つてんのか？　まさか風呂場で襲撃されるとは……まあ全員「ちえりお八裂」でねじ伏せたがな、まあちえりお八裂つて言つても連続で八回ちえりおつて言うだけだが。

たぶん外に裸の僧が八人くらい転がつているけどな、素顔は見られていない、風呂用の仮面があるからな！！

式 「えつと、エヴァは部屋かな？」

そう思いながら歩いていくが……正直めっちゃ緊張している。どうしよう、エヴァの部屋まで来たんだが……帰つてもいいかな。

エヴァ 「式いー、入つてもいいぞー」

式 「答えは聞いていない　てか」

あきらめて部屋に入ると部屋の中央に金髪でよう　あれ？　なんか身長デカくなってねえか？　体型もツルペタではなく少し平均より大きいくらい。……なぜ?!

式 「え、エヴァ？」

エヴァ 「そうだぞ？ 式なんだ見とれてたのか？」

式 「はつきり言つとそうなるな」

エヴァ 「あ、え、ま、待ってくれ、そんなストレートで言われると恥ずかしいぞ?!」

式 「まあタネはわかってるんだが……幻術だろ？」

エヴァ 「……ああ、本来ならこうなっていたらろうという、可能性を計算して作っている。質感もあるぞ!」

するとエヴァが抱き着いてくるがいつもは俺の腰の部分に抱き着くんだが……大きくなったせいか、俺と同じくらいだからなあ。いや、まああれだよ、色々と当たってるんだよ、素子のおかげで結構耐性についているがな、あいつほんと抱きしめると胸もとに寄せるから窒息しかけたこともあるよ……あれは一瞬だけだけど、天国見えたよ。

エヴァ 「ふふふ、どうだ？」

式 「あんまバカやってないで行くぞ？ 俺だってコレのために時間を割いたんだ」

チャチャゼロ 「へへへヨカッタナ御主人、ヤツパ式ノ頭ノ上八居心地ガイイナ」

式 「そのこの刃物人形、おとなしくしてるよ？」

チャチャゼロ 「ケケケ、言ワレナクテモナ。御主人ノデートハ邪

う、まだメンタル面を鍛えなきゃなあ。

式 「こいつらも強くなって貰わないと……」

最低でも詠春には一人で五百人程度は戦えるほどになってもらわないとな。

零閃でも覚えてもらおうかな……後は千刀流の応用でどんな武器でも使えるようにしておくか？ いや、やめとこあいつは刀の方がいいだろうな。

後は……桜には格闘戦もできるようにしてやるのかな、CQCでも教え込んで、虚刀流もほんの少し教えて刀と銃には素手で勝てるようにしてもらおう。

フェイク 「に、してもだ式オリジナルいいのかこんなに過去に介入して……」

式 「まあいいだろ？ にしてもだ、俺はどこまで行くんだろうな」

フェイク 「式？」

式 「チート、バグ、まあ聞こえはいいさ」

フェイク 「後悔してるのか？」

式 「まさか……近衛である俺も、零崎である俺も、両義である俺も、全部俺なんだしな。後悔っていうよりも人間を越えちゃまっているなあって思ってたさ」

フェイク 「俺は人間じゃないが……」

式 「なんだ？」

フェイク 「お前ほど人間を形をした化け物は見たことねえよ」

式 「だな」

フェイク 「頑張れよ式」
ホンモノ

式 「とつとと消えるフェイク（ニセモノ）」

フェイク 「ばいばい、セリヌンティウス、まあこれも」

式 「走れメロス、まあなこれも」

式&フェイク 「「戯言だけだな」」

||||| 一週間後

式 「はあ面倒だ」

栄子 「まあまあ、落ち着きなさいな」

式 「なぜ俺がやらなきゃいけない、今度こそ本当の意味で壊滅さ

せてもいいよね？ 答えは聞いてない！！」

栄子 「式はんも少し抑えて！ あんただったらほんまやりかねん
のやー！！」

「一か月の時が過ぎて約束の決闘の時間だ……やる気がなくなつてく
る。

五人なんだが、修業を見ていたんだが……そんなに実力がある方じ
ゃない、ヘタすりゃ刹那だつて勝てるくらいだ、まあ刹那だつてあ
の歳で頑張っているし……正直に言うが、メモリ発動時ならたぶん
だが、今の神鳴流で勝てるのは父さん、素子に鶴子姉さまくらいだ
ろう……あ、あと母さん、あの人は主婦じゃないよ？ たまーにだ
けど妖怪退治とかしてくるよ？ 事務的な事もできる。

式 「だるい、今日は働きたくないでござる」

栄子 「ほんま、あんたつて人は……やる気があるときと無い時の
差が大きいなあ」

式 「いいだろ？ この頃は残滅任務に駆り出しやがって……」

つい三日前に零崎として違法組織の摘発&残滅してきたからなあ。
一緒にやった……たしか天ヶ崎 健だつたか？ なんか引つかかる
んだよなあ、あいつの使った式神が妙に千草さんの式神ににてたん
だが……まだ十五歳なのに式神を操る術に関してはそこそこだった
なあ。

式 「はあ、あいつらは俺に勝てるなんて幻想を持つてるんじゃない
いだろうか」

栄子 「そのとおりなんやけど……」

式 「はあ、ある英霊が言った言葉を言ってやるう、そのときに」

俺と栄子はそのまま道場に向かう。俺にとっては慣れている場所だが今回だけはまったく慣れない。

道場に入ると無数の厳しい視線と若い神鳴流の剣士五人が瞑想しながら待っていた、ちなみに周りには師範代と修行僧、まあ師範代のほとんどがけがをしているがな。エヴァはすでに道場におり、頭の上にチャチャゼロが乗っていた。

詠春 「師匠ー！！ 頑張つてええー！！」

桜 「先生なら楽勝や！」

明人 「すいませんが今回は先生を応援しますよ」

やめる、ばか弟子共が周りの視線が信じられない目で見られてるぞ？！ あ、青山の当主はサムズアップしてやがる……いらねえよ！
じいさんの応援なんざいるかああああああああああああああ
！！

エヴァ 「フン、式なら心配ないな、叩き潰せ」

チャチャゼロ 「オレガ殺ッテモイイヨナ？」

頼む、俺を応援してくれるのはわかるがやめとけ、剣抜きかねないから！！ チャチャゼロ、お前は自重しろこのボケ！！

式 「や、やる気がガリガリ削られる」

栄子 「狸の仮面外したらどうですか？」

式 「……嫌だ、絶対やだ」

ああもう、叩き潰してやるよ、はい徹底的に！！

剣士1 「来たか、逃げずに来たのは褒めてやる」

剣士2 「まああれだ、お前が関西呪術協会を壊滅させたのはうそだろ？」

式 「さあな？ 俺はただ向かってきた敵を倒しただけだが？」

剣士3 「まあいいさ、お前はここで負けるんだし」

剣士4 「……ふざけた仮面など取れ」

嫌なこった、取ったらとったでお前らうるさいだろ？

剣士5 「さあ始めるか……決闘のルールは五人ぬ」

式 「めんどいから全員で来い」

ざわ！ とまわりの修行僧だけ騒ぐ、師範代たちは表情で「やっぱりそうするのか」みたいな顔をしている。

詠春 「これ、もう勝負決まってね？」

明人 「ああ、式先生少しキレてるし」

桜 「母様、こつち来て一緒に見ようやー」

栄子 「はいはい、じゃあ式はんも頑張ってる」

式 「はいはい、もう殺して解して並べて揃えて晒してやるっ、っ
てくらい頑張りますよー!!」

つづかなんかこの言葉が口癖になってきたような気が……はははは、
そんなわけが……。

剣士1 「貴様なめてるのか!!」

剣士2 「いいだろう！ その慢心、へし折ってやるよ!!」

なんかみんな臨戦モードだねえ、まあいいさ。

式 「お前らは俺に勝ってるって言う幻想を抱いてるだろうけど、有
名な赤い英霊の言葉をくれてやるっ」

剣士3 「なめてんのか？」

剣士4 「……仮面を取れと」

栄子 「では神鳴流の剣士五人と両義式の決闘を始めたいと思いま
す」

剣士5 「長もなめているのか？」

式 「理想を抱いて、溺死しろとな」

剣士全員 「「「「なめるな!!」「」「」」

栄子 「では始め!!」

式 「まあ、あんたら後悔したって、その頃には全員八つ裂きになつてるだろうけどな……虚刀流零の構え 『無花果』」

俺は自然体に攻撃に移れる構え……というよりも単に名前をつけただけのものだから、正確には構えではないというのが……。案の定、剣士たちは怒り狂っていた。

剣士1 「そこまでなめているのか……ならば、死ね!!」

剣士2 「奥義、雷鳴剣！」

剣士3・4・5 「「「神鳴流、斬岩剣!!」「」「」

全員が気を纏った剣で俺に向かってくるが俺はそれをすべて気強化した手刀で迎撃し、全員の手から木刀を天井に吹き飛ばす。五人全員と周りの修行僧はびっくりしてるだろうけどな……

式 「虚刀流『女郎花（オミナエシ）』を応用した物だ、本来なら木刀がお前らに突き刺さっていたんだがな、まあいいめんどくさいので終わらせるぞ？ 手加減に手加減を加えた奥義だ!! 虚刀流『七花八裂』 応用編!!」

俺は五人に対して奥義を叩き込む！ すると全員が吹き飛ぶがまだ意識はある、足軽で手加減してやったんだ、当たり前か……。

付きやからな？」

そんなこんなで決闘が終わったんだが……剣士五人はひどく落ち込んでしまっていた、まああんな大勢の前で無様に負けたんだし仕方ないかあ。

つうかりミッター付きと聞いた時の修行僧の絶望した顔は……まああれだ仕方ない。

俺は気にせず道場を出たんだが……さっそく百人程度の修行僧から修業を頼まれ、軽くもんでやった、使ったのは木刀のみ、あつちは全員真剣……けど勝ったよ。そしたら全員に「教えてください！先生！！」と言われました。

式 「つ、疲れたあ……」

エヴァ 「フン、あのぐらいで疲れたと言うな！ まったく……」

たまには酒もいいかなと思って、エヴァと一緒に酒を飲んでいるんだが……まったく酔えない、今、エヴァの別荘の一部屋で飲んでいるんだが……あちなみにエヴァの別荘には城が入っていた。レーベンスシュルト城……俺の別荘には小屋がぼつんと一つと広大な大地があるだけ、一通りの修業場所は用意したんだがなあ。

エヴァ 「しかしうまいだろ？ 酒は」

式 「苦いだけだ……うまいんですけど、思わん」

エヴァ 「の、割には呑んでいるな……もう樽一つ分はなくなったぞ？」

式 「また作ればいいだろ？ 俺に質問するな」

やばい、やばいなんか口調がああ刑事みたくなってる……多少は酔っているのかな？ 今は夜に設定されてて、月もきれいだ……。

エヴァ 「今日は言葉が荒いな」

式 「……酔ってるのかもな」

エヴァ 「でだ」

エヴァが椅子から立ち上がり、俺の目の前に来る。まあ……約束の
一か月だしなあ。

式 「いいのか？ たしかあの部屋で」

エヴァ 「別にいいだろ？ ここでも……でだ、式、お前の選択を聞きたい」

式 「……なあエヴァ、俺はな。殺人鬼なんだ、必ずしもお前を幸せにできるわけじゃないんだぞ？ 最悪、世界が俺の敵として俺を殺そうとするんだぞ？」

エヴァ 「……気づいていたさ、旅の途中お前が……殺人を侵していることなんて、お前の体からうつすら匂いがしたぞ？」

式 「吸血鬼だしな……でだ、俺は史上最悪最低最凶とんでもびつくりな奇想天外摩訶不思議災厄の殺人鬼だ」

エヴァ 「お前はそんな奴じゃないぞ？ そんな奴なら私はあの戦いで死んでいたはずだ」

式 「…………嫌じゃないのか？」

エヴァ 「フン、それにお前が殺してきた数など…………私に比べたら赤子程度だ！ それに私がお前の程度の女だと思うのか？」

…………ずっと俺は「零崎」ということを負い目に感じていた。素子や刹那の気持ちだって気づいていたさ、けどな、俺と一緒に居たら絶対にあいつらはまともな道を歩けないだろう…………俺はそんな人間だ。

式 「ああ、考え直すなら今のうちだ、こんな狂ったや」

俺はその言葉を言えずに口に何かが触れた。

エヴァの顔が超至近距離に見える、あれ？ なんか唇にやわらかい物が…………？

エヴァ 「う むちゅ ぷはぁー！」

式 「むぐ？！… ぷはぁー！！… いったい何しやがる！…！」

エヴァ 「これが私の気持ちだ…………元々狂っているさ、お前のせいで恋…………狂っているさ」

式 「…………本当に？ 俺でいいのか？」

エヴァ 「お前…………だからだ」

至近距離にエヴァの顔が見える。月が反射して金髪がキラキラと輝いているように見える…………俺は。

式 「エヴァ、いや……エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル」

エヴァ 「なんだ？」

式 「……お前の気持ちを……受け入れる」

エヴァ 「ほん……とか？」

式 「ああ、お前と共に生きるよ……エヴァ」

エヴァ 「う、うぐう、ひぐっ！」

式 「エヴァ?!」

エヴァ 「ち、違う！ 嬉しいんだ!! 泣いてなんかいない！」

式 「あー、はいはい」

やべえ、すごくエヴァが可愛く感じる……マジで惚れたかも。

チャチャゼロ 「ケケケ、オメデトサン旦那、御主人！」

式&エヴァ 「「ちや、チャチャゼロお?!?!」」

まずい！ さっきの会話が聞かれてたなんてマジで恥ずかしいんだが?!?! あれ？ なんかチャチャゼロの足元に魔方陣が書かれているんだが……？

チャチャゼロ 「ケケケ、パクティオーノ準備八万端ダゼ？」

式 「ぱくていおー？」

エヴァ 「……簡単に言うと契約をすることだ。あの魔方陣は本契約の物だがな」

式 「へえー、それで？」

エヴァ 「……契約の方法がな、あの、そのな」

式 「エヴァ？」

エヴァ 「キスなんだ……それに本契約と言うのは一人だけできて、一生続くものなんだ」

式 「いいじゃないか？」

エヴァ 「……いいのか？」

式 「吸血鬼と殺人鬼が本契約なんて、本物の鬼だって素足で逃げ出すぜ？」

エヴァ 「ク、クハハハハハその通りだな！」

俺たちはそのまま魔方陣の上に乗る。

チャチャゼロ 「トットトヤリヤガレヨナ！ オレダツテコンナナレナイコトシタンダゼ?!！」

式 「ははは、チャチャゼロありがとうな」

エヴァ 「式……」

式 「まあな、ベタなセリフになっちまうが……これからよろしくな？ エヴァ」

エヴァ 「ああ、こちらこそな式」

そして、俺たちは目を閉じてお互いの唇を合わせると確かに何かにつながったような感じがする……まるで霊脈と繋がっているような感じだったがな。

エヴァ 「カードが出たな……」

式 「これは？」

チャチャゼロ 「パクティオーカードダナ、コレガ契約ノ証ダナ。
ツマリ旦那ト御主人ノ愛ノ証ダ」

エヴァ 「ななんあななんあなんあんあ、何言ってるんだああああああああ！ このボケ人形……」

式 「落ち着け…… えーと、あれ？ 黒の服と仮面を被ってる俺か？」

そこに書かれているのは俺の絵であった。

えーと何々？ ぎ、フェスティバル「残滅殺人」?! ！ なんじゃこのとんでもない二つ名は…… さらに手に持って……何も持っていない？

エヴァ 「『虚刀・鑢』？ なんだ？ このアーティファクトは、とりあえず呼び出してみる。呼び出すには『来たれ（アダアット）』

だ」

式 「まあいいさ、アデアット！」

すると俺の頭の中に何かが流れ込んでくる。

……そういうことね、これは虚刀流の記憶だ…… はははは、完全に虚刀流が使えるようになったわけだ。

エヴァ 「なんだと?! アーティファクトが変わった?!!」
完了形変体刀虚刀・式『?!!」

式 「はははは、本当に完了形になっちまったな。でだ、エヴァはどうするんだ?」

エヴァ 「わ、私も欲しいが……従者契約で私が主となったからな……」

式 「もう一度やって、エヴァのカードも出そうぜ……不公平だ!」

エヴァ 「ま、待 むぐう!」

パアと光が輝いてまたカードが出てくる。

今度はエヴァのカードだが……絵には黒いローブをつけて黒い翼に赤い目をしている。

エヴァ 「なにになに? 『十字架を背負う者』^{クルースニク}? フン、なんて皮肉めいた二つ名だ!」

……クルースニク? いや待て、あれじゃないよなあ?!! あんなのだったらマジでマズイぞ!!

エヴァ 「え？ き……」

式 「き？」

エヴァ 「きゃあああああああああああああああああああ！
！……」

式 「ガガーリン……！」

良いアッパーだ……あれだ、一言言つか「地球は青かった」

エヴァ 「では次は？」

作 「現代に戻って木乃香たちの閑話」

夷 「おいおい、俺とエヴァは出番なしか？」

作 「まあな、あれだ、設定上ではお前が居なくなって一年後の設定だ」

夷 「……木乃香、刹那、素子すまん」

作 「まあ、お前の設定も書くから、かなりの長編になるかもな」

エヴァ 「どのくらいなんだ？」

作 「設定も入れると二万文字くらい？」

夷 「多い！！ 多いよ！！」

作 「だってお前の設定で一万文字いきそうなんだもの」

夷 「マジでか！！！」

作 「つつか今回のおにさんこちら、は大丈夫なのか？」

夷 「それよりも俺は、フェイクとの掛け合いのあのセリフを言ってもいいのかなあ」

エヴァ 「ではしめるのか？」

いじめる」

バカ×結婚×戦争開始（前書き）

だいぶ遅れました……全然書けません、今回は強引な展開ばかりで納得いく出来ではありませんが楽しんでいただけたら幸いです。

ハヤテ様、クロワツサン様の小説とクロスしていますので気になった方は『IS 白を纏いしHeaven Sword』と『これはゾンビですか？』いいえ、ただの？病弱です』、で検索してみてください。とても面白いのでぜひ読んでください。

いつの間にやら三十万アクセス、いやはや作者は見たときに思わず息をのみました、これも皆様、読者様のおかげです、本当にありがとうございます。これからもよろしくお願いいたします！！

ではどうぞ！

バカ×結婚×戦争開始

久しぶりだな、式だ。

……あれから何年もたった、つうか十年以上たったよ。早いなあ、スクスクと育っていく弟子たちを見てると子供を育てている様な気持ちが出たよ。まあ結果だけ言おうと詠春と

桜と明人……強くなったよ。一年前に三人に対して鬼ごっこしたら……不生不殺を攻略された、嘘だと思いたかった、さすがの俺も手加減に手加減をかけて真心までかけたんだが詠春が囷になって、桜が呪術と斬鬼の音撃で拘束され、明人に忒の太刀をぶち込まれて、手加減しろよ、つうかあのとき黒式使ってたから半妖だったんだが？ あやうく消されるところだった……（まあそのあと喜んでるあいつらの鬼ごっここのレベルを上げたのは仕方ない）まあ、俺が育て上げたせいだ……桜が素手で詠春を圧倒しやがった、あいつ真剣持ってたんだが？ あれか？ 虚刀流の動きを教えたからか？ ……この前、笑いながら師範代クラスの人間を素手でボコボコにしてたんだが……うん、母さん、あんたを魔改造しすぎたよ。

詠春もひどいよな、何度も何度も死の淵に追いやったらそのたびに一段階くらい強くなっていったんだが？ どの戦闘民族だよ、大妖怪クラスを単独で残滅しやがった……「近衛」の俺だったら負けるな。このごろは達観してきたのか一人称が俺から私になってたな、つうかあいつこの頃白髪が生えてきただろう！！ この前洗面台の前で「……白髪染めすべきか？」とかなんか命かける戦いに行くような眼をしてたぞ？

明人は……結婚しやがった、うんもうさ、なんか結婚式に出させてもらったんだが……すごくうれしかったよ、息子が嫁さんもらって幸せそうな顔したら、うんリア充？ ふざけんなよ？ 愛し合う二人を邪魔する奴は馬に蹴られて殺して解して並べて揃えて晒してやるつう、つうか出てこい。……まあ、あいつに結構相談されたよあな

どんな事したら女は喜ぶかとか、ケンカしたらどうしたらいいとか。まあ俺の場合だと女装したりベットのう　ゲフンゲフン、にやんにやんしたり。ケンカしたら？　終わる世界に術式兵装、それにアーティファクトをフルに使ってくるからな？　別荘を何回壊したと思ってるんだよ、十数個だよ。もうあれだよ、エヴァなんてアーティファクト使ったらチートになるぞ？　再生早いわ、移動速度が音速超えるわ、上級魔法は連続して撃ってくるわ……アグレッシブだなあ。

そしてときどき寝ぼけて別の世界に行ったりしたよ、ときおりゾンビやら吸血忍者やら零崎やらがいる世界……まあ臆って奴にすべて任せておいたが二度目には少し怒ってたなあ、怒ったら性格違うしほかの人たちも襲ってくるんだが……一撃で全員の攻撃弾き返したら顔を引き攣らせたんだが？　それとISとか言う世界にも面白い奴もいたし、たしか一夏だけ？　つうかほかの世界も融合しててなかなかカオスだったけど面白かったな、天剣とか言う奴等も面白かったし、あとは平行世界の俺にもちよっかい出したな、まあいいだろ。

色んな世界にちよっかい出していたら、いろんな奴に追われて、戦って、見取って、仲良くなって、変身して、カメンライドして、つて前の二つは同じことだ。

まあそんなこんなで京都に十年いたら、いつの間にやら居ついてしまった……まあ鬼やら妖怪やらと酒飲んだり、修業したり、いじmゲフンゲフンなんでもないです。

式　「……で、俺はなんで麻帆良に居るのかね」

エヴァ　「仕方ないだろ？　今の私たちは関西呪術協会所属だぞ？」

で、なぜか麻帆良に来てしまった……つうか栄子に頼まれたんだが麻帆良に親書を届けてこいと言われました。今日は狐の仮面だぜ。

チャチャゼロ 「ソウイェバ今日ハナンカウルサイナ、祭りカ？」

式 「確か『麻帆良祭』やらなんやらがやってるはずだ」

エヴァ 「面白そうだな、行ってみないか？」

式 「でお前はナチュラルに胸を当ててくっつくな」

周りの目が痛い、つつか男の嫉妬の眼が痛い！！

エヴァ 「ふふふ、お前は何年たってもそこはウブだな」

式 「最初の方は知識なくて真つ赤だった頃のエヴァに戻ってほしいよ」

チャチャゼロ 「夫婦漫才モイイガドウヤラ来タミタイダゾ？」

式 「ようやくか？ 一時間遅れだぜ？」

今俺たちは麻帆良の入り口で待たされていた。

目の前からフード被った麻帆良の関係者が来た……怪しいよ？ つつか結界の認識障害なかったら通報されてるよな？

魔法使い 「ようこそ麻帆良に両義式様、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル……様」

……なあキレていいか？ ここ破壊してもいいか？ こいつ因果ごと破壊してもいいか？

つつかエヴァの賞金も十年前に凍結されてるんだから別にいいだろ

うが。

式 「まあいいさ、んじゃとつとおつかいを終わらせませるか」

エヴァ 「そうだな、帰りはここでデート」

チャチャゼロ 「緊張感ネエナ」

||||| 学園室

近右衛門 「そうかあなたたちが……闇の福音と黒の死神ですか」

……あれ？ 俺の眼は正常か？ 目の前の人物は三十年前の近衛近右衛門……まあ四十代いつてるだろうが頭が……正常だと?!?!あれか老後から伸びたのか?!?! つつか髪の毛フサフサ!!!! いやべり方違っし!!!

式 「あ、ああそうだな」

エヴァ 「どうした式？」

式 「い、いや知り合いの事を思い出してた」

近右衛門 「まあいいですよ、お二人方はこれからどうするのです

か？」

式 「うん？ まあ麻帆良祭を見て、そんで帰るよ。あんたらも俺らが居ると色々と困るだろう？」

近右衛門 「……申し訳ない、栄子がお世話になっているというのに」

エヴァ 「まあ仕方ないだろう、私たちは悪の魔法使いだからな」

式 「……俺、一応魔法剣士(?)なんだが」

エヴァ 「素手で鋼鉄切り裂いた男が剣士か？ 拳士の間違いじゃないのか？」

式 「だから虚刀流は剣法だからと何度も」

エヴァ 「ありえんだろうが！ 無刀の剣士など!!」

式 「うっせい!! 無刀なめんな!!」

エヴァ 「謝れ！ 剣士に謝れ!!」

近右衛門 「あ、あのー」

式&エヴァ 「「ああ?!!」」

近右衛門 「い、いえ(めっちゃこええ!!)」

そつえばとある世界で思考を読み取れる能力も手に入れました、

ON/OFFもできるからなあ。つづかこの頃は見稽古封印してるんだよなあ、見取りすぎて自分でも把握してないからな。

近右衛門 「で、では武闘会でも見たらどうですか？ ちょうど今ぐらいでは決勝戦でしょうから」

式 「良いかもな、エヴァは？」

エヴァ 「別にいいぞ？ お前と一緒になら」

チャチャゼロ 「ゴ覧ノ有様ニラブラブダヨ、ドウニカシテクンナイカ？ 甘スギテ酒マデ甘クナツタンダガ？」

近右衛門 「若いっていいなあ」

チャチャゼロ 「……チナミニコイツラニ寿命ハナイゾ？」

式 「結構いるんだな」

エヴァ 「ふん、暑苦しいだけだろ？」

ただいままほら武闘会に……すまん飛びすぎだよな、まあ仕方ない文句は作者に言ってくれ。もうだめなんだあいつ。

アナウンサー 『さあーさあーやってまいりました、決勝戦』

リート砕く程度(力)

まあ最強だからな!! 俺が強すぎるのか。

ナギ 「はっ! この程度かよ、もっと強い奴はいないのかよ?
今なら戦ってやるぜ?」

アナウンサー 「強い! 強すぎるぞ!! 弱冠十歳にしてこの
強さ、決勝戦を数秒で終わらせたー!! さあ誰か、誰か奴を止め
る奴はいないのか?!」

まあ、居ても敵うはずねえよ、だって俺だしな。まあこれで賞金も
もらったし、また旅にで

? 「はっ! その程度で満足してるのか?! ナギさんよお
おおおおお!!」

次の瞬間、舞台に誰かが飛び込んでくる。

見てみると変な仮面を被った、着物だっけな? そんな服着た奴が
舞台に立っていた。

? 「さあさあ来ましたよ、来ちゃいましたよ、来てやったよ、挑
戦者だ」

ナギ 「……何者だよ、あんた」

? 「あんたじゃない……マスク・ザ・零崎だ!!」

ナギ 「面倒だからゼロザキな?」

零崎 「いいぜ? ほらナギさんよお、御期待にそって現れてやっ

たぞ？」

アナウンサー 『今度は変な仮面が乱入しやがったぞお！！！！！
どうなるまほら武闘会！！ 挑戦者の名前はマスク・ザ・零崎！！』

変な野郎だが……不思議とオーラみたいな威圧感を感じるぜ、久々に大物かよ……これだから戦いは面白いんだよ！！

ナギ 「はははっはは、おもしれー、おもしれえぞ！ ゼロザキ！！」

そういつと変な仮面を被ったゼロザキが構えをとる。

俺も構えを取りながら……どうどうと名乗る。相応の相手でしな、それにカツコいいだろ？！！

ナギ 「俺はナギ・スプリングフィールド！ 将来、最強の魔法使いになる男だ！」

零崎 「いいだろう、俺はマスク・ザ・零崎！ どこにでもいる……仮面マニアだ！」

訂正するよ、コイツただの変人だっ！！

||||| マスク ではなく式視点

やっべー、勢いで出てきたはいいがこれじゃ変人だよな？ まあいいな、残念ながらこの十年間で仮面中毒が酷くなりすぎて、他の世

界の仮面やらマスクやらとって来たしな。例に出すとある大佐の仮面、とある反逆した王子様の仮面やら、元ネタを知っていた仮面もあつたがオリジナルとってきました！ まあ色々、運命変わつちやつたときはその世界の神と戦つたがフルボッコできたんだが？

……あれ？ 神ぼっこつていいの？ まああの世界の神だし、神様はなんも言つてこないしいいんだろ？（実は神様はため息ついています）

まあ目の前のナギを見る、十歳としては強いほうだろう……こんなガキが両義式と共闘して世界救うのかよ……って式つて俺じゃん！
！ まああの両義式は出てこないのか？ おかしいなもうすぐ戦争なんだが？

ナギ 「行くぜー！」

むっ？ なんだ無詠唱の魔法の射手か……遅延魔法で体の周りに展開させる、ひい、ふう、みい、よお……九つか、まあこの年ならすごい才能だな。居るんだな、天才つて、いやバグキャラ？

ナギ 「オラオラオラオラ！」

零崎 「無駄無駄無駄無駄！」

魔法の射手を素手で弾き飛ばしながらどこぞのタイムストッパーよろし叫ぶ。

うーん、この頃キャラ崩壊が激しくなってるな二週間ぶりはキツイな……メタ発言はここまでだ！！

ナギ 「なんだよ！ あんたは！」

零崎 「残り百八十秒、それまでに俺を捕まえてみる」

俺は糸でナギの体を止めるとナギは驚いたような顔をしながら俺をにらむ。

なるほど、あの大量数字マニアこんなことしてたのか……あいつやっぱ趣味が悪いな、つうかこれに輪切りにされた俺って……orz

ネギ 「な、なめんな……こんなもん引きちぎってやるよ！」

零崎 「頑張れ頑張れ」

後六十秒、さあさあもつと見せるよ、お前の力を。

ナギ 「なめんあああああああああああああああつ……！」

強引に疑似魔力暴走で引きちぎったな、ヘタすりゃ暴走して吹っ飛んでたのにな……アホか？ 父さんから聞いた話じゃ、鳥頭やらアンチヨコ見なきや詠唱できないとかなんとか……うん才能の塊じゃなけりや宝の持ち腐れ、豚……いや鳥に真珠？ まあいいや。

アナウンサー 『すごい、すごいぞおおおおお！ 何者だ？！ あの仮面の人物は……！ 圧倒的です……！』

ナギ 「黙ってる……！ 今逆転してやるよ……！」

後三十秒、そろそろ本気ださせるか？

零崎 「はっ！ この程度かよ、自称最強の魔法使い（笑）は」

ナギ 「くそがあああああああああああああああ……！」

ナギがこぶしを握りながら突っ込んでくる、魔力を込めており普通の人間がくればとてもスプラッタな物が見えるだろう。まあそれを障壁で受け止める、こんなもんじゃねえだろ？

零崎 「こんなもんか？」

ナギ 「あああああああああああああああああつ！」

叫びながら自身の拳に魔力を込める、すさまじいの一言だな。まだ荒いがこれがうまくなればどれだけ化けることか……将来に期待だな、余剰魔力が体から漏れ出して光ってやがる、うゝん完璧に俺が悪役だな……殺人鬼だけどな！！

ナギ 「ぶち抜けるおおおおおおおつ！！」

夷 「残念時間切れ」

ナギの体内に埋め込んでおいた鋼糸から衝剉を放ち、ナギの意識を奪い取った……はずだった。

ナギ 「があああああああああああつ！！」

夷 「ゑ？」

決まっていたと思っていたら気力か、それとも俺がしくつたかわからないがナギがこぶしを依然として握りながら突っ込んできた。

あらま、まあいいさ。そのまま突っ込んできたナギに回し蹴りを叩き込み、場外に吹っ飛ばす、派手に壁にぶつかり今度こそ気絶したらしい……マジで未恐ろしいガキだ。

夷 「まあ、及第点かな？」

アナウンサー 『しょ、勝者！ 謎の仮面人間、マスク・ザ・零崎
イイイイイイイイイイイイ！ 素晴らしい戦いでした！
』！

そんなことを言っていたが俺は瞬動を使い、エヴァの元まで戻る。
エヴァは……カップラーメン食ってやがった、ああ百八十秒、つま
り三分で終わらせてやろうと思ったたら食われてた……ちくせう。

エヴァ 「おお、格下相手に何分待たせてるんだ？」

式 「うっさい」

仮面を狐に戻しエヴァからカップラーメンを奪い取り着ですする、
がここで思い出してくれ俺は……猫舌だ、つまり

式 「あちゃあああああああああああああああああああ
あっ……！」

〓〓〓〓〓〓それから数日後
式 「もーいかい」

? 「まーただだよー！」

？ 「式さん？ 手加減してあげてくださいね?!」

？ 「大丈夫なんやろうか……ウチ心配になつてきたえ」

はい、式です。あれから京都に戻り数日間がたった、賞金は全てナギに渡しておいた。まあ金はあつて困らないよな？ 俺？ 色々平行世界とかで商売してるから、つい最近だと四十口径のIS用の銃を作つたな、あれ？ 三年前だっけ？ まあいいや、広くやつている……主にフェイク（俺の分身体）に丸投げしてる、月何億も送られてきて何に使うんだ？ とりあえず孤児院作つたり（俺の分身体偽装済み配置）株に投資してみたり（なぜか当たる）魔法関係の道具作つたり、おもちゃ作つたり、仮面作つたりと……うん普通だ。

？ 「式はーん？」

式 「すまん考え事してた、えーともういいかい？」

？ 「もうええよー」

今遊んでる子？ ……何の因果か、三歳の天ヶ崎千草さんだよ。

そして父親の睦月^{むつき}、母親の望十年前^{のぞみ}、睦月と会い、そこで式神を見せてもらったんだが……未来に千草さんに見せてもらった猿鬼だった。あれだ、過去にこんなに干渉していいのか？ 平行世界にすげえ手を出しているが一時期は紫ババアに追われ、ひどい目にあつた……幻想入りなんざしてたまるかよ。

三歳の千草さん……千草と呼んでいるがな、いい子だよ？ まったく親に似ないで育つてくれてありがとう。

睦月 「式さん、ひどい事考えてません？」

式 「気のせい、気のせい嫌だなー睦月」

睦月 「それで何度あなたに危険にさらされたか」

……正直に言うぞ、それお前が突っ込んで行った結果だからな？

憑依系の妖怪に疲れたときに式の太刀で助けて、囲まれていたときは巻き込み覚悟とある世界の冥王様の砲撃を撃ち、札も持たずに仲間を助けに行った時など怒りを通り越してあきれた。ともかくこいつにはかなり苦労させられた。

望 「……式さんに何度も助けられたのに、それはないわ」

睦月 「い、いや修業などは」

望は現在、主婦をしながら術者としても活躍中、こっちは睦月のように猪突猛進ではないが……最初はめっちゃ嫌われてた、まあ親父さんの腰の骨を蹴り砕いたらしいから（今では笑いながら酒飲む仲）一番最初は飛び蹴りされました……つうか千草さんと似すぎててびっくりした、まあ母親似だったんだなあ。

千草 「はやくー！ 式はん！」

式 「了解、んじゃ遊んでくる」

ちなみにチャチャゼロは修行僧たちを百人抜きをしている、エヴァは最近ハマって来たのか生け花……正直、やってる姿はグツときます、すんまんせん本気で惚れました……なんか批判きそうだが作者頼んだぞ？

式 「さあ探して解して並べて見つけて晒してやんよ……じゃあか
くれんぼを始めよう」

……零崎は始めない、つうか始めてたまるかあああああああ
あああああっ！

こんな日がずっと続けばいいと思ってた、みんなが笑って、話して、
遊んで、愛し合って……望んだた、うん俺が少し頑張ればよかった
のかもしれない、隣にエヴァが居て、チャチャゼロが居て、詠春が
居て、桜が居て、明人が居て、睦月が居て、望が居て、千草が居て、
栄子が居て……楽しかった、あの日までは そうあの日までは

〓〓〓〓〓〓〓二年後

詠春 「無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理
無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理」

式 「お前……結婚式なんだぞ？ 少しは余裕を……」

詠春 「だったら師匠とエヴァさん結婚しろよおおおおおおっ！
夜つるさいんだよ……」

式 「お前！ なんつうこと言ってやがる……」

今日はめでたいことに弟子の結婚式、まあ詠春の다가……まあ相手は桜なんだがな。
つつか早いなあ、十数年なんて長いと思ったら意外に短いぜ、あんなに小さかった詠春が結婚か……明人もそうだが弟子が結婚するとさびしいが幸せになるな。

式 「つつかお前はもう少し精神面で強くなれよ……たぐどこで間違えた？」

詠春 「う、うつつ……」

明人 「いい加減にしろ、そろそろ式だぞ？ つつか二年も待たせやがって」

そうなんだよ、このバカは付き合って四年近く、まあ無意識にイチヤイチヤしてたからそれ以上かな？ そんなこんなで二十歳過ぎて桜が強硬的に婚約しました……方法？ ただ斬鬼と共に本山に殴り込みかけただけだが？ 全滅しかかりました、エヴァが色々と教えるから……ああ、怖かった。

夷 「まあ大丈夫だろ？ あんだけのことやって振ってたら殺してたぞ？」

詠春 「私はどうしていつも……」

夷 「それはいつもだろうが……はあ、お前はだからヘタレなんだよ」

明人 「というよりも往生際が悪いぞ？」

詠春 「あ————う———!!」

……だめだこりゃ、どうする？

1・ぶっ飛ばす

2・こぶしでぶっ飛ばす

3・蹴りでぶっ飛ばす

4・次元のあなたにボツシユート

……碌な選択肢がねえよ、まあ仕方ないか。

夷 「おら逝って来い、そんで幸せになってこい」

詠春 「……はい」

|||||そのころ、女性陣は……（三人称視点）

エヴァ 「よし……きつかったら言え、今日はぱっちり決めてやるからな」

桜 「ありがとうな、エヴァさん」

栄子 「まあまあ、やっぱり筋がええ、エヴァさんの作る服はええよ」

エヴァ 「ふふふ、正直作るのに一週間かかったからな。会心の出

来だ」

鶴子 「すごい！ 桜さんきれいや！」

桜の着付けを満足そうにするエヴァ、心なしか表情も緩んでいる。

白い和服を着る桜は美しいの一言に尽きる。エヴァはこれを作るために一週間別荘に引きこもった、材料は全て夷が能力で作ったものである（本気で作ったので夷用にもう一着作ったのは秘密だ）今日は結婚式だが出席者は少ない、夷にエヴァ、明人にその娘である鶴子、栄子、そして近右衛門は来ていない（仕事が立て込んでいたそうで血の涙を流したらしい）

なぜ……と疑問に思うだろう。近衛家の一人娘である桜と結婚する詠春はゆくゆくは関西のトップとなるだろう。結婚式は盛大に行うべきだろうが桜が拒否して、大きな結婚式の前に親しい人たちと式を挙げたいと言ったのでこの結婚式が決まった。

桜 「ごめんな、母様もエヴァさんも鶴子ちゃんも、ワガママを言っ
つてまって」

鶴子 「ええんや、幸せそうでよかったえ」

栄子 「まったくあんたは少しワガママでええんよ」

エヴァ 「まったくだ、誰に似たんだか……」

桜 「ふふふ、ありがとうな。ウチは幸せ者やな」

嬉しそうに笑う桜、とてもじゃないが詠春との結婚のために本家に突撃した者には見えない。そうして立ち上がり、神社に向かう。近衛家にある小さな寺の前に行くためだ。

桜 「…………なあエヴァさん」

エヴァ 「なんだ？」

ちなみにチャチャゼロは御留守番である、今頃やけ酒を飲んでいるだろう、それにより夷の秘蔵の酒を飲み、ひと悶着あるがそれは別の話。

そして寺の前まで行くと詠春が待っていた。周りには夷たちが待っていた、ちなみに夷は仮面を取り素顔を見せていた。

式 「来たか、似合ってたぞ」

桜 「ありがとう…………先生」

式 「なに弟子のためだ…………先に言っておく、幸せになってこい！」

式が優しく笑いながら道を開ける、そのまま進んで行く桜。そして詠春の前まで行き、見つめ合う。

詠春 「…………さ、桜」

桜 「言葉はいらないんや、詠春…………いや詠春さん」

そのまま距離を詰める桜、詠春は一瞬身を震わせるが覚悟を決めたように桜の肩を掴み、そのまま口を開く。

詠春 「自信はない…………けれど私でよければ…………夫婦になることを許してくれ」

桜 「……はい」

そのまま二人は距離を詰め、唇を重ねる。式は笑いながらどこからか出した笛をだし演奏する。エヴァは少し羨ましそうに見ていた。栄子は笑いながらうつすらと目に涙をためていた。明人は鶴子を抱き上げながら優しくそうに笑っていた。鶴子も笑っていた。

そのまま宴会モードに突入し、夷が酒樽ごとがぶ飲みしたり、桜が詠春に抱き着いて詠春が気絶したり、子供モードのエヴァが鶴子と遊んだり……そうして楽しい時間は過ぎていった。

|||||翌日(式視点)

あ、頭が痛い、さすがに樽三十個はきつかったか……酔いつぶれたぜ、くそ頭がガンガンする。

式 「あーう、詠春ー！ 水持って来い……ウブ」

やべえ気持ち悪い、このまま酒をリバーズカードするわけにもいかないしな……エリクサーでも使うか？ 意外といるんな世界のエリクサーあるんだよな、全部まづいがな。

式 「詠春？ ……あ？ なんだこの紙？ えーとなになに……
…ハッ？」

そこに書かれているのは詠春の文字、見間違えるはずがない十年以上の付き合いだ、そのぐらいの事はできるが……内容が。

詠春 『すいません、まだ自分に自信が持てないので修業に行つてきます。心配しないでください、必ず帰ってきます 近衛 詠春』

式 「あ、あんの~~~~~」バカ弟子
がああああああああああああああああああああああ
あっ！！！！」

すっかり忘れてた……父さん、修業に出るんだった、やっべもう十年以上前の記憶なんぞ忘れてるよ！……まあ素子や木乃香たちは忘れてないぞ？

……ど、どないしよう。

そんなこんなでも時間は過ぎていく、初めは桜は泣いていたがなんとか持ち直し、いつか帰ってくる詠春のために花嫁修業をしていた。たまにエヴァと旅行に出たり、鶴子の修業いしめをしたり、ケケケざまあ！！ まあ睦月たちとも親交を深めたり、千草と遊んだり……色々あった、んでまた平行世界にちよっかい出しながら適当に実力を高めながら適当に暮らしていた……そして

栄子 「式はん……戦争が。ヘラス帝国とメセンブリーナ連合が戦

争を始めよつた」

物語は動き出した。

バカ×結婚×戦争開始（後書き）

作 「久々のネギラジオ！ ゲストは最強の魔法使い（笑）」

ナギ 「（笑）じゃねえよ！！ つうかなんだよ、あの扱い！ さらに展開モロモロパクってるだろ！！」

作 「……うん、少し変えてるけど鋼殻のレギオス十二巻のリンテンスVSレイフォンだな」

ナギ 「俺が噛ませ犬みたいな感じだろうが！！」

作 「だから最後に反撃させただろ？！！ 当初では圧倒するつもりだったのに！！」

ナギ 「なんで入れたんだ？」

作 「実は読者の方からリテンスの台詞を使ってほしいとあったんで」

ナギ 「そうなのか？」

作 「ああ、色々と迷惑をかけてしまったしな。せめてもの罪滅ぼしに書いてみた、一応夷は剽が使えるからな」

ナギ 「でもさ、剽って武芸者とかしか使えないんだろ？ なんて使えるんだ？」

作 「ああ、実は吸収の魔眼の能力で剽を吸収、そしたら使用可能

に……」

ナギ 「むちゃくちゃすぎるー!!」

作 「仕方ないだろ？ まあ次回から少し夷には退場してもらって戦争を書くぜ、主人公はナギ、お前だ!!」

ナギ 「当たり前だろ？ 俺は最強なんだからな!!」

作 「まあ原作崩壊はするがな」

ナギ 「マジか？」

作 「ああ、とりあえず詠春は原作より強くなってるし、とりあえずお前はアンチヨコなしで詠唱＋オリジナル術式でもやっておけ」

ナギ 「おいいいいいいいいい!! なんじゃそりゃ!!」

作 「H A H A H A、これから学校もあるから絶対遅くなりますので、そこら辺はあしからず。それとオーズ一年間お疲れ様でした」

ナギ 「関係なくね?!」

作 「いいんだよ、感動できたしフォーゼに期待してんだよ」

ナギ 「本当に特撮好きだな」

作 「ふふふ、ゴジラシリーズもいけるぜ。また作ってくんないかなあ」

ナギ 「まあ無視してしめるか、次回「紅き翼」」

作 「では次回も」

ナギ 「見ないとぶっ飛ばす！」

作 「でだ、今閑話も書いているんだが……」

ナギ 「へえ、何書いてるんだ？」

作 「いやクロスさせてもらっている、ハヤテ様の朧くんの世界に行ったという話を書いているんだが」

朧 「どうも」

ナギ 「え？」

作 「許可はもらっているから書いているんだがな、今度の戦争の終盤くらいに入れたい」

ナギ 「嘘だろ、おい!!」

作 「良い表情だ、それが見たかったのだよ!!」

ナギ 「誰かこいつ止めるおおおおおおおお!!」

主人公設定とオマケ（前書き）

今回はノリで作った夷の設定を書いています。

本編未使用な物まであるのでネタバレが嫌な人は戻ってください。

いいですか？ それではスタート！！

主人公設定とオマケ

主人公設定

両希りょうき 夷えびす

年齢 八歳

好きなもの

甘い物、仮面ライダー、豆腐、木乃香の笑顔、天道語録、動物、飲み仲間の鬼たち、刀集め、刹那の噛んだ時の顔

嫌いなもの

自分を実験した天使、両義式、近衛の名しか見ない者、女装、鶴子との特訓、正義の魔法使い、殺すこと

性別 男

容姿

ぶつちやけ美少女にしか見えない、空の境界の両儀式の顔とそっくりだが少し男らしさがプラスされた感じである。髪の毛は黒で腰まで伸びている、邪魔なので一つにまとめている、まあポニーテールのような髪型。町を歩くと十人中十人振り向くであろう男の娘。本人は気にしてないが時折見せる、女の顔に周囲の人は『両性類？』とまで言っている。本人は男だと言っているが……。

参考

前世では両親が早く死に、親の愛情というものを知らないらしく、詠春や桜の愛情が新鮮だったようで、人の好意というものには人

倍嬉しさを感じる、が自身に好意……つまり好きという感情を相手から読み取る能力が著し損なっていて（鈍感とも言う）そういうことに関してはまったく気づいていない。（素子や刹那の感情も弟感覚か、修業仲間だからという風にしか見ていない）前世では温厚で人当たりもよく交友関係も良かったらしいが彼女はいなかったらしい。

事故で死んだ時（本人は覚えていない、実験の弊害らしい）天使であるルシフェルの実験台となり魂の転生を受け持つ部分をいじられ、消滅させられそうになったが神がなんとか力を注ぎこみ魂だけはつなげられた（そのとき注がれた神力のせいで霊脈と契約してしまつた）チート能力をもらい転生したが……捨て子であつた、そのとき近衛詠春と近衛桜に拾われ、息子となり近衛夷となつた、そして八歳のとある道場での試合で捨て子であることカミングアウトされてしまい、近衛の名を継げなくなつた。

肉体は普通の子供だが……徐々に神力が体に定着しており、人間と言うよりも天使になりかけている、魔力はナギ・スプリングワールドの二乗だが現在も成長中であり、夷は霊脈と契約しているので実際の魔力は無限である。気は普通だがこれも成長中であり、現在は大戦中のラカンより少し少ない程度であり、霊脈を使えばこちらも無限になる。これらは胸の首飾りでリミッターをかけている。ほかに妖力の使用が可能になっている（誤って妖怪の血を飲んだため）魔力、気のリミッターは五段階に設定してある、そして妖力のリミッターは三段階に。事実上、全てのリミッターを外すと赤き翼全員と戦つても勝てる力があるが……妖力、魔力、気が完全に扱えていないので本気を出すと自身の力のせいで体が爆散してしまう（一度だけそれをして本当に吹き飛んだらしい）身体能力も無駄に高く、撃たれた弾丸すら見て避けられるほどである、感覚神経の反応がクウガのペガサス並なので五分間程度なら新幹線の動きすらゆつくり見えてしまうがその後は反応が少し鈍る。この頃は強化なしで龍種すら片手で倒せるようになったらしい。

弱点という弱点はないこともないが……熱いものが苦手でいつもフーフィーしないとお茶とか飲めないらしい。妹の木乃香にめっぼう甘く、本人は厳しくしてるのだが肝心の所が甘いので意味なし母親に女装をされて月一くらいの頻度でやってるらしい、売ると軽く万はいくらしい。仲間が傷つくとめっちゃやくちやあわてる、初の刹那の怪我の時は包帯を持ってくるほど（実際は転んだとき軽く切っただけ）嫌いなものの両義式と正義の魔法使いは親の仇のように嫌っている。両義は自分と似ていて、転生者の可能性があり麻帆良で魔法使いに英雄のような目で見られるのが嫌だからだ、後は麻帆良にいる、アスナや真名や刀子やシスターシャークティを残していることにひどく怒っている、しかしオーバースキルと呼ばれる所以である多彩な才能には感心している。正義の魔法使いにはただの『正義』の意味をはき違えている奴等としか思っていない、調べてみた正義の魔法使いの末路には反吐が出るほど嫌っている、木乃香の麻帆良行きを反対したのは木乃香の力を狙って暴走する奴等がいるかもしれないから（実際夷が七歳の時に一部が暴走して木乃香を誘拐したが偶然来ていた夷が撲滅し、学園長は激怒し魔力を奪い辞めさせた）後は実際にさらいに来た魔法使いの考えが信じられないほど狂信的であったからであつたから（このせいで東西で戦争が起きかけた）最近の悩みは女装に慣れてきた自分がいることと木乃香のブラコン具合である。

ちなみに神からもらった能力は仮面ライダーカブトとアクセルに変身、成長限界突破の才能、刀語の見稽古の能力、どんな道具でも創造できる力、さらにおまけの魔眼（この頃神眼になりかけている）

使用武器&装備

・木刀（二本）

麻帆良の世界樹から少し拝借してきた木でできている木刀、長さが両方違うので夷は右手に長い木刀、左手に短い方をもった二刀流で戦っている。神木で作ったせいか悪霊や下級の妖怪なら斬っただけ

で消滅する。

・ヒヒイロノタチ

仮面ライダーカブトの装甲であるヒヒイロノカネで作った長さが違う二対の太刀、刀身が赤く（朱色）染まっており繰り出される斬撃には魔力が込められており斬撃を飛ばせる。元々はカブトの状態で使える太刀が欲しかったから作ったが普通の時にも使えるようにした。すべてが（柄まで）ヒヒイロノカネでできているのでダイヤモンドすら両断できる硬さを持ちがこぼれなどしない。ここで説明しておくがヒヒイロノカネとは日本に伝わる金属であり、正式名称は『ヒヒイロカネ』伝説のオリハルコン級の超金属である。

・エンジンブレード

言わずとも知られた仮面ライダーアクセルの武器、ガイアメモリの力を発揮するための武器であり斬撃系の武器でも使えるが魔改造され、結界破壊、魔力増幅機能、魔力、気を纏わせることが可能となった、重さは三十キロ、人間が使える携行武器の重さではないが劇中……つまり仮面ライダーWでは鈍器のように扱っていたが、夷は片手でも振るえるので剣の役目はできる。

・カブトガジェット

三機作っており、情報収集能力、索敵機能、ジャミング機能があるガジェットなのでギジメモリもある。ゼクターをもとに作ったので外見はゼクターそっくりである、AIがあるので自立行動可能、角つまりカブトホーンは厚さ150mmの鉄板すら貫通可能な硬度を持っている。

・妖刀・怪あやし

偶然夷が五歳の時に見つけた妖刀、元々は名刀だったが人の血を吸いすぎて妖刀となった刀、血を求めており夷以外が触れると乗っ取られる。刀身は真っ赤な血のような色であり、封印していたのだが夷が所有者となったのでついていた悪霊を夷が直死で斬ったので正確には妖刀ではなくなったが妖力を流すのが効率がいいので黒刀ではこの剣を使う。

・小太刀

名前は無いが詠春の刀だった『夕風』を作った鍛冶屋から夷のために作られた、いわゆる専用武器である。まあ夷が黒刀用に改造してしまったので黒く変色してしまっている。切れ味は名刀レベルなので心配はない。

・魔法銃『ジエフテイ』『アヌビス』

魔力弾を撃つ魔法銃であり白と黒の色である。魔力弾は威力が自由に変えられるので手加減をするときはこれを使う。元々は廃棄されるはずだった、ベレッタM92を改造した銃、グリップ部分が指がかりやすいようにへこみがあるグリップパーツを追加してあり、スライドとフレーム部分が若干長くなっていて、内部構造がほとんど改造されている。マガジンを入れる部分に小型の魔力変換機を入れており使用者の魔力を変換して弾丸とすることで事実上魔力がなくならない限り無限に撃てる、各パーツを魔力保護しているので壊れる心配もない。

・首飾り

夷のリミッターでもあり魔法発動体である首飾りである。気を使った結界から神力の結界に変わったのでさらに防御力が上がった。外せば全リミッターが外れるが今のところ夷は外す気がない。

・黒のコート

普通のコートだったが夷は魔改造し、魔力障壁を常時展開し、防弾コートであり零距离での戦車の主砲を撃たれても平気な頑丈さ、そして優れた衝撃吸収能力、ぶつちやけ夷は『魔改造しすぎた』と言ってしまうほどバグな性能の防御力を持ったコート、夷の身長におおじて適度な長さとなる、任意で長さを変えて全身を包み込むことも可能。

・黒の仮面

夷がふざけて作った仮面だが……強度は最強レベルであり、被っているときに音声も変えられるようになっていて。視界も意外と広く140度くらいなら軽く見える。変装用に夷は持っている。

・各種仮面ライダーのベルト

アクセルドライバーとライダーベルト（カブト）の事、あと一つベルトを開発中である。

・影の倉庫

偶然、影に物をいれたら収納できた謎の機能、神のせいだろうか。夷はこれのおかげで場所に困らずにいるがこの頃入れすぎてカオスになっていてらしい、自分でも何が入っているのかさっぱりだそうだが、武器などは専用の場所に収納してるからわかるらしい。

・カメラ

いつも持ち歩いているカメラ、夷の趣味であり思い出はとっておきたいという夷の願いを叶えるものである。元々は詠春が持っていたが機械音痴であったため、五歳の時に夷が奪い取った。外見は仮面ライダーデイケイドの門矢士の持つカメラの色を黒くしたような感じである。中身は最新式のカメラの性能の五倍である。

術式解放

夷のリミッターを夷自身が外すための術式、魔力と気は五段階、妖力は三段階にかけてリミッターをつけている。

・黒式こくしき

妖力のリミッターを外すもの、このとき副作用か魔力に気も少し解放される。全三段階があり段階ごとに技と奥義がある。

一では目が漆黒に武器に妖力が流れ込むので武器が黒く染まる、技は月下斬、奥義は黒百合、二段階、三段階目はわからないがかなりの力で最終的には九尾の狐並の妖怪状態になる可能性がある。元々は「闇の福音」とか言う魔法使いの「マキア・エレミア闇の魔法」と呼ばれる魔法をまねたものであり、制御が少し甘い。

・神卦法

究極技法である咸卦法の魔力と気の融合以外に神力を混ぜたので夷はこう名づけた。身体能力、魔力、気ともに解放される全四段階にリミッターをかけているが一段階目でも十分な力を持っている、技

や奥義はないがこの状態で仮面ライダーに変身すると能力が大幅に上がっている。これを発動中は虹色のオーラのようなものが出るのは制御しきれない神力や魔力、気があふれ出したものである、下級の妖怪や悪霊は近づくだけで消滅、人間や生物には気絶させるほどである（なんていう555ブラスター）本気を出せば解放時に半径一キロ内のすべてを消滅させることができる。そして常時魔眼が発動状態になり、その時の目の色も虹色に様々な色に変わるようになる。

・？

最後のリミッター解除モード、黒式と神卦法の併用で身体能力、魔力に気、妖力、神力のリミッターが解放される。そして霊脈のバツクアップもあり魔力、気、妖力ともに無限に近い力も得るが……。

<オマケ> 夷の日常

||||| 三人称視点

詠春 「ふう、今日もいい」

木乃香 「にーーーーーさまあああああああああああああああああ
あああああ！……！」

夷 「ぎゃあああああああああああああ！……！」

詠春 「……いい日だ」

近衛の朝は叫び声から始まる。これは夷が四歳の頃の話である。木乃香と夷はいつも一緒に寝ている、いや木乃香が強制的に一緒に寝ているのだ。ぬいぐるみ感覚で抱き着いてくる木乃香に夷は精神がガリガリ削られていく。木乃香は可愛い女の子だ、そんな女の子に毎晩抱き着かれて平気な男がいないわけがない。まだ四歳だが前世も合わせると二十歳くらいになっているのだ、人並みの性欲もある。

夷 「イ、イタイイタイイタイ、しまってる！！ しまつて

」

木乃香 「大好きやー、兄様！！」

ボキボキボキと鳴っていけない音が夷から発せられる。つつか夷の顔が赤から白くなっている、なんか口から魂みたいなものが出てるが近衛の家では当たり前前の光景です。

木乃香 「えへへへ」

夷 「ウフフフ、シロイオハナバタケガミエテキタヨ」

…… 本当に大丈夫なのか？

詠春 「ではいただきます」

夷 「いただきます」

木乃香 「いただきますーす！」

刹那 「いただきます」

桜 「はい、たくさん食べなさい」

ひと悶着があつたが朝食を家族で食べる夷、今日はごはんにわかめの味噌汁、サケの塩焼き、漬物と朝には望ましい食事だった。箸を使いながら食べていく夷だが……木乃香と刹那がまだ箸の扱いになれておらず、ぼろぼろとこぼしていく。

木乃香 「うー、うまく食べれへん」

刹那 「……うまく使えへん」

この頃は刹那もこの面々だけなら京都弁を使いだした。

夷 「はいはいはい、ちょっと待ってる」

ふきんと箸を使って「ご飯粒などをふき取りながら、箸で皿の上に乗せていく。

三秒ルールさえ破らなければ落ちたごはんすら食べれます。

夷 「これでいいだろ？」

刹那 「ありがひょう……ありがとうえーちゃん」

夷 「お前の噛み癖慣れてきたよ」

木乃香 「兄様、兄様食べさせてー！ー」

木乃香が餌を待つ、ひな鳥のように口を突き出す。
夷は苦笑しながら木乃香のサケを箸で持ちながら口に運んで食べさせる。

木乃香 「やっぱり兄様に食べさせてもらうのが一番おいしいんや」

刹那 「えーちゃん、えーちゃんウチにも!!」

夷 「ハハハハ、もう何でもいいや」

すでに少しあきらめかけている夷、詠春と桜はほほえましそうに見ていた。

詠春 「今日は素振りと走り込みだな」

夷 「まあいいが……」

詠春 「夷は鶴子との特訓が待ってるぞ?」

夷 「……俺はまだ全然弱いぞ?」

詠春 「行って来い、最強の剣士から手ほどきを受けれるなんてうらやましいぞ?」

刹那 「えーちゃん、頑張れや」

夷 「……俺死ぬんじゃね?」

木乃香 「ねえねえ、なんで兄様髪型がアフロになってんの？」

夷 「……………どこの鬼畜師匠が考え付いたアホな修業のせいでしょう
なっ」

詠春 「……………強く生きる（遠い目）」

夷 「あれ？ どうした父さん？ 父さん?! なんでガタガタ震
えてるんだ？ 父さん、父さ—————ん!!!」

途中でハプニングもあったが昼食の時間である。今日は天ぷらにう
どんである、夷はうどんが大好きだが……………近衛の家のうどんの値段
を聞いた瞬間、残さないようにしようと思ったのは仕方ないことだ。

夷 「くう、やはりエビは最高だ」

木乃香 「兄様エビ食べ過ぎ!!!」

素子 「エビはウチの物やあああああああああああああああああ
あ!!!」

第一次エビ争奪戦争勃発、今日は昼食を食べに来た素子も参加して
おり……………拳句の果てに。

詠春 「……………皆さん、エビは私の物ダアアアアアアアアアアア
ア!!!」

近衛詠春参加。

夷 「負けられない戦いがここにある！！ 斬岩剣！！」

木乃香 「このかハンマー……！！」

素子 「甘いんや、ちびつこども！！ 斬魔剣」

詠春 「甘いのはあなたです！！ 斬岩剣！！」

ぶつかり合う箸とハンマー、桜と刹那はただその光景を見ながら静かにキレていた。

その様子に気づかない四人、さらに激しくなっっていく風圧で天ぷらが吹き飛ぶ、箸と箸が交差するが……

桜 「四人とも？（ニコニコ）」

母さん（最終兵器）がそれを鎮圧する。

まずは夷の頭を掴み詠春にぶつけ、木乃香のハンマーを箸で受け止め、刹那が素子の箸を吹き飛ばす。

ニコニコと桜が笑っているが後ろでは般若が浮いている……持つている箸がピシリとひび割れる。

桜 「詠春さん？ なにやってんや？ そんなにOHANASHI
されたいの？」

詠春 「ア、ハハハハハ、ソナナワケナイダロウ」

桜 「ええわ、今夜はお楽しみや」

夷 「ごふう、何気に母さんが最強な気が……」

桜 「あなたは木乃香を止めなさいな、撮影会開くで？」

夷 「嫌ああああああああ」

桜 「木乃香？ あなたはそのハンマー捨てようか？」

木乃香 「で、でもなお母様、ウチは」

桜 「（後で夷の生着替え写真を……）」

木乃香 「ウチハンマー捨てるんや！！」

刹那 「やめまじょうか？ 素子さん？」

素子 「刹那邪魔するんか？」

刹那 「芋が一番おいしいんです！！」

……これが近衛の昼食風景である。
なにこのバイオレンスな食卓？

夷 「はい、今日は缶けりをしようか」

木乃香 「缶けりかあ、兄様が鬼な！」

夷 「強制的?!?!」

刹那 「えーちゃん、早く始めようよ」

夷 「……なんてこった、俺に味方はいないのか？」

昼食を食べた後には木乃香や夷、刹那と一緒に遊ぶ今日は缶けりのようだが夷が鬼なんてことはいつもどおりだ。

夷 「1、2、3……」

木乃香 「勝てば官軍やあああああああああ!!!」

木乃香がカウント中に缶をけるうとするが夷はカウントを続けている。

木乃香の足が缶に触れる瞬間、足を掴み投げ飛ばす。

木乃香 「うにゃー……あ!!!」

刹那 「このちゃん?!?! 仇はとるで!!!」

夷 「7、8、9（缶けりちゃん）」

そんなことを思いながら缶けりと言う名の戦いは始まっていく、その後は何も言うまい。

ただ夷が圧倒したと言っておこう……だって姿隠していないから缶を踏めばゲームが終わるからである。

夷 「なんか妙に今日は一日が速いな」

だってキンクリしてますから。まあ今は夕食である。たまには包丁を握るのもいいかと桜が作っています、もちろん味も保証つきですが桜も忙しいので滅多に作りません。

木乃香 「まだかなあ、ウチ、お母様のご飯大好きなんや」

夷 「ある人は言った」

刹那 「うーうー、今日も楽しみでしゅ……です」

夷 「（もうツッコまんぞ？）美味しい物を食べるのは楽しいが、一番楽しいのはそれを待つてる間だ」

木乃香 「うん、ウチもそう思うで！！　なんかこう……ワクワクする感じじゃ」

桜 「出来たでー！！　みんな温かいうちに食べなさい？」

今日はハンバーグであった。ハンバーグの上に焼いたチーズがのっている。副菜としてブロッコリーとトマトが添えられていて食欲をそそる、夷も木乃香も刹那も待ちきれないよう箸を持ってスタンバイしている。

詠春は仕事の都合で夕飯に間に合わないらしい、血の涙を流しながら仕事をしている。

桜 「いやー、式はんのチーズハンバーグを作ったんやけど……」

夷&木乃香&刹那 「……いただきます……す……」

桜 「ふふふ、はい、いただきます」

夷 「さあて、今日はエンジンブレードの改良をするか」

夜、夷は自分の部屋で武器の整備をする。

ちなみに朝木乃香と一緒にいたのは木乃香が夷の部屋に勝手に入るからである。

夷 「で、パーツパーツ……ちやららちやつちやちや」

出てきたのは……魔力増幅炉、なぜ？！

夷 「ふふふ、皆さん忘れかけてるかもしれないが俺には創造する能力を持ってんだぜ？ それに魔法炉は魔眼で解析すればいい！！」

誰に言ってるのかわからないが……作者さえ忘れかけていた設定であつた。

夷 「ここをこうしてこうやって、ここに取り付けければ」

ガチャガチャとエンジンブレードを改造していく夷、その手はむちやくちや早い。

夷 「出来たあああああー！！」

こうしてエンジンブレードが魔改造されたわけだが……。

夷 「げ、もう10時かよ」

作業を始めたのが七時なのでまる三時間は作業してたわけであり、夷の様子を詠春が見に来るのだ、バレたら結構面倒なことになるので夷は速攻で装備など道具を影のゲートに放り投げる。

夷 「今日もいい日だったなあ」

そっぴいなながら眠りにつく夷。

これが夷の四歳の頃の日常であった。

主人公設定とオマケ（後書き）

作 「今日のネギラジオ!!! 夷……出てこいや!!!」

夷 「どうも主人公の夷です」

作 「今回はお前の設定を書いてみたんだが」

夷 「はつきり言ってチートすぎないか？」

作 「仕方ないだろう？ そのためのリミッターだ」

夷 「でリミッター外したら爆散するって」

作 「ああ、大マジ」

夷 「なんてこったい」

作 「それに妖刀は早めに出す」

夷 「……ネタバレ乙」

作 「しかたないだろう？ これだって学校の試験中に考えた奴なんだから」

夷 「作者に絶望した!!! だから英語で赤点なんだよ!!!」

作 「てめえだって、前世は英語赤点なんだよ!!!」

夷 「ウソダ……ウソダンドコドーン」

作 「まあいいや、あ、アンケートの方はまだですから安心してください」

夷 「じゃあしめるか？」

作 「次回のタイトルコールは別にいいよ、別れの挨拶だけで」

夷 「じゃあ頼んだ」

作 「では次回も」

夷 「見ないとライダーキックだ」

作 「それではサラダバー」

閑話のE / 黒歴史（前書き）

……まずは謝罪を。

書いていたデータが吹っ飛び最初から書き直したので本来の半分程度の長さに……。

すみません愚痴ってしまって。

今回アンケートにご協力くださった皆様。

梶月二八様、ゆや様、なおぼん様、KEN様ありがとうございました。

感想、訂正、ここが嫌だなどありましたら感想まで……それではどうぞ。

……えーと、今俺は赤ん坊でさらに生まれて間もないらしい、まだ授乳期だ。で食事と言えば母体からのぼにゆ……まてまてまて、俺はさつきまで（？）十六歳の男だったんだぞ？ 思春期まっただ中の男に……あうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあうと、そんなバカな事をしていたらバカに長い階段を登っていた、なげえアニメによくある階段だなあ。

詠春 「さて、皆にどうやって説明しようか」

桜 「政治的な面はウチがやると言ったやろ？ 詠春さん？」

詠春 「すまん、お前には苦勞をかけてしまうな」

夷 「ばぶうう？（なんか黒い展開だなあ？）」

つつか政治的つてなに？ こんな大きな家だから派閥争いとか、後継ぎ争いとかに巻き込まれちゃうのか？ 嫌だなあ、俺は気楽に1000年くらい行きたいんだが……本当に不老不死なのだろうか？ 神の一言を信じるならそうなんだが。

夷 「あ、ぶうあぶうあ（ま、どうにかなるだろ）」

そう考えながら目を閉じる。

温かいな、今母さんに抱かれてるんだがすごく温かいなあ、俺は親を物心つく前に亡くしてるから……こういうのは初めてだよ。

そんなことを考えているうちにウトウトとした気持ちになった後、俺は眠りについた。

？ 「なり……！！ こんな子供を……！！」

詠春 「養子縁組などし……この子は……どもになるんだ！！」

うるせえよ、黙れ、人がせつかく気持ちよく寝てるのに！！
そう思った瞬間、俺の体から勢いよく何かが噴き出したような……
そんな感覚がした。

詠春 「なっ？！ すさまじい魔力だ……木乃香以上か？！！」

？ 「な、なんですと！！ この赤ん坊は危険だ！ いますぐ殺すべきだ！！」

……物騒だな、そんなに魔力……ちょっと待てええええええええええ！！
！ この世界には魔力があるのか？！ それに父さんの驚きようからすさまじい量らしい。神様エ、あんたは俺をどんなやつ（怪物）にしちまったんだ？ 見稽古だけでもチートなのに！！

夷 「（実際に自分にやってみるとこの見稽古は『あれ』よりかは劣化バージョンらしいな）」

そう俺は刀語の見稽古と言ったが別に鑢七実の見稽古とは言っていない。

まああのチートな見稽古と共に病魔をプレゼントなんざももらいたくもない、確かにあの見稽古は強力で、最強で、最凶だ。一度見れば覚え、二度見たら盤石、戦略のへったくれもない、ただ相手の動きを見て、視て、観て、診て、看れば自分自身の力にしまっ……努力なんていらぬ、天才中の天才、鬼才と言わねば異端の力、

さらにそれが自身を弱くする技術なんて……俺にはその劣化版、いやこの魔眼も同時に発動すれば完璧な見稽古ができるはず。俺は健康体で見稽古（劣化）も持っているが……十分だろう。

詠春 「それでもこの子は私の息子にします！！ 異論は認めません！！」

？ 「し、しかしその子供は危険です！！」

俺はまだ知らないがこの師範代が将来、俺の正体をばらした師範代だった。まあ覚えてなかったんだがな。
閑話休題だ。

詠春 「くだい、それにこれはチャンスです。木乃香と夷、二人の強大な魔力があれば東と……魔法使いと和解できるかもしれません」

夷 「（……なんだ？ なんかごちゃごちゃしてるのか？）」

東というのはわからないが……魔法使いはいるらしいな、神様あった俺をどんな世界に送ったんだよ（魔法と気でなんでもできる世界です）

まあいいがな、相手も納得したようで父さんから離れていく、大丈夫かな。

詠春 「心配するな、お前は私の息子だ」

夷 「ばぶう（そっかい）」

詠春 「さあ、お前の妹に会いに行こうか」

い、妹?! そういえば木乃香とかいう名前がちらほら出てたが…
…どんな子だろうな。
可愛い子で頼む(キリ)

夷 「ばぶう(なぜこうなった?)」

木乃香 「あぶうああぶ」

現在木乃香と呼ばれてた赤ん坊と会ったんだが…俺と同じくらい
の幼い子供だった、まあ妹だって言われた時点で俺ぐらいかと思っ
たんだがな。

めっちゃ俺見てキラキラしてますよ目が…手にはピコピコハンマ
ー持って、イタイタイ叩くな!! ちょマジでいたいからやめて、
俺の体は精神は十六だが身体年齢は一歳にも満たしてないんだ。だ、
誰か木乃香からハンマー取り上げる!!

このときなぜ本気になって木乃香からハンマーを取り上げなかった
のか、あの時の自分を殴りたい、子供だから大丈夫だよな、と思っ
ていた自分が…数年後、ハンマーで神鳴流の技を受け止める最強
ハンマー使いが出来上がるなんて思うか? モンハンのハンター真
つ青なハンマー使いだよ!! なんてあいつふざけて気強化の俺の
一撃を受け流しやがって!!

……なんか未来から電波が送られたような、まあ気のせいだよな?

木乃香 「あぶう!!」

夷 「あぶ?!(イタイ?!)」

夷 「ばぶつづ?! (やべええ?!)」

まずいまずい!! 授乳? 俺はまだ十六歳で……いや、あの、らめええええええええええええええええええええええ!!

桜 「さあ、ご飯時間や?」

夷 「あぶう (オワタ)」

結局俺は……プライドどころか、自身の精神すら放棄した。プライド? ああ食えたよ。

|||||ご飯の時間が終わり……

夷 「…… (試合終了後のボクサーな感じに白くなってる)」

木乃香 「きゃはははは (夷の頬をつついて喜んでいる)」

素子 「なんか元気ないなー、大丈夫か? 夷」

詠春 「いろいろあったからな、疲れてるんだろっ」

父さん、違います。十六年生きてきた俺のプライドが『プライド? それは捨てるものだ』状態になってるからです。ああ早く授乳期から抜け出したい。

素子 「うー、プニプニや。かわええー」

夷 「こんな駄作にそんなに？ 仮面ライダーなんて全然出てないのに」

作 「まあ今回は十万記念閑話でもあったってわけだ」

夷 「で今回は名に話すんだ？」

作 「ああ、お前の能力、見稽古についてだ」

夷 「そういえば……俺の見稽古は鑢七実の見稽古じゃないのか？」

作 「ああ、簡易版、と言うか劣化版だなあ。まあお前の場合は魔眼でそれをカバーしてるんだがな」

夷 「そういえば作者は刀語は好きなのか？」

作 「ああ、一番好きなキャラはとがめだったなあ、ちえりおは面白かったし最後がな」

夷 「ちなみに一番苦手なキャラは？」

作 「鑢七実だな」

夷 「マジか？」

作 「大マジ、俺が一番苦手なキャラだ」

夷 「理由は？」

作 「怖かったからだなあ、大きすぎる力、そして常人なら何度も死んでいる病魔、見稽古と言う、ある意味では神眼並の目、はつきり言うところまでチートなキャラは初めて見た。自身の力の制御ができないのはわかるんだが……耐え切れないうてなんだよ」

夷 「……強大すぎる天才か、もしも吸血鬼の再生能力とか見取つたらどうなるんだろう？」

作 「マジやめてくれ、あの人ならなりかねないから」

夷 「次行くか、そういえばどうして仮面ライダーをカブトとアクセルにしたんだ？」

作 「俺が好きだからだよ、アクセルはファイズとどっちにしようか悩んだ」

夷 「……全部スピード特化のフォームがあるなあ」

作 「そういえば平成だけで順位をつけて面白かった順にすると、一位クウガ、二位龍騎、三位カブト&アギトなんだよ」

夷 「うわあ、初期のライダー祭り」

作 「好きなライダーだと一位カブト、二位ファイズ、三位クウガなんだよ」

夷 「赤ばっか!! つうかクウガは好きなんだよな?」

作 「あれは最高傑作だと思う、特に最後の殴り合いのシーンは仮面ライダーでも屈指のシーンだろう。笑いながら殴る者と泣きなが

ら殴る者、当時はまだ幼稚園くらいだったから泣き叫んだよ」

夷 「まああれは子供向けと言うよりも大人向けだったような気が……」

作 「ライダーネタなら一時間は話できるぞ？ あんまり設定とか覚えてないがな」

夷 「ちなみに一番嫌いなライダーは？」

作 「ガイ（龍騎に出てきたライダー）あれは王蛇に倒されてすっきりした、ライダーは好きだけどあいつだけは好きになれないんだ」

夷 「……そ、そうかそういえばアンケートがあるんだっけ？」

作 「ああ、そうだった。すみませんがハーレムメンバーをもう決めようと思います、あとストーリーに絡ませたいキャラ、敵対させてほしいキャラも同時に募集します」

夷 「え?! ま、まっ」

作 「今のところのハーレムメンバーは、木乃香、刹那、月詠、素子、明日菜、エヴァ、真名、千草、茶々丸、古、裕奈……^{クエフェイ}…つて多いなあ!」

夷 「こ、これ以上増やすのか？」

作 「あ、あれが一番書かれた人物の上位三位までを入れよう……これ以上はまずい」

夷 「で、ストーリーに絡ませたいキャラも募集したいと……」

作 「ああ、そうだ。ですので感想にどんどん書いてください」

夷 「このぐらいか？」

作 「ああ、それじゃあしめるか」

夷 「ああ、次回、感謝感激雨あられ」

作 「次回も!!」

夷 「見なきゃぶつた切る!!」

作 「次は二十万でもいったら閑話するか」

夷 「はははは、いくわきゃねえだろうが」

作 「そうだよな、それでは次回までー」

夷 「お楽しみに!!」

感謝感激雨あられ（前書き）

今回は二十万記念＋追加の設定などを入れました。
閑話もいれましたので。

チート駄目絶対な方は戻ってください。
ではどうぞー！。

感謝感激雨あられ

キャラ設定式

名前 りょうき 両希 えびす 夷

年齢 15歳

性別 男

好きなもの

甘い物、仮面ライダー、豆腐、木乃香の笑顔、天道語録、動物、飲み仲間の鬼たち、刀集め、刹那の噛んだ時の顔、武器を改造すること、弟子を弄ること、仮面集め

嫌いなもの

自分を実験した天使、両義式、近衛の名しか見ない者、女装、鶴子との特訓、正義の魔法使い、辛い物、熱い物、ルシフェル

容姿

ぶつちやけ美少女にしか見えない、空の境界の両儀式の顔とそっくりだが少し男らしさがプラスされた感じである。髪の毛は肩口で切りそろえられていてまんまの両儀式になってしまった、斬った理由はチャチャゼロのナイフ研ぐときに誤って斬ってしまった、だそうです。町を歩くと十人中十人振り向くであろう男の娘。

本人は気にしてないが時折見せる、女の顔に周囲の人は『両性類？』とまで言っている。本人は男だと言っているが……。この頃は仮面を被っているのでエヴァとチャチャゼロ以外に素顔を見せていない。女と言われるのが嫌なので忍法で顔を変えようとしているが……

参考

前世では両親が早く死に、親の愛情というものを知らないらしく、詠春や桜の愛情が新鮮だったようで、人の好意というものには人一倍嬉しさを感じる、が自身に好意……つまり好きという感情を相手から読み取る能力が著し損なっていて（鈍感とも言つ）そういうことに関してはまったく気づいていない。（素子や刹那の感情も弟感覚か、修業仲間だからという風にしか見ていない）前世では温厚で人当たりもよく交友関係も良かったらしいが彼女はいなかったらしい。

事故で死んだ時（本人は覚えていない、実験の弊害らしい）天使であるルシフェルの実験台となり魂の転生を受け持つ部分をいじられ、消滅させられそうになったが神がなんとか力を注ぎこみ魂だけはつなげられた（そのとき注がれた神力のせいで霊脈と契約してしまった）チート能力をもらい転生したが……捨て子であった、そのとき近衛詠春と近衛桜に拾われ、息子となり近衛夷となった、そして八歳のとある道場での試合で捨て子であることカミングアウトされてしまい、近衛の名を継げなくなった。

肉体的にも精神的にも成長し、もうこの世界では勝てる者がいないほどである。現在の魔力は魔法世界の魔法使い全員とナギ×10人である。気では地球上の生物と同等程度。神に身体的なりミッターを解かれたことで霊脈のバックアップができるようになり無限の魔力と氣を手に入れた。神力もあり総量は神二体分くらい、妖力は妖怪が束にかかってても太刀打ちできないほど……ぶっちゃけこの世界の全員がかかってても倒せないほどの実力、スクナの神力ももらい総量が増えた、後、神卦法を発動したらDMCのネの魔人化のときみたく後ろにスクナ似の鬼神がでるようになった（動きをトレースする）。身体能力は全開状態ならハイパークロックアップ以上のスピード、力は地球を真つ二つにする程度、なので全力は出さないように名前に力を持たせ、名前にリミッターをかけた。なので名前

を変えながら戦う。

弱点という弱点はないこともないが……熱いものが苦手でいつもフーシューしないとお茶とか飲めないらしい。妹の木乃香にめっぼう甘く、本人は厳しくしてるのだが肝心の所が甘いので意味なし母親に女装をされて月一くらいの頻度でやってるらしい、売ると軽く万はいくらしい。仲間が傷つくとめっちゃくちゃあわてる、初の刹那の怪我の時は包帯を持ってくるほど（実際は転んだとき軽く切っただけ）零崎化（この世界では夷以外は発現しない）したので殺人鬼となったがあくまで『零崎虚識』を名乗っている間だけ殺人欲がカンストしている、別にむやみやたらと人殺しはしないが……敵対するものには容赦せずに殺しているが女子供は殺さないという心情があり、殺しはしない（やったとしても九割九分九里）基本的には零崎化している^{ヘイ}と黒の仮面と黒の服装を着ているので（いつもだが……）連合からは「黒の死神」「絶対強者」「会ったら恥も捨てて逃げる」「^{キリンケオーガ}殺人鬼」とも呼ばれるほどの悪名、一方では人助けもしてるので「黒の救世主^{メシヤ}」「心優しき鬼」「敵対しなければ心強い」「女装ノ神」と呼ばれていて必ずしも悪名だけではない。零崎を始めるときは恒例の「零崎を始めますか」と言う、この言葉は強制空間境界の発動キーともなっていて周囲一キロは転移不能、破壊不能の境界にとらえて殺す。

使う名前は今のところ四つ、「両希夷」「近衛夷」「両義式」「零崎虚識」これに序列をつけると一番は両希、二番はギリギリで両義、三番は零崎、四番は力の差がありすぎる近衛である。

エヴァと出会い、さらに正義の魔法使いが嫌いとなった。エヴァと共に戦うとき以外は零崎を使い皆殺しにしている。あまり過去を変えたくないのに関わらないようにしているが……そんなことするほど運命の神（作者）が甘くないのでなんか過去の人々と対面している。別荘で七年近く修業したため……年齢が15までに成長し、容姿が両儀式になってしまっている。本人はこれを隠すために仮面を被っているがこの頃は寝るとき以外は仮面を被りっぱなしだ。

ちなみにチート能力は仮面ライダーカブトとアクセルに変身、成長限界突破の才能、刀語の見稽古の能力、どんな道具でも創造できる力、さらにおまけの魔眼。最近、自分でも強さがカンスト&精神が崩壊してきたと思っっている（特に零崎モードは）しかしまったく直す気もなく、いまの自分はこうなんだと自己完結してる部分が多い。現在の夷（強化無し）でも人間を越えているが無意識に神力を封じているのだが無意識に体の正常化をするために使っっているのどどん総量が多くなっっているのには気づいていないし、魂が人間と言うよりも神や魔王クラスの位になっており某有名な死徒二十七祖の一角、一位のとある魔犬の絶対殺害権も及ばなくなっっており逆に瞬殺できるようになっっている。さらに悪いことに直死の能力の魔眼との適合が高く、文字通りの「直」接視して「殺」す魔眼となっっており無機物の線や点すら見えるようになってるのでその気になれば地球すら「殺せる」が殺す気はないし、一度見てみたら点の部分で力すぎるのでやる気が起きなかつたらしい。魔眼は神から譲渡された目であり、ON/OFFは比較的簡単にできるが本気をだすとON/OFFできないようになるそうだが、主に夷は解析、理解、複写、直死、吸収を多用している。

見稽古も進化というよりも研磨され本元の鑢七実の見稽古以上のスピードで見取れるようになってる、言葉に表せば「一目見れば完全、二回目は無い」と言わんばかりに動きを見ただけでわかるし、その人になりきれることも可能、つまり同じ動きで戦闘することも可能である。夷の虚刀流は完全ではなくすべての技ができるわけではない、血刀である「鑢」を魔眼のおかげで解析できたのだがその影響か「刀」に拒否感を感じるようになった。なぜか無類の仮面好きになっってしまった、今影の倉庫は仮面だらけになっっている。

ちなみに虚刀流とは刀を「使わない」無刀の流派だがその理由は、代々刀を握る「才能がない」がために手「刀」や足「刀」を使う「剣法」である。しかしこれは一子相伝の技術であり、夷も覚えてい

る記憶から見取ったものが多く、エヴァとパクティオーするまで未完成だった。これにより夷は刀を持つ才能も失うが成長限界突破の才能と見稽古により再び剣を握れるようになった。

両希夷のデータりょうきいひびす

虚刀流・式

虚刀流の技を夷自身で昇華させた物、通常の虚刀流は対人戦闘だけ想定されたものであるが……夷は対神、天使など人外の者たちへの対策へと昇華させたため一撃一撃が必殺の威力を持っている。エヴァとのパクティオーで虚刀流の技術をすべて覚えたのだが新たに銃対策の構えを作ろうと試行錯誤中である。

構えと奥義一覧

・虚刀流零の構え 『無花果』

虚刀流零の構えで、実際に構えないので構えと言えないがあえて名称をつけるとうなるらしい。自然体によっていつでも攻撃態勢にうつることができるのが特徴。これの使い手「曰く、構えとは無駄の他に何でもないらしい。

・虚刀流一の構え 『鈴蘭』

足を大きく開いて腰を深く落とし、敵に対して壁を作るような構え。左足は前に出して爪先を正面に向けて、右足は後ろに引いて爪先は右に開き、右手を上左手を下に、それぞれ平手で構える構え。

奥義・『鏡花水月』

一の構え 『鈴蘭』 から掌底を繰り出す、虚刀流最速の技である。

・虚刀流二の構え 『水仙』

身体を開いた『鈴蘭』とは対照的な半身の構えで、前後の同じ高さに配された両手は、平手ではなく貫手で構える構えである。

奥義・『花鳥風月』

二の構え「水仙」から繰り出される奥義。半身で前後に貫手を配す構えからの貫手。

・虚刀流三の構え 『躑躅』

ぶつちやけると作者がど忘れしたのでわからない。

奥義・『百花繚乱』

三の構え「躑躅」から繰り出される奥義。両手が刀で塞がれていても発動できる奥義であり、下から打ち上げる膝蹴り。

・虚刀流四の構え 『朝顔』

虚刀流の中で唯一こぶしを握る構えであって両足を横に向け腰を落としながら、身体をちぢこめるようにした状態を保つ構え。

奥義・『柳緑花紅』

四の構え『朝顔』から放たれる打撃透徹の奥義である。その一撃の前ではどのような防御も意味をなさず、外側はそのままに内側のみを破壊する奥義、つまり神鳴流で言う斬岩剣 弐の太刀である。

・虚刀流五の構え 『夜顔』

両足を肩幅の広さで左右に揃えて、両手はゆるい平手の形で肘を折りたたむようにして胸の前に構える。雪上のような悪条件の足場にも対応できる。

奥義・『飛花落葉』

五の構え『夜顔』から放たれる両手での張り手である。左右の肩に同時に張り手を打ち込むことにより、その打撃力を全身の表面に伝達させ伝導させる。つまり内側を破壊せずに外側のみを破壊する装甲破壊の技であり、四の奥義『柳緑花紅』とは対の奥義である。虚刀流における鞘打ち。力加減次第では、相手を殺さず、意図的に戦闘不能の状態に陥れることができる。虚刀流で唯一手加減「できる」奥義。

・虚刀流六の構え 『鬼灯』

首を固めた頭部の左右に手刀を配置し、両肘を対称的にそれぞれ前に突き出しつつ、両脚は爪先立ちにした非常に自由度の高い構え。前後の自由移動に対応した七の構え『杜若』とは対になる構え左右の自由移動に対応した構えである。

奥義・『錦上添花』

左右方向自在の足の運びからの奥義であり、両手で放つ水平手刀で

両脇を打つ奥義。

・虚刀流七の構え 『杜若』

足を平行に前後へと配置し膝を落として腰を曲げ、上半身を軽く前傾させる構えから駆け出す。静止状態の零歩目から一步目に至る後ろ足の踏み切りと、一步目から二歩目に至る前足の踏み切りの間において移動速度を一気に減速させることで相手を見誤らせる、緩急をつけた変幻自在の足運びの構えであり、六の構え『鬼灯』の対となる構え。居合い抜き対策として有効で、相手の剣が速ければ速いほど成功率が跳ね上がる、原作では宇練銀閣の「零閃」に対抗した。ただし前後の動きには強いが、左右の動きには対応していないという弱点を持つ。

奥義・『落花狼藉』

足を斧刀に見立て、全体重を乗せ加速させた前方三回転かかと落とし。足場がある場所では威力が3割増となるが、夷は改良し空中でもそれを可能にさせた。

・最終奥義『七花八裂』

最終奥義と言っているが原作での虚刀流七代目、鑢七花が蝙蝠と戦う前日に考え付いた技であり、虚刀流の打撃技混成接続を応用した奥義の強制接続する奥義……だが弱点は『柳緑花紅』を放つ時の溜め動作によるタイムラグ（『柳緑花紅』は若干のためが必要のため）だが即応性があり、技名通りに七人の相手を同時に相手にできる。

・最終奥義『七花八裂（改）』

ためによりタイムラグを失くすために一番最初に繰り出す奥義を『柳緑花紅』に固定し、もつとも威力がある順番に奥義を出す、改良版である。出す順番は『柳緑花紅』 『鏡花水月』 『飛花落葉』 『落花狼藉』 『百花繚乱』 『錦上添花』 『花鳥風月』 である。

?????

夷のリミッターと霊脈とのバックアップがあることによってできる。

黒式と神卦法を同時に最大解放及び身体能力が人間どころか神すら超える、霊脈があるため、星が生きている間だけなら（この頃は世界と繋がりかけているのでその心配もなくなってきた）夷にいつでも魔力供給できるようになっている。しかし反動も強くヘタをする。と世界そのものを壊しかけないので夷は封印している。

魔眼

夷が神からもらったものだが……成長限界突破のせいで成長が止まらずにいる。解析、理解、複写、直死、吸収、分解、霊体感知、幻術の力を持ち夷曰く「眼光だけで殺すことも可能である」発動していると夷の目の中が様々な色が混ざったわけのわからない目になっている（空の境界の両儀式の魔眼状態を少し暗くした感じ）。最大解放時間は強化前は五分、強化後はどんなにもつても一時間である、それ以上は脳が溶け出す。

首飾り

木乃香からもらった首飾りであり、リミッターの源である。強大な魔力と気を抑え込んでいるのと神力ですでに位が聖遺物級になっており、普通の人間では生命力を封じられ死に至るほどのものである。夷ができる最大級の結界を何十に薄く張っており、さらにどんな環境でも錆びず、壊れず、劣化しないようにコーティングしており絶対に壊れないようになっている。もしも壊れたら夷の力が常時開放になり……超高密度の神力と魔力や気、そして妖力があふれ出し、最悪世界が滅ぶ。

夷の仮面コレクション

黒の仮面を作ったときにほかの仮面を作ろうと思っただけで作っていたらあれよあれよと言う間に百種類以上、色々なアニメのネタ仮面も作っているらしく影の倉庫に専用の場所を作ったほどである。お気に入りには狐の仮面とマスク・ザ・斉藤の仮面である。ライダーの能力

をもとにして作った、マスクライダー（夷命名）を作り、被っているときだけ、そのライダーになりきるといってとんでもない物を作った。

どんな道具でも創造できる力

適当に夷が頼んだ能力だが……この頃は魔装服や仮面、刀やお仕置き用の武器などまともな物を作っていない。一応は制限はあるが「一日にできる物は五つだけ」だけであり基本なんでも作れるが、魔眼で一度理解してしまうので自力で作れるものばかりである。一応神殺しの武器も作れるらしいが槍一本作っただけで相当疲れたそうです。この頃は仮面の材料くらいしか作っておらず、涙目である。

影の倉庫

自分の影に物を放り込むと異次元に収納してくれる、いわゆる某青狸のポケットである。

この頃は自分自身でも何が入っているかわからなくなっており、別荘の七年間を使い、掃除したら……自分の小さい時に作ったあまりに危険なものがたくさん入っており、そういうものはすべて処分したがまだカオスである。なぜか各種ライダーのベルトが入っているが作動しない、ただのレプリカであるがカブトとアクセルのベルトは作動するがもう一つだけ切り札として夷が保管しているものがあるが、今となつては夷自身が強くなりすぎたのでお蔵入りかもしれない。

術式吸収

吸収の能力の魔眼を使う、文字通りの相手の「魔法を吸収」するものであり、伝 伝の「残滅眼」を参考にして作ったものであり、そのまま吸収して魔力を補給したり、そのままの術式を利用して術式兵装をすることも可能である。

・参考

この名前は夷の本名であり、本気を出すとき以外はこの名を使わない。本来の夷のスペックを引き出す名前であり、序列も一位である。ほかの三つとは比べ物にならないほど強大であり、その力は神すら凌駕しうる力である。この名は使わないようにしている、使うと三日間程度は動けなくなる。あまりの力に世界の方が耐え切れないので結界を張ってあまり世界に干渉しないようにしなければならぬ。

両義式（りょうぎしき）のデータ

夷が過去に居る人物である「卓越者（オバースキル）」への嫌がらせをしようとしていた、しかし案外気に入っており今では夷ではなく式と自分から名乗るようになってきた。

この名前だとなぜか人が全員助かるのもつばら護衛任務なのは任せる（バリバリ）なんてなあ。序列は二位であり神卦法を使った近接格闘は無類の強さを発揮する、好んで使うのはナイフ「七つ夜」と二対の太刀「ヒヒノタチ」魔法銃「ジエフティ」「アヌビス」…そして虚刀流である。たまにバルバト 化するが完全なネタである。

神卦法

究極技法である咸卦法の魔力と気の融合以外に神力を混ぜたので夷はこう名づけた。身体能力、魔力、気ともに解放される全四段階にリミッターをかけているが一段階目でも十分な力を持っている、技や奥義はないがこの状態で仮面ライダーに変身すると能力が大幅に上がっている。これを発動中は虹色のオーラのようなものが出るのは制御しきれない神力や魔力、気があふれ出したものである、下級の妖怪や悪霊は近づくだけで消滅、人間や生物には気絶させるほどである（なんていう555ブラスター）本気を出せば解放時に半径

一キ口内のすべてを消滅させることができる。そして常時魔眼が発動状態になり、その時の目の色も虹色に様々な色に変わるようになる。すでに別荘のおかげで七年近く修業したおかげで完全制御した。三つの力を反発させて利用しているがヘタをすると体爆散してしまうので分量を間違えたら、人間爆弾になってしまう。

ヒヒイロノタチ

仮面ライダーカブトの装甲であるヒヒイロノカネで作った長さが違う二対の太刀、刀身が赤く（朱色）染まっており繰り出される斬撃には魔力が込められており斬撃を飛ばせる。元々はカブトの状態では使える太刀が欲しかったから作ったが普通の時にも使えるようにした。すべてが（柄まで）ヒヒイロノカネでできているのでダイヤモンドすら両断できる硬さを持ちがこぼれなどしない。ここで説明しておくがヒヒイロノカネとは日本に伝わる金属であり、正式名称は『ヒヒイロカネ』伝説のオリハルコン級の超金属である。夷の神力に反応していて切れ味がどんどん上がっているのだが夷は気付いていない。

魔法銃『ジエフティ』『アヌビス』

魔力弾を撃つ魔法銃であり白と黒の色である。魔力弾は威力が自由に変えられるので手加減をするときはこれを使う。元々は廃棄されるはずだった、ベレッタM92を改造した銃、グリップ部分が指がかりやすいようにへこみがあるグリップパーツを追加してあり、スライドとフレーム部分が若干長くなっていて、内部構造がほとんど改造されている。マガジンを入れる部分に小型の魔力変換機を入れており使用者の魔力を変換して弾丸とするので事実上魔力がなくならない限り無限に撃てる、各パーツを魔力保護しているので壊れる心配もない。この頃はCQCにも手を出し始めたので銃を持ったまま格闘できる技術が欲しいと思っている。

七つ夜

とある神様（読者様）にもらったナイフ、とある「直死の魔眼」を持つ者のナイフであり

飛び出しナイフで、柄の部分に七つ夜の文字が書かれている……らしい（作者はネットで探しまくってようやくわかったものです、間違っていたら指摘をお願いします）直死の魔眼とよくなじむらしく、遊び半分で使うことが多い。零崎では本気で殺しに行く。

忍法「足軽」あしがら

元々は真庭忍軍十二頭領の一人で真庭 蝶々（まにわ てふてふ）の忍法であり、歩法の一つらしいが本人いわく重力を無視した動きをすることが可能になる忍術。夷は主に手加減ように使っている。荷物を持つときに有効活用してらしい。ちなみに実際に重力に逆らっているわけではなく、ただの歩法的一种である、虚刀流で使っているのは打撃の重さを消すために使っているのである。

・参考

神力と魔力、気が充実している、いわばバランス型の戦い方が可能であり、両義でも世界と戦って勝てるほどである。

零崎虚識せうしきのデータ

見稽古と魔眼の併用により、夷の過去の記憶から再現した零崎を見取ったときに潜在的に覚醒し、五歳の頃に完全に目覚めてしまった夷の負の部分の感情を押し込んでできた存在であり、原作通りの『殺人鬼』である。このとき仮面と黒い服を着ているので「黒の死神」と呼ばれるようになった。零崎だが女子供を殺さない主義であり、零崎としては異端中の異端であり……敵以外にはめっちゃくちゃ優しい。戦闘が始まると残虐非道な攻撃と専用の結界で相手を逃がさない、得意な得物は鋼糸であり、黒式を使った剣術など、武器なら何でも使う。

序列的には対したことがないが……厄介さは序列一位である。

零崎の開始の言葉は「零崎を始めますか」でありこのときには女子供以外は皆殺しにする。子供の基準は人間なら二十歳、他の人外では見た目が子供なら見逃すが……向かってくるなら殺す。二つ名はパクテイオーカードから「殲滅殺人」フェスティバル

鋼糸

夷が作った、「殺すためだけに」作られた糸、見た目は普通の糸だが神力で作りだした糸であり理論上では全ての物質を切れる筈である。長さを自由に調節でき……最大は不明である。元ネタは鋼殻のレギスのリントンスの鋼糸を参考している。単一分子という特殊素材を参考に作っているので本当にも何でも切れる。

黒式（改）

エヴァの本物の闇の魔法を見取り完全に制御した黒式、純粹に妖力と神力だけの解放となったので零崎によく合うようになった、完全開放すると夷が……

奥義・技一覧

・黒式・一

最初の解除、30パーセントの妖気と10パーセントの神力を解放する。目が淡色になり、身体能力もアップする。

秘剣・月下斬

まず右手で切り上げるときに武器破壊をし、その後無防備なところに月を描くように弧のように左手の刀を振るう。

奥義・黒百合

連続十連続の高速突き、両手の刀を使い突きをし、最後に切り上げて終了する。

・黒式・二

60パーセントと30パーセントの妖気と神力を解放する、目が淡色になり、体から黒いオーラ（結界の役割もできる）を纏い身体能

力も格段にアップする。

秘剣・幻魔斬

斬撃を飛ばす神鳴流の「斬空閃」の威力と範囲を倍増させた物。

奥義・虚空月影刃

左手の刀で月を描くように一閃した後、右手の刀でそれを一閃する
ように妖気を纏った巨大な斬撃で攻撃する技、このときのためが必要
だがあらかじめ刀にチャージすることも可能。

・黒式・三

100パーセントと50パーセントの妖気と神力を解放する最終段
階、目の魔眼が常時発動になり、黒いオーラが体全体を包み込み、
さらに妖気を飛ばして攻撃することするようになった。

秘剣・？

奥義・？

妖刀・怪あやし

偶然夷が五歳の時に見つけた妖刀、元々は名刀だったが人の血を吸
いすぎて妖刀となった刀、血を求めており夷以外が触れると乗っ取
られる。刀身は真っ赤な血のような色であり、封印していたのだが
夷が所有者となったのでついていた悪霊を夷が直死で斬ったので正
確には妖刀ではなくなったが妖力を流すのが効率がいいので黒刀で
はこの剣を使う。最近は零崎のときに使っているので血のせいでさ
らに強力になっている、つまり妖刀に戻ったわけだ。血を求めてお
り斬刀狩りの能力も得たのではや「人を斬るため」の刀となった。

小太刀

名前は無いが詠春の刀だった『夕風』を作った鍛冶屋から夷のため
に作られた、いわゆる専用武器である。まあ夷が黒刀用に改造して
しまったので黒く変色してしまっている。切れ味は名刀レベルなの
で心配はない。こちらで零崎に使っている、そして五百人程度斬っ
たので軽く妖刀になっている。夷のせいで刃こぼれしないように魔

力を纏わせていたら、魔力吸収の能力を手に入れた魔法使い殺しの刀となつてしまった。障壁なんぞ紙程度に斬り裂けるがあくまで「吸収」してるだけなので許容範囲キャパシティを超えると崩壊するが許容範囲は夷の最大魔力（初期）なので早々壊れない。

斬刀狩り

元々は鞘の中に血液を入れ、その状態で居合いをおこなうことで、居合いの素早さを飛躍的にアップさせる斬刀『鈍』 限定の奥義なのだ。妖刀・怪あやしと小太刀の鞘と刀身に似たような構造を入れ、こちららは素早さではなく切れ味をあげる。鞘に戻さずに切れ味を上げることまでできる。

仮面と魔装服

仮面はDARKER THAN BLACKの黒クイの仮面である。服装のほうも黒のロングコートで手袋もしており、全身が真っ黒である。ちなみに服の方は零距离で現存する地球の兵器の直撃に耐えられるほどの強度、対ショック性も高く大気圏から叩き落されても大丈夫である。手袋は鋼糸用であり、誤って自分を傷つけないためである。

・参考

殺人鬼であるが基本的にはやさしい性格であり、零崎を始めない限り殺しはしない。この頃は制御にも成功しており殺人衝動も抑えてきた。完全なる接近戦タイプであり、残滅戦にもっとも適したものである。接近戦と残滅戦なら両義より上。

近衛夷このええびすのデータ

完全に仮面ライダーの力しか使わないときの名前になったのだが……
…ライダーがいらぬ子状態なのでしばらくは使われないかも……
強さ的には最弱あり夷も最近ではライダーになることに拒否感も持

っているので……どうしよう出番がない。

仮面ライダーカブト

元はZECTと呼ばれる組織に作られた「マスクドライダーシステム」その一号目のライダー、作者が一番好きなライダーであり間違つてベルトを買ってしまったことは仕方ないことだ。……主に戦闘では「マスクドフォーム」防御力が高いフォームで戦い、とどめは「ライダーフォーム」と呼ばれる超高速戦闘が可能なフォームで行う。ちなみに「LOCK UP」というのは体を駆け巡るタキオン粒子を操作し、時間流を自在に行動できる状態を指し、ベルトの右側のスイッチを押すことで発動する。「RIDER KICK」とは必殺技であり破壊力は19tだが改造により40tとなった、波動に変換したタキオン粒子で威力を高め、時空を自在に動き回る敵を原子崩壊・消滅させる。跳び蹴り・回し蹴り・横蹴りのいずれかを放つ、放つときはゼクターの側面のボタンであるフルスロットルを三回押し、ゼクターホーンを倒す。

ハイパーフォームも説明しておく公式チートである。最大の能力と言えば「HYPER CLOCK UP」と呼ばれる、単純なスピードのみで時間を自由に移動できる、もちろん過去にも未来にもクロックアップの数十倍のスピードであり、クロックアップすら止まって見える。ハイパー状態のライダーキックは左についているハイパーゼクターのホーンを倒し、後は通常のライダーキックと同じことをするだけである、破壊力は30tだったがこちらも改造により100tの威力で飛び蹴りをくらわせるものである。

仮面ライダーアクセル

作者のストライクゾーンにど真ん中に飛び込んできたライダー、いわゆる二号ライダーと言うもの。ベルトがバイクのスロットルを模した変身ベルトであり、上部中央のスロットにアクセルメモリを挿入しパワースロットルを捻ることで、装着者をアクセルに変身させ

さがカンストしており、ゲームで言うバグキャラである。強さも成長限界突破のせいで底なしである。

パクティオカードについて

エヴァとの本契約により手に入れたカード、ここで補足だが夷はただ複数の本契約できる、これは魂が神並になったおかげである。

ここで夷のパクティオカードを紹介します。（すみませんラテン語がわからないので英語表記です）

名前表記 RYUGI SHIKI（両義式）

称号 FESTIVAL（残滅殺人）

色調 Prisma（虹色）

徳性 Murder（殺人）

方位 centrum（中央）

星辰性 Nigrum foramen（黒い穴）

ローマ数字 ？

アーティファクト 完了形変体刀虚刀・式

こんな感じである、アーティファクトのおかげで完全に虚刀流を扱えるようになった。

こんな感じだが今度修業編も閑話として入れたいと思ました、なので楽しみに！！

|||||ここから閑話

木乃香 「嘘や、嘘！！」

詠春 「落ち着きなさい木乃香！！ 私だって信じたくありません

が……事実です」

木乃香 「嘘や!! 兄様がウチを置いて消えるなんて嘘やああああああ、ウアアアアアアアアアアアアアアアアアン!!!」

桜 「落ち着きなさい、今は神鳴流の剣士だつて探してくれるんです! きつと……きつと見つかりやる!!」

詠春 「そうだ、今回は鶴子だつて、神鳴流の実力者が探しているんだ。大丈夫信じて待とう」

……ウチは待った、けど兄様が見つかったという報告はついに聞けなかった。

あれから一年、せつちゃんも素子姉さんも無理して明るそうに振舞っていた、ウチもそうしたアスナに心配かけれへんもん。

兄様が居なくなったのちょうどウチが三年に上がるときやった。ウチはいつも通り部屋で素子姉さんとせつちゃん、アスナに真名や裕奈、クーフエイとエヴァちゃんも一緒に進級パーティーをやるうとガトウ先生やタカミチ先生、おじいちゃんや明石教授や夕子さんやらみんなに頼んでサプライズパーティーをしようと思ったんや。

……せやけど、それが叶うことはなかったんや

木乃香 「クフフフ、えびにいに着せる服も準備完了や」

エヴァ 「ふふふ、式とのよ ゲフンゲフン、あいつが喜んだ服だ、顔もそうだが性格も似てるからなああいつは」

アスナ 「エヴァ……式は私の物だよ?」

真名 「アスナ? バカ言うな私の物だよ?」

素子 「あつちはあつちで大変そうだなあ、まあいいがな」

刹那 「楽しみですよ……ほんとえーちゃんが居ると退屈しませんね」

ガトウ 「ほつと！ こんな感じでいいのか？」

タカミチ 「師匠！！ それはそこじゃありませんよ！！」

裕奈 「お父さんも！ 手伝って！！」

明石 「い、いや父さんはそんなにちか」

夕子 「あなた！！ しつかりなさい！！」

明石 「式さんがいればなあ」

近右衛門 「これこれ、ケンカはいかんぞ？ まったく老体にムチ打ってこんなことをすることになるとはの」

クーフエイ 「お腹すいたアル」

木乃香 「みんなあと少しや」

職員 「が、学園長！！ ガトウ先生！ タカミチ先生」

近右衛門 「どうしたんじゃ？ そんなに血相抱えて？」

職員 「……こ、近衛夷君の件なのですが……」

ガトウ 「なにかあったのか？」

タカミチ 「……………」

職員 「……………現在行方不明になっているそうです」

パリン、と皿が床に落ちる音がしたんや。ウチが落としたとわかるまで少し時間がかかったんや。

木乃香 「う、そ」

刹那 「このちゃん!!」

素子 「木乃香! まずい!!」

木乃香 「なあおじいちゃん、何かの間違いやろ? な、そうなんやろ!!」

エヴァ 「またか……………あいつ似の奴はどうして置いていくんだ? なあ式い」

アスナ 「木乃香……………」

これが一年前の話や。

さあさあこれから始まるのはただの閑話でございます、転生者であり、殺人鬼であり、守りし者である……………」両希」「両義」「近

衛」がない物語の始まり始まり

||||| 刹那視点

刹那 「ふっ！ ふっ！！」

木刀を振る、日課として千回は振れとあの人に言われたからだ……私が大好きなあの人に。

刹那 「っ！！！」

つい怒りで振りが荒くなる、いけないいけない、落ち着け、なにごととも頭を冷やせあの人だって言ってたじゃないか。

夷 『おばあちゃんが言ってた。剣士ならクールであるべき……沸騰したお湯は蒸発するだけだ』

つて言つてましたっけ……もうあれから何年も過ぎた感じがします。あれから必死の搜索が続けられました、思念や魔力痕跡、ありとあらゆる物が使われ搜索はまだまだ続いています。今日までなにか見つかったと言う報告はありません、むしろ何もなかったと言う報告しか聞きません。

鶴子さんや長、果ては青山家の当主様の明人様、桜さんの式神の斬鬼さんも探し続けました、周辺の妖怪たちもです。えーちゃん、あなたただ人脈あるんですか？ 大妖怪も探すって……まったく、本当に規格外の強さと優しさですよ。私には無い物をもちつきなんですよ……えーちゃん。

刹那 「斬岩剣！！」

最後に技を使って調子を確認めると空からバードが飛んできます。
あ、これはえーちゃんから託してもらったメモリと言う奴です、自立行動可能で私のペットみたいな感じです。

バード 「！！！」

刹那 「はいはい、今日もこのちゃんは元気なんですね？」

バード 「！！！」

刹那 「え？ アスナに撃墜されかけた？ まったく……まあいいです、引き続きお願いします」

そうするとバードの姿が消えていきます、ステルスにはいったのですね。私でも見つけるのが困難だと言うのにアスナは本当に強いです、私では手も足もできませんでした。一度、模擬戦をしたらボロボロにされてしまいました。

刹那 「私もまだまだですね……」

もうすぐHRですがもう少しだけ振りましょう。

……しかし私の時計が一時間ずれていて、それに気づかず登校したらタカミチ先生に怒られてしまいました。

|||||素子視点

素子 「……」

教師 「はいでは200ページを見てくれ」

私は今、すっごく眠い……どのくらいかと言うともう首がカクン、カクンしてるくらいだ、まずい……昨日、本を書いていてまともに寝ていないんだ。さらに間が悪いことに今は三時間目で英語だ。私は英語が苦手によく夷に教えてもらっていた……プライド？ なんだそれは？ 食えるのか？ 私は英語がすごく苦手だ、文章読解？ 単語？ わけわからない。これだつたら剣術をやっている方が楽しい、特に夷との戦いは本当に楽しい。姉さんも言っていたが「どんどん強くなっている、まるでウチの動きを吸収しているような動きやった」って言ってたしな。

一年前のあの日、私は……いや木乃香や刹那も連れて、私たちは京都に帰った。

そこであつたのは長い髪の女の子と後ろ髪を一纏めにしたメガネをかけた綺麗な人にあつたんや、どうやら二人とも夷の手紙に書いてあつた「月詠」と「千草」って人みたいやつた。

千草 「初にお目にかかります、天ヶ崎千草と申します」

素子 「私は青山素子、よろしくな千草さん」

千草 「千草でええですよ？ 素子」

素子 「わかつた、千草……これでいいな？」

木乃香 「ウチの名前は近衛木乃香や、よろしゅうな千草さん」

刹那 「桜咲刹那でしゅ……です、以後お見知りおきを」

月詠 「……月詠と言いますえ」

刹那のいつもの癖がでたところで私たちは話を始めた。

二人とも夷に世話になっていろいろらしく、月詠なんかは家に住んでい
るそつだ……うらや ゲフン。

月詠 「ウチ、ウチのせいや。ごめんなあ、夷はん……ウチは……
やっぱり疫病神やったんや」

千草 「誰もあんたは責めてないやろ？ ……ウチやって悔しいん
や、夷はんをもう少しちゃんと見てれば……」

素子 「お前らのせいじゃない、だが……もしもこれが誘拐ならや
った犯人はもうお天道様が拝めない体にしたる……」

木乃香 「ウチもや……兄様を誘拐？ なんやそりや、ウチらにケ
ンカうつてるようなもんやな」

刹那 「ふ、二人ともお、落ち着いて！ ここで私たちが何しよう
と無駄ですよ……」

刹那の言葉で正気を取り戻す……アカンアカン、クールにや。
まったく私も修業が足りない、もっともっと強くならなくては……

月詠 「ウチは嬉しかったんや、ウチは誰にも相手してくれへんか
った。初めてやったんや、夷はんが初めてウチを人間と認めてくれ
たんや。なのに……なんでや……」

刹那 「……ウチもですよ、あのひとやこのちゃん、素子さんと会わなかったらウチはどうなってやったんやろ？ほんとそう思うんや」

木乃香 「せつちゃん……」

この後、長が来て月詠が麻帆良に行くことになり木乃香や刹那のクラスに入れるように学園長が手配したそうだ。結局一週間滞在したが何も証拠となる物がなかったので私たちは麻帆良に帰って行った。

月詠は麻帆良に着くとその大きさにびっくりしながらもクラスに溶け込もうと頑張っているらしい

教師 「起きろ、青山」

パソコンと教科書が何かで叩かれる感触を頭に感じる。

ゆっくりと頭が覚醒する……どうやら記憶を思い出していると思いついで寝ていたようだ……頭がぼやっとしたような感じがする。むう、昼休みは寝ようと決心する。

教師 「お前には宿題をたっぷり出してやるからな」

素子 「ふぁーあ、はいすみませんでした」

そのまま寝ぼけ頭のまま授業を受けるがイマイチ授業を思い出せない……眠い。

どうしていなくなったんだ？ 夷……。

そのまま夜となる……今日は停電日だ。

つまり今日は敵が大勢来る、毎年毎年思うが今日くらいはやめてくれないか？ バカみたいな数の敵と戦う、最低でも百以上。なんだ？ 寝不足なのにさらに寝不足にする気か？ エヴァの別荘で一日休養をとっておいてよかった。

今年は特に多いらしい……まったく、同じ関西呪術協会から派生した組織もいるみたいだから……複雑だ。だけど倒すことに躊躇しない……戦闘での迷いは死に繋がる、姉さんに何度も言われた、最初斬った時、私は何かが崩れる感覚がした。それが恐怖だと知るのは戦闘が終わった後だ、戦いに恐怖を感じない者はいない……はずだ、夷はそのところどうなんだろうか。

タカミチ 「虚刀流『木蓮』！！なにぼけつと突つ立てるんだ！
！ 素子君！！」

素子 「す、すみません！ 斬岩剣！！」

タカミチ先生は私とは違う「剣法」を使っているらしい、師匠さんの秘伝の技を教えてもらったらいいんだが……最終奥義は教えてもらえなかったらしい、なんでも「これは最終奥義というよりも……適当に考えた技だから、自分で考える」だそうです。なんですか？ その師匠は？ なんでもタカミチ先生はこの流派を覚えたら剣刀が使えなくなったらいいです。なんですか、本当に。

タカミチ 「くっ！ こうも数が多いと！！」

素子 「そうですね……決戦奥義さえ使えれば、あれを使いますか？
夷が考え付いたあの複合奥義……」

素子 「斬魔剣 弐の太刀 百花繚乱！！」

式の太刀の特性である「魔を斬るための剣技」と複数の敵を相手するためのこの剣技なら！！ 思った通り、飛んで行った気はタカミチ先生やほかの魔法先生に当たらず、魔である鬼たちを切り裂く。うまくいった集団戦が苦手な私だがこの技は重宝できる。夷はこういう人間を「殺さない」ための剣技はたくさん考えていたしな。斬魔剣の式の太刀とは相性がいい。

タカミチ 「なら僕も！ 虚刀流奥義『双花三撃』！！」

タカミチ先生が飛びかかった三体の鬼に奥義を連続してくらわせる。後で聞いた話だがあれは奥義の強制接続をさせたものらしく、師匠が使った最終奥義も虚刀流の奥義全七つを組み合わせただけという物だったらしい。

素子 「でも……まだまだいますね」

タカミチ 「そうだね……あと百体くらい？」

うじゃうじゃと今回は本当に多い、自分の武器が最高クラスの妖刀でなければもう血と肉のせいで切れ味どころか刀身が限界だっただろう。

本当にこの「ひな」と呼ばれる妖刀は素晴らしい切れ味だと思う、まあ飲み込まれないようにしないといけないんだがな。

素子 「（まずい、私たちは大丈夫だが……周りの魔法教師や魔法生徒が限界だ）」

タカミチ 「……これはまずいね」

私はこの程度なら京都でも体験したし、タカミチ先生だって曲がりなりにも英雄と呼ばれた「赤き翼」の一員だ。周りの先生たちとの力量やら経験が違うが……ここにいるのは今年新任された先生にまだ未熟な生徒ばかり……はつきり言うとは足手まとい、よく言っても教本通りの素人。さっさと撤退してくれたほうがいいんだが……プライドだけ高くて「せ、正義のため!!」とか言っているだが……斬っていいか？ 斬っていいよな？

タカミチ 「素子君、やめときな？ 僕だって居合い拳を使いたくて仕方ないんだ。これだから正義を妄信するバカは……」

……タカミチ先生がすごく苛立ってる、心なしかタカミチ先生の後ろに鬼神が見える。まずいそろそろ終わらせないと……。

||||||||||?視点

イギリスの片田舎からよつこらつせと数時間、やっとのことで日本に来たんだが……あのバカ親父は弟の世話をしてるだろうか、心配になつてくる。あつちにはじいちゃんや母さん、スタンのじいちゃんやネガがいるから大丈夫……あのはず、あのバカがまた「俺の魔法を見てろ!! ネギ!!」とか言いながら魔法使つてねえだろうな、古代魔法を子供のあやしに使うな、つうか王家の魔力で鎮静化すればいいしな。母さんの必殺の張り手さえあれば大丈夫だ、時折父さんと甘々空間を作り出すが……大丈夫だ。あれでも王家で王女だしな、ネギが変な方向に成長することはないだろうな。

羽田空港から荷物……まあ自分の武器や魔法具、服に仮面を入れて

いる車輪付きの旅行鞆をコロコロと転がしながら、麻帆良行き
の電車に乗る。

アナウンス 「次、麻帆良、麻帆良」

？ 「……もう着いたのか？ はええな」

単に俺が寝ていただけなようだが……東京から麻帆良は結構遠かつ
たらしく、一時間以上寝てしまったせい、体を動かすと節々の骨
が音を鳴らす。意外とイギリスからここまでの道のりの疲労からか
結構疲れを感じる、俺は十三になるが……正直、夜更かしとかきつ
い。

俺は疲れた体にムチを打って電車のドアから出る、ちなみに今は零
時ぴつたりだ。まったく飛行機が遅れたせいで三時間も遅れた、一
応念話でじいちゃんに連絡したから大丈夫だと思っただが……自動
改札口に切符を入れて、出ると辺りは真っ暗だった。

まあそれもそうだな、今は停電中で駅以外はすべて停電だそうだ。
なんでもメンテナンスがどうたらこうたら……で停電中では駅はあ
らかじめ予備電源があるんだとさ、駅員のおっちゃんに聞いた。

？ 「まあにしてもだ、なんだこの異国情緒溢れ過ぎな町並みは……」

俺の正直な感想、まだ四月だから結構肌寒い、今の俺の恰好は白い
着物と言う日本伝統の服装だと聞いたんだが……母さんからな、で
寒いだろうからって赤いジャンパーを着ている（まあ普通の両儀式
の服装です）これだけでも結構寒くない、下がスースーするが仕方
ないだろう、ちなみに靴は編み上げブーツである。

まあ恰好の印象から動きにくいかと思っただが別に邪魔ではないし、
動きやすい。まあ戦闘でも難なくいけるだろう。

？「うーん、でもさっきから感じるこの魔力は？」

どこのバカか知らないがとんでもない量の魔力を使っているバカがいる。

なんだ？ 悪魔召喚でもする気か？ まあいいや、じゃあちよつと懲らしめにいきますか……。

||||| 刹那視点

刹那 「数が多い！！」

真名 「無駄口叩くな！！」

何だって私がこんなに相手しなければならぬ！！ このちゃんには一応アスナがついているから大丈夫だろうけど……もう真名と一緒に二百体くらいの鬼と戦ったぞ?! ほかの先生や生徒は撤退してしまった。

刹那 「まったく子供二人以外は全員撤退」

真名 「これは……まずいかもね！！」

そんなことをいいながら真名が連射しているのは魔法銃『ジェフテイ』『アヌビス』と言う銃らしい、師匠から受け取ったものらしいが素晴らしい性能に威力だ、何度も危ないところを助けてもらった。

後は周りに二百体くらいいるな……これは本格的にまずい。
疲れが体を鈍らせる、バードはこのちゃんの護衛に行かせてるし……
まずい、こんなことなら呼んでおくんだった。

真名 「っ！！ 刹那！！」

刹那 「あっ！！」

少し油断したところで敵の攻撃を受け止めきれず『夕凧』が私の手から離れる。

しまったと思った瞬間、周りの鬼たちが私に向かって飛びかかる。間に合わない、真名の援護も私が羽を出すことも間に合わない……死んだかな？

刹那 「えーちゃん、ごめん」

真名 「刹那ああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！」

真名の悲鳴が聞こえるが私には敵の動きが止まって見えた。これが……走馬灯をする時間か？ そう思った私は今までの人生を振り返るとあの人の事ばかりだった。

刹那 「（ごめん、ごめんな、このちゃん、えーちゃん、ウチここまでみたいや）」

そして目を閉じる、何秒たったかわからないが暗闇の中では何もわからない……目を開けると敵が空中に浮いている。

いつまで浮いているんだろうと思ってしていると私に襲い掛かっている鬼がずれていく。胴体が、頭が、全身が……するとバラバラになっ

た鬼が私の足元に落ちる。

次の瞬間、肉を切るような音と共に周囲の鬼が一斉に切り裂かれる。

真名 「まさか……これは?!?!」

刹那 「いつたいなんなのですか？」

? 「これでしまいと……まったくこんな小さな子供まで戦っているなんて、ここは平和の国だろ？」

声が出たので振り返ってみると赤いジャンパーに白い着物着て、顔にピエロの様な仮面を被っている奴がいた。手には手袋をしていて、右手には大きな旅行鞆を持っていた。

真名 「うそだろ？」

刹那 「誰だ!!」

? 「俺? 一応名乗っておくか、ただの殺人鬼の零崎虚識でありまたの名を……」

そいつは一つ間を開けて言う。

キョウ 「キョウ・スプリングフィールドだ」

そう名乗った。

「……………シキ視点」

術者 「はあはあこれで！！ 俺の全魔力と命をささげて！！」

遅かったか、もう最終段階だ。もうこれは殺すしかないな。

そう思いながら旅行鞆から『七つ夜』と仮面を取り出す。仮面を顔につけて……………準備完了！

術者 「アハハハハ、俺の命と共に！！ 悪魔を召喚する！！」

そういうと魔方陣が赤く光り出す、光が収まるとそこには二百達くらいの下級悪魔と明らかに伯爵級の悪魔がいるんだが？！！ 予想外だよ！！ 殺しがいがあるなあ。

伯爵 「ふう、久しぶりの下界は汚い蠅に呼び出されて戦いかあ」

キョウ 「おーい、その悪魔さん」

伯爵 「なんだ？ 貴様は？」

キョウ 「通りすがりの殺人鬼だ、覚えておけ」

俺は自分の魔眼で悪魔の「点」を七つで突く、すると悪魔はフラリと倒れ……………死んだ。

相変わらずだが俺のこの目は凶悪だな……………まあ、三十秒程度しか全開できないがな。

悪魔 「オマエハ一体？！ ソノ眼ハ……………魔眼か！！」

|||||木乃香視点

停電の次の日、真名とアスナの様子がおかしかった。せつちゃんもや、何かソワソワしてるような雰囲気でしたんや。

木乃香 「アスナ？ どうしたんや？」

アスナ 「なんでもない、大丈夫よ木乃香……大丈夫」

刹那 「……このちゃん、そろそろ時間ですよ？」

ううアカン、そろそろ席に座らないと……そのとき予冷のチャイムが鳴ったんや。

そろそろタカミチ先生が来るな。

？ 「ういーす！ さあさあ授業始めるぞー」

木乃香 「え？」

そこにいたのはスーツを着た……兄様やった。

刹那 「えー……ちゃん？」

？ 「今日からお前らのクラスの副担任になることになった……」

キヨウ 「キヨウ・スプリングフィールドだ、よろしく」

それを聞いた瞬間、ウチの目の前が真っ暗になったんや……。

感謝感激雨あられ(後書き)

作 「今日のね」

木乃香 「なんや、あれはあああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああ!!」

Dドライバー 「ATTACKRIDE - BURST」

作 「ぎゃああああああああああああああああああ!!」

「！！！！放送事故少しお待ちを…」

作 「こ、木乃香さんいきなりディエンドはきつい……」

木乃香 「グラーファイゼン!!」

作 「すいませんでしたああああああああ!!」

木乃香 「今回の閑話といい、前の話と言い！ 兄様の貞操はウチ
のもんや!! 処女も兄様にささげるんや!!」

作 「小学生がそんなことを言うなああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああ!!」

木乃香 「兄様はウチのもんなんや……誰かの物になるんだったら
こんな世界いらない!!」

Dドライバー 「G4、RYUGA、OHGA、GLAYBE、K
ABUKI、CAUCASAS、AHKU、SKULL FINA
LKAMENRIDE・DI・DI・DI DIEND」

木乃香 「全部！！ なくなつちゃえばいいんやあああああ
ああああああああああ！！！！」

夷 「このバカ野郎おおおおおお！！！！」

Dドライバー 「KUUGA、AGITO、RYUKI、FAIZ、
BLADE、HIBIKI、KABUTO、DEN・O、KIVA
FINALKAMENRIDE・DE・DE・DE DECA
DE」

木乃香 「アハハハハ！！ えびにい、ウチもんにならないんだ
つたら死んじゃえ」

夷 「くそ！！ もとに戻れ！！」

木乃香 「アハハハハ、えびにiiiiiiiiiiiiiiii！！」

夷 「くそ！！」

Dドライバー 「ATTACKRIDE・BURST」

Dドライバー 「ATTACKRIDE・BURST」

ダガンダガン！！

木乃香 「キャハハハハ、さすがえびにい！！！！」

作 「いつか……わかる」

夷 「そういえば作者は俺の特訓編を閑話として入れたんだっけ？」

作 「ああ、そういえばお前の能力制御描写を書いてなかったしな」

夷 「……まあいいや、つうか俺の能力値、チートすぎるだろおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！」

作 「しゃーない」

夷 「なんだよ、全力だしたら世界崩壊って！！！」

作 「そこまでの気はなかったけどな」

夷 「……そういえばいつになったら俺はあの天使を殺せるんだ？」

作 「ああ、閑話終わったらキンクリするから」

夷 「またかよ」

作 「十年ぐらい？」

夷 「は?!?!」

作 「では次回 そうだ修業しよう」

夷 「作者ああああああああああああああああああ!!！」

そつだ修業しよう(前書き)

前回から約二週間……まことに申し訳ない。

駄文ですみません、全然書けなかったのにISに手を出してしまい……お詫び申し上げます。

今回のスランプは本当にひどくて、さらに旅行などの予定もありさらに新しい小説も書いてしまい……申し訳ない。

こんな文章やだ、と言う人はケフィアにどんどん言ってください。

感想などストーリーに絡ませてもらいたいキャラなどもありましたらどうぞ。

では始まり始まり。

それと今回は軽くほかの作者様の小説とのクロスがあります。まあ少しなんです……許可はとっていますので。ハヤテ様、クロワッサン様ありがとうございます。

そつだ修業しよう

はいな、夷だ……いや式か。この頃はやりすぎたと思ってる、寝ぼけていくつかの世界に行つたしてしまつてな。特に……臃だつけな。鐘七実の見稽古とマトリックスの身体能力はすごかった、まあ病魔もすごかったがな（あやゆく見取つちまうところだった）。まさか異世界に零崎がいたとは……。「人間失格」やら「自殺願望」やら「人類最強」やらに絡まれたよ、結果？ 勝つたけどな「人類最強」はヤバかった、町が一つ消えたよ（まあ全員の技術は見取つたが）おかげであいつの身体能力をそっくりそのまま見取つたぜ！！ まあ零崎をなめてた、あやゆく解体されるどころだった。まあ舞織だつけなあ、あいつの手を直しておいたんだが……ついてきそうになつたんだよなあ、さすがに無理だつたけどな。い、いや、来ないよね？ あのスーツの変態紳士と顔面刺青……それと人類最強に喰われかけた、いやあれはヤバかった、逃げるために魔力全力とクロツクアップで逃げたらついて来たんだが？ ……人類？ まあ零崎を見取つたおかげか、殺人欲も制御できてるしな。つうかあの世界はよく壊れないなあ、そういえばあのバカ野郎な「人類最終」は無事かな持つてたなあ。そういえばあのバカ野郎な「人類最終」は無事かなあ、襲つてきてなかなか強かつたから半分以上の本気だして撃退したんだが、まあ大丈夫だろ。「人間失格」は大丈夫だろうか？ 精神と肉体弄つて寿命のばしたんだが……まあ足を洗えばそれに越したことはねえよな。

それに一夏だつたか？ そんな奴の料理スキルはよかつた……なぜかレギ スの天剣たちが居たんだが？ あれだよサヴァリスだつけな、戦闘狂だつたけど学ぶことが多かつたよ、久々に殴り合いに目覚めたよ、おかげで結構虚刀流のアイデアが考え付いたがな。あとはリテンスの技をすべて見取らせてもらったよ、さすが本家本元、無理やり戦つて覚えた甲斐がある、今なら百メートル先の敵でも殺

して解して並べて揃えて晒してやんよ。まああの一夏も強かったなあ、危ない危ない、あやゆく殺しかけた。心にすげえ傷ついていたがな……殺人鬼に言わせてもらえば別に正当防衛だろ？ まあいいさ、人の考えは千差万別だしな。で、あの年増ババアなんだ？ あいつの年齢軽く……まあいいや、ISかあ面白い世界だったなあ。まあ俺には勝てないがな、なかなかだったが銃器程度で傷つくほどの軟な皮膚じゃねえんだよ……うん人間やめたな。

うん、あれだ今日はなぜか影の倉庫の中にある修行用のシユミレーターで、直死の魔眼使いを出してみるか……ちなみに俺は別荘ver3だがな。思い切って自分ができる最高の素材を使って作つてあるので全力だしたつて三時間くらいは耐えられる……筈だ。

うーん強さは今の俺の一段階、上で魔眼の制限解除……さすがに『まで出されないように設定つと、ほんと誰なんだろ？』使ってください」って書いてある手紙とデイケイドドライバーまで……誰が入れたんだ？ まあ修業になるからいいがな。

夷 「まあいいや、出てこい！ 両儀式！！」

式 「……なんだ、お前は？ ああ、まあいいさ」

式がナイフを構えると静かに目の色が変わる。直死の魔眼……実際に見ると俺のより強力なんだな、まあ「見取る」から問題なしだがな

夷 「最初から臨戦態勢かよ……まあいいが」

式 「……生きているのなら、神様だつて殺してみせるさ」

夷 「なら殺して見せるよ！！」

そついつてありえない速さで俺に接近する式……正直、念のため身

体能力を一段階上げてなかったら体がスッパリ裂かれて、上半身と下半身がコンニチワしてたところだ……今の身体能力は互角だが……このままだと負ける。俺は七つ夜で受け止めながら式を見ると……すごい嬉しそうなんだが。

式 「へえ、このくらいはいけるんだ……もつと速くするぞ?」

夷 「ま、マジかよ」

あ、最近なんだが見稽古のON/OFFができるようになったから式の動きは見取ってない。見取るとすぐに終わらないけど勝負がつかなくなる……まったく見稽古はチートすぎる。

式はナイフを小刻みに振りながら、時々大ぶりを入れる。……これで本気じゃねえとかマジ勘弁、刀を持たせたらどうなるんだよ!!

式 「まだだ!!」

夷 「くっ!! 畜生!!」

ナイフで受け止めながら相手を見るが……誰かが言ってた「お前は猫か」と言うセリフがよくわかる、つうか猫だろ?! まずいつてなんか回転しながら攻撃したり、猫のように丸まって回転して避けたら、もう嫌だこれで人間とか信じないぞ?

力もある、スピードもそこそこ、魔眼はある……たぶんこいつだけでも麻帆帆良に攻めは入ったら勝てるだろ。駄目だ、やばい。

式 「どうした? お前の力はそんなもんか?」

夷 「こなくそおおおおおおおおおおおお!!」

式 「……やればできるじゃないか」

虚空移動と足軽を併用してやっと追いつけた……強さのベースを零
崎にしたのが間違いかもしれない、あの状態の俺は結構速いからな
あ。

そんなこんなで打ち合っっていくんだが……ぶっちゃけナイフ戦だと
あっちが上だよ。

式 「……俺の眼は特別製でな。物の死が視えるんだよ」

夷 「知ってるさ、俺も同じもん持ってるからなあ!!」

式 「なら……説明はいいよなあ!!」

ガキンガキンとお互いのナイフをぶつけ合う。まあナイフでこんな
戦いしたらえらいことになるけど……主にナイフがな。まあこの
七つ夜も相手のナイフもえらい強度だし……大丈夫かな？

式 「見切ったぞ？ お前の「線」を!!」

夷 「しま」

油断した俺に一気に接近して、式のナイフが俺の左腕をそつと撫で
る様に俺の左手を切り裂く。するとバターのように左腕が肩から裂
けていき、俺の腕が地面に落ちる。すぐに出血を止めるために術式
を組んで止血をする。

ぐっ!! やられた……さすがに俺も「死亡」した腕を再生はでき
ない。……てか俺にも線はあったんだ、死ねるのかな？

夷 「オラ!!」

しかし俺も右足で式のナイフを蹴り上げ、無詠唱の燃える天空でナイフを跡形もなく消す。

い、イテえ、久々にダメージを負ったよ。まさか俺の魔装服も突破するとはあなどれないよなあ、直死の魔眼……つつかやばい、防御力もヘチマもあつたもんじゃねえ。こちらは片手、あっちは……OH。

式 「……使っていていいんだな？」

夷 「できればやめてくれ」

式 「黒桐が言ってた、こういう時は……」だが断る『「

夷 「黒桐おおおおおおおおおおおおお……！」

マジであるの普通じゃない普通のあの野郎……マジでぶっ殺してやる……！

つつか本当に刀を握った式の雰囲気が変わっている、確か自己暗示で脳の機能を作り変えて戦闘に特化させてるんだっけ？ そんな設定だったはず……。

式 「……」

夷 「くそ、さらに速くなったのか？……！ こっちは片腕なんだが……！」

式 「どうやらここまでみたいだな……死ね」

夷 「なんとおおおおおおおおお……！」

俺は片手で刀を受け止めるがさつきよりも数段……下手をすれば別人のような動き、そして女の力だと思えない力……正直武器一つでここまで変わるとは驚いている。

七つ夜も優秀だがリーチの差、力量や俺のナイフの熟練度がひくさ（今は見稽古で見取った技術はすべて封印して、自分で培った技術のみでやっている）が決定打になっている。

夷 「……くそつたれ」

式 「終わりだ!!」

夷 「虚刀流奥義……」

正直片手がない状態でできる奥義はあることはあるというか……そういうことも想定したが付け焼刃みたなもんだから無茶すぎる、ならあれをするか。

式は刀を持ちながら俺に接近する……人間やめてるだろ、あの動きこれで「人間です」とか言われたら俺は泣く、俺だってもうほとんど人間どころか人外ではなく……化け物だな。

式 「ハア!!」

夷 「『七花八裂』応用編!!」

俺は右手一本で奥義を行使する、片手でできる奥義をすべて行使するが式の刀が砕けただけで式はすべて避ける……忘れてた未来予知もできるんだった、体は飛んだ破片で少し切れただけだった。しかしそのまま式は砕けた破片を手で掴み、その破片を俺の右肩に突き刺す。

式 「俺の……勝ちだ」

夷 「……ああ、そうだな」

そのまま体に刺した破片を動かし、右肩の「線」を斬るつもりらしい。

だがなあ、俺に仮面をつける時間を与えたのは失敗だったな!!
実は刀を砕いた時にとある漫画の仮面を出すときみたく、仮面を出せるように術式を組んだ……以外に簡単だったよ、影の倉庫から出るところを顔の部分にしたらただけなんだがな。

夷 「残念だったな！ 今日はずの仮面だよ!!」

仮面 「EXCCD CHARGE」

鬼の仮面から出た赤い光が右足に流れる、それと同時に右肩を一閃され右腕も切り落とされる。血が噴き出す……畜生、失血で意識がぼんやりしてきた。けれど、それを堪えて右足を式の腹のところまで上げる……俺の……

夷 「勝ちだ、両儀式」

式 「なっ?! ぐあ!!」

俺の足から赤い棒状の光が式に向かって伸び、円錐型になりその体を固定する。

そして赤い円錐に右足を突出しながら飛び蹴りをかます。

夷 「ちえりおー……っっっ!!!!」

そして式の体に疑似クリムゾンスマッシュを当てると式の体にも文字のような物が浮き上がると式はゆっくりと倒れながら光の粒子になる。

それと同時に俺も倒れる。なんとか勝てたが……もうポロポロ、あれじゃ今の俺だとなんとか全盛期の父さんと相打ち程度だろう、さっきの戦いだって両腕どころか下手したら四肢を切断されてダルマにされてもおかしくなかった。つうかされない方がおかしい、すごいラッキーだったよ、最初から刀だったら開始五分くらいで死んだ。ちなみにこの修業シュミレーターにはレベルがあり、今のだつて50レベルであれば自重してほしい。さらに素敵機能で怪我や修業中の戦いで死んだ場合などすべて回復してくれる、しかし疲労だけはかんべんな！

夷 「(や、やべえ今回は少し寝るか)」

そのまま瞼が閉じていく、予想以上に血を流しすぎたようだ。頭がうまく回らないし、視界はぼや……け、てき、た。まずい……エヴァ。

そんなこんなで眠ってしまった俺は懐かしい夢を見た、まだ修業時代の頃の話だな。

〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓三歳の頃

詠春 「今日からお前は神鳴流の修業を始めますよ、夷！」

やつほー、なんか久々どころか……時間を巻き戻した感じがしなくもないが、まあいいさ。あんなチートライダーみたいなことしないでくれよ？

夷 「具体的になにするんだ？」

詠春 「まずは素振りからだな、今日は最初だ……百回はやりなさい」

夷 「ほいほーい」

まずは木刀を持って……振る！ まあモデルは素子さんにしよう、見稽古で見取っているからまあ動きを真似して……振る！！

徐々にスピードを上げていく、そうして二十分で終わらせるが俺の体力は結構疲弊されていた、父さんは感心したように俺を見る。

詠春 「……さすがは私の息子です、では今回は気の制御をしましようか」

夷 「ハアハア、でな、なにするんだ？」

詠春 「まずは体の中の気を感じることから始めましょうか。今からあなたの体に気を流します」

俺の体に父さんの手が触れる、すると何か温かい物が流れ込んでくる感じがする。

まあこれが気なのは数年前からわかっている、暇なときに魔力の制御をしていたら（知識はなぜか頭に）何か別の力を感じた。でなんだろうと少し魔眼で解析してみた……死にかけた。どうやら人間の体を解析しちまったようで脳の許容量を超えたらしい……あの時は

一日ダウンしていた、二歳にして死にかける……アホか？ つうかアホだな。

詠春 「見ていなさい！ これが『斬岩剣』です！！！」

すると父さんの持つ木刀に気が集中する、そして目の前にある岩に向かって木刀を振る。

……一拍空けて岩が一刀両断される。高密度の気の集中で木刀の切れ味……いや、木刀に乗せた気で斬りやがった。なまくらでも名刀に早変わりな技だなこりゃ。

夷 「……やれと？」

詠春 「できたら怖いですよ？」

ええっと確か……

夷 「ざーんがーいけーーん（笑）」

詠春 「（笑）?!?! なんで?!?!! ってできてるううううううううううううううう!!!!」

夷 「できちゃった」

なんか適当にやったらできたよ……その後に斬魔剣に斬空閃と色々教えてもらったが一度「見取ってる」俺はすべてできた。

なんか父さんは「……ラカン並のバクキヤラだな」と少し落ち込んでいた……うん、ある意味で俺はバクキヤラだからな。

今日の特訓は終わった後、木乃香に泣きつかれ、刹那は少し不満げ理由は稽古を俺だけにつけさしてもらっているかららしい、本当に

面倒だ。

||||| 四歳

夷 「むにゃむにゃ」

? 「……!!」

夷 「なっ?!」

殺気を感じて飛び起きたら目の前で真剣を握る父さんが居た。

そのまま俺に向けて振るう、紙一重。その言葉通りに俺の着てる着物を斬っただけで体は斬られなかった……やべえ、軽く今のは死ねた。

夷 「何しやがる!!」

詠春 「朝ごはんの時間だ」

そういつて刀を鞘に納めて部屋を出ていく……後に残ったのは着物を斬られた俺とぐちゃぐちゃになった布団。数か月前から親父が弓矢やら刀やら、果ては母さんに協力を求め、呪術で狙われ、木乃香ハンマーや刹那に木刀で叩かれ、素子さんに修業をつけてもらおうとしたら模擬戦でボコボコにされ……泣いていいよね。

夷 「うん？」

少し時間がたっってお手伝いさんが来て俺の部屋を掃除にしに来たん

だが……そのお手伝いさんの体に「線」が見える、それに複数の……なんだこりゃ？

夷 「（ついに殺気のせいでおかしくなったか？）」

なんか頭がフラフラするがしばらくすると「線」が消えた。まあちよつと疲れてるだけだろうな。そんなこんなで着替えようとダンスを開くと……

『これきてやにいさまー！ このか』

妹からのプレゼント（女物の服）だった。わざわざまだ字があまりきれいではないが、ちゃんと書けることに俺は感動したが……

夷 「これはないだろおお……」

血の涙を流しかけた。

まあその後のことだが妹と少しOHANASHIをしてきた、二度とこんなことしないと約束させたし……まあ服の件は別にいい。ああ、まったくいい、俺はいつも自主練として山に籠って神鳴流の技を改良していた。

とりあえず思ったこと……奥義の使い易さは最高だと思った。まあ基本的な神鳴流の奥義と言えば「斬岩剣」「斬魔剣」「斬鉄閃」だろう。ここで一つ前世の記憶にピキーンと来た、テイルズでは複数の秘技や特技を合わせた技を奥義と呼んでいたことがあった、まあ例を出すと「虎牙破斬」と「魔神剣」これを合わせると「魔神双破斬」と言う奥義となる。まあこれは斬岩剣だと「飛天翔駆」みたいな単発の奥義みたいなのに分類されるはず……まあうんちくはここ

まで俺が何したいかっていうと、秘剣を組み合わせて新たな奥義を作りたい。まあ手札は何枚もあった方がいいだろうな。

夷 「やっぱ二刀流にするか？」

そう考えるがあまり理想的じゃないし……もう少し強くなってからにしようと思った。とりあえず使える秘剣を思い出す。「斬空閃」「百花繚乱」「斬光閃」……絶望したあ！！ 秘剣のほとんどが放出系の技だよ、どうアレンジしろと！！

夷 「……ううん?! ない物は作ればいいさ!!」

とりあえず俺は影の倉庫からある物を出す……それは。

夷 「記憶転写装置 ！！」

なんかどこからか聞いたことがあるようでないようなBGMが聞こえたが……気にしない、まあ遅いと思うがこの小説はフィクションです、実際の名前などはすべて他人のそら似です。

夷 「まあテイルズの技が欲しいだけだからなあ」

そんなこんなで過去の記憶からテイルズの記憶だけを転写する。……二歳くらいの時に寝ぼけて作ったものがこんなところで役立つとは……。

あー、コレ、アビスにレジエンディア、それとデステイニーだよ……ああ、懐かしいバルバさんにぶち殺されまくったよなあ、もう難易度上げたらもう悪魔だよ。ジューダスにはお世話になった、本当に。

が問題なしだ……つうか魔眼に「直死」の能力がなくなってるなあ。その名の通り「直死の魔眼」というのは死を見る魔眼だ、常人なら発動しただけでも発狂し、死に至る魔眼……物の死が視える、それは「線」と呼ばれる物が視え、さらに集中すると「線」が集中しているところを「点」言うらしい、その「線」を斬ればその部分は「死」んで使い物にならないそうさ。さらに「点」をつけばその人物は「死」ぬという物だ。しかしながら、リスクも高く発動し続けると脳が溶け出すという、「眼」と「脳」がワンセットな魔眼だ。

夷 「いちいち騒ぐな、妖怪だろうが？」

妖怪は肩を押さえながらうめく、正直ここまで痛がるのは意外だった。

まあいいさ、俺は影の倉庫から厨房からちよるまかしたナイフを取り出す。調理用だが魔眼のサポートもあれば斬れるだろうなあ。

妖怪 「マ、待ッテクレ！！ オ、俺ガ悪カッタ！！」

夷 「……プライドとかないのか？」

妖怪 「頼ム！！ ナッ、イイダロウ？」

まあ、戦意消失した相手を殺すのは嫌だし、前世でも俺は殺す、って言う行為は嫌だしな。

そう思っただけ俺は後ろを向いて歩き出すと……ズブリと何かを刺した様な音が、生々しい音がした。

あ、れ？ おかしいな、な、んで俺の体にあの妖怪、の、腕が生えてるんだ？

痛いと言うよりも熱い……俺の服が、木乃香が選んでくれた服が真っ赤になっていく。後ろを向くとさっきの妖怪が笑っていた。

妖怪 「バツカジャネエカ?!! マサカ本当二見逃ストハナ!!
中身ハヤツパリガキダツタカ!!!」

夷 「ガフツ」

口から流れ出す真つ赤な液体が止められない、腹の腕が抜かれてとんでもない量の血が流れ出す……やべえ、頭がぼよつとする。血を流しすぎたのか、頭に白いもやの様な物がかかったようになり、体がまったく動かない。

……ざまあないな、甘ちゃんだったってわけか。よく二次創作の主人公たちが敵を見逃すと「甘い」と言っていたがその通りだな。俺は怖かったんだろうな、転生してチート能力を持っていても……ははは、くそつたれが。

妖怪 「サア、食ベルカ」

まずいまずい、動け動け動け、そう願っても俺の体は動かない。妖怪は笑いながら俺に近づいてくる、ああもうなんてこつたい。たしか不死とか言ったから死ぬことはないだろうけど死にたくないなあ。

夷 「……」

妖怪 「イタダ」

夷 「ナイフでも食ってる」

俺は力を振り絞り妖怪の頭にある「点」にナイフを突き立てる。妖怪が倒れて静かに消滅する……もうだめだ。そのまま意識を失っ

ハッハ、ハア、鬱だ死のう。そう言っつて俺はロープを輪つか状にして天井につけ、首をそこにかける

素子 「ご飯や なにしてんの?!?!」

木乃香 「素子姉さん!! えびにいを止めてや!!」

夷 「フ、フフフいいさ、いいさ、どうせ俺は兄ですよ」

素子 「やめときい!! まだ早い、早いんや!!」

夷 「かはは、もう俺は自分を殺して解して並べて揃えて晒してやらなきゃいけないんだ」

ワワーギャーギャー なにしてんの!! 母様! えびにいを止めてえ!! まかときい……やめなさい夷!! ドゴーーーーー
ooooooooooooon(殴った音) あ、あれ? 動かなくなってもうた? えびにいいいいいいいいいい!! 夷うううううううううううう!!

し、死ぬかと思った。つうか無意識に気で強化した張り手しないで? 俺死ぬよ? つうか俺じゃなかったら死んでたよ?

あの後、ご飯を食べて木乃香と口を聞いていない……妹の『兄様』
と言う言葉を生きがいにして生きていたが俺はここまでみたいだな。
死にたい、ガチで死にたい、でも死ねないんだよねえ。

夷 「とりあえず、昔の記憶から俺の刀扱ってた頃の記憶を見て実力取り戻さないと……」

？ 「近衛夷だな？」

夷 「おじさん誰？ あれか分家の人？ 近衛の家に用事でもあったのか？」

？ 「いや、私は君に用があるのだよ。ラメテル・ラル リラ・リラル ラグン」

……たしか前にここに来たゼクトだっけ？ そんな奴が教えてくれたなあ、えーと確か今のが始動キーだっけ？ 魔法を唱えるための……熟練者だと無詠唱でも行けるらしいが実戦で戦うのはこれが初めてだなあ。

魔法使い 「君を連れて行けば関東はさらに力を得る筈だ……我々正義の魔法使いがな！！」

夷 「いやいや五歳児になに期待してんの？ バカなの？ あほなの？ 死ぬの？ 死にたいの？」

魔法使い 「口のきき方がなってないな、それでも学園長の孫なのかね？」

夷 「学園長？ ……ああじいさんの所のへばい魔法使いか、じいさんが愚痴を父さんに言ってたぜ」

実際、あんなけつたいな結界があるのに侵入、さらには魔法生徒まで動員して警護に当たらせるなんて……普通は大人のお前らがやれよ、つうかお前らが強かったら魔法生徒もいらなくね？ 経験値稼ぎには持って来いだが夜だぜ？ 健やかな成長は夜に始まってんだ

よ、寝かせるよ。俺？ ハイパークロックアップって便利だよね…
…事情は察してくれ、頼むこの頃はベルトも作ってるからなあ。

魔法使い 「さすがは関西だ……子供の教育もなっていないな」

夷 「好き勝手、向こう（火星）から来て無理やり麻帆良を奪い取った連中よりマシだが？ つうかそんなくだらない事してないで…
…まあ冗談なんだから？ 用件は関西呪術協会の近衛詠春にか？ ご苦勞様、んじゃ案内するよ」

魔法使い 「風の精霊11人。集い来たりて敵を打て……魔法の射手・連弾・雷の11矢」

そんな言葉を言うと男の周りに光る何かが浮かび上がる。えーと確か基本魔法の一つだっけ？ ゼクトに初手で全弾避けたら「やはりお前はこの頃からバグか？」と言われたんだが？ 初対面だよな？ ハイパークロックアップで未来の俺がやったのか？ まあ俺がカブトに変な機能つけすぎててわけわかんなくなってくるからな。

夷 「危ないなあ、当たったらどうするんだよ？」

魔法使い 「さすがは英雄の息子……ということか？」

夷 「やめときな、あんただって今東と西が戦争したくないだろ？」

魔法使い 「……それが狙いなんだよ。君はわかってないね、自分の立ち位置が」

夷 「……はい？」

なんかすごく神妙な顔してるんだが……俺が何をした？ 虚刀流を学んで、遊び半分で神鳴流を覚えて、直死の魔眼を制御して……ぶっちゃけると何かしたか？

魔法使い 「君は危険すぎるんだよ、君が思ってる以上に君の實力は危険で……あらゆる組織が欲しがっている。我々、正義の魔法使いもね」

……あれ？ なんだろ？ 目の前の奴に怒りを感じない、昔の俺だったら確実にこちら辺でキレてる筈なんだが？ そういえば……目の前の奴を「殺したい」と思ってる俺がいる。

そういえばこの頃、悪とか正義とかどうでもよくなってきた。いかに敵を殺すか……その一点か木乃香たちを守るための物しか考えてない。

……そうだな、正義ってなんだ？ そもそも目の前のこいつは俺にどんな信念で立ち向かってくるんだろうか？

夷 「なあ、おじさんは俺をどうするつもりなんだ？」

魔法使い 「君を誘拐する、大丈夫だ。君も正しい魔法使いになれるさ」

夷 「知るかよ、俺は五歳児だぜ？ 難しい事はわからない」

おかしい、本当におかしい。目の前のこいつに向けてるのは……殺したいって感情だけだ。

魔法使い 「君もわからないのか？ 世界には不幸な人たちがたくさんいる。それを助ける仕事につけるんだ……どう思う？」

どう？ どうって……

夷 「『何も思わねえよ』アホか？ 不幸？ 決めつけてんじゃねえよ、てめえらがやってんのは『侵略』だろ？ 『救い』でも『救済』でもない……自己満足の塊だよ、くそつたれ」

一回だけ資料を見せてもらったことがある……そこに書かれたのはひどい物だった。気に入らない物は魔法で残滅し、老若男女皆殺し、全てはガロメセンブリア元老院の傀儡、ただの人形、まあタカミチたちは何か企んでいるようだが、知らんがな。

夷 「……帰ってくれ、俺は『殺したくないんだ』」

魔法使い 「……無駄だったか、まあいいさ。元々は『コレ』を使ってやるうとしてたからね」

夷 「なんだその巻物……」

男が取り出したのは一個の巻物……かなり古いようでなにやら呪文が書かれているんだが？

魔法使い 「これは悪魔を……それも魔王級の悪魔を無条件で召喚できる、ものなのさ」

夷 「……」

開いた口がふさがらない、魔眼で確認したが……マジだった。このままだと魔王級の悪魔が召喚される、そしてどうなる？ 今の関西

呪術協会は大戦中の損害は軽微だが……それでも完璧とも言いにくい、麻帆良に行つてゐる人もいる、魔法世界に無償で救いの手を伸ばしてる奴だっている。もしも召喚されたら、今の俺じゃ勝てない、魔王なんてもん人間が立ち向かえるわけがない……力の差が歴然だ。

夷 「そんな、そんなことしてみろ！！ 京都は消え去り！ 東と西の泥沼という名の戦争が起きるぞ！！」

魔法使い 「それがどうした？ 敵を『倒す』ことに躊躇はいらないだろう？」

は？ 倒す？ 殺すではなく？ ……ふざけるなよ

夷 「『倒す』だと……」

魔法使い 「そうだ、正義が悪を倒す！ これほどいいものはない！！」

ああ、そうか結局俺も『理想ばかり』追いかけてたんだな。『殺す』『殺さない』守ることに犠牲がつきものだ、味方も敵も……俺は怖かったんだ。人を殺すのが……木乃香を守るとほざきながら……俺は、ライダーにはなれないな。

そうだな、名前を変えよう。俺が殺すときに使う、あらゆる意味での『殺し名』を……まあ決めようか、俺は殺すが無差別には殺さない、女子供は見逃そう。まあまだ甘いだろうが……確か零崎つて言う殺人鬼の中に『条件を満たさなきゃ殺さない』奴もいたなあ。俺もそうしよう、俺の大切なものを破壊する奴は……殺して解して並べて揃えて晒してやんよ。

そうだなあ、零崎つてのはいいな。理由もなく殺す集団か……まあ

この前読んだってこともあるんだがな。何て名前にしよう……零崎、
零崎……

夷 「ああ、そうだなあ 虚刀流から一文字とって、『虚』識か」

魔法使い 「何をぶつぶつ言っている?!」

夷 「ああ、そうだな。ここは有名な戯言遣いのセリフを少しアレ
ンジして言ってみるか。……もう理想を見続けるのは 飽きた。
そろそろ零崎を、始めてみよう」

ああ、そうだ俺の名は……

虚識 「零崎虚識……まあ殺して解して並べて揃えて晒して刻んで
炒めて干切って潰して引き伸して刺して抉って剥がして断じて刳り
貫いて壊して歪めて縊って曲げて転がして沈めて縛って犯して喰ら
って辱めてやんよ」

魔法使い 「なめるなああああああああああああああああ
ああああ!」

そして俺は手に魔力を集め、魔法使いをなく

夷 「ハッ!」

盛られて……後はご想像にお任せします。

エヴァ 「ふふふ、この体は便利だ。十歳から二十歳まで自由に体を変えられるんだからな」

式 「あー、はいはい」

なんか泣け崩しに告白受けて、付き合って、体合わせて……正直最初は面白い奴だったんだけどなあ、本当に惚れたかも……うん、まあこれも

式 「戯言だけだな」

作 「うん、今日だってテイルズ オブ ザ ワールド レディアント マイソロジー3をやらずにひたすらに書いたんだもの」

夷 「まてやこのやるう」

作 「後はまだ読んでなかったラノベを読んで……ああ、デート・ア・ライブは面白かった!!」

夷 「……お前蒼穹のカルマも読んでたしな（駄目だこいつ早く何とかしないと）」

作 「H A H A H Aこちらはまだ終わってねえゲームが……ロックマンゼロゼンシリーズ終わってねえんだよ!! Xシリーズもそうだけど!!」

夷 「おい、ついていけるのか？ もう何年前の話なんだよ」

作 「うっさい!! ちなみに作者はX9もゼロ5もいつまでも待ってます」

夷 「……（駄目だこいつ）」

作 「にしても旅行が地味にキツイ……体がイテエ」

夷 「運動しないからだよ、ただでさえ運動部でのモヤシと言われた男なのにさ!」

作 「うっさい! それに俺はスタミナが少ないのは仕方ない!!」

夷 「なぜだ!!」

作&夷 「「帰れ!」」

作 「まあそういうことだから」

夷 「つつかこの後書きも数えて何回目だ?」

作 「ぶっちゃけネタ切れ、これからはアニメとか布教するために
その特設コーナーでも作るうかと」

夷 「やめとけ」

作 「とくに……エルフェンリートなんてどうだ?」

夷 「しよっぱなからグロイものなんて見るかよ!!」

作 「作者は正直、あの子には幸せになってほしかった。つつかが
チ泣きした作品だからね、グロイとか置いといて……ヒロインが不
憫すぎて」

夷 「……ハッピーエンド大好きなんじゃねえのか?」

作 「ガンアクション物も見るから……たまあーにだけどソツチら
へんのアニメを見ることがある。ガンアクションと言えばブラック・
ラグーンは良いと思うぞ? まあお勧めはしないがな」

夷 「あれもあれで救いなくね?」

作 「二丁拳銃は作者の憧れです、HELLSINGでのアーカー
ドの旦那には惚れたよ」

夷 「いやいやいや、人間大好きとか言いながらボロボロに殺しますよ?!?!」

作 「いい加減にしないと色々な人たちに怒られるからな。あ、それと今出したアニメは十五歳未満の方は絶対にググらないでください、これはフリじゃありませんのあしからず……どうしても見たい方は自己責任で。結構悲惨なシーンがありますので」

夷 「では次回まで……」

木乃香 「ちえりお！ ふふふ、やっと言えたで」

夷 「お、俺のしめが……」

作 「では次回まで上記のアニメについて知りたい方がいらっしやいましたら質問をどうぞー」

転生者（前書き）

遅れましたあああああああああ！！！ 申し訳ない、ゲームをしていたらこんな……申し訳ないです。

ナギ 「今回は俺が主役なんだよな！」

ああ、それね。ナギ、お前を主役と言ったな……あれは嘘だ。

ナギ 「嘘おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！！！」

ではどうぞ！

そして謝罪します、今回私はある読者様のご要望を裏切りました、本当に申し訳ないです、しかし後々の展開に必要なので止むおえず出してしまいました、こんな作者ですが……これからもよろしくお願いします。

転生者

転生者 「うあ、あああああああああつ！」

夷 「これで終わりだくそつたれ、神卦法・二！」

ああ、こんにちは。久しぶりの挨拶だな、夷だ。

いや、あれから数か月、俺とエヴァとチャチャゼロは共に魔法世界に入った。念のため栄子に連絡用の札も渡したし、フェイクも向こうに残した……まああいつでも父さんクラスの力は持つてるしな問題はここからだ、俺は日本のゲートがないから近場のゲート……まあイギリスなんだが、久しぶりにバイクに乗りながら観光もかねて、ちなみにバイクはデイクイダー、悪いが創造する能力なら何でも作れるんでな、改造でもなんでもござれた。一種の無限機関を搭載してるから燃料切れの可能性もない、まあ認識障害などを使いながら行つたんだが……途中でありえない奴らに会った。

宝具を自在に操る慢心王、血統付きの零崎、どこぞの死神代行やら……明らかにこの世界にいない奴等が俺とエヴァ……正確にはエヴァに襲い掛かった、正直宝具程度なら対応できるようにしておいたしな、死神代行なんか魂ごと消し飛ばしたしな……ぶっちゃけると零崎は楽勝でした。俺が異常すぎるだけなんだがな。

んで慢心王の能力をすべて消失させて拷問 OHANASHIを試してみた、そしたら指を切り……まあ色々したら簡単に言ってくれましたよ、いや物騒な手はツカツテナイヨ？ この赤いの？ コレハケチャップダヨ？

まあそれで知つたんだがこいつらは転生者らしい……同類ですか、つうかどんな能力を貰ってるんだよ。……俺の方が悪質？ 使ってるのは見稽古……今は封印してるんだが今回は解放したよ、霊力の扱いは三十年前くらいに覚えたよ。

別荘使ったりしてたよ、さすがにヤバいすぎるからな……下手に力もつと暴走すると大変なんだよな。で奴らが言うに好きな力をやるから転生しろだと……おいおい、そんなにホイホイ転生させるなよ、平行世界の中じゃ、大量の転生者が居たせいで消滅した世界もあった、その神？ ぶつ殺しましたがなにか？

エヴァにはすでに俺が転生者と言ったがな……まあ拒否されたらすべての記憶消して、大戦期までおとなしくしてようと思ってたら

エヴァ 「それがどうした？ 私は吸血鬼だぞ？ 転生者よりもよっぽど化け物だろう」

やっべ、泣けてきた。まあその後いい雰囲気の所に詠春が乱入したからぶつ飛ばしたのはいい思い出だ。

で目の前に居るこいつは某蛇のコードネームを持つ男そっくりの男、まあ鋼糸で拘束してるから動けないからな。こいつは中々の身体能力だったが……まあ勝てるわけねえだろ？ 化け物が人間に。

転生者 「た、助けてくれよ、俺はただ『ネギま！』に介入したかっただけなんだ！」

夷 「……『ネギま！』ってなに？」

転生者 「し、知らないでこの世界に来たのか?!」

夷 「仕方ねえだろう……まあ俺が居たのが運のツキだってことで」

転生者 「お、同じ転生者だろう?!?!」

エヴァ 「ふん、私の体目当ての奴らと一緒にするな！ こいつはな、私がお」

式 「あー、どうしようか。今戦争中だし、適当にぶらつくわけにもいかない しなっ！」

俺は突然飛んできた剣のような物を蹴り飛ばす。久々にこの世界での強者に会ったな…… いったい誰だ？

？ 「あー、あー、お前が超越者オバスキルでいいのか？」

式 「…………… 彘？」

お、俺が超越者？ Why、なぜ？ 理由を簡潔にのべよ。

？ 「お前、龍樹ナীগシヤに喧嘩売っただろ？」

式 「誰？」

？ 「ほら全長100mを超える巨大な龍だよ」

…… ああ、あのじゃれついて来た龍か、帝国に寄つたらなんかじゃれついて来たから戦い（遊び）してたんだよな、純粋な身体能力だけだったから苦労したぜ。また遊ぼうと約束したんだが…… 喧嘩は売ってないが？

式 「はいはい、それで筋肉マッチョ君」

エヴァ 「……まだ終わらんのか？」

？ 「お、いい女…… って待て待て、殺気出すな！ 超越者……！」

あ、あれ？　なんかぴくぴくとラカンが痙攣おこしてるんだが？
まあ追撃に……

式 「蟲ピン」

ラカン 「があ？！　がああああああああああああああああああああ
あああああつ！！」

ラカンの腹に全長三メートル前後、四角錐状の形をした巨大な杭を腹に打ち込む、まあ投擲してだが……これ？　とある世界に行ったときに『とても優しい主ともものすごく怖い従者さん』からもらった蟲駆除用の物だよ。蟲？　世の中には知らない方が良い事があるんだよ、綺麗な人に極上の殺気と共に言われた瞬間、死ぬかと思っただぞ？　世界にはまだまだ強い人が居るんだな、間違っつて見稽古で見ちゃったけど……ああ、怖かった、絶対魂ごと消滅させられる覚悟しないと勝てねえよ。

エヴァ 「おい、なんか変なことになってるが大丈夫なのか？」

式 「……まあ、あの人の武器だし『生物をそのままの状態で“保存”する事が可能』だからな」

転生者の腹に十本くらい刺したら簡単に口開いてくれたよ、わざわざ痛み止めまで打って精神崩壊させないために色々やったしな……
…外道？　エヴァや木乃香の体目当てで来るやつに手加減できるかよ。

チャチャゼロ 「マツタク俺ノ出番無シカヨ」

式 「仕方ねえだろ？　でだ……ラカンだっけ？　誰を殺すんだ？」

ラカン 「……………」

式 「もう一本逝く？」

ラカン 「あーあー！ わかったよこん畜生っ！ 無理だ無理！！
こんな依頼やってけるか！！」

式 「わかればいいんだ、まあとりあえず……俺ら行くから」

その場から歩き去ろうとするエヴァと俺、頭にはチャチャゼロ。

ラカン 「ま、待ってくれ、薄情ものー！ 鬼！ 人でなしー！」

式 「殺人鬼ですがなにか？」

一時間たったら抜けるようにしてあるし、回収されないように自然消滅するように改造はしてる……ヒイロノカネぶった切ったこの金属なんだ？ 蟲^{ムシ}ピン……恐ろしいなあ。

ラカン 「無視しないでくれえええええええええええええええええっ！！」

アーアーキコエナイ、キコエナイ。

「……時は過ぎて……
夷「くっ!!」」

転生者「よええ、ヨええよ!!」

大ピンチ、ピンチすぎて笑えないぜ？ ただいまオステイアの町中……というよりも戦時中、帝国が攻めてきたところに偶然入ったかな。エヴァ？ 危険だから捕縛して別荘にぶち込んでおいたよ。

いつも通りにすれば問題なしだった……筈だった。最初は俺は戦争の様子見をする予定だった、便利だよな光学迷彩って……まあ段ボール被りながら潜入していたら開戦していた、その中に赤毛のあのバカや詠春、見慣れない男と……俺の魔法の師であるゼクトが居た。なんてこつたい、まあ見学していたら敵艦から撃たれた精霊砲がかき消された、なんだと思うと中央の塔からの『何か』が精霊砲を無力化していた。

式「おいおい、魔法無力化だと？ とある右腕のバカじゃあるまいし」

久しぶりに解析の魔眼を使う、0.1秒もかからずに解析が終了したので結果を見てみると、生前愛読していたライトノベルの世界に行ったときにあった、ツンツン頭のバカみたいに魔法を無力化していた。

兵士「さすが……『黄昏の姫御子』だな」

……黄昏の姫御子？ 俺は導かれるまま塔までデイケイダーで走る
……塔に突入するときってバイクだろう？

式 「I'm absolutely crazy about
it! (楽しすぎて狂っちまいそうだ!)」

兵士 「ど、どこか うあああああああああああああああ
あ!」

久しぶりに『アヌビス』と『ジエフテイ』を両手で撃ちまくりなが
らバイクで突進する。そのままバイクを上にして、壁を登る。そこ
に精霊砲やら魔法や矢を撃たれるがすべて銃弾で迎撃する、ちなみ
に兵士は殺してねえよ。そのまま最上階に突っ込み、石の壁を破壊
しながら内部に突入した。

式 「到着、おもしろいって誰？」

? 「……ダレ？」

目の前には鎖でつながれ、ボロボロの服を着ている……あれ？ ど
っかで見たことあるような橙色の髪をした少女が一人居た。……ひ
どいな、感情の色が見えない、おいおいまさかこの子が最終兵器だ
って言わないよな？ こんな子を？ はははははは。

……つざけんよ?! 全てを任せたのか？ 王国？ ハッ!
自分の国すらまともに守れないのか?! ……今はこの子の事
だ、口から血が出る、それを指でふき取り頭を撫でながら聞く。

式 「俺は両義式、お前は？」

? 「ナ、マエ? ……」

式 「名前ぐらいあるだろう？ 俺なんていくつも持ってるがな」

？ 「アスナ……アスナ・ウエスペリーナ・テオタナシア・エンテ
オフユシア」

式 「長いからアスナ アスナ?!?!」

アスナ 「ドウ、シタ、ノ？」

おいおいおいおいおいおい！ 目の前に居るのが未来
で木乃香の同室になる、両義アスナか?! 全然雰囲気違うよ?!

式 「こつちの話だ、今鎖解いてやるからな」

アスナ 「ダメツテ、ネエサンガダメツテ、コウシナイトワタシガ
キケンニナルカラツテ」

……感情を殺され、ただの兵器として扱われてるのか？ 糞くらえ
だ、どの世界にも最低な奴らは居るもんだな、殲滅しておくか？

式 「まあよく頑張ったな」

アスナ 「ガンバル？」

式 「な、なんて言えばいいんだろっな？ ……まあ後で色々教え
るからな、とりあえず『開け』」

言霊を使って鎖を外す、同時にアスナが倒れてこんで来る。どうや
ら体が動かないらしい、俺は腕の中に抱きかかえる。……にしても

どうする？ 本当に面倒になって来たな。

ナギ 「こっちだn ってゼロザキ?!?!」

詠春 「し、師匠?!?!」

式 「よお、鳥頭、バカ弟子久しぶり……後ろの二人は初めましてか？」

? 「ふむ、いい動きじゃな」

? 「これはこれは変な仮面を被った人ですね」

式 「殺すぞ？」

? 「おお、なんちゅう殺気じゃ。……お主、人か？」

式 「どうでもいいだろ？ ショタジジイ、まあ何かの縁だ。俺の名は両義式、その青Y 近衛詠春の師匠で……通りすがりの一般人だ!?!」

ナギ 「てめえが一般人なわけないだろうが!?!」

詠春 「少しは自覚してください……まったく」

ああ？ 世界にはな、力持ってるけど一般人になってる人間もいるんだよ、俺だつて力自覚して生きていけるならしたいが……バトル 案外戦闘ミア狂らしい、その世界のラスボスに戦いを挑んだりしたしな

? 「面白い方ですね、私の名はアルビレオ・イマ。気軽に『アル』

とでも呼んでください、得意魔法は重力魔法、『紅き翼』での役割は主に後衛からのバックアップや作戦の立案などですね」

式 「……紅き翼？」

？ 「次はワシじゃな、ワシの名前はゼクト。主にこのナギの師匠をしておる」

式 「……つつか紅き翼って何？」

その場にいた全員がずっこける、まあアスナは相変わらず無表情だが少し驚いているな。うんうん、わざと言ってよかった、本当は知ってるのさ。

エヴァ 「シキイイイイイイ！」

俺の影から勢いよく、エヴァが出てくる、つつか……。

式 「あ、忘れてた」

エヴァ 「何が忘れてた、だ！ 貴様と言う奴は……決着をつけるか？」

詠春 「師匠にエヴァさんも落ち着いて！ 今は戦争中ですよ？」

アスナ 「……ヘンナ、クウキ」

式 「うん、茶番もそろそろいいか、うんじゃそろそろアスナを誘拐するか？」

紅き翼全員 「……待て待て待て!!」

エヴァ 「子供か……私とお前は子供を」

まあ色々あったんだが……とある世界で不覚とってしまい、生殖機能を破壊された……うん、なんか因果ごと破壊されたから再生できねえ、殺しても治らないし……はあ、まあしょうがないと言えばしょうがない。

とりあえず外では俺の『偏在』たちが戦ってるだろう、俺の小指程度の力を持つてるがリミッター外してない俺と同じ程度の力だしな、ナギが百人居たって勝てないだろうな。

詠春 「いいんですか? 師匠」

アル 「私はむしろ式さんに賛成ですよ、か弱い少女 ええ幼女を監禁している連合に力を貸したくありません」

式 「……エヴァ、アスナを近づけさせるな」

アスナ 「?」

エヴァ 「お前は知らなくていい、私の名前はエヴァンジェリン・

A・K・マクダウエルだ。母親気分で甘えてくれ!」

アスナ 「ハ、ハハオヤ? ナニ、ソレ」

ゼクト 「……下種共が親の愛情すら知らさずに、ただ兵器として育て上げたんじゃない」

ナギ 「許せねえ、許さねえぞっ!」

式 「はいはい、んなこと言ってる暇あったら逃げんぞ、今は俺の結界で止めてるが……鬼神兵もたくさん、集まってるみたいだな」

俺の偏在たちからの情報によると……十体くらいの鬼神兵が俺の結界を破ろうと必死こいてやってるらしい、あれ？ かしいな、理論上は蟲ピンに耐え切れるくらいの強度の結界を張っちまったせいかな？ 俺はお茶を飲みながら考える、うーんやっぱりお茶は落ち着くな。

アスナ 「ソレ、ナニ？」

式 「お茶だよ、心配すんな。今から広い世界に旅立つんだからな」

俺はお茶を飲みほし、デイケイダーを影に収納する。そして蟲ピンとキーブレードを持つ……ネタが多い？ 作者に言ってくれ。

式 「んじゃ、少し遊んでくる」

ナギ 「俺も行く！！」

詠春 「師匠ばかりいい恰好はさせません」

式 「そりゃいい、三百歳のジジイにやらせんなよ？」

アル 「……あなたって、何歳なんですか？」

式 「さあ？ 百超えた時点で忘れた」

平行世界、別荘などで遊んでいたら三百年程度たってたらからびっくりしたぜ……あれだ、百年って長いかな？ って聞かれたら『短い』

つて答えるよ？ いやあ楽しかったな、学生に変装したり、社長したり、オペラ歌手になったり、衛士になったり……あ、べーた？ 潰して親玉も現在、俺の偏在達が潰しに行ってるよ、俺の腕位の実力かな？

ゼクト 「なんと！ ワシよりも高齢なのか?!」

式 「うっせい、人は若いと思えばいつまでも若いんだ!!」

イライラしたので蟲ピンを一万発撃ち込む、結界に弾かれると思ったらバターのように弾かれたね、あらまあ〜こりゃ改良かな？ 外から断末魔の様な悲鳴が聞こえるが……悪いな、今非常に腹がたつてるから手加減する気はない。

そのままキーブレードを持ちながら塔から出る、目の前には死屍累々な兵士たちが……死んでないけどね まだ残ってる鬼神兵の中の一体を狙ってキーブレードを振り下ろす。

式 「真・雷光剣（短）!!」

範囲を絞った真・雷光剣を放つ、元々広範囲殲滅技だったが範囲を絞ったらえらいことになった。まあ鬼神兵を一撃で葬れるんだ……十分な威力だな、おっともう一体がこっちに向かってきたな、まあ倒す気がなかったが……ネタ技行くぜ!!

式 「天に竹林光って唸る！ 死ぬほど痛いと轟き叫ぶ！ 爆熱……」

体内のコジマ粒子（汚染除去済み）を解放する、運が悪く世界を移動したら目の前にコジマキャノンことINSOLENCEとっさに発動した吸収の魔眼で吸収したら……体内に留めることに成功した、

エヴァ 「まあ仕方ないだろう、次はもつといいところに連れて行ってやるっ！」

意外と子供好きなエヴァ、京都に居るときは子供たちと遊んでいたっけ、いいのかなあ神明流。まあいいか酒吞童子すらいるんだ、っうか京都襲われる心配ないだろう。

式 「んじゃ、いっく」

転生者 「ちよつと待ったあああああー！」

声がしたので見てみると……なぜかどこぞの金髪ソルジャー顔をした男が、また転生者かよ。この頃一週間に一回のペースで見つかるんだが……G？ Gなのか？！

転生者 「アスナちゃんを連れてどこに行こうとしてやがるー！」

式 「どこって……色々かな？ 世界を見せてやりたいし、っうかお前誰だよ」

転生者 「クラウドだー！」

あ、頭痛くなってきた。たぶんこいつ、転生して間もない。なんか体から出てる覇気と体の運び方がグチャグチャだし、剣の持ち方も力任せのいい加減……うわあ、昔の俺見てる感じだよ、虚刀流習得した時の俺だよ。

エヴァ 「また……あいつらか？」

ナギ 「なんだこいつ……何者だよー！」

式 「あー、ナギ？ 紅き翼とエヴァとアスナ連れて先行け」

ナギ 「ふざけんじゃねえぞ?! 俺は最強の魔法使いになるんだ
っ 絶対に」

エヴァ 「良いから来い！ 式の邪魔をするな鳥頭!!」

詠春 「お気をつけて師匠！ 体運びはめちゃくちゃですが……実
力は確かなようです！」

アル 「すみません、私たちのリーダーが……あなたならできます
よ」

ゼクト 「ふうむ、まあいいじやろう、無理はするなよ?」

アスナ 「……シキ」

式 「なに?」

アスナ 「……ガンバツテ」

次の瞬間、エヴァが転移札（俺特注）を使い、転移する。あ、ナギ
がエヴァに殴られて連れてかれた、まあ子供だから手加減してんだ
ろ。

まああれなら俺でも簡単に追えるな。そう思いながらク……転生
者に向く。

式 「で、何の用だよ」

な？ …… 知らんがな。

クラウド 「吹っ飛ばせ！！」

式 「マジで吹き飛ばすからやめろ！！ 結界！」
タリスマン

オステイア全域に結界を張る、まだ逃げてない一般人もいるんだぞ？！ メガフレアでも撃ってみろ、全滅するぞ？！
結界に異常なまでの衝撃を感じながら制御を怠らない、ミスった瞬間、こちら辺は吹っ飛ばす、エヴァたちが逃げてくれてよかった。

クラウド 「すごいな……… だがっ！！」

式 「いい加減にしろ！！ 右手に気、左手に魔力、中央に神力！

神卦法・二だっ！」

クラウドが合体剣のような物で斬りつけてくるので神卦法を発動させる、魔眼が解放されたことで視界がえらいことになる、死線やら相手の武器の効果やら…… 情報量パねえよ、糞が。
久しぶりにヒヒノタチを出して受け止める、並列思考で結界の操作も忘れない。バハムートうざいです。

クラウド 「変な仮面をつけやがってっ！」

式 「いたずらに力使うな！ ここを吹っ飛ばす気か？！」

クラウド 「お前さえ死ねば、ハーレムでもなんでも作れるしな！！」

式 「ああそう、ちなみに聞いておくが…… 近衛木乃香にも手

を出すつもりか？」

クラウド 「当たり前まだ、あんな美少女とは仲良くしたいだろ！」

式 「気が変わった」

虚識 「てめえはここで死に腐れ、来たれ（アデアット）」

服装が着物だったのが、いつもの黒の^イコートに変わる。

あーあ、静かにしてたら力奪って輪廻転生に戻してやるうかと思っ
たが……木乃香に手を出すつもりなら容赦しない。

クラウド 「はっ！ こけおどしかよ、服装が変わった程度でどう
した？」

虚識 「いや、てめえはここで殺して解して並べて揃えて晒して刻
んで炒めて千切って潰して引き伸して刺して抉って剥がして断じて
剝り貫いて壊して歪めて縊って曲げて転がして沈めて縛って犯して
喰らって辱めてやんよ」

まずは目の前のくそ野郎の合体剣の死線を見る、うゝんさすがにル
シフェルが造った物か、普通じゃ壊せないな、まあヒビノ夕チなら
いけるがな。そのまま合体剣を切断し、細切れにする、本物なら奴
から受け取ってるし別にいい。

クラウド 「ハア？ 壊れないって言ったのに！！」

虚識 「面倒だから蟲のように標本になってる」

零距离から蟲ピンを使い、腹に突き刺して地面に張り付ける。念の

ため両手のひらと両足にも突き刺して置く。これでも表情を変えない、目の前の『蟲』……痛覚ないのか？ せつかく悲鳴をバツクにバハムートを消し去ってやろうと思ったのに。

クラウド 「くそっ！ 痛みがないけど……気持ち悪い！！」

虚識 「さあて、あのバハムートをどう料理してやろうか」

上空で頑張っているバハムートを魔眼で視る。

スタンバイ、スタンバイ…… GO！

虚識 「標的『バハムート』消去」

消去の魔眼を使ってバハムートを文字通り消し去る。存在ごと消し去るから、最初は脳が爆散して死んだなあ、懐かしい思い出を思い出しながら目の前の『蟲』を見る、すごく怯えてるな。

クラウド 「ば、化け物！」

虚識 「俺もお前もそうだろうが、つうかチートな能力持つてる奴で化け物じゃない奴はいないさ、つうわけでとっと死ね」

クラウド 「く、くそっ！ アルテ」

虚識 「ジャックポット Jack pot」

アルテマを言う前に頭を『アヌビス』で撃ち抜いて殺す、これで死んだようでもあったりとする。まあ頭吹き飛んでるからな、見たところ不死者でもあったんだらうけど、悪いな。不死殺しの銃弾使ってるから地獄に行ったな。

虚識 「《チート保持者に転生したよ、ただしかませ犬》みたいな
っ！」

兵士 「ま、待て!!」

去れ（アベアット）していると兵士が集まってくる、すでに零崎は
終了したし戦う気はないしな。

兵士 「この国を救ってくれて感謝する、しかし貴様は危険すぎる
!!」

式 「まあそりゃそうだ、だがお前ら程度の連中で勝てるのか？
鬼神兵も呼んで来いよ。全員殺して解して並べて揃えて晒してやる
うか？」

まあただの脅しだしな、周りの兵士は怯えながら……しかし詠唱を
始める、なに？ 俺悪役？

式 「それでは兵士諸君、ご苦労様、ここら辺で失礼する」

俺は転移札を取り出し転移しよ

？ 「待て!! アスナを返すのだ!!」

式 「ほえ？」

兵士 「あ、アリカ様?!」

アリカ 「貴様、その仮面に着物！ 『オバスキル超越者』という者か！」

アリカ 「何を言っている！ 兵士たちよ、目の前の男を捕縛しろ！」

（な、なぜわかった？ 思考が読めるのか?!）

あら、すぐわかったのか。うん、さすが未来の女王様、無能ではないな……とりあえず、アスナの事はまた潜入して聞いてみるか。

式 「そんじゃあ！ ちえりお！」

今度こそ転移する、なんかアリカが言ってたが……まあいいや。

|||||アリカ視点

私の名前はアリカ・アナルキア・エンテオフユシア、ウエペルタテイア王国の王女だ。

私には妹がいる、しかし私と妹は生まれてすぐに引き離された。妹には能力があった、それは我が王家で稀に発現する魔法無効化能力^{マジックキャンセル}、妹は幽閉され力の制御だけをさせられた、それだけなら私はまだ父を恨まなかった。……妹の扱いはとても人間をするような物ではなかった、感情を失くし無機質な目ですべてを見る妹、私には恐ろしく感じられた、同時に怒りも感じた。たった一人の妹だ、私にとつては大切な妹を存外に扱う父親には殺意を覚えてくる。私は努力した、遊ぶ時間も寝る時間も惜しんで勉強、王女としての振る舞い、戦

闘、できることはすべてやった、いつか父を乗り越え国に立ち、アスナを解放するため。

そんな折、戦争が起きた……最悪だと思った、これではアスナはますます壊れる。魔法無力化能力さえあれば、戦艦についている精霊砲だつて無力化できる。文字通りの最終兵器……アスナの様子を一度見に行ったのだが……ひどい、ひどすぎる、最低限の服装、食事、世話、王族にするような行為ではない。さらにアスナには呪いがかけられている、もう二十歳はいつてるはずなのに見た目は幼女……成長を阻害する魔法だ、そのせいで長く生きさせようと言つことだ、反吐が出る。

しかし王女として国民を……国を守らなければいけない、最低な姉だ、何もしてやれないのに、助けようとは……しかし、神は居るのかも知れない。

帝国がオスティアを襲つたとき、ある報告が来た。アスナが誘拐された。

その後、がむしゃらに会議室から飛び出した。報告では誘拐したのは超越者と呼ばれる、最近魔法世界に現れた、「絶対強者」それには誰も勝てないらしい。

私は外に出ると信じられない物を見た、巨大な龍がオスティア上空にいるではないか……最悪だと思った、アスナは誘拐された、あんな龍に攻撃されたらこの国はおしまいだと思った。しかし何かに阻害されているのか、龍が吹く炎はオスティアを焼くことはなかった。私はまた塔に向かって走り出した、邪魔なドレスのスカートを破り走りやすいようにし、体を王家の魔力で強化する、そのまま走り続けると……奴がいた。私は声を出して生死を促す。

アリカ 「待て！！ アスナを返すのだ！！」

静止した超越者は顔に仮面を被っていて、顔が見えなかった。

アリカ 「貴様、何をやったかわかっているのか?! この国を滅ぼすつもりか!」

式 「ハア、お前こそ……はき違えるなよ、小娘」

次の瞬間、感じたこともない殺意を感じる。私は足が自然に震えるのが分かった、奥歯がガチガチとかみ合わない、しかし私はその恐怖を押し殺し超越者に向かって言う。

アリカ 「な、何を言っている?」

式 「さっきの結界がなければ、この国は地図上から消えてたし、てめえだって死んでた」

アリカ 「なんだと?! アスナさえおればそんなk」

式 「いい加減にしろ!! てめえは妹を兵器としか思ってねえのかよ」

アリカ 「わ、私……は」

誰が妹を兵器に扱う者がいる! 私がそう思った瞬間、奴はニヤニヤしながらうなづく。

式 「……なるへそ、なるほど、別に兵器とは思ってないようだな」

アリカ 「何を言っている! 兵士たちよ、目の前の男を捕縛しろ!」

動揺しながら兵に命令する、いったい何者だ?! 多分龍を消した

のもこいつだろう、男か？ 女かわからない！！
奴は手に持っていた、札のような物を再び顔の前に持ってくる、転
移札か？！

アリカ 「待て！ 超越者！！」

式 「そんじゃあ！ ちえりお！」

そして超越者が消える、周りの兵士たちも呆然としている。

アリカ 「……撤収だ、この場に居ても仕方ない」

兵士 「よいのですか？」

アリカ 「奴の実力なら逃げ切ることも可能だろう、さあ今は軍を
再建しなければ！」

アスナ……勝手な願いだが、姉としての願いだ。頼むから無事でい
てくれ……私の妹だから、絶対助け出すぞ、待っていてくれ。

「……………その頃のアスナ
アスナ ……大きい」

エヴァ 「ふふふ、アスナも大きくなれば大きくなるかもな」

エヴァの胸を凝視していました……ドンマイ、姫さん。

作 「お前らには原作で死ぬほど働いてもらっからいいよ!」

チャゼロ 「続キハ？」

作 「あ、はい。なので今度また閑話を行います」

チャゼロ 「ナンノ閑話ダ？」

作 「『これはゾンビですか?』いいえ、ただの?病弱です?』の
ハヤテ様とのコラボ閑話、夷が の世界に行ったら」

夷 「あれ? マジでやんの?」

作 「この前メッセージで許可をもらった、本当にありがとう!」
います」

夷 「マジでやんか…… 臃の奴の胃が死ぬぞ?」

臃 「どうも臃です」

夷 「お前の出番はまだ先だ」

作 「では次回予告、チャチャゼロ」

チャゼロ 「マイイヤ、次回『これはゾンビですか? いいえ、た
だの仮面バカです』ナンツウ題名」

作 「次回も!」

チャゼロ 「見テクレ、チエリオ」

夷 「でだ、今回使わせてもらった武器についての説明をしなきゃな」

作 「ああ、まずは感想であつたタケ様のご要望から急ぎよ」キーブレード』を使わせていただきました、ネタに困っていたので、ありがとうございます!!」

夷 「今度は蟲ピンか？」

作 「こちらは人気ネギま!二次小説、『魔法先生ネギま!』カレカノ・ライフ』 皇月二八様にいただいたので使わせていただきました!メッセージでの許可ありがとうございます、いつも楽しく読ましていただいています」

夷 「この説明だな、全長三メートル前後、四角錐状の形をした巨大な杭、ハクさんと呼ばれる最強の従者の『蟲駆除用』の武器(?)だ、恐ろしいことに生物をそのままの状態で“保存”する事が可能らしい。まあつまり刺しても死なないらしい、最大射程約二億キロ(地球と太陽間の距離より少し長い)、最大追尾時間八〇年強、最大連続射出数三七億本(毎分)だそうだ、さらに障壁突破効果有りとするごく泣ける武器だよ」

作 「さらに量産可能だしな、本当にありがとうございます!もしよければ感想で贈り物をいただけましたら、積極的に使って行こうと思います!」

木乃香 「ウチのディエンドドライバーみたくな? (ドライバーをケフィアに当てる)」

朧 「では次の閑話でよろしくお願いします」

作 「それでは！」

これはゾンビですか？ いいえ、ただの仮面バカです（前書き）

一日で完成できましたのでどこか誤字脱字、朧くんのしゃべり方が違ふところが多々あると思います。

それでもよければ読んでいただければ幸いです。

今回クロスさせてもらったのは『これはゾンビですか？』いいえ、ただの？病弱です』ハヤテ様の作品です、気になった方は検索を！

えーでは今回は初クロス作品なので少し緊張しております、ですがハヤテ様や皆様に楽しんでもらえれば幸いです、それではどうぞ！！

これはゾンビですか？ いいえ、ただの仮面バカです

……これは俺がとある平行世界に行った時の話だ、まあ期待しないで読んでくれ。

あれは……たしかエヴァと初めての……ええっと、まあ夜を共にして、意味？ アガツガガツガガツガガツガガツガガツガ、い、言えるか！！ まあ一言、すごかったです。

式 「あーう……眠い」

エヴァ 「zzzzz」

俺が先に起きたようで別荘のベッドから起きあがった、うん、シーツやら体がえらいことになってるし、エヴァ少し隠しなさい、色々見えてるから！ 悪戯するぞ?!！ ま、まあし、したしっただたっただたっただたっただた。

エヴァ 「むうう、シキイ」

式 「……ガハッ!!」

口から色々出しながら服を脱ぎ、洗浄する。旅の途中で魔法で服やら体を洗う術式を作っておいてよかった、俺はいつも通り着物を着ながらエヴァにシーツをかぶせる、このままだと第……何ラウンドいったけ？ 十回から数えてねえよ。

式 「むう、眠い」

予想以上の体の疲れか、俺は失念していた……今首飾りを外してい

ることを、まあこの別荘は俺の本気に耐え切れるようにしてるから問題なし、さらに言つと俺の右手の余剰魔力が残っていることを、ふらつく俺は床に倒れ込もうとする、俺は手を前に出して体を支えようとするが、そのまま床をぶち抜いた。

式 「ぎゃ？」

そのまま何かえらいことになっている切れ目に転げ落ちる。
つつかとつさに魔眼で確認したらコレ、次元の壁だよ！！ ポツシ
ユート?! ちくしょおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!

式 「嫌ああああああああああああ……………」

そのまま次元の壁が閉じていき、俺は落ちていく……………どンドン落ちていく、そして……………

? 「へ? だ」

式 「ぎゃああああああああああああああああ!!」

そして俺は別世界の死神と出会った。

|||||数十分後

フレイ 「なるほどなるほど、で次元の壁をぶち抜いたと……………君さ、人間？」

夷 「すまん、まさか死神と頭ぶつけて悶絶するとは……」

フレイ 「前代未聞だよ、まさか次元の壁をぶち抜いてやってくる人間がいるなんて」

夷 「本当にすまん、リミッターかけるのを忘れてた」

フレイ 「うーん、じゃあ私がリミッターつけてあげるよ!!」

夷 「は？」

目の前の少女は死神のフレイ、なんでもつい最近死神をやめたらしい……死神やめるってなんだよ、そんなホイホイやめていいのか？駄目だよな、つうか本当にどうしよう、なんかリミッターかけるとか言ってるけど、エヴァに心配かけたくないんだ。

フレイ 「はいっとリミッター」

次の瞬間、俺の力が削ぎ落とされるようなそんな感覚に陥った。何しやがった?! 魔眼でかくに 魔眼の力も落ちてるよ!!

まあ解析は使えるから、見てm

『解析結果、身体能力……百分の一に減少、ギリギリ銃弾かわせるよ！ 魔力……木乃香以下、妹に勝る兄はいない！ 気…… H A H A H Aお父さんと同じくらいだね その他、神卦法及び黒式使用不可、妖力と神力完全封印、影の倉庫の一部の武器使用不可、パクテイカード一部の力封印、特殊能力成長限界突破と見稽古以外使用不能、結論……今のためえじゃ地球は碎けねえよ』

魔法の射手で迎撃させてもらったよ。

夷 「はーっはっは！！ 地球よっ！ 俺は落ちてきたあああああああああああ
ああああああああああああっ！！」

この頃高笑いがエヴァから移ってきたと自覚し始めてる俺であった。そのまま日本の上空に落ちた俺はさすがにヤバい思い、ディケイダーを呼び出して乗る。意外とわからない物だがディケイダーはヘタをすれば並行世界の移動・陸・海・空・宇宙空間での走行・ミラーワールドへの突入もお手の物、このバイクチート、さすがディケイド汚いぜ！！ だが好きだ！！

夷 「どうしようか、まあまずは降りるか……」

||||||||||||||||?視点

? 「まったくなんで僕がこんなことを？」

こんにちは、僕の名前は鑢ウツ臙ウツ俗ウツに言う転生者です、詳しく知りたい方は『これはゾンビですか？』いいえ、ただの？病弱です』を読んでもください……なぜ宣伝したのでしょうか。

? 『まあいいでしょう、あの世界の神ケフィアが宣伝した方がいいと思っ
たからやったのでしょっ』

臙 『七実、メタ発言は止めてください』

七実 『現実を直視してください、完璧にバイクに乗って曲芸して
ますよ？ すごいですね、あれほどのバイクさばきは滅多にお目に
かかれませんか』

臃 『……滅多に、ってあんな乗り方するバカはいませんよ?!』

? 「かはははは、今なら空だって切れそうだ!!」

なんとというか破天荒な方ですね。あ、こちらに降りてきた。

軽い音と共に降りてきた人を見ると……女の方のようですけど……
なーんか引つかかるんですね。

七実 『あれ？ あの人の儀式に似てませんか？』

臃 『ええと、たしか空の境界の主人公だとか何とか』

七実 『はい、彼女の動きをしたら私たち死にますが』

臃 『どんな動きなんですか、それ』

? 「……疲れた、腹減った、つうかここd 　　って誰か居た
?!」

向こうが気付きましたね、多分彼女(?)がフレイが言っていた人
なんでしょう……いや、異世界から来たとかマジ勘弁ですよ? い
やほんと。

七実 『人はそれフラグと言う』

臃 『ドヤ顔しながら言わないでください』

？ 「おーい、精神世界で話し込むのもいいがこっちに気付けー！」

臃 「なっ？！！」

なぜわかったのでしょうか？ 只者ではありませんね、警戒をしましょうか……

？ 「あれ？ マジだった？ すまんすまん、適当に言ったから合ってるとはな」

臃 「て、適当に言わないでください」

？ 「まあいいや、あのアホ死神のせいでこの世界に来た……」

七実 『あ、ホントだった』

臃 「……どうしてこうなったんですか？」

？ 「どうした？ まあいいや、俺の名前はここの いや、りよ
いやいや、ぜ」 待て待て、もういいや両希夷だ」

……もういいや、って名前くらいちゃんと言ってくださいよ。にしても一つ、ぜ」……その次なんですか？ まさかぜろにつながりませんよね？ 嫌ですよ、同類と戦うなんて。

臃 「夷さんですか、僕の名前は臃、ただの病弱です」

七実 『……夷ですか、えびすなら神の名前ですな』

朧 『ああ、七福神の恵比寿のことですか？ そんな深いこと考え
てませんよ』

ちなみに夷の名前はサッポロビールのエビスビールから取りました、
飲んでたらふと気づいて……パソコンで「えびす」と打ったら「夷」
と出たのでそのまま夷にしました、それとお酒は二十歳まで駄目で
すよ！（by作者、実話の話で作者は未成年です、無礼講だったの
で一缶飲んでしまいました）

||||| 夷視点

目の前の病弱（自称）の事を一瞬魔眼で視る、とアラアラ、マジで
した。ひどいなこの世の病魔がこれでもかと詰め込まれてるよ、見
稽古でコピーしてないけどな、つつかこの体で動いてる時点で奇跡
なんだが……にしてもどこかで見えた顔なんだよな。

夷 「えーと、どこだっけなあ？」

朧 「……何を悩んでいるのかわかりませんが、一つ聞きたいんで
すが」

夷 「何？ 答えられるものだったら答えるよ？」

朧 「まさか異世界人とか言いませんよね？」

おお、こいつ勘がいいな。ほんとのことだし言うか、にしてもこいつも転生者か、うゝん俺以外の転生者って初めて会うしな、とりあえず実力が落ちてる今じゃ、本気だしたって（強化無し）地面に地割れおこすくらいなんだがが無理だよなあ。

夷 「その通り！」

朧 「……マジですか？」

夷 「マジです！！！」

この頃読唇術を会得しようとして過去のアニメの記憶を見てたんだが……エヴァとの行為の時はヤバかったなあ、人の心をダイレクトに聞く……うん、あの時はヤバかった。とりあえずまだ甘いが……ともった自分を後悔した。

？ 『朧、言ったでしょう。異世界人じゃありませんか』

朧 『誰だってアニメみたいな事を考えますか?!』

？ 『ここは元はラノベの世界ですよ？ いいです、交代してください、私がしゃべります!』

……あ、あれ？ 誰かいるんだが……どっかで聞いたことがあるよ
うな、ナタを持った少女や病弱最強の姉やらの声なんだが、なぜか
目の前の朧の雰囲気が変わる……はい？

？ 「こんにちは夷さんでしたか？」

夷 「……男だよ、ってかなんで鑢七実がここに居る?! あんたは死んだはずだろ?」

七実 「ああ、あなたは私の事を知ってるのですね? ……はい、死にましたがなぜかのこ体に押し込まれたんです」

……事情を聞いてみると無茶やったなあ、と思った。通常魂の融合なんて馬鹿げたことは誰もしない、ヘタをすれば消滅か、どちらの人格も消えて両方を足して÷2した感じの奴が出てくる、うん、こんなに魂の均衡が保ってるのは奇跡だな、よっぽど合ってるのか、それとも……まあいいや。

そんなこんなで……臙の家に行ってみたんだが すごく怖かった、なんかポニーテールの人には一緒に並んで歩いてたところを見つけれたら剣? 葉っぱ? まあいいや、そんなので斬りつけられました、いやあ忍術ってあるんだね、見稽古でコピーしてみたが……使いにくい、正直神明流の奥義とかなり相性悪いんだが……。で家に入って紹介されて、吸血忍者のセラフイムさんだそうだ……えーと、吸血鬼の忍者?

次は無表情の銀髪の女の子……こいつが一番ヤバかった、強大な魔力のせいで因果律にすら手を出してた、いやあびっくりしたまさか魔力総量で負けるとは。にしても無表情なのに俺をにらんだような気がするんだが……なぜ?! 俺が何をした! あれか、嫉妬か? 俺は男だよ、野郎に欲情するアホじゃない! ……危険だったの。で少し封印しようとしたら力が制限されていることを思い出した。で名前はユークリウッド・ヘルサイズ……ネクロマンサーだそうだがお茶を飲みながら言われてもな、しゃべると強制的に運命を変えるらしい……見稽古で見取らないでくれよ、頼むから。

次に短髪の元氣そうなアホ毛少女、なんだっけな……悪魔男爵ハルナちゃんだっけ? 自己紹介の時に言われた名前が……『男女さんおしおんな』

しにてええ、さすがの俺もキツイです。今は魔力が枯渇してるらしいが魔装少女らしい……うぐん、どっかで聞いたことがある名前ばっかなんだよな……。

ああ、あと一人、コイツは別にいいだろ？ え？ 駄目？ ただの変態なんだが……初対面で『下に穿いてますか?!』と聞いて来たんだが蹴り飛ばして、足で踏んだら……止めておこう、マジで気持ち悪かった。

夷 「で、この変態の家に居候してると」

朧 「はい、残念ながら」

ユー 『……これからどうするの?』

夷 「まあこの世界を見て回ろっかな、だいぶ俺の世界とは違うよっうだしな」

セラ 「まあ、あなたならできるでしょうけど……できれば剣の師事してほしかったのですが」

変七……歩 「俺の名前表記ひどくね?!?!」

夷 「黙れ変態、男に欲情すんじゃないねえ」

歩 「ご、誤解だあああああああっ!!」

ハルナ 「で、男女さんは元の世界にどうやって帰るの?」

うぐう、は、ハルナさん?! 頼むから俺の名前をそう呼ぶな、い、妹の形した悪魔と修業仲間の形したあ（ry）と未来のお嫁さん候

補のかた（ry）を思い出す、いやあああああああああああああああ
あああつ！！　そ、それだけは勘弁してくれ！！　え？　穿ける
？　それらめええええええつ！！

夷 「とりあえず体動かして、封印を解くしかないよなあ、本気だ
したらここら辺吹っ飛ぶが」

朧 「……ちなみに本気を出されたらどのくらいの強さなんですか
？」

夷 「ええつと、ゼウスだっけ？　あの駄神と殴り合って引き分け
るくらいかな？」

ユ 「ゼウス？　駄神つてもしかして……」

夷 「暇つぶしに天界に行ったら少し喧嘩してな……あやゆく存在
末梢されるところだった」

七実 「本当に人間ですか？」

ハルナ 「神様？　ここにいるじゃん！」

夷 「うんうん、ハルナはそのまま健やかに成長してくれ」

で、実際問題マジで封印をどうするか……方法は二つ、戦いながら
封印を緩めて、緩んだところ最大出力の神力をぶち込んで崩壊させ
る。もう一つはやった本人が解呪する……無理だよなー、あの様子
だとやる気ねえよ。

朧 「本当にどうするんですか？」

七実 『私としてはリアルな両儀式が居るだけでOKです』

朧 『あなたもアニメキャラでしょうが……』

朧は精神と話してるし……あ、良い事思いついた。

夷 「朧……」

朧 「はい？」

夷 「俺と戦え」

夷 「そんなこんなで別荘にやってきました」

とりあえず、仮面はかぶっておく。今日は龍の仮面だ。

七実 『これがネギま！の別荘ですか……感動的です』

朧 『どうしてこうなったんですか？』

と言っわけで別荘ver53に連れてきた、零崎の俺でも耐え切れるからな、本気の俺の小指程度の力だろう、まあ縛りな戦いもして

みたかったしな……っていつも修業装置でやってるか。

臃 「マジで戦うんですか？」

夷 「大丈夫だ、俺だって弱体化してるし、かなり制限してるからな」

七実 「……まあ大丈夫でしょう」

夷 「んじゃ、少し待ってる。……いやいや遊びで作った次元斬じやなくて、コジマキャノンでもない、あつ……ロトシリーズ（防具）、あつたディケイドドライバー！！」

臃 「……とてつもなく危険な物ばかりなんです」

七実 「ロトシリーズは見てみたいです、でなぜ仮面ライダーのベルトなのでしょう？」

臃 「見てたんですか?!」

七実 「……ネットって便利ですよ」

夷 「まあなんかぼろくそに言われてるが変身つと」

ドライバー 「KAMEN RIDER - DECADE」

そしてディケイドに変身する俺、え？ 何故変身する？ そりゃお前、見稽古で技会得されたらめんどくさいし、この世界にどんな影響を与えるのかわからないだろ？ ライダーだったら真似される心配はない。

臙 「……もう驚くのは飽きました」

七実 『臙、臙！ 生ディケイドですよ！！』

臙 『うるさいです、少し静かにしましょう！』

夷 「始めていいか？」

臙 「少し待ってください……」

次の瞬間、臙の爪が伸びる……えーと、あれか？ 真庭忍法『忍法爪合わせ』か？ まあいいや、ライドブッカードソードモードにして……戦闘開始。

まずは臙の動きが見たいので牽制として縦に大ぶりの攻撃をする、それを交わし俺の『点』を狙ってくる臙、ライドブッカードで受け止めながらしかたないので神明流の技使うか……。

夷 「斬岩剣！」

臙 「ッ?!！」

俺は斬岩剣で臙の爪をすべてたたき折る、いい音をしながら砕けていく爪、臙は俺に対しての認識を改めたのか、さっきまでの雰囲気とは違う真剣な表情をする。まあ青白いんだが……全開だったら直し切れることもできるが、まあいいだろ。

臙 「殺曲……」

夷 「何 ぐあ?!！」

朧が歌いだしたと思ったら俺の背中に衝撃が加えられる。全方位から朧の歌声が聞こえる……正直めちゃくちゃ怖い、なんか背中ばつかに衝撃がイタイイタイ、ライダーだから着物の防御力が反映されないからきつい、これだったらめんどくさがらずに改造すればよかった!!

夷 「(ちょっと手加減すぎたか? めんどくさくなってきたから……)」

ドライバー 「ATTACK RIDE - CLOCK UP」

クロックアップして周りを見ると俺の真後ろに立っている朧が……うわあ、えげつない攻撃だなあ。まあクロックアップもえげつないか、んじゃ終わらせるか。

ドライバー 「FINAL ATTACK RIDE - DE・DE・DE・DECADE」

スクラッチ音と共に十枚のカード型のエネルギーが現れる、俺は飛び上がり朧に向かって飛び蹴りの体制をとる。ちょうどその時にクロックアップが解除される。

朧 「どこに行っただんですか?!」

七実 『朧、上です!』

夷 「せりゃああああああああああっ!」

そのまま十枚のカードを通過して朧の腹にキックを当てる、が妙に

硬い感触のせいでうまく決まらなかった。俺は魔眼で確認するために変身を解き、魔眼で視てみると……あれ？ あいつが来てる和服俺の魔装束の素材でできてるんだが？

隳 「ゴフツ！ 中々危なかったですね、しかし」

夷 「あ、あのさ、その服の素材……どこで手に入れた？」

隳 「え？ ああ、この服の素材ですか？ 部屋に置いてあったんですよ、なんか無造作に」

……………あ

|||||夷七歳の頃の話

夷 「でけたああああああああ！！ 次元斬！」

当時の夷はチートな武器を作りまくっていた、現在はそうではないが……影の倉庫の中がカオスなのはこの頃が原因だろう。

今度は次元の壁を壊せる代物シロモノを作り上げたらしい、そして横にはさつき作ったばかりの鋼系の試作、ヒイロノカネで作り上げたナイフ、それに魔装束が置かれていた。すべてバグな力を持っているが夷は失敗作だと思っている。

夷 「後は出力ちょ」

次の瞬間、次元斬の刃の部分が光る。どうやら暴走してるそうだが、夷は自信が組める最高の結界を張る、もしも世界を切り裂いたりでもしたら世界消滅するので。

次の瞬間、暴走した次元斬が空間を切り裂いた、そして切れ目にさつきまでの道具や武器が落ちていく、それに気づかない夷は消滅の魔眼を使って地道に消滅させていた。失くしたと気付くのは消滅させてから一時間後である。

|||||夷視点

夷 「や、やっちまったあああああああああああつ！
！」

朧 「何がです？ まあいいです、そろそろ終わりにしましょう」

朧が取り出したのは俺が特注で作った『神力印の鋼糸』あ、やばい、あれでバラバラにされたらさすがの俺もやばいかも……。

七実 『さあ蠅のように舞い、豚のような悲鳴を上げなさい！！』

夷 「キャラちげえ！！ 七実さんに何があつた?!?!」

朧 「何でもいいです、じゃあさようなら……」

夷 「し、死ねるかあああああああああつ!?!」

この後、何度も死にそうになりながらもなんとか引き分けと言う形で臙との戦闘を終わり、お詫びとしていくつかの道具を置いて来た。その後はバイクに乗りながら世界中を回った。その途中に本当の零崎やら人類最強やらが襲ってきた、ここではダイジエストでお送りします。

「……………顔面ストラップの場合？」
「かはは、傑作だぜ」

夷 「……………えー、なんで居るの？ 零崎人識さん」

人識 「へえ、俺の事知ってるんだ。まあいいさ」

夷 「おっと、そんな甘つちよろい糸遣いじゃ殺せないぞ？」

人識 「いいね、この頃はこれで死ななかつた奴が少ないんだよ」

夷 「えーと……………すまんが道急いでるからそんじゃー」

人識 「殺して解して並べて揃えて晒してやんよ」

夷 「やつぱりいいいいいいいいいいいっ！！」

その後、十二時間にも及ぶ鬼ごっこにより町の一角がぶっ壊れるという事態が夷は力を取り戻し二十パーセントくらいなら本気と神力を出せるようになった、ちなみに余談だがこの後、消化不良だった人識が『偶然（夷が呼び出した）』臙と会い、戦いを挑まれフランスレーション発散に使われ、さらに事後処理までしたのは余談だ、その時ものすごくキレていた、と追記しよう。そのまま夷は世界中を

飛び回った。

「……人類最強の場合

？ 「お前大丈夫なのか？」

夷 「たかがメインカメラ（頭部）がミンチにされたただけだ！！」

？ 「おまえ人間じゃねえよ！」

夷 「失礼な！ えーと哀川さんだっけ？」

？ 「上の名で呼ぶな下で呼べ。あたしを苗字で呼ぶのは敵だけだ」

夷 「えーとまあ人類最強に挑もうとしたし……まあ俺零崎だから」

？ 「……はははは、なんだ先に言えよ、ならあたしの敵だな」

夷 「かはは、人類最強、いや『哀川潤』……力取り戻すために戦ってもらうぜ」

潤 「かかってきな、全力で戦ってやるよ」

その後の事はあまり知られてはいない、ただ二人の戦いは激しくその戦いは一日以上も続いた。結果は夷が五十パーセントの力を取り戻し、デコピンで哀川潤を戦闘不能に追い込んだ、その過程で町一つが地図から消えたのだが……これにより殺し名、呪い名が^{まじないな}集結し、一つの小さな戦争が起きたのだがそれを止めたのが夷、潤と人識やほかの変態の零崎などを食い止めていたのが臙であった、そのとき

に朧と七実が魂を融合させたのはまったくの余談である。

夷は戦争を止めた後、強引に封印を解いたのだが封印の術式を強引に解いたせいなのか、なぜか生殖機能を跡形もなく破壊された……というよりも無くなったと言った方がいい、ちゃんと男の象徴もあるのだが肝心の子孫を残す機能が消滅したのだ。

そのまま夷は朧に別れを言わずにフレイと言う死神の元に行き本気でぶちぎれて殺しかけたことは朧は知らない、その頃の朧は……

朧 「あの野郎おおおおおおおおおおっ！！ 面倒なことしやがって！！」

七実 『ふ、ふふふ腐腐腐腐、もう今日で一週間はゲームもアニメもしてません……あの腐れ女顔が（ニコオオオオ！）』

もう色々と限界であった二人だった。

ちなみに夷は……

夷 「生きてるなら神だつて殺し切る！」

神々 「……黙れ人間がっ！！」

百体以上の神との戦いを始めていたとき。

これで俺の閑話は終わり、この後もこの世界には何度も行ったんだが……行きたびに朧に殺されかけるとい……まあ事後処理しなかつた俺が悪いんだが問答無用で死線を斬るのやめてくれ、何度死んだことやら、あ？ 神？ ああ、あれか、何とか勝利修めたよ、なんか神々が俺の能力をはく奪しようとしてたんだが……なんか『な

「ぜできない?!」とかほざいていたから虚刀流で皆殺しとまではい
かないけど何体かは殺したなあ、間違つて死線切っちゃった。死
ぬんだな神様つて、まあ俺の世界の神様が謝りに来たんだが向こう
の神々が畏れちゃつて、ゼウスまでくる始末……とりあえず、色々
やつたら十年たつてた事実、急いで帰ると黒い笑みをしたエヴァが
……とりあえず聞いてみるとあれから一日しかたつてないらしい、
それで生殖機能の事を話すと……うん、シヨックで泣き出しちゃっ
たんだな、これが。

まあそんなこんなで懲りずに平行世界に手を出しまくつて、たまに
神と戦つて魔王になつたり、一国の王様になつたり、将来『人類種
の天敵』と呼ばれる男の運命を変えたり、間違つて原作ブレイクし
てしまつたり、なぜかディケイドになつて世界を回つたり、ロボッ
トに乗つて戦つたり、ありとあらゆる世界の仮面に手を出してとあ
る世界の管理局に『生体ロストログリア』と呼ばれて追われたり……
と数え上げればキリがないほどの事をしていた。

まあ臆、言つておく……お前と会えて、俺は
最高の
弄り相手を見つけたよ、これからもそつちに行つて、めっちゃくちゃ
にしてやんよ!!

「これはゾンビですか？ いいえ、ただの仮面バカです（後書き）」

作 「ネギまラジオ！」

夷 「こんにちはこんばんはこにゃにゃちは、夷です」

作 「やあまさか本当に一日で書き上げれるとは」

夷 「頑張ったな、今まで一万字超えるのには三日かかったのに」

作 「一番驚いているよ」

夷 「にしても戦闘シーン手抜きじゃね？」

作 「ぶっちゃけるとお前ら戦うと別荘吹き飛ばすから質素にしてみました」

夷 「改めて思い出すとこの世界が一番大変だったなあ」

作 「まあ生殖機能が壊れたのは……俺が考えたんだがな」

夷 「まあ気兼ねなくエヴァと（バキーン）したり（ガガッガガ）で（チュドーン）それと（閲覧禁止）」

作 「一応この作品十五歳以上対象だが……十八やりたいのだからノクターンに行かないと、まあ作者は未成年だから無理だが」

夷 「にしてもだ、俺の名前」

作 「はい？」

夷 「マジなのか？」

作 「ああ、初期設定は正義感、熱血、猪突猛進だったなあ。で生まれたのが感想であったチートオブチート、性格がコロコロ変わる主人公だよ」

夷 「作者だってそうだろ?!」

作 「うーん、昔から話し相手が大人ばっかだったし同年代の友達が少なかったしな、昔っから敬語だし先生にもため口言えないんだな、これが」

夷 「なんつう人生だよ」

作 「まあ何回も死にかけたしな、確か運が悪かったら頭と胴体が切り離されてオープンゲツトするところだったぜ」

夷 「それ違くない？ まあいいや、本当に今回ありがとございまして!!」

作 「さて次回予告」

夷 「次回『完全なる世界／絶望のR』……不吉だな」

作 「では次回も!!」

夷 「ちえりお!!」

くくくくく 本番前

隴 「ああ、はい、ここをこう」

七実 「私はこうしゃべればいいんですね？」

夷 「おい、二人とも今日はありがとな」

隴 「まあ偶にはこういうのも」

七実 「帰ってゲームしたい」

夷&隴 「「おい!!」」

監督ケフイア 「本番ハイリマース」

夷 「んじゃ頑張ろうぜ」

隴 「はい」

七実 「わかりました」

監督 「5・4・3・2・1……始め！」

今回はハヤテ様本当にありがとございました、こんな場ですがお礼を申し上げます。また機会があればこういうのをやってみたいので許可さえあれば書きます、つつかバリバリ書きます。

……なんかすいません、ではまた次回までさーよーなーらー！

完全なる世界／絶望のR（前書き）

と題名していますが、絶望それほどしません。

だってこの小説はお気楽&バカ小説です、シリアスがシリアルになるのはいつもの事、真面目？ そんなもんとこの昔に捨て去りました。

激しく原作ブレイク&強引な設定&詰め込み過ぎた、そして書き方……その他もろもろを無視できる方はお進みください。

良いですね？ それでは……どうぞ！！

完全なる世界／絶望のR

よお、夷です。あれから少したった……意外にお咎めなし、なんでも俺がバハムートを消したのが、よかつたらしい……あー、なんかぶっ潰してやりてえ。

前線から外れた紅き翼　まあ、俺たちなんだが意外にやることはたくさんあった。まずは孤児の保護、けが人の治療、軍でできない魔物の討伐、そして転生者どもの駆逐……一番最後がきついですが、この頃は趣向を変えて、大量残滅しか持っていない奴らが来るから……地形が変わるなんてザラだ、あー、一番きつかったのは十人くらいで召喚獣だっけ？　そんなので一気にぶち込まれた時、いやぁアスナやエヴァやナギたちが無事でよかつた……俺は下半身吹っ飛んだけどな。（その後キレた、詠春とエヴァにダルマや氷漬けにされてたなあ）

そんなこんなで、辺境の地に家を建ててみた……まあ紅き翼の本拠地みたいなもんだ、セキュリティもばっちり、家だって蟲ピンの金属を応用した物で、家の周りに幻術もかけたから……心配ナツシング（死語？）

新年を迎えても連合と帝国は小規模の小競り合いもするだけ、ぶっちゃけなんの問題なしだ、意外と艦隊にダメージ与えたのが大きかったか……うーん、おもいつきし歴史に關与しちまったが大丈夫か？　今のところはタイムパドックスも出てないし……俺が修正力も超越したら話は別なんだがな。

まあダラダラと言っていてもしようがない、アスナの様子だが……うん、連合潰そうかと思つたよ。体はあざだらけ、呪いとも言える成長阻害の魔法……解除したいが馴染みすぎて、自然に消えるまで待つた方がいいらしい。この頃はなぜか俺に抱き着いてくるんだが、それとエヴァ、黒いオーラ出すな、相手は幼女だぞ？　俺が欲情するわけないだろ？

エヴァとアスナだが……うん、良好だよ、よく二人で仲良く寝てる様子をチャチャゼロが見てるらしい、たまーに喧嘩もするがな。

式「てなわけで、今日は鍋パーティーだ、野郎ども今日は食うぞ！」

アスナ「ナベ？」

エヴァ「まあ色々な食材を入れて、楽しむ料理だ……そうか、魔法世界に無いな」

アスナが不思議そうに首を傾げる、昔の刹那を思い出す……大丈夫かなあ、とりあえず並の奴らには圧勝できるようにしたつもりだな。

無表情だが雰囲気は楽しそうだな、無理して外でて鍋してよかったぜ。

ナギ「これが『鍋料理』か、肉投入」

詠春「ば、バカっ！ 火の通る時間差というものがあってだな、最初に鍋に入れるなんて論外だ！！」

ゼクト「ほほう、久しぶりじゃな。四十年ぶりじゃ」

アル「フフフ……知っていますよ、詠春。日本ではあなたのような人を『鍋將軍』と呼ぶのでしょう？」

ナギ&エヴァ「な、鍋將軍（だと？）」「」

なーんか激しく間違ってるんだが……ただ、詠春は仕切り屋なだけ

だ。昔からこういう物を仕切るのがうまかったな、誕生日会やらもそうだったが、うんうん二百年前だが覚えてるぞ。

アスナ「ナベシヨウグン……エイシュンハナベシヨウグン」

式「アスナ、その知識は捨てる、いらん……てか肉ばつかじゃねえか！！　いいよ、先日狩ってきた『ラオシャンロンの肉』をぶち込んでやるよ！！」

エヴァ「そ、それはっ！！　式、よくやった！！」

詠春「このアホ師匠おおおおおおおっ！！」

ゼクト「若いもんはいいのお」

式「俺は三百歳だがな、お前の方が若いな、ゼクト」

この頃はゼクトと酒を飲む機会が多くなってきた、うん、歳食ったら酒がうまくなってきたからな、意外と話し合うしな。

ナギ「詠春が鍋將軍なら、リーダーの俺は最強の鍋將軍だな！！」

アル「あなたはなんでも『最強の〜』を入れなきゃいけないんですか？」

アスナ「ジャア、シキハナンナノ？」

式「……エイシュン、ナギ、アスナノキョウイクニツイテ、ハナシガアルカラ……覚悟しろよ？（にっこり）」

ナギ&詠春「（ガタガタガタガタ）」

エヴァ「バカやってないで食うぞ、私がすべてやっておいたからな、感謝しろよ？」

アスナ「シキ、オナカヘツタ」

式「よーしよーし、熱いから気を付けるよ」

ちなみにアスナは天然だ、熱いお茶を一気飲みしたり（即行で吐き出した）わさびをそのまま食べた（口を押えて泣きついて来た）……うん、癒されるわー、刹那ポジションがここ最近いなかったからなあ、エヴァも夜みたいだな、姿ならOKなんだが……見せたら見せたで俺が嫉妬しそうだが。
鍋には野菜と肉がバランスよく入っていた、まあ肉の量が少し多いが大丈夫だろう。まずはポン酢を少量受け皿にかけて、だし汁を入れて準備完了。

式「アスナ、食べる前は？」

アスナ「イタダキマス」

エヴァ「偉いじゃないか、よし肉を食っていいぞ？」

式「肉ばっか食うな、エヴァみたたくがさーとらあっ?!?!」

頭に衝撃が来る、見てみると広辞苑が握られている……この時代に
あつたっけ？

エヴァ「私がなんだって？」

式「誠に申し訳ありませんでした」

詠春「……お二人とも結婚しないのですか？」

エヴァ&式「……あ、忘れてた」

全員（アスナ除く）「……忘れてたんかい！！！！」

素で忘れてた、エヴァと結婚したら……あれ？ 俺の名前どつなるの？

まあ今は鍋を食べようか。

アスナ「フーフー、ハグハグ」

式「フーフー、もきゅもく あつがああああああああ
あ！！！！」

ナギ「……なんで、俺よりも強いのに猫舌なんだよ」

アル「おいしいですね……この肉は？」

式「はひ？ ほれは、らおふあんろんのにふはよ）はい？ それは、
ラオシャンロンの肉だよ」

ゼクト「……お主は本当に熱い物が苦手じゃな、まあこの肉はつま
いのじゃがな」

アスナ「……オイシイヨ」

式「しゃりゃ、よはった（そりゃ、よかった）」

エヴァ「式、水だ」

もきゅ、もきゅ、もきゅ……あー、死ぬかと思った、具体的には臍の陰謀でセラさんの料理食わされた時のような感じだよ。

式「もきゅもきゅもきゅ」

アル「……なぜ口からそんな音が？」

アスナ「キニスルナ」

ナギ「アスナ?!」

そんなこんなでいつの間にか、鍋の中の具材が無くなる。

ナギ「あれ？ なくなったのかよ」

式「あー、大丈夫だ。具材は大目に取ってある」

詠春「ええ、師匠がどこからか持ってきましたね」

正確にはとある主さんからもらった野菜なんだが……マジでうまい、野菜がうまいと感じたのは初めてだな、ちなみに俺はセロリが食えない。……どうやって作ったんだろうか？俺も作りたいが才能がこれぽっちもないからやる気が起きない。

式「まあ気に……クロックアップ」

俺は久々に仮面の力でクロックアップする、そのまま現在進行形で迫っている剣を蹴り上げる。そのままアスナをエヴァの後ろに持っていき、安全を確保して鍋に結界を張る。

仮面『CLOCK OVER』

エヴァ「なっ?! 敵か!」

式「エヴァはアスナの傍に、ナギと詠春もだ! ゼクトとアルは俺の援護を!」

ナギ「命令すんなっ! だがやるけどさ」

詠春「一体どこのバカですか? 師匠の食事中に乱入するアホは」

ゼクト「モグモグ、うまいのお」

アル「ゼクト……あなたって意外とアレですね」

ラカン「食事中失礼〜〜ツ! 俺は放浪の傭兵剣士ジャツ」

俺は言わずに、とある妹さんからもらったハリセンをラカンに向けて振る。そしてハリセンから、衝撃波みたいな水が飛び出す、そのまま地面を削りながら、ラカンに向かって行くと吹っ飛ばラカン、青ざめながら叫ぶ。

ラカン「な、ななななんでお前が居る?!」

式「アッハハハハ、誰かに教えられなかったか? 食事は大切な物だと、てめえは俺を怒らせた」

エヴァ「アスナ、向こうで鍋を食べようじゃないか」

アスナ「……ウン」

ナギ「死んだな」

詠春「無茶しやがって」

その後の事は音声だけでお楽しみください（by作者）

式「アハハツハ、ランドローラだ！」

ラカン「ま、待ってくれ！ そのハリセンどうなってやがる?!」

式「URYYYYYYYYYYYYYYYY」

ラカン「たか、くじやく、ごめんなs ?!！（連続でハリセンが命中）」

式「蟲ピン」

ラカン「またかあああああああああああつ!?!」

|||||一時間後

ラカン「モグモグ、つまるところ、そういつことなんだよ」

式「かくかくうまうまうーうー　ってわけか、把握した」

アル「わからない?!?!　　と言っかなぜナチュラルに食事に入ってきてるですか?!?!」

あの後、三本くらいの蟲ピン&ハリセンコンボでボコボコにしていたら、腹が鳴ったので一時休戦、その時ラカンの腹も鳴ったので食わせることに。そしたら依頼の事を話し出したので聞いてみると、帝国からの依頼だったらしく、俺たち紅き翼が危険だと思っ奴等が高額で雇ったらしい。まあ俺が居ることは想定外だったらしいが。

ラカン「ハツハハハハ、負けちまったなあ。どうすっかな、これから」

ナギ「俺たちと行かねえか？」

ゼクト「……本気か？」

ナギ「ああ、だって面白そうじゃん!」

アル「ふう、まあ、さっきのを見てしまったら……さすがに同情しますね」

詠春「師匠がいいのであれば、私は構いません」

アスナ「zzzz」

エヴァ「zzzz」

式「まあ、エヴァもアスナも寝てるし……帰るか、ラカンも来いよ、うまい酒もあるぜ」

ラカン 「おっ、いいねえ」

そんなこんなで撤収しようとする、エヴァとアスナは先に轉移させておいた、もちろんベットに……うん、今日はいいい日だ、新しい仲間、うまい飯、そして

転生者「両義式いいいいいいいい！！」

式「……蟲が、死に晒せ」

蟲ピンで貼り止めると悲鳴をあげる転生者、何も考えずになぜ突っ込んでくる？ なんでも俺がエヴァと仲良くしてるのが許せないらしい、ああ、そうそう俺はこの世界の物語は知らん、同じような世界には何度もう行ったがな。

ナギ「またかよ……この頃多いよな」

ナギたちには「奴らは少し特殊な方法で強大な力を持った連中」と話した、嘘は言ってないぞ？ 特殊なのは本当なんだから、にしてもこの頃本当に多い、ゴキブリのように一人居たら十人、この前は三十人とか……全員、天に還して輪廻転生の輪に帰ってもらったがな。ぶちぎれたときは全員殺してるが……ごくたまにだ。

式「（つつかこの頃、『両義』でも対応できてるから怖い……リミッター設定し直すか？）」

転生者「畜生！！ てめえだけは許さねえ！！ エヴァちゃんとイ

チャイティ」

式「ボツシユートです」

とあるスキマババアから見取った能力を発動させる、そして天界にそのままボツシユート。正直、俺はこの能力があまり使えない、うんうんやっぱりバカだからかなあ……。

ラカン「なんだったんだ？」

詠春「ただのアホ共ですよ……ハア」

本当にため息つきたいのは俺だよ、まったく。

あれ？ フェイクから念話？

式「はろはろしにがm」

フェイク「そんな場合じゃねえよっ！ 早く出やがれ夷」
オリジナル

式「どうした？ 千草が病気で起こしたか？ 万能薬はまだあ」

『

フェイク「今、そっちに行ってる睦月と望が転生者に襲われてる！

！』

式「……座標は?!?!」

くそっ!! だから来るなと言ったのに!! 睦月と望は関西呪術協会所属だからな、この戦争に後方支援として参加してははずだが……くそっ! 実験台に使うつもりかよ?!?! ほとんどの転生者

転生者「初めまして両義式君、僕は……まあいいや。とりあえずあんたを殺せば、一生遊んで暮らせるらしいから……うくん、でもこれじゃあ演出不足かな」

式「あ、っあああああああああああ！　虚刀流奥義

七花は

転生者「動くな」

その一言で俺の体が動かなくなる。同時に頭が急速に冷えていく。状況確認……目の前には顔と手を血で染めた高校生くらいの男が余裕の表情で立っていた。

足元には……変わり果てた睦月と望が倒れていた。悲しい、すごく悲しいけど泣けない……零崎になった弊害か、それとも長く生きたのが原因か、わからんが涙が一切でなくなったな。んにゃことはいい、とりあえずこの俺の動きを止めている能力はなんだ？

転生者「さっすが神様がくれた能力、「言葉の重み」も完璧じゃないか……」

式「変なしゃべり方をするな……その顔に鉛玉ぶち込んでやりたいよ」

本当にキレてる、だがりミッターのせいで魂を人間まで落としてるせいとか？　たく、この程度の能力で俺を止められるとは……油断した。

転生者「アハハハハ、この程度なの？　聞いたより弱いんだけど」

式「黙ってる」

まずいな……、久々にキレて「両希」を使おうとしてる。あれ使うと……暴走するんだよなあ、俺が制御しきれてないってのがあるが。

転生者「……にしても、この倒れてる二人の最後の台詞聞いてみる？」

抑えろ……爆発させたら、この世界が終わる。

転生者「式さん、千草を頼みます」だってさ。アハハハハ、本当に笑つて」

夷「黙れ、屑」

俺は足を動かして奴の笑い顔にパンチする、しかし奴は避ける。

転生者「危ない、危ない、オートパイロット反射神経がなかったら危なかったね」

夷「……神卦法・神」

俺の体が急に軽くなりすべてのリミッターが外れていく。

目の前の屑は笑いを止めて、代わりに怯えた様な顔をする。

転生者「あ、あああああ、ま、待ってくれ、悪かった。その二人を生き返らせる、だから許してくれ」

夷「『できるのか？』」

転生者「僕の能力の一つオールフィクション大嘘憑きでできる」

夷「『じゃあやれ』」

転生者「……ここに居る二人を　　生き返らせる」

その言葉を言っても……二人は生き返らない。
屑は焦ったように言葉を口にする。

転生者「ど、どうして?!　まさかルシフェルの奴、この魂を使っ
て　　」

夷「『生き返らないのか?』」

俺はエコーがついた言葉で喋る、屑は顔を真っ青にしながらあたふ
たする。

つつか俺の姿にビビってるのか?　体から高濃度の神力、魔力、気
が溢れてるだけだぞ?　ああ、戦闘になれてないのか。

転生者「ち、違う、ルシフェルの奴だ!　あいつのせいだ!」

夷「『たしかにあいつのせいだろうよ……けどよお、お前を殺さな
きゃ　二人に見せる顔がねえんだよ』」

俺は純粹に屑を殴る、当たった瞬間砕け散る屑、しかし次の瞬間に
はその場に立っている。青ざめた顔をしながら、腰を抜かしていた。

転生者「大嘘憑きのせいかな?　い、いやだ、死にたくない」

夷「『……本当に屑だな、お前には死すらぬるいよ……一生、空気
として生き続ける』」

俺はそのまま魔眼で奴を見る、そして分解の魔眼を使って奴の体を分解する。肉に、炭素に、そして空気に……まだ知能が残っているようなので能力を封印しておく、多分奴の能力は勝手に発動するんだろうな、まあ空気にして一生生きてる、どうやら不死の様だしな……まあ知能があるから何かしらするかもしれんが、全能力封印したしな。

俺はそのまま睦月と望を回収する、体の表面が腐敗している……もう見たくない。元気な頃の二人からは想像できない、こんな死に方をする奴等じゃなかったはずだ。……俺のせいか？俺が居たからこうなったのかな……もつとはやく転生者を殺しておけばよかったんだ、無慈悲に、そうすれば二人が死ぬことはなかった。

フェイク「オリジナル夷！……間に合わなかったのか？」

夷「……二人を埋葬してやってくれ、俺は」

そのまま銃を持って近づくと転生者を射殺する。

……どうやら向こうからやってきたみたいだな、嬉しくて笑っちゃうよ。

フェイク「なんつう数だよ、百人はいるぞ！！」

夷「好都合だ」

俺はそのままアデアットをする。服装が変わり、手には鋼糸が握られる。片手には銃を握る。フェイクは丁重に死体を棺桶に入れて転移札を使う。

フェイク「……無茶するなよ？ さっきので体キツイだろ？」

夷「……知るかよ、とにかく早く行けよ、巻き込んで死んでも知らねえぞ」

フェイク「千草は……どうする？」

夷「……記憶を消して、俺が殺したことにしろ。そうすればあの子には生きる目的ができる」

フェイク「お前が育てれば、いいじゃないか！！」

夷「……育てる資格なんて、俺には無い。頼むフェイク」

フェイク「……わかったよ」

そのまま消えるフェイク、そして突っ込んでくる転生者ども……まあ死んでも天に還るからいいかあ、生かしておくのが面倒になって来たし。

夷「Let's start the party!!（イカレたパーティーの始まりだ!!）」

転生者たち「……死ねえええええええ!!」

奴らに突っ込みながら……もう一度叫ぶ。

夷「I'm absolutely crazy about
it!（楽しすぎて 狂っちまいそつだ!）」

さあ……イカれた人間のパーティーを始めようか。

「……………フェイク視点

千草「あつ、式はん!!!」

フェイク「……………千草、実はな」

俺は人形だ、所詮は式オリジナルから作られた人形、最初はただの影分身、次に肉体を作られ人造人間ホムンクルス、自我も覚醒してるらしいが……………結局はあいつの記憶から形成されたものだ。戸惑うな、言うんだ、彼女に。

フェイク「お前の両親が死んだ」

千草「……………なに言ってるんや？ 父様も母様も帰ってくるって言いたもん」

……………どうすんだよ、死体もあるが腐敗が酷くてとてもじゃないが見せれるものじゃない。

フェイク「事実なんだ……………ごめん」

千草「冗談なんやろ？ うそなんやろ？」

フェイク「……冗談じゃない、すまない」

すると千草の眼から涙があふれてくる、今年で六歳か？ ……死ぬことはなんなのか、知ってるよな。

千草「嘘や！ 嘘やああああ！ ああああああああああ！」

フェイク「すまない、俺にはこのくらいの償いしか考えられない」

俺は千草の頭を掴む、オリジナル夷オリジナルだったら掴まなくてもできるだろうけどな、まずは消去と改変だな。

千草「何するんや？！」

フェイク「すべて忘れろ、そして……生きてくれ」

消去した影響か、気絶する千草。それを支えながら頭を撫でる、オリジナル夷……俺からの嫌がらせだ、精々苦労しやがれ。俺は改変しながら、記憶に少し細工する。

その後、関西呪術協会に行き、遺体を火葬した。千草には立ち会わせなかった、そのまま俺は逃げるように京都を出た、その後は俺の勝手な行動だ、まずは……世界中のゲートを破壊する、もう関西呪術協会から死者は出させない、絶対にだ！

|||||式視点

あれから数か月はたっただろうか？ いや、数年かもしれない。俺はエヴァにもアスナにもナギにも会わず、ずっと別荘で修業していた。

目的は自分の力の制御、この先ルシフェルを見た瞬間に怒りが爆発して本気を出しかねない、もしも世界が崩壊したらやばい、あの時だって神様からめっちゃ怒られたからな。なんとか制御をしたら何日たってるかわからない状態だった。

正直、あの時は精神を保つために零崎になりながら戦っていたからな、正直記憶がない。気付いたら視界いっぱい死体の山ができていた、戦っていた感触は残っているのに記憶はないなんて……どんな戦い方をしたのかわからねえ。

式「何してんだろ、俺」

急に虚しくなってきた。転生して、良い事もあった、楽しかったし前世じゃ信じられないほどの力も手に入れた、けど……人は生き返らせることができない。

神様に話したが睦月も望も天界に魂がないらしい、ルシフェルが絡んでいるらしいが……。

俺はもしもを考えてみる、IFの話だ。いやこの世界の本当の話かな？ もしも俺が転生しなかったら……死ぬ人はいなかったんじゃないか？ 睦月も望も……連合の討伐者達だって、俺がしたことと言えただだの原作ブレイク、むしろ歴史の反逆だ。本来の道筋から外れた行動……俺は今まで考えたことがあつたかな、自分の行動でどれだけの人を不幸にしているのか、どうしたらいい？ 死ぬばいいのか？ この体では自殺もできない、電撃でやられてもへっちゃら、空気がなくても生きれる、太陽にぶち込まれても燃え尽きない

体、唯一死ねるのは魂を消し去られた瞬間かな？ はははは、化けもんじゃねえか……この体、不老不死だって目じゃないほどの。

式「……何してんだろ？」

もう一度呟く、この別荘では向こうが一秒たてば一年、まあ不老不死用の別荘だな。

膝を抱えて体育座りをする、なんか虚しくなってきた。エヴァに相談したら確実に甘える……てか殺人鬼でこんな事するの俺だけだろ、三百歳も生きて何してんだ俺、そういえば身内が死ぬのはこれが初めてかな？ うん、どんな世界でもハイパークロックアップで元に戻せた、けどこの世界ではだめだ。ルシフェルが時空に干渉してるせいか、無茶な時空に干渉することをするとこの世界が消滅するらしい。

式「悪魔は泣けないか……なら、化け物になく権利はないな」

とりあえず言っておく、俺たち転生者は化け物だよ。死んだだけであら不思議、チート持って「俺TUEEEEEEEEE」できる、拳の果てには物語に干渉だ、運命に抗うのはその世界の人間の特権だ。それを平気でやる、その結果死ぬ人間もしらずに……俺はいくつもの世界でそんなことをやり続けた、……臍には迷惑かけたなあ。

式「どうするんだよ？ 今さら戻るのか？」

ここで残りの七百年生きるのもよくなってきたな……

式「ここで死ぬのも一興……てか？」

木乃香「ウチに会ってないのによくそんなこと言えるなあ、このア

夷「なんか知らんがすまん」

木乃香「式さんの言う通りや、メソメソして……隠し事して、ウチを一人ぼっちにして、つつちゃんやせつつちゃん、素子姉さん、千草さんもどれだけ心配したと思うてるの?!」

つつちゃん「誰?! あ、月詠? 月詠なの?! つつかまた式のやろうか?! もうタグに『式のせいだ!』って入れようかな? メタ発言禁止? だが断る。

にしても綺麗になったなあ、あれから……七年かな? うんうん、全体的に幼さが無くなって女の子だな、これで和服着たら男どもはイチコロだな、まあ渡す気はないがな……シスコン? それは全世界の兄に対する褒め言葉だ、この野郎。

木乃香「死のうと思ってるんでしょ?」

夷「木乃香、どれほど知ってる? 俺の事」

木乃香「不老不死のこと、すごい力持つてること、それと……本当はえびにいが血のつながった兄じゃないこと」

……ほぼすべてじゃねえか!! 木乃香が死ぬまで待っていようと
思ってたのに!! 両義式……面倒なことしやがる! って二十歳
になったら知るんだった……あー忘れてた。

木乃香「兄様……いや、夷さん」

夷「むず痒いから兄様かえびにいで」

木乃香「嘘ついた罰や」

夷「じゃあ、木乃香さん」

木乃香「……うん、やめよか」

正しい判断だ、妹よ。ふははははは、一度呼びなれた名前から逃げることはできないのだよ！！ つうか妹に他人行儀でされたら俺自殺するよ？ 前世で妹みたいに可愛がってた女の子に「うざい」と言われて、首を吊りかけたしな！

木乃香「兄様……なんでや？　なんで一人で背負いこもつとするんや？」

夷「……木乃香は知らなくていいんだ、お前は何も知らずに幸せに生きてくれ」

木乃香「嫌や！　ネギ君やキョウ君に言われたけど、そんなん嫌や！　何も知らずに兄様が傷ついていく姿なんか、見とおない！」

夷「俺は死なない、不老不死だぞ？　大丈夫だ」

木乃香「……………ツ！！　このバカ兄！！」

ぐびやら！？　またハンマー？！　ギガントの方だし、つうかまた筋力上がったなあ、合気道だろ？　やってんの。

木乃香「ウチはな、好きな人が傷ついてる姿なんか見たくないんや！」

夷「おiiiiiiiiiiiiiiiiiiii！！　なに言ってるんの、この妹さん！」

木乃香「ほんまやで！ 兄様のパンツが無くなってるのがもウチのせいや！！」

夷「知りたくなかった妹のカミングアウト、誰かこの子止めてええええええええええ！！」

つつか、時々なくなってたのはそういう事か！！ まさか刹那もやっつてないよな？ やってないよね。

木乃香「せつちゃんもや！」

夷「泣けるぜ」

レオン、マジ泣けるよ……今何してんだろうか、ゴリス クリスと一緒に戦ってるのかな？ つつかあの世界はマジトラウマなんだが……。
つて、違う違う。

夷「結局何しに来たんだ？」

木乃香「……会いたかったんや」

夷「俺に？」

木乃香「うん、もう兄様の匂いつきの和服が切れてきたから」

夷「父さああああああん、妹が、妹があああああ！！」

木乃香「せつちゃん、つつちゃん、素子姉さんも言ってたえ」

木乃香「じゃあ、女としてのウチは？」

夷「アホなこと言うな、妹に手を出す兄じゃねえぞ」

木乃香「近親相姦って人類は普通にやってると思うけどなあ」

夷「木乃香？ お前は普通に生きる、俺みたいに異常になるな」

木乃香「兄様は優しいなあ、本当に……誰にでも優しい」

な、なんか木乃香の眼が濁ってきてるんですが……昔見たヤンデレの眼によく似てる様な、いやいやウチの妹がそんなことになってるはずが

木乃香「ウチだけに優しくければいいのに」

ナツテマシタ、もうどうすりゃいいんだよ！！なに？ ヨスガニソラってる？ やかましいわ！ なんて妹関係持たなきゃなんないんだよ、俺は嫌だぜ？

夷「……木乃香？ それは異常な事だぞ？ というか演技するのやめなさい」

木乃香「えへへへ、ばれてた？」

夷「何年兄妹やってると思ってるんだ？ 木乃香の仕草、行動はお見通しだ」

たしか、あの頃ドラマにはまっついていて演技の練習をしてたな、ポー

カーフェイス上手かったなあ、一回だまされたよ。

木乃香「そういえば兄様、元気になった？」

夷「木乃香、悪いが俺はもう二度とお前とは会わないよ。……ごめんな」

悪いがこれは決めたことだ、木乃香に会いたいけど……千草さんに合わせる顔がない。それに殺人鬼の兄を持つなんて人様に言えないしな、ここで木乃香と別れた方がいいだろう。

木乃香「なんでや？ みんな待つてるんや、帰ってくるのを待つてるんや！！」

夷「……もういいから、もういいんだ、俺の事を『忘れる』」

俺は言霊を使って記憶をけ　せない?!　なんでだ?!　木乃香に俺の言霊を跳ね返す術はない筈だ?!　驚いている俺に木乃香は近づき……唇を　って、おいマジですか?!

木乃香「ん、んん」

夷「こ、この　んんん!!」

やべええええええええええ!!　背徳感たっぷり、刺激的なキスだよこんちくしょおお!!　妹にされる兄……アハハハハ、死にたくなってきた。

たっぷり二十秒くらい……ま、まあエヴァとはそれ以上してるから大丈夫か、うー口の中がえらいことに……背中に冷や汗いっぱい。

夷「おい、てめえが両義式かよ、素顔見せる。てめえにはいつも迷惑してんだよ」

式「んなこと言うなよ……はあ、なんだこの芝居」

夷「てめえ……なめてんのか?!」

式「はあ、まあすぐにまた会えるから……大丈夫だ、問題ない」

夷「不安しかねええええええええええ!!」

式「安心しろ……お前ならやれる」

夷「つつか素顔は?」

木乃香「兄様そっくりや!!」

やつぱりかぁ……今は俺の黒の仮面イのをつけてるしな、わからねえが確実に実力はあっちが上、仕掛けるか?

式「まあ……頑張れよ?」

木乃香「またね、兄様!!」

夷「お、おい! って行っちまったか」

呼び止めようとした瞬間、消えた二人……時間跳躍か? つつか式の野郎、俺と似すぎじゃないか? 足運びから仕草までほとんど同じだったんだが……どうなってるやがる? まさか

夷「うんな、わけねえよな」

やっぱりやめておこう、これはあくまで予想だ……にしてもだ。

夷「エヴァの事話してねえよ」

激しく現代に戻った時のことを思い、再び頭を抱えた。

その後、考えを未来に丸投げするために修業用シュミレーターを使って強敵たちと戦い、たまたに死んで……気付いたら一年たっていた。急いで別荘から出ると……黒いオーラを出しているエヴァが……その後、エヴァの別荘に連れてかれ、その……はい、行為をしました。その後詠春に睦月と望の事を言ってから、俺は魔法世界に居る神明流と向こうの世界から来た兵士たちを転移札で送り返しながら、魔法世界のゲートを破壊し続けた。ゲートさえなければ移動手段がないしな、ざまあみる。

|||||二か月後

ナギ「はっはっはー！！ 千の雷！」

式「ビックハリセン！！」

ヒヤッハアアアアアアアア！ 悪い戦艦はハリセンで落とすちやおうねえ！！ はろはろ今は水が出るハリセンで戦艦を落としている、色々と強化したらこうなった。ああ、エヴァたち？ エヴ

アはほかの地区で『私の魔法は世界一イイイイイ！』とか言いながら戦い（フィーバー）してるし、ラカンはさすがに参加できないので帝国の兵士の撤退の援護（殺さないように言っている）、詠春たちはアスナの警備……だったが今は参戦中。

どうしてこうなったか？ ああ、連合のくそ馬鹿どもが無能すぎてな、ヘラス帝国は大規模転移魔法という戦法をとって連合の巨大要塞グレートブリッジを攻略、正直聞いたときはその指揮官に拍手したよ。最高の戦法だな、インパクトもデカいし、なにより帝国の主戦力を思い切って敵のど真ん中にぶち込む戦法は好きだな。

ともあれそれから連合は後手後手に回り、帝国は領地を拡大、それも一気にじゃない。ちゃんと支配する土台を固めてだ、うんうん、向こうの指揮官は本当に有能だな、支配した土地では略奪も起こっていない、むしろ援助している……あれ？ 連合が負けた方がいいんじゃない？

しかし然うは問屋とんやが卸さないのか、連合は俺たちを呼び戻した。まあ戦力外通告を受けてる俺たちはもちろん断った、つうかアスナがすごく不機嫌だったしな、しかしナギが「ここで盛り返したら英雄だよな！」と言った瞬間に連合の役人が首を振り、ナギが一人で行きそうになったのでしぶしぶ戻ったわけだ。

そして紅き翼の活躍のおかげで領地をどんどん戻して行った、まあ帝国兵は俺の場合は転移させて生かしている、殺すどおりがないしな、むやみに殺すより生かした方がいいだろう？ 甘い考えかもしれんが、時々転生者が乱入してきたがこちらは俺が処分するので問題なし、たまに良い奴もいるから交渉して違う世界に、神様と相談して行ってもらっている、憎いけどさ、無差別に殺すほど落ちてないしな。

あれよあれよと言う間にグレートブリッジ奪還作戦が開始、ここは危険すぎるので俺とエヴァ、ナギの三人で行くことにした。アスナ

つき行った通りなことに、つうか帝国がかわいそうだったぜ。そしてなぜか紅き翼』の面々にファンクラブが出来たとか、そしてナギたちにも二つ名がついた、ナギには『千の呪文の男』……こいつ、千も呪文覚えてねえぞ？ 詠春は『サムライマスター』これは妥当だろう、戦艦の精霊砲ぶった切つてたしな。アルは『重力使い』捻れよ、つうかこいつエヴァよりも年上なんだって？ ゼクト『何あの子供、古代魔法撃ち過ぎワロタww』ネタすぎるだろ、頼むから自重してくれ作者。で意外の意外エヴァ『雷撃の氷帝』まあ『終わる世界』とテラボルト級の電撃を同時に操つてたからな……ファンクラブもできたらしいが、男も居るらしい、残滅しようかな。最後に俺『^{オーバースキル}超越者』……ああ、なんてこつたい、さらにもう一つ『えつと……なんですか？ あのハリセン』などと、ファンクラブは全員仮面をつけているらしい……嬉しいやら悲しいやら、ちなみに男か女か意見が分かれているらしい、両性類とか言ってるバカも居るがな……殺していいか？

で、紅茶を飲みながらとある人から送られてきたアップルパイを食べている……うめえ、マジでうまいぜ、エヴァの黒焦げ丸焼け肉と天と地の違いだな、そしてなぜか目の前に居る、少し渋めの男性と子供。

？「ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグだ、こっちはタカミチと言
う」

タカミチ「よ、よろしくお願いします！」

式「もきゅもきゅ、ごくん。で？ よくここまで来たな、用件は？」

ガトウ「紅き翼及び超越者の力を貸してもらいたい」

完全なる世界／絶望のR（後書き）

作「今日のネギラジオ!!」

夷「つつか書き方が変わったなあ」

作「感想で言われちゃったから、台本形式ってこんなのでいいのかな？」

夷「書き方……というよりも文才ねえしな」

作「う、うるさい!! デイケイドだって書いてないんだよ」

夷「スランプ？」

作「いや……どの世界に行こうか迷ってる」

夷「関係ねえよ、久しぶりに一週間以内にできたな」

作「頑張った、閑話抜かすと最長じゃないか？」

夷「木乃香の場面は……」

作「指が勝手に……シリアルにしまったんだ!!」

夷「うつせい!! つうかてめえがゲームするのがわるい!!」

作「いいじゃねえか!! スパロボ、AC、アニメ、仮面ライダーのDVD観賞! つうか設定忘れ過ぎワロタ」

夷「おいおい、頼むぜ」

作「グロンギ語読めないんだがどうしたらいい？」

夷「……どうでもいいわ!!」

作「そういえば今回のハリセン！」

夷「それと木乃香のハンマーな、マジで本編出しゃがった」

作「主武器だから」

木乃香「マジカル 木乃香ちゃんをお楽しみに!!」

夷「帰れ！ それと似合わないからやめろ、今回のハリセンはいつもお世話になります皐月二八様」

作「それと武器の事や、贈り物ありがとうございます、リンドウ様
!!」

夷「はいはい、で今回のハリセン、いい出来だから使ってみたんだが……言うネタ武器だよ」

作「そして予想以上に面白かった轟ピン、これは使える!!」

夷「そろそろ大戦期終わりか？」

作「……まだまだ、これからどうしようか。原作に入るのが三十話くらいになりそうな気が」

夷「ちなみにこの小説の終わりには？」

作「ハッピーエンドッ！！！！これしかない！！！！」

夷「ま、まあそうだな」

作「正直、鬱話？ シリアス？ はっ、そんなの読むだけで十分、各自信はサラサラねえーよ、と言うのが作者クオリティ」

夷「駄目だこりゃ」

作「それにネギアンチ？ むしろ擁護してやんよ！！！！」

夷「薬味アンチって書かれてるが」

作「まあ、今回は真面目に書くぞ？ ネギってのは悪くも良くも頭が良すぎたんだよ、賢い子……聞こえはいいが、同時に危険もある。夷、子供の一番いいところはなんだ？」

夷「やっぱり元気なところか？」

作「正解は染まりやすいんだよ、子供は純粹だからな、洗脳しやすい。俺だって十歳まで女にはあれがついてると思っただしな」

夷「おい！！ 下ネタ禁止！！」

夷「ごほん！ まあ原作のネギはとにかく問題行動が多いだろ？ けれど……怒られてるか？」

夷「注意だけで親身になつて注意してねえな、大人が」

作「『英雄の子供』アリカ姫の頭とナギ譲りの魔力……最高だな、むしろよく育てば最高の魔法使いが誕生する、多分ちゃんと修行すればナギに勝てるだろうな」

夷「うーん、子供が親に勝つのは当たり前だろ？」

作「なんだが……周りの大人が最悪すぎた。英雄の子供だから何でもできる、そんな感じだしな。肝心の教育に居る筈の親がないことが致命的すぎる」

夷「原作読んでないからわからんが……親いないのか？」

作「俺も最近読んでないからわからないが……ナギもアリカ姫も行方不明、多分死んでないと思うがな。つうか父親、母親居ないってどういう事だよ、子供見捨ててまでやることがあるのか？」

夷「知るか、つうかあのバカならやりかねない」

作「……もしもだ、二人がきちんと子育てしていれば、年頃の息子でイギリスで平和に暮らして　ねえか、連合に邪魔されるな、つうか外道過ぎて連合アンチだけは外せねえ。つうかこの国さえなければネギもナギもアリカ姫も幸せに暮らせたらうに。いつの時代も老害は邪魔をする、とっと死ねばいいのに」

夷「落ち着け、まあ何歳なんだ？　そのネギってのは」

作「十歳の子供だ」

作「では次回予告いってみよう!!」

夷「突然?!! ま、まあ、では次回「最強はルビをふるとバカになります」ってなんじゃこりゃあああああああ!!」

作「では次回も」

夷「お楽しみに! ちえりお!!」

|||||楽屋内

刹那「このちゃんだけいいな、このちゃんだけいいな、このちゃんだけいい(ぶつぶつぶつ)」

素子「私の出番、出番出番出番出番」

月詠「夷はんの女装、女装女装女装」

千草「ウチの出番は少ないが出たで!!」

ヒロイン全員「パルパルパルパルパルパルパル」

フェイク「カオスだ……混沌の聖地だ」

ルシフェル「私にも出番は」

出演者全員「「「「「お前の出番ねえから!」」「「「「「

ルシフェル「ひどすぎる」

作「あれ？ ドウシテコウナッタ？」

時系列&魔王さんこんにちわ(前書き)

時系列が複雑になって来たと……要望があつたので簡略的に作ってみました。

色々と無計画なので変なところもありますが……それでもよければ、それではどうぞ！

あ、それとこれにはこの小説二十話記念の閑話が書かれていますので、あしからず。

時系列&魔王さんこんにちわ

・2005年

夷、自身の世界で事故によって死亡、その後ルシフェルによって体ごと天界に誘拐、実験され魂ごと消滅しかける。その前に神が救出、神力で無理やり注入して何とか留める。この際、魂の輪廻転生を司る部分が消失、神は魂に細工をし転生者としてネギま！の世界に（夷に予備知識なし）転生。

・1988年

原作から十五年前、夷が赤ん坊の姿で転生、偶然通りかかった、近衛詠春、近衛桜に拾われる。このとき、養子となり名前を近衛夷に改名。

・1991年

転生三年後たち、自身の異常性と魔眼を認識しながら木乃香の兄として生活していく、このときにすでに実力はネギま！の強さ表では500程度、この頃に刹那と会う（噛み癖刹那が思いつたのはなぜだろうか？）

・1993年

転生生活五年目、魔眼がパワーアップしていることをorzしながら、仮面ライダーの力を主体に戦っていた。魔力、気、さらにとある理由で妖力も使えるようになっていた。このときに原作の木乃香と刹那の事件が発生、夷がカブトで介入し事なきを得る。そしてその数日後、夷は記憶転写装置を使って虚刀流を覚えるが……刀が使えない体になるが見稽古で何とか持ち直す。さらに零崎に覚醒する、このとき虚刀流と零崎を封印することを決意する。

・1994年

夷六歳、木乃香と刹那、素子が麻帆良に入学するために色々準備する。そして鶴子との修業がトラウマになっていた。最近、前世である小説の人物、ぶつちやけると『両儀式』に似てきたことを悩んでいた、ちなみに髪型はポニーテール。麻帆良の世界樹の解析に成功、神木だったせい、それとも自身の神力が覚醒したのか不明だが神力に目覚める。この頃から両儀式のせいでとばかりを受けまくるせいで、嫌いになった。

1996年

夷八歳、もはや人間を超えた力を持った夷は日々修業、たまにネタ武器、仮面づくりに勤しんでいた。零崎化の影響で人殺しをしかねない夷はなんとか修業用シュミレーターと妖怪を殺すことによつて殺人欲を満たしていた。偶然にルシフェルに襲われている千草を助ける、またもや両儀式に関することなので本気でキレたらしい。そして月詠との試合で当時、まだ未完成の黒式を使用して勝つ、その時に月詠の道場の師範代に義息子の件をカミングアウト、詠春に破門され、鶴子&素子姉妹からありがたい奥義十連続を受け、全治十か月&刀が握られなくなりました。数か月後、神明流としての初任務（妖怪の駆除は自主参加）としてなぜかクルト・ゲードル、オスティア総督という重要な人物の護衛を任される。失敗したが木乃香やら色々な人物からの折檻から逃げる途中に神様に会う。そこでルシフェルの殺害を依頼される。数か月後に、神様のサポートもありなんとか過去に飛ぶ……がなぜか四十年前に行ってしまったらしい。

・1960年

なんとか約四十年前に到着した夷……いや、式は、そこでエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル、まあ『闇の福音』と出会った。そこで戦闘し、勝利するとなぜかエヴァのお気に入り。その後共に旅をするが、式はそこで零崎の制御のため解放する。別荘を作り、

零崎と力の制御に七年くらいかける。途中賞金に目のくらんだ者たちや軍を壊滅させながら京都まで行くと、まだ幼い頃の父親、詠春と会う。一晩の宿を取るはずだったが、なぜか関西呪術協会が攻撃、戦闘に陥る。結果だけ言うと圧勝した式はなぜか復活したりヨウメンスクナノカミを『体』だけ完全に消滅させた。その後は割愛するとして……なぜかエヴァと結ばれパクティオーした。

・1978年

数えて三百年程度、平行世界に手を出した式、たまあに働いていたが『週休日六日』を明言しており、弟子の修業や千草との遊び、エヴァとのデートくらいしかやっていないダメ人間だった。気まぐれに麻帆良に親書を届けると、次期英雄であるナギ・スプリングフィールドと戦い、これを圧勝する。

・1980年

詠春が桜と結婚……しかし初夜に逃亡した、夷は適当に帰ってくるだろうと高をくくっていた。

・1981年

後に大分烈戦争と呼ばれる戦争が勃発、急きよ魔法世界に突入した。するとどこかで見たことあるキャラクターやその技を使ってくるチートな転生者が、式とエヴァを襲った。適度に撃退、あるいは地獄に叩き落しながらオスティア回復作戦に乱入、どさくさに紛れてアスナを誘拐した、そのとき詠春と再会、なぜか紅き翼と行動を共にする。

・1982年 いまここ！！

新年祝つての鍋パーティーにラカンが乱入したが、これを蟲ピンで串刺し、しかし腹が鳴ったので鍋に誘うと（傷は気合で治した）意気投合し、この場面で加入しない筈のラカンが紅き翼に加入した。

鍋パーティーが終わった直後、フェイクからの情報により、千草の両親が転生者に襲われていると伝わり、すぐに向かったが間に合わなかった。このとき夷は本気を出して、その転生者を空気に変えて能力をすべて封印し、永遠に生かすと言う罰を与えた。その後、失意に吞まれて一度は死のうと考えるがなぜか未来に居る筈の木乃香が現れ、木乃香に説得(?)されて、また戦い始めた。そんでもってグレートブリッジ奪還作戦をハリセンだけで攻略し……ガトウと出会う。

もう一つの歴史

1996年

雪の日の夜、イギリスのとある村がメガロメセンブリア元老院が召喚した魔物に襲われる。

しかし、三人の魔法使いが撃退し、被害は零。

・1997年

木乃香が小学三年生の四月、キヨウ・スプリングフィールドが木乃香のクラスの担任として配属された、このとき齡十三。

今回の閑話……1996年、イギリスのウェールズのとある村のお話。

|||||とある田舎

？「見てろよ……千の」

？「この馬鹿者おおおおおおおつ！！」

おおつ、今日も母上の平手打ちが火を噴きやがった。あ、親父がテレビで見た……えーと、フィギュアスケートの三回転ジャンプみたいに吹き飛んだ。

？「ねえ、兄さん……父さん大丈夫かな？」

？「ネギ？ お前はあんな風になるなよ？」

ナギ「うん、キョウ兄さん！」

俺の名前はキョウ・スプリングフィールド、隣にいるのが今年で三歳になる弟のネギ・スプリングフィールド。向こうで夫婦魔法合戦しているのが、父親のナギ・スプリングフィールド、母のアリカ・スプリングフィールドだ。そして俺とネギは俗に言う『英雄の息子』らしい、自覚はないんだがな。

目の前では地面がえぐれるほどの衝撃波が……あ、また山の表面削って一年前みたく吹っ飛ばしたいのか？　ウチの親はありとあらゆる面で最強すぎる。

まずは魔法、二人とも最大火力なら山ひとつは吹っ飛ばせるらしい、これでも衰えた……とか抜かしたからびっくりした。次に身体能力、言わずがな、こちらも二人に組手してもらったが最初は母さんに地面にねじ伏せられたときはびっくりした（その後泣き顔で抱きしめてくれたの嬉しかったが）料理は……最悪だった、最強の破壊料理を作ってくれるよ母さんがな！！　まあ王族だったし、仕方ないが

ガサツな父さんが早起きして家族全員のご飯作る姿はいつも慣れない。まあその他、色々あるが……俺の事も語ろうか、俺は世にも珍しい魔法無効化能力マジックキャンセルを持つてるらしい。母さんはこれについて妹と少し溝があるらしい、けど定期的に文通はしてるらしいがな。名前は……アスナ叔母さんだったかな？ いまは麻帆良って場所に居るらしいけど……日本だっけ？ あの国の着物って服は好きだからいつも着てるんだが……ああ、はい、母さんが鼻血出しながら写真撮ってたのは少しトラウマだよ。

ナギ「だああああああああつ！！ キョウだって十一だ！ 別にいいだろうが！！」

アリカ「アホかつ！ 我が子を戦場に送りたいのか？！ もっとこの子には視野を」

ナギ「すべてぶっ飛ばせばいいんだよ！ そのうち二代目千の呪文サウゼントマスターの男オトコって言われるからな！」

アリカ「違う！ この子は私のように人生を無駄にしてほしくないのじゃ」

キョウ「あ、あのお二人さん？」

ナギ「攻撃は最強の防御だろうが！ この石頭！」

アリカ「知識こそが最高の武器じゃ！ 鳥頭」

プツン 俺の中の何かはじけた、こんの~~~~~

~~~~~!!!

キヨウ「年がら年中発情夫婦があああああああつ！！」  
フルグリエンス  
の暴風」

テンベスターズ・  
雷

ナギ&アリカ「ハッ！ つてま、ま七 「」

ちゅどおおおおおおおおおおおおん

ネギ「……僕も兄さんみたいなの、立派な魔法使いになる！」

ナギ&アリカ&キヨウ「「ネギ……お前だけは良い子に育つてくれ」」

家族全員の気持ちが多くなった瞬間だった。

その後、ネギと遊んだり勉強したり……ああ、そういえば、俺は魔法学校に行っている。徒歩でな、意外と体力はあるんだよなあ、母さんから王族の知識や能力制御、父さんから魔法と日常生活の知識を、あれでも生活知識はあるからなあ。

ネカネ「キヨウ！ 今日は何して遊ぶの？」

アーニヤ「あんた……ネギに無茶なことさせてないでしょうね！」

あー、今は遊んでいるところだ。俺の親戚筋の姉である、ネカネ・スプリングフィールド、そしてこちらを睨んでくるのが、ウチの弟に絶賛恋しているアンナ・ユーリエウ なげえ！ アーニヤだ。二人とも家族みたいなもんだ、この村には老人ばかりで、子供があんまりいないからなあ……仕方なく遊ぶのがこの四人になってしまっ、まあ、俺は一人で本読んだ方が楽しいしな。それになにか足りない気がするんだよなあ、なんか……大事な物が無くなった気分？

まあ関係ないか、今の俺は幸せだしな。

キヨウ「しねえよ、つうかお前こそ、弟を無理させるなよ？ 俺はあと少して卒業だしな」

普通の成績しかとってないしな、ウチの魔法学校では十二で卒業だしな。今年の三月で卒業、試験受けて、その後は……どうしようか？ つうか考えてないな、魔法世界には行かねえし……母親を「災厄」とか言ってる奴等の元なんて行くかよ、糞が。

ネギ「どうするの？」

キヨウ「だー！！ お前らで考えろ！！ つうかネカネ、てめえ俺より年上のはずだろ?!?!」

ネカネ「キヨウ？ 年上への口の聞き方はそうじゃないでしょ？」  
(黒い笑みで)

すみませんでしたあああああああああ……！ 可愛い、つうか可愛い、母さん並に可愛いです……！

キヨウ「あー、はいはい、どうせ俺は英国紳士失格ですよ」

なーぜか、誰にでもため口になる……なんて？

アーニヤ「早く決めなさいよ……」

キヨウ「うっさいシンデレ、昔見たく『キヨウお兄ちゃん』で良いんだぞ？」

アーニヤ「ぶっ！ な、何言ってるばしょあぼあぼ」



キョウ「言葉ちゃんと喋れ、バカ野郎」

アレだ、この前見た……あにめって奴で、こういうのをツンデレと言うらしい。日本ってすごい国だよなあ、ロボットがいたり、超能力者だっけ？ そんなのいたり……すごいなあ。

ネギ「父さんみたいになりたいなあ」

キョウ「あー、ネギ？ 確かに憧れなくなるのはわかるが……やめとけ」

にしてもだ、ウチのネギの性格は温厚、もしくはヘタレだ。とてもじゃないがウチの両親から生まれたなら、もっと荒い性格になってもおかしくない。ウチの母さん、父さんの性格から、俺みたいなのが生まれてもおかしくないんだが……ドウシテコウナッタ？ あれか、俺が性格持ってたのか？ わからねえなあ。

ネカネ「それじゃ、雪なげとかは？」

キョウ「第二十次雪合戦を始める気か？ またネギやアーニヤが雪に当たって泣き出すぞ？」

アーニヤ「魔法を見せるとか！」

キョウ「どこのバカが魔力暴発させて、林焼いたんだよ……没」

ネギ「紅き翼」

キョウ「両義式が嫌いだから……没」

ネギ「兄さんが嫌いなだけじゃないか」

キョウ「理不尽だろ？」

ネギ「うん」

キョウ「これが兄の特権だ、弟よ」

ネギ「兄さんのバカあああああー！」

大戦の英雄、両義式。ある人曰く「ハリセンで戦艦を叩き落す奴」  
「向かってきた軍勢にくしゃみ一発で吹っ飛ばす奴」  
「何やら棒状の何かで帝国の障壁をぶち破った」  
「無類の仮面好きで戦いのたびに仮面が変わる」  
「雌雄同性である」  
「お姫様を誘拐した」  
「ただのビニールテープで鬼神兵をバラバラに」  
と数え上げるとキリがなく、コイツ人間かと思う内容ばかり、さらに俺と顔がよく似てるらしい。一回だけ大衆に顔を見せたことがあるらしいが、そのとき絶世の美女、または美男子と言われたらしいが……真偽のほどはわからん、唯一知ってる父さんに聞いても「お前とかなり似てる奴」だけで終わる。謎だらけだが、家にそいつが使っていた鋼糸がある、恐ろしい切れ味で鉄も切り裂くほどだ……なんつうもん使ってる。

キョウ「戯言はここまでにして……ヘクシヨン！」

ネカネ「あら？ 吹雪いて来たのかしら」

アーニヤ「えー、まだ五時くらいなのに……」

キヨウ「あれだ、これ以上遊ぶなど、神様からのお告げだ」

ネギ「神様なんていないって言ってるのに？」

キヨウ「……誰かが言ってた、俺が望めば神様だって協力する、つてな」

ネギ「どうせ、自分でしょ？」

まあ戯言なんだが……マジでやばそうだな、意外と遠くで遊んでるんだがこのままだと夜くらいに吹雪くな。ネカネもそう思ったのか、アーニヤを説得する。今日は結局、紅き翼こっししかできなかったな……俺が両義式役なのは当たり前なんだが、ネカネがラカン役なのは悪意を感じるんだが？

……で村に戻ったわけだが、なぜか悪魔に囲われました。

悪魔「ウゴクナ？ ウゴク」

キヨウ「テンベスタルグリエンス雷の暴風！！」

まあ雷の暴風でぶっ飛ばしたわけだが……ヤバいな、村では非常用の結界が発動してるし、もしもの時に両義式がやったらしいが、まともに戦えるのが父さんと母さん、それとネカネの親代わりのスタンのじじい、そして俺、日頃から英雄と戦っている俺をなめんな。

ネギ「う、うう、ぼ、僕のせい？」

キョウ「大丈夫だ、俺が追っ払ってやる」

途中ネギが色々寄り道したので今は七時程度か？ 多分、自分が早く行ったら……って思ってるんだろう、いや、みんなで真冬の湖にダイブするのは仕方ない、アーニヤの魔法が役に立つときが来るとは……

キョウ「くっ！ 魔法の射手…連弾・光の十七矢！！」

にしても雑魚だが下級悪魔は数が多いことに定評があるからな、俺が魔法無効化マジックキャンセルを持っていても、全員を守るわけじゃない、三人を巻き込まないために威力を落しながらやってるからな、いずれは追い詰められる。魔力は腐るほどあるからな、威力が低いのなら任せろ！！

悪魔「ススメ！！ アイテハコドモヒトリダ！！」

キョウ「なめんじゃねえ、父さんが来るまで持ちこたえれる！」

アーニヤ「あ、危ない！！」

おっと、俺の付近まで来てた悪魔が居たのか、畜生こつ気配を消すのがうまい奴はきつなあ、この数の悪魔なんてこの辺じゃ出ない筈……術者が居る筈だが、この数出すには大量の魔力を使ってるはずだ、最悪死んでる場合が……。

ネギ「兄さん」

キヨウ「らあああああつ!!」

悪魔「ホントウニコドモカ?!」

キヨウ「子供は子供でも、英雄の息子だ、この野郎!!」

ナイフを持ちながら応戦する、このナイフ『七つ夜』ってんだが、俺の魔法発動体でもあるんだが……切れ味やべえ、触れただけでバターのようになれる。切った感覚に吐き気を覚えるがな。

ネカネ「ご、ごめんね、キヨウ」

キヨウ「そのまま障壁を持続させる、無いよりはマシだ!」

ネカネは唯一、俺以外に魔法がまともに使える人物だ。アーニヤやネギはあくまで、基本だけだ。三歳で使えたらこわいよ! 俺は使えたがな。

つつかあと三十体かよ……仕方ない。

キヨウ「ケノデイトス・来れ アストラブサトード・テメト、虚空の雷 ディオス・テュコス 薙ぎ払え 雷の斧!!」

父さんの得意魔法である、まだ魔力を制御しきれていないので詠唱を唱える。千の雷も使えるがここら辺一带を吹っ飛ばしそうだから怖い。

雷の斧は三十体の悪魔を消滅させた、後は余剰魔力が腕にたまっていたが……どうやって放出するか。

悪魔「バカガタタカイデ、キヲヌクナド!」

キヨウ「雷の拳!!」

余剰魔法を解放して即席の魔法……というよりも、打撃技をする。戦いの中じゃこんなお当たり前だし、たまに足にためてスタン効果を付属させた範囲攻撃をする……それを気合で治す、父さんは人外だと思っ。

ネギ「お、終わったの？」

アーニヤ「み、見たいよ？ こ、怖くないのネギ」

ネカネ「そんな事より村に入りましょう、ここより安全よ」

……やばい、いや悪魔もそうだが、この場所がだ。何か近づいてくる、ありえないほどの魔力が……存在が、本気の俺でも勝てないことはわかる、まさか……魔王クラス?! ……人間が勝てる相手じゃねえぞ、とりあえず三人には悪いが村に逃げてもらおうか。

キョウ「三人ともよく聞け、早く村に行って父さんたちを呼んで来い」

ネギ「な、なんで?! 兄さんも行こうよ!」

ネカネ「なら私も残ります、キョウだけ」

キョウ「お前が三人を守るんだ、俺が死んでもだ」

アーニヤ「な、何言ってるのよ! 不吉なこと言わないでよ!!」

あー、辛気臭いのは嫌なんだ。つつかさつきから見てるな……早くしないとやばい。俺が気付いてるのがわかってるのか? さすが魔

王様……泣けるね。

キョウ「さっさと行け、正直お前らがいると本気だせないから」

ネカネ「……わかったわ」

ネギ&アーニヤ「ネカネお姉ちゃん!!」

ネカネ「でも約束するわ、すぐネギさんたちを呼んでくるわ!」

おいおい、なんか死亡フラグがビンビンなんだが……やめてくれよ、つつか泣くな お前らは笑っててくれよ。それだけが俺の願いなの。

キョウ「はいはい、期待して待ってるぜ」

ネカネ「ツ!! ……行くわよ、ネギ、アーニヤ!!」

ネギ「兄さん、兄さん!!」

アーニヤ「お兄ちゃん!!」

あららら、アーニヤ……帰ったら弄ってやるつ、つつか手を握りながら身体能力強化して走って行ったな、世界狙えるな……さて。

キョウ「出てこいよ」

?「うん、やっぱり人間はいいね……見ていて面白い」

キョウ「まあ、そつだよな、魔界の王からしたらどうなの?」

足が震える、手から七つ夜が零れ落ちそうになる、しかししっかりと目の前の女を見据える、その顔には笑顔……しかし目が笑っていないし、俺に明確な殺意をたきつけてくる。体中が重い……殺意に吞まれてるよ。

？「……そして憎たらしいね、何が楽しいやら」

キョウ「嫉妬か？ ああ、理解……レヴィアタンか」

レヴィアタン「うん、そうだよ？ 僕はレヴィアタン、嫉妬を司る悪魔であり魔王だよ」

キョウ「俺はキョウ・スプリングフィールド」

最悪だ、昔読んだ旧約聖書には。ベヒモスが最高の生物と記されるに対し、レヴィアタンは最強の生物……つまり獣として書かれているが、悪魔としては最悪のどんな悪魔抜いても通用しない……最悪の悪魔だよ。さらに悪魔の9階級においてはサタン、ベルゼブブに次ぐ第三位の地位を持つ強大な魔神……簡単に言くと人間じゃ勝てねえ、ってわけだ。

レヴィアタン「にしても君も逃げればよかったのに」

キョウ「逃げたら殺すだろ？ つうか、魔王相手に逃げ切れるわけないじゃん」

はあ、どこのどいつだ、こんな奴召喚したの……幸い、憑依のようだが、力がヤバイのは変わらない。つうか本気だったら今生きてないしなあ。



レヴィアタン「……にしても君を見たことがあるような」

キョウ「気のせいだろ？ 人間の子供が悪魔の悪魔、魔王に会えるわけないじゃん」

レヴィアタン「いやいや、意外に僕たちは何度か人間界に入ってるよ？」

キョウ「マジですか？」

レヴィアタン「嘘だよ」

キョウ「ダヨネー」

あー、やっぱやめない？ 俺死ぬよ？ 絶対死ぬよ？ 魔王に勝てるわけないじゃん。

レヴィアタン「じゃあ死んでもらおうか……ちなみに言っておくけど」

キョウ「死ぬ気はないけどなー、で何？」

レヴィアタン「僕、君に一目ぼれしたから逃がしてもいいよ？」

キョウ「あっはっはっは、本当の姿見せたらいいよ。つつかそれ嘘だろ？」

レヴィアタン「……よし、殺そう」

キョウ「ねえ！ どっち！！」

まずはレヴィアタンは水を体の周りに渦巻かせながら、突っ込んでくる。それを全力で避ける、当たったらどうなるかわからん。そのまま、水を飛ばしてくるので魔法の射手を全力で撃ちながら相殺する。俺は本気の一撃を出すために精神を集中させる。

レヴィアタン「その年でこの僕と戦えるなんてすごいね、すごく憎たらしいよ」

キョウ「嫉妬乙」

水を凝縮するレヴィアタン、俺はすぐに回避する。そして俺の体にあつた場所に高圧の水が後ろの木を貫通する。本で読んだなあ、たしかウォータージェットとか言ってたっけ？ 圧力かけて水に切断できるほどの力を持たせるんだっけ？ まあ「切る」というよりは「水流の当たった部分を吹き飛ばす」って方がいいのか？ まあ人体に当たれば……言わずかな、えらいことになるな。で、なぜ0.1mm〜1mm程度のはずだが……あきらかに10cmくらいの穴が開いてるんですが、レヴィさん、今度からめんどいからレヴィって表示ね。

レヴィ「さつさと死んで、僕の配下になれよ、憎たらしい」

キョウ「めっちゃ怖いんですが、つつかマジですか?!」

レヴィ「ちなみに処女だよ？」

キョウ「しょ……じょ?」

なんだろうか？ あれか、なにかしてない女って意味かな？ 生きてたら母さんに教えてもらおう。つうか死んだあとは少し安心かもな、悪魔に永久就職とかマジラッキー、んなわけあるかああああああああああ！ あと七十年は生きるぞ！！ 嫁さんもらって幸せに生きてやんよ！！

レヴィ「この年じゃ、まだわからないか……まあいいや、こっち来たら教えるよ」

キョウ「いや、まだ死ぬ気はない」

レヴィ「……死んで？」

キョウ「可愛く言っても駄目だぞ？」

レヴィ「隙あり」

ガツ？！！ 後ろに衝撃が？ 振り向くと……レヴィが目の前に笑いながら立ってるんだが、それに腹が熱い？ なんで？ OH、腹から手が生えてるよ。

キョウ「ガハツ、分身？」

レヴィ「僕は一人に憑依したとは一言も言っていないよ？」

キョウ「そ、りゃ、そうだ、な」

痛い、頭がクラクラする、あれだ内臓が抉られてる。なんとか生命活動はできるみたいだけど……息ができねえ。

あー、なんかぼやっとしてきた。これが走馬灯？ って誰だ？

？『お前の力……そんなもんか？』

いや、知らんがな、つか全力ですよ。魔力高めてるが……もう意味ねえだろう、これ。

？『諦めんなよ、死を覚悟した今なら見える筈だぜ？』

何が？

？『死線だよ、ほらうつすらと見えるだろ？』

あ、ホントだ、線ポイのがレヴィから出てるのがわかるよ……やっ  
たねキヨウ！

？『おいバカやめろ！ はあ……まさか十二年で死にけるなんて  
な、まあいいや』

おーい、話が見えないんだが？

？『いい加減、起きろよ……零崎虚識』

その瞬間、カチリと何かがはまる感覚がした……ああ、そういう事  
か。

俺 殺人鬼なんだ、と理解した。次の瞬間、七つ夜  
で腹から出てる腕を刺す、それは死の点と呼ばれる場所。

レヴィ「な、何をした?!」

？「あーなんだろうな」

レヴィ「その眼……魔眼なのか」

？「え？ ああ、そうだな……なんだろうな」

視界が変だ、何か青みがかつてる様な……そんな視界と黒い線と黒い点が見える。使い方が自然と頭に入る。ゴポリと腕が抜かれ、血が噴き出す、不思議と恐怖がない。むしろ……興奮する、血を見て喜ぶ変態になったのか？

レヴィ「その眼……直死の魔眼か！」

虚識「みたいだな、じゃあ改めて自己紹介。俺の名は零崎虚識、ただの殺人鬼だ」

俺はもう一人のレヴィの全身の死線を切り裂く、すると細切れになりバラバラと崩れていく、どうせ俺は御払いもできないしね、憑依された方には残念だけどここで死んでくれ。初めて人殺したのに……まったく罪悪感を感じないんだが？

レヴィ「……最高、本当に惚れちゃった」

虚識「殺されたのに？」

レヴィ「どうせ少し魂を分けただけだし、君は殺してないでしょ？」

虚識「次は殺す」

レヴィ「僕、ゾクゾクしてきたよ」

虚識「変態」

レヴィ「殺人鬼よりマシ、アスモデウスだったらもつとひどいよ？  
この場で脱いでたかも」

……ただの変態だろ？ そりゃ……はあ、なんか零崎になったせい  
か、この世の理不尽が楽しく感じてるよ。うわー変態？ 変態なの  
か?! つつか変態だよ。

虚識「んじゃ、死んでくれ」

レヴィ「ま、仕方ないね……と言ったと思った？」

レヴィは俺に向かってウオータージェットを発射する。それを七つ  
夜で防御しながら近づく……うん、水しぶきが気持ちいいな。

レヴィ「反則」

虚識「存在自体が理不尽な奴が言うなよ、んじゃ消える、千の雷」

俺は今までためた魔力を放出する、そのまま腕から出た千の雷はレ  
ヴィを消し去る。消える前になんか口動いてたよなあ……なんだっ  
け？

レヴィ『今度は本当の僕で行くよ？ キヨウ』

あー、さらなる死亡フラグだな……つつか血の出しすぎてヤバいん  
だが、あー、ぶつ倒れるよこん畜生。とりあえず、残った残りかす  
の魔力でとりあえず治療魔法を……さっきの威力ありすぎたなあ、  
後ろに会った山消し飛んだなあ。



そして時間が少し進んで、三月の終業式。

ナギ「息子の卒業式だ!!」

アリカ「ハアハア、着物いいな、着物」

なんだ？ あの母親のような物……ちなみに俺の母さんは認識障害の魔法のおかげで正体がばれてない、ばれたらやばいかな……、つうかなんでほかのみんなはスーツなのに俺だけ着物?!!

ネギ「よく似合ってるよ!」

ネカネ「ハアハア、着物…… G J!!」

アーニヤ「私よりも女っぽい」

アーニヤアアアアアアアアアアア! つうかネギ、ソレは男として喜びたくねえ! ネカネ? ネカネだよな?! つうかキヤラが崩壊しまくってる、俺の幼馴染を返せええええええええええええええ!! ちなみに今日の服装は白の着物に赤い帯……うん、周りの男子がうざすぎる、目線がやばい、俺はおとこだつづの! つうか女子「さすがお姉さま!」とか「その目で思いっきり罵倒して」とか漏らすな!! てめえら十二だろつがあああああああああああ!!

校長「メルディアナ魔法学校卒業生代表! キョウ・スプリングフ  
イールドちゃん」

キョウ「死ねや、じじいいいいいいいいいいいい!!」







## 時系列&魔王さんこんにちわ(後書き)

作「今回はラジオなし！ 次回「最強はルビをふるとバカになりま  
す」、女バージョン式をお楽しみに！！ それではちえりお！！」

**最強はルビをふるとバカになります（前書き）**

変なテンションで書いたので……今回原作崩壊が多いです。  
今回、書き方を台本形式から普通の書き方に変えました。

それとアリカファンの皆さん………すみません、一番キャラ崩壊起こ  
しています、って前回の閑話でいい忘れてた。

それではどうぞ！

ナギ「待てや！」

なに？ 始めるんだが？

ナギ「俺の主人公の小説書け！！」

だが断る。

ナギ「なんでだ！！」

ぶっちゃけると後半でマジの主人公してもらっから……心配するな。

ナギ「我が世の春が来たああああああああ！！」

声優ネタすんじゃねえよ、では本当にどうぞ！

最強はルビをふるとバカになります

「協力してくれないか？」

「だが断る」

「ど、どうしてですか?!?!」

なぜか、タカミチとガトウに頭を下げられるが……こちらら迷惑なんだよ。

「めんどいし、正直なんで俺がこの世界を救わなくちゃなんない。とりあえず、この世界の住人で頑張れよ」

「それが無理だから頼んでいるんだ!! 超越者!! あなたならできるだろう!!」

「……あのなあ、俺は全知全能の神じゃなんだぞ?」

『全知全能のワシと殴り合っているかの』

『黙ってる、じじい（ゼウス）、ひげ全部抜いて天界に突き刺すぞ』

冒頭からすまない、式ですたい。

なぜか家の場所を特定してきたガトウとタカミチ……いや坊主だな、めんどい。俺の家を見つけたその根性は認めてやろう。なんだっけ？ 完全なる世界？ 知るか!! 情報整理はフェイクに任せてんだよ、俺は週六日休業なんだよ、働きたくないでござる。つうか三百歳のジジイになに期待してやがる。なんもでねえよ!! あ、お

年玉か？

「わからないのか?! 世界の危機なんだ!! 頼む」

「お願いします、あなたしかいないんです!!」

……あのさあ、子供には弱いんだが、仕方ないなあ。

「どうするんだ? 式」

「わーった、わーったよ!! やりますよ、やらせていただきますよ、このやるおおおおおおおおおお!!!!」

「ダイジョウブ? シキ」

「もえちきた、アスナ抱きしめていい?」

「ウン」

あれから一か月がたった、今はアスナを抱きしめている……あー、癒されるわー。今は身長(100cm)を縮めてアスナと同じくらいにたまりにエヴァにもしてもらっている……時々、そのまま食われるが。

「ダイジョウブ?」

「もーまんたい、でも疲れた」

あれから俺は本気で調査に乗り出した、所々で脅しを使ったり、性転換して誘惑したり、金で買ったり……あー、ダンテエ、お前の気持ちがよーくわかった。すまん、今度行くときはストロベリーサンデーとトマトジュース持っていく。

「シキ、カミノケタバナイデ」

「モフモフ」

「……」

「モフモフ……御馳走様でした」

「……バカ」

あれ？ アスナが少し怒ってる様な……まーだ弱いけど感情が戻ってきてるのかな？

この一か月でわかったことと言えば……まあ少しだ、。

とりあえず『完全なる世界』について かなり昔から活動してるらしい、名称はコズモエンテレケイア、めんどいから完世な、作者も長くてめんどいと言ってた。それで調べてく内にわかったが、この組織は向こうの世界……つまりは俺の世界で言う、死の商人みたいなものだな、下っ端の構成員がマフィア、政府の役人など戦争で得をする者達ばっかだったな。マフィアは『零崎』で皆殺し、政府の方は魔眼で操ってる……自分の魔眼が万能になりすぎて怖いんですが 戯言だけだな！

幹部の情報はかなり少ない……と言うか無いに等しい。あっても『十代くらいの子供』『仮面を被ってる』『小柄で少女のようでもあり、老婆のようでもある不思議な人』やら……おい、仮面被った奴







「はい！」

そう言つて元気よく走つていくタカミチ……ちなみにガトウとタカミチは師弟の間柄だ。……にしてもだ。

「難儀だな、まさか生まれつき呪文の詠唱ができない体質、なんて奴がいるとはな」

「だが詠唱できないだけで、使えないわけでもない」

「どうして式、まさか……虚刀流でも教える気か？」

「その通りだ、エヴァ」

ここで俺は身長を元に戻す、ガトウやみんなはツッコまない、俺の突発的な行動には慣れてくれたらしい。うーん、驚くエヴァの顔が結構好きなんだが……

「しかし、あれは常人が使える物なのか？」

「質問なんだが……その虚刀流と言うのは？」

「『虚』しい『刀』の『流』れと書いて、虚刀流。詠春によく奥義をぶち込んだなあ」

「……（ガタガタガタガタ）」

「聞くところだと、剣法か？　しかしあいつには剣を持たしたことが」

「虚刀流は刀を使わない剣法なんだ」

「はあ?!?!」

ガトウが口を大きく開けて驚く、まあ普通の反応だな。むしろ俺の方がおかしい、これでまともだと思っただらおしまいだよなあ。

「聞いて驚くなよ？ こいつはその虚刀流で鉄を斬るからな？」

「……人間か？」

「大半やめてるな」

コジマ粒子、ゲッター線、タキオン粒子、ムアコックレヒテ機関、地味にメタトロン、その他もろもろのエネルギー吸収して動いている時点 いや人間の形保ってる時点でびっくりだよ、いやゲッター線はなんか次元の壁越えたらエンペラーと出会って、タキオンはカブトから……生身でハイパークロックアップできちゃった まだ過去、未来はいけないがな。ムアコックレヒテ機関？ 誤って吸収したぜ、メタトロンは……うん、仕方ない、木星行ったらあったんだもの。

にしてもだ、俺の体ってどうなってるんだ？ いやマジで神力のおかげか？ なんか体内で生成されてそうだから怖い、俺って何にカテゴライズされるんだ？ 人間？ 魔王？ 神？ それとも化け物？  
最後が一番当てはまるぜ。

「……マジで？」

「マジだ、《みんなで渡れば怖くない、ただし丸太橋》みたいになっ

「！」

「不安しかねえよ!!」

「ガトウ……この程度でツッコんだら、お前の胃はストレスでマツハだ」

「orz」

まあいいや、とりあえず外に出てるタカミチ少年の元に行くかあ。

「おい、タカミチやーい」

「式さん？ どうしたんですか？」

「ああ、お前に俺の技術を教えようと思ってな」

「ええっ?! 良いんですか!!」

「駄菓子菓子だかしかし」

「なんか違うようだな……」

「なめると速攻で死ぬから 死ぬ覚悟はあるか？」

俺はほんのちよっぴり、まるで牛乳にこれでもかと甘味を入れた感じで甘くしてから、砂糖百パーセントのケーキを出す感じで殺気を出す、こうでもしないと殺気で殺しちゃうからなあ……ダンテコッ

タイ。

「ッ?!」

あー、殺意慣れしてないところなるよなあ……まだ子供だし、まあ俺は見稽古と言う反則使って覚えたけどな、さて小僧はどうだ？  
震えてるなあ、まあ仕方ないなあ……。

「怖いか？ 腕が振るえるか？ 足が動かないか？」

「……ち、違いますッ!! 僕は恐れていません!!」

「……覚悟はあるか？」

俺は静かに問いかける。

「俺がやるうとしてるのは、一種の人体改造だ……血反吐は当たり前、だが確実にお前は強くなれる」

「……」

「どうする？ 小僧？ 怖気づいたなら」

「さい」

……クククク、これだからまだ人間をやめずに人間の味方してるだけさ。アーカード……てめえの言う通りだ、人間は面白いなあ。ちなみにアーカードとは意見の衝突、ただの喧嘩、言い争いで何度も戦った、あつちは俺の事を人間と言ったが……俺へタすると歌「打分解されても生きてる保障あるからな？ 実際、波動砲ぶつ放され



「居合い拳（弱）」

ちゅどー！ー！ー！ー！ん！！ お、タカミチが奥義を

「……虚刀流、一の奥義 『鏡花水月』 未完！！」

ドゴンツ！！ んじゃ、複合奥義いくぜ！！

「虚刀流……曲絃接続、殺曲『黒百合』」

ズガガガガガッ！！ ドゴム！！

「見る……魔物がごみの様だ」

「イウヨリモ、エヴァトメナクテイイノ？」

ひゃっはー！ー！ー！！ 久しぶりに転生者に会ったんだが……こいつがなんか魂まで対価にしちゃって、大量の魔物が出てきてしまっただんだなあ、これが。

まあ、紅き翼と、強化したタカミチならば大丈夫だろう。別荘も使って一年ほどゆっくりと基礎をつけたし、未完成（本当に未完成）だが奥義が放てる。いい経験値稼ぎなのでやらせてる、他の奴等？  
ああ、あそこ。

「ヒヤッハーーーー！！ 魔物は撃滅だ！！」

「おらおらおらおら、こちとらフラスレーションたまってんだよ！！」

「……師匠がエヴァ様と毎日、イチャイチャとツ！！ 聞こえてんだよ、夜k」

スタンバースタンバース、GO！！ そのまま、俺は詠春に向けて蟲ピンを投げる。

そのまま詠春の顔をかすり、後ろの三百体くらい魔物を消しながら突き進んでいく。エイシユン？ カエツタラオボエテロヨ？ つうかここ健全サイトだから……自重しようか。

「ビューティフォー」 アル

「……ワシ、入る集団間違えたかの？」

「……鎧袖一触とはこのことか。ツテ、コウイウコト？」

「アスナ？ すぐに忘れる、いいな？ 絶対だぞ？」

「フリデスネ、ワカリマス」

「うばああああああああああ！！」

「ケケケ、久シブリノ殺シ合イダゼエエエエエエエツ！！」

……あえて言うか、カオスすぎて収拾つかんわ、ボケエエエエエエエエエエエエエエツ！！

「色々あって、連合の本国首都に到着」



初めましてこんにちはこんばんはおはようございます、両義式の女  
バージョン、名前を両義識と言います。って口調がやっぱ変だな、  
めんどいからいつも通りな。

「性別変えるって……非常識な」

「四百年生きてるとなあー、無駄な知識がたまるんだよ」

元々は『闇』と『光』を逆転させる魔法を研究してたら、なんかで  
きた……ジャンゴの小僧は大丈夫だろうか？ まあ、太陽少年だし  
大丈夫か。

「このまま式と……ゴクリ」

「誰力、コノポンコツ御主人ヲ止メロ」

「無理」

「右に同じく」

「……命は投げ捨てる物ではありません。桜と再会していないのに  
死んではたまりません」

最初がナギ、ラカン、詠春の順番でそう言っている。

「にしてもここは変わらん」

「アスナちゃん……この服w」

「……いっぺん死ね」

そのままヒイロノタチでアルに斬りかかる、ちなみに不死殺し付きだからな

そのまま強制鬼ごっこをし、アルを××した後、着せようとした服を見た。……メイド服だった、さらにアスナのサイズぴったり（こっそり奪って小さくなったエヴァに着せたのは余談）

さて、そろそろなぜ連合の本拠地に来た理由を言うか。理由は簡単、ガトウに呼ばれたからだ、あんな奴だが連合ではメガロメセンブリア当局の捜査員。結構権力を持つてるらしい……が、一度戻り報告したら、あつてほしい人が居ると言われ、わざわざ来たんだが。

「アスナー、これから行くところはお前にとっては最悪の場所だ。今からなら、転移札で家に戻してやる」

「……イイノ、ネエサンニアエルカモ」

「無理はするなよ、無理して倒れたら、心配するのは式や私たちなんだからな！」

「ツンデレ乙、まあその通りだ。無理はするなよ？」

「完全に親子d イテ！！」

あ、あれ？　なんかアスナが怒ったみたいでナギの脛を蹴ってるんだが……どうしたんだ？

「ワタシト……式は親子じゃなくて、家族！！」

「……」

「……」

「……」

俺やエヴァ、タカミチが沈黙する。

「どづしたの？」

全員（アスナ以外）「……」か、片言じゃなくなってる  
うづうづうづうづうづう？！」「」「」「」「」「」

怒りの力はすごいねー……うん。

そんなこんなでメガロメセンブリア元老院本部に……とりあえず、俺への目線がいやらしい。なぜか女になると一部分が大きくなるので着物がきつくなる、なので千草……いや千草さんみたいな着物の着方になる。正直、あの時はツッコまなかったが……肩寒いやね？冬でもあれだったし、肩震えてたし、まったく無茶しやがって。

「（式に変な目で見てる奴は全員）」

「（おちちゅけ……つけ、これは変装だ）」

「（仮面被る意味あるのか？）」

「（……素顔見せるのが恥ずかしい）」

「（え？もしかして今まで素顔見せなかったのも……恥ずかしかったからか？）」

そーですよ、あーあー、三百……もうすぐで四百歳だが、恥ずかしいんですよ！！ あー、もういいや、奥の手使うか。

「（忍法骨肉細工）」

メキボキクシャー！とコミカルな音が俺の体から発生する。エヴァは嫌そうな顔をしながら、紅き翼のメンバーは目を丸くしながら……そんなに変か？ 体を固体から液体、気体にしてるわけじゃないのに（とあるブラックなRXを見稽古で見たらできた）そして顔に合わせて体格を整え、できたのが……

「これならいいだろ？」

黒<sup>ク</sup>になってみた、わざわざアーティーファクトまで発動してやったんだ……似てなきや死ぬる。

「……ってなんじゃそりゃ！！！」

「……あ、ああゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ……」

「確か……忍法骨肉細工、だったか？ 悪趣味な術だ」

式「別にいいだろ？」

ナギがツツコんでくるが……詠春、まだトラウマだったんだ。昔修業中にやったら、怯えたもんなあー。

「お前は一人人間びつくりショーか？」

「ちなみにこれ普通の人間すると二十一年近くかかるから……  
おすすめはしない」

「……ガトウ師匠、僕はとんでもない人に弟子入りしたような気が  
……」

「まあ、仕方ない。式は『理不尽が服着て歩いている』実例だから  
な」

「そろそろ着くぞ?」

そして俺たちは少し豪華な扉の前についた、一応アスナには認識障  
害をつけてもらっている、そうじゃなきゃこんな堂々に行かないさ。  
そしてガトウがノックする、少したちガトウが扉を開けると少し年  
を取っている男が椅子に座っていた。

「マクギル元老院議員、連れてきました。紅き翼、並びに超越者と  
闇の福音です」

「ご苦労、君の労力に感謝する」

「このジジイが協力者か? 確かに元老院議員な」

「いや、わしちゃう。主賓はあちらのお方だ」

部屋の奥に、ローブを顔にまで覆いかぶせている……女だろう、そ  
いつがゆっくりとこっちに歩いてくる。なーんか嫌な予感が。

「ウエスペルタイア王国……アリカ王女だ」

「久しぶりだな、超越者」

「ジーザス、まさかの直球かよ……ストライク、バッターアウト」

あららららら、まさかアリカ姫が出てくるとは……予想外だな。てつきり王国に引きこもって戦闘の指揮を執ってるのかと、つつか俺を憎くないのか？

「……………俺はナギ・スプリングフィールド。この『紅き翼』のリーダーだ」

「ズケズケと……貴様らがやったことを理解しておるのか？ 下手をすれば全軍率いて来てもよかつたのだぞ？」

「残念ながら、今の王国にそんな力ねえだろ？ それよりもアスナを奪われたことを隠すのが精一杯だろ？ 違うか？」

「ああ、その通りだ。どっかの誰かがやってくれたおかげでな」

「姉さん、やめて。式を悪く言わないで」

「ア、アアアア、アスナ?!?!」

能力で認識障害打ち消しやがった、おいおい、マジでカオスになるからやめてくれ。

「……………ゴホン、取り乱して悪かった。ではアスナ、帰ろう」

「どっくへ?」



石像化してるアリカ王女に鉄拳で叩き起こすことから始めた。

~~~~~十分後

「アスナ、大丈夫か？」

「大丈夫」

「にしても驚いたな……アスナにあんな感情が眠っていたとは」

エヴァが問いかけるとうなづくアスナ、というよりも普通に会話できるのがすごい、今までだと「アスナー」「ナニ?」「今日はハンバーグだ!」「ソウ……」こんな感じ、まともに会話できるのは結構少ない。

うーん、よくなったとはいえ、まだ感情が操れてないなあ……地道に訓練するしかないか。

あの後、さすがにヤバいと思った俺たちは、俺とエヴァ、チャチャゼロだけ退出し外に出てきた。改めて認識障害と少し感情にリミッターをつけさせてもらった……じゃないと感情でつぶれる。

「……アスナ、とりあえず俺がアリカと話してみる。とりあえずだから……期待はするなよ?」

「うん……ごめん」

「子供は大人に頼れ……そうじゃなければ、私のような人生を送るぞ?」

……俺と出会う前のエヴァはかなりあらぶってたと聞くしな（チャチャゼ口談）
ちなみに別荘でやったことは、まずは一年かけての教育、まあ普通の教育だな。次に俺が精神世界に入って、精神の正常化、そして感情の形成……だったんだが、フェイクがいらん知識を教えたので、まあアニメの知識なんだが……おかげでアスナがアニメに夢中に。その時は感情を形成できなくて……後三年はいると思ったんだがなあ。

「……ごめんなさい」

「わかればいい、んじゃ行ってくる。頼んだぞ、エヴァ、チャチャゼロ」

「ああ」

「俺八子守り人形ジャネエンダゾ？」

そのまま転移して部屋に戻ると

「大嫌い大嫌い大嫌い……」

「姫さん?! あっ、式!! 頼む、姫さんを起こしてくれ!」

「どうしてこうなった?」

「(。(。ポカーン」

ちなみにこの騒ぎが収まるまで三十分かかった（俺の再起動が二十

分遅れたせい)

「……えーと、なんだ？ んじゃ、アリカは戦争を止めたいから協力しろと？」

「厳密に言うところだ……」

何でもアリカが言うには王女としての立場を使って色々動き回ったが、全てが失敗、妨害で終わったらしい。んで、独自に調べていくうちにガトウに目をつけたらしい、そしてガトウに命令してここに俺たちを連れてくるよう命令したらしい。

「まさか……一つの組織に、この戦争が引き起こされたとは」

「お気持ちはお察ししますが……事実です」

「『完全なる世界』……はた迷惑な奴らだ」

「許せねえな、なんの目的で引き起こしたんだ？」

それが問題だ、こういう組織での目的と言えば……『世界の滅亡』、『世界征服』なんだが、あんまりそういう感じじゃない。まるで戦争を終わらせたくないように、連合が勝っていれば帝国に力を貸し、帝国が勝っていれば連合に力を貸し、まるでイタチごっこだな。

……何かの準備か？ ルシフェルの動きも気になるしな、今のところは転生者だけ、たまーに『転生者殺し』も来るが……まあ、俺の敵じゃない。

「それがわかれば苦労はせんよ……」

「まあ、今わかっていることは……この書類に書いてある。後で読んでくれ」

「むう、さすが超越者か？ 私やガトウが全力を挙げてても調べられなかった物を……」

……ぶつちゃけると、全部、自分の分身に任せていましたー なんて言えるか、苦笑いしながらアリカを見据えて話しかける。

「さて、ここからは個人的な話だ。アリカ王女様」

「……アスナのことか？」

「まあな、悪かったな。まだ……会わせる時期じゃなかった」

「……がとう」

はい？ あ、あれ？ アリカが泣き出したんだが？！ って泣くな
あああああ！！

「ありがとう、妹を救ってくれて……」

「え？ い、いや、まだそこまでやっていないんだが？！ つうか
泣きやm 伏せる！！」

次の瞬間、なぜかロケット弾が窓から飛来してくる。

ナギがアリカを抱き寄せ、障壁を張り、みんなが武器を取り出す。
俺は鋼糸で縛り上げ勢いを止め、魔眼で消し去る。……おうおう、

久しぶりに実弾見たな。

「敵襲?! 無謀なことを!」

「しかし、師匠が言ってくれなければ、私たちのうち誰かが死んでましたよ?」

ガトウが叫びながら舌打ちをするが、詠春がそれをたしなめる。

「んな、事は良いんだよ!! ナギ! 姫さんを守っておけ、俺が行く!」

「わしも行くかの、若いもんになんか任せておけん」

「私はナギと共に、アリカ様を守っておきます!」

「議員、こちらです!」

ナギとアルがアリカの警護に、タカミチとガトウが議員の保護、ラカン、ゼクト、詠春が敵の追撃に……まったく、久しぶりに戦闘無しで会話をしようと思ったのにさ。

「どこのバカだ? せっかくこの後、姉妹を合わせてやろうと思ってるのにさ」

キレて零崎虚識に名を変える、黒の仮面を被り殺気を全身に充滿させる。また転生者か?

「……え?」

「……お前はアスナの姉だ、本来はあんたが責任を取って育てなきゃならない。だが時期がそうじゃない、だがな……おばあちゃんが言った」

久々に天道語録行くとするか。

「まずい飯屋と家族の絆を邪魔する奴は消えろ……とな」

少し改変したが久しぶりだな。

「超越者……いや、式」

「今は零崎虚識なんだが……なんだ？」

「……頼む、妹と アスナと会いたい！ だから」

「合点承知、無問題^{ノイプロブレム}、任務了解……んじゃ、姉妹の仲を裂く奴は殺して解して並べて揃えて晒してやるう……さあ零崎を始めますか」

零崎（皆殺し）の始まりだ。

そのまま、窓から外に出ると十人くらいの男がラカンたちと戦っていた。全員、転生者だな、久しぶりに大所帯だな。まあ、ラカンたちがいるから問題なし、つつかあいつら強化したから、並の転生者程度なら簡単なんだよなあ。

「な、なんでこんな強いんだ！ 俺はギルガメッシュの能力があるはずなのに……！」

「んな、力任せの適当じゃ……このラカン様は殺せねえんだよ……！」

ラカンWパンチ!!」

「こっちはセイバーの腕前なのに……なぜ、この世界の住人が勝てる?!」

「……そんな切れ味だけで、中身が空っぽな攻撃受けるわけないでしょう! 神明流決戦奥義……真・雷光剣!!」

「合法ロリは幼女で十分なんだよ!」

「……へんたいと言う奴じゃな、アスナに近づかないようにせんとな。地を裂く爆流!!」

「なんだこりゃ……だが、こっちは後、俺を入れて七人居るんだ!」

「俺を忘れてるな、糞転生者ども。小便は済ませたか? 神様にお祈りは? 部屋の隅でガタガタ震えて命乞いする心の準備はOK?」

俺は指先に剉と色々な(危険な)エネルギーを収束させて鋼糸を発生させる。そのまま、七人の周囲を囲み鋼糸すべてから内向きに衝剉を放つ。さらに追撃として内部に影の倉庫から出した刀を射出する。

「繰弦曲・崩落及び殺曲『刀語』」

そして内部から悲鳴や叫び声が聞こえた……うーん、もう少し骨があると思っただが見当違いだったか? そんなこと思っていると鋼糸を突破してこちらに突っ込んでくる奴が……言っちゃうとシエルブリッド最終形態だ。

「うおおおおおおおっ！！ 自慢」

てめえ如き偽物が……あいつの、カズマの魂の一撃を

「使っんじゃねえよ！！ 外力系衝剄……剛力徹破・破！！」

右腕に純粹な剄を収束させ、放つ。サヴァリスの剛力徹破・突を見稽古で見取り、自分自身の技として昇華させた技。突が拳打の破壊をより深く突きぬけさせ、爆発させる技なら、破は拳打の破壊を突きぬけさせず、相手の体の表面で爆発させる技。

「そ、そんな？！」

「……おまけだ、もらっておけ活剄衝剄混合変化……千人衝&ハイパークロツクアップ」

右腕が消失している転生者に……本当に千人に分身した俺が同時に蹴りやらパンチやら、打撃を加える。ちなみに冗談でラカンに覚えさせたら気合でやりやがった……そしてハイパークロツクアップしたからわかったが、向こうでラカンが千人くらいで斬艦剣を放り投げていた。

目の前で転生者が爆散したが気にしない、うんうん、やっぱり零崎で殺すとなんも感じないな……いい機会なので忍法骨肉細工で戻して置く。やっぱり自分の顔はそのままが一番いいな。

生身でハイパークロツクアップしてるが……大丈夫だ、問題ない。その後、詠春たちも戦いが終わり死体と戦闘痕を処理する、途中で兵士たちが来たが飛んできたアリ力が事情を説明してなんとか事なきを得た……危ない危ない、あやゆく鋼糸で解体するところだった。

「派手にやったな、式」

「エヴァか……いや？ これでも鋼系の出力は最弱にしたんだが……リミッターかけ直すか？」

「……師匠、あなたはどこに行きつく気ですか？」

「神？」

「本当にありそうだから怖いんですよ、あなたの場合」

詠春がため息をつき、アルが笑いながら言う……そう言えばどうなんでしょうか？

実際のところ、神も吸収して喰らったし……味は最悪だったかな、と言うか神食って大丈夫なのか？ まあ、吸収したただけなんだが……ルシフェルに力を貸していたから殺したんだがな、神様（俺を転生させてくれた神）に許可貰ったからいいと思うんだがな。

「ふう、にしてもいいのか？ 式」

ナギが質問してくる。

「何が？」

「アスナだよ、アスナ。姫さんと二人つきりにしていいのか？」

「……多分、だいじよ」

「アスナアスナあ！！」（注意、アリカさんです）

「そうだな……まあ、合言葉は」

「私（俺）たちの妹は世界一かわいい!!」

その場にいる全員「このシスコンどもがああああああああああああああああああ!!」

そんなこんなで、アリカも入れていい機会なので写真を撮ることにした。

なんか今日だけでアリカとすごく仲良くなったんだが……あれ？アスナがすごくため息ついてるが……疲れたんだな。

「俺が正面だ!!」

「リーダーである、俺だろうが!!」

「……黙っていらねえのか？この二人は」

「黙ると死ぬのでしょうか……」

「わしは背が低いからな、一番前に行くかの」

「アスナ……一緒に並ぼう」

「いいよ、姉さん」

「式……私をお姫様抱っこで撮るぞ!!」

「いいよ？ 仮面は外さない」

「ナラオレ八頭ノ上ニ乗ルゼ？」

「じゃあ僕はガトウ師匠の隣で」

「はははは、今日は疲れたよ……」

とりあえず、最新のデジカメを使って高画質で撮る。タイマー式にしてるので押さなくて大丈夫だ。とりあえず、決めた配置が。

真ん中はナギ、その右に俺と抱きかかえたエヴァ（十歳バージョン）頭にチャチャゼロが乗る、ナギの左隣にゼクト、その右隣にアル、俺の左隣に手をつなぐアリカとアスナ、その後ろにガトウとタカミチ、そしてナギの後ろにラカン、その右隣に詠春。

出来た写真をすぐに現像し、全員配る。いい機会なのでデジカメでアリカとアスナの写真を撮り、二人に渡す……アリカが『観賞用、保存用、布教用だな』とつぶやいていたのには感心した。現代に戻ったら、木乃香と写真を撮ろうと思った。

このとき予想していなかったが、俺が紅き翼の『両儀式』としてみんなと写真を撮ったのは、これで初めて最後となった。

そして、アリカは王国に帰り、俺たち紅き翼は連合の首都で情報を集めていた。二週間が過ぎ、俺が情報を集めようと町に繰り出した時……出会ったのは

「君が超越者かい？」

「ガキがなんの用だ？ サインはやらんぞ？」

「ふふふ、僕の名前は一番目^{フリームム}……、またの名をフェイト・アーウエ
リンクス……『完全なる世界』^{コスモエンテレケイア}の幹部さ」

「……はい？」

「まあいい、単刀直入に言おう『両義式』……僕たちに協力しない
か？」

……あのー、なんか勧誘されたんだが？ どうすればいい？ とり
あえず

「メロンパンあるけど食べる？」

「もちろっす」

メロンパンうめー。

最強はルビをふるとバカになります（後書き）

作「今日のネギまーラジオ、こいや夷」

夷「おい、俺の設定がえらいことになってるんだが？ コジマはま
だしもゲッター線はやめろよ」

作「本当はバイドも入れようかと思ったんだが？」

夷「それよりもニュードかDG細胞をな」

作「この会話ついてこれる人いるのか？ というか、ほとんど核よ
り危険な物質だし」

夷「太陽少年と暗黒少年の力もあるし」

作「拝啓、読者様。最近この小説の主人公がバク化してきました」

夷「自分でもわからんエネルギーあるし……贈り物にもえらい物あ
るからなあ」

作「勇者シリーズとか天空シリーズってどうやって使えばいいんだ
ろうか？」

夷「正直、あの鎧とか武器とか……改造しすぎて次元切り裂くん
だ
が」

作「どうしてそうなった？」

夷「なんか酒飲みすぎて酔っ払ったら……つい」

作「つい　じゃねえよ!!」

夷「それになんか蟲ピンを気にいったから使いまくってるんだが……いいのだろうか？」

作「……（言えない、書きやすいから使ってるなんて言えない）」

夷「そろそろしめるか。次回『フェイト、そして姫とバカは駆け巡る』」

作「次回も!!」

刹那「ええ?!　え、ええつと……ちえりひよ!　……ちえりお
おおおおおおおおお!!　（泣きながら逃走）」

夷「……まだ噛み癖なってるんかい」

||||||| 楽屋

フェイト「ついに僕が登場だ!」

ナギ「主役は俺だからな?」

アリカ「アスナ……着物とほいいものだ」

ラカン「こんな王女で大丈夫か?」

フェイト、そして姫とバカは駆け巡る（前書き）

とタイトルに書きましたが、そんなに出番がないナギ、アリカ

ナギ&アリカ「おい！！！！」

えー、感想、批判、贈り物などありましたらドシドシ感想に書いて下さい。それと更新遅くなってしまってますいません。

ナギ&アリカ「無視するなああああああああ！！」

ではどうぞ！！

追記、フェイトの事を勘違いしてました！！ごめんなさい、とりあえずこのフェイトは『一番目』ですが、裏でもう一つ名前として『フェイト・アーウエルンクス』を使っている、と言う設定にします。本当にすいません！！……あれ？ したら三番目とかどうしよう。

フェイト、そして姫とバカは駆け巡る

「もふもふ、ほむほむ……なるほど、困っていたと」

「ああ、そうなんだ……彼らにはいい加減にしてもらいたい。ああ、コーヒーのおかわりを」

「このパンケーキうめえ……もぐもぐ」

「と言うか、君はマイペースだね」

「そりゃ、お前格下相手じゃこうなるな」

「……バツサリ言うね、これでもこの世界では最高クラスだと自負してるんだけど」

「まあ、ナギより少し下程度だからな、頑張れ」

前回、完全なる世界の幹部とか言う少年、一番目……いやフェイト・フリームムアーウエルンクス、間違っても金髪の方じゃない、あっちは女だ。そつうえばみんな元気にしてるだろうか、この前子孫と会ったが……似すぎだろ。

とりあえず、立ち話もなんなので適当に喫茶店に入る。店員は固まったな、そりゃ『不忍』とか書かれた仮面被った男とまだ少年の男の子が入って来たら驚くだろうな、ストロベリーサンデーを頼んだがなかったので泣く泣く、パンケーキとミルク。フェイトはコーヒー一杯。

「うまい、食べるか？」

「……食事の時くらい仮面取りなよ」

「だが断る……というか、俺にマジで何の用だ？ 一応、話は聞いてやる、今日の俺は紳士的だ」

「……まあ、さっきの続きだけど ぶつちやけると、正直君には勝てる気がしないから、仲間になつてくれないか？」

「これは……えーと、降伏と受け取ってもいいか？ というか、お前らのせいで戦争起きてんだが」

「ああ、それね。……メガロだよ、僕たちはむしろ戦争なんて起きてほしくなかつたんだよ」

「……えーと？ まさか下部組織の暴走？ いい加減にしるよ、連合ガチで潰すぞ？ と言うか、今からハリセン一個で沈めていいよね？ アリカ以外、みんなぶちKILL！！ と言うかやっていいよね？ いや、本当にやろうかな……睦月と望の仇もあるし、そういえば……完全なる世界のボスってどんな人？」

「……まあ、一回お前らのボスと会わせる。話はそれからだな」

「……それは難しいね、彼は 今、化け物たちの対応に忙しい」

まあ、こんな感じだ、なんでもこの頃転生者が多く突っ込んでくるから、その対応に追われているらしい。……何人いるんだ？ とうか、元天使のルシフェルがバンバン転生させていいのか？ 神じゃないから、劣化版らしいが……数だけはいんだよな（例に挙げ

ると宝具の耐久力が酷くもろい、オリジナルより身体能力が低いなどなど)にしても、今の俺は、時々転生者狩りに駆り出される時がある。……自分と同じ存在を消すのは気がかりだな。

「……まあ、仕方ないよな」

「ところで……君はこの戦争をどう思う?」

「意味なし、つうかこの世界破壊してもいいよな?」

即答即断即決即行で言い放つ、つうか無駄だろ?

……この世界だって限界だしな。

「……それは止めてくれ、これでも僕たちはこの世界を救う為に戦っているんだ」

「ソウナノカー。あ、サラダとスーブ追加、後この坊主にコーヒーを」

「本当に君は……油断ならないね」

「はっはっは、この前六百歳の記念に子供から、赤いちちゃんんこもらったんだが……俺はまだまだ現役なんだがなあ」

平行世界に行くかどうかしても、孤児はいる。なんとか安全な場所に孤児院を建ててから、俺の分身体を置いておく、金は腐るほどあるしな。で、この前とある世界に行った折にもらったんだが……正直精神にくるね、あー、本当に子どもって元気だなあ。

「……楽しそうだね」

「そうだがな……まあ、このくらいか？」

「そうだね……今日はこのあたりで終わらせてもらおうよ。すまないね、とりあえず条件としては」

「アスナに手を出すな、戦争終わらせる、責任者出てこいや、転生者は俺に任せろ……この四つだな」

「わかった……『黄昏の姫御子』には手を出さない、僕たちも命は惜しいからね。戦争は……すまない、水面下では協力する。彼には言うておくよ」

「ごくろーさん、ええと？ フェイトだったか？ これやるよ」

俺は影の倉庫から、携帯電話を取り出して放り投げる、後、説明書も。

驚いた顔でこっちを見るフェイト……無表情だけじゃなかったんだなあ。

「これは？」

「俺への専用の通信機、説明書で操作は確認しろ」

「……すまないね、とりあえず紅き翼とは停戦だね」

「……モグモグ、モキュモキュ」

「……それじゃ」

叫んでも駄目だ、この怒りは転生者にぶち込ませてもらおうか。最近改良に成功した、ハリセンMk?……ククク、ようやく降ればスプラッシュや、激流を流せるようにできたんだ……もうギャグで使えるレベルじゃねえよ、形変えれば立派な武器だよ。あやゆく、家を両断しかけたな、おかしいな蟲ピンの原料使ってるんだが? 神力籠めすぎたか。

「アスナー、楽しいだろうがもう少し自重しようか」

「だけど断る!」

「部屋のP S 3にX - B O X没収」

「ノゾミガタタレター!!!」

あえて言う、ここで言う、これ誰だ? と言うか、チャチャゼロが渡したゲームでここまで変わるなんて、想定外だよ!!! ここで止めておけばよかった、本当に止めておけばよかった、二十年后、廃人レベルまでゲームやら漫画やらを趣味とする『廃人魔法剣士アスナ』が生まれることを、このときの俺は知らない。

「帰ったぞ、式……アスナはどうしたんだ?」

「ゲームとアニメ、没収するって言ったら『orz』状態になった」

「……マサカだとは思いが、ぎゃるげーはやってないだろうな? シキイ」

「片言になってるからやめなさい、と言うかまた京都みたいな事するなよ?」

今から四百〇 間違えた、十年前、つまりエヴァと付き合い始めた時だな。俺は人生で初めてギャルゲー……まあ、アレだ、ゲーム内で女の子とキヤツキヤツウフフするゲームをやったんだが。

||||| 夷回想

「これがギャルゲーか、始めてやるが……名前？ ええっと、『両希夷』と」

人生初のギャルゲー、実は自分の元の世界、つまりは転生前の世界の俺の家に戻って見たんだが……追われる、写真撮られる、告白される、しんどかった。俺の死体はなかったみたいだしな、俺の部屋から死ぬ前に友人に借りたギャルゲーを回収して持ってきた。

「ほー、結構できてるなあ……ふむふむ、曲がり角でぶつかったのか。……結構、普通なんだな、安心したなあ」

そしてカチカチとクリックしながら進める、とりあえずヒロインルートに入っていく。音が漏れないようにヘッドホンする、これが後々悲劇を生むんだが……と言うか、夢中になりすぎた。俺って昔から始めてやるゲームはやり込む癖があるんだよなあ（実際、作者は初めてスパロボやった時は十周くらいしました）

「へえー、こんなうまくフラグは立てられるわけねえ……と言いたいが、まあゲームだし」

「ふーん、ゲームか」

八口八口、式だ……あれから二百年とちよつと、家出したんだが……やり過ぎた。あれから二百年程度、されど二百年、たかが二百年、二十倍くらい強くなった。今じゃ、本気だせば無強化の拳で地球叩き割れる……というか、実際にやった。

「あー……久々の魔法世界だ。異次元やら、超空間やらは行ったが……もういいや」

久々にアスナとエヴァに会えることで、少しテンションが上がって
いた俺だが……

「へ？ 指名手配？」

「その通りだ、大人しくしろ！ 超越者」

連合の首都に入った瞬間、衛兵たちに囲まれた。……通常の武器じゃ、俺の皮膚を削ることすらできないぞ？ 俺の一番やわらかい部分は、エヴァの最大魔法ぶち込まれたら、削れる程度だしなあ。

「あー、めんどいから通っていい？ 怪我はさせたくないんだ」

「ハハツハハ、冗談を……二百人だ。連合の精鋭、二百人相手ではさすがの超越者m ゲブウ?!」

「いい加減にうざいぞ？ あー、めんどいから……ハイメガキャノン」

口から、特大のビームを撃ち出す。……ここ二百年でほとんどの武器のエネルギー源は吸収したから……撃てるんだな、これが。そこ、

化け物言つな、まあ喰った、俺が悪いがな。ビームは殺さない程度に調節する、あつと言つ間に二百人が気絶する……やり過ぎたか？

「ハア……フエイク、居るんだろ？」

「ああ、家出ご苦労さん、今回は何年言つたんだ？」

「二百年程度、あと少しで千年だなあ……速い速い」

「冗談抜かすな、報告は」

「そんじゃ、アリカと帝国の姫さんが『夜の迷宮』ノクティス・ラピレントゥスに囚われて、ナギたちは証拠持っていくも……メガロのバカ野郎どもに邪魔された」と

「ああ、どうする？ エヴァとアスナはナギたちと一緒にだ」

「先に姫さんたちを助けるとするか……久々に零崎するかな」

「ああ、そういえば……お前、無茶苦茶リミッターつけてないか？」

「お前は……俺を歩く生物災害バイオハザードにしたいのか？ 少しでも、俺の中のエネルギー漏れたら、人が死ぬぞ？」

体の中のエネルギーが混ざり合いすぎてて、爆発したら近隣の世界ごと、消滅しそうだからな、あー、調子に乗ってやり過ぎた結果がこれだよー!!

「…………お前、人間やめろ」

「視界がたまーに赤くなったり、琥珀色になったり、緑色になったりするがダイジヨウブダ」

「大丈夫じゃねえ!!!」

おっと、少しバイドが侵食されたか、逆に侵食し返して…………よし、さあてどうするか。

「んじゃ、今すぐ姫さんたちを助ける。お前はエヴァたちに俺が帰って来たことを言っ来てい」

「了解、じゃあ行ってくるぞ」

フェイクが転移していった。

さて…………ディケイダーを出して行きますか。

|||||十日前、三人称視点

夷が別世界の神々に喧嘩売ってる時、他のメンバーは…………

「すぐに帰ってくるだろうよ」 自称最強の魔法使い

「師匠ですから」 女に弱いサムライマスター（笑い）

「帰ってくるさ、あいつ意外に女に弱いし」 どこぞの傭兵

「お茶がうまいのー」 ドウシテコウナツタ？ 童顔老人魔法使い

「フッフ、帰って来たら新しい服……」 紳士（変態）魔法使い

「もう、ゴールしてもいいよな？」 過労のせいで逝きかけている、
捜査官

「シキイイイイイイイイイイイイ！！」 暴走中の金髪吸
血鬼

「……アニメの続き」 もはや何も言うまい、とある国の姫御子さん
各々、反応は違っていたが誰も心配していなかった。ただとある人
形が主の手綱を引けるか、心配になっていただけである。

そんなこんなで連合の首都、繁華街。戦時中だったが、都市の市場
は賑わっていた……物価が高いから値段も高いが、そんな中歩く、
特徴的な赤い髪の毛、そして顔をフードで隠している一組の男女、
言う間でもなくこの世界のこの時代の主人公、ナギ・スプリングフ
ールドと未来の妻である、現ウエペルタティア王国の王女のアリ
カ姫である。じゃんけんに負けた二人は食料を買ったためにここまで
出てきたが……さすがにアリカ姫は目立ちすぎるので、フード被っ
た上にピアスの認識障害……とある世界では『フェイスチェンジ』
と呼ばれる魔法の効果が付属している、もちろん夷が寝ぼけて一秒

程度で造った物だが……宝具級の力を秘めているものだ。

「まったく……あいつらも面倒な事をしやがるぜ」

「いや、意外に楽しかったぞ？ これでも私はこの町をあまりで歩いていなかったからな」

「それ……胸張って言えることじゃねえし」

意外とある胸を張って（エヴァと同等程度）偉そうに言うアリカ姫……とてもこの前まで、冷たい雰囲気を出していた人物とは思えない、ナギはそう心の中で思うが同時に、少し暖かな気持ちもあり……その感情がなんなのか把握していなかった。

アリカの手にはさつき買ったリンゴがあった、それを丸かじりする様はガトウが見たらさらに、胃にダメージを負うだろう。ただでさえ、夷が持ってきた情報が、情報なので対応に追われていた。ナギもハムを食べながら歩く、その様は恋人同士のように見えたが実際、お互いの心の中では

「（ハアハア、待ってておれアスナ……私が最高の和服を作ってあげるから……ふっふっふ）」

「（なーんか、姫さんが怪しい雰囲気爆発なんだが……あ、涎）」

腐ってやがる、この王族腐ってやがる！！ この前、夷にギアス付きて和服の素晴らしさを説かれ、信仰するまでに至った結果がこれである。つまり夷が悪い、この頃天界で神様が入れ替わったりしているのも夷のせいだ。

幸せそうな（心情は抜いて）リンゴを食べるアリカ、ハムをバクバク食うナギ……そのハムは今日の夕飯で使う物なのだが、リーダー

命令でどうにかなる、と思っていたナギだが、その数時間後詠春によるOHANASHIが待っているのは余談。

「なあひめさ　　アリカ」

「なんだ？　ナギ？」

カモフラージュのために呼び捨てで呼び合う二人、アリカは妄想（誤字に非ず）を邪魔されて不服そうだった、いろんな意味で残念な王女である、その妹だが……閑話休題。

「アスナはどうするんだ？　この戦争が……というか、終わりそうなんだがな」

「……一緒に暮らしたい、と言うのは私のワガママだ。今まで散々道具扱いして……どの面下げて『家族』と言えはいい？」

途端に暗い顔になるアリカ、ナギはすぐに謝罪を述べるがさっきまでの楽しそうな雰囲気は四散してしまった。いつの間にか大通りを抜けて小道に入る二人、周りには人はいなくなってしまった。

「私は王族だ……泣き言は言えない。今の生活ももうすぐ終わりじや」

「……姫さん」

「アリカ、でよい。そなたと私は友人であろう？」

儂げな笑顔と共に言うアリカ、その顔に少しドキドキしながらうなづくナギ……完全に第三者が見れば「2828」する絵だが……そ

れを邪魔する輩と言うのは、世界中どこにでもいる。

「おおおう、昼間っから女侍らして……言い御身分だなあ」

「は？」

ナギの目の前には五人ほどの男たちが……どこぞの世紀末のような格好だが、気にはしない。下品な笑い方でアリカとナギを見る、どつやらごろつきの様だが……ナギの事に気付いていない、ちなみにアリカも夷が直々に特訓して、魔力強化で岩を砕く程度までは強化されている、初歩的な戦闘技術も叩き込まれた。（そのときハートン軍曹にはまった夷が、ノリノリでやったことによってアリカの精神が強化されたことなど、誰も知らない）

「ひひひ、どうよ？ そのお ぶべらっ?!！」

出会って三十秒、気強化された張り手でぶっ飛ばされるデブ（仮）、もはやモブキャラではなくかませ犬である。アリカは冷たい目で男たちを睨みつける。ナギは驚きながら……拳を握りながら突っ込んでいく。

「あ、相手はガキと女だぞ?!！ はや ぬべらっ?!！」

「おらおら!! てめえら雑魚に構ってる暇はねえんだよ!!！」

「……蟲ピン」

アリカがどこから出したか、わからないが夷が良く使う『蟲ピン』を取り出す。もちろん本物であり、効果も同じだ。あつとう言う間に汚い標本が二つほどできる。夷が加工して、ナイフ形が百本、ス

ローイングナイフ型が百本、30cmまで縮小したピン方を百本がアリカの四次元ポケットに入っている……製造方法？ 知らんがな。ナギも負けじと拳を振るう……もはや戦いではなく、一方的だった。が……ナギがぶっ飛ばした最後の男が突然笑い出す。

「なんじゃ？ まさか目覚めたのでは……」

「……目覚める？」

悲しかな十四歳、戦いばかりでそこら辺の知識がないナギはキョトンとする。一方、知っているアリカは引き気味である。

「くくく、お前ら終わったな……俺たち『完全なる世界』に手を出しちまったんだからな……」

「……姫さん」

「……そうだな、ナギ」

「拷問だ！ とにかく拷問せよ……」

ぎゃああああああああああああああああああ！ と言う声と共に、雷撃が発生したがナギとアリカが、何をしたのか知らない、と言うか夷との修業のせいでも、多少の罪悪感も消えているのでこの程度はお手の物。とりあえず、哀れなかせに合掌、とりあえずこの後の話はナギとアリカがひたすらに無双して終わらだ、途中そこそこ強い魔法使いもいたが……強化されたナギとアリカに勝てる筈もなくフルボッコ、転生者も蟲ピンの餌食となった。そして

「始末書ガガツガガツガガツガガツガガツガガツガ！！！」

「ガトウ師匠？　ししょおおおおおおお！！」

とりあえず、目の前の物を粉碎玉砕していた二人だったが……ガトウの始末書地獄、それとアル、詠春、ゼクトのありがたいお言葉（説教）を六時間近くもらった二人だったが、その顔にはまるで悪戯が成功した子供のような笑顔があった、エヴァは二人を見てそっと微笑みながら、夷の事だけを考えていた。その頃の夷は……

「ヒヤツハアアアアアアアアア！　俺のご飯になれえええええええ！！　汚染獣！！」

汚染物質の塊である汚染獣を食おうとしていた。……約八百三十歳の夏。

戻って首都。

「なんてことだ……メガロメセンブリアのナンバー2まで」

「……まあ師匠の話では、本当の親玉はこの戦いに関与していませんし、確実にメガロですね」

「俺のおかげだな！！」

「……あれ？　そういえばラカンは？」

いつもいる、筋肉だm　ラカンがないので疑問に出す、アル。

それに答えたのはゼクト……プリンを食べていた。

「なんでも……帝国に戻ったらしいぞ？ うゝむ、やはりこの黒い部分がうまいのお」

この小説だとポケ担当のゼクト、というかマジでじじいっぽくなってきた。今はお菓子に目を光らせる少年だが……番茶を飲みながら食べる姿は、一種の哀愁をも纏わらせていた。

「……ふう、これはマクギル議員に報告だな。後は姫様と帝国の第三皇女を引き合わせれば……このくだらない戦争も終わる」

「まったくいい迷惑ですね、この戦いで孤児がどれほど出たことやら」

「……私の神鳴流、及び関西呪術協会からも殉職者がいますしね。本当にくだらない……この戦争を引き起こしたメガロを、この手で斬りたい」

「おいおい、そんなの後でもできるだろ？ 今は戦争を終わらせることだろ？」

ナギがそんなこと言うと、周りの奴らは目を丸くする。どれだけナギがバカと思われていたのかよくわかった。

「おい！！……俺だって、この戦争で少なくとも数の人を殺してきたんだ。それを後悔はしてないし、むしろ罪と受け止めるさ」

「ナギ……成長したの」

「それに式だつて言つてただろ？ 『後悔はするな、殺した分まで精一杯生きる』つてさ。それに、そろそろ姫さんも肩の力抜いてもいいはずだ」

「なんだ、ナギ……アリカの事が好きなのか？」

静かに聞いていたエヴァが薄く笑いながら言う、これでも夷と一緒に寝てないのでフラッシュオンたまりまくりで、夷の別荘の修業シミュレーターで敵をぶつ飛ばしていたのだが。アスナは別室でチャチャゼロとアニメ観賞している、何も言つまい。

ナギはエヴァの言葉を理解できなかったが……すぐに顔を真っ赤にして否定する。

「な、なにい、言つてやがる！！ 俺と姫さんは友達だ！！」

「それにしても仲好きそうじゃなかったか？」

「そ、それは……そのお」

ナギが顔を赤くしながらモジモジした、紅き翼全員が腹を抱えながら笑いをこらえる。それに気づかずもごもごと口を動かしているナギ、完璧にエヴァのペースだった。

「う、うううううううううう！！ い、行くつぜ！！ とりあえず議員と話して戦争終了、それから話そうぜ！！」

「ああ、そうだな……ニヤニヤ」

「ああ、ナギもいっぱいしの恋を……ニヤニヤ」

「おっと、若さに惹かれてはっちゃけちゃ駄目ですよ？ ふふふ…
…ニヤニヤ」

「ああ、俺、この仕事終わったら嫁さん探そう… パルパル」

「ガ、ガトウ師匠… いいなあ、僕もあんな感じで」

良くも悪くも純粹なタカミチ… が、未来ではそれが災いしたのか、よく夷に弄られることになるのだが気付いていない、とりあえず一行は（エヴァとアスナとチャチャゼロは御留守番）本国首都のマクギル元老院議員を訪ねに行った。

「マクギル議員… 証拠をお持ちしました」

ガトウがスペアの証拠を取り出す、フェイクが念のためにコピーしたのだが… のちのこれがとある少年にとって切り札になるとは… 誰も知らなかった。

「ご苦労… さすがエリート捜査官ガトウだ」

「ところで… 法務官は何処に？」

「法務官… ああ、すまない彼は今、休暇中でね」

ナギが怪しげに議員を見る、他の者たちは気付いていないが…

「な、何言ってるんですか！！ 今は非常事態です！！」

「ああ、休暇場所は… 天国だ！！」

マクギル議員……だった（……）者が、手に刀を持ちガトウに向けて突き出す。一瞬、反応が遅れたガトウだったが、タカミチがその刀を『菊』で止める。

「ッ！ 師匠！！」

「なっ、何をなさるのですか！！ マクギル議員！！」

「アハハハハ、まだ俺が議員だと思ってるのか？ はっ、本物の議員は……俺の顔の材料になったよ！！」

ベリベリ！！ とガムテープでも剥がす様な音を立てながら、マクギルの顔を取り外す誰か、全員の息が一瞬止まる、そして剥がし終えた誰かの顔は、若い青年の様だった。ガトウはポケットに手を入れ、連続で居合い拳を撃つ。

「あははっはは、それが居合い拳？ 甘っちょろいなあ」

「くそっ！！ 貴様あああああ！！」

「ガトウ、落ち着いてください！！」

詠俊がガトウの腕を掴む、少年はひよひよいと軽く避けていく。その顔には微笑が貼り付いていた。ガトウはそれでも居合い拳を撃とうとする、がそれは飛来してきた魔法の射手のせいで邪魔される。

「くそっ！！ 外にもいやがるのかよっ！！」

ナギとゼクトが対抗して、撃ち出すが……いかせん、相手は転生者、この世界の強者よりも数段強かった。初めは相殺か、受け流してい

たが徐々に押されていく。状況は劣勢だった。

「くくく、この世界の主人公たちもこの程度か……もうちょっと楽しませてくれよ」

「くそがつ!! 全員、撤退するぞ!! ここに居てもやられるだけだ!!」

「ナギ!! しかし……」

「バカ野郎!! ここで死んでも意味ねえよつ!!」

「その通りじゃな、ここは撤退するぞ」

「逃がさな」

「ハツハツハ!! ランドローラだ!!」

その時、部屋の天井をぶち抜いて、誰かがランドローラを転生者に投げつける。……まあ、フェイクなのだが、それを避ける転生者、地味に転生者殺し付きの武器である。

「フェイク!!」

「さっさと転移札使え!! ここは任せろー、バリバリ!!」

「「「「「おい、ばかやめろ!!」」」」」 紅き翼総ツツコ」

「なんだ偽物かよ、本物はどうした?」


~~~~~その頃の夷

「ヒヤツハアアアアア！！ 戦場は地獄だぜ！！」

銃片手にとある世界の戦争に参加していたりする。

~~~~~閑話休題

「まあ……どつかの世界で『ヒヤツハー！』してるんだろ？」

「……あー、んじゃフェイク俺たちは行くぜ？」

「行かせると」

「あんまり僕たちを怒らせないでくれないか？ 転生者」

上空から、魔法の射手と共に少年が降りてくる。この前、夷と話していたフェイトだった。無表情ながらもその顔には少し怒りが入り混じっていた。

「チツ、人形同士仲良くってか！！」

「……よしフェイト、あいつ殺そう、すぐ殺そう、さあ殺して解して並べて揃えて晒してやるっ」

「同意見だね、フェイク……君たちは、僕たちの邪魔をし過ぎたんだよ」

転生者たちが驚いている間に、ナギたちは離脱していった。その後の話？ ……ただぶちぎれた、二人の人間がチート能力持つ

た転生者をちぎっては投げ、ちぎっては投げの繰り返し、まあ勝つたと言うことだ。しかし、転生者の一人、マクギル議員に変装していた一人が、最後の力で

「わしだ！ マクギル議員だ。紅き翼と超越者は帝国のスパイだ！
い、今狙われている、軍にれ」

「め、めんどくさいことを……俺の苦勞が」

「……はあ、僕も疲れたよ。それで、どうする？」

「……逃げるか」

ちなみにエウアたちは転生者を撃退して、家に普通に帰って行った。首都のとある一角では、今も体から煙が出ている数人の男たちが倒れているだろう。

なんやかんやで全員無事な紅き翼面々……だったが。

「ラカン!!!!」

「お、おうナギか……カハッ」

「ツ!!!! 一体誰に?!!!」

隠れ家（夷の孤児院）に居たのは傷だらけのラカン。今にも死にそうだが、あと数分で『気合だっ!!!!』とか言いながら、復活するがシリアスパートなので黙っておこう。

「ル、ルシフェルって野郎に……畜生、姫さんとテオドラを奪われた」

「……どこに?!?!」

「夜の迷宮だな」

声が出たので全員が振り向くと、傷だらけのフェイク……さすがにきつかったらしい。

「どこだ!! そこは!!」

「そう熱くなさるんな」

「だけだよ!!」

「大丈夫だ、あそこには……」

オリジナル
式が行ってる そう、自信ありげに言っていた。
当の本人は……

「 夜の迷宮って、どこ?」

ターンXに乗りながら首を傾げていた。

フェイト、そして姫とバカは駆け巡る（後書き）

作「さー、今日はネギま！ラジオなしで次回予告d

素子「斬岩剣！！」

「……………作者切断中

作「……………俺、ケフィアなんだが」

素子「神明流に……………断てない物は、あんまりない！！！」

作「色々混ぜてる?!?! とうか久しぶりに出てきて『切断』はねえよ!!！」

素子「早く夷を戻せ、ヒロインなのに出演が少ないとは……………ブツブツ」

作「駄目だ、この素子……………腐ってやがる」

月詠「ウチやでー（にっこり）」

作「あ、貧乳ヤンデレk

「……………作者断罪中

月詠「この小説のヒロインは？」

作「ツクヨミサマデス、ハイ」

夷「カオスだ、まあ本当に作者のネタが無くなって来たからなあ…
…このバカ、スクライドの劇場版楽しみにしすぎて、スクライド全
話一気見しやがったからな」

作「シエルブリット、カツコいいだろ?!」

夷「俺はクーガーの兄貴が好きだ」

素子「ほうほう、スクライドか、懐かしいな」

夷「やってたの?」

素子「ああ、やってた」

夷「生で見たかったな……orz」

作「あー、そろそろしめていい? 素子、月詠よろ」

月詠「次回予告やでー」

素子「へ? あ、ああそうや。次回『クーデター、最終決戦前』、
次回もよろしくなー……って、しゃべり方が戻ってた?!」

月詠「それではちえりお!」

素子「あつ……ちえりお!!!」

作「二回言った意味、あるのか?」

「……………楽屋内」

アリカ「アスナアアアアアアアア！　この服を着て」

アスナ「嫌」

アリカ「orz」

ナギ「ひ、姫さん落ち込むなよ。きつと恥ずかしがってるだけだ」

詠春「さ、桜？」

桜「ウフフフフ、詠春……………逃がさないでえ」

詠春「師匠、ヘルプ、ヘルプミイイイイイイイ！！」

ラカン「リア充爆発しろ」

アル「……………ですね」

ガトウ「モウヤダ、仕事辞めようかな」

タカミチ「ガトウ師匠？　師匠しっかり！！」

ゼクト「お菓子ウマウマ」

フェイト「……………こんなのには僕は、頭を悩ましていたのか？」

エヴァ「まだまだガキだな」

チャチャゼロ「ソリヤ、御主人ガ年増ダカ」

」

エヴァ「ナンカイツタカ？」

フェイク「誰かー、医者連れてきて」

汚染の夷、次回にクーデター持ち越し!! (前書き)

ナギ「おいおいおいおいおい!! 次回予告詐欺!!」

い、いやな? 本当はあっさり塩味風味に終わらせようと思ったわけだ……書いてたらこうなった。

ナギ「俺の出番は?!」

全くなし

ナギ「ウアアアアアアアアア!!」

次回には活躍してもらうさ……あ、クルト回収してねえ。

夷「クルトって誰だっけ?」

それではどうぞ!!

汚染の夷、次回にクーデター持ち越し！！

「……うっは、これで俺も方向音痴じゃなくなる！！」

ターンXに乗りながらこんにちは、夷だ。今は式じゃない。

アリカと帝国の姫さんが転生者に捕えられた、とのことなので……
とりあえず、とある神様とくしゃにもらった思念装置を使う、なんでも思念を誘導してくれるらしいが……

「（俺って精神耐性、SSなんだが……）」

つまりの事、自己暗示は有効だが、外部からの精神誘導とかは受け付けない……精神修業しすぎたか？ 月詠すら跳ね返せるんだが……
……そういえば、バイドのおかげで精神汚染も受けないし。

とりあえず、示された方向に進んで行く。さすがにターンXは外部に漏らすとヤバいので移動用だ……いやー、ミラージュコロイドはすごいね。

「……あれか？」

暗闇の中に監獄のような場所が見える。サーチしてみると……ドラゴン、悪魔、人外魔境をそのままぶち込んだ感じになっていた。わーお、こいつはやばい、すごくやばい……食い放題zy ゲ
フンゲフン、自重しないとな。

「（まったく、お前は……もう少し自重しろ）」

「（うるさい、スクナ……折角、意思だけでも復活させてやったんだ。ありがたく思えよ）」

ここ二百年程度、俺の相棒である……飛驒の大鬼神であるリヨウメ
ンスクナノカミだ。いや、何故いるって？ それはな、回想スター
ト！

「……………約二百年前」

「ううう、どこで教育ミスった？ 俺が甘やかしたからか？ あ、
もしかして孤児たちも？ ウゾダドンドコドーン！！！」

何も考えずに神卦法を使つて地面を叩く、その衝撃波で辺りが焦土
と化すが気にしない、気にしないったら気にしない！！

「ううう、エヴァとの子育てが……俺地味にお父さんと呼ばれ
るのが夢だったのに」

「災難だったな」

「ああ、そうだよ……うん？」

あれ？ なーんか、後ろのスクナ似の鬼神がしゃつべたような？

「……………まさか、スクナ？」

「そうだ、貴様に力を渡し、消える筈だった……リヨウメンスクナ
ノカミだ」

「OH……マジかよ、ついに神様も使役しちゃった？ というか、
神殺しが神使いとはいかほどに？」

「貴様……自分がどれほど異常か、わかっているのか？ 正直神である、我でさえ飲み込まれそうな力をいくつも」

仕方ない、間違つて吸収しちゃったんだから、一個でも解放したら地球ヤバいしな……次元連結システムは吸収するべきじゃなかった、メイオウ攻撃は伊達じゃない、試しに使ったら太陽系くらいの銀河が消し飛んだしな（修復するのがだるかった）

「ええつと？ まさかお前消えてなかったのか？」

「……文句なら本体に言え、まったく力の一部と意思を入れるとは。拳句に貴様の力が強すぎて出てくるのに苦労した」

「そりゃあ、すまなかった……と云うかいのか？ 俺ってはつきり言つと、神殺し……大罪人だぞ？ ゼウスのジジイがフォロシてくれないと低級の神が襲いに来る男だぞ？」

ちなみに低級の神でも地球を破壊できる、ほんの少しなら因果干渉できるしな……上級になると、めんどいんだなあこれが、間違つて魔王殺して一時期は魔王になったりしたが……地獄つて、結構住みやすかつたぞ？ ケロちゃんとか、化け物はたくさんいるが。

「……言つな、と云うか我を殺し切つた男だ。ほかの神々ごときに殺されてたまるか」

「いや、死ぬときは死ぬし、復活するときには復活するが」

一番やばかつたのは……なんだろ？ ビックバン級の攻撃受け止めたときか？ それとも魂を刈り取られた時？ ああ、それとも永久

凍土に封印された時くらいかな？

「お前、化け物か？ 我よりもだ」

「そうだよー、俺は化け物だぞー」

それから二百年間、俺の相棒となったスクナ、その気になれば体ごと再生できるが、スクナが俺の体が入ったらしく、ニート生活になっている。……神様がニートって、いいのか？

「（問題なしだ）」

「（大有りだ、バカ神、今度こそ徹底的に『殺し切るぞ』。たく……零崎で殺し損ねたのは初めてだ）」

とりあえず、ターンXから降りて入口まで行く……こりゃ、地下まで潜らないとな。

……めんどいから

「こんちはー、殺人鬼です。今から邪魔する奴殺すので、死にたくなかったら武器ステロ」

「（……やり過ぎるなよ？）」

「（無理だ）」

んじゃ……殺して解して並べて揃えて晒してやるつか。

「零崎虚識を始めようか」

入口に蟲ピンを連続で発射する、殺傷付きでな。

まずは入口に居た連中が串刺しになって死んでいく、なにやら騒がしいが……オナカヘツタナア。

「……少しイタダキマス」

クククク、クケケケケケケケケケケケ、カカカカツカカカツカツカ
！！！！！！！ マズハメノマエニイルリュウカラ、タベヨウ！！！！

「……………数分後」

「……………うーん、この龍美味くないな、硬すぎる。これだったら汚染獣の幼生体の方が食えるぞ？」

すまん、腹が減っていたので少し暴走してた。邪魔な奴らに鋼糸やら気弾やら、虚刀流をぶつけたりしたからな……………あー、口元の血を拭きたい、あーオイシイカライイカ。

「（おい、夷、吞まれてるぞ）」

「（オイシイナア、エヴァノチトカ　おっと、少しヤバくなってきたか？）」

この頃、まともな飯食ってないのか、それとも体内の色々なエネルギーのせいか……………色々な物を食いまくってるからなあ、少々おかしくなってきたかな？

「（零崎……まあ殺人鬼だしなあ、俺、あー、仮面が邪魔だ）」

とりあえずかぶってる仮面を取り外し、口元の血を拭う……意外とついでるなあ。服は着物だが真っ赤に染まっているしな、あーどうしようか、これ落ちないなあ。……気に入っていたのに。

「（お前は鬼神か？ 全身を血で染め上げるなど……）」

「（悪いがこの程度で驚くなよ、一つの世界滅ぼしたのにさ）」

昔だが少々、ぶちぎれて次元を崩壊させてしまった事があってな……やばーい、すぐくヤバかった、生き残りはいなかったし……あの世界、人口百億人いたはずだ。うーん、やっぱり魂が不安定になつてるな、と言うよりも俺の体が魂の変化に耐えられてない……このままだと死ぬな、俺。

「（俺の成長が早いか……それとも吞まれて、獣になるか、どっちかだな）」

「（少なくともお前が本気だせば……世界終わるな）」

とりあえず、近隣の本気の創造神クラスが来ないと無理だろうなあ、自分で言うのもなんだが……見取りすぎ、取り込みし過ぎ、改造しすぎだな、ルシフェル？ ああ、そんな雑魚もいたな。

「（アリカはどこだよ？ ……ようやく落ち着いて来たな）」

「（むう、最下層に十名ほどの生体反応……転生者だな）」

まーたーか、雑魚は雑魚らしく消えてくれ……別に殺したくて殺してるわけじゃない。

……なあ、木乃香、刹那、今の俺見てどう思う？　ここまで人間捨てて、まだ人であるうとしてる俺を……まあとりあえずだ。

「ギャオオオオオオオオン！！」

イタダキマス。

メキヤゴキヤ……ゴクリ

|||||三人称視点

とりあえず、夷が食事に入ったので私こと、ケファイアが視点を動かします。

最下層、薄暗い部屋の中に両手を縛られたアリカと帝国の第三王女、テオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミアが居た。アリカには攻撃手段もあり、正直一人ならこの場を逃げ出すくらいの力があった。しかしテオドラと一緒になら難易度は上がる、伊達に夷や紅き翼面々と一緒にいるアリカは、面々から少しずつ攻撃、魔法、道具、逃げ方など教えてもらった……この経験が、とある子供先生に全て伝授し、原作とは全く違うことになったのはまったくの余談。

「（くう……不覚を取ったな、ラカンが居るから安心しすぎた）」

この場でも気丈にいるアリカと少し震えているテオドラ、正直に言

あ！！」

「ナギ！！ 落ち着いて！！」

「……私はあんな感じで式を困らせていたのか？ い、いや、それでも若い頃の甘酸っぱい記憶と思えば（テレテレ）」

「……あつ、レベルアップ」

「ガトウ師匠！！ 止めましょう！！」

「タカミチ」

「はい？」

「……死にたい」

「ししょおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

カオスだった、文字通りのカオス……そんなことを知らずに胸を張るアリカ、事情を知らなければ凜々しい姿だが、知った後だと確実にギャグである。

それを見たテオドラは少し落ち着く、敵同士だったが国通しの交流でアリカとは知った仲であった。しゃべっていれば恐怖もまぎれる、そう思ったテオドラはアリカに話しかけた。

「にしてもじゃ……ラカンを倒す者がいるとは」

「ああ、私の知り合いにもおるぞ？」

「誰じゃ？」

「超越者、両義式」

「なっ？！……それなら納得じゃ」

最早、バクキャラとして認定されている夷、いや最早存在自体がバクなのだが……どのくらいバクかと言うと、本気でデコピンするだけで惑星を粉々にする程度である。

テオドラの中では『両儀式』絶対勝てない相手』と位置付けされる。……なぜ？ ハリセンでバッタバタと艦隊……それも最新式の防御障壁に、装甲にも魔法コーティングを施しており、ナギの『千の雷』を数発までなら耐えられるものである。この時点でチートクラスだとわかるだろう……が、夷はそれを寝ぼけながらハリセンで落としていたので、帝国の技術者が軒並み病院送りになったのは仕方ない。まあ、ベースになったハリセンも中々の業物だったのが幸いした、この頃はピコピコハンマーで落とそうとか考えている夷、別世界では金ダライで宇宙艦隊を残滅したのだが……閑話休題。

「……しかし、連合に超越者がいる時点でこちらは不利なんじゃが」

「大丈夫だ、式はこの戦争を止めようとしている」

その頃の夷

「モグモグ……ウマウマ」

「（夷？ 助けに行くのではなかったのかあああああああああああ
あ？！……）」

まだ竜を食べていた。

「転生者？」

「式の話だと……ちーとかいう物を使ってくるらしい、式もその類らしいがな」

「反則じゃな、その式もそうではないのか？」

「おっと、お姫様たち」

そこに数人の男たちが入ってくる、見る人が見れば確実に驚くこと必須の者たちだった……顔に張り付いている、いやらしい笑みのせいで台無しである。アリカとテオドラは睨みつけながら、転生者たちを睨む。

「ははは、睨みつける顔もいいな」

「まったくだ、それで侵入者は？」

「五人行ったんだ……オーバーキルってやつだな」

天井が薄く揺れる、どうやら夷の元に行ったらしいが……どうなることやら。

五人の男たちはいやらしい視線で、アリカとテオドラを見る。生理的な悪寒と激しい怒りが二人を襲うが、どうにもできない。

天井はまだ薄く揺れている……薄くだが叫び声も聞こえるが、転生者たちの耳には聞こえなかった。

「まあいいや、これからお姫様たちには『良い事』をするんだから
牢屋に入ろうとする、五人の男たち、血走った目でアリカたちを見
る姿は盛りのついた犬である。アリカとテオドラは少しずつ、後ろ
に下がる。」

「な、何をする気じゃ!!」

「……下郎どもが」

「ハハツハハハ、いつまでそんなこと言えることやら……楽しみだ」
ついに牢屋に入ってきた男たち、涙目のテオドラ、気丈にも睨みつ
けるアリカ。男たちは無造作にアリカとテオドラの服に手を伸ばす。

「（こんな……こんな奴らに、嫌だ、嫌だ!! 助けて、ナギ!!）
」

アリカが目をつぶった瞬間、天井の壁が崩れながら誰かが降ってき
た。
腹には刀が突き刺さったままでだ。

「なっ?! シロウ!!」

「ガハツ……化け……物か……よ。固有結界……を素手……で破壊
しや……がった」

「なんだと?!」

シロウと呼ばれた褐色肌の赤い服を着た男は、怯える様に天井に目

を向ける。五人の男もつられて見てみると……赤い目をした夷が立っていた。

「お前らさ……いい加減、理解してくれないか？ たかがもらった能力を好きに振り回してるお前らと、小さい頃から修業してきてる俺とじゃ、差は歴然だ」

ポトリと夷の腕に、突き刺さっていた『人間』だった物が天井から落ちてくる。下半身がなく、胸には大穴が空いていた。よく見ると壁には串刺しになったり、礫にされていたり、四散してる死体があった。男たちは……啞然としながら見る。

「お、お前……なんて殺し方しやがる」

「は？」

「人間じゃねえ、お前人間じゃねえよ！！」

急に怯える転生者たち、夷……虚識は不思議そうに、腕についている血を飲む。ちなみに夷はその気になれば、血を飲んだ相手にもなれる。

「……まあ、殺人鬼だししょうがない」

「聞いてねえぞ、聞いてねえぞ！！ 両義式ってのは不殺なんだから？！」

「今は零崎虚識だから……運が悪かったな」

天井から下にやってくる虚識、転生者たちは……碌に殺し合いもし

たことない素人、いつも自分の能力をフル活用して、残滅しているだけの……言ってしまったえば、まともに死体を見たことのない奴等だった。それが惨殺、刺殺、爆殺、圧殺死体を見れば気も狂う。

「まあ……とりあえず、アリカを返してもらおうか、一応、コイツには……シスコン連盟を魔法世界で広めなきゃいけないんだ」

「ふ、ふざけんな!! ようやく、ようやく転生者になれたんだ、少しくらい原作ブレイクしてもいいだろ?!」

「……まあ、俺も何度もしてきたさ。いろんな世界で介入しまくった、そのせいでほしくもない能力、武器、道具なんか山ほど手に入れた」

結界を張りながらアリカとテオドラを転移させる、一時的に影の倉庫の別荘に送っただけであるが……。虚識は鋼糸を操りながら静かに近づき、それに耐え切れなくなったのか一斉に転生者達が攻撃を加える。

「バオウ・ザケルガ!!!」

「螺旋手裏剣!!!」

「ゲートオブバヒロン王の財宝!!!」

「メラゾーマ!」

「ダイバインバスター!!!」

様々な攻撃が虚識を襲う。爆風が巻き起こり、煙が部屋いっぱい

舞い上がる、虚識の張った結界のおかげで被害はゼロに等しいが……空間が狭い場所に広域範囲攻撃をするのは自爆覚悟でやったのか、はたまた単にカツコいいからやったのか、どちらかわからないが……煙が無くなつて、立っているのは　　傷一つなく、咳き込んでいる虚識だけであつた。

「ゴホツ！　ゴホゴホ！！　バカか？！！　こんな狭い場所で撃つんじゃないよ！！　自爆したいのか、たくコレだから転生したての奴らは……手加減をしろ、手加減を！！」

「……嘘だろ？　当たつたはず」

「ああ、当たつたよ、確実に当たつた……俺の皮膚に弾かれたんだから」

「ありえねえ、てめえもベースは人間だろうが！！」

「……そうなんだけどねー、いや九百年以上、生きていると人の皮膚って硬くなるんだよ」

ちなみに虚識の皮膚は最早、この世界の武器が突き刺さらないくらい硬い、と言うか核ミサイルの直撃くらつてもかすり傷つけられればいい方である……強化無しでだ、強化したらしたで、太陽系を破壊するくらいの攻撃をしてこないと傷一つつけれない。

なぜこうなつたか？　別世界での数々の激闘、見稽古による肉体の最適化、能力etc、それら全てが合わさつた結果、そして夷のもらつた『成長限界突破の才能』が才能を果てしなく伸ばしている、適応力とでも言うべきか、いつの間にか夷の体は進化し続ける……超生命体になつていた。本人には自覚はないが、日頃から体を巡回してるエネルギーのおかげで皮膚に超極薄のエネルギーフィールド

もあるから、と言う理由もある、耐久値は……戦艦大和の波動砲十発分である（だって防御用のエネルギーとか無限生成してるだもの、壊しても壊して自己再生するフィールドですもの）

「なんだよ、お前……いった」

次の瞬間、鋼糸によって首をねじ切られる五人の男たち、早業どころか神業であるが……

「クロツクアップ部分展開……コレ、最凶じゃね？」

クロツクアップを部分展開、つまりは鋼糸自体にクロツクアップ機能をつけ、早くする。夷は身体能力でクロツクアップについていけるので、普通の人間では視認不可能……加えて夷の卓越した糸さばきについてこれるのは、本職やある一定の実力者のみである。

「……そして誰もいなくなっただか、零崎終了、っと」

とりあえず転移しようとする、が……夷は立ち止まる。

そのまま何も無い空間を叩く、そうすると中年の男性が出てきた。

「ヒィ!!! ゆ、許してくれ!!!」

「……あー、零崎終わってるから殺しはしないさ」

「よ、よかつ」

「で？ 演技楽しそうだな、ルシフェル」

「……な、何のことですか?!」

「悪いが、そんな粗悪な擬態で隠せるとも？ 昔の俺ならまだしもな……」

中年男性はキョトンとした顔で夷を見る。

しかし次の瞬間には、高笑いをしてしながら夷から距離を取る。

「ハハハハ、見事だよ……哀れな転生者君」

「……余裕そうだな」

「そりゃ……、人間ごときが私に勝てるとも？」

ここで夷に視点を返そう、彼の方が詳しく解説してくれるだろう。

||||| 夷視点

やーやー、少し暴走したがお腹いっぱい復活した夷です！！まあ目の前に、俺の仇ともいえる相手がいるんだが……えーと、アレだ、カス過ぎるだろ。まあ中級の神レベルはありそうだな……うんうん、神力が溢れてる。だが俺の指先……いや、爪の垢程度なんだが、あれか確か俺が初めて千草さんと会ったとき以来だから……約九百年前か、あのころは二刀流だったなあ、まさか素手とかハリセンになるとは。

「いや、お前を殺さないで現代戻れないから」

「殺す？ お前が？ 冗談を言うな、お前程度……ゼウスの側近と引き分ける私とは比べ物にはならない！」

あー、すまんそいつ圧勝した。三秒だったかな？ デコピン一発で戦闘不能、すまんが女には手加減するんだ、あれは……何百年前かな？ というか、このバカ……ゼウスに聞いてないのか？ ああ、そうかこの頃両義式で名乗ってるから……夷の名前、全然使ってねえし。

「あー、なんかめんどくさい。というか雰囲気大事だからさ、後日戦おう……準備万端で」

なんか弱い物虐めしてる気分だ、いやマジで……どうしたらいい？
と言うか、コイツ、小説でのラスボスだよな？ なんかRPGでよくある、レベルを上げ過ぎてボスが弱い現象起きてるよ。正直片腕で足りるような……と言うか、こんな奴に睦月、望、この世界にいる者たちは振り回されたのか？ いや、というか千草さんにやった痛みをここで……

「ふざけてるのか！！ 貴様、天使である私を！」

「……いや、ぶっちゃけると今すぐでも殺せるから、はあこんな奴追ってわざわざ来たのか？ いやいや、エヴァと出会えただけでも感謝しないと、ああ、二百年分はつ」

「無視するな！！ ロンギヌス！！」

俺に向かって飛んでくるのは、神殺しで有名な槍……ぶっちゃけるとポピュラーすぎて神々の中では、対策が一番多い武器だったりする。それにぶっちゃけると天使長クラスだと、これにアイギスやらがつくから厄介だけどなあゝ、まあ見てから掴むの余裕でしたww

wwwwww

「なっ?! 私のロンギヌスを止めた?!」

「おいおい、ゼウスのじじいならまだしも、『たかが』天使長クラスのロンギヌスくらいなら受け止められるよ」

いや、ぶっちゃけるとゼウスって無手の方が糞強い、つうかあのじじいくらいだよ。俺の本気耐えて、なおかつカウンター放ってくるのは、まあ余波で天界が大騒ぎになるが……知らんがな、この頃では百年に一回の恒例行事だったりする。

「『たかが』?! バカな貴様は一体何者なんだ?!」

「……ゼウスのじじいや魔王に喧嘩した人間です」

うーん、めんどくさい……あれ? スクナは?

「(いるぞ、とつかかこの目の前のバカは実力すら測れんのか? こやつは上級の神でも楽々消滅できるほどのな)」

「(言っつてやるな、お前だつて一応は伝説の鬼神なんだし、本格的に目覚めたら俺といい勝負できるだろう)」

「(嫌味か? 嫌味なんだな? 今の貴様では勝負すら起きないぞ?!)」

「(そーなのかー、というか神殺し『程度』で殺されるほど……軟じやなんだよねー。対策なんぞ、百歳の時に考え付いてるよ、慣れちまえばいい)」

「（それができるには貴様ぐらいだ！！）」

漫才はここまでにして……よく見たら、この槍コピーじゃん。うわあ……これ型落ちの古いタイプだ。と言うか俺がふざけて弄ったやつじゃん……五百年前に時空の狭間に落として、消息不明だったのに。

「おいおい、このロンギヌスはいつ拾ったんだ？」

「ふっ、天界に居た頃、空から降って来たんだ……最高の武器だろう？。」

「（最高の武器だろう（笑）だとさ）」

「（おまwwwやめるwww、腹がねじ切れそうだ）」

「（最高の武器）」

「（スクナ、お前は笑いの才能がある。今度アスナに見せてやってくれwww）」

腹が死ぬ、スクナのジョークがやばい、あっ笑いが

「アハハハハハハハハハ！ ヒーヒー、わら、笑い死ぬ！！」

「（声出してはいけないぞ？ クククク、しかしさっきのは笑うな）」

「何がおかしい！！」

「だ、だってそれ、俺が寝ぼけて作った黒歴史時代の武器だぞ。笑うたってのが無理な話だ……それにそれ、無理やりコピーしたから性能イマイチだし」

出来たとしても太陽串刺しにする程度だ、驚くことじゃない。

「嘘も休み休みに言え」

ホントなんだがなあ、なーんか小物化してきたなあ……早く帰ってパワプ クンやりたいのに、いやあBADENDに納得できなくて歴史変えたしな。やり過ぎ？ 九百まで生きると善悪の区別が正しいになるんだよ、いや罪悪感がないね。

「ここは見逃すから……な？」

「ふざけるな!!」

槍を投擲してきたが、久々に魔眼を使って消滅させる。……うん、なんか存在消せる魔眼になっちゃった、最初の頃の解析とかがなつかしい、使えるけどさ。

「な、なんで……神殺しの槍だぞ?!」

「……めんどくさい、蟲ピン奥義『治癒ピン』」

ククククク……ここ二百年で作り上げた、蟲ピン奥義、まあぶつちやけるとピンに属性付加を施すだけだが……いや、本当にこのピン、チートだよ。定着まで百年かかったしな……こんなに使っているのだろうか？ 昔の刀は使わなくなっただし、刹那や月詠、素子に送るか？ 俺は未来に行けないが、武器なんかは遅れるしな。

「ドウシテコウナッタ？」

現在、十歳程度の姿で俺に抱き着くエヴァ、それを温かく見る紅き翼面々、ジト目で見るアスナ、なんか時空を超えて複数の殺意も感じる……いや、その……な。

「離してくれ、エヴァ」

「嫌だ」

「離しなさいよ、エヴァ」

「断る」

「別荘で押し倒してしまえ!!」 アリカ

「姫さん?!?!」 ナギ

「姉さん!!!!」

エヴァは一瞬、顔を伏せると……怪しい笑み、というかハイライトが消えた目で俺を見る。時々見るんだが怖い、ヤンデレにはならな
いでくれ、頼むから

(まあ、木乃香とかそこら辺はえらいことになってるけどねえby
作者)

「(夷、こやつがエヴァンジェリンか……お主、まさかロリク
)」

「(シヤラップ!! 本来のエヴァはスタイルがいい! というかこの姿のエヴァを襲えるか!! 俺は特殊性癖の持ち主じゃない!)」

「(その割には触手が)」

「(やめてえええええ!! 若い頃の過ちだから!! いやいや男なら一回……って何言っただああああああ)」

「というか、このままだと十八禁入りだ、畜生!! いや、いや、かみさま読者たちに言っが俺は健全だ!!」

「(そうかそうか、この頃は風呂p)」

「(存在消すゾォ!! ニート神!! トイウカダマツテオケ!!)」

「そう言えば……ここは俺の家である孤児院、とりあえずアリカと帝國のお姫さんを別荘から出して戻ったらこんなことに……あー、本当に家出しようかな。」

「……にしても、紅き翼の拠点が孤児院だったとは」

「普段はシュワに守らせてるからなあ」

「テオドラだっけ? そいつが質問してきたので答える。俺の孤児院は認識をずらしているの、普段は見えないし、結界も張っている……が、万が一にでも侵入者が来たらヤバいのでターミネーター……通称シュワに守らせている、あれだよ? 性格子煩惱にして、子供のために命を懸ける奴だ、実力はこの世界で言う最上位クラス。」

「にしても……師匠、あなた敵のボス見逃したんですか？」

「……まあな、いつでも殺せるし　　今までの借りをキッチリ返さないとな」

単純に復讐したいだけなんだけどな……まあ誰にも邪魔はさせない、ダレニモダ。

……やばいな、精神がおかしくなってる、そろそろ対策考えるか。

「これからどうするのじゃ？　超越者」

「式でいい……とりあえずは　　完全なる世界をぶっ壊すか」

「ハッハッハ！！　ラカン様復活〜！！」

なんか部屋の隅で固まってる、筋肉ダルマが起き上がったんだが……まあいいや。

「……あの、そのな式」

「テオドラ、どうかしたのか？」

「……素顔見たいのじゃが」

「えっ？」

「だ、駄目だ！！　式の素顔は私だけのものだ！！」

や、やっぱ気になるか……外してもいいんだが、タイムパラドク

すが怖いしなあ。
と思っっていたら、顔から何か外れる感じが……あれ？ 視界が開けたな。

「式の顔」

「ア、アスナ?!?!」

意外な伏兵だった……だが、みんなの顔が凄く驚いてる……うん、素顔晒したの二百年ぶりだな。

「……お、女あああああああ?!?!」

「俺は男ダアアアアアアアアアアアアアアアああああ?!?!」

約五百年ぶりにこのツッコミを入れたな。

え

刹那「こ、こ、このちゃん!」

真名「さらに前は料理作るうとして、台所に刀使ったり」

アスナ「さらに前は、鍋から火柱出してたわね」

刹那「うううう……」

夷「なんじゃそりゃ」

作「うむう……今度の閑話はそれ方向で」

刹那「やったら斬ります」

作「向けながら言わないで」

夷「なあ……今回、全ての元凶が出たが……弱過ぎね?」

作「い、いや、当初の目的だと互角くらいだったんだが……あれよ、あれよと言う間に……創造神クラスと天使長クラスって、像とミジンコの戦いだろ?」

夷「はつきり言うな」

木乃香「あれがえびにいを転生させた人?」

夷「久しぶりに呼ばれたな、その名前……ああ、そうだが、木乃香さんこの前貰った変身道具とハンマー持たないで。地味に刹那も研

ぐな、メモリを使うな、というか懐かしいな!!」

作「カオスだな、ああ、それじゃあ真名にアスナよろ」

真名「次回予告（ふふふ、私の時代!!）」

作「ただし、後五話くらい先な」

真名「（・・・）」

アスナ「（馬鹿ばっか帰ってゲームしよ、っと）今度こそクーデター、造物主と夷」

作「次回も!!」

真名「ちえりお!!! 私の出番よこせええええええええええ!!」

作「た、対戦車ライフル連射」

ギャアアアアアアアアアアアア!!

|||||今日の楽屋

ここはフェイクが無料でやっている診療所

ガトウ「この頃、胃に穴が複数開いたんですが」

フェイク「薬飲んでる」

タカミチ「この頃、竜種を一人で倒せるようになりました」

フェイク「今度、竜王と戦え」

アリカ「妹がかawaiiすぎて、部屋がグッズで埋まったんじゃが」

フェイク「大丈夫、夷は別荘一つだから」

詠春「時々来る、嫁の手紙に怖い内容があるんですが……」

フェイク「戻って謝ってこい」

ラカン「俺ってさいきよおおおおおおお!!」

フェイク「すまんが？は幻想郷に行ってくれないか？」

ルシフェル「久々に出たら、ポコポコにされて、槍が体からくっついて離れないんですが」

フェイク「いい特徴じゃないか、そのまま死んでおけ」

夷「この頃、なんでも食べれるんですが……あ、神になった方がいいかな？ やったね、フェイク！ 実力が上がるよ!!」

フェイク「おい、バカやめろ!! というかマジで何喰ってる?!!」

夷「コレ？ トツテモオイシイヨ!!」

限りなくカオスに近い何か

フェイク「なんで俺が苦労するんだよぉ
おおおおおおおおおお
おおおおおお」

今度こそクーデター、造物主と夷（前書き）

やっと書けた。今回はひどい持論があります、なんていうか……自己中心的な内容です、いや、まあ言葉に仕切れなかった場面もありますが……。

今回、ナギ大活躍……そしてスパークギャップ現象ってこうでしたっけ？ うろ覚えの知識ですいません。

ナギ「いつよっしやあああああああああ！！」

アリカ「私の出番は?!！」

無いよ

アリカ「(´・`・´)」

ではどござ……!!

今度こそクーデター、造物主と夷

やあ……作者のケフィアです、今回はいきなり三人称視点から入りますよ。

まあ理由としては夷の精神が不安定、他のキャラの内面が表現し……ゲフンゲフン、とりあえずあれから一か月。

「モグモグ……オセンジユウモオイシイナア」

「式……何を食べてるんだ？」

「コレ？ トツテモオイシイヨ！」

完全に病んでいた夷、仮面をつけずに汚染獣の生肉をバクバクと食っている。正直、エヴァでなければ発狂してもおかしくない事である。ここ一か月で夷は自分自身を、別荘に入り、その別荘を結界の中に封じ込めて生活していた、面会できるのはエヴァだけである。当然アスナやナギも反対したが……精神不安定&力の制御までできなくなっているので、ヘタをすれば暴走する危険性もあり、なによ
り夷が自分の今の姿を見せたくなかった。

「（……夷）」

「（スクナ……ワカッてる、今はガマンの時ダ）」

「（いいのか？ あれから一か月だが、こちらではすでに十年たっているのだぞ？）」

「（オレの精神が強くなれば、問ダイ無い、少シの辛抱ダ）」

「式……本当に大丈夫か？ なにかできることはないか？」

「……大丈夫ダ、エヴァ」

心配そうに見つめるエヴァ、肉を食い続ける夷……ぶっちゃけると夷の精神の均衡はこんな感じである。

破壊衝動……五十パーセント

エヴァへの愛……測定不能

木乃香への兄弟愛……測る前から計測不能

……こんな感じである、なんだコレ？ もう一度言う……なんだコレ？

「……式、私にはお前が必要なんだ、もう……一人では生きていけないんだ」

「……エヴァ」

エヴァが夷に抱き着きながら、涙目で懇願する。

「責任を取れ、私をこんな弱い女にした責任を……！」

「……ナア、エヴァ、イツが言ったよナ。『お前と共に生きるよ……エヴァ』って」

「うるさいうるさい……何年前の話だ……！」

「ハハハは……エヴァ」

「なんだ？」

「愛してるよ」

「私もだ……バカ」

徐々に寄り添って行く二人は これ以上は作者権限でやめて
おこづ。

追記するなら……うん、激しかったと、実況のスクナさんお願いします。
ます。

「（……バカップル？ いや、そんなもんじゃない、砂糖がマジ
で吐けたぞ？ あ、夷が押し倒した、あ、あれ？ 触手？ エヴァ
に襲い」
（以上検閲により削除）」

一方変わって、現実世界、アスナの部屋。

「……ああ！！ ライコウが逃げたああああ？！！」

「オイ、小娘……ゲームバカリヤツテナイデ、外二出口」

「うううう……次こそは、乱数調整はしてあるもの！！」

「……御主人ー、旦那あー、マジデ帰ッテコイ、殺戮人形ニ子守リ
サセンジャーヨ」

チャチャゼロは知らない、二人が別荘の中でアブノーマル的な物をしてるなど……そしていつも通りのアスナである、ベットの上でクッションに寝転がりながらゲームをしている。感情を取り戻しているアスナだが、着々とゲーオタの道に進んでいる……この頃は恋愛ゲームにも手を出しているようだが、一つ言っておこうアスナの年齢は普通の人間ではおぼ

「なんか言った？」

「すいませんでしたあああああああああああああ……！」

「またまたところ変わって、ガトウとタカミチと……ボロボロになっている少年がいた。」

「その程度か？ クルト……もつと腰を入れる！」

「は、はい、ガトウさん」

「師匠……クルト、一緒に頑張ろう！」

ガトウは夷からの回復薬を飲みながら、仕事をしていた……というか死ぬんじゃない？ ガトウ。タカミチは夷からもらった修行用のシユミレーターで戦闘をしていた、相手は『鑢七花』、未熟なタカミチでは本来の四分の一の実力の七花でも強敵だった。虚刀流をモノにしてきてるタカミチと違い、クルトは修業したてである。

「くっ？！ 強い！」

「もっと腰を入れるよ……まあ、その頃にはあんたは八つ裂きになつてるだろっけどな」

「なめないでください！！ 虚刀流奥義『百花繚乱』ひゃっかりょうらん！！」

「……虚刀流、・『雛罌粟』から『沈丁花』まで、打撃技混成接続」
タカミチの奥義が炸裂する前に、七花の混成接続がタカミチの全身に突き刺さる……272回分の衝撃がタカミチを襲う。声も挙げられずに吹っ飛んでいくタカミチに、七花はさらに追い打ちをかける、『杜若』の構えから一気に前に出る、そのままタカミチの服を掴み

「虚刀流最終奥義、『七花八裂』」

虚刀流の7つの奥義を全てタカミチに叩き込む、常人なら死んでもおかしくない連続攻撃を……タカミチは耐えきった。

「へえ……やるもんだな」

「伊達に、式師匠の弟子はしてませんから……気の応用技『金剛気』」

ぶっちゃけると金剛剄の気の応用した物だ、違いと言えば反射ではなく、受け止める技になった程度か、タカミチが血反吐を吐きながら会得した技の一つだ。

「（僕には……師匠みたいな魔法を扱う才能も、戦闘センスもない。凡人は凡人らしく努力するだけだ！！）」

しかしタカミチは気付いていない、本当に凡人ならば短期間で虚刀流を扱う事は出来ないし、夷の技を『見』て盗むこともできない…
…周りが凄すぎるだけで、タカミチも十分すごかった。

一方クルトはその様子を羨ましく思いながら、同時に嫉妬していた。

「（なぜ…彼はあるそこまで戦える？ 僕の方が才能はあるはずだ！！）」

天才と言うなら、クルトのことを言うだろう。彼はガトウに拾われた戦災孤児だったが、才能に満ち溢れていた。勉強をすればたいいていのことを理解し、魔法でもナギまでは行かないが平均以上、武術の才もある。

しかし、タカミチは彼を見て言った言葉は…

『すごいね！ 僕とは大違いだよ！！』

クルト
彼にとって初めての対応だった。しかしクルトは他人を見下す癖があった…しかし、そんな物公式チート軍団、紅き翼に比べたら蟻の様だった。

ナギの魔力、詠春の剣技、ラカンの気、ゼクトの知識、アルの戦略、ガトウの諜報能力…加えて、絶賛暴走中の夷である。普通なら『ああ、これはチートだな』と思うだろう、しかしクルトにはなまじ才能とそれを超えたいと言う願望があった。

「（強くなりたい…もっと、もっと！！）」

ガトウに弟子入りしたのは、彼が自分と似ていると思ったからだ…しかし、そんなことはなかった。彼は自分よりもタカミチに似ていた。一の才能よりも百の努力、飛び抜けた手札よりもなんにでも対応する数多くの手札、加えて…苦勞人。ガトウは紅き翼の中で

もまともな奴である（他の？ ああ、キニスルナ）、しわ寄せは全てガトウに行く、さらには捜査官なので調査や報告書、加えて絶賛シスコンなアリの力の護衛……入院してもおかしくないレベルで忙しい。そしてタカミチも最年少なので、何かと弄られる、チャチャゼ口に戦いを挑まれる、アスナの世話をする……こっちもこっちで大変である。

「ふう、今日はここまでだ……お前には才能があるな」

「ゼエ……ゼエ……、まだで、す……僕は、強く、なるんだ」

「無茶はいけませんよ、クルト」

そこに来たのは詠春、心なしかやつれている。

「どうしたんだ？ 詠春」

「……嫁に帰ってこいと、アハハハハ、師匠がゲートぶっ壊したんで帰れるに帰れない」

前に夷がゲートを破壊したと言ったが、夷はパンチして周辺の空間を歪ませて……最低でも五年近くは直せなかったのだった（無理してやると異次元のかなたにポツシュート）、その時は無強化のパンチでだ。

なのでこの世界にいた、神明流や向こう側の魔法使いは全員夷が転移させた。

「それは……大変だな」

「まあ……私が逃げ出したのが悪いんですがね」

「（たく……人造人間使いが荒いな、オリジナル 夷、まあ姫さんに力を貸すのは 悪くない）」

仮面で顔を隠したまま、にやりと笑うフェイク……その後ろにはナギの姿もあつた。

「たく、俺たちは陽動かよ」

「まあな、九割の兵士はこっちにいるんだ。残りの一割はメガ口のオリジナルくそつたれ共だけだ、式のおかげで俺の力も増大してるんだ、並の転生者が出ても負けないぜ？」

この前、とある神様どくしゃにパワーアップ許可がでたので強化したフェイク、初期状態の夷と同等のスペックを手に入れた、今なら並の転生者五、六人くらいは相手取れるだろう。

「たく……俺は姫さんの剣だからなあ」

「そつか（ニヤニヤ）」

若干、頬を赤くしながら言うナギの様子を、ニヤニヤしながら見るフェイク、一応フェイクにも生殖機能があるので、恋愛も可能である……やった方がいいかな？

「とりあえず、俺たちが暴れて姫さんが突入」

「で、王様の首にチエックメイト王手はだろ？」

「まあそつだな……が、簡単にはいかないらしい」

なぜかフェイクとナギの目の前には、九人程度の怪しげな恰好の奴らが立っていた。まあ転生者だが、見たことある者ばかりだった。とある金ぴか、親善大使、テイルズの魔王、正義の味方、女しか扱えない兵器を扱う少年、幻想殺し、魔戒剣士、もやしと言われたライダー、Xの名を持つ機械の戦士……などなど、過去に夷が戦ったことある連中ばかりだった。という、金ぴかと正義の味方は出しすぎじゃね？と思う方もいるだろうが、選ぶならコイツラを選ぶだろうと作者が勝手に決めたのでご了承ください。

「またギルガとかよ、バリエーションはねえのか？ つうか素人が扱える力じゃねえのに」

「なめるなよ、雑種」

「ないわー、雑種はないわー。つうか言葉の重みがねえぞ」

「余裕だな、こんなにメンバーなのに」

確かに単純に見れば、フェイクとナギの方がかなりピンチだ、しかし……実力が伴っていないければ無意味だ。

ここで注目してほしいのは、各人の力だ。たった一撃も大打撃を与える宝具を多数扱う王、超振動と呼ばれる力を持つレプリカ、ドラゴンのクエストのゾー、固有結界を持つ多彩な手数が強みの英霊、血を飲めば自分の力を増せる真祖……どいつもこいつもチート級であるが、それは本物の努力だ。どんなに強大な力を持つとも、扱い方がわからなければうわべ面の攻撃である、例えるなら幼児に拳銃を持たせるような物である、引き金は引けるが当てることのできない……ただの鉄の塊と同じである。

それに転生者たちは実戦経験がない、どいつも見た物をそのままや

る……まあ機械のような物だけだ。

「おらー！！ チャージシヨットー！！」

「動きがおそえー！！ んなもん、式ならやってこねーよー！」

「なんで当たらない？！ー！！」

「黄金騎士……確かに強力だが、扱いに慣れてない鎧ごときで俺を殺せるとも？」

「くっ？！ー！ 零落b」

「んなもん、させつかよー！！ 千の雷！ー！」

ナギが無詠唱の千の雷を発動させる、夷のおかげで魔力にムラが無くなり最大火力は夷の防御を抜くことも……皮膚のエネルギーシールドだ。

「熾天覆う七つの円環ロー・アイアス！ー！！」

ナギの千の雷とロー・アイアスがぶつかり、激しく放電が起きる。その過程で幻想殺しは感電死したが……主人公でもないのにむやみやたらに突っ込むからこうなる、それとXも放電に巻き込まれ機能停止に、親善大使も余波で死亡……無茶しやがって。

徐々にナギの攻撃が、ロー・アイアスの花びらを散らせる……使い手から離れた武器に対して、無敵という概念を持った概念武装

だが持ち主の扱いがへたくそだった、ただでさえ元の英霊も、そういう操作が苦手だったのに……素人ができるわけがない。

「そ、そんなバカな?!！」

「そんな未熟な魔力操作で……俺の前に立つんじゃねえよ!!!」

「I a m t h e b o n e 」

固有結界を発動させようとしたらしいが……その前に電撃に焼かれ、絶命する。

というか、目の前に雷があるのに目を閉じて、あんな長つたらしい詠唱なんてできる筈がない、ただのバカである、本来の持ち主だったらもう少し何かできただろう。

「う、うおおおおおおお!!！」

「0.22秒遅い……そらそら!!！」

フェイクの得意武器は遠距離武器、特に銃である……オリジナルが接近戦なのに、遠距離戦が得意と言うフェイクだが、フェイク自身も色々な世界を歩きながら銃の腕を上げていった、最初はヘボシューターだったフェイク。銃を撃つどころか、構えさえもままならなかった、しかし今では大型拳銃を片手、それも両手二丁で扱っている。ジエリCOM13、名称は『怒りの日』^{デイエス・イレ}、口径は直径で十三ミリ、弾丸は夷の神力と蟲ピンの合成で作った弾丸を使用している。もはや、巨竜（三百メートルクラス）すら一撃で粉碎する威力の大型拳銃だ。

その銃弾から発射された、弾丸は黄金騎士と鎧を着た少年、仮面ライダーの頭を吹き飛ばした。いくら絶対防御に鎧にスーツの防御力があるうと、神の力と正体不明の金属を使っている弾丸を防ぎきることはできなかった。

「やっぱり銃は良いねえ」

「外道だな、やっぱり魔法だろ」

背中合わせに戦う二人は、歴戦の戦友そのものだった。

残ったのは魔王と真祖、もちろん二人とも動揺していた、片方はこの世界の主役だが、チートなら楽々倒せるだろうと思っていた少年、もう一人は強大な力を持つが、所詮はコピーの人造人間、そう思っていたのに……あつという間に全滅寸前であった。

「くっ、しかたない！！マダンテ！！」

「おっと……悪いがやる前に撃墜させてもらおう。ベクターキャノン」

フェイクの腕に身の丈ほどの巨大な砲身が現れる。

ベクターキャノン……通称ロマン砲、元々は圧縮空間による質量断層が存在するシールドも破壊や大規模艦隊戦などに使用される武器、つまりの事広範囲残滅兵器である。威力は……ちよつとした空間破碎が可能な程度である。

ただし撃つのに時間がかかるのと、足場を固定しないと撃てない、エネルギー源であるメタトロンの異常消費など……確実なロマン兵器である、作者の趣味で出させていただけました、申し訳ありません。

「<エネルギーライン、全段直結><ランディングギア、アイゼン、ロック><チャンバー内、正常加圧中><ライフレリング回転開始>」

フェイクが機械のように言葉を紡ぐ、向こうはマダンテを撃とうと必死に魔力をためる、ゲームと違い、呪文唱えてハイおしまいと言っただけではなく少しの必要がある。まあフェイクにとっては

「ハーツハツハツハ！！んな大層な物出されても驚かねえよ！！」

「なっ？！！ 貴様はアホか？ この剣は」

「そんなのどうでもいいんだよお！ てめえが姫さんの邪魔するつてんなら……俺が、ナギ・スプリングフィールドがぶっ倒すんだよ！」

そのまま剣に魔力で強化した拳で殴りかかる。金ぴかは高笑いをしながら、剣を振るうおうとするが……ナギのバインドがそれを止める。元々は別世界の魔法だが、夷がナギのためにこちら側の世界の魔法用に調整した物を使っている。所詮、世界を切り裂く剣と言っても、振らなければただの棒である。

「くそお、離せ、離せ！！」

「……千の雷、掌握！ 術式兵装……雷天大壮！！」

自身の体の中に、千の雷を取り込む。エヴァと夷が必死に教えた闇の魔法である、体中から電気が流れ、髪が全て逆立つ、もはや取り込んだ魔力とナギの魔力が融合し、とてつもない圧力を出す。

原作のネギと違う点は、高速移動をしない点である。それではこの術式兵装をする意味がない……と言いたいが、ナギは高速移動をしない代わりに攻撃を選んだ、つまり膨大な電気を帯電させ、連続で千の雷を放つたり、常時身体強化を行ったりと完全に攻撃型である。

「な、なぜそれを？！！」

「……知るかよ、てめえが俺たちの何を知ってるか、そんなもんは

「どうでもいい」

全身から電気を流し、激しい音が鳴り響く。最大電力はメガボルトである、まるでナギの感情を表したように光が増していく。

「だがな、てめえらのような転生者チートが来るのなら……何度だってぶつ飛ばしてやるよ！！ 術式解放、雷天切断！！」

ナギの体から電撃が発生し……金ぴかの体を真つ二つに裂いた。見事に体の中心から裂けた金ぴかの後ろに、何かで斬ったような跡がつく。……知っている人もいるかもしれないが、放電切断……スパークギャップ衝撃という現象である。

簡単に言くと、二つの電極間に強力な放電が発生したとき、イオン化した空気の圧力が、空間の一点に集中して起きる放電切断現象、つまりは不可視の剣でぶつた切つたと言うことだ。電撃を発射した際に、空気のうちねりが起こり、それが通過した場所を全て切り裂く……理論上では最大射程距離は数百メートル以上、正確な距離はわからない。電極間の放電が強ければ、強いほど威力は増す。今のナギは一種の電気ウナギのような感じだ、まあ触れば即行で、体を焼かれ死に絶えるが。

「ハッ、『この程度』じゃ、まだまだだな」

ナギはこのとき知らなかったが、今の状態のナギは造物主を越え、世界最強、つまりは最強の魔法使いになっていたのだった。が、夷がチートすぎて気付いていないのだった。

「相変わらずすごいな、その技は」

「まだまだだよ、エヴァなんざ、コレの何倍の力を出すぞ？」

ちなみにエヴァのパクティオーで手に入れた力は、生体発電能力、再生能力（体の半分が無くなっても数秒で回復）である、ナギの電気とは比べ物にならないくらいの、電気を発電できるが、本人はあまり使いたがらない。

「まあ、後は姫さん次第だな」

「……まあな」

「心配か？」

「まさか……んなわけねーよ」

ナギは笑いながら否定した。

「だって、アリカだぞ？」

この日、アリカはクーデターを成功させ、父である現国王を捕縛、王位を強制的に譲渡させ、王女から女王となった。

||||| 夷視点

よお……夷だ、なーんか体がだるい、それになんかげっそりしてい

「『式、激しすぎるのもいいが、今度はもう少しソフト

（アウトオオオオオオオオ！！　ここは健全なサイトだ！！）」

さ、さすがに分身して……いや、やめておこう。なんか画面の向こう側の方々に殺されそうだ。

とりあえず、俺の体のリミッターを全部つける……はい、終わり、んでもって首飾りをつけて……

「復活復帰！！　シスコン殺人鬼両義式、ただいま参上」

……

……

……ないわー、いや、自分でやったが今のはないわあ。

「うだあ、めんどくさい、このまま百年程度引きこもろっかな」

「（働け！！）」

「（てめえもゲームばかりやってないで、働け駄神）」

「（駄神？！！　わ、我は鬼神だ！！）」

「（どこの世界に美少女ゲームを薄く笑いながらやってる鬼神が居る！！）」

「（ぐあああああああ？！！　やめてくれええええええええええ！！）」

「（良い台詞だ、感動的だな、だがばらす!!）」

「（なら、私も……この頃貴様は媚薬や精神操作でエヴァを淫らに
してから、散々じらした拳句に言葉」
）」

「（アウアウ!! マジでアウトオオオオオオ!! 消される、
いろんな意味消される!!）」

と云つか、どうしようか……めんどくさいが外に出るか。
服を着るのがめんどくさかったので、アデアットで服を着る……だ
つてある服も、血まみれなんだもの、着れるか!!

「お久しぶりの外……空気がまずい」

「（……誰かいるようだぞ?）」

スクナに言われ見ると……俺の部屋にはローブを着た誰かがいた。

「……誰?」

「お初にお目にかかります、超越者」

「……式でいいよ、だから誰?」

「これは失礼した、我の名は造物主、ライフメイカーまたの名を『始まりの魔法使
い』」

ああ、コイツが……知らず知らずのうちに俺は
全リミッタ
ーを外していた。

「ガッ?!?! ゴホッ!?!」

自分のいる空間が歪む、地面が微かに振動する。
非常に俺はキレている、間違いないキレている……だつて

「エヴァが編んでくれたカーペットに靴で上がるなああああああ
ああ!?!」

「ぎゃあああああああ?!!!!!!」

叫び声を上げながら部屋の隅に突っ込む、造……めんどいからライ
フな。

ライフが壁にめり込む、正直、上半身が吹き飛んでもおかしくな
ったはずだが……ギャクパートつてすごい。とりあえず、リミッタ
ーを再度つける。

「す、すまな……ゴホッ!」

「あ、やっべやり過ぎた」

~~~~~この世界のラスボス回復中

「で時間が空いたから来たと?」

「そつだ……これからが本題だ。超越者、この世界を救ってほしい」

土下座された……はい？ いやいやいやいや、なぜ?!..!

「理由聞いてもいいか？」

「ああ、この世界の成り立ちは知っているか？」

「知ってるも何も……確かお前が作り上げたんだろ？」

「……正確には、火星を触媒にして作り上げた。しかし問題が発生した」

「……魔力の枯渇だろ？」

「知っていたのか？」

「たりめえだ、簡単に説明すると……ぶつちやけるとこの星の魔力が尽きそうなんだ。元々は不毛な大地を触媒にしてるんだ、むしろここまで持った方がおかしかった。魔力が無くなる……つまり、魔法世界の崩壊を意味する。」

「なら話は早い……頼む、我が子たちを救ってくれ」

「待てよ……フェイトに聞いたんだが、てめえらはこの世界を救おうとしたんだろ？ お前ら計画はあるんだろ？ 先にそっちから言え」

「……完全なる世界」

いや、それは組織名だろ？

「……それが計画の名前だ、内容は」

「……肉体も魂も捨てて、楽園に導く」

「そうだ……それしか思いつかなかった」

「バカか？　ンなもんは楽園じゃねえ、幻想だ」

コイツが言う計画は……願望や後悔から計算して作り上げた、各人にとつて最も幸せな世界で、死もなく幸福に満たされた永遠の楽園に送ること、つまりは自分自身が幸せだと思つ世界に送るってことだ。

「楽園つてのはな、自分自身で見つけ出すもんだよ。誰かに見せられる幻想やましいせかいなんぞ、紛い物……砂漠で見る幻覚と同じだ。それにな、それは生きる者に対する侮辱だよ」

「生きる者？」

「そうだ、人は生きていく……それをやめて、楽園に行きましようだ？　人間つてのはな！！　進んで行くんだよ！！　どんな奴でも死ぬ数秒まで……生きて生きて行き抜いて！！　……だから人間は強いんだよ」

俺は見てきた、見て視て観て診て看てみて見まくつて来た。人間の汚さも綺麗なところも……全部だ。正直、絶望しかない世界だってあつたさ、だがな。

「地獄の中にも楽園はある！ それにお前がいう事は諦めた」

「あき、らめ？」

「そうさ、てめえが言ってるもんはな。ただの諦めた、俺だったらそんなことはしない」

楽園……それは人それぞれだ、大好きな人と過ごす時、勉強するとき、誰かと戦うとき、何かを発見した時、様々な時がその人の楽園と変わる。所詮は楽園なんて、数秒しか見れない『夢』みたいなもんさ。夢は夢、現実には現実だ。

「それにな、死もなく幸福なだけな人生なんてつまらんだろ？」

俺はそう思う、死がない人生はつまらない……俺は不老不死だ、滅多な事じゃ死なない、もはや不死殺しの武器ですら殺せない筈だ。だが、普通の人はそれが……いつか死ぬ、きつと死んでしまう……だから一生懸命に生きてるんだ。俺はその姿が好きだ、何かに一生懸命に生きる人の姿が……ナギがいい例だな。

あいつは夢に向かって、走っている。周りから天才なんて言われているが……あいつも努力の天才だ、俺に敗れた後にゼクトに弟子入りしたり、いつも基礎トレーニングを欠かさない、夢の為には躊躇なくやる……まあバカだからと言う理由もあるが。

「俺は思うんだよ、人って夢に向かって生きるから、楽園を見るんだって」

例え数秒の幸せでも人はそれに向かって走る、走りきった先にあるのが楽園だ。



人それぞれ、千差万別……楽園つてのはそういうもんだ。

「……夢、か」

「そうさ、それに……夢は見るよりも、実現した方がいいだろ？」

俺だって、転生者だ。元々は木乃香と会うはずではなかった人間、ひよんなことから転生して、初めて夢見たのが……自分の幸せ、第に家族……木乃香が大事になってきて、次に家族の幸せ。それから刹那と素子が入ってきて……俺は自分の周りの人間の幸せを願った。それから、千草、月詠、鶴子姉さま、エヴァにチャチャゼロ、明人、睦月に望、ナギにゼクト、ラカン、タカミチとガトウ、アル、アスナとアリカ……どんどん膨らんで行った。麻帆良だって守りたい、じいさんが居るからな。神明流も、朧や一夏、夕ホ、俺は迷惑かけた奴らの世界だって守りたい、と言うか俺が守りたいと思う奴等を守りたい、これが俺の夢だ。

「例え、俺がこの世界の転生者イレギュラーだったとしても……俺は、俺のために生きる」

「ククク、全ては自分勝手じゃないか」

たりめえだ、自己満足だよ、数々の世界を回ってきてても俺は誰の指図も受けない……好きに生きる、それが両希夷の生き方だ。

「面白い、面白いぞ……超越者。それでこそ、貴様は英雄なんだ」

「英雄？ バカ言つな」

「ではお前はなんなんだ？ 英雄でなければ、殺人鬼か？」

カハハハハハ、それもねえよ。  
俺は

「両希夷であり、近衛夷でもあり、零崎虚識に、両義式、両義識イレギュラーでもある……まあ、つまり、俺は俺さ、他の誰でもねえ、転生者だ」

「ふ、ふふふふ、本当に面白い、面白いぞ！ では貴様の計画は？」

まあなんだ、ここまで言ったんだ……んじゃ。

「火星を緑豊かにしようか」

………いつちよ救世主にでもなりますか。

今度こそクーデター、造物主と夷（後書き）

作「はるかしいiiiiiiiiiiiiiiiiiiii!!!」

夷「作者?!! まあ、あれか? 『完全なる世界』の場面か?」

作「うん、あんな話が実際あったら詐欺師の領域だよ。つうか誰得だよ、幸せな世界、確かに良いんだけどさ、あれだ……好きな物だけ食べても飽きるじゃん」

夷「それでいいのか?」

作「はははは、楽園なんて……マジで人それぞれだろ? ちなみに俺の楽園は一人の時間だな」

夷「……でだ、ナギ強くなりすぎじゃね? 今なら造物主も楽々だろ」

作「うん、やっぱりさ、原作ブレイクってさ、半端じゃだめだと思っただよ……やるんなら徹底的に、ナギ強化はただ単に最強にしたかっただけです」

夷「ナギだけが強化されてるなあ」

作「ちなみに紅き翼は原作より数倍強いよ?」

夷「と言つか、転生者たちって……あんな弱くていいのか?」

作「というか、つい最近まで普通の人間が、主人公や敵キャラと同

じ能力持ったって……技量が違いすぎるだろ？ それにエミヤなんて、元々はすげー弱かった土郎が、努力して研磨した力だよ？ それを貰っただけで無双できるほど、弱くはねえだろ？」

夷「まあそうだな、当麻なんて、その最たるものだからな。と言うか、あいつらも努力した結果、あんなったわけだしな。力ももらった。強さじゃないってことか」

作「それにお前を作る上で、身体能力をそのままにしたのはそのため、見稽古あったって、体が追いつかなきゃ意味ないだろ？ 努力した分だけ強くなるキャラを目指したんだが……ドウシテコウナツタシ」

夷「タカミチも強くなってきたなあ」

作「ああいうキャラは努力すれば強くなるしね、最終的にはガトウとタカミチの一騎打ちとか考えてます」

夷「まあな、タカミチを拉致って別荘で訓練させた甲斐があった」

作「まあチート転生者、と言ってももらったばかりの能力で無双できないと言うのは、勝手な考えですからスルーしてください……使い方を教えられても、本家よりも強くなるわけないだろうしなあ」

夷「いろんな人から苦情来そうだからやめておけ！ それとハヤテ様、クロワツサン様、勲b様、勝手にキャラクターの名前を使っしまい、申し訳ありません」

作「本当にすいません」

夷「と言うか、今回の話……シリアス多くね？」

作「次回はきつとシリアルに書いてやんよ……！」

夷「次回予告……！」

作「おい……！」

夷「次回、火星緑化計画と夷の戦い……おいおい、最終決戦かよ」

作「次回も……！」

ゆっくり夷「ゆっくりして……ってね……！ ちえりお……！」

作&夷「「なんじゃ、この饅頭……！ というよりも生首……！」

|||||今日の楽屋

スタッフ「あのおく、ケフィアさんなぜ私たちは縛られてるんでしようか？」

作「この前のクマのAAの事だよ、おい、てめえら熊に謝れ」

スタッフ「だが断る」

作「千草さん、やっちまってください」

クマアアアアアアアアアアアア……！！

スタッフ「ぎゃあああああああ……！！ と言うか、お前は猿だ」



フェイク「嘘おおおおおおおっ?!?!」

フェイト「ちなみに僕の妹も候補みただよ」

フェイク「彘? え? ナニソレ、俺はコピーだぞ?」

夷「フェイク……俺の苦しみを味わえ」

フェイク「オリジナル……!!!」

作「どう、して、こうな、った?(ガク)」

火星緑化計画と夷の戦い（前書き）

とタイトルに書いたじゃん

ナギ「ああ」

夷「そうだな」

ぶつちやけ、ナギとフェイク、ラカンが大活躍！！

夷「（。。。）ポカーン」

ナギ「キタキタキタキタ

（。。。）  
（。。。）  
（。。。）  
（。。。）

フェイク「来週から主役は俺！！」

夷「ウゾダドンドコドーン！！！！！！」

それではどうぞー！！



## 火星緑化計画と夷の戦い

「よっせ、よっせ……ふう」

「……なあ式」

「なんだ？ エヴァ」

「なぜ私たちは木の苗なんぞを植えているんだ？」

ハツハツハー、こんちはー夷です。

ただいま、紅き翼全員で木の苗を植えている……どこ？ ああ、ただし世界樹の苗と普通の木の苗だ。

……向こうの世界の世界樹から、採取した細胞から作り上げた物だ。まあコピーしたものだしな。

とりあえず、火星緑化計画の根本だな、これは。へ？ 原作と同じ？ なんか変な電波が……まあ、ぶつちやけると星のエネルギーを変換するとか、俺の全魔力を込めた影分身を星の核に埋め込んで長持ちさせるとかあるけど……これが一番、確実な方法なんだよなあ、持続性もあるし、魔力にするとなんかメガ口のドアホ共に利用されそうで怖い、星のエネルギーは……いや、なんかほかの人と被りそうなんでやめておく。

前回の俺の台詞の中に、危ない人的な発言があったことは謝ろう……さすがにないわー、作者ないわー。

「……懐かしいのお」

「ふふふ、いいですね。長く生きましたが……木を植えるなど初めてです」

こんなのが世界を救うなど言っても聞かないだろうしな……とりあえず、アスナに木を植えるという作業してもらいたい、と言う建前で実行した。いや、最近アスナが全然部屋から出ないし、偶には外に出てきてほしいんだ、出て来ても俺に抱き着くだけだからな。

ちなみにアリカとテオドラには明かしている、まあ魔力が消えて大変になる……と言う事だけだが、さすがに魔力が無くなったら、ヘラスの住民が全員消えるなんて言っても聞かないだろうし、言わない方がいいだろうな。

まあ、この世界に世界樹を植えることができるのは良い事だ、麻帆良の世界樹が狙われる必要性が無くなる、まあ帝国と連合が均等になる様に植えておく、こんなくだらない理由で戦争は起きてほしくないしな。

「式……疲れた、ゲームしたい」

「アスナ……初期のお前に戻ってくれ」

そんな文句を言いながらも、やってくれるアスナ……やればできる子なんだがなあ、やらないんだよなあ。将来が心配だよ、才能もあるし……まさか見ただけでかんかほう咸卦法を取得するとは、俺だってある程度修業しないとできなかつたのに！！ 神卦法なんて、三年くらい修業してからようやくやくできたのに……。

「しかし師匠が木を植えるなんて……明日は雨ですかね」

「ちなみに明日の予測は、午前中は晴れだが、三時くらいから雲が出てくる、九時くらいから雨だな」

「……師匠が言つと予測と言つか、予知ですね」

まあ詠春言う通りだな、というか未来予知程度ならできる、さすがにアカシックレコードへの接続は無理だ……一回やったが、脳が死んだ。いや溶けたよ。

にしてもだ……俺の首にあるペンダントはなんなんだ？ いつの間についていたんだが……あれから精神が正常になったんだがなあ、まあいいや、どうぞ神様がやってくれたんだろう。

「ふむう、式よ」

「なんだ？ ゼクト？」

「お主が植えてるのは……世界樹の苗か？」

「ちょ、師匠?! ！ それはやばいですよ!! お義父さんになつて言えばいいのか」

「式師匠盗みは駄目です!!」

「式……私もさすがにそれはどうかと」

え？ 何？ みんなに白い目で見られてるんだが?! ！ そ、そんな目で見えるなああああああああ!!

「勘違いするな!! 世界樹の一部から作り上げた、コピーだよ!!」

あ、あれ？ なんか今度はシーンとなつたんだが？

「（世界樹を複製つて……）」

「(式の野郎……化け物と思ってたら、ここまでかよ)」

「(わ、ワシもできんぞ?)」

「(お前ら……式と付き合いなければ、この程度はスルーした方がいいぞ?)」

……聞こえてるよ、お前ら。と言うかどういいう事だ、世界樹の複製くらいできるだろ?」

「(普通できるかあああああ?!?! あれは神の力が宿ってるんだぞ?!?!)」

「(うるさい!! てめえはそこでずっとニートしてる、ニクナ!?!)」

「(我はスクナだ!?!)」

「(ニートスクナだから、ニクナ!! それでいいだろうがああああああああ!?!)」

「(やるか、貴様あああああ!?!)」

「(やってやんよ!! 今度こそ、殺して解して並べて揃えて晒してやるぞ!?!)」

＝＝＝＝＝＝第三者視点

えー、夷がスクナと喧嘩し始めましたので、ケファイア第三者視点でお送りいたします。

今、連合側に居るの紅き翼のほとんどのメンバー、そして帝国ではラカンとフェイク、そしてなぜかナギが作業していた。

「なあフェイク……なんで、このラカン様がこんなちんけなことしなきゃいけないんだ？」

「ぼやくな、オリジナル式が言ったことに、基本俺は逆らえない……まあ従うか、従わないかの選択はできるがな」

「はあ……姫さんが頑張ってるのに、何やってんだ、俺は」

「つつか、お前も仮面の下は女顔なのか？」

「……ああ、オリジナル残念ながら式と寸分変わらない顔だよ」

「へえ……というか、あいつの顔はあれが本当の顔か？ 前に顔の形変えてたような記憶があるんだが？」

「そんなに嫌なのか？」

フェイクは仮面を被っていてもわかるぐらいに嫌悪感を出す。

まあ、元が元だからわからなくもないが……

「あれのコピーなんだぞ？ 普通は死に程嫌だ」

「……お前も苦労してんだな」

そういうラカンだが持ち前の気合で穴を掘っていた。

この男は気合さえあれば、復活できるし……不老不死にもなれるのでは？ まあ、一応はラカンは帝国の人間である、基本的に帝国のためになることなら何でもする。

「それにしてもこの頃は戦争が無くていいな」

「はっ、当たり前だ！！ 姫さんが頑張ってるしな！！」

「まったくだ、第三皇女と姫さ……今はアリカ女王様だけ？ 二人のおかげで戦闘は膠着状態だしな」

「……ああ、うまくいけば和平にも持ち込めると言ってたな」

「会えるのかよ?!！」

「ナギを秘密裏に合わせるのにな」

「おい!! フェイク!!」

「……彘？ お前ら、恋仲だったのか？」

「いや？ どちらもなんか一歩踏み出してない。お互い好きなのが丸見えなんだが……ククク」

「んなわけねえだろ?!！ 俺は姫さんの騎士だからだよ!!」

一応、フェイクは隠密性だけを主眼におけば、夷よりも能力が高い。まあ隠密性がなくても夷なら突破するからなんだが……一応は夷の情報源となっているフェイクの隠密性は最高峰である。

「さてどうだが？　言ってみるよ、初めて会った時に惚けていた奴は誰だ？」

「ちょ？！　そ、そんなつもりは……確かに美人だなあとは思ってたが　って何言わせてんだよ！！」

「お前が勝手に言ってるだけだろ？」

黒い、黒フェイクが現れた。

「お前って意外に黒いな……」

「黒い？　良い性格と言ってくれ」

そんな会話をしながら木を植えていくラカンとフェイク、そしてナギ、一応テオドラからの許可は下りているので、兵士に見つかっても何もされないようになっていいる。まあ、党の本人たちは残滅すればいいと思っっているので、襲ってきたら即、死あるのみである。

「あー、にしてもこの前はやられたなあ……」

「仕方ない、相手が相手だ。大天使に勝てるほど、この世界の人間は規格外じゃない」

「だが悔しいぜ……あー、帰ったらナギと喧嘩だ喧嘩」

「おお、いいぜ？　俺に勝てる奴はいねえしな！！」

「孤児院には手を出すなよ？　シュワの説教受けるの、俺なんだか

らな？」

「やあフェイク」

そこにフェイトが転移してくる。無表情であいさつするが……声はなにやら楽しげだった。

「おお、フェイト、兄弟たちの調整はどうだ？」

「もう少しかな？ 2番目と3番目はあと少し……ってところかな？ 後の兄妹……ああ、女の子もいるんだよ」

「へえ……俺の兄妹たちは平行世界で頑張ってるからなあ」

言っていないかったが、夷の作った人造人間はおよそ一万、全て自立的行動可能で夷からチートな能力を受け取っている。身体能力は転生者クラスを圧倒するほどだが、フェイクは最初の人造人間だったので高スペックである。ちなみに名称はフェイクシリーズ、全員平行世界で転生者やら神が、暴走した時に夷に知らせる役割をしている。ほとんどがその世界で普通に過ごしており、全員家族か、恋人持ちである……唯一持っていないのがフェイク、夷にこき使われており、持っていない……実はエヴァが初恋の人である。

「そつえば、君のオリジナルは？」

「連合で木を植えてるよ」

「……すまないね、僕たちも今は孤児の救済とかで忙しくてね。兄弟たちが動けば人員を回せるんだけど……」



「おいおい、コイツが完全なる世界の幹部か？ ガキじゃねえか」

「というか、俺と同じくらいだな」

「……まあ外見がこうでも、こいつは何百歳だからな」

「まあ君たちより生きているのは間違いないね」

「一応、俺は稼働試験も入れると百年近く生きてるんだが」

「……お前ら人間じゃねえ!!」

「だって人造人間ホームクルスだもの」

「だって人工生命体だよ？」

「人間じゃないね(ぞ)」

「な、なんじゃそりゃあああああああああ?!?!?!」

「傑作だな、人形なら……人形らしく感情を失くせばいいものを……」

誰かの声があった瞬間、フェイトの腹から何かが出てきた……いや、これは間違っているな、何者かが刺した剣が腹を突き破っていた。

「ガ、ハッ？」

「フェ、フェイトオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

「初めまして、人形君……お久しぶり、下等な筋肉ダルマ、私の名はルシフェル。いずれは神になる男だ」

「なっ?!?! てめえは!?!」

「……天使つて奴か、姫さんの借りが返せそうだな」

ラカンが驚きながらも、自身のアーティファクトである『千の顔ホ（ヘーロース・メタ・キヤロゾーザーン）を持つ英雄』を発動して、古今東西、あらゆる武器をルシフェルに向けて発射する。しかし、それを左手の剣一本で捌ききるルシフェル。

フェイクは重火器を手に持ち、ルシフェルに向けるが……フェイトが壁となつて撃てない。

「くそがッ!?!」

「僕に、かまわ、ず撃て……フェイク」

「撃つてるか! このドアホが!?!」

「カハハハ、人形同士で茶番をありがとう……死ね」

次の瞬間、剣を引き抜き……フェイトの心臓を突き刺すルシフェル。その瞬間、フェイクの中の何かが切れた。フェイクの体から、神力があふれ出す……長年、夷の近くにいたせいかわ、それともあらかじめ夷が仕込んだのかわからないが、低級の神程度の神力がフェイクから流れていた。

「キサマアアアアアアアアアアアアアアアアアア!?!?!?!」

「人形風情が……神の力を使うとは！！」

「……黙れや、さすがの俺も目の前でそんな事されちゃ黙っていらねえよ」

「ああ、俺もだ……千の雷、掌握！ 術式兵装……雷天大壮！！」  
ラカンが空中に数本の巨大な剣を対空させ、自身の腕にはガントレットと腕の周りに滞空している自身の腕よりも一回り大きい義手のような物を浮かべていた。いつものチャラチャラした雰囲気はなくなり、代わりに目を見た物をショック死させるほど、目を細くしている。

ナギも闇の魔法を発動させる、そう言えば言っていなかったがナギは杖をブレスレットに変えているので、原作のようにデカい杖を持っていない。体から電気が流れ、目が赤くなり、髪が以上に伸びる……イメージ的にはスーパーイヤ人3である。（原作のネギをイメージしてください）  
フェイクも身の丈ほどもある銃を二丁もだし、体の周りにはファンネルのような物を滞空させていた。

「貴様だけは……殺す！ オリジナル 式の因縁の相手だろうとなんだだろうと知ったことじゃねえ、フェイク てめえは俺が殺す」

「おいおい、フェイク、俺様も忘れてもらっちゃ困るぜ？」

「……よくも姫さんを攫ってくれたなあ、クソ野郎、その顔ぶん殴ってやるから待ってる」

「ク、クククク……クハハハハハ！！ 大天使である私を殺す？ 人間二人と人形が？ 無理な話だな」

「やってみなきゃ」

「わからなねえだろうが!!」

「くらいやがれ!!」

フェイクが引き金トリガーを引くと、巨大な銃弾が吐き出される、追撃にファンネルのような物……ウィスプからエネルギー弾が発射される。それを避けるルシフェルに、ラカンが突進し浮いている剣を飛ばしながら、浮いている義手を振りかぶりルシフェルめがけて突き出す。

「甘いんだよお!!」

しかしルシフェルに義手を切られるラカン、飛んで行った剣も弾かれる、が。

「ラカンインパクト!!」

渾身の拳がルシフェルに当たる、名前はふざけているがこの世界最高峰の気で構成されたラカンの拳は幾分か、ルシフェルに通る。

「グツ?! 小癩な m」

「右腕解放!! 千の雷!!」

ナギが体内の電撃の一部を解放し、右腕から出す……そのままルシフェルに当たるかと思っただが、障壁に当たって霧散する。

しかし、電撃のせいで見えなかったがナギの後ろから夷がボウガンを構えながら、走っていた、そのまま引き金を引く。

「バカが！！ そんなもの……なに？！！」

ボウガンの矢は障壁を突き破り、地面に突き刺さる。後ろにバックステップしながらルシフェルは盛大にうろたえる。

「天使の障壁を破るだど？！！」

「ハッ！！ さすがは蟲ピンだ！！ 安心安定だぜ！！」

ええ、そうなんです、何度も何度もすいません……だって使い勝手が良すぎるんですものおおおおおお！！（作者の心の叫び）

……取り乱しました、すいません。

「ハッ、負けてられねえな、ラカン！！」

「おうよ、ナギイ！！ 失敗するなよ？！！」

「そつやすやすと何度……なん……だ？！！」

突然、ルシフェルの体が動かなくなる。

その瞬間、にやりとラカンが笑う。

「俺の拳の衝撃波を利用してな、お前の神経を一時的に麻痺させたんだよ！！ 式のお墨付きの技だ！！」

「そついつこつた！！ 行くぜ！！ 両腕解放！！」

「ハッハッハッハッハ！！ 全力全開のお！！」

ナギとラカンが同時にルシフェルの懐に入り、両腕を狂いもなく同時に繰り出す。

「雷天崩拳！！」

「ラカンWパンチ！！」

その瞬間、疑似的な咸卦法が発生し、通常よりも威力が高くなる二人の攻撃……世界最強の魔法使いと世界最強の気の使い手が本気で撃った攻撃は……夷の防御を抜くぐらいの威力があった、まあエネルギーシールドだけだが。

ルシフェルは殴られた衝撃で吹き飛びながら受け身を取る。そこにフェイクが一斉射撃を加える。

「おらおらおら、避けてみやがれ！！」

「グ……調子に、調子に乗るなああああああ！！！！」

ゴッ、とルシフェルの体から神力が流れだし銃弾を弾き返す、がウイスプがそれをエネルギー弾で消し去る。

「さすが大天使だな……生半可な攻撃じゃ、殺せないか」

「ハアハア、意外に……疲れたぜ」

「ハ、ハハハ、ばててんのかよ……ナギ」

ラカンとナギはさっきの攻撃の反動が来ているのか、腕を力なくぶら下げながら息を荒く吐いている。フェイクは仮面を脱ぎ捨て、自

身のリミッターをすべて外す。

「その顔……あの転生者とそっくりだな!! 憎い……たかが力を貰った程度の存在に私が圧倒されるとは……」

「……黙れよ」

フェイクが消え、ルシフェルの障壁をぶち破りながら顔をぶん殴る。クロックアップで鍛えたはずのナギとラカンですら視認不可能だった、そのままフェイクはジェリコム13をルシフェルに向けて発射する。障壁を紙をちぎる様にぶち抜く、その弾丸は、フェイクの今の状態を表しているかのようにだった。

「ぐうう?!」

「まだまだ、てめえはこの程度で死ぬような体はしてねえ筈だ」

接近したフェイクが両肩にジェリコを向けて……至近距離から発砲する。フェイクの神力と共に発射された弾丸は両肩を食い破り、胴体からちぎれる。絶叫するルシフェルを冷たく見るフェイク、ナギたちは啞然としながら見る。

「お、おいフェイクも十分化けもんじゃねえか!!」

「あの式の分身だしなあ……正直、ここまでは予想内だよ」

「さあクソ野郎、地獄に落ちる準備はできたか？」

「ガアアアア……て、転移!!」

フェイクがルシフェルの頭を吹き飛ばす前に、ルシフェルが転移する。  
標的を見失った銃弾は、地面を抉り取る……フェイクは舌打ちをしながら武器を収納する、そのままフェイトの元に走り寄る。

「フェイト!!」

「や、あ……フェイク、ゆ、だんしたよ」

「くそ、ナギ!! 回復魔法薬を持ってねえのか?!」

「持つてるわけねえだろ?!」 フェイク、てめえならあるだろう?!」

「……あることはあるさ、オリジナル式から渡された、再生魔法薬が……だが今のフェイトが耐えられるか」

「……ふふふ、なんでだ、ろうね。いまま、で生き、たいとは思わなかった、のに……死ぬ、ちよく、前になって死にたくないって思ってしまうよ」

「……それが感情だよ、バカ野郎が」

フェイクは笑いながら、フェイトに言うと、少し口の端を上げて薄く笑うフェイト……フェイクはどこから出したのかわからないが、再生魔法薬を出す。

「（別世界のフェイトの兄妹が作った物だ……効かない筈がない!）」



「ぐ、ぐあああああああああああああああああああああああああああああああ  
ああ？！……！！」

叫び声を上げながら、もがき苦しむフェイト。

「ナギ！！ フェイトの体を固定しろ！！ ラカンも頼む！！」

「任せておけ！！」

「おつよ……！！」

「……頑張れよ、フェイト」

「……………一方、ルシフェルは

「ハアハア……グツ、人形があ まあいいさ、今度は人質を  
取ってし」

『ほお……落ちるところまで落ちたな、ルシフェル』

ルシフェルが振り向くと、そこには体から虹色のオーラを出しながら  
ら笑っている夷と背後に出ているスクナが居た。

『夷……早く殺さないのか？』

「なっ？！！ リヨウメンスクナだと？」

『屑が……貴様が我の名を呼ぶとはな』

『ハハハハ、よお大天使さんよ……どうだい？ 神になろうとしたら、俺の分身にボコボコにされた感想は？』

笑っている夷だが、その殺気は常人が受ければシヨック死するほどである、それを耐えているルシフェルも少しは実力はあるが……夷と比べると月と蟻程度の差がある。

『お前には色々されたしさ、復讐したいと思つてたさ……でもさ、睦月や望をためえの配下に殺されて、あやゆくアリカが酷い事されそうになつてさ、思つたんだよな』

ルシフェルは答ええない、徐々にリミッターを外している夷の力に恐怖を感じていた。

『お前には永遠に生きて償ってもらおうとな』

次の瞬間、夷は何かをルシフェルに向かって投げる。反応しきれなかったルシフェルにそれは刺さる。

「……ク、ククク、なんだこれは？ こんな物で私を」

『おい、夷、あれはたしか別世界からもらった薬ではないか？』

ここで夷に視点を返そう……。

||||| 夷視点

ああ、目の前の奴を殺して解して並べて揃えて晒して刻んで炒めて千切って潰して引き伸して刺して抉って剥がして断じて刳り貫いて壊して歪めて縊って曲げて転がして沈めて縛って犯して喰らって辱めて狂わせて泣かせて命乞いさせてやりたい衝動を抑えながら、俺はとある薬を塗り込んだナイフを刺す。久々に七つ夜使ったなあ。

「な、何の薬だ？」

『ちよつとした精神安定剤と恐水薬と麻痺薬を合成したものだよ』

ちよつとした贈り物を改良してみた。恐水薬は……水を飲むか、酷い時には水を見ただけで痙攣を引き起こす作用を起こす薬だ、まあつまり水に恐怖することになる。精神安定剤は奴に狂ってもらうと困るからな、ぎりぎりのところで精神を保たせることにした。麻痺薬は……うん、何も言わない、何も言わない、とりあえずエヴァには使っていないぞ？　ほんとだから信じて。

『主、それでどうするんだ？』

「ま、麻痺だ……あ、つく」

お、効いてきたか……えーと、たしか影の倉庫に……あつた、あつた。中身が全部水の別荘、今日のために調整したんだ。俺が一年かけて防御結界と封印術式をやって、入ったら二度と出れない別荘。まあ……言わなくても使い方は察してくれ。

「や、やめ、てく、れ」

「……命乞いかよ　　そんなもので許すと思ってるのかよ」

スクナがこぶしを振りかぶり……塵ルシフェルの足を潰す。麻痺でうまく声を  
出せないのか、かすれ声しか出せないようだな。

ああ、そういえばなんで俺がここにいるか？ それはな、フェイク  
からの連絡の後、この太陽系全域で反応を探して、ハイパークロッ  
クアップで追ったからだ。……なんかフェイトも殺しかけたらしい、  
今念話でフェイクから連絡が来たな……意識は戻ってないらしいが  
な。

「さあ……塵、覚悟はいいか？ お前は今から永遠にこの別荘の中  
でもがき苦しむんだ……一生涯死ぬこともなくな」

この別荘は水だけだが息ができるように俺が改造してある。まあ水  
中水泳を楽しむために作ったんだがな、アスナのために……で巡り  
巡って拷問用に、ははは鬼畜と言えはいいじゃないか……殺  
人鬼になった時点で覚悟は決めている。

「い、いや、だ、私はか、みになる、んだ、かみに」

『……神になっても何も変わらんよ、少なくとも我はそうだった』

『んじゃ、楽しんで来い……自分のしてきたことを悔いながら』

「ハ、ハハハハハ！！ 貴様は、貴様はどうなのだ！！ この世  
界を引つ掻き回し、あまつは運命さえも変えた！！ 貴様の方が断  
罪すべき存在だ！！ そうだろ？！！ 両希夷！！」

「……だからどうした？ 運命？ 知ったことじゃねえんだよ、俺  
は俺のやりたいようにやってきた」

神卦法を解いて、仮面を外す……寒い、宇宙だからな。

ルシフェルを見る、怯えながらこっちを見る。

「これまでもそうだった、これからもそうだ。俺の幸せを脅かすなら……排除してみせる」

「貴様は……貴様は危険な存在だ、いつか断罪される!! その時まで待っていていよう、貴様が断罪される日を夢見て!!」

「……お前が見るのは悪夢だけだ、理想を抱いて 苦しめ」

そのまま達磨状態のルシフェルを掴み、別荘に放り込む……そのまま吸い込まれるルシフェル、完全に吸い込まれたのを確認して、俺は影の倉庫の危険物の場所に封印する……ああ、終わった。

「終わった、終わったよ、木乃香……父さん、母さん、因縁が終わったんだ」

「（……帰るのか？）」

「（帰る？ 冗談言つな、エヴァを残して行けるかよ、後二十数年過ぎすさ……なに、九百年よりも短いだろ？）」

俺はそのままゆっくりと目を閉じながら……火星の周りを飛ぶ。

「（終わったぞ、睦月、望……ごめんな、助けられなくて）」

「式さん……」

え？ と思った俺は後ろを向くと、そこには

||||| 数か月後

「ここに……ヘラス帝国とメセンブリーナ連合の戦争停止を宣言する！！」

アリカがキリつとした表情で言う、隣にはヘラスの皇帝が立っていた。

この戦争を引き起こしたメガ口の野郎どもは、証拠がなかったので逮捕は難しかった……まあ死んでも俺が魂を捕まえて、少し拷問すればいい話なんだがな。

「そして……戦争停止に尽力してくれた、紅き翼全員には勲章を与える！」

ぶつちやけると今は戦争の終了を宣言している。とりあえずは……眠い、アスナは寝ている、チャチャゼロは俺の頭の上で刃物を研いでいる……うーん、頭の上が粉まみれになっていく。

「では紅き翼のリーダーである……ナギ・スプリングフィールド、前へ」

アリカがナギを呼ぶ、ナギが緊張しながら壇上が上がっていく……あいつって意外に上がり症なのか？ あ、こけた。

「おい！ ナギ！！ 何してやがる」

「駄目ですよ、ラカンさん」

「タカミチの言う通りですよ」

「……はあ、やっと仕事から解放される」

「フフフ、ああ、これから私は死ぬんですね？ 向こうに戻ったら桜に……」

「なんじゃなんじゃ、全員もつと喜ばんかい」

「ゼクト……あなた、会った時から性格変わりましたよね？」

「むー、うるさい」

……はあ、こいつらはまったく。

「なあ式……」

「なんだ？ エヴァ？」

「私に会わせたいと言う人物がいるそうだが……誰だ？」

ああ、そうだ、フェイクに伝言しておいて、と頼んだっけ？ ああ、エヴァに会わせたい人物と言うのは……造物主の事だ、はあ……なんだってハイパークックアップの制限が解除されて過去に行ったら、エヴァの吸血鬼になった理由を知っちゃったんだ？ 幸運Dは伊達じゃねえ。

「まあ会ってからの楽しみ」

「……では、紅き翼のおかげで、無用な血が流れるのを阻止できたことを感謝する。受け取ってくれ、ナギ」

アリカがすごい笑顔でナギに渡している、あ、見とれてる……まあいい笑顔だな、あつた当初はあんな顔できるとは思ってたなかつたしなあ。あれ？ 小声でなんか言ってる？

「（ナギ……本当にありがとう）」

「（い、いや俺は……あんたのためだからやったんだ）」

おいおいおいおいおいおいおい！ 告白しやがった、告白しやがったあああああああああああ！ あんなナギが……！ 鈍感のナギが告白したあああああああああああ……？！

「（こ、こんな場所で言うでない……私はお（）

しかし、その次の言葉は出なかった。

突然、魔法使いらしき者たちがアリカの周りに現れる……おいおい、なんだよ……！ いいところだったのに……！

「……アリカ王女、いやアリカ・アナルキア・エンテオフユシア……！」

「下郎が、何の権利で私を呼び捨てにする……！ 今は授与式じゃぞ……！」

「先代の王を暗殺し、完全なる世界と手を組んでいた事はわかって



いる!!」

は？

「な、なに言つてやがる!! 完全なる世界は

「部外者は黙れ!! ……アリカ・アナルキア・エンテオフユシア、  
貴様を国家反逆罪の容疑で逮捕する!!」

場が騒然となる……が、アスナが声を上げる。

「嘘!! 姉さんはそんな事する人じゃない!!」

「アスナ、私は

「異論は認めん、連れて行け!!」

アリカの体を乱暴に扱おうとした魔法使いに、俺は殺意をぶつける。  
急に動きを止める魔法使いの二人、釘刺して置くか。

「おい、もしもだ……アリカに変な事してみる、メガロをこの世か  
ら消し去るからな？ わかったな？ わかったなら丁重に扱えよ？」

コクコクとうなづく魔法使いたち、連れて行かれるアリカに手を伸  
ばそうとナギとアスナが走り寄るが、俺が服を掴んで止める。

「何しやがる!! 式!!」

「離してよお!! 離して、姉さん!! 姉さん!!」

「落ち着け、冷静に考えろ！！ アリカは俺たちと行動していた、容疑にかけられることなんてしてねえ……大丈夫だ」

しかし俺の言った言葉はすぐに否定される。

ありもしない容疑、証拠、証人……まるで出来レースのようにすべてが用意され……あつという間に、重戦争犯罪人として逮捕拘束されていたアリカは処刑されることとなった。

……あのさ、これでメガ口潰しても非難されないよね？

## 火星緑化計画と夷の戦い（後書き）

夷「えー、作者を修せ　ごほん、お話してきたので作者の代わりに来た、夷です……ではタイトルコール！　ネギま！ら　」

作「ネギま！ラジオー！　ザマアああー！！」

夷「な、なんで生きてる？！！　てめえ細胞の欠片すら残さずに消滅させたはず？！ー！！」

作「ケファイアだからな、冷蔵庫のケファイアから復活した！！」

夷「俺より化けもんだろー！！」

作「そんな事より」

夷「そんなこと？！ー！！」

作「ラスボスしゅーりょー！！」

夷「あのさ……俺って、あいつの足潰して、薬打っただけだぞ？」

作「あー、いやあ……せつかくナギを強化したから、どうせだったら戦わせようと書いていたら、あんなことに」

夷「そんなに強いのか？　ナギは」

作「ぶつちゃけると、原作の造物主なら瞬殺できる」

夷「強くなりすぎだろ!!」

作「仕方ない!! 俺の小説内でのキャラは大体強化されてるんだよ! 変な方向に強化したキャラもいるが!!」

夷「アスナのことかああああああああああ!!」

作「まあそれは置いておいて」

夷「置くの?! まあ今回は強引じゃね?」

作「まあな、どうしてもアリカは処刑にかけなければいけなかった。とにかく処刑だ、処刑にかける!!」

夷「なんでさ!!」

作「いや、死んだことにしてナギとイチヤつかせよう」と

夷「いや、あいつらキスの一歩手前まで行ったよ!! というか、あいつら会うたびに桃色空間発動中だよ!!」

作「お前らはピンク色だな……本当にノクターンに投稿するか? というか投稿の仕方がわからない、誰か教えてください」

夷「おい、未成年!!」

作「俺の友達で、同人誌書いてる奴いるから問題なし!!」

夷「ありまくりじゃ、ぼけええええええええ!!」

刹那「そうです!! えっちいのは駄目です!!」

夷「なぜ、刹那?!?!」

作「めっちゃ書きやすい、と言うかメインヒロインだ」

木乃香「作者はん? ウチやる? そうやる?」

作「ハイ、すいません、変身しながらハンマー向けないで、ディエンド怖いです」

夷「そう言えば……アンケートがあるやら、ないやら」

作「ああ、そうだった……フェイクのヒロインの事」

フェイク「は?」

作「決まっているのが茶々丸だけなんだが……ハーレム系だからさ、フェイクもそうしちゃう、ついでにネギも!!」

キョウ「弟を婿にはやらせんぞ!! やらせせんぞおおおおお  
おおお!!」

夷&フェイク「帰れブラコン!!」

ネギ「ぼ、僕ですか? あの……僕まだ生まれてないんですが」

作「知るかあああ!! なので、アンケートに協力してほしいです……お願いいたします!! 人数については未定です、フェイクとネギのヒロイン決定に協力を!! あ、真名、刹那、木乃香、

古は駄目です」

エヴァ「式のヒロイン私だあああ!!」

夷「おい、カオスすぎて収拾つかねえぞ!!」

作「ネギ君!! フェイク!! 次回予告!!」

ネギ「あ、はい!! 次回」

フェイク「処刑? いいえ、バカカップルの誕生です、……え?」

作「次回は時が飛んで二年後!!」

夷「嘘おおおおお?!!!」

造物主「わ、私の出番は?!!!」

作「ない、今度閑話でな」

造物主「( ^ ^ ) どうしてこうなった!??」

ネギ「それでは……ちえ、ちえりお!!」

フェイク「マジでアンケートするの?」

(注 マジです)

「……………今日の楽屋  
ルシフェル「こんな退場ないよ」

フェイト「なんか僕まで退場しそうなんだけど」

茶々丸「正ヒロインは私の物です」

タカミチ「はあ……………竜種の相手がつまんないなあ」

クルト「ギギギ、負けたくない!!」

ガトウ「……………強くなりすぎだろ」

詠春「アハハハ、おしまいだあ、帰ったらタヒる」

ゼクト「ワシはそろそろ退場かの」

アル「私は麻帆良で出番がありますので!!」(ドヤァ)

アリカ「ナギとイチヤイチャ？ フフフフ」

アスナ「……………出番」

真名「私にも」

月詠「ウチにも」

千草「ウチの話はまだなん？」

ラカン「俺はさいきょー!!」

テオドラ「私にも出番を」

作「なあ夷、どうしてこんなにカオスになってしまったんだ？  
教えてくれ、俺の思考は何も言ってくれない」 教

夷「お前の頭の中がカオスだからだよ」

作「（ ^ ^ ）だがそれがいい！！」

夷「スタッフ」

作「うわ、お前ら何するやm」

（注 アンケートに協力してください……いや、本当に）

フェイク「スタッフ……そんなプラカードで大丈夫か？」

スタッフ「（ . . . ）知らんがな」

限りなくカオスに近い（ry）

作「……いい、加減に、し、ろ（ガク）」





作「それではどうぞー!ー!」

スタッフ「(、ー、)(、>|、( 流石だよな俺ら」

作「お前ら、後書まで少しJOHANASHIしよつか」

処刑？ いいえ、バカップルの誕生です

……よお夷だ、少し待ってくれ、少しドアホに説教するから。

「離してください！！　なんでアリカ様を助けに行かないんですか！！　明らかに冤罪ですよ！！」

「……クルト、待つんだ。俺も捜査している、はやまるんじゃない！！」

「そうだよ！　それにクルトが何ができる？！　君じゃ　」

「……ナギさん、なんであなたが何もしないんですか！！　英雄なんでしょう？！！　助けてあげてくださいよ！！」

「クルト！！　一番つらいのはナギなんだぞ！！」

詠春、少し黙ってる……ああ、これだから　ガキはつけ上がるとめんどくさい。

「そうじゃ……その前のように脱走でもしたら、それこそメガロの思う壺じゃ　」

「ここは証拠を地道に集めましょう」

「ッ！！　あなた方は……それだけの力がありながら、なにもできないんですか！！」

「ッ！！」

ナギの表情が苦しく歪む、あれから元気がないナギ。ラカンはテオの護衛に居るから、この場にはいない。……どうしてこうなったか？ ああ、クルトがアリカを助けようと言ってくるんだよ……できれば苦労しねえよ、実質この世界を牛耳ってる蟲は強大な力を持っている、個人戦力なんぞ、目に入らないほどだ。

同じ蟲でも、あのくそじじいとは大違いだな、あつちは妄執の塊だったから殺すのに躊躇がなかった。だがメガロを潰せば……麻帆良もつぶれる、最悪、他の組織が攻め込んで被害が及ぶ可能性がある……この前、刀子とシャークテイを保護して麻帆良に送ったんだ。あいつらが居たんじゃ、麻帆良を戦火にさせるわけにはいかない……おかしいなあ、俺ってここまで甘い奴だったか？ 家族以外の奴らはどうでもいい存在だったのに。刹那、素子、月詠……また会いたいな。

「……もついいです、なら自分で助け出しますよ!!」

「バカなことを言つな、どうやって?!」

「ガトウ師匠……いえ、ガトウさん。簡単ですよ、僕がメガロに入ればいいんです、壊すなら内側からです」

「……バカを言つな、何年かかると思っている。資金は？ 人材は？ 情報は？ ないない尽くして生き残れるほど、あそこは甘いかな」

「でしょうね、僕はやりますよ、たとえ何年かかっ

」

ドゴン!! と言う音と共に俺は耐え切れず、クルトの顔に拳を入れる。足軽を使ったのでダメージは無いはずだが、吹っ飛んで壁に

音を立てながらぶつかる。

「てめえ……いい加減にしろよ？ 子供だから何言っても許される  
と思ってるのか？」

自分の体から殺気が出ていることがわかる、あらかじめエヴァとア  
スナは退出してもらっている……まあアスナは少し取り乱したが、  
大丈夫だ。

さて、世間知らずのガキに現実を教えようか。

「てめえが頑張ってもな、なんも変わんねえよ」

「な、なんで決めつけるんですか！！ やってないのに！！」

「……ガキが、いいか？ お前が思ってるよりも、この状況は簡単  
じゃねえんだよ……組織つてのはそういうもんだ」

何度も見てきた、この九百年間、様々な組織が腐っていく様を。ど  
んだけ高尚で潔白な組織でも……時間がたてば腐敗する。何度も、  
何度もだ。

俺とこいつとでは人生経験が違いすぎる、昔の俺ならクルトに賛成  
してたかもしれん。まだ正義の反対が悪だと思っていた頃の俺なら。

「わかりませんよ……あの人は頑張っていました、この世界のため  
に、いや、国のために！！」

「んなもんな、俺たちがわかってんだよ！！ あいつがただだけ努  
力したか！！ どれだけの人間を救ってきたか！ そんなもん、わ  
かってんだよ！！」

「ならなせ?!! 　なぜ助けられないんですか?!!」

「……この戦争の恨み役が欲しかった、それだけだ」

「なっ?!?!!」

……実際、この戦争は俺があの時（第五話参照）、マキシマムドラ  
イブを完璧に決めておけば起きなかつたはずだ。俺が引き金を引い  
たと同じだ事だ、だから戦争終結に協力したんだがな……とりあえ  
ず、都合のいい恨みの対象が欲しかつたんだらう。

アリカはウエスペルタティア王国の女王、さらに民との親交も厚い、  
人気があつたし……なにより民の事を考えていた、まあ第一に考え  
ていたのはナギとアスナだらうがな。

まあこれが今回、仇になつたな。有名人が不正をやつた批判される  
……簡単に言うところという事だ、別に証拠なんて金の力と組織の力  
があれば、でつち上げなんて簡単にできる。信じていたものに裏切  
られた、人間はこういうのにすぐ弱い、信じていたら信じていた  
分、裏切られた時の衝撃が強い……まあこれだけじゃないがな。

「この戦争は帝国と連合の痛み分けで終わった」

「そうです……アリカ様が頑張っていましたから」

「だがな、友人恋人家族兄妹夫妻……大切な人を失くした奴らの悲  
しみはどうすればいい？」

これが俺が戦争で一番厄介な事だと思う、戦争は勝つただけでは終  
わらない……大切な者を奪われた奴らの憎しみはすさまじい、実際  
俺も木乃香が居なかつたら絶望して別荘で一生暮らしてたんじゃない  
? いや、エヴァにぬっ殺されるか……このごろは心臓刺され

てもいうか、心臓動くし……いよいよ人間やめてきたなあ。

「(いつも通りであろう?)」

「(と言うか、頭が吹き飛んでも動いてるってどう思う?)」

「(それはゾンビですか?)」

「(いいえ、ただのシスコンです)」

「(なにこれこわい)」

とスクナと漫才してる場合じゃねえ……シリアスはシリアルになってたまるか畜生。

「そ、それは」

「……はあ、まあ、手段がないわけじゃない」

俺は着物の中から天井まで届きそうな勢いな書類を出す、フェイクシリーズ総出で情報を集め、とある神様から送ってもらったメガ口の糞蟲どもの『一部』の不正の記録である、この量が後十個ほど続く。

「なっ?!?!」

「メガ口の糞野郎どもの罪の記録だ。……ああ、これでも一部だからな? ああ、それと……そこで腑抜けてるアホに連絡だ」

「……………」







そして現実世界の三時間で三年分の修業をしてきた俺とクルト、俺はツルツルの顔で出てきたが……クルトは老人のように老けてたらしい、そんなにきつい事したか？ 別世界から拉致ってきた指導者たちに教鞭を振るってもらったんだが？

まあ、そんなこんなで……日々が過ぎて行つた。アリカに差し入れ（アスナの写真）を上げたり、生き残りの転生者を追つたり、造物主とエヴァが会ってあやゆく殺しかけたり、平行世界にちよっかい出したり、あの塵墮天使をとある世界に運び込んで、そのとある人物に怒りの発散させたり、老衰や事故死したメガロの奴らの魂を散々拷問して消滅させたり、紅き翼全員のスキルアップに協力したり、フェイクシリーズを新造してクルトの配下にしたたり、フェイクが調子のもつて反逆したのでデコピン一発で制圧したり……なんやかんだであつとう言う間に二年がたち、アリカがケルベラス溪谷の処刑がされる日が来た。

〓〓〓〓〓〓 第三者視点

またまたケフィアでございます、ええ夷に脅されてやらされました……俺作者なのに。

ゲフンゲフン、今はケルベラス溪谷……特殊な環境で、まったく魔力が使えない場所であり、魔法使いにとつては入ったら最後、生きては出れないと言われている場所である……まあナギクラスであれば問題なし、タカミチも抜けるだけなら無傷で可能である。

「ではこれから、逆賊……アリカ・アナルキア・エンテオフュシアの処刑を始める」

メガロの一人が処刑の方法を言う。

逆賊、アリカ・アナルキア・エンテオフユシアはウエスペルタティア王国の女王と言う身分がありながら、戦争の発端である『完全なる世界』に協力し、あまつは権力が欲しいために実の父親も暗殺した。

これは重大な裏切り行為であり、魔法世界に類を見ない凶悪な犯罪行為である。通常ここは魔法による処刑のはずだが、それだけでは生ぬるい……こやつには古き残酷な処刑法である、ケルベラス渓谷で魔獣に食い殺されるのが良いだろう。

この残酷さならば、大戦の中死んでいった者たちや魔法世界全土の民の怒りも収まることだろう。

……どこかの世界からものすごい殺気を感じるが、気にしない……したらこの場にいるメガ口の蟲共は皆殺しであろう。

魔獣のうなり声が鈍く聞こえる、特殊な環境で生まれた魔獣たちは……新鮮な肉が落ちてくるのを待っている。

一方、アリカの顔は二年間投獄されていたとは思えないほど、清々しかった。この二年間、夷はしょっちゅうアリカの牢獄に顔をだし……アリカに花嫁修業をさせていた、なぜ？ ハッハッハ、野暮な事は聞いちゃいけない、その時のアリカは生き生きしていたと言っておこう。

たまにアスナも連れて、姉妹水入らず（ただし鼻血が出るが）の対話をさせていた。アスナもこのときばかりはゲームもせず、実の姉との話に夢中であつた……そこでの恋バナでの話題でアリカが仰天するような内容があつたが、それは別の話。

「では、これより処刑を開始する」

ついにメガ口の議員の命令により処刑が開始された。方法はいたって簡単、歩かせて渓谷に落とせば、はいおしまいである。

槍を持ったメガ口の私兵である兵士がアリカに歩くように言う。

「歩け!!」

「触れるな! 自分の足で歩ける……」

兵士を一喝し気丈に歩くアリカ、しかしその足をよく見ると震えていた。

とうとう処刑場所についたアリカ、そこにメガロの議員が問い掛けた。

「……最後の情けだ、アリカ・アナルキア・エンテオフユシア。なにか言い残すことはあるか?」

「……私は、私は王国が好きだ。王女に……いやウエスペルタテイア王国に生まれたことを……誇りに思っている」

そして止まっていた足を踏み出し……暗い暗い渓谷に落ちて行った。

|||||アリカ視点

後悔が無いと言えは嘘になる。

私の一生はまさに王国のために費やされた……王女として、この国をゆくゆくは引っ張っていくために努力は欠かさなかった。妹の事も後悔していたが……今では安心している、あの子は私がいなくても大丈夫、そう確信できた。

落ちていく感覚が鈍い……風景がゆっくりとしている。これが……走馬灯?

この二年間、ずっと監獄にいて……式が暇そうだからと、私に一般

家庭の知識を叩き込んだ。……それは始めてやることばかりだった、料理、洗濯、子供のあやし方、私が知らない事ばかりだった。これを一般の家庭ならば普通にやっていると聞いたとき、なぜかナギと私とのcod            なななぬsbhdぶhfbc(アリカ暴走中) 本当に式には助けてもらいすぎた……初めて会ったときは嫌悪していたと言つのに、なぜじゃろうか？    もう……何十年も昔の話のよ  
うな感覚だ。

「(ああ……私は幸せだったのか?)」

幸せだったと思いたい、アスナ、式、エヴァ、ガトウ、詠春、ゼクト、アル、ラカン……そしてナギ、こんなバカな王女のいう事を聞いてくれて、力を貸してくれたバカどもだ。もう、会えないが

あれ？

「(なんじゃ？ 眼が痛い?)」

こすってみると、ほのかに付く水……ああ、涙か？

涙など……とうの昔に枯れ果てたと思つていた。久しぶりに泣いたのか、私は。

いやだ

「(何を言つておる)」

いやだ

「(後悔など)」

いやだ

「（あるはずが）」

助けて

「（あるはずがないんだ！！ 私は助けを呼んではいけない！！）」

助けて、ナギ！

ナギに会いたい、触れたい、叩きたい、話したい、笑い合いたい……  
…ナギナギナギナギ、ああ、なんで気付かなかったのか？ いや、  
必死に隠しおおしていただけか？ …… もう死ぬんだ、いい……じ  
やる？

「（私はお前の事を……愛していたぞ、ナギ）」

涙がバカみたいに溢れる、私はこんな弱かったか？ …… エヴァが  
言っていたな、恋すると女は弱くなると。こういう事が…… ポロポ  
ロじゃぞ？ でも……悪くない。

「（……一目だけでも良い、こつちを振り向かなくてもいい。ナギ  
を……見たかった）」

ぎゅっと目をつぶる、ふと昔読んだ童話を思い出した。

簡単な童話だ、竜に吞まれかけているお姫様を助ける白い鎧を着た  
騎士の物語、最後はその騎士と恋に落ちるのであったな……そんな  
都合よくいかないさ、私は最低の女だ。今まで何人捨ててきた、蹴  
落とした？ 辱めた？ こんな血で汚れた女より……普通の女の方  
がいいだろう、むしろ私はそう思う。

「（ハハハ、死ぬ間際に考えることではないな……しかし、悪くない）」

これで心地よく死ぬる、もう重荷を背負わなくて済む……さようなら、ナギ。

そして私は血まみれの溪谷の底に

「姫さああああああああああん……！」

「（は？）」

なぜ？ 幻聴か？ なんてあいつの声が……駄目だ、今来たら……今来られたら

「（来るなあ！ 私は『お前の前』では気丈でいたいのだ）」

誰が好きな者に、最後の姿を涙でぐしゃぐしゃな顔を見てもらいたいと思うのだ？ 私は気丈でいたいのだ……！！

「ああ、もう……！ V・O・B パージするぞ……！」

「（あ、あれ？ 嘘じゃろ？）」

よく見る、こちらに向かってくる者の姿を……白い、真っ白な鎧に身を包んでいるが、その顔は忘れることのできない、忘れてたまるものか……ナギだ。

そのまま、私はナギにキャッチされる……って待て待て、この体勢

はずい……こ、これは

「（お、お姫様抱っこじゃと?!）」

「無事か?! 姫さん!!」

「なんで……なんで来た?! 私はお前とは……お前と会いたくないかったのに」

「……知らねえよ、俺は会いたかったんだよ、まぎれもない姫さんにな」

心臓が高鳴る……ま、待て、駄目だ、こいつはホイホイそういふことと言っ奴だったはずだ!! 期待などするものか!!

「バカを言うな、お前だってわかっているだろう? 誰かがこの世界の負を受けなければならぬ……たまたま私にその白羽の矢が立った、それだけだ」

そうだ、運が悪かった……それだけだろう。

私と言う生贄で、この世界に平和が訪れるなら……

「バカ言うんじゃないよ!! 俺はあんただから助けたいんだよ! ！ アリカだから助けたいんだよ!!」

「……やめてくれ、私はそんなことを言ってもらえるほど……綺麗じゃない」

「こんのおおおおお、石頭が!!」



い、イタツ！！ た、叩くでない！！

「好きなんだよ！！」

は？ い、今なんと？

「な、ナギ？」

「だああああああああ！！ どれだけ箱入りなんだよあんたは！！ 俺は！あんたが好きなんだよ！ あんたしか考えられなんだ！！」

顔が真っ赤になるのがわかる、だが……私は

「無理だ、もう私は王族でもなければ、お前の主でもない。ただ罪人と言う烙印が押された犯罪者じゃ……私よりもっと」

「ゴチャゴチャと！！ あんたの気持ちはどうなんだ、俺は言ったぞ！ 『後はお前だけなんだ』、アリカ！！」

「わ、私は……私は」

ずるいじゃないか……そんなこと言われたら、私は

「た　　て」

「聞こえねえよ！！　　なんだって？」

「助けて、ナギ！！」

「合点承知!!」

||||| 夷視点

斬る、目の前の魔獣に向かって刀を振りかぶる。

久々に二刀流で神明流を使う……ナギはうまくいったか？

二年間、俺はナギにネクストの操縦方法を叩き込んだ。そして今日、ナギに『ホワイト・グリント』をISの技術で小型化、装着させV・O・Bで渓谷に突っ込ませた……無駄なこと？ 騎士が姫様を救うときは全身、鎧って相場なんだよ、影の倉庫に腐らせておくのはもったいない機体だったからな。ぶっちゃけると俺自体が、コジマ粒子をだせるからネクストに早変わり。

「（……終わったか？ ふう、剱が使えるって便利）」

実質的には気と同じような物だからな……神明流を応用しようと思えば、できるさ。

さて……まだか？ ナギ、早くOBで離脱しろ……。

『こちらナギ!! 式、聞こえるか?!』

「ああ、どつだ?」

『……ああ、取り戻せたぜ!』

「そりゃよかった……離脱したか？」

『式！……ありがとう』

「ハッ、それは生きて会えたら言え！！ んじゃ切るぞ」

さて……消し去るか。

「……邪魔だ、神威霊装・十番・塵殺公」  
アドナイ・メザグダルフォン

俺の周りの空間が歪み、王座と巨大な大剣が現れる。

俺は王座に足を組みながら座り、肩に大剣を担いでいる……さて。

「よし魔獣共、小便は済ませたか？ 神様にお祈りは？ 部屋の隅でガタガタ震えて命乞いする心の準備はOK？ 消え失せろ、神明流極奥義……斬破剣」

神明流の極意、魔を討つための力、その到達点である……斬魔を極めた剣。魔の魔獣であるこの生物には天敵でしかない、さあ……ぶった切るぜ。

次の瞬間、その場からありとあらゆるものが消え去り、長くこの渓谷に響き渡っていた声が消えた。

俺は王座などを消し、とあるロボットを呼び出す。ある世界では冥王と呼ばれ、最強の機体の名を欲しいままにしたとあるロボット、その上位機体である。

「来い、グレートゼオライマー！！」

「……………フェイク視点」

ナギとアリカを回収した俺は、アーガマを操縦しながらモバイルスーツデッキのカメラ電源を入れる、あいつらはモバイルスーツデッキから出てないみたいだしな。様子見るか……ちなみにこのアーガマはコロニーレーザーの直撃くらってもピンピンしてられるチート艦だ。

さて、ナギとアリカは……おおう、なんか顔を赤らめて……キスしたああああああああああああああああ？！！　ちよ、待つてこれはまずい……あ、なんか言ってる、えっと？

『結婚すつか』

『……………はいっ』

ざ、罪悪感が、罪悪感がががががが！！　ぐ、ぐ……  
独り身がさみしいぜ。

とりあえず夷<sup>オリジナル</sup>h

「あ、あれは」

モニターから渓谷の様子が見える。

渓谷の谷間から……明らかに渓谷の谷間より大きい機体が出ている、全長は77m、おい、質量仕事しろ、明らかに色々な法則に喧嘩売ってる。

まあ、あの機体にそんなこと言ったら存在自体が喧嘩売っている。

「ぐ、グレートゼオライマー」

一言で表すと『僕が考えた最強の八卦ロボ』である、あの機体は夷オリジナルが解体処分されているのを奪い、それから八卦ロボと呼ばれるロボの残骸を回収、そしてゼオライマーに組み込んで出来上がったのが……無尽蔵のエネルギーによる空間跳躍・全方位バリアなどに加え、パイロットの身体を含めた、ゼオライマーの如何なる箇所が損傷しても一瞬で完全に復元してしまう再生機能、さらに全力を出した場合、宇宙すら塵に返すほどの俗に言う『烈メイオウ攻撃』、ぶつちやけた話、この機体はこの一言で済ますことができる。

『次元連結システムのちよつとした応用』

「……世界が終わる！！ 絶対撃つなよ、撃つなよ?!?!」

そう思ったとき、ゼオライマーの球体が光り輝く……オワタ。

『ヒャツハアアアアアア!!』

イ、イヤアアアアアアアアアアアアアア!!!! 火星が原子に還る?!?! やめるー!!!

||||| 三人称視点

アリカが落ちた瞬間、メガ口の議員たちは笑みを隠しながら、笑っていた。

正直、アリカが鬱陶しかった、彼らは障害が消えたことで嬉しさが有頂天になっていた……だかしかし駄菓子菓子、突然、一人の全身鎧の兵士が声を上げる。

「よーっし、こんなモンだろ」

「……速いですよ、ラカン」

「師匠が合図してからでしょうが！ この筋肉ダルマー！」

全身鎧を脱ぎ捨て、現れたのは筋肉ダルマことラカン、アル、詠春、ゼクトたち。

手には夷がふざけて開発した、超小型カメラがあった。

「お、お前たちは……赤き翼？！ ……まさか谷間の女王は？！！」

「今頃ナギが回収しとるじゃろう……今回は頭にキテおつての、少し痛い目に合わせようかの」

「フ、フフフ……しかし飛んで火に居る夏の虫だ、よもや使うことになるとは……！」

議員の一人が手に持ったスイッチを押す、すると地面から鬼神兵が出てきた。

なぜ地面からはツツコンではいけない……きつと驚かしたかったのだらう。

「こいつは普通の鬼神兵の五倍の力を持った特別製、いくら赤き翼が強かろうと」

ズガアアアアアアン！！ と言う音共に雷撃が鬼神兵を襲い、体中に電撃を浴びる、その後さらに鎌の追撃で真つ二つに裂かれた通常の五倍の鬼神兵、破壊されるまでわずか三秒……出おちと言う

のがあるなら。これだろう。

「で？ 何が強かろうなんだ？」

「き、貴様は……闇の福音?!」

そうアデアットしたエヴァであった。黒いローブ姿に、赤く目、そして髪の毛が浮き上がり、帯電した漆黒の翼を羽ばたかせた姿は墮天使を想像させる。手には真つ赤な血の様な鎌が握られていた。

「フン……私たちにこの程度の戦力で勝とうと思っているのか？」

倒したかったら、ナギクラスを三十人連れてこい」

「チツ、エヴァ残しておいてくれよ」

「エヴァ様……さすがです」

「し、しかし……王女は谷に落ちた!!! いくら赤き翼が強かろうとあのだ」

「イイイイヤツホオオオオ!!」

「生まれ、生まれと言っておるだろうがあああああ!!」

谷間からOBで出てきたのは、ホワイト・グリントに身を包んだナギと泣き顔でしがみついているアリカだった。啞然としている議員たち、ニヤニヤ顔の赤き翼面々。

「くっ! しかし、まだ私兵が」

「ちえりおーっ！！」

「レベルを上げて物理で殴ってみるとできるものね」

その声と共に兵士が議員たちの後ろから飛んでいく、議員はゆっくりと後ろを向くと……そこには私兵をちぎっては投げ、ちぎっては投げをしているアスナとタカミチがいた。

今度こそ言葉を失う議員たち、その後ろに立つ、エヴァ、ラカン、アル、詠春、ゼクト……みんなとっても『いい笑顔』をしていた。

「あ、ああああ」

「……少し頭冷やせ」「……」

そう言った瞬間、谷間から光が溢れる……次の瞬間純白の何かが出てくる。

『よお、メガロのバカども……超越者だよ』

「……な、なんじゃそりゃあああああああああ！！！」

「！！！！」

全員がツッコんだ……そりゃ明らかに谷間より大きい物が突然光と共に現れたそうなるよ。

そして球体が光り出し……おいおいおいおい、夷さん?! マジで撃つ気じゃないだろうか?!!

『ヒヤッハアアアアアア!』 消滅なら任せろ、バリバリ!

『!』



「「「「嫌あああああああああ！」「」「」」

~~~~~そんなこんなで三十分分後

「ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ」

「……（ゴゴゴゴ）」

エヴァに殴られ、体を何回も消滅させられアーガマのデッキで土下座している夷の姿があった。

その後、フェイクがレクイエムを起動、夷を正確に狙撃し、コックピットがむき出しになったところをエヴァが強襲、紅き翼全員で取り押さえた。

メガロヤその私兵たちは爆発の余波や、夷がただをこねて地面に手足をバタバタさせたときの衝撃と風圧で吹き飛んだ。

そんなこんなで……アリカの件を抹消し、アーガマに戻ってきた赤き翼だが
夷の悲鳴と叫び声をバツクに地球に宇宙観光と洒落込んでいた。

「それで……結婚するのじゃな？」

「あ、ああ師匠」

「そ、そうじゃ」

「はっ、幸せいっぱいな顔しやがって……向こうについたら盛大に祝ってやる」

「そうですね……私は桜に謝らないと」

「向こう側……旧世界ですか、にしても宇宙ですか……本当に広いですね」

キラキラと輝く宇宙、アスナやタカミチは目を輝かせながら見ている。

ちなみにクルトとガトウは魔法世界に残り、政治的なアプローチをしながらメガロを牽制している。

「すごい……これが全部星なの？」

「ああ、そうだアスナ……私も最初見たときは驚いたぞ」

「にしても式師匠は本当にすごいですね、宇宙戦艦アーガマでしたっけ、こんなものまで持っているなんて」

「師匠は昔から驚かすのが上手で……昔、修業の時はこれよりも大きい戦艦に乗らされたこともあります」

「……本当にあいつは規格外だよな、俺が使った……ええっと、ネクストだっけ？」

「（むう、あの時のナギは本当に騎士のようで……イカンイカン、口元が緩んでしまう）」

「……姉さん、嬉しそう、私もいつか」

「さてと……これから京都に向かうがいいか？」

フェイクが艦のAIに指示しながら、紅き翼全員に確認を取る。

全員がうなづくのを見て、フェイクはA Iに進路を音声入力で言う。もはや万能艦を超えているかもしれないが……そこは目をつぶってほしい。

「さあて、進路固定、全速前進……半日で着くからな」

その頃夷は……

「すま、すまなかったって!! 調子乗りすぎた!! エヴァ、少し待て!!」

「うるさい! ナギとアリカが結婚するんだ!! 私たちもするぞ!!」

「剣を振りかぶってという事かあああああ!!」

エヴァとじゃれ合っていた。

処刑？ いいえ、バカカップルの誕生です（後書き）

作「ネギま！ラジオ！！ おら、出てこい！！ バカカップル！！」

ナギ&アリカ「バカカップル言うな！！」

作「うっせ、これ書いているとき、コーヒー（ブラック）が凄い甘く感じたんだよ！！」

ナギ「お前のせいだろ？！ つうか何俺に着せてんの？！」

作「俺の中では騎士は鎧をまとい、姫を攫って行くのがベストなんだよ」

アリカ「しかし……お前はシリアスと言う言葉を知っておるか？」

作「細けえことはいいんだよ、うんなもんな月曜日の可燃物回収の日に丸めて捨ててこい、俺はハッピーエンドが書きたいんだ」

ナギ「また……んなこと言うと、批判来るぞ？」

作「仕方ない……しかしシリアスが書けないんだ、シリアルになる」

アリカ「牛乳をかけて喰ってしまえ」

作「俺はお茶づけ派なんだよ、つうか米喰え、米」

ナギ「でだ、アンケートの方は……全然票が来なかったな」

リカの結婚式、夷と千草さんの会話を予定している」

アリカ「け、結婚か……う、うぬ……！」

作「まあ……普通で終わらせるが、指輪ガールにはアスナだな。さてとこれ終わったら、閑話して、コラボ話書いて、真名を回収して、鶴子さんの魔改造、夷を殺すか」

ナギ&アリカ「待て待て待て」

作「ではタイトルコール！」

ナギ「ま、まあいいか……次回」

アリカ「結婚式、触れ合う気持ちと決別する夷」

作「次回も……！」

ナギ&アリカ「ちえりお……！」

|||||今日のフェイク診療所

ガトウ「この頃、疲れが抜けなくて……弟子の方が政治に向いてるんですが」

フェイク「もう引退すれば？」

タカミチ「私兵弱かったです」

フェイク「あれでも弱くても原作のタカミチクラスなんだが？」

アスナ「ゲーム買って、家から出たくない」

フェイク「この前買っただろ？　というかどんどんニートに」

詠春「次回、嫁に殺されそうなんですが」

フェイク「素直に諦めろ」

ラカン「俺ってやつは最強？」

フェイク「最強だな（笑）」

ナギ&アリカ「結婚します」

フェイク「嫌味か？！　独り身に嫌味かああああ！」

フェイト「僕はどうなったんだ？」

フェイク「続きは閑話で」

フェイクシリーズ「「「「僕（私）（俺）たちに出番は？」「「「」

フェイク「一万人同時にしゃべるなああああああ！！」

夷「この頃、武器の改造が楽しくなってきた」

フェイク「こんなの絶対おかしいよ」

スタッフ「我々は良い事をしてるはずなのに、なぜ拷問されるんだ？」

フェイク「作者ー」

作「ヒヤッハアアアア！ とにかく拷問だ、スタッフは拷問だ
あああああー！」

スタッフ「（ ^ ^ ）オーノー」

フェイク「俺だけがまともだな」

茶々丸「………そうですか？」

フェイク「ナチュラルに後ろに立つな、怖い」

茶々丸「愛しています」

フェイク「何言ってるのこの子?!?!」

カオスに限りなく（ry）

フェイク「だーかーらあああああー！ 俺が何したあああああ
あああああー！」

結婚式、触れ合う気持ちと決別する夷（前書き）

作「第二部、完！！」

夷「第二部？！」

作「そして本編では作者とスタッフが登場！！」

夷「いらねえよ」

作「それではレッツゴォ！！」

「今日は師匠の『結婚式』ですよ!！」

詠春……わかってるから、もうやめて

「だが断ります」

「ふらぎひもほおおおおおおおおおお!!(裏切り者おおお
おおおおおおおお!!)」

物語は一気に一か月前までさかのぼる。

|||||三人称視点

ここは近衛の家、ぶっちゃけると夷の実家である。

紅き翼の面々や夷たちはそこにいた……理由は関西呪術協会の長である、近衛栄子このええいこに報告と……桜との和解である。

「……そうなんか、まったくメガロは……」

「いや……私も脇が甘かったのじゃ」

「大丈夫だろ？ 夷が蟲ピンぶっ刺して洗脳したしな」

「ああ、『ミクロ蟲ピン』か？ ……まあな」

この数日後、なぜかメガロの議員たちが集団自殺を図ったことが事件になり、ガトウの胃に負担をかけ、倒れることになるが……それ

は別の話、とある少年は青筋立てながら、自分の師にキレていた。ここでミクロ蟲ピンについて説明を、超小型の蟲ピンであり頭に刺せばそのまま意識操作や拷問することが可能、つまりは気付かないうちに洗脳されていると言っわけだ。

さすがに今、元老院やら色々破壊するとタイムパラドックスがヤバそうなのでやらない夷だが……静かに、本当に静かにキレていた、この頃生き残った転生者たちがメガロの私兵になったと言うとても頭が痛い情報が入って来たので……イライラと殺意がたまっている夷。

「むう……栄子、あれからこっちはどうだ？」

「……多少の犠牲で済みました、もしもあのまま参加していたらもっと犠牲者が出ていたでしょうね」

「そっか……」

エヴァが暗い顔をする、犠牲者の中にはエヴァと仲の良い人たちもいたので、それを気にしているのだ。しかしそんなことを知ってか知らずか、ナギは話を進める。

「まあなんだ、俺たちに少しの間、ここにいることを許可してくれないか？」

「……式はん、大丈夫やろうな？」

ギクツッ！！ と夷の体が硬直する。

「だ、だだだだ、大丈夫だ問題ない！！」

「……ええ、お義母さん、私が保証します」

「それと詠春……向こうの部屋で桜が待っているの、『すぐ』に行くように」

「……はい」

詠春の眼は死地に行く兵士の様だった。思わず敬礼する紅き翼（男勢）、そして詠春がふすまをしめ、隣にいった瞬間、コマのようにまわりながら部屋にカムバックする詠春……青ざめながら詠春をみる夷。

「（おいおいおいおい！！！！ 桜の奴、力上がった?!?! と
いうか詠春ポロポロだよ!!!）」

「……今までほっつき歩いて、ウチを待たせて……お久しぶりです、
式はん、エヴァはん」

ギロリと睨まれ、夷は縮こまる……元々は詠春を連れて帰る約束をしていたのに、すっかり忘れていたからだ。弟子の成長を喜ぶべきか、それともどうしてこうなったのか、問うべきか……どちらも夷のせいだが。

「さあ……詠春、むこうでハナシシヨツカ」

「い、いやだ！ 師匠！ ナギ、みんなたすけてくれええええええええええ
ええ……………」

そのまま首根っこを掴まれ、遠ざかっていく詠春、ぴしゃりと閉じられたふすまからは……叫び声しか聞こえなかった。いや、何も聞こ

し、テオドラが情報を流しまくっているのでアリカの時きみたく、証拠をでっちあげることができない、さらには完全なる世界も夷たちのサポートをしているのででっちあげることができない（ちなみに強硬しようとした者は『不幸な』事故で死んでいる）さらに言つと関西呪術協会はこちら側の世界では最大規模の組織だ、連合が日本を支配下に置いていないのはこのためだ。

「ですが……『客人』としてなら大丈夫でしょう」

「回りくどい、めんどい、つうか連合が何か言ってきたても殲滅すればいいだろ？」

「駄目じゃ！……お前ならやりかねん」

「式ならやるな」

「式……やっちゃえ」

「よし来た、アスナ待つてろ！！ お父さんがやつつけてくるぞ」

「「「「「いやいやいやいや」」」」」

紅き翼総ツツコミが入る、不服そうな夷とアスナ……しかしアスナは別の意味で機嫌が悪いのだが……閑話休題。

「どうするんや？ 式はん」

「とりあえず数が月くらい、ここに居させてくれ……ナギとアリカの結婚式もやらなきゃな」

珍しく歯切れが悪いエヴァの可愛さに悶える夷、完璧に惚れていた。仮面の下でニヤニヤしながら待っていると、エヴァは何かを決めたように顔を上げる。

「結婚式をしよう！ー！！」

「……………あ？」

「お、おい、式？ お前ら結婚してたんじゃない？」

「まさか……………してなかったのか？」

狼狽えるナギとアリカ。真っ赤な顔をしながら叫ぶエヴァ、そして固まる夷。

ここで夷視点に変えよう……………面白そうだ

|||||夷視点

え、ええええああs j b f i l b f h s a d v c d v c j h s d j b
s a b k j a s b (熱暴走中)

「(お、落ち着け！！ 夷！！)」

「(そ、そうやな、そ、素数や！！ 素数を数えろ……………3 . 1 4 1
5 9 2 6 5 3 5 8 9 7 9 3 2 3 8 4 6 2……………)」

「(夷！！ それ素数やない！！ それ円周率だ！！)」

「(け、けけけ、結婚なんて早い!! まだ俺は千五百歳だ!!)」

「(人間は二十歳だとお前から聞いたが?)」

しもつたああああああああああああ!!!! スクナ
にぺらぺらと喋るんじゃないかなかったああああああああ!!!

「(ま、まだ付き合って間もないカップルが)」

「(別荘も入れて五十年程度が『間もない』のか?)」

ぎゃああああああああああ!!!! やっぱこいつ
は千五百年前に殺しておくべきだった、千五百年前の俺を恨むぞ!
!! つうかどうすんの?! ナギとアリカの様子にニヤニヤして
ただけなのに……あれか?! この前、誤って地球破壊爆弾食べた
ことか? それとも汚染獣のステーキを喰ったことかあああああ
あ?!?!! それともそれとも五百年程度、世界間を移動したこと
か?!?! いいだろう、俺の趣味だ!!!

「し、式、いやなのか?」

「むしろウェルカム!!」

つておいしいiiiiiiiiiiiiiiii?!!!

「(2828)」

「(てめえはいつか殺す! つうか、俺の中のゲームは全部消去!
!)」

「(イヤアアアアアアアア?)!!」

スクナのゲームを全部消して……ギャルゲばつかじゃん、神様がギヤルゲマニアとか勘弁してくれ!! あー、もうどうしてこうなった?!! (俺のせいだby作者)
……腹括るか。

「エヴァ……結婚するか」

「ッ!! うん!!」

……すまん、完全に惚れてたみたいだ。エヴァの笑顔だけでも数年戦えるぞ?

「なあアリカ……」

「なんじゃ、ナギ」

「俺たちもあれぐらいになるのか?」

「……なるんじやろう」

後ろの二人が何か言ってるが気にしない!! ……さて、俺は『複線』を回収しますか ごめんな、千草。

そんなこんなで天ヶ崎家の前に来た俺、正直千草の家は元々は由緒正しき陰陽師の古参な家だ、近衛よりかは少し下だが……それでも

結構いい地位を持って いた。

千草には親戚はいない、ちょうど五十年前、関東魔法教会と関西呪術協会の間で大規模な戦争が起こった。その時、麻帆良にも多くの犠牲が、そして関西にも多くの犠牲が出た……千草の親戚もほとんどが死んだ、そして両親である睦月や望も死に、千草はひとりぼっち状態だ。

もちろん支援をしている、金なら腐るほどある……俺が引き取って育てると言う手もあった。だが……できる筈がない、俺が殺せるときに殺しておけばあの子は両親を失わずに済んだんだ、どの面下げて会えばいい！！力があつた、あの時本気で転生者を根絶やしにして睦月や望を強制転移させればよかった……悔やんでも悔やんでも悔やみきれない。

「（夷……辛ければやめればいい）」

「（いや……行くよ）」

俺は門から中に入ると……広い屋敷の中にぽつんと一人座っている千草を見つけた。少し痩せていて、昔の様な笑顔を見ることができなかった……逃げるわけにはいかない。

「……式、はん？」

「ああ、久しぶりだな……千草」

「……んてや」

「ごめんなさい」

「なんで助けてくれなかったの？」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

「式はんなら助けられることもできたはずや」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

「なんでやああああああっ!!」

痛い、心が痛い……千草の視線が、目が、その声が、どんな攻撃よりも痛い。俺が受け止めるんだ、俺が、俺自身がまいた種だ……『知っていた』のに。睦月や望は未来では死んでいた、なら俺はそれを食い止めるべきだった、本気を出せば俺は神にも勝てる………なのに未来を壊すのが怖くて、木乃香と会なくなるのが怖くて!!

……俺は、俺は。

「答えて、答えるんや!! 式はん、いや超越者ああああああっ!!」

……誰かが言ってたな、未来は決まっているって、ああその通りだよクソツたれが、なら俺がとる行動も

「すまない、俺にはこのくらいの償いしか考えられない」

俺は千草の頭を掴む……驚く千草、ごめんな。

「何するんや?!」

||||| 千草視点

うとうとう、ウチは？ たしか、庭に出て……そうや、父様と母様の形見である式神を召喚しようとして……あれ？ そっから記憶が無い、ぽつかりと穴が開いたような感覚やな、なんやる？

「起きたか……天ヶ崎千草」

「……あんたは？」

「超越者、と言えば分るか？」

……目の前で狐の仮面を被っている奴が口を開いて、ウチに言い放った。『超越者^{オバースキル}』、魔法世界の英雄、たった一人で龍すら消し去り、戦艦をくしゃみで落とす化け物……そしてウチの仇！！

「お前の両親を殺したのは俺だ」

「ああああああああああああああああああ！！！！」

ウチは錯乱しながら、父様の形見の猿鬼、母様の形見の熊鬼を召喚して襲い掛かった、玉砕する気で行けば……この化け物にも届く、そう思ってたんや。しかし化け物とはんでもないスピードで猿鬼と熊鬼を還して、ウチを取り抑えたんや……離せええ！！ ウチに仇をうたせろお！！

「この程度か？　なら話にもならねえよ」

「殺したる、あんただけは殺したる！！」

全力の殺意を乗せて言い放つ、なぜか胸の奥深くでズキリと鈍い痛みがしたんやけど……そんなんどうでもいいえ、目の前のこいつが憎くてたまらへん。父様と母様を殺したこいつを！！

「いい目だ、もっと憎め、そしていつか俺を殺して見せる！」

次の瞬間、化け物が跡形もなく消える。まるで最初からそこにいなかったように……なんでや、なんでウチを殺さないんや？　なんでウチだけ置いていくんや、なんで、なんでや！！　ウチに仇討もさせないで、生き恥を晒していくんか？　……殺してやりたい、ウチの手で！！

「うああ」

なんでや？　殺したいはずや、なんで悲しいんや？！！

「うあああああああああああああああああああああん！！」

|||||フェイク視点

「終わったのか？　夷」

オリジナル

「ああ、終わった」

千草の家から出てきた夷は本気で落ち込んでいた。今まで見たことオリジナルがないくらい、前に睦月たちが死んだ時もそうだがこいつは身内関係が弱すぎる、零崎の癖に『女子供』を殺さないし、できる限り殺しは控える……。『不殺』の精神ではないが、こいつは本当に殺すときは殺すが、殺さないときは殺さない。

「で、どうするんだ？ 一か月後にエヴァとの結婚式なのに」

「……知るかよ、『歴史』の通りやってんだ。俺が千草に『憎まれる』のも、あの時俺千草さんを『助けた』のも、全部予定調和だ」

「で？ お前はどつするんだ？」

「……未来の両義式、いや、両希夷を殺す、跡形もなくな」

……こいつは気付いちまったんだ、両義式が未来の自分だと。誰でもわかるって？ こいつは両義式が嫌いだったんだぜ？ 自分がそつだと言う可能性なんか信じない。俺が証拠集めて、三時間程度の HANASHI したから信じてくれたがな……。うん、子供をあやす感じで行ったらなんとかなった……。ふう、別世界の七実さんと言う方の『子供のあやし方』と言う本がなければヤバかった。

「いいのか？ 未来のお前を殺したら……」

「知るか！ 八つ当たりだってわかってる……。だが自分で自分を殺さない、俺は自分が許せない」

めんどくさい生き方だ、誰もが羨む力を持って、ありとあらゆる可能性を引き出せるのに……選択したのは夷（自分）の殺害なんてな、本当にバカだろ。

……だが付き合うぜ、なんやかんだでこいつは俺の生みの親、つまりは父親みたいなもんだ、息子が父親をフォローするなんて当たり前だろ？

「……んじゃ、帰るかフェイク」

「ああ、すまん、俺は魔法世界に行かないとな……フェイトに兄妹フェイトシリーズの教育をしに行かないと」

なんでもあれから奇跡的回復したフェイトだったが、魔力回路がおかしくなって二度と魔法が使えなくなったらしい。それで一線を退いて、兄弟たちの教育に入るらしい……確かに二番目と三番目はすでに起動しているからな。

「んじゃ、行ってくる。結婚式までには戻ってくるぞ？」

「はいよ……いつてらー」

そんなこんなで転移札を使って、魔法世界に行った俺は……面倒事に巻き込まれることになったんだが。

その過程で俺は自分の存在を考えさせられたんだが……まあまたの機会だな。

|||||冒頭に戻る（作者視点）

作者「スタッフ！料理ができてねえぞ！！汚染獣のソテー、ガララワニの丸焼きはどうした？！」

スタッフ「（；^ ^）こっちも忙しいんだよ！！」

作者「夷の野郎……まさか次元の壁をぶち抜いて作者である、俺まで呼び出すとは」

スタッフ「（；^ ^）：ちよ？！！作者！！お前料理するな！おにぎりさえ爆破した男なんぞに料理すんじゃねえ！！」

はい、なぜか結婚式のスケッチとして呼び出された作者だ……ドウシテコウナッタ？ スタッフうるさい、事実いうな！！……ゲフン、今は満漢全席を百人前ほど作っている、ぶっちゃけまだ足りない、夷ならこの程度三秒があれば感触している。

作者「だから、俺はデザート作ってるんだろっが！おら！バイドバーガーにコジマジュースができてんぞ！！」

フェイク4687「なぜ我が料理など」

フェイク4575「喋ってないでないで」『料理を』『作るうよ』

フェイク475「4575に賛成です、と475号は鍋をかき混ぜながら言います」

そして動員されているフェイクシリーズは五千、全員四苦八苦しな

がら料理を作っている、ぶつちやけ夷は口に入れば大抵の物は食える、有機物だろうと無機物だろうと危険物だろうと……胃がある意味進化しているのではなんでも食える。

フェイク9687「ああああああああ！！ 夷オリジナルの食欲は化け物かあああああ？！！」

フェイク1「ほら！！ しゃべってないでキリキリ動く！！」

五千体のフェイクシリーズ、つまり夷に似た顔が五千体もいるとさすがに気味が悪い……中には幼女やサイボーグ、はては幽霊なんかがいるが誰もツッコみはしない。

スタッフ「ゴ (# 。 。) ルア！！ 作者あ！！ つまみ食いするなあああ！！」

作者「……わかったよ、とりあえず何か適当に作るよ」

フェイク2535「お、おま！！ それ爆薬！！」

フェイクの一人に警告されたが、アツアツのフライパン上に落ちかけている爆弾……なぜ？！！ そして俺以外の全員が最近配備された神威霊装・四番エル・氷結傀儡サドキエルを発動している、していないのはスタッフと俺のみだ。

スタッフ「ノ(^ o ^) \ ナンテコツタイ」

作者「ふ、フライパンから光が逆流s

」

「……ゼクト！！ 助けて！」

「お茶がうまいのお〜」

「こんのぼけじじいいいいいいいいいいいいいい！！」

「似合ってますよ？ 顔は美少女ですか」

「ハアハア言いながらカメラで撮るな！！ 変態^{アル}！！ そして寝てん
じゃねえよ！！ ラカン！！ あー、もう！！ どうして俺の周り
の奴に的な奴がないんだ？！」

「そろそろ時間ですよ？ アスナ、指輪の準備は？」

「出来てる、ナギと姉さんの分。式と……泥棒猫の分」

「泥棒猫つてなに？！！」

「アスナが昔見たく淡色な目をしてるんだが……ドウシテコウナツタ
？！！ あれか？！！ タホの世界のヤンデレでも感染したのかあ
あああああ？！！」

「今の俺の恰好は結婚式で女が着るような白い着物、実は数年前、桜
の結婚式の時に作っていたらしい……どおりである時素材が無くな
ってたわけだ。」

「にしても本当に男か？」

「うーん、雌雄同性にもなれるしなあ、試したことないが子供も産
める気がする」

まあ生殖機能が破壊されてるからどのみち無理だが……ちなみに俺には性欲なんてものはとっくの昔に無くなっている、零崎になったせいかねえ。

「あら、ええ着物姿やな」

「おい、栄子、歳食ってポケたか？ これ女物だぞ？」

くそつたればばあ、近衛家（女のみ）直伝天然ポケ発動しやがった。木乃香もそうだがどうしてそうなる？！ 普段はキリツとしてるんだが、ポケスイッチが入ればこのさまだ……じいさんも大変だろうに。

「本当に……歳を喰ったものですよ」

「おい？ なに弱気になってるんだ？ たかだか五十数年しか生きてないだろ？」

「……師匠！！ ってえええ？！！」

「久しぶりだな、明人。鶴子と素子は元気か？」

本当に久しぶりに見た明人……結構老いたな。ああ、そうそう鶴子姉さま、いや鶴子は俺の弟子の一人だ、小さい頃から俺が刀の指導をしているのでめっちゃ強くなった。素子も生まれてる、毎年『ボン太くん人形』を上げているんだが不評だ、ソースケも言っているがあれが売れないのはおかしい……なぜだ？

「元気ですが……いえ、それよりもおめでとつございます」

「ははは、サンクス……にしてもよく来てくれたな」

「師匠の結婚式ですよ？ 弟子の私も来るに決まっていますでしょう！」

「明人……」

「詠春……言いたいことは山ほどあるが、とりあえず終わったら殴らせろ」

「ああ……すまなかった」

おうおうおう、青春だねえ……鶴子はエヴァの所に行っているみたいだな。あいつもいつかは結婚するんだ、とびっきりの着物を作つてあげないとな。

「さて……式、時間みたいだぜ？」

「ほら、式、仮面取つて」

「師匠!!」

「式さん」

だあああああああああああ!! お前らはどれだけ俺の仮面を脱がしたいんだ!! わかったよ、脱げばいいんだろ？
俺は仮面を影の倉庫に入れて立ち上がる。

「さあて行くとするか」

そう言っただけじゃれ合いながら走っていく二人……千五百年ぶりかね、素子を見たのは。……ごめんな、素子、鶴子。

俺は心の中で謝りながら、歩いていくと 目の前には純白のウエディングドレスに身を包んだ、エヴァとアリカが居た。

「……………」

思わず息をのむ、あまりの美しさに叫びたくなつたがさすがに自重する。さすが俺と同じ顔の『あの人』が作った物だ、素晴らしい出来前だな……………うううう、やばい年甲斐もなく赤くなってる。

「し、式……………どうだ？」

「いや、めっちゃ綺麗だったから……………叫びたくなつた」

「ななななな、何言っただけいりゅー!!」

あ、噛んで赤くなってる……………ちらりと隣をみるとナギとアリカが同じ感じで赤くなっていた。うんうん、アリカの服装も中々……………だがエヴァには全然届かないがな!!

「とりあえず始めるか……………おい、作者 ……!!」

作者「なぜ俺が神父なんだ？ まあいいさ、おらてめえらイチャツくな、発情期ですかこの野郎」

「黙れ、駄作者、もっと私と式がイチャイチャする描写を増やせ」

作者「砂糖吐けと?! 告白シーンでさえ限界だったのに?!」

スタッフ「(#。) ゴルア！！ とつとと始める！ 料理が冷める！」

作者「はいはい……えーとめんどいから、まずナギ・スプリングフィールドとアリカ・A・E・スプリングフィールド、お前らいつまでもイチャイチャしながら暮らさない、はいはい指輪交換、アスナー」

作者が色々と三段飛ばしでやっている、ナギとアリカが抗議しているがアスナがトコトコと歩いてくる、作者は実際の結婚式で指輪ボ
ーイもやった経験もあるそうだが……閑話休題。

とりあえず、アスナが指輪を二人に渡す。あれはナギとアリカの魔力を凝縮して作った魔法石の一種だ、何か効果があるわけではないがお守りとして俺が作った(実はある一定の条件がそろつと色々起きるんだが秘密だ)

とりあえず指輪を交換する、ナギとアリカ……おー、真っ赤真っ赤、タコみたいだな。

作者「それじゃ、永遠の愛を誓うんだな」

「／／／／／／／」

もはやゆでだこ状態になりながら徐々に顔を近づけていくナギとアリカ、とりあえず俺は認識障害で見えないようにしてやる、周りの奴らがブーブーうるさいが……たまにはいいだろ？

スタッフ「(;、) なぜ見せないんだああああああ?!?!?!」

作者「たまにはいいだろ？ 愛し合う二人の行為を見る奴は後で拷問な。ハイ次、両義式とエヴァンジェリン・A・K・Rアタナシキテイ（両義）マクダウエル……長い！！」

「お前だろう、決めたのは！！」

作者「うっせ！！ とりあえず、お前らイチャイチャニヤンニヤンして幸せに暮らせ……以上！！ アスナ！」

「ちえりおーっ！！！！！！」

つて、アスナが指輪をなげたあああああああ？！！！！くっ！！！！

『CLOCK UP』

クロックアップで二つともキャッチして……ふう、あぶねえ。

「チッ！」

スタッフ「（・・）チッ」

作者「ヒヤッハアアアアア！！ とにかく拷問だ！ 拷問にかけろ！！」

スタッフ「（。。。。）エツナニナニ？ つて紅き翼全員で掴まないで！ あれ？ あれえええええええええ？！！！！」

作者「……ゴホン、指輪交換しろ」

「あ、ああ」

「そ、そうだな」

とりあえず指輪を交換する俺とエヴァ……エンゲージリング約束の二人と呼ばれる特殊な物体、調べてみると二人共の血をつけて契約を交わして身につけることで魂レベルでの繋がる、という物だったので、本気を出して指輪にしてみた。
とりあえず……お互いの血をつけて、っと準備完了。

作者「……んじゃ、永遠の愛を誓うんだな。作者権限で見えないから好きな事言つと良い」

「サンキュウ」

作者「とりあえずイチャイチャしとけ、俺はそれを見るのが好きなんだ」

「変態だな」

作者「うっせ!! とりあえず早くやれよ!!」

作者の言う通りだな……俺はエヴァを抱き寄せ、誰にも聞こえない声で囁く。

「本当にいいのか? エヴァ」

「良いに決まっている、何度も言っているだろ? 式」

「……そうだな、キティ」

「その名で呼ぶな!! …… まあいいか」

……さてと言うか。

「俺は アタナシキオテイ エヴァンジェリン・A・K・R（両義）・マクダ
ウエルを永遠に愛することを誓う」

「なら私も 両義式を永遠に愛することを誓う」

指につけた指輪がほんのり暖かくなる……契約できたのか？ まあいいぞ。

「キティ……愛してるぞ」

「私もだ……式」

俺たちはそのまま身を寄せ、口と口を合わせる。

……俺は守る、もう二度と間違えたりしない。

しかし、この数年後、両義式は 死んだ。

結婚式、触れ合う気持ちと決別する夷（後書き）

作「ネギま!!!ラジオ!!!こいや!!!」

夷「ああ、夷だ、早速今回使った者の紹介」

作「まずは『朝霧高原名物の新鮮ミルク』と『ミクロ蟲ピン』を臯月二八様!!!静岡は私の故郷なので使わせていただきました!!!」

夷「……そして『白無垢と純白のウェディングドレス』×2をくださった 裂やん様!!! 本当に綺麗だったなあ」

作「永遠にお幸せにな。そして『神威霊装・四番・氷結傀儡』と『約束の二人』エンゲージリングを夜光様から!!!」

夷「というか作者、お前料理下手だよな」

作「否定できん、電子レンジをよく壊すからなあ」

夷「アホだ、ここにアホがいる!!!」

作「うるさい……ふう、贈り物をくださった方々、本当にありがとうございます! なんとか全部消化したいんですがね……アハアハハ」

夷「でだ、作者最初に第二部と言ったがどついう事だ?」

作「そのままの意味だ。幼少期が第一部、大戦期が第二部ってわけだ。そして第三部は……夷」

夷「なんだ？」

作「死んでおけ」

夷「はあああああ？！！！！」

作「次回予告！！ 鶴子と素子！！！」

素子「じ、次回予告！」

鶴子「閑話！！ 『麻帆良戦隊マホレンジャー』」

夷「おいいいいいいい？！！！！！」

作「リンドウ様にゴーカイジャー変身セットを貰ってな、後はライダールベルトとか」

夷「ウエイ?!」

作「一応、お前もライダーだからな……配役はきまっている!!」

赤・アスナ 青・素子 黄色・木乃香 緑・刹那 ピンク・月詠

銀・エヴァ

ディエンド・真名 ディケイド・夷

夷「なんつう配役?! ほかの奴らは?!!!」

作「無理、これ以上やったら死ぬ!!」

夷「だよなあ、でだ閑話はどのくらいやるんだ？」

作「未定、とりあえず色々やってからだなあ」

夷「コラボを早く書け！！」

作「書いてるよ！！……まあいいや、それでは皆様ちえりお！！」

~~~~~今日の楽屋

ガトウ「ハハハ、ついに出番までorz」

クルト「が、ガトウさああああああん！！」

タカミチ「僕って強いんですかね？」

ラカン「竜種を一撃で殺せるくらいだな」

詠春「い、色々と絞られた」

アル「カラカラです、詠俊がカラカラです」

ゼクト「嫁は最凶じゃな」

フェイト「僕の出番を！！」

造物主「我の話を！！」

スタッフ「（・3・）知らんがな」

フェイク「……もうやだ、このメンバー」

茶々丸「私が癒しましょう……さあ」

フェイク「このポケロボがああああああああああ……!!」

作「おい、スタッフ、お前ら拷問だったつたよな？」

スタッフ「（´・`・（エツ？」

作「ヒヤッハアアアアアアア!! 拷問だ! 理由がなくとも拷問だああああ!!」

スタッフ「（・3・）アルエードウシテコウナッタシ」

夷「アホ共ばっかだな」

出演者全員「…………お前が言っな!!」「…………」

夷「総ツツコミ?!?!」

皐月二八様とのコラボ 刹那の喪失（前書き）

作「まさか……皐月二八様とコラボできるなんて、夢じゃないのか？」

夷「ああ、俺も夢だと思っている、本当にありがとうございます！」

作「知っていると思いますが、今回のコラボは『魔法先生ネギま！』カレカノ・ライフ』の皐月二八様とのコラボ」

夷「二つの世界の刹那が主役な物語……よかったのか？」

作「知らん！ここまで来たら引けるかあああああああ！！  
スタッフ！！」

スタッフ「（；・・・）始まるぜ！！」

ではどうぞ！！

## 皋月二八様とのコラボ 刹那の喪失

「このちゃん、もつと腰入れないと!」

「わかつてるやけど……むう」

麻帆良の世界樹前の広場に声を出しながら、ハンマーを振り回している木乃香と刀を持ちながら指示を出している刹那がいた。一見、演劇部に見えるかもしれない……が、二人が持っている物は真正銘の武器である。銃刀法違反とか色々あるが、この麻帆良には口ボツト、人外、魔王に妖怪ジジイ、なんでもござれの人外魔境である……武器程度恐れない。

「ふう……このちゃんは少し腕で振りすぎ」

「こつちの方がよく飛ぶんやけどな」

何が飛ぶのかはあえて聞かないでおこう、そんな事は気にせず刹那は木乃香の動きをよく見ながら指示を出す。主に休日で二人で修業している、木乃香と刹那、これに真名やアスナ、素子に月詠が居ることもあるが……今日は木乃香と刹那だけである。

少し前まで一般人だった木乃香は刹那の指示についてこれずに、ハンマーを取り落とし地面に倒れる。

「……腕立て伏せ百回や」

「せつちゃん! 堪忍や!! ウチの腕が太くなってまう!!」

そんな冗談を言い合いながらしていると、頭上からゴロゴロと言う

音が鳴る。

木乃香は顔をしかめながら空を見る、灰色の嫌な天気だ。ちなみに作者も曇り空は嫌いである。

「せつちゃん、そろそろ切り上げよっか。雷が落ちてきそっや」

「……………そっやな、このちゃん、帰ろっか」

そう言った瞬間、運命の悪戯か、神の悪戯かわからないが……………刹那の頭上に雷が落ちた。

一瞬で木乃香と刹那の視界が真っ白に染め上げられる、がそれも数秒の事だったが刹那の意識を飛ばすには十分だった。音速の速さに対応できず、刹那の体を貫く雷……………一瞬の静寂と共に、木乃香の叫び声と雷鳴が響き渡った。

そして別世界のとある場所でも雷が落ちた。

これが後に大問題になるとは……………誰も、万能従者や超越者でも気付かなかった。

さあ、始まった物語、入れ替わった二人の剣士はそれぞれの世界で何を考えるのか？ それでは刹那の喪失の始まり始まり

《姿かたちは同じ、ただし中身が違う》みたいなの！

|||||||その頃夷は

「よっこらせ……………ふう、今回の贈り物はこのぐらいでいいか？」

俺は色々な世界で贈り物を送っている、まあ送られてくるときもあるが……………代表的なのはハクさんの『蟲ピン』とか、『ターンX』と

か、まあ色々だな。

とりあえず、感謝の気持ちを込めて俺が直接行ったり、転送したり……今回は直接行くがな、いや行かないとぬつ殺される、この頃は魂すら再生しだした俺だが……相手が悪すぎる。

「（さすがにハクさんには逆らねえよ）」

超万能従者……綺羅川ハクさん、ぶっちゃけるとそこら辺の上級神よりも強い。いや強いつてレベルじゃない、チート？ バグ？ それで済ませられればいいよな。

まだ俺が若い時（それでも三百歳なんだが）に次元の壁を破壊し、抜けた先に居た超絶従者、主は綺羅川棒名さんと言う。はつきり言うと棒名さんは……普通の人間だ、ちよつとずれているところがあるが、俺からすればまともな人間である。問題はハクさんだ、初めて会ったとき神卦法を使用していたので……棒名さんに襲い掛かると思ったのか、すごい数の蟲ピンを打ち込まれた。俺の蟲ピンもハクさんからもらったものだ、まあなんやかんだで応戦し……地形が何度変わったやら、俺も死ぬ気で応戦したし、ハクさんも全力でなかつたらしいが『それなり』に力を出して戦っていたらしい。

最終的に四肢切断されて、魂を完全消滅させられる寸前で棒名さんに止めてもらい……なんとか助かった。それからかな？ 棒名さんと交流をさせてもらい、色々と贈り物を送ったり、もらったりと……とりあえずは友好的な関係を結んでいた。ハクさんにも『蟲ピン』を少し譲ってもらった……形状はともかく、俺にヒビロノカネをぶった切るほど硬い……閑話休題。

まあ後は……俺の世界と酷似していた、と言うよりも平行世界だからな。しかし差異も結構あった。

まずは麻帆良の面積が三分の一、アリカが女王として頑張っている、ネギは……何も言うまい。はつきりここまででは別に驚かない……一番驚いたのは、刹那と明日菜だ。

まず刹那、髪が白い、目が赤い……それが素だと知った時は本当に驚いた、それに俺の知っている刹那より冷静で実力もある……それに躊躇がない、人を斬ることにだ。彼女の行動理念が全て『お父様』、棒名さんの事だが……棒名さん中心である、いやそれはいい、こちら側の刹那だって俺中心（らしい、木乃香から聞いた）らしいが……度が過ぎている、もはや父親と娘と言うよりも、従者と主と言った方がいいか？ 心酔している……最初は俺はそれがかわいそうだと思った、だがそれをすぐに改めた。棒名さんと過ごしている刹那の顔は本当に幸せそうで……まあこのくらいにしよう。

明日菜は……あの時、大戦時代を思い出す感じだった。ウチのアスナは……うん、多分家でゴロゴロしてるな、ゲーム禁止にするか？ まあ結局は甘えられてやめるんだが、本当に身内に甘すぎる。

「さてと……行きますかね」

軽く指を鳴らして、次元の壁を開かせる……外では天気がひどい。そう思った瞬間、地下室に雷の音が響く、確か木乃香と刹那が訓練して居る筈だが……大丈夫かな？ 一応フェイクに連絡して。

『兄様!!』

木乃香から切羽詰まったような念話が送られてくる。なんかあったのか？

「どうした木乃香?!」

『せ、せつちゃんが、せつちゃんが!!』

おいおいおい、どうした？ まさか雷に直撃したとかじゃないよな？



『ウチをかばって雷に!!』

「ホントでしたああああああ?!!! 待ってる!」

すぐに転移札を使って、木乃香の元に転移する。

そこには泣きながら刹那の介抱している木乃香がいた。俺はすぐに魔眼を使って、刹那の体を調上げる。雷の放電量は数万 - 数十万A、電圧は1 - 10億V、いくら刹那が人間より少し頑丈でも落雷をくらって平気なわけがない……ヘタをすれば、ショック死で死に至る。俺ならそのまま帯電しながら戦えるが、さすがに刹那はそこまで頑丈じゃない。

「（ギリギリで結界を張ったのか？ 体には異常はないな）」

「兄様!! セっちゃんは?」

「落ち着け、少し気を失っているだけだ……命の危機はない」

木乃香がその言葉を聞いて、ホッと息をつく……にしてもだ。

「まさか落雷に直撃するとは……運が悪いのか、良いのか」

落雷が人の上に落ちてくるのは稀である、というかほとんど聞いたことがない……刹那なら大丈夫か? とりあえずはベットに寝かせようと思ひ、刹那を抱えようとした瞬間、刹那の目がゆっくりと開いた。

なーんか雰囲気が違うんだよね……刹那はアホな子だからな、良くも悪くも。目の前に居る刹那の雰囲気が鋭い日本刀のような感じだ



拝啓、父さん、母さん……ウチの刹那が  
綺羅川刹那に憑依  
されました。どうしろって言うんだよおおおおおおお  
！！

そんなこんなで俺はエヴァたちに刹那の面倒を頼んだんだが、なぜか月詠を見た瞬間、『こつちに来るな！ 変態』と言っていた……何があつたし、本当に何があつたんだよ、月詠はここ最近で落ち着いて来た……バトルジャンキー戦闘狂の癖は抜けきっていないがな、変態じゃいや変態だった、俺のパンツ盗んだよな、あいつ。とりあえず、開けておいた次元の壁から向こうに行く……そのままとある座標に行き、その次元の壁をぶち抜く。

「フウ……全く、物凄く疲れるんだぞ、コレ……」

本当に疲れた、俺は世界間の移動はもう息をするようにできるが……ここだけは特殊だ。結界によって阻害される、もちろんハクさん特製の結界だ、俺の障壁にも少し参考にさせてもらっている。これを突破するのが……本当に大変で最初の方は力づくで結界の弱い部分にピンポイントで転移してたが  
まあそこは置いておいて。

「マスター、どうやら向こう側の保護責任者が自ら来て下さったようですよ」

「うん、ハク。ていうか、視界に入っているからね」

ピンゴ、目の前に居る二人を見る。

椅子に座っている棒名さん、そしてその横で規則正しく……いや完全な姿勢を保つハクさんが居た……一言聞きたい、あんた疲れって知ってるか？ って俺も疲れないんだった。

棒名さんが立ち上がり、こちらに頭を下げる……ハクさん、睨まないで俺の寿命が恐怖でマツ八だ。こちらも頭を下げる、というか下げないとぶっ飛ばさる。

「お久しぶりです、夷さん。此処の結界を抜けてくるなんて、本当に規格外ですよね」

普通の……本当にハクさんがいなければ、一般人とそんな色ない転生者、綺羅川棒名さん。基本俺は『さん』付けなどしないが、棒名さんは本当に尊敬できる人だ。ぶつちやけるとハクさん一人でも近隣の世界総てを掌握することが可能なのに、それをしない……俺は一度聞いたことがある、で帰って来た答えが

『こんな広い土地（麻帆良）があれば十分』

俺はそこで大爆笑してしまった、力を持つ者は大抵暴走する。俺だつて暴走しまくって、色々迷惑をかけた……だが棒名さんは自分ができる範囲から出ようとしない、本当に欲がない。たぶんこれで死んでも天国行きは確定だろう……死ぬことはないが。

まあ自分の中のひとりごとは置いておいて……ああ、スクナなら今は天界に帰省中だ。

さて、棒名さんと久しぶりに会う……基本棒名さんはハクさんが張った結果から出ない、ぶつちやけると最初の何十年かはそう生きてきたらしい……俺なら耐えられない、確実に外に繰り出してえらい事する、本当に俺ってバカだよな。

「ハク、夷さんに紅茶を出してくれないかな。文字通りの長旅だっ

「たんだから」

「いや、長旅つてほどでもないが……まあ本当に久しぶりだな、榛名さん、ハクさん」

「ええ」

榛名さんが会釈する、俺も会釈をする。ハクさん？ 静かに紅茶を淹れてるよ、マイペースと言うには少し関心が無さすぎる。まあハクさんにとって、榛名さん以外は『蟲』、つまり取るに足らない存在だ、俺だって例外じゃない……もしもここで俺が榛名さんに襲い掛かれば、ハクさんは本気を出して俺を潰しかかるだろう。……それはそれで面白そうだが、世界がぶっ壊れるのではない、この世界には木乃香も別の人が、木乃香の母親、父さんも入る……それらが俺の間接的な理由で死ぬなんて許さない、許すことはできない、つまり俺はどこまで行っても甘ちゃんらしい。

「……相変わらずだな。ハクさん、俺が侵入したとき、結界を弱めてくれただろう？ 御蔭で簡単に入れたよ」

仮面はすでに外している、疲れが出ているわけではないが精神的に疲れたので促されるままにソファに座り込んだ……フカフカだな。ここの結界は世界間移動が可能な者の侵入を感知・阻止するための術式が組み込んでいる、そう……俺のような転生者対策だ。通常、転生者は三種類いる、事故や神様の悪戯でチートを貰ってくる転生者、神に認められチートを貰ってくる転生者、転生者に恨みを持ちたい転生者に特化した転生者殺し……大まかに分けるとこんな感じだ。俺も榛名さんも最初の転生者に分類される。大抵の転生者も最初の、むやみやたらにチート能力をバカスカ撃ってくるので苦手だ、つうか能力に頼り切っている奴に負ける気はしない……例外と

して目の前の棒名さんがいるがな。

俺は基本的、戦う気が無い奴とは相性が悪い……昔、『片付けのできない子供』と言われたこともあるがな。

そういえば、言っておくがこの結界の阻止力は俺が『ギリギリ』  
抜かれる寸前で設定されている、世界間移動ができる転生者は限られてるし、その中でも俺は別格だ……自分で言うのはなんだがな、いや限界が無いから……今は大抵の事なら欠伸をしながらできる。まあここの侵入許可証フリーパスを持っていて、と思ってくればいい。ハクさんに信用されていると思えばいいが、ハクさんはたぶん俺の事を『少し役に立つ蟲』程度の認識だろう、本来ならこんな簡単にいかない……打開策のためだろうけどな、ちなみに昔、面倒になって結界をぶち壊したことがある……あれはヤバかった。

「ごんぞ」

「ああ、ありがとう……美味えな、相変わらず」

茶々丸が入れてくれる紅茶も絶品だが……これは別格だ、紅茶本来の甘さと苦みが絶妙にマッチしている。それでも俺は名家の息子だからな、昔からこういうのは飲みなれている、一応は『近衛』って言う名家だからな、自慢することでもないが。

「ごゆっくりどうぞ……って言いたいところなんですけどね、刹那の件でしよう?」

俺はちびちびと飲んでいたカップを置く、猫舌だから一気に飲めない、飲んだら嘔き出す……その瞬間、俺はハクさんに殺される、本当に怖いです。

「ああ。もうおおよそ察しはついているだろうが、俺たちの世界の

刹那が其方の世界の刹那と精神だけ入れ替わった」

「……………ということは、此方の刹那……………“綺羅川 刹那”は無事ですか」

「ああ、“桜咲 刹那”は？」

「問題はありませんね、ハクと子日に診てもらいましたが、疲労で倒れているだけです」

「そうか……………よかった……………!!!!!!」

疲労と言うのは、憑依した影響だろう……………と言うか同じ体の持ち主だったからいいが、これで違う者の体だったら精神が崩壊してもおかしくない、色々と心配だったがよかった……………いや本当に。よく過保護やシスコンと呼ばれる俺だが……………仕方ないだろ？ 家族を心配しない奴はいない。

「では、どうしましょう？ ハク、入れ替わりを戻せる？」

「可能です」

「一応聞くけど……………危険はないよね？」

「此の程度、リスクを冒す意味も必要性もありません」

「……………そう」

話し合う二人を見て……………俺は少し考えたことを言う為に話しに割り込む。

「いや、待つてほしい」

「はい？」

めっちゃ睨まれてるよ、そりゃ棒名さんとの会話はハクさんにとっては、俺が木乃香に抱き着くのと一緒に嬉しい事だ……殴られてもおかしくない。あれは何発も耐えられるのは一重にゼウスと殴り合ったおかげだな。

「こんな事を考えるのも不謹慎だが……これは、ある種のチャンスじゃないかと俺は思う」

「チャンス、といますと？」

「世界間の移動は簡単じゃないだろ？俺は可能だが……しかし同伴者を入れた場合、難易度が跳ね上がる。だから、俺は木乃香たちを連れてこっちに来ないし、榛名さんたちが向こうに行ったこともない」

「あくまでリスクが高まるだけで、不可能ではないですが」

俺はそれに肯定する、ハクさんならば世界間移動程度できるだろう

……無表情でな。

「そうだ。だが、リスクが高すぎるからペイしないな」

直接的な原因は雷だが、あの時俺は時空の壁を壊していた……多分それでいいんだが、通常憑依なら俺がアサルトフィンガーで魂を引き抜けばいいんだが……何が起こるかわからん、雷で別の世界の自



分と入れ替わったなんて聞いたことがない。

俺はもはや世界間移動に適した体に進化している、というか体がそう勝手に適応した。俺はなんのリスクもなく移動しているが、実は生命体を生命維持させたまま移動するのがすごく難しい、物体は簡単なんだがな……俺にとつては旅なんだが、他の奴等かすると『命知らず』らしい……別に俺は死にまくれば、その環境に適応できるからな。

「恐らく俺の勘だが、あの雷はもう一度来る。そしてそれが当たれば、刹那はまだ入れ替わる……元に戻るというわけだ」

「まあ、理屈で言えばそうですね」

「其処で、刹那には互いの世界で経験を積ませようかと思っている。せつかくの機会だ、潰すのはもつたないだろう？」

ドヤ顔で言うつと棒名さんは少し意外そうに眼を開く……「ただけ過保護と思われてるんだよ、俺は。」

「でも、心配じゃないんですか？」

「だから、榛名さんとハクさんに刹那の世話を頼みたい。勿論、『こちら』の刹那も責任もって俺が守る」

「そりゃあ……身体はウチの刹那のものですし、何かあったら此方も困りますからね。」

寧ろ此方からお願いしたいくらいですが……」

本来なら、俺がしなければならぬ事だが……ハクさんに預けることができれば、刹那の覚悟を変えることができるかもしれない。十

中八九、俺が不死だと分かった時、刹那は自分も不死にしてほしいと言った、俺は賛成だ……刹那が老いて行って死ぬところなど見ない。だが覚悟が足りない、今の覚悟じゃ……いつか潰れる。なら、俺よりも非情で実力があるハクさんなら……できるかもしれない、そう俺は思った。

「わかりました。宜しくお願いします」

「マスターの意のままに」

「……感謝するぞ、榛名さん、ハクさん」

「……その頃、刹那は

「……別世界のせつちゃんかあ、ウチ信じられんわあ」

「……そうでしょうね、私も別世界のこのちゃんと会うとは思いませんでした」

私の名前は綺羅川刹那きらかわ せつなと言います。こことは別の世界で育ち、お父様とハク様によって育てられました。

なぜここが別世界だとわかったのか？ 起きたら目の前に、ハク様と対等に戦える数少ない人物である両希夷りょうきいさんがいて……簡単に事態を説明してくれました。

どうしてこうなったのか、話せば長いですが簡略的に言いますと……雷が落ちてきました。ええ現実味がない話です、ファンタジーやギャグならいいですが現実です。さらに私と私（こちら側の）が入

れ替わるなんて、現実味が本当にありません。ああお父様に会いたい、本当に……憂鬱です。

目の前の金髪の長身の美女、どこかで見たことがあるのですが……どこだったか、確かクラスに居た様な、いや、あの『吸血鬼』なわけがない。彼女は外見は十歳程度の幼女だし

「気分は悪くないか？ あるのならば……今回は異例の事態だ、どんなことが起こってもおかしくない」

「……あえて言うなら、体が重いですね。いえ……『ズレて』いるような感じです」

「そうか……自己紹介はまだだったな。私はエヴァンジェリン・A・K・R・マクダウエル……知っているようだが神祖の吸血鬼だ」

「……『R』？」

「ああ、向こうの私はついていないのだな……Rは『両義』の略だ」

両義……確か夷さんの偽名でしたか？ いえ、話に聞くとこる夷さんは名前を変えることで攻撃手段を変えると聞いていますが……：：：そうなるよこの世界の闇の福音は夷さんの親類なのでしょうか？ 確かこのちゃんの義兄のはずでしたが？

「ちなみに式……夷とは既婚している」

「え、ええええええ？！……！」

思わず声を出してしまいました……夷さんが、エヴァンジェリン……いえこの世界と向こう側は違います。エヴァさんと呼んだ方が

いいですね。  
エヴァさんと結婚していたとは……意外にしっかりと身を固めていたんですね

「そこら辺はせつちゃんと似てるなあ、ウチ安心したわあ」

「そう……なんですか？」

聞いた話だとドジっ子で噛み癖が酷くて……私と正反対の性格だと聞いたのですが？ ……いくら生活していた環境が違いがあること、根本は同じなんですな。

手を握り、開く、また握る……それを何度もしていくと違和感があります、なんでしょうかまるで何かに阻害されているような感覚は？

「ああ、そうだ。私は綺羅川 刹那と言います」

「綺羅川……桜咲はなぶきではないのか」

桜咲……いい名ですね、しかし綺羅川ほどではありません。これはお父様からもらった大切な物……それに勝るものなどありません。しかし……この部屋は？ 基本的な色は白。そこに基本的な家具、机、クローゼット、私が寝ているベッド……その横になにやら大きいぬいぐるみ、ですか？ ネズミのようですがなぜ防弾チョッキにヘルメットかぶってるんですか？！

「ああ、それはネズミちゃんよ？ 『ボン太くん』や」

「ぼん           ネズミではないのですか？」

「……式が必ず渡してくるんだ、誕生日になったらな」

……夷さん、あなたの存在がわからなくなってきました。可愛いは可愛いんですが、防弾チョッキとヘルメットのせいで台無しです。……ふと、壁にかかっているカレンダーに目が留まりました。見てみると……夏休みの時期ですか、つまりは修学旅行はすでに終了している。……正直、もう行きたくありません、目の前の変態メガネのせいで嫌な思い出があります。

「にして……ホンマに入れ替わったですかえ？ 気配もそっくりやし……素子お姉さまや千草さんがいたら、もつと混乱してたなあ」

……まあ今は余計な詮索は止めましょう。とりあえずは今の私の状態についてです。

まずは……体の身体能力スペックが大幅に違いますね、私とは違いちゃんと神明流の剣術を習っていたのですね。ちなみに私は神明流にハク様直伝の我流の混合です、なので筋肉のつき具合が違います。あとは自分と同じ存在の肉体だからと言って、所詮は他人の体です……勝手に慣れてくれるのを待つだけです。……後は目の中の異物感ですか？ コンタクトレンズのような物が入っているようなので、少し取り出しますか……気で強化すれば、視力程度強化できますしね。

「え？ せつちゃん、その眼どうしたの？」

「驚きやわー、刹那先輩の眼が紅いなあ……黒式をつこうてる、ウチみたいやな」

眼が紅い？ それは当たり前です……いや、まさか？

「すみません、鏡のような物はありませんか？」

「それならベッドの横に、小さな鏡があるだろう？」

エヴァさんに言われて首を動かすと、鏡に反射した今の自分の姿が見えます。髪の毛は縛っていないのでストレート、そんなことは良いんです……なぜ髪の毛が『黒』なんですか？ さらに片方の目が紅、もう片方が黒。本当に一体なんなのですか？

……まさか、この世界の私は迫害に耐え切れずに瞳の色、髪の毛、『鳥族の力』を封じ込めたんですか？ ……なんて、なんて

「愚かな事を……ッ！！」

手に握ったシーツを硬く握ります。このちゃんやエヴァさん、へ……月詠などが見てきますが、これは許しません。別に私はこの姿に誇りを持っているとか、生んでくれた親に義理を感じていることは決して、決してありえません。

ではなぜ怒っているのか？ 簡単です、世界一簡単ですよ。一＋一が二であるように……『当たり前』の事ですよ？ お父様が褒めてくれたからです、私の髪の毛の色を、瞳を、存在を　それを真つ黒な黒で塗りつぶすなんて許さない、許さない許さない許さない許さない許さない許さない許さない許さない許さない許さない……許すことができない！！

……久しぶりに頭に血が上がりかけました、いえここまで怒ったのは初めてでしょうか？ 私はお父様のおかげで生きて来れました、もちろんハク様にも感謝しています。両親にも感謝していますよ

『お父様に私を引き渡してくれた』事だけは。

「せつちゃん？ どうしたの？ 具合でも悪いんか？」

「ええ……とても、とっても『悪い』です」

「……ええ目や、怒り、憎しみ……屈辱に彩られた眼、『こつち』の刹那先輩じゃできない眼やな」

ああ、怒りでどうにかなってしまいそうです……この世界の私が向こうの私に憑依したのですから、自分の元の姿を見ているはずです。

ざまあみる、どうだ？ 自分が化け物だと恐れている姿になった気分は、昔に戻った気分は、ひとりぼっちの気分は……そう思うと幾分か、気持ちが晴れてきました。

精々、自分の姿に怯えながら泣いてればいい。

「それでだ……刹那」

「あ、はい、なんででしょうか？」

「……夷からの連絡で      お前を元に戻るまで預かることになった」

「はあっ?!?!?!」

私は口を大きく開けて言っしまいました……預かる?!      ハク様は何も言わなかったのですか？      お父様は?!?!

「なんでもいい機会だからお互いの世界で経験を積ませる、と言ってるな」

「ちなみに夷さんは？」

エヴァさんが大きいため息をつきながら、うつむきながら暗い声で言う。

「……平行世界で神が暴走してるから、止めに行ってくる。しばらく頼んだぞ、エヴァ……だそうだ、あのバカがっ！！！」

「え？ 神？ いやいやいやいや、さすがにそれは無いでしょう。神と言えば、ハク様を作った存在ですよ？ 勝てるわけがないいくら夷さんが強かろうと勝てるわけ？」

「ちなみに夷は『神殺し』と呼ばれる程度、神を殺している」

私は頭を抱えながら、夷さんの理不尽さにようやく気付けた……ハク様並、いやハク様と同等かもしれない。……やっていけるのか？  
私は。

しかし……皆さん、優しそっだし大丈夫  
期が私にもありました。そう思っていた時

「……だるい、ゲームする」

「アスナ、訓練しないとまた解約されるぞ？」

「真名……年上のいう事は聞こうよ」

「……でもアスナの実年齢は『オバサン』だよな（ニヤリ）」

「……ふうん、夜一人で眠れなくて式に抱き着いていたのは誰だっけ？（ニヤニヤ）」



「なあんsないbぢb?!?!」

真名……日本語しゃべりましようよ、アスナ……ドヤ顔して何言ってるんですか？

あれから二日、私は夷さんの家であるログハウスにお邪魔しています。どうやら、ここにこの世界の私やこのちゃんなどは休日を利用してきています。

部屋があつたのはそのためです、いつもは寮で生活しているようです。……私みたいですね、私もしょっちゅうとは行きませんが明日菜と一緒に休日を利用してお父様の元に帰っていますから、気持ちわかります。

……というか、この世界の明日菜は『両義アスナ』りょうぎと言っんですね、真名もですが。最初会った時、アスナの墮落しきつた姿見たときは悪寒がしましたね。こちらのアスナは無表情が基本デフォルテですから、それを引きずってきた真名も大概ですが。

さて……私も訓練をしますか。刀はこちら側の私の物を使います。

「ふっ！ はっ！」

……ひどい、ですね。いえ刀はかなりの業物ですから不満はありません、自分の剣筋がひどい。いつものように振ったら、ズレが凄まじいことになってます、まるで刀を振り始めたころの私ですよ。ハク様に見せたら殴られますね、コレ。

「後ろからここにやにやちわ」

「ひゃああああああ?!?!?!」

突然、後ろから手が伸びる。本当に伸びてる?!?!?! 夷さん、あなたの体はどうなっているんですか?!

「……自分でもわからないZ E」

キラッ！ じゃないですよ！！ この二日間、この人にどんなに苦  
勞させられたことやら……思い出したら頭が痛くなってきました、  
ある意味、向こう側のネギ先生よりも質が悪い。

「いやあ、それほどでも」

「褒めてません！！」

「なん……だと？」

はあ……素顔がキリッとしているのに、どうしてこうなったのです  
か？ たしか聞いた話だと三千歳を超えているとか……不老不死つ  
て便利ですよ、私も不死になればお父様と永遠に一緒なのに。

私の剣術は神明流とハク様の我流の混合です、この体は神明流に特  
化していますので……我流の技がうまく放てない、もしくは威力、  
速度、精度が落ちてます。

「飛斬<sup>ひざん</sup>・松風<sup>まつかぜ</sup>」

目に見えない飛ぶ斬撃を繰り返し、遠距離の敵を両断する技で神明  
流の『斬空閃』のような物です。本来なら、岩すら砕く威力を秘め  
ているはずのその攻撃は夷さんに命中しますが……傷一つ付いてい  
ません。

「むう……本当にズレが酷いみたいだな、俺の皮膚すら傷つけられ  
ないなんて」

「連飛斬・野分」

連飛斬・野分は松風を高速で無数に生み出す強化技です、本来なら岩すら粉々にできるほどの威力なのですが……え、夷さん、お箸で受け止めないでください。夷さんは普通に食事に使うような箸で全部受け止めてるんですが……ハク様よりはいいですが。

「うーん、なんつうかキレがないな……あとは気の練りが甘い」

痛いところを突かれましたね。今の私は全てにおいて劣化していません、気でも、身体能力でも……全力をぶつけてみたい、そういう気持ちもあります。

……なら、『この体』の全力を出すだけです。そう思った瞬間、背中から何かが飛び出す音がしました。

「……羽か」

「はい……全力を受けてもらいたいです」

「わかった……来いよ」

刀に気を籠めます……私は剣、一本の剣です。所詮、私はお父様に報いるためにはこれしかありません……だって剣は人を斬るための物でしょう？

「鐘楼・夕霧！ー！」

今までで一番、もしかしたら全力以上の威力を持った剣技が繰り出されました。正直、私はこれが通用すると思っていました……いくら夷さんが強くて、ハク様よりは弱い　心のどこかで見下

していたのかもしれませんが。その結果

「嘘……ですよね？」

目の前には髪の毛で止められている刃が見えました……どんな硬度してるんですか?!?! そ、そうじゃなくて早く逃げなきゃ!!

「……ガツカリだ、俺に届かせるなら 気合入れる!!」

そして目の前には夷さんのこぶ

「ハッ! こ、こは?」

「起きたか……十回目だな」

目の前には優しい顔で頭を撫でている夷さんがいました……手のひらがプニプニしていて柔らかいです。二日間、模擬戦や修業をしましたが……慣れない体に疲労がかさみ、倒れること三回、アスナにボコボコにされ気絶したのが三回、先ほどのように一撃で夷さんに気絶させられたのが三回、このちゃんのハンマーで気絶したのが一回……まさかこのちゃんに負けるとは思いませんでした。

「気分はどうだ？」

「……憂鬱です」

「まあ……お前は生真面目だから、ここの空気には慣れないだろう

な

……正直に言いますと、この家には混沌しかない。フェイクさん（夷さんが作り上げた人造人間）が茶々丸さんに襲われ、ゲームを六本同時にやっているアスナ、エヴァさんに甘い物食べ過ぎと注意されている真名。私は巻き込まれないように部屋で引きこもっていますが……この世界の私はコスプレの趣味でもあるのでしょうか？古今東西あらゆる服がるんですが？

まあ……それはいいです、夷さんですよ問題は！！大人の落ち着いたきなんて文字はありませんよ、まるで『片付けのできない子供』ですよ。

「にしても……赤い瞳の刹那には違和感があるな」

「……これが本来の私ですよ？」

「わかってるさ……だけど、こつちのお前はそんなに強くない。俺が甘やかしすぎたってのもあるが」

少し暗い顔をする夷さん……気にしていたんですか。

「気にするわ！俺だって色々な奴から過保護やらシスコンやら……否定はしないが」

「しないんですか?!?!」

「まあそれは置いておいて……はっきり言つぞ、刹那」

「は、はい」

「……戦うのやめる」

その瞬間、私は夷さんに襲い掛かりました。手加減一切なしで……しかしそれを受け止める夷さん、いつもは優しそうな笑顔が、今ではイラつく顔に見えてきました。

「ふざけないでください!!!」

「事実を言ったまでだ。いいか？ お前は俺とは違う、不老不死じゃないんだ」

だからなんですか?! あれですか？ 傷つくのが見たくないと言うんですか？ どこまで上から目線で見れば気が済むんですか!!

「……たく、俺は説教をする様な人外じゃないんだが」

「何が言いたいんですか？」

「お前が死んだら棒名さんはなんて思う？」

「お父様が？」

「ああ、そうだ。お前は棒名さんの事を大切に思ってるだろ？ 棒名さんだってそうさ、お前の事を大切に思ってくれてる」

当たり前です、そうでなければとつくの昔にハク様に殺されていきます。ハク様にとって、私や明日菜は『蟲』、つまりは邪魔な存在です、殺されてもおかしくはない。それをしないのはお父様が私たちを大切に思ってくれてるから。

「そうですね、お父様が居なかつたら私は生きてはいなかつた」

「……ならなんで自分を大切にしない？ 武器も大事にせず、自分も大事にしない……『死に行くような』もんだぞ？」

死ぬ？ 私が？ 頭の中でわかつても体が震えます……どうして？  
なぜ私は震えるのですか？ ハク様の訓練で死にかけたことなんてたくさんあるのに……どうして？ 思考がグルグルと回り続けます。

「……お前が死ねば、棒名さんだって、明日菜だって、子日さんだって泣くぞ？ つつか俺ならぶん殴りに行く」

「え？」

お父様が……泣く？ 私のせい？ 明日菜も？ 子日さんも？  
そんなわけがない、私が死んでも誰も悲しまない筈だ、私は

「ちえりお……！」

「へぶつ?!」

夷さんが頭を叩いてきました……じ、地味に痛い。夷さんを見ると……少し怒ったように目を吊り上げていました。

「あのなあ……『家族』が死んでも何も感じないわけないだろうが……！」

「か、『家族』？」

「そうだよ！！ お前は『綺羅川』って、棒名さんの名字を貰ってる。その時点で『家族』だ！ それに明日菜だって小さい頃から一緒だろ？ お前が死んだら悲しむに決まってるんだろ？」

……考えたこともなかった。いつも私はお父様に褒められたくて

そういえば、まだ小さい頃、お父様に褒めてほしくて勝手に包丁使つて怪我をした時があつたような……その時、偶然いたお父様に悲しい顔をされた様な気がします。

明日菜もなんやかんだで私に何でも押し付けますが……無理だったら助けられますし、相棒と言つてくれます。小さい頃から一緒にいるから、なんでもと言うわけにはいきませんが、大体は考えていることがわかります。

子曰さんも私に優しくしてくれます、再生薬をくれたのも子曰さんですしね。

ハク様は……ここまで育ててくれ恩もあります。

このちゃんだって、私に偏見を持たずに接してくれる友人です。

「さて刹那、考えてみたか？」

「……はい」

「そう気落ちするな……まあどの世界でも、刹那は刹那なんだな」

「どういう意味ですか？」

「一人で悩んで周りに頼らず背負い込んでるところとかだな……た  
く、少しは周りを見るよ」

夷さんがため息をつきながら疲れたようにぐったりします……さっきの状態を維持してくださいよ、シリアスが台無しです。



「知るか、俺はシリアスよりシリアルに興味あるんだよ」

「牛乳でもかけて食べてください!!!」

「まあ冗談はさておき、『最後』の模擬戦をするか。刹那、よく考えて刀を振るんだぞ?」

『最後』、と言う言葉が気になりますが……帰るときなんですか。空を見てみると曇り空でした……あと少しなんです、ここにいるのも。

「……行きます」

「来い」

……夷さんには悪いですが、私は自分の考えを他人に諭されて曲げるほどわかりやすい性格はしてません。私は剣です。それは変わりません、生涯変えることのできない事でしょう。

だからどうしたんですか? 私はこの生き方は嫌いじゃない、私が力を振るえばお父様の敵を消せる、明日菜たちの危険も減る。だから私は剣になる、お父様や明日菜、子日さん、このちゃんにハク様に仇なす者を斬る剣になります。

「良い眼だ……全力で来い」

「鐘楼・夕霧!!!」

全力を籠めた刀を振るいます、体中が悲鳴を上げ、どれだけの無茶をしているかわかります……けれど引くわけにはいかない、私は

「剣です!!」

「よくい　　ってウボアアアアアア?!!」

予想以上の攻撃だったんでしょっか、夷さんが胴体に当たった瞬間に叫び声を上げます……このまま斬る!!

「タンマタンマ!!　斬れる!!　マジで斬れる!!」

「はあああああああ!!」

「聞いてねええええええええええ!!」

次の瞬間、上半身と下半身を真つ二つに裂かれた夷さんが宙を舞います……か、勝ったんですか?

下半身が綺麗に着地して、上半身も二の腕で着地します……どういう体の構造してるんですか?!!

「ゆ、油断して一番柔らかい体でやってたら、真つ二つにするとはな……見事!!」

「……ちよつと待つてください。今まで一番柔らかかったですか?」

「ああ、戦闘時にできる一番柔らかいはずなんだが?」

……り、理不尽だ。理不尽が服を着て歩いているという言葉聞きませんが、夷さんにこそ似合追うような気がします。

真つ二つになつた体をくつつけながら、夷さんは何も無い空間で指

を鳴らします。すると大人一人分ぐらいの大きさの亀裂のような物が浮かび上がりました。

「準備完了っつと」

「あ、あの、それはなんですか？」

「次元の壁をぶっ壊した際にできた時空の亀裂」

「……もういいです」

空を見上げながら呆れた声で夷さんに言い放ちます。

……本当に憂鬱です。私の気持ちを代弁してくれるのか、空も暗い灰色です。

「こっちの私に言うておいてください。『貴方の行為を許すことはできませんが、貴重な経験をありがとうございます』と」

「ほいさ」

「後……エヴァさん、アスナに真名、このちゃんとフェイクさんによろしく願います」

「おーい、月詠忘れてんぞー」

……違う世界とは本当にわかってるんですが修学旅行のイメージが強すぎて、変態としか思えません。

「それじゃ、夷さん、お世話になりました」

「……刹那、お前はこっちの刹那が嫌いな事はわかってるんだが……機会があれば棒名さんたちと来い、歓迎するぞ?」

凄いいい笑顔で言う夷さん……そうですね、悪くないかもしれませ  
ん。

「ええ……縁があれば」

空ですすでに何かのうねり声のような音が聞こえます……もうすぐ  
ですね。

「お元気  
」

別れの言葉を言おうとした瞬間、私の視界が光でいっぱいになりま  
す……さようなら、夷さん、お元気で。口で言えなかったので心の  
中で言います、あの人なら聞こえているd

「か、雷から光が逆流して                   ウアアアアアアアアアアア  
アアアアアア!?!?!」

え??!   そう思った瞬間、私の意識はなくなりました。

|||||   刹那視点

あの『入れ替わり』から数日が立ちました、特に変わったこともな  
く元の体に戻っていました。あの雷がなんだったのか……あの出来  
事は夢じゃなかったのか、そう思いたかったのですが、起きたとき  
私のカラーコンタクトが外れており、あの『真っ赤』な眼が露わに

なっていたときは取り乱しましたね。

「はあ……いい天気でしゅ　です」

……直らない噛み癖、あのとき決めたはずなんやけどなあ。噛み癖直すと……まったく、いつになったら噛み癖は直るのでしょうか？

「ふもつふ？（どうした、刹那？）」

「えーちゃん……ってまだ戻ってないの？」

「ふもふもふもつふ！！（いやあ、ボン太くんに憑依していたら慣れちゃって、てへ）」

私の胸元くらいの大きさの人形が銃を担ぎながら歩いて来た……ボン太くんと呼ばれている『とてもかわいい』人形だ。今はえーちゃんが憑依している。

「ふもふもも！！（まさか最後の雷で人形に魂が憑依するとは……こんなこともあるうかと可動式にしといてよかった）」

何故『ふもふも』言っているだけなのにわかるのか？……えーちゃんだからです、直接脳に語りかけているらしいです。いつか言っていました。が別にえーちゃんは人の姿をしなくてもいいらしいです、むしろこれがしっくりくるから人のままだと。前に気体になったり、液体になったり……あ、頭が痛くなってきました。

「ふももふもつ！！（うーん、ぬいぐるみも悪くない！！）」

「それだけは駄目や！！　元に戻るんや！！」

「ふもっ!!(だが断る!!)」

「もどろうか」

「ふ、ふも(は、はい)」

「……で、なぜ俺がメイド服で奉仕させられてるんだ?」

「だって原因はえーちゃんなんですよ?」

ビクツと体を反応させるえーちゃん……変わらないなあ、えーちゃん  
んは。本当に 変わらない。

ずるい、ずるいなあ、勝手にいなくなって、勝手に帰ってきて……本当にえーちゃんは昔からそうや、自分一人でやってま  
う。ウチやこのちゃんが入ることができへんかった、いやウチは逃  
げてただけなんや。

大切な人の傍にいたい想いと、護れない自分への嫌悪。  
そして自分がいることで大切な人に迷惑をかける……そんな“幻想”  
”に引き裂かれてしまうでしょうね。  
明日菜に言われた言葉が心に刺さる、こんな時も悩んでしまうん  
て……ウチは臆病者やなあ、ホンマ。

「はあ……では刹那お嬢様、どうなさるのですか?」

決まっている、そんな事昔から、会った時から決まっているんや

ウチは

「えーちゃん、あなたの傍に居たいんや。もう逃げるのは止めや」

本物の覚悟……そんな物はまだわからない、けどこれだけは決まってるんや。えーちゃん、夷の隣に居たい  
それがウチの覚悟や……！

「クククク……カハハハハ」

突然笑い出したえーちゃん……な、何がおかしいんや……！！

「いや、強くなったなあ……って、思ってたな」

「強くなんかない、ウチは弱い」

まだ怖い、このちゃんに、素子さんに、月詠に……みんなに言うのが怖い。必死に隠してきた『バケモノ正体』を自分から言う、それだけでも目の前が真っ暗になって、足元の地面の感触が無くなっていく……怖い、怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い。

その時、なにか温かい物が体に抱き着いたと思ったら……えーちゃんが抱きしめてくれました  
温かいなあ。

「刹那……俺が甘やかしたのが悪かったんだろ？俺がもっとお前に踏み込んでやればよかったんだよな」

ギュツと抱きしめられる感触が心地いいです……幸せです。

ふと、えーちゃんを見ると 泣いていました。

う、そや、えーちゃんは滅多に泣かない。泣いたとしても冗談の涙や……今は本気で泣いてる。





けたノリしかできんらしいな」

「そつやな……真剣なえーちゃんなんて想像できへん」

「ひでえ！！ これでも人生経験たつぷりだ！！」

「……ふん、七年もいなくなってフラツと帰ってきた人に言われたくありません」

「なんか遅しくなったか？ 刹那、あれか？ 実は『向こう』のお前とかいうオチじゃねえだろうな」

……へえ、えーちゃんは『向こう』の私の方がいいのですか？ そうですか、そうなんですか。

さて、なぜか手元にある『百トンハンマー』を振りかぶって

「ま、待て！！ 話合えば分かり合える！！ 対話大切！！」

「えーちゃんの、えーちゃんのおお！！！！」

そのままゴルフのスイング感覚で振るうとえーちゃんに当たり、コマのようにクルクルと回りながら空中に飛んでいくえーちゃん。

「チョツバムつつっ！！！！！！！！！！」

「なーにやってんや……駄兄様」

「このちゃん？」

そこにはこのちゃんと月詠が居ました。いまさらですがここはえーちゃんの別荘の中です、一面草原でこの頃は修業用の別荘となっています。……風が気持ちいいです。

「夷はんが面白い風に飛んで行つたんやけど……」

「……せつちゃん、なにしたん？」

「……えーちゃんの鈍感」

「「夷はん（兄様）が悪い」」

本当にえーちゃんは鈍い、どんだけウチらが……ゴホン！！ そろそろシリアスに行きましょう……まずはこのちゃんと月詠ですか、いきなりですね。

「あ、あのな、このちゃん」

「……あの『真つ赤な眼』の事やる？」

……やっぱりばれてますよね、恨みますよ『私』、けどこれはよかったのかもしれない。私が話すきっかけになる。

「そつやなあ……ウチとしては向こう側の先輩と斬り合いたかったえ」

「……だから戦闘狂とか言われるんですよ」

「ただ突っ込むだけの命知らずバカに言われたくありません」

「力だけのゴリ押し剣術じゃだめですよね」

「馬鹿<sup>とりあたま</sup>じゃ、緻密な戦術なんて立てられませんよね」

「変態」

「突撃思考」

「「よろしい、ならば決闘<sup>バトル</sup>だ!!」」

「せつちゃん？ つつちゃん？」

「「は、はい」」

すぐさま武器を捨てて、このちゃんの目の前で土下座します……プライド？ そんな物命と比べたら安い物です、このちゃんのハンマーは軽くえーちゃんを粉々に粉碎する程度です……死にますよ？ 半人半鬼でも半人半鳥だとしても死にます、無理です。

「で、そこで突き刺さってる兄様」

ビクッ!! とえーちゃんの頭から地面に突き刺さりながら動いてます、パンツ見えていますよ。月詠、それをカメラで撮らないでください……後でください。フフフ、えーちゃんファイルにまた一つ、後で楽しみましょう。

「ッ!! ……プハッ!! 何だ木乃香」

「……後で撮影会な、みんな呼んで」



「はいはい……待ってください　　ください」

「母様は本当に嘔み癖がひどいなあ」

「う、う、う、う……」

どうやら母と娘のようだが……どちらも髪が白く目が赤い、アルビノと言えばそうかもしれないが二人の背中には真っ白な翼があった。

「『シヤヒ』……本当にあなたは誰に似たんですか？」

「お父様に決まってるわ」

「このちゃんな様な気がします……はあ、まあいいでしょう、では今日はどんな物語が聞きたいですか？」

嬉しそうに笑いあう二人、本当に幸せそうだった……母親の真っ白な腰まで届きそうな長髪が風になびく。娘は母親に膝枕されながら話を聞いていた。

「少女と少年の話……」

「またですか？ ……では、始めましょうか。昔々あるところに『禁忌』の娘が生まれました、その少女は自らの容姿に嫌悪し封印しました。そして少女はある少年と出会いました……少女のような少年と、名前は　　」

穏やかそうに、ゆっくりと風は二人を包み込むように流れる。母親の声と娘の嬉しそうな声が聞こえる。そこに誰かが歩いてくる音が

する……それに気づいた娘は母親の膝枕から顔を上げて、喜びの声を上げた。

「父様……っ……っ……！」

「……おかえり」

そんなこんなで刹那喪失、これにて終了。

臯月二八様とのコラボ 刹那の喪失（後書き）

作「クロス閑話、ゲストはもちろんカレ刹那さん！！（カレカノ・ライフの刹那の略）」

カレ刹那「よろしくお願いします」

作「まさか……自分がこん大それたことができるとは、感謝の極み」

カレ刹那「そうですか……で、今回はプロット（予定）とかなり違つたらしいですが」

作「はい、本当は刹那さんはメガロのアホ魔法使いたちに、翼を見られて排除しようと思つた掛かられ本調子ではないので追い詰めれる……と言つのが予定していたことなんです……無理無理、三万字なんて長すぎる……」

カレ刹那「……バカですね」

作「ついに別作品の方にまで言われた?! あっ、でもなんか快感

g  
「

スタッフ「ミハハハ 教育的しどー」

ぎゃあああああああああああ?!!!!

カレ刹那「……本当に憂鬱です」

テン刹那「まったくですよ」

カレ刹那「……誰かと思えば、臆病者ではないですか」

テン刹那「うぐっ?!」

カレ刹那「どうでしたか？ ハク様にしごかれた感想は」

テン刹那「……あの人は鬼ですか？」

カレ刹那「鬼程度なら素足で逃げ出しますよ」

テン刹那「あなたが強い理由がまた一つわかりましたよ」

カレ刹那「どんだけ弱いんですか、あなたは？」

テン刹那「少なくともあなたより弱いです」

カレ刹那「それよりも髪の毛に剣撃が止められたんですが」

テン刹那「お箸でも止められましたか？」

カレ刹那「はい、ばつちりと」

テン刹那「ウチのえーちゃんも強いでしょう？」

カレ刹那「そうですね……まあそろそろやめましょう、本来なら私はここにはいない筈の人間です」

テン刹那「そうですか、なら覚えていてください、私はいつかあな



たを超える！！ 超えてみせましゅー！！」

カレ刹那「……まずは噛み癖を直しましょうよ」

テン刹那「そうですね……直します」

カレ刹那「それでは『私』、縁があったらまた逢いましょう」

テン刹那「ええ、ではちえりお！」

カレ刹那「ちえりお？ ……フッフ、ではちえりお」

〓〓〓〓〓〓舞台裏

木乃香「せつちゃんたちが笑い合ってる」

夷「激写だ、激写！！」

月詠「ああ斬り合いたい」

エヴァ「良い顔じゃないか……これはしごきがいきがいきがあるそうだ」

素子「出番出番出番……！」

千草「ひびく……これはひびく」

フェイク「俺もなかったな……まあいいが」



コラボ！ 夷と病みつきな彼女たち（前書き）

作「すいませんでしたあああああああああああああああ  
！！！」

夷「いきなりどうした?! というか土下座?!」

作「なんとかベタな終わり方で、さらに勦b様の小説の魅力で  
あるヤンデレが書け切れなかった……ヤンデレって難しい!!」

夷「さらにちよつと後日談があるそうだな」

作「やめてええええええええ!! 恥ずかしいからやめてええええ  
ええ!!」

夷「それでは勦b様に感謝をしつつ、閑話スタート!!」

スタッフ「（。。。）始まるよー！」

コラボ！ 夷と病みつきな彼女たち

とある場所、人の身で入ったら確実に死ぬだろうと言われていた所に夷はいた。しかも寝ている……それはもうスヤスヤと。そこに白髪の夷に似た人物が夷を殴り飛ばす。

「起きろ！！ てめえは寝なくても生きて行けるだろう！！」

「うつせい！！ 俺は寝たい時に寝るんだよ！！」

「人間超越した存在の癖に！！」

次元の狭間、世界と世界を区切る狭間に夷とフェイクは居た。元々フェイクは異次元戦闘も想定されているので普通にいられる。片や、死にながら世界移動を会得した人間である。こっちはもうバグやら何まで言われまくりである、本人は否定しているが……どこの世界にくしゃみで軍隊を吹き飛ばす人間がいるか！！ とツツコンでおこう。

そして突然、真っ白なコートに身を包んだ美形な少年が何も無い空間から出てきた。手には日本刀を持っており、夷を睨みつけていた。

「……何のために呼んだ？」

「そう怒るなって湊、俺が気に入らないのはわかる」

『鳴海湊』、それが彼の名前だった。その目にあるのは『怒り』、まるで仇のように夷を見つめる。彼は夷とはちがい『転生者殺し』と呼ばれる、対『転生者』の人間である、彼に屠ほぶられた転生者は数が知れない、さらに転生者の能力が強すぎる場合、彼にそれだけの

力を与えるので底が知れないのだ。

そんな実力者の前にしても夷は脱力していた、いわゆるSDキャラ化している……その様子にキレた湊は魔力線と呼ばれる物で夷を切断しようとする。

「……もうちよい威力持たせようぜ？」

「お前みたいなの『転生者』<sup>バケモノ</sup>が居るとは信じたくなかったよ」

夷の皮膚に当たり止まっている魔力線がそこにあつた。湊の能力は『転生者の能力が強すぎる場合』である。忘れてるかもしれないが夷の身体能力は修業したおかげである（一応『限界突破』は才能）。能力は一切使っていないし、強化の類も使っていない。バケモノのと言えば化け物である。

「まあ本題だ、お前も暇じゃないだろうしな」

「なんだ？」

「タホの世界に行きたいから道案内よろしく」

本気で抜刀した刀を小指で止める夷、イライラしながら夷を見る湊、それをため息つきながら止めるフェイク。

この後、湊はしぶしぶ案内したが嫌がらせのため、別の世界に案内したので夷がOHANASHI（拳）したので今度こそ案内された。

そんなこんなで今回の閑話が始まる、病みつきな彼女たちとそれに振り回される隊長補佐の世界の物語の始まり始まり

《とても優しい彼女たち、ただし好きな彼だけ》みたいなのっ！

「……………夷視点

「こちらエビーク、聞こえるか大佐」フエイク

「聞こえてるよ、というかなぜ大佐？」

「スネークの真似をしたくなっちゃってな……………今スニーキングしてるわけだし」

現在、機動六課の天井裏をすり抜けながら移動中だ、今は霊体化してるからな……………自分でも呆れてきた、俺はどこに向かっているんだ？  
とりあえず俺の目的を果たそう……………そうさ、またしても盗撮！！  
エヴァ？ 木乃香？ んなことしねえよ、つうか木乃香の裸なんぞ、見てもどうも思わないぞ？ 妹に欲情する兄ってどうよ？ さすがの俺でもないよ、いくら零崎だからって近親相姦はアウトだ。……………フラグじゃないよ？！

「でだ、なぜ夷オリジナルはこんなところに潜入してんだ？ 宝物でもあるわけじゃないし……………浮気はやめるよ？ エヴァが暴れて関西呪術協会が壊滅するのは勘弁」

「……………五回目はしないさ」

……………そうなんだよなあ、結婚してから独占欲が強いのか、女性の呪術協会の奴と話しても誤解されるんだよな、なんと壊滅したこと

やら……合掌。

『でだ、マジでなんだ？ 仕事放り出して行ったんだ……ふざけたことじゃないよな？』

仕事と言うのは、少しだけ世界の管理をすること。応援のフェイクシリーズの何人かはぶっ倒れてそれぞれの世界で恋人たちに介抱されているらしい……ふらやましいな。

『いや、ただ夕ホがどんな日常を送っているのか観察するだけ、でもって高値で写真を売りさばく』

『ただの犯罪だあああああああ！！ 夷！！』

オリジナル

そんなこんなで今日は隊長補佐の一日を追って行こう。フェイクとの通信切つてな。

PM5:00、夕ホが起きた……結構寝癖がある、もちろん撮っておく。一枚うん十万で売れるんだ。アスナのゲーム代に消えるが、俺の金つて平行世界の孤児たちに使ってるからないんだよね……隠し金庫に腐るほどあるんだけど。

「……シグナムさんと朝練しなきゃ」

いそいそと着替える夕ホ、カメラだけ置いて俺は食事に入る。プラグイバシーはあるさ……自動撮影しているがな、これが本当にやばい値段で売れる……さて今日はコジマクッキーでも食べるか。

PM5:30、ジャージ姿のタホが同じくジャージ姿のピンク色の  
ニーさむ「ゲフンゲフン、『シグナム』と呼ばれる副隊長  
の元に行く、コイツらはよく朝練をしているらしい……まあただの  
ランニングとかなんだが、ちよつと会話聞いてみるか。ちなみに言  
っておくがシグナムはタホに恋をしている、まあ普通なら応援して  
やりたいんだが

「遅れてすみません、シグナムさん」

「遅れるな……とは言わない

だがな、お前と一緒に居られる時間が少なくなるのは私としては  
嫌だな。

私はお前ともっと『居たいんだ』

誰よりも　そう主よりもな」

……そう『ヤンデレ』なんだ、タホがじゃない。シグナムがだ、何  
のきっかけでこうなったのか俺には分からん、ただシグナムが異常  
と言っほどタホの事が好きだと言っ事だけだ。とりあえず正面から  
撮っておく……こう見るとツーショットだな。

そこにオレンジ色のツインテールをしたジャージ姿の少女『ティア  
ナ』と青髪のショートヘアのこれまたジャージ姿の少女『スバル』  
が歩み寄ってきた、二人もタホの事が好き……『ヤンデレ』であ  
る。

「おはようございます！　隊長補佐、シグナム副隊長」

「ああ、おはよう。お前たち、今日は高町との朝練があるはずだが  
？」

「隊長補佐が朝は知っているって聞いたので、私たちも走りにきま





あああああ、オ・ノー、ドンドンシグナムの機嫌が悪くなっていく。

「今日の埋め合わせは後日しますので」

「……ならいい、二人とも。今日はこいつに免じて特別だ」

「はい!!」

元気よく返事する二人、そして走っていく四人……仲は悪くないらしいが、この手の事になるとコレだ。夕ホの胃がストレスでマツハな様な気がする。俺も一時間ちよい、この世界を観光するかね……とりあえず四人仲良く走っている姿をパシヤリ。

PM6:30、いやあ……買った買った、デバイスのパーツだよ。

ああ、デバイスってのはこの世界での魔導師に魔法使用の補助をするための、言うなれば魔法媒体のようなもんだ。それにAIを組み込んで相棒のように戦う……もちろん非AIもある。

さてウンチクはここまで、今はFWたちの朝練を見ている……まあスバルたちのことだが、全員子供って言うのが気に喰わない、赤い髪でなんかナギと似ているガキなんて十歳だし、ピンク色の髪の子も十歳、ティアナ達は十六歳……世も末だな、世界の均衡を守る組織がこんな子供に頼るなんてなあ、零崎でもやろうかなあ、カハハハハハ。

「お前は私の傍にいりゃいいんだ。

だっってお前は……私の」

「グイータちゃん、私の……なに？」

そついえばこの前も言つてたね……ねえ、なんだっけ？」

いきなり赤髪のちびつこと茶色髪のスタイルがかなりいい（エヴァより少し下程度か）女性が言い争っていた。赤い方はヴィータ、木乃香のハンマーは本来コイツの持ち物だ。で茶色のほうはなのは、なんでも管理局の白いあ

「ッ！……！」

「ど、どうしたんですか？　なのはさん」

「ううん、気のせいみたい。

誰かに悪口言われたような気がしてね。

君を心配させちゃったかな？

ごめんね。

やっぱり優しいね、君は」

「違う……こいつが優しいのは私だけだ。

こいつは私だけに優しくなければいいんだ……！」

「それは勝手だよ、ヴィータちゃん。

……だって彼は私が好きなんだもの。

優しくしてくれるのは隣みだよ？

本当に優しいのは私だけ」

……何かとんでもないことをしちゃったなあ、夕ホなんておろおろしているし、スバルたちは睨んでいるし、女の悪口は言つもんじゃねえなあ。

はあとりあえず、おろおろしている夕ホを一枚パシヤリと撮っておく……さて六課の中も見て視るかな。



「シェフを呼べ！ これを作ったシェフを！！」

美味しいな、素材の味を引き出しつつ、調味料でさらに美味しさを引き出す……まさに料理人！！

………つて、あ、俺つてこここの部外者ジャン。仮面付けて着物着ている不審者じゃん………終わった？

「え、夷さん？！！」

「よー、タホおひさー………なのはとヴィヴィオにフェイト、その節はどうも」

およそ二千九百年前にも一度この世界に来ている、その時になのはとヴィヴィオやフェイトにえらい目に合されたんだよなあ、その時にナイフやら何やらを渡したんだが……『あんな程度』の武器で大丈夫かな、たかがこの世界の最強の魔砲『アルカンシエル』をぶつた切る程度だしなあ。

「つて夷さんか、久しぶりだね………写真ありがとう」

「あつ、あの時の男女さん」

お、男女つて………まあ言い得てみえてだが、小さい子に言われるとショックを受けるぜ。

「………でも不法侵入ですよ？」

「知らんがな、俺は平行世界の旅人………法には適用されないはず」

「……夷さん、管理局の法律は全世界共通です」

何その独裁組織、従わなければ死あるのみじゃねえかああああああああああああああ！　人を『生体ロストロギア』とか言って魔法バンバン撃たれて、戦艦を金ドライで落としたら化け物と言われて……ハハハハハ、破壊してもいいよね？

「な、なんていう魔力?!?!」

「こ、これで人間で嘘ですよね？」

「スバル、ティアナ……あの人はバグだ」

『なるほど』

「全員で言うな!!　俺はちょっと本気だと世界が壊れる程度の一般人だ!!　……あ、そうだ、後は殺人鬼です」

『バグだああああああああつ?!?!』

う、うううこの場にいるみんなに言われるってどういう事だよ。俺はそんなにバグじゃない、人間だって三億年修業すれば身につく力だぜ?　……休みなしでだが。

とりあえず杖を下ろして、皆さん……効かないけど下ろせ、今の俺は魔法反射が基本デフォでできるから、反射しちゃうよ?

「と、とりあえず、この人を敵に回しても良い事はありませんよ!」

「……まあざつと0.1秒だな、全員殺すのに必要な時間は」

実際はもつと早いだろうだがな、女子供もいるし別に俺は世界を股にかける組織に敵対する気はない……まあ俺の大切な物に手を出したら知らんがな。

……いつから俺は世界規模の敵と相手出る様になっただろうか？  
随分と人外になったなあ。

「あいつが言うのなら本当なんだろうな……実際私でも勝てる気がしない」

シグナムがそついうと全員が杖を下げる……副隊長に言われちゃ仕方ないよなあ、命は投げ捨てる物じゃないし、向かってきても気絶で済ませるけどな。  
まあとりあえず……お近づきのしるしに。

「ほれ、六課主要メンバー、夕ホの写真集だ」

『夕ホ？』 六課全員

「ああ、隊長補佐だからな。『た』いちよう『ほ』さから取ったわけだ」

『適當?!?!』 六課全(r y)

「って俺は夕ホじゃないと何度も言ってるでしょう!!」

なんか写真集に釘付けになっている病みつきな彼女たち+一人の少年……あれ? おかしいな、俺の気のせいだ、きつとそつだ、少し頬を赤らめながら言うはずがない、ないっいたらないんだ!!

さてと今のうちに警告しておくか……『ゴン』の二の舞にはさせたくないしな。

「夕ホ」

「だから」

「俺はどんな選択をしてもお前の人生を見ている、だがな後悔はするな」

いきなりシリアスになったから驚いてるな……まあいいさ。

「な、何を？」

「今のままでいいと思ってるなら彼女たちと縁を切れ、いつか破滅するぞ」

そうやって『ゴン』も泣きながら選択をした、あいつは俺よりも強かった……あの時の選択を後悔しているかもしれないが、あの時のあいつは間違いなく俺よりも強かったはずだ　　自分が嫌になつて『殺そう』としたときよりもな。

「……」

「だが俺は信じてるぞ？　お前ならきつと後悔しない選択をするつてな」

「夷さん!!」

「……ナイフは護身用に持っておけ、後こいつも渡して置くかな」

俺は仮面を渡す、狐の仮面。



「か、仮面ですか？」

「ああ……まあお守りみたいなものだ、一応持っておけ」

……さて、帰るかね、もうこの世界に来ることは  
無いかも  
な。

「んじゃ、夕水……『縁があつたらまた逢おう』」

「夷さん！！ また『逢いましょう』」

そして、俺はその世界から出て行った。

数十年間、俺がその世界に行くことはなかった……だが結末を見て  
いる、まあハッピーかバッドかはその世界の神様（勳b様）の手の  
ひら、俺が語るべき物語じゃねえな……数十年後の話だ、もう夕水  
が死にそうな時の話だな、蛇足だと思っから飛ばしてもいいぞ？

|||||数十年後、とある病院にて

「……夷さん、また『逢い』ましたね」

「……ああ、そうだな、夕ホ」

しわだらけの夕ホがベットに横たわっている、もう死にかけだ……俺が寿命を延ばせることもできるが、夕ホはそれを拒んだ。

こいつは寿命で死ぬ気だ……わかっていたさ、俺は不老不死、出会いと別れなんざ、いつもだ……遅かれ早かれな。

「すみませんね、もう……眼が見えないんです」

「馬鹿が、老衰で逝くのに眼が見えてたまるかよ……バカ野郎」

「あなたは変わらないなあ、いつもいつも、あなたが来たらみんなが……ああ、懐かしい」

不老不死……良い事もあれば、悪い事もある。こういう風に親しい奴が老いて死んでいく様を見せられる。だからこそ、人間はすごいんだらうな。

「……もういいだろ？ 十分お前も生きたさ、向こうに行ったらまた逢えるさ」

「天国つてあるんですかね」

「あるさ、お前らのイメージとは違うがな」

だんだんと夕ホの生命が終焉に向かい始めている、もう時間なんてない……家族は 　　まだ来てないのか？

「あるんですか……よかつた」

「ははは、地獄に行くかもしれんぞ？」

「ハハハ、それは勘弁ですな……夷さん」

穏やかな顔が少し険しくなる……なんだって人間は高々七十年程度でこつも悟るのかね、俺なんて五億年生きてきたのに、まだわからねえぞ。

「俺は　後悔しない選択ができてましたか？」

「ああ」

「ずっと見ていてくれたんですか？」

「ああ」

「そう……です、か」

声に張りが無くなってきている……もうすぐか、おい天使共、あと少しだから待ってる。

勝手に連れて行くんじゃないぞ。

「よ、かつ、た……これで、逝けま、す」

「……もう眠れ、もういいんだ」

「紅茶、また……」

ピー、と言つ無慈悲な機械音と共に夕ホの体から魂が抜けていく、それを回収する天使たち。

……たくよ、なんであんなことを言うのかね。

紅茶、また一緒に飲みましょう、夷さん

「……死んだら飲めねえだろうが、ドアホ」

仮面を深くかぶる、顔に少し水滴が付いてるみたいだな……泣いてねえよ、泣いたら壊れちまう、泣かねえよ……さて、帰るかな。

俺はその場から姿を消した、後に残ったのは穏やかな顔で眠る夕ホと少し湯気の立った二つの紅茶の入ったカップだった。後は『狐』の仮面が一つ、夕ホの枕に添えられていた。

コラボ！ 夷と病みつきな彼女たち（後書き）

夷「ネギま！……ラジオ」

作「……あー、あれだ、すまん」

夷「いや、作者にシリアスが書けたんだなって思ってたな」

作「ハハハ、俺はバッドエンドが嫌いだからふざけて書いてるんだ。真面目に書いてバッドエンドにするより、ふざけて書いてハッピーエンドにした方がいいだろ？」

夷「作者が言いそうだぜ！！ ではゲスト！！」

タホ「なんで俺が?!?!」

作「それは仕方ない事だ、ここでは起こる現象は全てカオスだ」

タホ「とんでもないことに巻き込まれた?!?!」

夷「諦めメロン、タホ……後書きはカオス」

タホ「嫌だあああああああ!!」

作「初々しねえ」

ザン!!

夷「作者が真つ二つに?!?! って湊か」

湊「じゃねえよ！　なんでお前は髪の毛で受け止めてるんだよ！！」

夷「それが作者クオリティ……と言うか、お前の能力は、能力に頼った転生者になら最強だ。俺みたいに身体能力が平均並みだったが修業してどうにかした奴には効かないぞ？」

湊「限界突破だって能力だろ？」

夷「正確には『才能』なんだがな、厳密には能力とは違う……まあ別の世界の議論はお前の世界でやろう」

スタッフ「（。。（。つ『彼は勅b様の小説、魔法少女リリカルなのは〜転生者殺しの転生者〜の主人公です。興味がある方は是非読んでください！』」

作「ストーリーをざっくり言うと、転生者に姉を殺された少年が転生者殺しとなり、物語を変えようとする『転生者』を殺す、と言う復讐の物語です」

湊「本当にざっくりだな……と言うかなぜ生きている？！」

作「フフフ、ケフィアだからさー！！」

タホ「作者さんも大概だな」

スタッフ「（#。。（ヒャツハアアアアア！！　拷問だ、とにかく拷問にかけるー！！」

作「す、スタッフおいバカッ

ギャアアアアアアアアア

「!!」

タホ「作者さー！ー！ーん！！　って大丈夫なのか?!」

湊「と言うか、あのスタッフは何者だよ！　十何メートルある、武器持って作者連れて行くとか」

夷「それがスタッフだ、スタッフはスタッフで、スタッフでしかない」

よろしい　ならばと　つつきだ！

イエアアアアアアアアアアアア！！！！

タホ「……あれで？　スタッフ？」

夷「ちなみにスタッフは単体で管理局クラスの組織に無双ができるほど強いから」

湊「なんだそりゃ?!」

夷「だから言っただろ？　まあいいや、今回はコラボしてくれてありがとう」

タホ「ああ、はい」

湊「俺は殴られたただけだな」

ゴン「俺は名前だけだな」

スタッフ「（　　）つ　彼は勅b様の小説、病みつきなものはシ





作「あー、ひどい目にあつた……では勳b様、こんな稚拙な文章で  
すが申し訳ありません、それでは次回までちえりお!!」

注) 次回で閑話終了です。

キャラ設定×時系列×少し未来の話(前書き)

作「……すみません、マホレンシャー、無理ポです」

スタッフ「(#^ ^)何回てめえは次回予告詐欺すれば気済むんだ？」

作「だって無理ポだよ!! 戦隊物の戦闘シーンかけなくて……もう無理」

夷「拷問だな」

フェイク「拷問」

キョウ「ヒヤッハアアアア!! 拷問だあ!!」

作「彘?!」

スタッフ「(´・`・´)こんな大きなとっつきを用意してみた……突き合わないか？」

作「誰得だよ! ゲイヴンネタ誰得だよ!!」

スタッフ「(。 ^ ) b俺得」

作「スタッフうううううううううう!!」

フタエノキワ「—————!!」

夷「……アホばっかだな、ではどうぞ!」

m　そしてお気に入り登録が600超えました……嘘だろ？　夢ならさ

## キャラ設定×時系列×少し未来の話

### キャラ設定参式

名前 りょうき 両希 えびす 夷

年齢 三千歳以上

性別 男（女にもなれる）

### 容姿

ぶつちやけ美少女にしか見えない、空の境界の両儀式の顔とそっくりだが少し男らしさがプラスされた感じである。髪の毛は肩口で切りそろえられていてまんまの両儀式になってしまった、斬った理由はチャチャゼロのナイフ研ぐときに誤って斬ってしまった、だそうです。町を歩くと十人中十人振り向くであろう男の娘。この頃は伸ばした髪で色々な髪型にするのが静かなブーム、お気に入りにはポニテール。

体を弄って女にもなれるので一応、両性である。

服装は着物が主流で皮ブーツ装備、零崎だと黒いロングコートを着込む、寝るときは裸である、本人曰く『男だから恥ずかしくない』だがコレのせいでエヴァが何度も貧血になったのはしょうがない、そして色々撮られたのは仕方ない。

### 参考

別世界に行くのが趣味な転生者（神じゃないよ！）、様々な世界に手を出したせい、その世界の『力』を手に入れ、自身の力にしている。底が知れない強さを手に入れた夷。ちなみに今の夷が爆死すると体内のエネルギーが放出され、隣接する世界全てを消し飛ば

すほどの破壊力がある。

前世の記憶は大切にしており今でも覚えており、一度だけ自分の墓参りのために戻ったこともある。最初は自分を殺した墮天使に憎しみを覚えいたが……強くなりすぎて、相手にならなかつたのでやる気が失せた。

基本的に優しいが適当&興味がないと絶対に動かないし助けにもいかない。身内にはトコトン甘い、と言うかベタ甘である、身内が危険になるとどんな事しても助け出す覚悟がある（アリカの際は花嫁修業させるのもってこいだつたので助け出さなかつた）一応零崎なので殺すことに関しては嫌悪感もない、ぶつちやけ殺しても問題はないが『後味が悪い』と言う理由でこの頃は殺さない、唯一殺すのは転生者や向かつてくる敵。木乃香には深い愛情を持っており……と言うか悪く言えばシスコンなので木乃香を第一に考える、が木乃香に本当に好きな人ができたら素直に祝福する気であり、結婚式まで全て取り仕切る算段をつけているので、重度のシスコンではない。エヴァにも愛情を持っており、おおよそ五十年間付き合っていたので熟練の夫婦のような関係である、チャチャゼロも家族と考えており将来は麻帆良に家を建てて子供達でも見守りながら細々と生活しようかとも考えている。

身体能力が最早人間と呼べるレベルではなく、少しジャブ程度の攻撃でも次元を裂く程度の力を有しており、射程が無制限なのでその気になれば世界が違くとも特定の人物を殺害することも可能である、夷自身『人間の形を保っているのは気まぐれ』と言うほどである。体も気体、液体、果ては固体にも変化でき、太陽の温度ですら溶けない頑丈さ持つ皮膚、超重力を受けても何も起さない骨格、一番柔らかい目は地球を消滅するくらいのエネルギーが無ければ傷つけることすら願わず、さらに体の表面がエネルギーシールドが張られているので実際はもつと硬い。ちなみにエネルギーシールドは夷の体内で生成されるエネルギーで作られている、内臓も進化しており、食事しなくても生きて行けるし、睡眠をとらなくてもまったく問題



最早全力を出すと人間なら一瞬で蒸発しかねないので、全力は出さない……出すとなるとゼウスとの戦いなど最高神クラスの者たちだけである。強さがカンストどころか、バクっているし、まだ伸びしろがあるので終着点がない。まだ『発展途上』の強さであり、ただ存在しているだけでも危険な存在である。

#### ステータス

筋力・計測不能、およそEX+

魔力・計測不能、およそEX+

神力・EX+（創造神クラス）

耐久・EX+（自動再生もある）

幸運・D（ものすごく悪い）

敏捷・EX+（クロックアップと同等の速度なので）

計測不能がほとんどで現在も成長中なので正確な数値が出せないのが本音である、リミッターをつけた状態だと全てBランクであり、神力に至っては完全封印している。ギャクパートだと全てDランクであり、へっぽこ夷である。

#### 固有スキル

##### 見稽古

・見ただけで技や能力をコピーするが、ある一定のレベルの能力はコピーできない。

##### 限界突破

・戦いの最中でも能力が上がっていく。  
創造する能力

・ありとあらゆる道具を創造できるが、本人はあまり使わない。

##### 仮面好き

・仮面が大好きで、戦いで破壊されると戦闘から逃げる。  
ありとあらゆるエネルギー

・コジマ爆発でも核融合炉でもなんでもござれ、よくアスナにゲームの充電を頼まれる。  
神卦法しんかほう

・全力を出す時の状態、この状態になると前に立つのにも一苦労である。

#### 影の倉庫

・自分の影に物を放り込むと異次元に収納してくれる、いわゆる某青狸のポケットである。

この頃は自分自身でも何が入っているかわからなくなっており、別荘の七年間を使い、掃除したら……自分の小さい時に作ったあまりに危険なものがたくさん入っており、そういうものはすべて処分したがまだカオスである。別世界の危険な物オンパレードなので夷以外、入った瞬間に死ぬ。

#### 魔眼

・神眼でもあるが神様からのプレゼント。成長限界突破のせいで成長が止まらずにいる。解析、理解、複写、直死、吸収、分解、霊体感知、幻術の力を持ち夷曰く「眼光だけで殺すことも可能である」、ありとあらゆる世界の魔眼の力も宿っている。使用限界は無し、もはやリスクすら『限界突破』した。

#### 首飾り

・木乃香からもらった首飾りであり、リミッターの源である。聖遺物であり、夷以外が持つと生命力を封じられ死に至る。どんな環境でも錆びず、壊れず、劣化しないようにコーティングしており絶対に壊れない……はず。

#### パクティオーカード

名前表記 RYUGI SHIKI (両義式)

称号 FESTIVAL (残滅殺人)

色調 Prisma (虹色)

徳性 Murder (殺人)



方位 centrum (中央)  
星辰性 Nigrum foramen (黒い穴)  
ローマ数字 ?  
アーティファクト 完了形変体刀虚刀・式

名前 フェイクIIファースト

年齢 四十三歳

性別 男

容姿

夷と同じだが、髪を長くしており足まで届くほどである。後は『偽』と書かれた仮面を被っている。後白髪。

参考

最初は夷の影分身だったが自我を持っていたので人造人間として生ホムンクルスを受ける。基本的オリジナルベースに夷を基本に作られているので、思考も夷とほぼ同じ……かと思われがちだが基本真面目であり、夷には親オリジナルのような感情を抱いている。

夷のストッパー役だが、この頃はそれを諦めている。隠密行動が得意なので諜報活動を主にしている。

性格は真面目であり、別荘を一つ持っているがその中は真っ白な何も無い空間である。子供好きで孤児などを拾って孤児院(大戦期、紅き翼の拠点)で育てている。別世界の夷の後始末を押し付けられるのでストレスで髪が白くなった。

戦闘能力は言う間でもなくチート級だが、本人は争い事が苦手なの

でそんなに戦わない。銃を基本の遠距離戦術を得意とし、高火力の銃器で一気に制圧するタイプである、銃器は別次元に保管しており、その数は魔法世界と旧世界の軍隊を相手にしても余るくらいである。刀も使うが下手くそで、使ったらへっぽこになる。神力も使えるので神に分類されるようであれぬ微妙な立場である。

一度だけ夷に反乱を起こしたこともあったが、くしゃみだけで制圧されこの世のありとあらゆる拷問をされそうになったが、シュークリームを与えて難を逃れた。

一万人近い兄妹たち、フェイクシリーズのリーダー的存在だがここでも苦勞人であり、頭痛の種となっている。

ステータス

筋力・A A

魔力・A A

神力・C（下級神程度）

耐久・A A A（夷に鍛えられたため）

幸運・D -（ものすごく悪い、とにかく苦勞人である）

敏捷・A A A +（修業のおかげであり、逃げ足の時にさらに速くなる）

保有スキル

影の倉庫

・銃器や重要な物を入れる物、夷と違いきつちりと整理整頓されている。

銃器使い

・銃だけなら夷を超える腕前、どんな銃器でも触れば使えるようになる。

諜報

・隠密活動が得意、その気になればどんな場所にも入り込める。

苦勞人

・とにかく苦勞する、めっちゃ苦勞する……未来でも子供好き

・めっちゃ子供が大好き、シヨタコン&ロリコンではないのでご注意を。

名前 スタッフ

年齢 スタッフ

性別 スタッフ

容姿

(。°。°) これである、つまりは顔文字である、その姿は様々な用途で変わる。

参考

作者がふざけて作ったサポート用の後書き&前書きに登場する顔文字、最初は作者の<sup>クワイア</sup>いう事を聞いていたが……後書きがカオスになっていくほど、壊れていき作者に反逆&いつかは乗っ取ろうと画策している。

初登場は活動報告の『夷「見るなよ？ 絶対見るなよ?!」』である。

好きな武器はとっつき(A Cをやったことのある人ならピンと来るだろう)、及び『拷問』である。

戦闘能力も中々で、フェイクと同等か、それ以上である……ドウシテコウナッタシ。

ステータス

スタッフ……この一言だけである。

保有スキル

・スタッフ

作者のサポート役、大切な相方……だと思っ。

・拷問

とにかく拷問だ！ 拷問せよ！！

・反逆

いつか作者になれると信じて……まあないがな！！

顔文字

スタッフの宝具のような物である、場合によっては夷すら凌駕する。

時系列

・2005年

夷、自身の世界で事故によって死亡、その後ルシフェルによって体ごと天界に誘拐、実験され魂ごと消滅しかける。その前に神が救出、神力で無理やり注入して何とか留める。この際、魂の輪廻転生を司る部分が消失、神は魂に細工をし転生者としてネギま！の世界に（夷に予備知識なし）転生。

・1988年

原作から十五年前、夷が赤ん坊の姿で転生、偶然通りかかった、近衛詠春、近衛桜に拾われる。このとき、養子となり名前を近衛夷に改名。

・1991年

転生三年後たち、自身の異常性と魔眼を認識しながら木乃香の兄として生活していく、このときにすでに実力はネギま！の強さ表では500程度、この頃に刹那と会う（噛み癖刹那が思いつたのはなぜ

だろうか?)

・1993年

転生生活五年目、魔眼がパワーアップしていることをorzしながら、仮面ライダーの力を主体に戦っていた。魔力、気、さらにとある理由で妖力も使えるようになっていた。このときに原作の木乃香と刹那の事件が発生、夷がカブトで介入し事なきを得る。そしてその数日後、夷は記憶転写装置を使って虚刀流を覚えるが……刀が使えない体になるが見稽古で何とか持ち直す。さらに零崎に覚醒する、このとき虚刀流と零崎を封印することを決意する。

・1994年

夷六歳、木乃香と刹那、素子が麻帆良に入学するために色々準備する。そして鶴子との修業がトラウマになっていた。最近、前世でとある小説の人物、ぶっちゃけると『両儀式』に似てきたことを悩んでいた、ちなみに髪型はポニーテール。麻帆良の世界樹の解析に成功、神木だったせいかわ、それとも自身の神力が覚醒したのか不明だが神力に目覚める。この頃から両儀式のせいではっきりを受けまくるせいで、嫌いになった。

1996年

夷八歳、もはや人間を超えた力を持った夷は日々修業、たまにネタ武器、仮面づくりに勤しんでいた。零崎化の影響で人殺しをしかねない夷はなんとか修業用シュミレーターと妖怪を殺すことによって殺人欲を満たしていた。偶然にルシフェルに襲われている千草を助ける、またもや両儀式に関することなので本気でキレたらしい。そして月詠との試合で当時、まだ未完成の黒式を使用して勝つ、その時に月詠の道場の師範代に義息子の件をカミングアウト、詠春に破門され、鶴子&素子姉妹からありがたい奥義十連続を受け、全治十か月&刀が握られなくなりました。数か月後、神明流としての初任

務（妖怪の駆除は自主参加）としてなぜかクルト・ゲイデル、オスティア総督という重要な人物の護衛を任される。失敗したが木乃香やら色々な人物からの折檻から逃げる途中に神様に会う。そこでルシフェルの殺害を依頼される。数か月後に、神様のサポートもありなんとか過去に飛ぶ……がなぜか四十年前に行ってしまったらしい。

・1960年

なんとか約四十年前に到着した夷……いや、式は、そこでエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル、まあ『闇の福音』と出会った。そこで戦闘し、勝利するとなぜかエヴァのお気に入り。その後共に旅をするが、式はそこで零崎の制御のため解放する。別荘を作り、零崎と力の制御に七年くらいかける。途中賞金に目のくらんだ者たちや軍を壊滅させながら京都まで行くと、まだ幼い頃の父親、詠春と会う。一晩の宿を取るはずだったが、なぜか関西呪術協会が攻撃、戦闘に陥る。結果だけ言うとなんか式はなぜか復活したりヨウメンスクナノカミを『体』だけ完全に消滅させた。その後は割愛するとして……なぜかエヴァと結ばれパクティオーした。

・1978年

数えて三百年程度、平行世界に手を出した式、たまあに働いていたが『週休日六日』を明言しており、弟子の修業や千草との遊び、エヴァとのデートくらいしかやっていないダメ人間だった。気まぐれに麻帆良に親書を届けると、次期英雄であるナギ・スプリングフィールドと戦い、これを圧勝する。

・1980年

詠春が桜と結婚……しかし初夜に逃亡した、夷は適当に帰ってくるだろうと高をくくっていた。

・1981年

後に大分烈戦争と呼ばれる戦争が勃発、急きよ魔法世界に突入した。するとどこかで見たことあるキャラクターやその技を使ってくるチートな転生者が、式とエヴァを襲った。適度に撃退、あるいは地獄に叩き落しながらオスティア回復作戦に乱入、どさくさに紛れてアスナを誘拐した、そのとき詠春と再会、なぜか紅き翼と行動を共にする。

・1982年

新年祝つての鍋パーティーにラカンが乱入したが、これを蟲ピンで串刺し、しかし腹が鳴ったので鍋に誘うと（傷は気合で治した）意気投合し、この場面で加入しない筈のラカンが紅き翼に加入した。鍋パーティーが終わった直後、フェイクからの情報により、千草の両親が転生者に襲われていると伝わり、すぐに向かったが間に合わなかった。このとき夷は本気を出して、その転生者を空気に変えて能力をすべて封印し、永遠に生かすと言う罰を与えた。その後、失意に吞まれて一度は死のうと考えるがなぜか未来に居る筈の木乃香が現れ、木乃香に説得（？）されて、また戦い始めた。そんなでもってグレートブリッジ奪還作戦をハリセンだけで攻略し……ガトウと出会う。

1983年

タカミチ魔改造を誓い、虚刀流を教え込んだ夷。連合の首都に行く途中、何度も転生者と魔物を倒しながら向かい、アリカに協力を申し込むが、アリカとアスナが姉妹喧嘩してしまう……が作者が何を血迷ったのか、シスコン王女 アリカを誕生させてしまう。その後、一番目に協力を要請されるが拒否する、この時点で『完全なる世界』は敵ではないことが判明する。ルシフェルにアリカたちを誘拐されたりもしたがすぐに救出した、アリカがクーデターを起こし女王になり一気に物語が進む。夷は造物主と対話し、真っ向から意見を否定し『火星緑化計画』を始動する。連合と帝国に世界樹を植えてい

「スモエンテレケイア」

く夷たちだったが、帝国で植えていたナギとラカン、フェイクがルシフェルに強襲される、その時刺されたフェイトの姿を見たフェイクが覚醒、ナギたちと共にルシフェルを撃退した。衛星軌道上に逃げたルシフェルを夷が達磨状態で別荘に放り込み、色々な復讐を果たす。そして停戦協定を結ぼうとしたところ、メガロの陰謀によりアリカが捕縛される。

1985年

アリカが処刑……されずにナギの求婚を受ける。夷たちが処刑場を混沌カオスに陥れ、ぶちぎれている夷が烈メイオウ攻撃によって太陽系ごととメガロを吹き飛ばしそうになったがフェイクとエヴァ、そして紅き翼全員が本気になって止めた。(夷が抵抗したせいでメガロやその手の魔法使いたちは重傷を負った)アーガマで地球に向かい、京都に降り立った夷は栄子に京都の滞在許可を貰う。数か月後、ナギとアリカ、夷とエヴァの結婚式をし、夷はようやくエヴァと結ばれた。

1993年

トルコのイスタンブールで『両義式』が死亡、ナギの消息も不明となる。エヴァが呪いをかけられ麻帆良に行き、紅き翼のほとんどが麻帆良に行った。

もう一つの歴史

1985年

ナギとアリカが第一子である『キヨウ・スプリングフィールド』を出産する。

1993年

ナギが息子たちのために戦いから身を引く、以後子育てをしながら



アリカと細々と暮らす。

1996年

雪の日の夜、イギリスのとある村がメガロメセンブリア元老院が召喚した魔物に襲われる。

しかし、三人の魔法使いが撃退し、被害は零。

・1997年

木乃香が小学三年生の四月、キヨウ・スプリングフィールドが木乃香のクラスの担任として配属された、このとき年齢十三。

2000年

キヨウ・スプリングフィールドの修業終了、麻帆良からイギリスに帰る。

「……………ここから閑話……………」

「うだー」

「うだー……………じゃねえよ！！オリジナル 夷！！ 仕事しろ！！」

「俺は週六日休業だ！！」

「働けジジイイイイイイ！！！！」

「うるさくないなあー、だから恋人の一人できないんだぞ？」

「結婚したから余裕だなあ、オイ！！」

そんなこんなで言い争いをしている夷とフェイク、仮面を外しやる気がない表情で机に突っ伏す夷。それを怒鳴りながら怒るフェイク

……ここは夷の異次元空間の事務所であり、世界を管理する場でもある。  
ここに居た神は汚職をしていたので、夷に力を剥奪され、人間に転生されてしまった。夷は一時的にここの管理をしているのだが……  
めんどくさがり屋の夷がするはずもなく、フェイクシリーズがせつせと働いている。

「ほら！！ 魂管理きちんとしろや！！」

「めんどい……速く後釜来いよ、俺は人間だ」

「お前の様な人間バケモノがいるかあ！！」

「知るか、俺は帰ってエヴァに会いに行くんだ。アスナとも遊ばなきゃいけないし……ナギの子供の世話しなきゃいけないしな！！  
……ええっと、名前は」

「『キヨウ』だよ、確か一歳のはずだぞ？ たく、調子乗って別荘貸すから結婚式から半年で子供生まれたんだぞ！！」

簡潔に状況を説明すると、奥の手過ぎたナギとアリカはまったくその手の『行為』をしなかった。夷がさりげなく避妊道具渡したり、媚薬を渡してもだ……で面白くない夷は入れば一日で三年たつ別荘を貸したら、子供を抱えたナギたちが現れ『いい笑顔』したエヴァにボコボコにされたのは良い思い出である。

名前はキヨウと言い……恐ろしいほど夷と似ていた、ナギとアリカもなぜ夷似が生まれたのか疑問に思っていたらしく夷が魔眼を使つて診察したが、異常も何も見つけられなかった。見つけたのは膨大な魔力と魔法無効化能力マジックキャンセルを持つていたことである。

「あれは驚いたなあ、出てきたガキが俺そっくりとか……シャレになんねーよ」

「ダヨナー……本当になんもしてねえだろうな？」

「してないしてない、女神エリツァに誓ってもない」

「おい、このポケジジイ、地味に惚け話してやがる！！……ほんとうだろな、お前は『うっかり』してゴジマ粒子食べたり、『うっかり』して別世界に落っこちたり」

「はいはい……あー、懐かしいなあ。そういえば昔は木乃香たちに知らない物を見せるのが好きだったなあ」

ここで少しだけ未来のお話をしよう、麻帆良に居る木乃香たちの閑話の始まり始まり

〓〓〓〓〓〓〓〓〓キヨウ視点

「クークー……むにゃむにゃ」

近衛木乃香は寮で寝ていた、そして何かに抱き着きながら寝ていた。

「ゲーゲー」

麻帆良の教師であるキヨウ・スプリングフィールドだった。木乃香に抱き着かれながら寝ている、少し嬉しそうである……ちよつとそ



もはやクールな美少女などそこにはおらず、駄々をこねる少女が居た。もつと言うと模擬刀が地面を削っているのでキョウ的にはやめてほしいのだが、やめる気配がない素子……この二人の関係は姉弟のような関係だ。

「つて、髪切れた!! 今切れたあああああ?!!」

「ウアアアアアアアアア!!」

麻帆良の空に二人の叫び声が響き渡る……今日も麻帆良は平和です。

「ひ、ひどい目にあつた……さすが麻帆良、あの程度じゃびくともしねえぜ」

全身ポロボロで髪型も少し変なキョウは何とか職員室に入る。あの後、鋼糸で模擬刀を切断してしまったキョウは英語の勉強を見ると言う約束をされた……体よく教師役をやらされたとも言えるが。

「おはよう、キョウ先生」

「新田先生……おはようございます」

「今日はどうなされました? ポロボロですね」

「ア、ハハハハ……猫にじゃれつかれちゃって」

常人なら死んでもおかしくなかった状況だがキョウは猫にじゃれつ

かれたと言った。それを面白く思ったのか新田と呼ばれた教師は笑いながら、コーヒーを紙コップを注ぐ。

「どうぞ、朝からご苦労様でした」

「どうも……フーフー、ああそうそう、ちょっと放課後、素子さんに補習するために教室使ってもいいでしょうか？」

「素子……青山ですか、あいつは本当に英語だけでできればいいんですがね」

コーヒーに息を吹きかけながらキヨウは新田に言うと、苦笑しながら新田が返す。

キヨウはごもつともと思いつながらコーヒーを飲む、地味に冷却の術式で冷ましたコーヒーだから猫舌であるキヨウは一気に飲む。魔法は秘匿だがそんなのどうでもいいキヨウである。

「うん、おいしい……今日は何かありましたっけ？」

「6・A組は何もないはずですよ……しかしキヨウ先生は本当に立派だ、あの問題児たちをよく纏め上げている」

「新田先生には負けますよ、あなたには本当にお世話になった」

「……もう三年ですか、早いですねえ。最初はどうなるかと思いましたが……立派になって」

「ははは、最初は自分でも驚きましたよ。まさか女子中学生の教師になるなんて」

談笑しながら話していると新田がほかの先生に呼ばれる。

それに返事をしながら軽く会釈をしながら席を立つ新田、会釈しがえすキヨウは今日の分のプリントやテストの見直しをし始める。

「……………木乃香視点」

「……………御馳走様」

「はい、御馳走様や」

キヨウ先生の部屋から出たウチはすぐに寮の部屋に戻って、朝食の準備をする。アスナは徹夜でゲームしていたのが、軽く目の下の隈ができておったんや。

まったくアスナは成績もいいし、顔もいいのにこれやから男が寄り付かんのや……………と言うか、アスナはそういうのに全然興味なさそうやけど。

「またキヨウの所に行ったの？」

「先生や、アスナ。ちゃんと呼ばないと」

「親戚だからね……………はあ、本当にスペランー先生は弱い」

某糞ゲーをやったアスナ、ウチも何度もやらせてもらったんやけど……………段差に躓いただけで死ぬってなんや？ 高すぎると死ぬってなんや？ ……アカン、言い出したらキリがない。

「……………なんで、あんなに式に似てるんだろ？」

式……アスナの恩人の名前らしいんやけどな、よくタカミチ先生も言ってたな。ウチはよう知らんやけどものすごく強いらしんやけどな……兄様には勝てへんな、ウチの中で兄様が負けるところなんて考え付かんのや。

「そろそろ時間やな……いこっか、アスナ」

「はいはい……さて、ゲームを入れて」

「アカンよ?」

「……P Pだよ?」

「アカン言うてるやろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおお!……!」

|| || || || || 刹那視点

「……ハッ!」

いい朝です、空には鳥が飛び立って気持ちいい朝日が照らしています。  
本当にいいあ

「って、髪切れた!! 今切れたあああああ?!!」

……いい朝ですね、いつも通りです。キョウ先生の叫び声、えーち  
ゃんそっくりやから懐かしいですね。何かバイオレンスな音がして



いますか……何も聞こえてませんよ。

「ふう、ここまでにしましょうか……このままだと真名のゲテモノ料理を食べることになります」

同室の両義真名はよく言えば何でも食べる、悪く言えばゲテモノ好きです。蛇を焼いて食べるなんて無理ですよ……そういえばえーちゃんもよく撮って食べていたような？　ウチの周りに常識人はいないのかなあ？

「あつ、刹那先輩！！」

「月詠ですか、朝早いですね」

「たまには早起きもいいかと思おてな……夷はんに笑われないように強くならへんと」

月詠の手にえーちゃんが使っていた、妖刀・怪あやしと小太刀がありました。……三年前、それだけが京都の山奥で刺さっていたのが発見されて、月詠以外持てなくて必然的に彼女が所有者になりました。真つ赤な刀身はまるで血の様です、えーちゃんが妖力を使って戦っていたことは知っていますが……信じられませんね、えーちゃんがこんなものを使っていたんで。

「刹那先輩はどうするんですかー」

「とりあえず部屋に戻らないと……朝食がヤバい」

「ああ、そういえば両義さんとすれ違ったやけどな……嬉しそうに蛇持ってどっか行ってたえ」







「ウチはバカじゃないでしゅー!! ……ですー!!」

「……よし、んじゃ次な」

「何か反応してくださいよおおおおおおおっ!!」

ここで言うておくが麻帆良学園では小学生の時から英語がある、そしてほとんどが英語が苦手ではなくなるが…… たまーにとてつもな  
くできない奴がいる。

「……あのなあ、刹那、夕映、クー、まき絵、楓、裕奈」

「なんアルカ？」

「えつとなんででしょうか？」

「なんですか？」

「なんでござるか？」

「なにになに？」

「なにに？」

「俺は簡単な曜日の単語だけにしたはずだ……なんで、なんで、○  
点たたき出すのかなああああああああああ?!!」

真つ赤な答案には大きく○点と言う単語が、バカレンジャーを甘く

見たキヨウが悪いのだが……本人たちは自覚なし、好き勝手喋っている。

「まあまあ……仕方ないアル」

「すまないでござるなあ、次は頑張るでござる！」

「シヤラップ！」

「えっと……それどういう意味でしたっけ？」

「しゃべっていいよ、って意味じゃなかったけ？」

「違うよ、食べ物って意味だよ……！」

「そうなんですか」

「おーまーえーら……超……！」

「なんだネ？ キヨウ先生？」

「こいつら全員の勉強見てやってくれ、報酬は俺が実験台になる」

「（キュピーン……！）やるヨ……！ やってやるヨ……！ ヒヤツハ  
アアアアアア……！ 実験体GETネ……！ やったね、ハカセ……！」

「「「「おい、ばかやめろ（アル）（しげる）……！」「「「「」

「……しるわに」

一人、アスナと千雨だけ鬱陶しそうにつぶやいた。ほかのクラスメイトも便乗して騒ぎだし……鬼の顔をした新田先生に怒られたのは仕方ない事だ。

|||||キヨウ視点

「はいはい、ここは『ボブは大変な物を盗んで行きました』ですよ」

「うづうづ、わ、わからへん」

頭から煙が上がりながら問題を解く素子さん、今は放課後、あの後即行で帰った茶々丸がにんにくをたっぷり買い込んだところを見たので安心する。フェイクにどうやって言おうか？ ああ、そうそうフェイクってのは一年前にひよろつと来た、両義式を元に作られたホムンクルス人造人間の事だ。

ちなみに茶々丸の好きな人でもある……この頃茶々丸が首輪を買っていたのだが、猫でも飼う気か？ なにやら大きめの首輪だったんだけど……まあいいか。

「ほら、終わったらなにか奢ってあげますから」

「み、惨めやあ〜」

涙ぐむ素子さんの頭を撫でる俺、もう外は真つ暗である。外では爆発音や部活動中の学生の声が聞こえる……なぜ爆発音？ 今日はまだ敵は来てないはずなんだが。

そんなことを考えているとあつという間に七時になっていた、腹が鳴り出す。

「そろそろやめましょうか」

「あ、ああ……ふう、疲れた」

「お疲れ様……さて、俺はそろそろ学年末の成績表を出さない」と

「ああ、そつだキョウ……お前は木乃香たちが中学に上がっても教師をするんだろ？」

「……いいえ」

……もう時間はない、元々俺はここには修業しに来たんだ、三年も教師をやっていたのはあいつらの卒業を見るため。それが終われば……俺は

「イギリスに帰りますよ」

わかっていたことなのに、なぜか心が苦しかった。

素子さん、最初は本当に姉さんみたいな存在だった……ネカネ？

ああ、あいつなら家で着物作りまくってるよ、ドウシテコウナツタ？

「そうか……キョウも十六だしな。修業が終わってもおかしくないな」

「ええ、心残りが素子さんが大学に受かるところが見れなかったことですよ」

「ははは、手紙くらいは出してやるさ」

……にしても思ったが二人つきりだ、真っ暗な教室に見た目美少女



(自分で言うのもなんだが)が居る。確実に色々な妄想されそうなシユチュエーションだが……そ、それもいいかもな。なんか恥ずかしくなってきたあああああああああ！　なんで顔が赤くなるんだよおおおおおおお、俺は純情君だったか?!　殺人鬼のはずだろおおおおおおお!!

「ど、どうした顔が赤くなって、熱でもあるのか?」

「い、いいや大丈夫です!!　と、とりあえず夕食をどうしますか?」

「え?　あ、ああ……どうしようか」

「それじゃ、ちょっと外で食べませんか?　ああ、金なら俺が払いますから」

「何を言っている?　年下に奢られるほど落ちぶれちゃう」

この前、模擬刀をホクホク顔で買っていたのは誰だっけ?　そう言えば葛葉先生くすはのと一緒に居たなあ、と言うか葛葉先生は苦手なんだよな。俺を見る目が崇拜する神を見ているみたいで怖い……両儀式さんよお、恋する乙女の管理ぐらいしてくれよ。

「い、今は財布が氷河期でな仕方なく、仕方なく奢ってもらおう」

「……素直に奢ってと言えはいいものを、ツンデレ乙」

「ツ、ツツツツンデレちゃうわ!!」

「口調口調……まあいいや、んじや行きますか」

女性をエスコートしないとな、一応英国紳士（笑）だからな。そういえばこの頃ネギが学校でいい成績を出しているそうだが……俺は実力を隠してるからな、一般的には魔法が使えない無能、だが肉弾戦では無類の強さを誇る。とか言われてるがタカミチ先生には絶対勝てない、あの人鋼糸を全部避けて、なおかつ居合い拳で相殺してくるからな、本気で戦ったら殺し合いになる……殺されるのは俺だが。

「むきゅ〜」

「どうしてこうなった？」

背中には酔いつぶれている素子さん、こうなった理由は至極簡単即決、水と言われて飲まされたのがワインだった。俺は別にいい、向こうで父さんに普通に飲まされたしネギだって嗜み程度だが飲んでる、五歳なら親の同伴でOKなんだぜ？ 日本は厳しすぎると思うんだ……が、素子さんは心底弱いらしく即ボタンキョ〜、で止むおえず店から出てきた、飯食ってねえよ。

「はあ〜、せつかく二人つきりでごはん食えると思っただのに……二度と行かねえぞ、あの店」

ひとしきり愚痴をしつつ、素子さんの寮を目指す。俺はスーツの上に着ている、このコートでよく『黒い死神』とか言われるが……なんだっけ？ まあいいや、三月でもまだ寒い、意外に

この国は寒いことに三年間居て気付いた。

もうすぐお別れだがな、四季と言つのも悪くない……冬の後の春の温かさは本当に気持ちがいい。

と言つか、素子さんはぐっすり寝ている、でもってしがみつくから……あの、その感触がやばい、意外とある（・・）。何かは想像してください、俺も男だしな、襲いたくなるよまったく。

「クークー……夷う」

「ッー！」

酷くイライラした……『近衛夷』、『両儀式』と共に俺が似ていると言われる人物、素子さんの思い人。なんでそんな奴のことを言うんだよ、俺を見てくれよ……俺は夷でも式でもないんだ、『キヨウ』なんだよ。

「……結局、素子さんの中には俺が入り込む余地はなかったのかなあ」

淡い恋心と言つ奴なのかもな……やっべ青春してる？

とまあ冗談を言っているが……結構ダメージもデカい、明日休もうかなあ。

「キヨウ……ありがとう」

「ッー!? ……ははは、素子さん、俺の方こそありがとう」

そんなこともあったが、俺は無事に卒業式まで6-Aの教師を果たし、無事に修業を終えた……そう言えばパートナー、魔法使いミステルの従者キを作ってねえな。よく魔法関係者から作れとか、娘ととか勧誘されたが片っ端から拒否してたもんなあ。魔法生徒やら魔法先生のうざいことうざいこと……鋼糸でバラバラにしたかった、俺はナイフと鋼糸主体だから仲間がいたら邪魔だし、俺についてこれるのが学園内で数えるくらいしかないってどういうこつたい。

「本当に行くんやな」

「ああ、とりあえず任期は終了し……向こうで地道に教師でもしていこうかね」

「キョウー！ 戦うアル！！」

「クー、駄目やでー？ ウチが戦うんやえ」

「落ち着いてふひやりとも！！ ……二人とも！！」

「なあ刹那、お前の噛み癖はどうにかできないのかい？」

「できないだろうな、フフフ」

「真名にエヴァさんも笑わんといて！！」

「まーまー、冷静に」

「……馬鹿ばっか」

「……だな」

「アスナに千雨さんにも?!?!」

こ、こいつらサヨナラ会であれだけ騒いで、まだ騒ぐか？ ええい、麻帆良の女子は化け物か?!?! …… アニメのDVDは地道に実家に送っているからな、向こうについた時が楽しみだ。

「……キョウ君、向こうに行ったらナギさんとアリカさんによろしく」

「ああ、タカミチ、後は頼んだ」

「たく、なんで俺まで？」

「フェイクさん……私たちの結婚式には出てもらいましょうね」

「何言っちゃってんの？ と言うかこのイラン知識を早くアンインストールしろ!?!」

フェイクは茶々丸とお幸せにく、さてそろそろ飛行機の時間だな。

……あ、あれ？ なんかみんな涙ぐんでる？ い、いやこれはバナ

ナ じゃなくて罨だ!?! クラスが俺をはめようとしている罨だ!?!

「じゃ、じゃあ元気で！ 勉強とかきちんとしろよ!?!」

そのままダッシュで飛行機までたどり着く、後ろから声が聞こえるが気にしない、気にしない!?!

そんなこんなで色々ハシヨツたんだが……イギリスについて空港で母さんの抱き着き攻撃に合い、失神させられて村まで直行したんだが

「ま、まてネカネ、なんぞこの服の量は?!」

「腐腐腐腐、キヨウの送ってもらった、『アニメ』の服装よ」

しまったあああああああああああ! まさかネカネがこんなことしようとしているなんて!! Help!! 弟よ、幼馴染よ、両親よ!! 助けてえええええええ!!

「兄さん……頑張つて、僕はもうだめ」

ネギいいいいいい!! なんかネギまで服着されてる?! とうるかポケ母さん、何涎垂らして撮影に入ってるんだよ、綺麗な顔が台無しだよ!!

「ああいつアリカも……イイ!!」

「さっさとくたばれ、このポケナスううううううううううううううううううう!!」

「さあキヨウ? 楽しい楽しい着せ替え時間よ!!」

「待てゴラア!! 地獄にきm ウワナニスルヤメ」

その日、俺とネギは男として大事な物を失った  
こんな才子認めれるかあああああああああああああ!!!!!!

キャラ設定×時系列×少し未来の話(後書き)

作「け、ケツが……畜生、あいつら後で拷問だな」

スタッフ「m9(^(^ )9mザマア」

作「ち、畜生、動けねえ……こ、今回はラジオは無し、次回予告！  
！」

夷「『かくして転生してきた』」

作「じ、次回も」

夷「ちえりお！」

作「今回はまさか同じ時期に夷の出演のため、ハヤテ様とコラボ。刹那のコラボで臯月二八様とコラボ。さらには勅b様とのコラボ……全員、俺よりも文章がうまいのに、本当にありがとございませす」

夷「お前のはネタ小説だろ？」

作「なあこれを見てくれ、コイツをどう思う？」

夷「ただのリボルビング・ステーキ……お前ってとっつき好きだよな」

作「昔からな、一撃で葬り去ることもできるしな……なんかゲイヴンネタに走りすぎたな」

夷「ラジオねえからここまでな、では次回まで!!」

作「それでは!!! …… スタッフの人物紹介いらなかったな」

スタッフ「(。。(。。(。来週からは俺が作者!!」

作「ねーよ」

スタッフ「(X) 貴様には水底がお似合いだ」

作「水没王子?! というかてめえの時代は終わった! 消えろス  
タッフウウウウウウウウウ!!」

スタッフ「(#^ ^) ピキピキ、コジマキャノン」

作「あ、悪かった!! コジマキャノンはまずい!! 危ない  
危n

スタッフ「ボムファイヤ!」

ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
!!!!!!

注) 今回で閑話終了です。見苦しい茶番をお見せしてすみませんで  
した(出演者一同)

作「ひ、ひでえ(ガハツ)」



誕生、そして転生してきた自分(前書き)

次回予告と題名が違う? ……すみません。

夷「どうした作者」

いや……ちょっときつい感想があつてな、方便は難しい、自己陶醉  
つて……好きに書いてたらそうなたんだよ。

スタッフ「(。。(。 (そんな作者に『マッサージチェア(子  
日さん手作り)』」

マジでか?! いやぁ子日さんは結構いい發明してるし、期待で  
きそつだ!!

夷「ゑ? いやいや、あの人結構、マッドな気が」

す、すわり心地も最高だ! スタッフー、電源入れて

スタッフ「(。(。(身体をとろけさせる様な感覚をどうぞ」

うお?! ……気持ちいいな、本当に体が溶け って溶け  
てる?!

スタッフ「(。(。(ヒヤッハアアア! とにかく拷問だ! マ  
ッサージチェアで拷問だあああ!!」

は、図つたな……図つたなスタッフウウウウウウ! それ  
よりもなんちゅうもん作つてんだ、あの人!! 溶けるう! ケフ

イアが溶ける！！

夷「……あー、座らなくてよかった」

フェイク「それでは本編をどうぞ」

ぎゃあああああ………

## 誕生、そして転生してきた自分

「…………ふあ」

そこには仮面をつけた男が居た。寝起きの様で欠伸をしているようだが仮面で見えない。

すっぽりと顔の大半が隠れた仮面、『真』と書かれている仮面の位置を変えながら男は指を弾いた。周りを見ると死体が十、百、千、万……数えきれないほどの『創造神』の骸がそこにはあった。

それも気にせず、仮面の男の目の前にはぼつかりと穴が開く、それはよく夷が時空の亀裂と呼んでいる物だった。

「めんどくさい……………なんだって俺がしなきゃならねーんだよ。あのバカは八つ当たりのだけだろが、ドアホ」

愚痴っていた、めちゃくちや愚痴っていた。誰だかわからないが誰かの事を愚痴っているようだ……………その声には後悔と侮蔑があった。

「はあ……………自分のせいだってわかるんだがな、そう簡単に認めたら負けだと思っただよ」

独り言を紡ぐ、まるで言い聞かせるために。

「さあて……………終わらすか」

切れ目に入っていく『誰か』、完全に消える瞬間に小さな声でつぶやく。

「『両義式』<sup>バカ</sup>をな」







少しの間、別の世界で学園祭に行っていたんだが……そこで『色々起きてしまったてな、ちよつと死神とOHANASHIしてきた。どくなつてやがる、俺でも殺し切れないとか、後は俺と似た様な人とどっかの世界最強似の奴までいたが……すごいよなあ、まだまだ行つてない世界や会つたこともない人物がいることが良くわかつたよ……にしても俺子供扱いだつたなあ、どこぞの自分が面白ければ世界を塗り替える団長とか言われた時は心にズシつときたね。いや、今までの事考えると否定材料がほとんどない、と言つか皆無……しにてえ。

そして最後のコスプレ大会は                    bさじkbcfdkZBI  
SDJび(暴走中)、ああ、もう思い出したくない。なんで俺がニ  
ート姫の恰好しなきゃならなかつたんだ？    もうちよいマシな衣装  
合つただろうが……あの駄目死神のせいだな、いつかぬつ殺す、と  
いうか世界ごと破壊してもいいと思うんだ。まあやったらやつたで  
臍に敵対されそうだがな、負けはしないだろうが、反撃にあいそう  
で怖いな。

「式、帰つて来たのか？」

「ああ、キティか……うん」

二人つきりの時はエヴァの事をキティと呼ぶことにしたよ……恥ずかしい？    知らんがな。

「ふむ、それと式……『向こう』では随分面白そうなことをしてたじゃないか」

キティを見るとすごい『良い』笑顔をしている……まさか？    まさか？

「『フレイ』と呼ばれる死神から送られてきたんだが……随分と面白いな、これは」

うにゃああああああああああああああああああああああああああああ！！！！ コスプレの時の映像？！ というか音声はらめえええええええええええええええ！！

『この豚ども！ 良いから黙ってこの私に平伏しなさい！！』

「ガッハ！！！」

口からコジマ粒子が出そうになるが何とか押し戻す……実家がコジマ汚染とかマジ勘弁。あの時はふざけて女になっていたから音声まで女っぽく……グギギギギ、誰が撮ったし。

『よし、これで夷さんの弱みをまた一つ！！』

臃おおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！ あいつの家に赤い物を送ろう、五トンくらい！！

「わ、私に言えばいいだろ？」

「はい？」

「だ、だからそんなに言いたいのならわた

」

「キティストップ！ そこまで、そこまで！！ 今のお前は十歳程度の姿だから誰かにみ

」



「(ニヤニヤ)」 ラカン

「(ニヤニヤ)」 アル

『(ニヤニヤ)』 スクナ

「泥棒猫」 アスナ

遅かった……と言っか終わった、いろんな意味で終わった。ニヤニヤするな！そしてアスナ、お前は太剣を振り回すな！護身用に教えたのが仇となったか。あ、ちょ刀身向けないで刺さな

「(まったく、お前は……大人ではなく子供だな)」

「(ゲームばかりやってる神に言われたくねえよ……と言っかいい加減に天界に還れ)」

「(向こうに行ったらまた仕事をしなくてはいけない)」

「(働けニート……だからニートなんだよ!)」

「(元を正せば、お前が我が体を消滅させたのがいけないんだろう……!)」

「(……瘴気が残っているんだがなあ)」

「（ふん、封印された我から洩れた神力が瘴気になったんだろ）」  
めんどくさいから対処してないがな、まあ封印はしてるんだし……  
神性の瘴気なんざ利用するバカはいないだろ。

「（にしても……人間とはすぐに逝くものだな）」

……知らんさ、俺がエヴァと新婚旅行してたら死んでたとか、んなもん対処できるかよ。バカ野郎が、ドンドン逝っちまうんだろうなあ。

にしてもだ、後一年で俺が転生してくるわけだが……そろそろ出て行こうかね、ラカンも明日には魔法世界に行くって言っし、アルとゼクトは麻帆良に行くって言っしな……ちょっと待てや、それじゃ麻帆良にはガトウにアル、ゼクトにタカミチが居たってことか？

オーバーキルってレベルじゃねえぞ、というかあの二人は隠居してんのかねえ。ガトウは……お疲れ様、たしかあいつまだ魔法世界で頑張ってる筈、クルトから手紙が来たよ。

「さて……これからどうしよっ」

とりあえず一回整理しておこう。

あと一年で転生してくる俺に姿を見せてはいけない。それと俺は数年のうちで失踪している（フラツと旅に行ったのかもな、ありえるから怖い）……まあ百年じゃないし、たった十何年だろ？ 寝てればすぎるな。

とりあえずは……来月中にここを離れるかな、千草と今のところあつていないから救いだけど会ったら記憶は消さなきゃな。

「し、式師匠……」

「あれ？ タカミチと鶴子じゃないか……どうした？」

「なんですか、あの修業メニューって紙は？！」

「そつや！ 式師匠ならもっと鬼畜な修業をするはずや！」

「あ、それ四回連続だから」

「「やっぱり鬼畜だった?!」」

……鶴子もタカミチも大きくなったなあ、それに強くなったなあ。

まさか俺が鶴子姉さまの修業メニューを考えていたとは……どおりでキツイわけだ、そして五年後くらいにヒーヒー泣きながら修業するのか……合掌。

「まあお前らも強くなったよ……特に鶴子は詠春並にな」

「し、師匠が優しい？ 今日槍が降りますね」

「そつやな、タカミチ」

「マジで降らしてやるうか、ガキども？」

どごその慢心王みたく影の倉庫から色々な武器を射出しようとする……ところどころに超危険な物もあるけど、まあいいか。

「死ぬ！ 絶対死にますって！」

「そつや！ 早まるんやない!!」

「……誰のせいでこうなったと思ってるんだ？ はあ、まあいい。タカミチも明日には魔法世界に帰るんだよな？」

「はい、僕も少しは色々知らなきゃいけないと思うので……式師匠は？」

「適当に世界中を旅するかね、アリカとの約束もあるし」

二年前、結婚式を挙げてキヨウを出産したアリカは、ナギと共にイギリスに行った。子育てに専念したいらしい、その時にアスナも一緒に行かせようと思ったが

『私なんかより、シキのほうがいいじゃろ？ ……あ、でも写真は送ってくれ』

とてもいいサムズアップだった……良い性格になったよなあ。

「いなくなってるの？」

「……まあ大丈夫だ、いつか帰ってくる」

赤ん坊になってな、そして鶴子姉さまに鬼畜な修業をされるんですね……もうちょい軽い修業にすればよかったなあ、まあ後悔しても遅いかな。

「……今までありがとうございました！！」

「式はん……ホンマ、ありがとうございました！」

二人にお辞儀をされる、照れくさいな。弟子なんて何人も取ったが

「こうやって俺の元から巣立っていく姿はいつも慣れない、いい師匠じゃないと思うんだがなあ。  
……さて、色々しておくか。」

「そうですか、行ってしまっうんですね」

「そつだ。ついてくる……なんて言っうなよ？」

「大丈夫です、もう一人の命じゃないんです」

今は夜、久々に詠春と酒を飲む。仕事ならフェイクに押し付けた、あの程度なら三秒程度で終わるだろうな、無駄に事務能力とか高いし。  
アルコール濃度低めの酒を飲む……飲んでる気がしねえ、水だけこれ。

「妊娠したなあ……おめでとつ。これはその子の貯金にしる」

「二億なんてとんでもない金額出さないでください……まったく」

これでも少ないと思うがな、生まれてくる子は木乃香のはずだ。なら百億、いやもっとあげても問題なし、と言っうか渡す。

まあ……俺もお腹が少し大きくなっていた桜を見たときはびっくりした。ツルツルな桜に比べて、ボロボロの詠春……一体何やらかしたんだ？ たしか、あそこには一時的に『ハイサーカー狂戦士』になれる薬とかおいたんだけど、飲んだのか？ 危険、絶対飲むな、って書いておいたのに。

「……そういえば師匠に頼みたいことがあるんです」

「ほへ？」

「……生まれてくる娘の名前を決めてほしいのです」

「ぶほっ！！」

なぜ娘ってわかったって？ 魔眼による解析だよ、便利すぎて使いづらいが……まあ良い能力だ。

いやあ、まさか俺が名づけ親だったの？ 義兄で名付け親とか……木乃香が聞いたらどうなるんだ？ むしろ記憶消さないとやばいな、俺の事もエヴァの事も……まあ期限決めれば大丈夫だろう。

「そんなに驚くことですか？」

「こんな怪しげな仮面野郎じゃなくてもっとマシな奴に名づけてもらえ」

「嫌です、結婚式の時に桜と相談しました」

俺の知らないところでそんなことが？ ……はあ、しかたないなあ。

「んじゃ決めてやんよ……最大の親孝行じゃね？（ボソ）」

「は？」

「こっちの話だ……そうだなあ、『木乃香』なんてどうだ？」

妹の名前を変えるわけにはいかないしな、それに俺が気に入ってるし……まあ名付け親が俺って時点でなんか色々問題あるような気がする。

「木乃香……師匠、ありがとうございます」

「そう言うなって……まあこれで別れだしな」

実際、俺の記憶している限りだと『両義式』が家に来たことはない……まあ色々やってれば時が来るだろうし、やりたいこともあるしな。

「師匠……」

「詠春、頑張れよ」

「はい……」

「……………時は過ぎて

「ほら、アスナ行くぞ！」

「……………ゲームしたい、動きたくない、だっこして」

「ドウシテコウナツタンダ？」

「式が甘やかすからだろう？」

「ケケケ、俺二全部押し付けたカラナ」

「（自業自得だな……あ、フラグk t k r!）」

か、カオスだ……アスナはアリカに連れて行ってもらった方がよかつたかもしれない、このままだと二ト侍ことシグナ いや、止めておこう。

とりあえず、見送りは詠春に桜、明人だけだ……まあほかの奴等には来てもらってない、記憶消したしもう俺の顔を思い出せないだけなんだがな。鶴子や素子も消去済み……千草さんだけは覚えてもらっている、色々と辻褃合わせしないと。

「はいはい、抱っこしてやるから……ニヤニヤすんな!」

「夷はんは本当に変わりまへんなあ」

「そうですね、師匠ですから」

「師匠だからな」

お前らの評価がよくわかったよ、外野も笑ってじゃねええええええええええ!! ……くう、いつか泣かせてやる!! ばーか!!

「（ガキだな）」

「（ゲームの電源OFF）」

「（ノオオオオオオオオオオオオ!!）」

もうスクナもスクナでアレだし、背中のアスナはゲームやってるし



……あれ？ この時代でD とかのゲーム機ってオーバーテクノロジー  
ジージャネ？ ……もしかして家にあった、壊れたP 3とかって  
俺が回収し忘れた物かよ。どうりで疑問に思うわけだ……片づけ？  
なにそれおいしいの？

「んじゃ、お別れだな」

「また来てくださいよ、木乃香の出産のときにでも」

……わりいな、詠春。

俺は指を弾き、記憶を消去する……と言っても顔だけだがな。ほか  
の奴らの記憶は全部消したし、ここに俺が滞在したって言う記録も  
三十年前のあの壊滅事件も全部消去した。

「……あ、あれ？」

「んじゃ、本当にじゃあな」

そのままキティと共に歩き出す、チャチャゼロは頭の上で髪の毛で  
ナイフを研磨している……アスナは無言でゲームをしている。

「なあ、式……あれでよかったのか？」

「良いんだよ、ああしないと俺のせいで生まれてくる『木乃香』に  
も迷惑がかかるかもしれない」

キティには『俺が居たと言う事実が残ると、メガロのアホ共がいち  
やもんつける可能性があるから記憶を消す』と言っているが……自  
分のためだけだな、ごめんキティ。

「これからどこ行くの？」

「どこでもいいぞ？ とりあえず外国に行こうか……あれ？ この時期って外国とか紛争ヤバくね？」

そう言いつつも転移札を出し転移する。

〓〓〓〓〓〓〓一年後

「京都よ、俺は帰って来たあああああああああ！！！」

両希夷はハイテンションだった、それはもうはしゃぎまくっていた。一年間、外国で紛争地域を渡り歩きそれを止めながら旅をしていた、その間、ずっと旅をしておらずフラッシュが溜まっていた……旅中毒と言えいいのか、わからないがフェイクを身代りにして日本に来たわけだ。

今は顔を変えて生前の顔に戻っている、それでも端正な顔立ちであり、ちよつと女に見えそうな顔立ちである。

「さて……『俺』はどこにいるのかな？」

1988年、夷が転生してきた年、そして今日にでも詠春と桜が夷を拾う日であった。

転生してきた直後の自分が見たくて来たわけだが……久々の日本に来た夷は完全に目的を忘れていた。

「さて八つ橋、八つ橋 別荘の中にあるがやっぱりこっちで喰い

たいね」

基本なんでも食べる夷、文字通り『何でも』である。どんなものでも夷にとつては食べ物であり、どんなものでも吸収できる『眼』も持っている。

「さあて……ほへ？」

テンションが上がっていた夷の目の前に『何か』が落ちてきた。条件反射でキャッチする夷、何かと見ると……赤ん坊だった、それもひどく衰弱している。

「おいおい……まさか」

夷は上を見上げるとちよつと三階建のビルがあった。たぶん、そこから落ちてきたのであろう……もしも夷がキャッチしなかったら赤ん坊は地面に叩きつけられ、その命を散らしていただろう。その考えに至った夷は軽くキレそうになる。すぐさま屋上に転移すると……そこには誰もいなかった。

「……逃げたか」

目を細めながら開きつぱなしの扉を睨みつける。次の瞬間破碎される扉、眼光一つで扉すら破壊するようになった夷。とりあえず腕の中の赤ん坊を視る。

「おいおい、なんだこの七実ななみさん並の病魔の数は」

いつ死んでもおかしくなかった、いや死んでいない方がおかしい。この世のありとあらゆる病魔がその赤ん坊を蝕んでいた、なぜ死な

ない？ 答えは簡単である。

「膨大な魔力で無理やり生きてる？ ……なんだこの赤ん坊」

夷は久々に笑いがこみあげてくる、生命の神秘では片づけられないほどの生命力、そして木乃香並の魔力……興味が出てきた。

「いいだろう、んじゃ坊主……お前の病気を治してやる、そしてお前の名前を付けてやるよ」

笑いながら夷は治療を開始する

終わった、単純に治療し

たら赤ん坊の体力は持たないだろう。夷のお得意の回復魔法でも下手に治したら違う病気が併発するかもしれないかもしれない……ではどうやって？

食べたのだ。なにを？ 赤ん坊に巢食う、三億個の病魔を一気に体から引きづりだし食べたのだ。三億の病魔が夷を蝕もつとする……それを夷は自身の免疫力だけで治す、たったこれだけの事である。

「うん……中々ヤバかった。んじゃ名前だな」

赤ん坊はスヤスヤと眠っている。その頭を撫でながら夷は気付く……コイツ俺じゃね？ と。もう一度魔眼で調べる、すると色々一致した。

「……えっと、まさか俺がここで治療しなかったら、臆見たく病弱キアラになってたかもしれないし、その前に屋上から落とされて……うん、生まれてすぐ死亡フラグとか」

不幸だ、と言いながら髪をかきむしる夷。

もしも自分がここで介入していなかったら零歳で死んでいたのだ、

いつもの夷なら百年くらい放浪しそうだがふと赤ん坊を見る。

「人の気持ちも知らないでスヤスヤと……赤ん坊じゃなかったら殴ってたな」

幸せそうな顔で寝ている過去の自分を睨みながら……しかし懐かしみながら夷は思う。

「（……あれ？ 霊脈と繋がってない？）」

完全に作者も忘れていたが、夷もすっかりさっぱり忘れていた。

「……繋げとくか」

頭を掴みながら強引に霊脈と繋ぐ……完全に力技なので何か不都合でも起きたら大変だが、夷は気にせず繋げていく。

一秒足らずで終わった作業、そのまま毛布を過去の自分に巻く夷、ちゃんと『夷』と書いておく。

「うっし……後はあそこに置くだけか」

自分自身を抱きかかえる夷、そのままとある座標に転移させる。

「……行ったかな？」

||||| 夷視点

「ばぶぶぶあぶ（誰か拾ってくれ）」

「なん なつ、赤ん坊?!」

「あなた、どないしたの?」

うお……懐かしい、三千年前だけどしっかり覚えてる。

始めて『親』と呼べる人と出会った日、そして木乃香に会った日だな……あれ? そういえばあのころはほのぼの路線で行くはずだったのに、ドウシテコウナツタシ。

しっかりと『俺』を抱きしめる、父さんと母さん……むう一度呼び捨てにすると違和感がある。

「さあ木乃香も待つてるし、帰ろう」

「そうやな、木乃香にお兄ちゃんができてもうたなー」

「ばぶう（妹か）」

そうそう、この後家に行ったらあまりのデカさに叫んだんだっけ?

そして屈辱の授乳期……死にたくなってきた、死ねないけど。何もかもが懐かしい。

「……いつか帰ってくるさ」

歩き去っていく三人を見送りながら俺はそうつぶやく、顔を元に戻して逆方向に歩き出す。

絶対に帰ってくる。

「……………その頃のエヴァたち

「うがああああああああああっ！ 式はどこ行ったんだ？！！」

「お、落ち着けエヴァ……………つてあぶなああああああ！」

「フェイク……………言わないと斬るよ？」

「すでに大剣振ってますが！！！」

「ケケケ、殺シ合イダア！」

「『神威霊装・三番』<sup>エロヒム</sup>発動！！！」

精霊が纏う最強の盾と呼ばれる『霊装』を発動するフェイク、なぜか左目が時計になっていた。

そこで安心してしまったのが運のツキ。次の瞬間、霊装をバラバラにされ、目の前にはエクスキューションソードを振りかぶるエヴァの姿が。

「嘘おおおおおおお？！」

「そんな物、式の体に比べたら柔らかいわああああああっ！！！」

「理不尽すぎる？！　そしてアスナ、手榴弾なんて持たないで！」





ガクガクと震えだすフェイク、くしゃみだけで反乱を制圧されたのを思い出したのだろう。

「あ、あのお、そのハリセンを振らないって考えは？」

「ない」

「デスヨネー」

ザンツ！！

本気で斬る気はなかった夷だったが、振ったハリセンから出た水がアスナやエヴァが居るところに直撃、アスナのゲームをぶった切ってしまい……切れたアスナが夷をボコボコにしていた。それを褐色肌の少女がその様子をエヴァとチャチャゼロと一緒に見ていた。

「……無茶苦茶だね」

「無茶苦茶だろ？」

「オメーラ、アノママダト旦那、マタ家出スルゾ？」

「その時は今度はぶん殴ってでも止めるさ」

バイオレンスな音と共にエヴァが決意の声を上げる、それと同時に夷も断末魔の声を上げた。

誕生、そして転生してきた自分（後書き）

夷「ネギま！ラジオ、作者はちょっと復活中だから今回は俺と」

木乃香「ウチやー！」

夷「はいはい、近衛兄妹です……ってなんでやねん！」

木乃香「良いノリツッコミやな、さすが兄様」

夷「さすがじゃねえよ！ 確か今日はフェイクのはずだが？」

木乃香「茶々丸さんと鬼ごっこしとるよ？」

夷「……あいつも苦労してるなあ（泣）」

木乃香「だって兄様を基本ベースとしとるんやろ？ そつなるえ」

夷「木乃香さんや、バツサリ言い過ぎ」

木乃香「鈍感な兄様にはこのくらいが丁度ええんや」

夷「俺は鈍感じゃないぞ？ ……まあ雑談はここまでにして、俺ってああやって転生してきたんだ」

木乃香「生まれたてで落とされるってどうなん？」

夷「最悪だな……と言つか、あれにすら介入してたのか俺は」

木乃香「本当に兄様って規格外や」

夷「だからバグじゃねえし」

木乃香「そういえば……スクナやったっけ？ 神様がおらへんけど」

夷「ああ、スクナなら人間に擬態してコミケに行ってる」

木乃香「どこの？」

夷「俺の転生する前の世界」

スクナ「大量、大量」

木乃香「……神様があれでええの？」

夷「神なんてこんなもんだぞ？ 言っちゃ悪いが仕事せずにゴロゴロしてる神なんていっぱいいる」

木乃香「世も末やな……」

夷「だからこの頃、転生者が多いんだよ……たく、この頃は能力に頼ってばっかの奴しかいない」

木乃香「……ウチらの世界にもいるの？」

夷「まだいるみたいだな……まあいいや、そろそろしめるか、では次回予告」

木乃香「『戦場での出会い』……物騒やなあ」

夷「それでは次回も！」

木乃香「ちえりお！ ……そういえば作者さんは？」

「……………」その頃

フェイク「ま、待て、その手の首輪はなんだ？！」

茶々丸「考え付いたんです……逃げるなら捕まえてしまえばいいと」

フェイク「そのまま最悪の結末バッドエンド直行だよ！」

茶々丸「私にとっては最高の結末ハッピーエンドです」

フェイク「ドウシテコウナッタ？ ドウシテコウナッタ？！」

チャチャゼロ「……妹が手遅レダ」

作「……さ、さすが子曰さん、再生までここまでかかるのは初めてだ」

スタッフ「（。 。 ;）し、死んでない？！」

作「遅くなりましたが今回使用した贈り物の紹介です。皇月二八様より『拷問用のマツサージチェア』、リンドウ様から『核鉄』地味にエヴァの剣は核鉄だったのです！ それから夜光様より『神威靈装・三番』ヒロキム」

スタッフ「（・・）贈り物はまだあるぞー」

作「使い切れるかな？ 原作入ったら結構使える物もあるし」

スタッフ「（・・）そうだ、この小説は作者の妄想の塊だ、多少の不具合等は我慢してください、それでも感想に書きたいのであれば書いてください」

作「スタッフ……お前の優しさに泣ける」

スタッフ「（・・）ノまあこれでまた批判する感想がくるかもねー」

作「やっぱお前が大っ嫌いだああああああああつ！！！！」

オチ？ そんなもんねえよ。

## 戦場での出会い(前書き)

夷「とか書いているけど、どうせシリアルなんだろう？」

(ピキピキ) ちよつと本気だす。

夷「出来るわけねえよー!!」

まあ確かにシリアスは嫌いだけどねー……あ、そつだ、今日はお知らせがある、アシスタントとして。

?『どうも(カキカキ)』

夷「え? なにこの液体」

熔岩金属生命体のジャンク<sup>ヴォルケイノ</sup>V<sup>メ</sup>モリーズさんです。

ジャンク『どうも(カキカキ)』

夷「ああ……しゃべれないのか」

ジャンク「肯定<sup>「じゃあ</sup>」

猫とか動物系はで、でく……ZZZZZZ

夷「あれ? 作者あああああ?」

スタッフ「(、) 良い夢を」

使用した道具『アロマランプ』b y 子曰さん作

ジャンク『それでは本編をどうぞ』

## 戦場での出会い

「はあ……はあ、ッ！！」

息を荒げた少女が銃を碌に構えもせず撃つ、フルオートで吐き出された銃弾はまっすぐ飛ばずに辺り一面を抉る。

そこは戦場だった、優しさも温かさも何もない、ただ血と銃弾と爆発があるだけの場所だった。そんな地獄な場所に歳場も行かない少女が、サイズの合わない突撃銃アサルトライフルを撃っていた。

「いな……い？」

少し呆然とした少女は、次の瞬間には慣れた手つきで空になった弾倉を捨てる。そして新しい弾倉を再装填する、慣れた手つきだった……日本ではまだ幼稚園に通っているくらいの歳の少女が銃を持ち、人殺しをしていた。

「……後、一つ」

ポケットに無造作に入れてある弾倉を確認する少女、残りは一個。つまりは弾切れ寸前である、小さな少女にはフルオートで適当に撃つしかない……それしか知らないのだ。三点バーストなんて機能はついていない、教えられたのはただ一つ　敵を殺せば食事がもらえることだ。

|||||少女視点



ミスった……完全にミスしたと気付いたのは突撃してヘリが出てきたとき。うまい話だと思つた、うまくいけば一か月は生きて行けるぐらいの食料と休息……でも私『たち』は行くしかなかった。戦争孤児……言えば簡単だ、ただ私の住んでいた家にロケット弾が撃ち込まれ、ただ両親がかばってくれたから私だけ生き残って、ゲリラに連れていかれて銃の撃ち方を教え込まれただけ。不幸なんて言葉を知らなかった時だから生きるために必死に殺した。私の国は内乱に次ぐ内乱で紛争が続いていた、と知つたのもつい最近だ。最近までは生きるのに必死で銃弾を撃ち続けるのが日課だった。

「ゼツ、ハツ……カハツ！」

息が乱れて呼吸がうまくいかない、喉に何かが張り付いているような感覚がする。

今すぐにも倒れ込みたかつた、けれど倒れたら死ぬ……ここじゃ、子供だからって言う理由で見逃してくれるほど甘くない、むしろそこまで甘かつたら私は銃を取らずにいられたし、父さんも母さんも死ぬことはなかつた。

「逃げないと……」

何処に？ たぶん拠点も破壊されているだろう、私たちの中にRPGなんて物を持っていては奴はいなかったし、持っていてはグレネードランチャーくらいだ……向こうは装甲が薄い戦車なら穴あきチーズにする20mm機関砲を持っている。

ゆっくりと狙つてる暇はないし、狙撃手もいるだろう　勝て

る筈がない、伝えに行かないかとか聞かれても、何をすればいい？

碌に銃を撃てない私、肉体年齢だって未熟では行っても待ち伏せしている兵士に頭を吹き飛ばされるだけだろう。

「逃げないと……遠くに」

辺りに気配は感じない……どうやらさっきの銃声を聞いたやつはいなかったようだ。たぶん拠点が総攻撃にあってるけど無視しよう、生きるためには犠牲は仕方ない事だ。

「……ライフルに、自決用の手榴弾」

私の持ち物だ、後は水筒と少しの保存食、それにナイフだけ。絶望を通り越して、諦めが入ってきた……急に足が重くなる。

生きてどうする？

「うるさい」

そんな装備で突破できるのか？

「うるさい、うるさい」

人殺し

「うるさいうるさいうるさい……」

頭に中に幻聴が聞こえる……モルヒネの飲みすぎか、それとも精神が追い込まれているせいかな。私はよく早熟していると言われるが……私の周りの奴等だってこんな感じだった。

どんどん気持ちが悪くなってきた、腹の中身を出せば多少は良くなるかもしれないが、食料の確保ができない状態で吐いたら……想像しないでおこう。

「……とりあえず歩こう」

トボトボと歩いていく、家族を失い、戦友も失い、拠点も失った……  
… 本当にどうすればいいんだ？

そんなことを思った瞬間、空から響く音に気付いた……まさか。  
すぐに崩れた建物の影に隠れて様子を見る……すると上には空中停  
止ンゲしているヘリが居た。

……安全だと思って油断したツケなのか、ゆっくりとこちらを向く  
まずい！ そう思った瞬間、20m機関砲が放たれる。  
さっきまでいた場所があつとう言う間に銃弾に蹂躪され、跡形もな  
く崩れる。

「くそッ！！」

必死に走る、どうやら向こうは適当に撃ったらしくこちらには気づ  
いていなかったようだ。左目でヘリを見ながら逃げる……親からも  
らったただ一つの形見、とりあえずわかっていることはこの目は普  
通よりも早く攻撃に反応できて、なおかつやられる前にやること  
ができる。今まで生き残ってきたのはこの目のおかげだろう。

「（気付いてない気付いてない気付いてない気付いてない気付いて  
ない！！）」

自分に必死に言い聞かせる、止まったら死ぬ……走る、建物から建  
物に飛び込みながらヘリを見る、こちらには気づいていない。

そう気持ちが緩んだ瞬間、死神の鎌ごとく足に何かがぶつかりその  
まま地面に転がる。

受け身を何とかとり、体勢を立て直そうとする……すると私の足ス  
レスレに銃弾が飛んでくる。

「くそおおおおおおおっ!!」

腰だめで無茶苦茶に撃ちまくる……生きる生きる、どんな手を使っても生き残ってみせる!!

ガチリ

「え？」

銃の方で嫌な音がする……見てみると弾が詰まって排出されてない。そして空を見るとこっちを狙うヘリが

「（嫌だ、死にたくない……死にたくないよ）」

必死に祈る、神様でも誰でもいいから助けて!!!!  
そう祈った瞬間、ヘリが真つ二つになっていた。それを見た瞬間、私の意識はなくなった。

||||| 夷視点

……あれ？　なんかさっきまでクソまじめな文章が書かれていたよ  
うな気が、おかしいな、作者にそんな技量無いし、これってパロデ  
イ&クロスオーバー&カオス小説のはずなんだが。

「（夷どうした？）」

「（いや、ちょっとキティの事考えてた）」

現在、紛争地域なう、最近だが作者がこの『なう』の意味を知った

ので使ってみた。まあ与太話はこのぐらいで。

目の前には攻撃ヘリが三機、こっちは丸腰の男一人、普通なら八千の巢にされるだろうけど……全部俺の皮膚に弾かれるから意味ないんだよなあ。

「（おい夷、さっさと終わらせろ、我はゲームをしているんだ）」

「（……アスナといい、お前スケナといい、なんでこうなる？）」

「（つて、ああー！！ スペカ取り逃したああああああー！）」

……はあ、もうぞ。

「お前らのせいだああああああー！！」

八つ当たり感覚で口から衝撃波が出て、勝手に落ちた……あー、もう声さえも兵器かよ、くしゃみもそうだけど。リミッターをもっとかけないとなあ。

「こっちだー！！」

シヤカシヤカと団体様（三十人以上の兵隊さん）がご到着……めんどうさいなあ。

「おーい、三十秒だけ逃げる時間あげるから逃げろよー」

「ふざけるなー！！ 構わん、撃て撃て撃てー！！」

いや、20mmでも無理だった皮膚を人間が撃てる武器で貫通できるかよ。

と言つか撃たれてもエネルギーフィールドで弾くし……まあそろそろ

「3、2、1……時間だな」

「なんで当たってるのに、死なないんだ!!」

「んな豆鉄砲で死ぬかよ」

「畜生!!」

あ、RPGじゃないか！FPSでお世話になって……発射されたよ。

とりあえず飛んできた砲弾を掴んで……力入れすぎた、握りつ

「(oooooooooooo、夷——!!)」

チユドオオオオオオオオオオオオ!!!!

|||||フェイク視点

「……お」

パンと乾いた音共に銃弾が相手に命中……もう慣れた。

オリジナルはこういふのは嫌だそうだが、『殺すなら自分の手足で殺す』のがモットーだしな、たまーに銃も使っが殺さないし。



よ、もうやだ一万人がポンポン空を飛ぶなんてもう見たくない。  
あーう、どうしよう着物に土煙でもついてたら俺はタヒるぞ？

「マジでどうしよう、いざとなったら俺が黒く髪を染めて……指輪がねえじゃん！！ もう嫌だああああああ」

「やったああああああ！！」

敵兵が凄く喜んでるが……あの、皆さん首が横にずれて行ってますよ？

ありやりや、全員死んだよ、それに夷オリジナルの服装が黒のロングコートに……あ、キレて零崎になったか？

「てめえら、人が親切にしてんのに……死ななきゃわからないのか？」

もう殺してるよ、本当に虚識になると息するように殺すな、オイ。

……うわあ、アーガマのリーダーから敵の反応がどんどん消えてやがる。

鋼系かねえ、全然見えない、と言うか細さ一ミリの糸をどう見ると？ 切断するときに痛みも感じないほどだぞ……なんと訓練時代に腕をぶった切られたことやら。

「じりや……俺の出番なくね？」



「アパアアアアアアアッチ！ もつと敵よこせ……って解体し  
終わったか？」

むう、いつも思うが零崎になると殺人欲を抑えきれなくなつて……  
あれ？ 俺って殺人鬼よりも無差別殺人鬼の方が似合ってる様な？  
とりあえず生存者探すか、とりあえず少年兵は助けないとな……。

「フエイクー、どうだ？」

『……駄目だった』

「……ん、そうか」

「（悲しいか？）」

「（別に……ただ俺がもうちょい早ければなあ、とか後悔してない）  
」

後悔してない、助けられないなら助けられる命を喜ぶべきだ。どこ  
ぞの正義の味方みたいに全てを助けられるほど俺はバカじゃない、昔  
の俺が見たらどう思うだろうなあ。

『夷（オリジナル！！）、生存者が！！』

……まあ、助けれる奴がいたら助けるぞ。

「今から行く、四の弾ダレツトを撃っておけ」

『はいよー』



「施設に送ろうかねえ、魔法世界の。2番目と3番目は子供好きだし、今じゃ完全なる世界も、ただの保護団体になってるし」

ライフ……ああ、造物主の事だ。ネーミングセンス皆無？ タマとかポチとかにしないで良かっただろ？

さてと、マジでどうするかな、いつもなら施設に送ればいいんだが……だいぶ、精神が擦り切れてるし、あの歳で人を殺しすぎて。心読むって嫌だな、まあ自発的にやったんだがな。

「あいつらか……2番目は俺に絶対服従だから大丈夫か」

フェイクが少し黒い笑みをする、なんでも魔法世界で修業しようとしていたらセクンドウムが起動したての3番目を殺そうとしていたらしい、さらにその場にいた子供も。間一髪で間に合ったフェイクが初めてぶちぎれて、四肢を撃ち抜いた揚句、殺さないようにネチネチと回復弾を撃ちこんだらしい……零崎化してないよな？ 以来、借りてきた猫のようにおとなしくなったセクンドウム、なんでも子曰さんからもらった拷問薬を飲ませたらしい……鬼だ。

「まあ起きてからだな……あれ？ アスナとチャチャゼロは？」

「ああ、確かこの艦を探検するとか言っつて、走って行ったぞ？」

……大丈夫かな、この艦のメインエンジン、次元連結システムなんだが。まあ嚴重に封鎖してるし、艦にはシュワもいるし……大丈夫だよな？

「はあ、にしてもこの世界は紛争が多いな」

「……なまじ、『銃』なんて撃てば強者になれるものができてしまったせいだろうな」

「いや、魔法も十分凶器だよ」

扱う者が達人級なら、魔法の射手でも十分殺せるし、単純な魔力の塊をぶつけても殺せるだろうな。……よくよく考えたら、赤ん坊の俺もかなりやばい奴じゃないだろうか？　まず最初に制御をしようとした俺をほめたたえよう。

「どうしたんだ？　式」

「いや、昔の俺を褒めたくて」

「……そういえば式は昔の話をしないな、私と会う前の話とか」

……天使に殺され、転生して、（未来の）自分に救われ父さんに拾われ、木乃香にハンマーで会われる日々が始まり、刹那と素子と会って、訓練して、零崎になって、過去に行けとか言われ、行ったら四十年前で。……あれ？　俺ってまともな人生歩んで無くな？　エヴァと出会った後も関西呪術協会を壊滅させて、エヴァと付き合い始めて、平行世界に手を出して……うわあ、普通の転生者の人生じやねえ、と言うか転生者の時点で普通じゃねえ。

「まあ置いておいて」

「（置くのか？）」

「（黙ってる駄神）」

「（あれ？ 最近、我二一トしか言われてないよっな）」

「（足りめえだ、バーロー、とつとと天界に還れ）」

「||||||||||||||||その頃、アスナたち

「迷った」

「迷ッタナ、ケケケ」

絶賛迷子中のアスナたち、頭に人形を乗せている幼女が途方に暮れているのはシユールだった。無駄にでかい戦艦（夷は移動用の艦としか考えていない）は、道を覚えるのも一苦労だった。ましてや好奇心で動いているアスナには来た道など覚えていない……作者もよく好奇心に負けて細道に入って、迷子になった。

閑話休題。

「むう、こういう時は左に曲がって行けばいいのよ」

「大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ない」

「大丈夫ジャーネーヨ、コノ幼女ドウシテコウナッタんだ」

作者も頭を捻る問題だがここでは保留。とりあえずアスナは迷った  
ら左に曲がる法則に従い、道を進んで行く。

テクテクと足音だけが響く、道表示的な物もあるがすべて英語、アスナはまだ英語は勉強してないのでわかるはずがない。チャチャゼロは読めることは読めるが、悪戯心からかまったく口を出さない……まあこの殺人人形が進んで人を助けたら、明日は空からナイフが降ってくるだろう。

「うむむむむむ」

「（ケケケ、次八右ダツタンダガ……オモシレーナ）」

まさに外道、まあ最終的には力を貸すつもりなチャチャゼロは作った主の性格を色濃く受け継いでいるだろう。アスナはどんどん進む、すると突き当りに扉が見えた、真っ赤な扉で「入っちゃダメ、お父さんとの約束 by式」と書かれていた。

……が、ゲームな幼女が真っ赤なドアを見て反応しないわけない。アスナはゲームはゲームだが糞ゲーム、つまりは糞ゲーと呼ばれる物を好んでいた。

「……折角だから赤い扉を選ばわ！」

「（駄目ダ、コノ幼女。御主人、旦那あ、コイツ腐ツテヤガル）」

どこのコードネームに本名が入っているキャラクターの台詞を言いながら扉に触れる。すると扉はひとりで動く、式もまさか入ると思っていないのでロツクをかけずにいた。

「……病室？ ツ！」

入った瞬間、頭にめがけて何かが振るわれる、チャチャゼロは頭か

らジャンプし、アスナは素早く伏せる。目の前には足があつたが、それを冷静に捌きながら一気に攻撃してきた人物にタックルをする。幼女の突進と思えない音がして、やられた相手がベットに体を派手に当たる。すばやく影の倉庫（偽）から愛用の大剣を取り出し、相手の首筋に当てる。チャチャゼロも反対側にナイフを当てる。

「……………泥棒猫じゃない」

「あ、ああああ」

そこにいたのは式が助けた少女だった。アスナはため息をつきながら大剣をしまつ、チャチャゼロが今にも斬りかねかつたからだ。

「なん、で殺さない？」

「……………殺す理由があるの？」

「だって、私は殺そうとしたんだぞ！」

「あの程度で死んだら、とつくの昔に死んでるわよ」

ぶつちやけ式は修業中はかなり厳しかった、それは鬼のように。式の中で訓練は戦闘の基本、チートを持っていようがいまいが、訓練しなかったら素人と考えていた。

なので、アスナも死ぬギリギリのラインの修業をされていた。本当に『ギリギリ』である、躊躇なく殴るし、アスナの魔法無力化能力の処理限界の魔力をぶつけるし、疲労困憊で気付いたらベットの上なんて当たり前の訓練である（ちなみに鶴子の場合は本気の三パーセントくらいの殺意で修業していた、アスナたちは0.5パーセント）。

「ッー!!」

「ナーナー、斬っていいか？」

「……………夷視点」

「でさー、とつとと軍引いてくれないか？」

『H A H A H A、シキと戦うとは……………すまん』

「わかればいいんだよ、マイケル」

『……………本当にお前には勝てんな、ウチの息子の訓練もしてくれるし  
今話しているのはマイケル・ウィルソン、アメリカ合衆国の大統領  
だ。なぜ俺がこいつと面識があるかって？ いや、世界中を旅して  
たらたまたま襲われたところを助けて、以来の親友だ。』

『とりあえずお前がくれた「特殊機動重装甲」だが……………本当に開発  
しているのか?』

「まあ大統領専用、って制限が付くが」

『……………まあお前の事だから、全部見ているんだろ?』





OK、大丈夫、そうさ深呼吸して……よし、オープンセサミ！

「ハアハア……式」

「誰？」

「ウゾダドンドゴドーン……！」

「ええと？ んじゃ、お前は勘違いしてアスナを襲って逆に撃退されたと？」

「……モグモグ、モキュモキュ（コク）」

「で、押し倒されているところを俺が偶然遭遇」

「ゴクゴク（コクコク）」

「……式は何を想像したの？」

いや、アスナが女に興味持ったとか行ったらアリカに殺される……多分、肉片一つ残るわけがない。  
で、目の前の少女は狂ったように飯を食ってるわけだが……随分腹が減ってたらしいな。

「アスナは知らんていい」

「モキユモキユ……ゴクン」

「さーて、今の状況はわかったか？」

「……うん」

普通なら幼稚園に通う前くらいの年齢だろうに、少しその顔は大人びていた……

まあ無理になっているってイメージがあるがな。……はあ、めんどくさい。

「でだ、お前の名前は……」

「マナ、マナ・アルカナ」

「マナ……あれ？ アルエー？」

「式、どうしたの？」

どうしたもこうしたもねえよ……このタイミングで捨うんかい。つくづく思うが俺って計画性ないな、まあしょうがないが。

「ゴホン、ちょっと取り乱したが……体の方はどうだ？」

「体が軽くなった感じがする」

そりゃあ、体中あちこちにガタが来てたし、怪我してない部分が無かったな……未来では確か傭兵まがいな事してたらしいが、これが原因か？

「さてとマナだっけ？ これからどうする？」

「これから？」

「ああ、そうさ。紛争はとりあえず（強制的に）終わらせた……治療が終わったら帰ってもいいぞ？」

未来は決まってるない、もしもこいつが国に帰るのなら十分な金と生活に必要な物を用意するさ。それに……アスナだけで十分です、もうさ、キティの目線が痛いんだよね『また拾ってきたのか？』的な目線が。しょうがないじゃん、捨て猫のようにホイホイついてくるんだもの……！

「……家なんかないよ」

「……そうか、んじゃマナ、お前に選べる選択肢を言おう」

「選、択肢？」

「ああ、言っておくが俺はガキだからと言って容赦しないぞ？」

「（と言いながらアフターケアもするんだろ？ さらに数年間は何もなにか見守ってやるんだろ？）」

……甘ちゃんとかさ、偽善者って言われてもいいけどさ、やっぱり助けた命が消えるのは後味悪いし、俺の流儀に反するんだよ、だが殺人鬼でもある……矛盾だなあ、オイ。

「一つ、このまま治療してそのまま国に帰る」

これは最悪の選択だろう、何もせずに放り出すってことだからな……  
まあしないが。

「二つ、十分な金と生活に必要な物を用意して国に帰る」

これは結構大変だろう、あの国も立ち直るのにも時間がかかるだろう、そしてその間にまた紛争が起こってもおかしくない、なるべく選んでほしくない選択肢だ。

「三つ、安全な場所の孤児院に行って生活する」

これが一番ベストな選択肢だろう、二十歳まで面倒は見るとし、就職できなかつたらそのまま孤児院の手伝いとして生活できるし……何より、もう二度と戦うことは無いってことだな（一部の奴等には力を制御するための訓練をしているが）

「四つ、俺たちと来る」

これは……あまり進めることができない選択肢だ。俺と一緒に居たら確実に、この子は戦いに巻き込まれる、未来？ 決められた結末？ 知らんよ、世界の修正力が修正しようとしたらそれに刃向おう……銃なんか持たず、平和に暮らしてもらえれば俺は満足だ。

「……選んでいいの？」

「お前の人生だ、お前が決める」

「……私は四番目は反対だよ、式」

デスヨナー、マナを見る目が絶対零度見たく冷たいし、今にも大剣

取り出しそうだし、アグレッシブになったなあ、アスナ。

「私は……人殺しだよ？」

「は？」

「いっぱい殺した、数えきれないくらい……殺したんだ」

何を言い出すかと思えば

くだらねえな。

「たかが百人未満だろ？」

「それでも」

「俺は今まで十億人以上は殺した」

あくまで人間だけの話だ、神様の依頼で世界丸ごと一個破壊したこともあるし、余波で殺したこともある、俺の方が数えきれんよ。

「お前みたいなのよっことは違うんだよ、生きた時間も、体験も、全部な」

「……」

うつむいて黙るマナ……我慢だ、頭を撫でようとするな俺！！

「小さいから考えるのも大変だし、今日初めて会った俺を信用しろつてのも無理だろう。……まあ俺も鬼畜じゃない、今すぐ決めろとは言わんぞ」

「え？」

「え？ じゃねえよ、さすがにお前も考えたいこととか、これからどうするか考えてねえだろ？ なので期限を決めよう」

「……甘いよね、式って」

「うるさいぞ、アスナ。……マナ、一か月あげよう、俺の選択肢の中から選べ」

「一か月も？」

そのくらいあれば考えもまとまるだろうし、この機会に旅に出たいし……まあ最悪、フェイクに丸投げすればいい。

「（酷い奴だな）」

「（身内には甘いが、他人には厳しいのさ、俺は）」

「（の割に、平行世界では赤の他人の孤児院に多額の寄付をしているじゃないか）」

「（あれだ、金を使い果たしたかったんだよ！）」

「（ククク、そうしておこう）」

うざい、スクナがめっちゃうざい……喰って裂いて滅して還してO HANASHIするか？

さて、なぜかニヤニヤ顔でこっち見るアスナ、そしてマイペースに酒を飲んでいるチャチャゼロ、考え込んでいるマナ……カオス。

「ねえ、シキさん」

「式でいい」

「……シキ、もしも、もしも私が一緒に行きたいって言ったらどうするの?」

「さあな、その時の気分によってだな」

そうだよなあ、なーんか俺ってその場のテンションで物事進めてい  
るような気がする……ああ、めんどくさい、旅に出たい。

「わかった、一か月後まで考えておく」

「そうか……んじゃ、まだ眠いだろ? 寝てろ」

「うん……あ、そうだ」

マナが横になり寝ようとする瞬間、俺の顔を見て少し嬉しそうに言  
う。

「助けてくれてありがとう」

「……ああ」

そのままアスナと共に部屋を出て、キティの元に歩き出す。

「ナア旦那」



「なんだ？ チャチャゼロ」

「アンタ甘スギルゼ、マタ何カヲ失ツテ引キコモラナイデクレヨ？」  
チャチャゼロが真剣な声で俺に言う、不良従者だが、キティの事が一番大事だからなチャチャゼロは。  
俺は笑いながら言う。

「大丈夫さ、もうへまはしない」

そう絶対にだ、もう二度と失うわけにはいかない。

このときからだろうか、あるいはずっと前か、俺は自分自身がどうでもよくなっていた、いわゆる自殺願望に似ているのかもしれない……ダレカオレヲコロシテクレ、跡形もなく、殺してくれ。

「式……」

自分の考えに没頭していた俺は、アスナの心配そうな声にも耳を傾けずにいた。

その後、キティにマナの事を話したら以外にも快く受け入れてくれた。やはりキティは他人を思っただけで行動できる優しい

「アスナの二の舞にはしない……私と式の子供にするんだ」

訂正、自分の為だったよこん畜生！！

## 戦場での出会い（後書き）

夷「作者が寝ているので……このお」

ズガアアアアアアアン！（吹っ飛ぶ夷）

マナ「ネギまラジオオオオオオオオオオオオオ！」

ジャンク『……フフフフ、ラジオジャック』

フェイク「はいはい、とりあえずストッパーとして俺こと、フェイクでお送りします」

マナ「やっと、やっとヒロインらしいことができたんだ！」

フェイク「わかったから、わかったから銃置けや（もうやだ、帰りたい）」

ジャンク『にしても作者さんはよくあんな話書けましたよね、おふざけしかできないのかと』

マナ「後半はおふざけも入っているよ」

フェイク「ああ、なんでも作者って本来はあんな感じの小説を書いていたらしいが……軍曹に見つかって刈られそうになったららしい」

ジャンク『ナニを？』

フェイク「命とか色々、で恐怖した作者はあんまり書かなくなった

と言っわけだ」

マナ「本物の軍人にやられたのか？」

ジャンク『作者さんって死にかける回数多くないですか？』

ぶっちゃけ、人生で四度くらい死に瀕したことがあります（二回は入院しました）

マナ&フェイク「死にかけじゃん」

作者「うっさいわあああああああああ！！ 好きでタヒリかけてるんじゃないっ！」

フェイク「あ、起きた」

作者「うう、腹が痛い、全身が痛い、目の前が真っ暗になっていくよお……あ、軍曹、殺気を放たないで」

マナ「どうしたらこういう人生を送れるんだ？」

ジャンク『アホですね……ちえりお！』

作者「（ゴスッ！）ひでぶっ！ あ、あれ？ ここは図書館じゃないのか？ ……よかったあ」

フェイク「図書館で何があったし……」

作者「ああ、それと今回のマナの設定は勝手な俺の妄想です、せめて出身地さえわかれば」

マナ「魔法世界にしなかつた理由は？」

作者「向こうだと銃は魔力弾だろうし、原作の真名は実弾銃を使つてたしな、で小さい頃から傭兵＝少年兵」

ジャンク『軍曹に見られたらタヒリますね』

作者「あの人、子供好きだからなあ……児童誘拐とか、めっちゃ切れてるし」

フェイク「……まあなんか意見が合つたら感想をどうぞ」

作者「さすがフォロアの達人、フェイク。んじゃ次回予告」

マナ「次回、選択と家族」

ジャンク『それでは次回まで』

マナ&ジャンク「『ちえりおー！』」

フェイク「あれ？ オリジナル 夷は？」

|||||ここは楽屋裏の診療所  
夷「最近、家族に暴行されるんですが」

スタッフ「（、） 平常運転だろ？」

エヴァ「もつと式と(自主規制)したい」

スタッフ「:(;ゞ。・。・) : 作者が十八になったらな!!」

ガトウ「最近、式の後始末とアリカ様がいなくなった穴を埋めなきゃいけないから仕事量がガツガツガツガツガ」

スタッフ「( ; /、 ) ジャンクー、薬あげて」

桜「この頃、詠春を襲うんやけど……果てるのが早いんや」

スタッフ「( ; ^ ^ ) アウトじゃね? 激しくアウトじゃね?!」

アスナ「もつと出番を!!」

スタッフ「(。・。( 原作まで待て」

木乃香「兄様は嫁です」

スタッフ「(。・。( この場合、婿じゃね? 近親相姦ダメゼツタイ」

ナギ&アリカ「キョウが可愛いすぎて、幸せ」

スタッフ「( ^ ^ ) ニコニコ、爆発しろ」

キョウ「母親の変態度が日に日に上がっていくんですが」

スタッフ「(。・。( お前の母親は淑女ヘンタイだからな」



選択と家族（前書き）

遅れました……はああああ。

夷「どうした？ 作者」

なんでまた、幼女姿なんだよ！！ 活動報告だけで十分だよ！！  
というか声も違うし！！（c v ミルク・カレード）

夷「にw w w あw w w つてw w w るw w w ぞ」

笑われてもいい思いしねえよ！！ と言いかスタッフ撮るなあああ  
ああああああああああああああ！！

スタッフ「（。 。 ）ケフィアちゃん、もっと笑おうか」

零崎開始します。

スタッフ「：（；；。 。 。 ）：じよ、冗談d

ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！

夷「………それでは本編をどうぞ」

キヒヒヒヒヒ。

夷「作者のキャラが崩壊してる」





こかでのたれ死んでいただろう。

「……………綺麗にしなくちゃ」

シキは約束通り、私の世話をしてくれた。最初は慣れなかったけど次第に慣れて行った、銃を撃つよりも簡単だった。

けど、時々こうやって戦場あのとぎの記憶が蘇ることがある……………今も嫌な汗でパジャマがびっしょりだった。

「……………もうやだ」

一週間前では考えられないほどの言葉を吐く……………私は随分と安心しきっているようだ。

「……………夷視点

「クー、クー」

俺の隣にはキティが眠っている、さすがに疲れた、何に？ 言えるかアホ、言った瞬間この先はR指定がかかる、まあ察してくれ。

マナを拾って一週間、俺たちはアーガマで世界一周旅行と洒落込んでいる、本来なら一秒で行けるんだが予定を引き延ばして一か月にした、まあばらまかれた写真データとか回収しないと、今の時代には不適切な物だ、あの死神と病弱（最強）さんや、時代考える時代を……………まったく。

「（そう言えばスクナがないな）」

いつもは精神世界でニートしているスクナがない、大方アスナと一緒に修業でもしてるんだろうな、あれでも本気だせばフェイク以上だしな、鬼神の名は伊達じゃない。

アスナも最近はゲームの技とか再現しようとして頑張ってるし……と言  
うか止めて、ふざけて模擬戦したら体真つ二つにされたからもうや  
めてください。

「くああああ、寝なくてもいいんだが……一日二十四時睡眠だよな」

別荘で寝てるから問題なし、人間なら時間の流れが速いから、寿命  
がマツハだが……不老不死には関係無し、趣味の時間もたくさん取  
れるしいいよね！

さてと、このまままたb ガシ……ガシ？

「どこに行こうとしてるんだ？ シキイ」

「え、えーと旅に出ようと思っていました」

「ほう、私を置いてか……そうか」

＼（＾o＾）ノオワタ、死ぬ、もうだめだおしまいだあ。

「昨日は随分とシテしまったが」

アウトおおおおおおおおお！ やめてー、消される、  
そこまで言わないでください、本気で！！ と言っか、エヴァの眼  
がヤバイ……木乃香、ごめん、兄さんここで終わりみたい。

「もう百ラウンドはいけるだろ？」



「へぶつ?!」

顔面に拳を叩きつけられる、なんとか魔装束で防ぐけど少し衝撃が貫通して私の頭を揺らす。地球を壊すレベルの攻撃でも何ともないって式が言ったのに……これが神様。

「そらそら、どうした？ 式のように手加減はしないぞ？」

そう、式はいつも手加減をしている。本気で戦ってもらった事なんて一度もない、と言うか本気で戦いを挑まれたら、私は武器を捨ててさっさと逃げる。世界中、魔法世界も含めた人たち全員でかかっても勝てやしない、指を弾けばそれで終わり、全員死んでる。

「まったく我が、人の姿をして活動するとは……コミケに行きたい」  
駄目だこの鬼神、早く何とかしないと……最近、私の部屋のゲームも盗られてるのに。今のスクナは式が用意していた人造人間ホームンクルスに憑依している、なんでこんなに強いのだよ。

「ふう……ここまでか？ 小娘」

「ま、だまだよ!」

「はいはい、そこまでだ……アスナ、スクナ」

目の前にフェイクが転移してくる……これからののに。

「……………フエイク視点」

まったく別荘の中がめちゃくちゃだよ、直すのは俺なのに……ああ、胃が痛い、胃薬胃薬。

たく、俺は戦闘要員じゃねえんだぞ？　なんで完全なる世界に向かってくる敵を倒したり、ガトウの依頼でマフィアとかぶつ潰したり、<sup>オリジナル</sup>夷を殺そうとする（できる筈もないが）転生者を狙撃したりと……心休む時がねえよ。反乱したくても今の俺じゃ、勝てないし……はあ上司に恵まれない部下ってこういう事か、いや部下にも恵まれないけど。

「どうすつかねー」

なんとか修理ツール（夷作）を使って修復する、アスナとスクナ？

向こう（現実世界）でゲームしてるよ、なんか対戦ゲームをな。

まだまだ俺の仕事は終わらない、とりあえずフエイト達の修業メニューを考えておく。ちゃんとしかないと2番目<sup>セクンダウン</sup>見たいのが生まれてくる……そういえば3番目<sup>テルティウム</sup>の奴が孤児拾って一緒に住んでるやら何やらと聞いたんだが、まあ感情が生まれるいい機会かもな、姉妹ともども仲良くしてほしいな。

「で……次はガトウの案件は　　うわあ」

見た瞬間、頭を抱えなくなつた。長つたらしいから意識するが【転生者がうぜえ！】だ。

ルシフェルの放つた、転生者モドキ。夷の話だとオリジナルの三分の二程度の力らしいが、この世界の人間にとっては強敵以外の何者でもない、イレギュラーだし、何より力が安定してない……碌に修業もせずに力を使って、周囲を巻き込んで爆散したと言う報告もあるし、あ、頭が痛い。

「やっぱり原作キャラを狙っているのか……夷が知ったら確実に死ぬなコイツラ」

転生したら、原作キャラ……つまりこの世界の住人を嫁にしたいらしい。夷はこの世界の知識がなかったからわからなかったらしいが、今は知っているらしいが。

とりあえず、まともな転生者と言えば、朧とか紫稀さんとか……あれ？ 基本的に性格がぶつ飛んでいる人しかいないのか？ まだまだ居る筈！！  
いねええええええええええ！！ 基本的にあの馬鹿（夷）の知り合いにまともなのがない、いたとしても染まつていくからなあ……お、思い出して来たら頭痛が。

「はあ……俺にこれ以上の不幸が訪れないように願おうかな」

この頃本気でそう思う、なのに未来にロボット少女に追い掛け回され、色々とヤバいことになるような気がするのはなぜだろうか、そして夷似のガキに世話をかけられそうになる姿が見えたのは悪夢と  
思いたい……はああああ。

「たく……楽しいからいいがな」

基本的に楽しい事は大歓迎だ、ただし夷、テメーは駄目だ。

「さてとお仕事をしますかね うん？」

いつの間にか、別荘の外に出ていたのか、辺りはアーガマの艦内風景だった。……にしても泣き声が聞こえるのは気のせいか？ それにこの声はマナの声か？

「は、早く掃除しないと……掃除しないと」

何かあったのか？ ちよつとみてく」

「し、シキ?!」

オリジナルエ。

||||| 夷視点

なんとかエヴァから逃げ切った俺はどこにも行く当てがなく転移した、そしたらマナの部屋に転移したようで……って、なんか嘔吐している?!!

「し、シキ?!」

「おい、大丈夫か？ とりあえず吐しゃ物は……消える」

魔眼を使って吐しゃ物の存在を消す、こんなことに使うな？ 使いどころがないんだもの、しょうがない、ラスボスすら消せるチートだぞ？ どう使えと？

マナは突然消えた吐しゃ物を見て驚いてるな、まあ初対面は驚くよな、まあ回数重ねていくうちに「ああ、また夷か、ならしょうがない】的な目線でスルーされるからな。

「……で？ どうした、大方、人殺しとか思い込んでるんだろ？」

「ッー！ ……ん」

「はあ、たく何も心配することない　って言っても信じられないよな、突然平和になったんだ。混乱してもしょうがない」

こういう子は特にだな、頭が良すぎるのと適応力の高さが逆にトラウマを長引かせる……別に俺は百人殺そうが、千人殺そうが気にはしない、俺自身がそれ以上殺してるからな……まあ神殺しとかしてると、重罪は確定、ホントなら地獄にぶち込まれてもおかしくないが、と言つかぶち込まれて、キレて魔王を配下にして天界に攻め込んだのは良い思い出だ。

「……………」

「シリアスは嫌いなんだ、だからシリアルで行くぞー？」

何も反応なし……エヴァとかはノリがいいんだがなあ。

「まあお前には道があるって話はしたな？」

「選択肢の事？」

「ああ、そうさ、ああそうそう、俺のほかに引き取り先があったぞ。確か……カンヌラエ・テトラコルドネス四音階の組み鈴って言うNGO団体だ」

見つけるのに苦労したぜ、本来の歴史ならマナはここに引き取られるからな。出来るだけ原作通りに事は運びたいんだよ、まあそれがこいつにとっての不幸（最悪）だとしてもな。

「シキ、シキってなんで私を助けてくれたの？」



「ぶつちやけた話、気が向いたからだな」

そう気が向いただけ、子供だから元気良く育ってほしいとか、ちゃんとした環境で生活してほしいなんて気持ちは一切ない……ないよ？ ホントだよ？ 俺は他人には厳しいんだ。

おい、スタッフ、なにニヤニヤしてるんだよ！ うがーっ！！！！

「……ねえ、シキって甘いって聞いたんだけど、ホント？」

「んなわけねーよ、俺が甘かったらこの世界は甘ちゃんぞろいだ」

会う人々に言われる【お前は甘い】ってな、それで何度死んだことか。後ろからプスリとか、畏にはまって惨殺されたり……まあ、全員殺してきたが。

「それに……お前を放ってどっか行きたいって気持ちもあるさ」

「……邪魔？」

「いや？ ただ自暴自棄になってるだけだ、俺がな」

……最近、本当にやけ酒が多くなってきた。ハア、もう全部投げ出してどっかで隠居したい、働きたくない、寝てたい。

「まあ……マナが選びたい道を選ぶんだ、一般人に戻るか、それとも俺たちと一緒に行くか」

俺はそのまま歩いてドアの前まで行く、するとマナが意を決したように顔を上げる。

「……まだ、わからないよ。けどさ、私がしたいことを選ぶ」

良い目だ、うんうん若いつていいねえ。

そのまま俺は振り向かず部屋から出ていく……さてと、修業でもしますか。

|||||二週間後、マナ視点

「うーん……どこに行けばいいのよ」

「アスナ……なんで私の部屋でゲームするの？」

目の前でベッドの上で転がっている少女、この頃世間話程度はできるようになった、アスナ。持っているのはゲームと言う娯楽らしいけど……やってみたいなあ。

「わからないな、フラグは立ってるはずだし……ハッ、まさかバグ？！ 糞ゲーk t k r!!」

「無視かい？」

「……何？ 泥棒猫」

「泥棒猫じゃなくて、マナだ！ いい加減覚えろ！」

「知らないわよ、式に甘えてくる女（泥棒猫）は全部敵よ……あんたもね」

淡色な眼でこつちを見る、戦場でもあんな奴いなかったぞ?! と言うか大剣向けるな！ 危ないだろ!!

「で、あんたはどうするの?」

「どうするって?」

「ここに残るか、それとも式を明け渡すか。後者を選んでね、邪魔者は少ない方がいいの」

ひ、ひどい、でも私がない方がいいかもしれない。元々はアスナやエヴァさん、式にフェイクさんが旅してたんだ。突然転がり込んできた私を向かい入れてくれるほどやさしくない……なんだろ、胸の奥辺りがチクチク痛い、なんだろこれ。

「にしても式の甘さにはほんと困ってるのよ、私以外の女なんか無視しちゃえばいいのに……胸なの？ まだ成長期、未来に希望を託しましょう（ブツブツ）」

黒いオーラみたいのが見えるのは私だけじゃない筈、と言うかアスナって本当にシキが好きなんだな。

「そりゃ、親みたいに可愛がってくれたし、好きなことさせてくれるし、修業もつけてくれるし」

「ッ！　そ、そうなんだ」

なんで今、アスナの事が【羨ましい】なんて思ったんだろ？　けど私にも優しいよ  
シキは、いや誰にでも優しいのかな？

「そういえばあんたって、人殺しとか自分で言ってるらしいわね」

「……そうさ、私は人殺しだよ」

アスナはため息を吐いて、ゲームの電源を切る。そして私の前に来て。

「歯を食いしばりなさい！！」

「は？」

「ちえりおーっ！！」

殴って来た、さらにグーで。

綺麗に入ったパンチのせいで脳が揺れる、そのままベッドに横たわる私。

全然、力が入らない？！

「イラつく、あんた見てると昔の私見てるみたいでムカつく」

「む、昔？」

「そうよ、まだ感情なんてなくて、老害どもに兵器として扱われた時の私みたいだね。勝手に絶望して、心閉ざして……ああ、今思い

出してもムカつく!!」

勝手に絶望? ……そうかもしれない、希望を持つとしたっけ?  
ただただ流されて銃持って、人殺して勝手に絶望して前に進んで  
なかった。

「……そういう眼しないでよ、式もね。昔そんな眼だったときがあ  
るんだ」

「え?」

少し意外だった、あんな人だから暗い過去がないと思っていたのに。

「エヴァに聞いたんだけどね、式って余裕ぶっこいて大切な友人を  
守りきれなかったんだって。今でも後悔してるって」

アスナはドンドン言ってくる、シキの事を……聞いてないんだけど  
ね。

アスナ曰く、純粋な人、とっても強くてとっても弱い人、エヴァさ  
んに頭が上がらない人、殺人鬼と言いながら殺人が嫌いな人、どれ  
もこれもぶっ飛んだ話ばかりだった。

でも……興味が出てきた、もっと知りたい、もっと。

「でね、式って猫舌で、熱い物が一気に食べられないのよ」

「ふうん、なんで銃弾受けてへっちゃらな人がそんなものが弱点な  
んだ?」

「人間、弱点がある方がいいって、式が言ってたような」

あれは人間じゃなくて、人の皮被った化け物って言えば納得できる……一瞬で世界滅ぼせるって何？ どこぞの魔王？

「魔王とも友達だって言ってたわね」

「いったいあの人は何者なんだよ」

「【人間】<sup>バケモノ</sup>だって言ってるけど」

「言い得てみえてっつてこういう事言っのかな」

可笑しくて笑ってしまう……久々に腹を抱えて笑う、笑うって気持ちいな。

「ようやく笑ったわね」

「え？」

「笑うと気持ちいでしょ？ ……まあ私も数年前にようやく自然に笑えるようになったけど。慣れない事するんじゃないかった」

もしかして……私を元気づけるために？

「勘違いしないでよ？ あんたが元気ないと式が心配するから」

「親は子に似るって言うけどほんとだよね」

「うるさいうるさい！！ もう！！」

そのままズンズン歩いて行ってしまおうアスナ、怒らせちゃったかな？

でも

「ありがとう、アスナ」

「ふん」

そのままドアから出ていくアスナ、うん、何か元気になってきた…  
…寝て過ごすのにも飽きてきたところだし、あれ？ これってアス  
ナの置いていったゲーム？

「ちょっとやってみよう」

その日、私は初めて夜更かししてまでゲームにはまってしまった。  
翌日フラフラの私を見たシキがオドオドしていたのが面白かったが、  
エヴァさんからきついお仕置きを受けた。

「……………そんなこんなで一週間後、参院賞視点  
……………」

絶賛爆睡中の夷、今の夷を起こせるものは何もない。エヴァの魔力  
全てを籠めた電撃すら打ち消し、フェイクの銃弾を寝たまま掴む…  
…どうやって起こせばいいのかわからない、それが全員の思いだっ  
た、最長では十年近く寝ていたことある。

「……………」

「（起きろ！ 夷！！）」

「（ムニヤムニヤ、ガンダーロボは最高でやんす）」

「（パワポケの話じゃない！！ 今日はその人の子の選択の日だろうが！！）」

意外に優しいスクナ、しかし夷は寝続ける、起きる気配は全くない。

「（ムニヤムニヤ、次元連結システム、最大解放）」

「（やめろおおおおっ！！ 世界が崩壊するだろうが！！）」

「（楽しければいい）」

「（誰か、このバカ止める！！）」

無理である、誰がリミッターが切れている夷になんぞに近寄るものか。近寄ったら最後、濃密な魔力に気、さらに神力が近づいた相手を自動迎撃するのに……近づけるわけがない、近寄った瞬間に上半身蒸発か、下半身と上半身が逆さまにコンニチハしてしまう。

「（どうすればいいんだ？ 我の力では無駄だし）」

本格的に頭を抱え始めるスクナ、鬼神が頭を抱える状況も状況だが、長い事夷と共にいたら案外子供好きになってしまったスクナ、アスナとゲームしているときはだらしなく顔を緩ませていたのは夷以外には内緒だ。

「むにやむにや、地球美味しいです」



「(コイツならやりかねん、と言うかこのアホそう言えばどっかの平行世界で火星食ってメタトロンを吸収してたような？ そんなことは今は良い、起きろーッ！)」

しょうがない……作者権限、木乃香さんやっちまってください。

「(兄様、おきろーッ！)」

メキイ！！！！

「グ、フツ？」

「(陸戦型?! じゃなくて夷っ！！！！)」

たつぷり十分後、夷は起きた……長い髪が飛び跳ねてホラー映画の幽霊役みたいな髪になっている、それに気づかず首飾りをつけながらリミッターをかける。

「……何年寝てた？」

「(二十年だな、まったく別荘での時間が遅いからと言ってな)」

「zzzzzzzz」

「(寝るなあああああああっ！！！！)」

「ハッ！ あ、後五年くらいいだろ？」

「（今日は、あのマナとか言う人の子の選択の日だろうが！！）」

「……………忘れてた」

顔がどんどん青くなる、寝る前にエヴァにきつく、【きつく】、寝過ぎさないように言われたのだ。前にデートをすっぱ抜かして寝ていたら、別荘ごと殺された経験がある夷、明らかに体が震えていた。

「あばっばっばっばっばっばっば」

「（早く行け）」

視点は変わり、エヴァたちの元に。

明らかにキれているエヴァとアスナ、いい笑顔を浮かべているが頭の中は夷にどうお仕置きしようか考え中だろう。マナは静かに震えていた。

「……………遅い」

「遅いわね」

「シキ、早く来て、もう耐えられそうにない」

今はアーガマから降りて、件のNGO団体にマナを渡すべきか、それともこのまま自分たちの元に置いておくべきか、エヴァとアスナは迷っていた。

ちなみに件のNGO団体には少し待ってもらっている、一応は拾った夷の確認を取りたいと言う事を言ってきて、マナが少しだけ安心

したのは秘密だ。

「にしてもだ……式の奴、まだ寝てるのか」

「困った物ね、あつ、ランク5キタアア!!」

「……アスナハモウダメダナ、ケケケケ」

チャチャゼロは笑いながら酒を飲む……実はそれはフェイクが大事に取っておいた酒なのだが、チャチャゼロはそれを知りつつ飲んでいた、もはや運がないと言つよりもネタキャラ扱いである。フェイクは少し完全なる世界に出向している、そこで三番目の【壊れ具合】に頭を悩ませ、さらに転生者のせいでフラスレーションが溜まりまくっていることを誰も知らない。

「あのおく、まだでしょうか？」

「ああ、すまないがまだだな」

「シキ……」

「私たちにも予定がありますし……それに」

「なんだ？ 【闇の（エヴァン）福音】<sup>ダイク</sup>の元に置きたくないって言うのが本音のようだな」

スツと顔をこわばらせるNGOの代表、エヴァの顔に見覚えがあり聞いてみたところ、バカ正直に答えてしまったから、目の前の男はマナを早く引き取って帰りたいと思っていた。まあ普通の判断ならそうだろう、魔法世界ではまだ【なまはげのような扱い】をしてい

るのだから、夷が聞いたらぶちぎれそうだが。

「そうだ……悪とかそういう問題じゃない、お前の傍に居たらこの子はまた戦ってしまう」

「フン、戦ってしまうか……それは甘えだよ、戦うのは全部人の意思だ。どんな理由があるうともだ」

「知るか、化け物……とりあえず彼女を保護した人にもひとこと言わせてもらおう」

「ハッ、そんなものであいつが動じる物が」

自信満々に胸を張るエヴァ、その胸を羨ましそうに、ぶった切りたくなつてなるアスナ、チタン合金製のゲーム機にひびが入っているのは冗談だと思いたい。

一方、マナは場の険悪な雰囲気少しオドオドしていた。

「なんでこうなるの?」

「イツモはコレヨリモ酷イゼ? 才前モ知ッテルダロウ?」

「……にしても遅いわね」

夷が(珍しく)時間を指定して待たせているのだが……もう三十分以上たっていた。

アスナも珍しくイライラしながら待っていた。それからさらに十分後、ようやく来た夷。

「待たせたな!(ドヤア)」

「ドヤア……か、死にたいのか？」

エヴァがニッコリと笑って拳をグーにする。アスナは無言で釘バツトを取り出し、なぜか肩に担ぐ。

口元がヒクヒクと痙攣しながら、何とか顔を整える。元の顔でいたら即行で両義式とバレルので少し変えて黒の顔（イ）で交渉している、名前もまたもや偽名である。

「ええと、零崎虚識さんでしたっけ？」

「ああ、そうだ。でだ、マナ・アルカナの保護についてなんだが」（ああ、かつたりい……寝たい）

真面目そうに見えて、心の中ではめんどくさがっていた。ちなみにスクナは飽きれてゲームをプレイしている。

「一応、俺としては彼女がここに残りたいなら残らせてやりたいし、ちゃんとした生活を望むならそちらに預けようと思う」

「質問したいことがあります、あなたはそこにいる金髪の女性が何者か知っているのですか？」

「……ああ、だがそれがどうした？」

「それがどうした？ じゃないでしょう！！ 彼女は【闇の福音】、吸血鬼の化け物ですよ！」

バキ、と静かに何かが砕けた音がした、男はヒートアップしていて気付いていないが夷の奥歯（強度は蟲ピンプラスと言えればわかって

くれるだろう)が食いしばりすぎて砕けた、次の瞬間には再生しているが。

静かにキレる夷、ドンドン無表情になっていることも気付かずさらに暴言を吐く男、エヴァとアスナはガタガタ震えながら、頭を抱えながら自分たちに被害が来ないように願った。

以前、エヴァに暴言を吐いた町のチンピラがいて、なおかつエヴァの顔に酒を投げつけた奴がいた。その時、夷が完全にキレてそいつを【全て】を消滅させたことがある、その姿を見たエヴァとアスナは暗黙の了解で、夷を絶対に怒らせないと誓っていた。

「言いたいことは分かった、とりあえずマナを呼んで確認を取ろう」  
右手を硬く(世界ごと)握りしめながらにこりと笑顔をする、あまりに完璧な笑みで作り物めいていた。我慢していた、さすがにNG団体まで殺すつもりはないし、むやみやたらに殺しても面白くないから、いやいや零崎だしやっちゃってもいいよね、手が滑って鋼糸で解体しちまったとかで、とか考えている夷、自然と魔力で糸を作り惨殺しようかなと考えている辺り零崎と言うよりも無差別殺人鬼である……って零崎って無差別殺人鬼じゃん。

「オーイ、マナさんや、ちょっと来てくれ」

夷が呼ぶとマナは一目散に夷に飛び込んでくる。

驚く夷はちゃんとマナの体を受け止める……若干ふるえていた。

「嫌だ……ここに居たいよ、居させてよお」

「……だとさ、すまんが交渉は無しだ」

「そうですか……」



「フツ、いつも通りだ……まあ私たちの娘ができると思えば良い物  
さ」

「じゃあ……母親は私ね」

「おいこら、私は式の妻だ」

「年増よりいいと思うけど？ エヴァ」

「言つな、ロリアスナ」

なぜか黒いオーラを出しながら対立する二人、夷は今日何度目かわからない冷や汗を垂らしながらため息をつく。

「はあ……ドウシテコウナッタシ」

「ふふふ、楽しいね」

マナがそう呟く、夷は同意するかのように笑いながら言う。

「ああ、楽しいな……んじゃ、【家族】になつた記念だ、今日は騒  
ぐぞーっ！」

「（その前にフェイクはどうするんだ？）」

「（ドンマイ）」

~~~~~その頃のフェイク

「はくしよい！……ムムム、誰かに噂をされたような」

「ヒイイイイイハアアアアア！ まったく孤児は最高だぜ
！！」

セクンドウムが叫びだし、他の完全なる世界の幹部も首を縦に振る。フェイクは脱力感を覚えながら、孤児なお世話をする、これでも育児経験ならフェイクは負けることは無い、一万人のフェイクシリーズを赤ん坊から育てた男である。

「……はあ、どうしてああなったんだ？ あれか、精神弄ったせい
か？」

「師匠」

「どうした？ テルティウム……って両手に花状態だな」

明らかに亜人と言える耳と装飾品なのか頭にリボンが見えるが、テルティウムと呼ばれたフェイトにそっくりの少年は何やら恥ずかしそうに顔をそむける。

「……ルーナとティナを引きはがしてくれないか？」

「面白そうだから却下」

「師匠?!?!」

「大丈夫ですよ、フェイクさん」

「うん！ テルティウム様も恥ずかしがっているだけですし」

「そうか（ニヤニヤ）」

腐っても夷のコピーなのか、面白そうな事は例え他人の不幸でも楽しむ性格は同じらしい。戸惑いながら両手に花なテルティウムはなにやら楽しそうだった。感情はあまり芽生えていないが、フェイクが直々に修業して少しだけなら出せるようになっていた。

「大切にしろよ？」

「当たり前だよ、テイナの淹れてくれる珈琲はおいしいんだ」

嬉しそうに顔を緩ませるテルティウム……それを少し暗い目で見るフェイク。

「（人形なんだな、俺はまだ）」

しみじみと思うフェイク、恋と言う感情がわからない、その部分だけすっぽりと抜けている。それがわかれば完全に人間になれると考えていた……今でも十分人間臭いが。

「さて……お前らは表に出るなよ？」

フェイクは仮面を外しながら銃器を持つ。

孤児院のセンサーに転生者が侵入したのを感じたのだ……事態に気付いた幹部たちは速やかに孤児たちを連れてシエルターに急ぐ、そこには車いすに座りながら必死に誘導するフェイトの姿も見えた。

「ハア……まったく、せつかく人が感傷に浸ってんのに」

外では攻撃が始まっているようだが、夷が造ったこの孤児院には傷

一つ付かないらしい、音だけが鈍く響く。

ゆっくりと歩いていくフェイク、手には巨大な銃器が握られていた……そのまま孤児院の玄関を蹴り飛ばし外に出る。目の前にはどうにも見たことがある人物が三人いた。

「ここが完全なる世界の本拠地っていう事はわかってるんだぜ！」

「……黙れ、塵、英雄ごっこなら別の場所でやれクソツたれが」

「おいおい、可愛い顔がだい」

フェイクは警告音無しで話しかけてきた転生者の頭を吹き飛ばす。驚く二人に対して、フェイクは無言で銃を向ける。

「ああ、ウザったいめんどくさいイライラする、俺のストレスを増やすな糞どもが。塵は塵らしく振舞ってくれ、ああつまり死ねることだ」

だがその台詞を聞いている者はいなかった、すでにフェイクの目の前には物言わぬ骸が三体、頭をトマトをつぶしたようにはじけ飛んでいた。

不死殺しの弾丸を撃ち込んだので復活はできない、夷には効かないが。

「ああ、やっぱりすつきりする。さてと片付けしないと
な……神威霊装・三番発動」

霊装を発動したフェイクは自身の影を操り、倒れている転生者の体を影に引きずりこむ、そして捕食した。

「はあ……あー、さっさと帰って寝たいな」

霊装をしまいながらフェイクはまるで、事務仕事でも終わらせた様な感覚で言う。夷も夷だが、フェイクも十分バグな性能を持っていた。

「……………ちよつと時が進む」

『久しぶりだな、式』

「ガトウか、どうした？」

1993年のある日、夷はガトウから電話を受けていた。

『ああ、面倒なことになったんだが……いいか？』

「なんだ？ そっちにはタカミチもフェイクもいるじゃないか、並の実力者が太刀打ちできんぞ？」

『……まあ、そうなんだが面倒なことになってな』

歯切れが悪いガトウにイライラする夷。

「だからなんだよ」

『お前の武器を使う転生者がいるらしいんだ、式』

「…………オウチ」

自分の失態に頭を抱える夷…………さて、ここまでご愛読ありがとうございます。
ざいます。

そろそろ【両義式】には退場してもらいたいと思います、さてはて
夷、いや式は無事に帰ってこれるのか、それとも退場するのか……
まあネタバレしてませんがね、すでに。

選択と家族（後書き）

フェイク「ネギま！ラジオ！！　って作者は？」

素子「なにやら顔にケチャップつけながら【解体作業してるから進行ヨロ】と伝言を受けている」

フェイク「一体どこに行くんだ、作者……ジャンクは？」

素子「ああ、液体みたいな奴なら【作者さんに加勢します（カキカキ）】と言いながら走って行ったが」

フェイク「スタッフ超逃げてえ！！」

素子「にしても本当に夷は優しいな、アスナの気持ちもわからなくもない」

フェイク「まったくわからん」

素子「それならそれでいいと思うが……夷の貞操がorz」

フェイク「……ドンマイ、基本俺は性欲ってもんがないからな、どついう気分かわからんが」

素子「くう、既成事実を作って学生結婚を目指していたのに……！」

フェイク「駄目だこの女、マジでだれかどうかして」

素子「と言うか、作者は早く私の話をか　　ヒッ？」

どうしたの？（顔にケチャップをつけながら歩いてくる）

フェイク「……その頬の赤いのどうした？」

いや？ スタッフから絞りあ…… スタッフの持ってるケチャップが顔にかかったただけだぞ？

素子「それって血ぞよ」

フェイク「……あー、もういいや！！ 次回予告！！」

素子「じ、次回、依頼と紅き翼再結集」

では次回も！

素子「ちえりおー！！」

|||||今日のスタッフ

スタッフ「（。A。；）し、死ぬ……なんで作者が零崎化したんだよ、ワケワカメ」

ジャンク『ウチの小説の作者さんですから、そのくらいの個性はいるでしょう』

夷「……作者が個性出してどうするんだよ」

ジャンク『ある意味、あの人常人じゃ、経験してない事経験してま

すし』

夷「将来役に立つか！ ナイフの技術なんて要らねえよ！ あいつ料理できないのに！」

（注、作者の料理の腕はマジでひどい、レベル的にはISのセシリアさん並にひどい、冗談抜きで）

スタッフ「（；^_^）と云うかここでの主役は俺だろ？！」

夷「誰が？」

ナギ「むしろ俺が主役で！！！」

ジャンク『早くあなたはアリカさんの元に戻って、イチヤイチャする作業に戻るんです！』

夷「あ、そうだ、キョウに誕生日プレゼントとして鋼糸でもプレゼントするか……喜ぶだろうなあ」

スタッフ「（；^_^）しねえよ！ てめえの鋼糸なんて欲しがらぬはいないよ！！！」

茶々丸「愛がわからない？ おk、手取り足取り教えてあげましょう……個人レッスンで」

スタッフ「（；^_^）原作はいる前にこれでいいのか？ もう手に負えないぞ？」

茶々丸「何も問題はありませぬ、私のAIはそう言ってます」

夷「あんな奴で大丈夫か？」

葉加瀬「一番いい茶々丸を下さい」

夷「手遅れです」

オチ？ そんなもの（ry）

スタッフ「（´；；´）今回、出番少ない、作者に細切れにされるわ、こんな扱い理不尽だ！！」

知らんがな。

依頼と紅き翼再結集……そして（前書き）

夷「作者どうした？」

いや？ 今回の作品はちょっとやり過ぎた、ああ、それと報告です。

夷「スタッフ使わないのか？」

真面目にやれ……後今回数えて三回で【ネギま！ 転生しまし……え?!】、一時完結です。

夷「嘘だあああああああああ!！」

それではどうぞ

依頼と紅き翼再結集……そして

|||||近衛夷視点

久しぶりです、近衛夷です……なんか懐かしいな、って俺はまだ転生して五年しか経ってない筈だがなあ？ 最近視線を感じるだよな、いや気のせいかもしれないし索敵しても何も感じないし。まあいいさ、今日は

「ついに仮面ライダーに変身できる！！」

修業もしているし木乃香や刹那が遊んでいるうちに变身してみたかった……今度、幻術だとか言って父さんたちに見せるか？ バレルか。

『ACCEL』

さてガイアメモリのスイッチ押して……バツクルも腰につけたし、行くぜ！！

「変……身！」

『ACCEL』

バツクルにメモリを入れて右グリップのパワーロットルを捻りとバイクの排気音がバツクルから流れ出す。そしてバイクのスピードメーターのようなものが現れ、ロットルを捻るとメーターが最大まで振るがもう一度最少まで戻り、もう一度捻ると時計のような赤いエフェクトが発生する。

そして一瞬だけ俺の体が赤く光り、次の瞬間には俺の体は変化して

いた。背中にはバイクのスロットルみたいなものがつき、両足には小さなタイヤがついており、顔は鋭利な形状となった「A」の文字が頭部に見える。青い複眼が光り、変身が完了する。

「や……つた、やったぞ！！ 成功だああああああ！！」

神様、転生させてくれてありがとう！！ このままカブトにへんし

n

「え、びす？」

「は？」

そこには目を見開いて驚いている素子さんが……な、なんで？！

誰かが来たらカブトゼクターが教えてくれるはずなんだが？！！！

「な、何してるのかと思ったら……こないな事しとるなんて、と言うかその姿はなんや？」

「え、えーと仮面ライダーです」

歯切れが悪い、そ、素子さんに見られたってことは……バレる、どついたらいいんだ？！

「ふ、ふふふ」

「そ、素子さん？」

なんかすっごいいい笑顔してるんだが ってあぶなああああ？！

「（お前が強すぎるんだろっが！……昔のお前はあのような鎧を纏っていたのか？）」

「（まあ昔はあんな感じだったな、今じゃ纏う物が多すぎて困る）おっと素子選手の一撃を受け止めた！さすが仮面ライダー、気合で装甲の硬さが違う！！おっとスロットルを回して……」

『ACCEL MAXIMUM DRIVE』

「アクセルグランツァー！！」

マキシマムドライブとか懐かしいな、オイ！……そういえば素子と刹那に渡してたなメモリ、作者が設定忘れてたから記憶消して回収したかな。

よくよく考えたらこのときから素子さんはおかしくなったんだよなあ、なんでだろ？ まあいいさ、懐かしい戦い見せてもらったよ。

だがこのとき、俺は素で気付いてなかった……【俺が介入しなければ素子はおかしくならなかったんじゃないかね？】と。気付いた時にはすでにお寿司 じゃなかった、遅かった、昔の俺すまん、そして頑張れ、後二年の辛抱だ。

「ふう………ただい 誰もいないし」

南の島に作ったこの家、いたって普通の一軒家だ………地味に夢だったんだよなあ、家族で一軒家。

どうやらみんな別荘で修業してるようだな、アスナとエヴァならともかく、マナは普通の……いや半魔だけどさ、普通の、この家では普通の女の子なんだ。絶対、あの子だけは普通に育てる、蝶よ花よ普通の乙女に！！

「……で、フェイク、いつまで隠れてるつもりだ？」

「ばれたか、いや、臆の所のシャドって人形を出し抜くために修業してんだが、中々難しくってハサン師匠に習ってるんだがな」

「アサシンに？ ほどほどにしとけよ、あいつみたいに分裂して襲ってきても勝てる自信があるが」

「しねえよ、暗殺は習ってるが……刀は駄目だ、本当に」

コイツもこの頃バグってきたように思える、気配残したまま移動したり、本物だと思ったら俺でもだまされる幻像だったり、ついに跳弾射撃で地球の裏側も狙撃できるやらなんやら……うん、もうこいつだけでいいんじゃないかなあ。

「そつえば聖杯戦争に出たんだっけ？」

「ああ、昔ちよろつとな……二度と行きたくないがな」

あれは最悪だった、マーボー神父には目付けられるわ、女狸には実験台にされかけるわ、慢心王には宝具とか言われて蔵に納めかけるわ、幼女にごつい巨人で襲われるやら、腹ペコ騎士王のせいで俺の食料が無くなるわ、赤い悪魔のうっかりで能力が全封印されるわ……思い出しただけで行きたくない世界BEST10には入るな、一位は……思い出したくない。

「んじゃ、行ってくる」

一瞬で気配が消える、本人が言うには【ただ移動してるだけ】らしいが、影も気配も感じない、もちろん目にも見えない……おいおい、魔眼使っても視認できないとか、あいつは暗殺者としての才能開花させすぎじゃないか？ まあ俺には勝てないが。

「おい、待てや、あいつナチュラルに次元越えてね？ 限界突破とかシャレになんねーよー！」

……もういいや、不貞寝してやる、百年くらい。そつ思った瞬間、電話が鳴り出す、誰からだ？ 足を地面に踏みつけて受話器を俺の方に飛ばす、ジャンプしながら取り椅子に着地する、ダンテが良くやってた手だな、昔どっちがスタイリッシュに電話取れるか競い合ったし、まあネロに怒られたが。

「はいはい、両義式だ」

『久しぶりだな、式』

「ガトウか、どうした？」

『ああ、面倒なことになったんだが……いいか？』

「なんだ？ そっちにはタカミチもフェイクもいるじゃないか、並の実力者が太刀打ちできんぞ？」

『……まあ、そうなんだが面倒なことになってな』

歯切れが悪いガトウにイライラする俺。

「だからなんだよ」

『お前の武器を使う転生者がいるらしいんだ、式』

「……………オウチ」

マジかよ、なんで俺の武器があるんだよ、残さないように自壊するように設定してあるのに、一体誰が？

『それが……………お前のように仮面をつけた奴らしいんだ』

「……………もっと詳しく頼む」

『え？ ああ、なんでも名前は 【両希夷】 と言っらしい、詠春が拾った子も夷だったな』

ク、ククククク、クケケケケケケケケケ、ついに見つけた、見つけたあ！！

「そうか……………で、そいつは？」

『何でも旧世界ソツチに行ったらしい。足取りは不明、お前の方で何かわからないか？』

ソツチに来たのなら俺の分身が何か言ってくるはずだが、完全に索敵専門の宇宙の端から端まで索敵できる能力はつけてるし、消えたら俺に即行で連絡が来るはず、宇宙空間にも四千体はいるし、全員俺が操ってるがな……………並列思考と分割思考を無意識にやってるから

なあ、つくづく人外じみてる、普通の人間がやったら情報量で脳が焼き切れる、イメージするならたくさん料理を作っていたら、全部に手が回らなくて焦げた……そんな感じ。にしても出て来てくれたか、夷……いや、俺。

「知らん、随分と隠密が得意らしい……それだけか？」

『あと一つだ、厄介なことにそっちにメガロ……MM元老院がそっちで何かやらかすつもりらしい』

メガロセンブリア

「ああ、確かに来てたな、と言うかお前の所属はMMじゃなかったっけ？」

『今はクルトの配下だな、あいつは凄いぞ、若いのにカリスマたっぷりだからな』

そりゃ、わざわざカリスマたっぷりな奴らに修業させたし、俺直々で精神鍛えたし……ああ、そうだあいつ俺がハイパークロックアツプしなかつたら一回死んでるだよなあ、たく平和ボケしてやがったな、まあいいさ。

『MMも今は再編の途中だな、老害どもの検挙で忙しい』

「フェイクはそれ以上だな」

フェイクシリーズの情報整理、完全なる世界の手伝い（と言う名の指揮）、臍の所に潜入、平行世界の監視&報告……死ぬな、あいつ死ぬなよく考えたら。不老不死にしておいてよかった、あれ？俺って父親として最低な様な気がする……まあいいか。

「で、何かやらかすってなんだよ……ICBMで撃ちこむ気か？」
アメリカにはやめてね、友達いるしそういえばこの頃ホワイトハウ
スに行つてないな。

『それよりも最悪だ、転生者、リバーズ達的能力で旧世界を破壊す
る気らしい』

リバーズ、確か転生者が造った組織だっけ？ まあ一度も作戦成功
したことはないがな、うんチームワークは大切だよ、ガキ共。

「ガトエもん、マジで？」

『そうだよ、シキタ君……って何言ってるんだよ！！』

「ドラ もん知らねえの？ 名作だぜ？」

『知るか！！ い、胃が痛い、タカミチ胃薬を！！』

「戯言はそこまでだ。で、それを残滅して来いと？」

『いや、それは俺たち【紅き翼】がしよう、いつまでもお前に頼っ
てたらいけないし』

「言うようになったな、ナギは大丈夫か？ 子煩悩で使い物になら
ないんじゃないかねえのか？」

『逆だ逆、むしろ早く終わらせるために強くなっているよ、ラカン
もテオドラ様と良い雰囲気だし……はあ、俺にも春が来ないか？
一人くらいいいないか、式』

「ぶつちやけ俺も怖いです、モグモグ」

食事中なのに……はあ、二人ともメガ口に色々されたし俺だってあいつらに地獄見せたいんだが相手は世界を牛耳ってる組織の幹部たちだ、早々に消せないし、地獄を見せないと俺が許さないし。

はあ、ハンバーグうまうま……ん？　なんか真名がこつちを、正確にはハンバーグを見ている？　ちなみに俺特製のチーズ乗りハンバーグだ、生前からハンバーグの上にはチーズを乗せるのは一番好きだ。

「欲しいか？」

「ほ、欲しくないさ（チラチラ）」

「あ、やっべーてがすべってまなのさらに〜（棒読み）」

わざと口をつけてない方のハンバーグを真名の皿に乗せる。すると目をキラキラさせながらハンバーグを食べ始める真名、カロリー気にしないっていいよね。

「はあ、お前と言う奴は……甘すぎるんだよ」

「いや？　俺は手が滑っただけだぞ？」

「……いいなあ」

家族で食べるとおいしいねえ、世の父親って言うのはこういう特権があったのか、そりゃ仕事も頑張れるはずだな。ああ、フェイクもいりゃなあ、もっと楽しいんだが、うん、今度みんなでバーベキュー

ーするか。

「だけど、俺が……両儀式として、エヴァとアスナ、真名にフェイクと一緒にご飯を食べることは二度となかった。」

「……………一か月後」

「やってきました、やってきちまったよ！ トルコ！ イスタンブ
メガツサ?!」

アスナとエヴァに頭を叩かれ、倒れる俺、もはや日常茶飯事なのでツッコまない真名少しはツッコんでくれよ、お父さん泣くよ？ まあいいや、とりあえずガトウ達と合流しないと。」

「……………廃れているな」

「まあしょうがない、だからこそあのバカどもが占拠出来たんだろう……あー、スクナを天界に還さなきゃよかったかも」

そろそろ還えさせて神様が行ってきたからな、強引にゼウスと一緒に殴りながら天界に還した……無駄に俺と過ごしたわけじゃなくて神格が上がっていて俺でも苦戦するとは、リミッター外してなかったが。」

「スクナがいないとつまらないわね」

「アスナだけだよ、そう思うのは……はあ、まあ鍛えてくれって言ったのは私だけだ」

まさか真名を鍛えることになるとはなあ、フェイクに丸投げしたが……銃の方が俺の力に耐え切れなかったからな、銃ならあいつの方が上だ、とりあえずガンスリンガーになるのは確実だねえ、はあ、なんで戦いの道に行くのかねえ。

「おーい！！ 式！！」

「ナギか、久しぶりだな……この頃はキョウにプレゼント送ってやれなくてスマンな」

「いいんだよ、それよりも早く来いよ、お前らが最後だ」

良い顔になったな、父親の顔だ。精神的にも強くなったし……たく十歳のガキがここまでデカくなるとは、笑いがこみあげてくるな。

「なんだよ」

「いや？ 昔を思い出してさ」

「ハッ、歳とりすぎたんじゃねえの？」

そう……かもな、三千年も生きてんだ、そろそろ休んでもいいよな？ この戦いが終わったらエヴァたちと麻帆良に移住して、木乃香たちの世話をするってのもいいかもしれないな。

「おい、ナギ、そういえばアリカはどうしたんだ？」

「ああ、エヴァ久しぶり、アリカか……そ、それがな」

「姉さんがどうかしたの？」

『了解した、ああ、それとエージェントが一人紛れているが長くは持たないな』

ガトオオオオオオウ！！ あの馬鹿、転生者の中にエージェントなんて送り込むよ、一応あいつら能力だけは優秀だから！ 救出すんのかねえ……本当にめんどくさい。

「おー、式い、久しぶりだな！」

「おお、筋肉ダルマジヤマイカ、久しぶり、アルにタカミチもな」

「ええ、お久しぶりです、おや幼女が ゲフンゲフン、小さな女の子が増えてますね」

「お久しぶりです、式師匠」

「真名、絶対にあの怪しい笑みをした男に近づくな、近づいたら発砲していいぞ？ 久しぶりだな、タカミチ、活躍は聞いているぞ」

「まだまだですよ、たかが竜種を十体倒した程度です」

……程度つて言うが、お前、ソレなナギでも少しだけ厄介なレベルなんだぞ？ 強くなりすぎてるな、オイ。別世界のタカミチも見るがレベルが違いすぎる、刀は使えないがな。
あれ？ ゼクトは？

「ゼクトなら麻帆良で幼稚園の園長していますよ」

「えっ？」

いや、あいつ子供好きだけどさ、体子供やん！ ……あ、幻術使えばいいのか。

「ゼクトがか？ ……フン、あいつも似合わないことを」

「エヴァもそう言うなよ、あいつだって本当は【こつち来て暴れたかったのお】とか言ってたぞ？」

そういえば地味にゼクトって戦闘狂の面もあるんだよなあ、模擬戦何度もしたし、意外と熱くなるし……タカミチの修業の参考になつたなあ。

さて、ガトウが席について、俺も席に着席する。

「さて、今回集まってもらったのはほかでもないな……ヤバい事態だ」

「どのくらいヤバいんだよ、俺たち何も聞かされてねえぞ、つうか早く帰りたいんだよ、俺は」

「……式のグレートゼオライマーって覚えているか？」

「……嘘だろ?!?!?!?!?!」

全員がツツコんだな、なんかあれ一部じゃ神様扱いされてるそうだが……まあ神っちゃ、神だが。

「じよ、冗談じゃねえぞ！ 式、お前まさか」

「ンなわけあるか、あんなもん流出させる程、俺は快樂主義者じゃ

……最近、フェイクも壊れてきたなあ、最後の良心だったんだが。

『エージェントがやらかした！！ 一人突っ走ってデータ奪ったところで見つかりやがった、陽動はこっちでかけるからだ、つってんだろうが！！』
邪魔

う、うわああいつパイルバンカー使ってるよ、転生者ミンチ状態になってるな、さらにフルオートショットガン……肩外れないように衝撃ゼロにした結果、口径20mmの化け物が出来上がったよ、人間吹き飛ばなこの威力、と言うかスラッグじゃなくて散弾にしたら、ミンチ製造機になったよ、名称は『MONSTER』だな、冗談抜きで。

『お前が回収してくれ！！ 数が多い！！』

ありゃま、通信切れたか……さて、んじゃお仕事しますか。

|||||夕子視点

ミスった、そう考えたのは後の祭り。

この仕事が終わったら、エージェントをやめるつもりでいたから最後に花火のように大きなことがしたかった。火遊び感覚と言ったらおしまいだけど、最後くらい遊びが欲しかった。

奴等の情報はすぐに見つかった、と言うか色仕掛けをしたらべらべらと喋り出すもんでこっちの方が拍子抜けするくらい楽だった。顔は良かったがアレならウチの旦那の方が百倍マシだった、あの人は

仕事に関しては誠実……まあ親ばかりだ。

「クツ！！ 早く逃げなきゃ」

ようやく目当ての情報を手に入れたと思った瞬間、一人の男が【面白い物を見せてやる】と言って、私を格納庫に案内した……情報を手に入れるチャンスだと思った。そこにあったのは純白の異様な機械、まるでSF映画に出てくるロボットだった。

危険な物だと思った私は……独断でこれを破壊しようと思った。C4を使えば破壊できる、そう思った私はすぐに行動に移った、すぐに格納庫から出てC4の準備をして格納庫ごと吹き飛ばすつもりだった。

結果的に私の作戦はうまくいった、誤算と言えばロボットの強度がありえないくらいだったのと護衛の奴らの能力が異常だったことだ。私はうぬぼれたつもりはないが、銃だけならあの【超越者】にだって勝てる自信があった。

「ガトウさんに怒られちゃうわね……なに弱気になってるのよ、夕子。【元気は最強。元気が最優先】、よし！！」

娘の為にも死ねない、あの子をこんな歳で片親になって絶対に。それにあの人だって、私がいなくなったら再婚なんてしないだろうし、変なところが頑固なんだから、あの方は。

私は逃げ切る！ 絶対n

「逃がすかあ！！ 縛道の一、塞さい！！」

「え？ キヤツ！」

手足が急に動かなくなり私は地面に前のめりに倒れる……何かの魔

法?! しまった、捕縛魔法を使える可能性をすっかり考えてなかった、私としたことがやつちやっとなあ。

「ハハハ、捕まえたぜ……って、こいつまさか明石夕子じゃね?」

「マジかよ、ヒロインの母親とか……あれ? 確かこいつ死んだんじゃない」

何を言ってるんだろう、とにかく逃げない!! そう思っても私の体は動いてくれない……動いて、動いてよ!! 私は死ねないの! まだ裕奈に教えてないことがたくさんあるの! 小学生の入学式も、あの子の結婚式も見てあげないと死ねないの!!

「まあいいや、ここで殺して人形にして裕奈をおびき寄せるか」

「外道だな! まあいいけど」

目の前には身の丈はありそうな刀が 死んだ、完全に死んだ。
あーあ……ごめんね、裕奈、あなた、さよ

「なーに諦めてんだ、バカが、最後の最後まで生きる希望失うなよ」

『HYPER CLOCK UP』

「だ、誰?」

突然、いえ、何もない空間から誰かが割り込んだ。仮面をつけて、和服着ていて……あれ? どこかで見た様な。
よく見ると刀を素手で持ちながら握りつぶしていた。

「な、ムラマサブレードが?!」

「な、なにもんだ」

次の瞬間、私を追っていた二人の頭が吹き飛ぶ……は？ いつ抜刀したの？ と言うか見えない、何も見えなかった。

見るとその仮面の人は手を横に振った様な仕草をしていた手刀で？

「……うーん、やっぱり頭を綺麗に切り取ると血が出なくてよかった」

死体を見る、綺麗な断面で血が出ていない……ありえない、大動脈は切れているはずだから血が噴射してもおかしくないはず、それも一滴も出てないなんて人間業じゃない、神業よ……一体この人は誰なの?!

「よお、余計なことしやがって……ゼオライマーをたかがC4程度で破壊で来たら苦労しないさ。と言うか核ミサイルのスイッチ押しやがって、めんどくさい」

「あ、あのあなたは？」

「俺か？ 俺の名前は両義式、巷じゃバゲモノ【超越者】って言われてる、

【人間】だよ」

＝＝＝＝＝＝夷視点

「さて……とつとと破壊しに行くか、完全に予定狂ったけどな！」

「む、無茶ですよ！ あんな大きなロボットを一人で！ いくら戦艦すら凌駕するあなたでも無駄です！」

夕子さん……無茶どころか、寝転がりながらも十分だよ。

はあ、たくあれは本来なら存在しちゃいけない物なのに……破壊する、絶対にだ！！

「はあ、早く脱出しろって

」

『そんな事させるものか！！ 両義式！』

……うわーお、ゼロライマーの方から来たよ。んで、声はマサキに似てるな、つつかあいつの能力持った転生者か、めんどくさい。

『ルシフェルをいずれは殺して、この世界を俺の物にしようとしたのに……貴様がいたせいで！！』

「知るか、ボケエ！！ んな、物造っている暇が合ったら、精一杯生きて人生謳歌しろよ、それだけの力はお前ら持っているはずだ……俺だって、今は【鬼】じゃない。その能力をそんな風に使わないと誓えば、近場の世界に転移させてやる」

『うざいんだよお！ 貴様だって転生者だろうが！！ お前が俺の生き方を批判できるわけがないだろうが、黙って死ぬ、貴様は大罪人だ！！』

んなもん、とつくの昔から気付いてるよ……けどな、俺はもう一

人じゃないんだよ、生前の俺だったら死を選ぶだろう。俺は生に執着してなかった、なにしても報われずに、家族もいない、友人はいたがそこまで深い仲にはならなかった。

一人が好きって誤解してたんだ、やっと飛び級して大学入って人生を始めようとしたところをルシフェルがやりやがって……正直、あそこで俺が死ななければ、普通の人生を歩んでいただろうなあ。

『生きてちゃいけないんだよお!!』

「……カハハハ、生きちゃいけないか　それが答えか？　小僧」

少しだけ、ほんの少しだけリミッターを切る。
腕に魔力を集中させて

『この化け物が!!』

「ああ、俺は化け物さ、まぎれもなくな!!」
腕を振る、そのまま手刀の形をした魔力がゼオライマーの全身を斬りつける……振った時間は0.1秒、全身をくまなく千回は斬ったかな？

『何をしても無駄だあ、こいつは別次元からほかの自分を持ってきて再生可能なんだよ！　それに俺のn　え?』

グレートゼオライマーが音を立てながら崩れ去ろうとしている……
無駄だよ、その技術はもう対策済みだ。

「別次元、つまり平行世界からの足りない部品、パイロットを補充

する……まさにチートと言っているいい機体だな、いくら壊れても別次元から持って来ればいいんだからな。言っちゃえば簡単なんだよ、平行世界から部品を転送するんだったら、この場所を次元から切り離せばいい」

『ば、かな……ありえない！ そんなことしたら世界がただで済むわけがない！！』

「大丈夫、対策はばっちりだバカ野郎」

まあ、簡単に言うところの空間、つまりゼオライマーを含めた範囲百メートルの空間を独立させて……まどろっこしい！！ 作者頼んだ！！

||||| 三人称視点

え？ おま？！ ああ、つまり時空を固定してから切り離れた……例えるなら1ホールのケーキから一つだけ切り取る感じです、自分でしやがれ！！
ゲフンゲフン、さて、全身を切られたゼオライマーはもはや崩壊寸前だった。

手刀だけでバラバラになるほどの威力、これでも威力を落したのだから勘弁。実は夷は結界の方は修業を怠けていて、自分の攻撃に結界の方が耐え切れない……まあ因果応報と言えば因果応報だが、全力で戦えないと言うある種の縛りを課せられていた。

『なんでだ……なんで貴様がここに居たんだ！ 貴様さえいなければ、俺は幸せな人生を送れたんだ！』

「……まあほかの世界で迷惑かけている、俺がいう事じゃねえが。俺たち転生者はな、世界の異物なんだよ、本当なら存在していない」いつもはふざけている夷からふざけた雰囲気は抜ける、珍しく真面目モードだった。

「俺がしまつたのはこの世界の破壊だ。死ぬはずの人間が生きていたり、生きる筈の人間が死んだり……疫病神だろうよ、結局のところ、俺もお前らと同じだよ」

『なら、なぜ自殺しない！ 罪を自覚しながら！！』

「自覚してるからだよ……それに俺には帰る場所があるんだ、悪いな」

『く、くそおおおおおおお！！』

音を立てながら崩れ去るゼオライマー、夷は魔眼を発動させる。

「消去」

そうつぶやいた瞬間、ゼオライマーが跡形もなく消える。

夷はそれをため息をつきながら次元を元に戻す、ちなみに夕子は夷の手刀の衝撃波で気絶している。

「……さて、他の奴らを排除するか」

その頃、フェイクはと言うと、パイルバンカーで転生者をミンチに

していた。

ここで描写するととてもじゃないがR指定なので自重する、と言うか描写した瞬間、作者が吐く。

「さいごおー！」

ズゴン！ ととてつもない音がしながらバンカーから弾丸が発射され、転生者の腹部に直撃、そのまま肉片へと変貌させる。

フェイクはそのまま空薬莖を輩出し、パイルバンカーを影の倉庫に納める。

「ラストだな……イテテテ、さすがに十連発はきついなあ」

右腕を押さえながら呻くフェイク、いくら身体強化をかけようとも衝撃を完全に殺すことはできない、とある方々からは【とつつき】、ある人からは【博打ではなく無謀】と言われるほどの兵器である、威力は折り紙つきだが衝撃も半端ではない、どのくらいかと言うと一トンのトラックが全速力でぶつかった時の衝撃がフェイクの腕にかかったのである、腕が吹き飛んでもおかしくないし、銃身が耐え切れると言う保証もない。

「ば、博打すぎたあ……キョウスケさんが見たら怒るなあ」

ここにはいない、【古鉄】に乗っているとあるパイロットの名前を呟くフェイク、作者自身あそこまでの博打をするパイロットは見えない、と言うかいてたまるか！！

「み、みんなはうまくいつてるし、ここで休むか」

フェイクは休もうと腰をかけようとした瞬間、それを取りやめ影の

倉庫からM13を取り出し、気配がした方向に撃つ。
仲間の気配でないと分かったので発砲したのだが、どうも手ごたえ
がなかった。

「……誰だ！」

「ふう、仮面が無かったら即死だった」

そこにいたのは【真】と書かれた仮面をつけたあの男だった、ちな
みに弾丸は仮面に突き刺さっている。

「う、そだろ？」

「嘘じゃないだよねえ……まあいいさ、フェイク＝ファースト」

「誰だ、お前は……！」

銃を乱射しながらフェイクは問いかける。

仮面の男は残像を出しながらその場から一歩も動かず避ける。

「チツ！！ お前はマトリックスか！」

「ネオとは違うんだけどねえ……遅い遅い、んな光速すら届いてな
いスピードで当たるかよ」

「なんなんだ、お前は……！」

その瞬間、仮面の男がフェイクの後ろに現れる。瞬間移動かとフェ
イクは思考するが違う、確かにフェイクの狙っていた仮面の男は一
歩も動かず、フェイクの弾丸を避けている。

「分身k

」

「外れ、ただ体の質量を残しながら移動しただけ」

フェイクは驚愕する、そんなことができるのはフェイクの中ではただ一人、自分のオリジナルである両希夷だけだ、他にもそんなことできる奴がいるとは思わなかった。

そのままフェイクは何をされたかわからないまま、きりもみ上に吹っ飛ばされる。

「ガッ?!」

壁に受け身も取れずに叩きつけられる、本当に何をされたのか全く理解できなかった。パンチ? キック? それとも魔法? フェイクには【理解】できなかった、わかるわからないのレベルではない……【理解】できなかったのだ。

「グッ! ま、だまだ」

(魔装服が……防御も関係なく突き抜けた?)

フェイクの服も夷がわざわざ作った、特注の魔装服、つまりはボデーアーマーである。その防御力は理論上では夷の(無強化)全力の拳を耐え切れる設計である。

その服の防御を傷つけずに、内側に、つまりはフェイクの体に直接叩きつけた仮面の男。魔力耐性もばっちりのはずで透過攻撃も耐性があるはずだった。

「……俺は弱い者いじめが嫌いなんだよ」

「神威靈装・四番^{エル}・氷k」

「寝てる」

フェイクの顔に容赦なく蹴りを叩き込む、それだけでフェイクは気絶する。

それを仮面からじっと見る男は、おもむろに懐から棒状の何かを出す……そのままフェイクに足蹴りをして、浮かせ、棒状の何かを投擲しようと振りかぶる。もちろん意識のないフェイクに避けるすべはなく、そのままフェイクの四肢を

|||||真名視点

ビクリ、と肌に寒気を感じた。

まるで大切な誰かがいなくなったような、家族がいなくなった時のあの感触がした。

「……真名？ どうしたの？」

「嫌な予感がするんだ」

「まさか……式もいるのよ？ 万が一も、億が一もあり得ないわよ」

「そう、だよな」

そうのはず、なのにどんどん嫌な予感が胸に広がる。

不意にホルスターに吊るしてある、フェイクからもらったハンドガンが一丁ぶら下がっていた、その銃から嫌な音がした……銃身が砕けていた。

「うわ、どうしたの？」

「……フェイク」

思い過ぎしてほしい……心の底からそう思った。

「式、帰って フェイク?!」

エヴァが安心した声から正反対の声を出す、まるで見たくない物を見た様な声だった。

フェイクお兄ちゃん。

私はなぜか心の中でそんな名前で呼んでいた。

|||||少し戻って夷視点

おかしい……フェイクから連絡が帰ってこない。勝手な行動もするがあいつは基本的に定時連絡を欠かさない、そういう風に教育してきたし、今まで破ったことは無かった。

「まさか……やられた？」

それこそ、まさかだ。あいつがやられるわけがない、修業不足の転生者に後れを取るほど弱くはない。

「どうした？ 式」

「いや、フェイクから連絡が来ない」

「やられたのか？」

「縁起でもない事言わないでください、ラカン。彼の強さを知っているでしょう？」

「……いや、もしかしたら」

「ガトウ師匠まで、何言ってるんですか！！ 式師匠も探しに行きましようー！ー！」

「ああ、もしかしたら m

」

ボトリ、と何かが俺たちの中に放り込まれた。

俺は【ソレ】がなんなのかわかった、だけど認めたくない、認めるものか。だって、だって、だってだってだってだってだってだって

「そんな……」

「嘘だろ?!」

「……嘘ですよね？」

まだ息があるなら絶対に助ける！　もう失つてたまるか　　そ
して、家族にテヲダシタヤツヲコロシテヤル。

殺して解して並べて揃えて晒して刻んで炒めて千切つて潰して引き
伸して刺して抉つて剥がして断じて刳り貫いて壊して歪めて縊つて
曲げて転がして沈めて縛つて犯して喰らつて辱めて狂わせて泣かせ
て命乞いさせて八つ裂きにしてやる　　絶対にだ。

依頼と紅き翼再結集……そして（後書き）

||||||| 本編のその後

夷「早くしろ！ もっと輸血パック持って来い！！」

フェイク25「再生薬使ったらどうですか？！」

夷「無理だ！ 魔眼で確認したが強力な呪いのせいで今は使えん！
早く持って来い！ 腐るほどあるはずだぞ！！」

フェイク956「式！ 脈が！！」

夷「心臓マッサージだ！ それだけでも効果はある！！」

アスナ「そんな……嘘よ、嘘に決まってる」

真名「嫌だ、嫌だよ！！ 家族を失いたくない！！」

エヴァ「……フェイク」

ナギ「畜生！ 待ってることしかできねえのか！！」

ガトウ「くそつたれが！！」

アル「抑えてください！！ ナギ、ガトウ、ラカン、一番つらいのは式なんですよ？！」

ラカン「そうは言ってもよ、ダチが死にかけてるのに……ふがいねえな」

タカミチ「フェイク……さん」

作者「早く輸血パックだ！ 急げ！ 血が無くなったらアウトだぞ！！」

スタッフ「（#。。）んなもん、わかってるんだよ！ 黙って作者も急げ！！」

ジャンク『追加の血液パック届きました！！（カキカキ）』

作者「早く持つて行け、かなりやばい状況だ！」

スタッフ「（#。。）チツ、シリアスなんて望んでねえよ！！」

フェイク457「早くしてください！ おにいが死んでしまいます！！」

作者「これだったらもっと軍曹に応急手当、真面目に習うべきだった！！」

次回「両義式と偽りの仮面」

？「ちえりお！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6818u/>

ネギま！ 転生しまし……え？！

2011年12月21日00時58分発行